

艦娘の咆哮　～戦場に  
咲き誇る桜の風～

陣龍

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ユーラシア大陸の東端に存在する小国家『ウイルキア王国』。1939年3月に発生した『フリードリヒ・ヴァイセンベルガー』将軍を首謀者とした国防軍によるクーデターの余波は、小国であるウイルキアだけに留まる事は無く、同盟国の大日本帝国、世界最強の超大国アメリカ合衆国、老大国のイギリス連合王国、欧州の雄ドイツ共和国、そして世界を巻き込む『超兵器』が用いられた世界大戦へと発展した。…だが、『フリードリヒ・ヴァイセンベルガー』の世界征服の野望は、ウイルキア解放軍が誇る若き英才『ライナルト・シユルツ』と、たった一隻の、軍艦としては最弱で有る筈の駆逐艦『桜風』によって、超兵器のマスターシップ『フィンブルヴィンテル』と共に、北極海にて打ち砕

かれた。この物語は、度重なる帝国軍の大艦隊と『超兵器』との激戦によって限界を迎えた『桜風』が、日本近海の海溝に自沈処分された時から始まる。『この世界』での艦生を終えた筈の『彼女』の航海は、まだ終わっていないのだ…

▼はい皆様初めまして。陣龍と申します。脳内で鋼鉄の咆哮×艦隊これくしょんの話が浮かび続けた末にとうとう執筆行為に至る暴挙に至りました。完全不定期更新に加え不慣れで色々ご迷惑をおかけするかもしれませんが、宜しくお願い致します。

#### 注意事項

※1 艦娘はアニメ型のスケート方式では無く実際の艦艇に登場して戦うアルペジ才型です。ご注意ください

※2 主人公の『桜風』は鋼鉄の咆哮世界出身の為、艦これ世界の艦娘とは大きな性格差が存在します。ご了承ください

※3 現在陣龍のP S 2が使用不能の状態の為、W S G 2世界関係は筆者の記憶とネットで情報確保している為『桜風』の搭載兵装量等が本来の物とずれている可能性があります。ご注意ください

※4 ハーメルン投稿は初めてですので、色々不明瞭な対応をしてしまうかもしれません

※5 資料不足とその他作中の都合の為、航空機の性能はW S G 2 P 版+W S G 2 P

S2版準拠になりました。ご理解下さい

※6 この小説に登場する全ての個人、団体、組織、その他と現実とは一切関係有りません。ご理解願います

※7 陣龍も提督で有る為、艦これイベント等で唐突に交信が途絶える事が有ります。ご了承ください

※8 『桜風』の排水量を『30,000トン越え』から『15,000トン越え』に変更しました。申し訳ございません

※XX 追記事項は増えるかもしれません。ご了承ください

# 目次

第零話	奇跡が伝説となり、伝説が奇跡となる日	1	見学会	《工廠編》	88
第一話	『桜風』の目覚め	10	第九話	『桜風』の第3海上部隊駐屯地見学会	99
第二話	ファーストコンタクト	19	第十話	『桜風』の第3海上部隊駐屯地見学会	112
第三話	初陣	29	第十一話	『桜風』の第3海上部隊駐屯地見学会	125
第四話	突進、突撃、突破	39	地見学会	《食堂編》	136
第五話	トワイライト・シー	48	第一二話	横須賀沖にて	152
第六話	暗き黄泉路の月明り、桜吹雪は舞い踊る	56	第一三話	旋風、止むべし	180
第七話	横須賀軍港の異色の艦隊	78	第一四話	超兵器戦闘の波及	197
第八話	『桜風』の第3海上部隊駐屯地		第一五話	深山提督主催対超兵器対策会議	197
			第一六話	駆逐艦『桜風』の兵装開発報	

告会

213

↳ 駆逐艦『桜風』食堂内部での一幕

第一七話 AL/MI作戦完遂兼超兵器『ヴィルベルヴィント』撃沈成功祝賀兼

296

第二三話 硫黄島沖大演習午後の一部

『桜風』の歓迎会

228

↳ 開戦

309

第一八話 日本に残る最後の膿

第二四話 硫黄島沖大演習午後の一部

240

↳ 駆逐艦『桜風』流戦闘航海術

第一九話 硫黄島沖大演習前日談

322

253

第二五話 硫黄島沖大演習午後の一部

第二十話 硫黄島沖大演習午前の一部

↳ 小休止

342

↳ 開幕編

第二六話 硫黄島沖大演習午後の一部

第二一話 硫黄島沖大演習午前の一部

↳ 砲火の花弁、波浪の風

362

↳ 理想と現実

第二七話 硫黄島沖大演習午後の一部

第二二話 硫黄島沖大演習休憩時間

↳ 異世界の戦争

384

第二八話	日本国海軍庁山本蒼一の憂鬱と駆逐艦『桜風』が沈んだ日	—	419	戦の準備期間	起	—	547
第二九話	深山艦隊のとある一日	『午	419	第三五話	対超兵器『ドレッドノート』	—	568
前中のお話	—	—	443	戦の準備期間	承	—	568
第三十話	深山艦隊のとある一日	『午	460	第三六話	対超兵器『ドレッドノート』	—	584
後からのお話	—	—	460	戦の準備期間	転	—	584
第三一話	トラック諸島行き輸送船団	—	486	第三七話	対超兵器『ドレッドノート』	—	614
護衛戦	《序》	—	486	戦の準備期間	結	—	614
第三二話	トラック諸島行き輸送船団	—	502	第三八話	矢合わせの鏑始め	—	635
護衛戦	《破》	—	502	第三九話	南洋の海魔	—	665
第三三話	トラック諸島行き輸送船団	—	692	第四〇話	死地を越えて求しもの	—	717
護衛戦	《急》	—	519	第四一話	龍虎相打つ夢の痕	—	717
第三四話	対超兵器『ドレッドノート』	—	519	第四二話	尊ぶ夢が醒めし日に	—	717





# 第零話 奇跡が伝説となり、伝説が奇跡となる日

「……長！……艦……？艦長！起きて下さい！」

太平洋海溝の海域に浮かぶ一隻の駆逐艦の艦橋に、オレンジの髪の毛の快活な女性の声が響き、艦長席に座って眠る一人の男を揺さぶっている。

「……ナギ少尉か。……そうか、もう時間か」

「もう筑波大尉もクルーの皆も移乗は完了しています。いま『桜風』に残っているのは、私とシユルツ艦長だけです」

分かった、私も今行く。そう答えたこの男性の名前は『ライナルト・シユルツ』。『超兵器大戦』と非公式に俗称されているこの世界大戦に置いて、帝国軍との絶望的戦力差を幾度と無く覆し続け、ウィルキア解放軍を勝利に導いた英雄である。当の本人は『英雄』呼ばわりされるのを余り好んではないが。

「……艦長。もう、よろしいのですかな？」

「筑波大尉。……ええ、もう大丈夫です」

タラップの向かい側でシユルツ大佐を出迎えた、豊かな髭を蓄えた老人。名を『筑波

貴繁』特務大尉。シユルツ大佐を一から海軍軍人として鍛え上げた恩師であり、この超兵器が暴れ回った今世界大戦ではシユルツ艦長の補佐に付き、正しき道へと導き続けた日本男児である。

「…艦長。今更ですが、『彼女』を…『桜風』を、記念艦のような形で残すことは…」  
「…ナギ少尉。私も可能なら『桜風』を残したい。だが、今のウィルキアには財政的にも、外交的にも『桜風』を残すことは許されていないんだ」

『桜風』は頑張りすぎましたからのう…もはや、『桜風』はただの駆逐艦では有りません。今までに『桜風』と艦長が積み重ねた戦歴と戦果は、世界が艦長と『桜風』が同時に存在する事を許す事は無いでしょう」

筑波大尉の言う通りであった。今のウィルキア王国の外交的立場はとても危うい状態だ。自国のクーデター騒ぎが全世界を巻き込み、多数の国家国民に対して甚大な戦火の被害を齎した。今はウィルキア外交部の尽力、並びに超兵器との戦争で急速に発達した各種技術と言う『戦争の果実』を得たアメリカ合衆国の友好的態度、そして不気味な策動を開始したソヴィエト連邦と言う脅威の存在によつて事無きを得ているが、仮に幾多の超兵器を撃沈し続けてきた『桜風』を何らかの形で残そうとした場合、世界から『何

「らかの野心有り」と見做される可能性が十分に有った。またそれ以前に『桜風』の船体には多数被弾、至近弾を受け続けたダメージが致命的なレベルにまで蓄積されており、軍艦としてはもう使えない。記念艦として残そうとしても、大戦争を終えたばかりのウイルクア王国にとつてみれば、その維持管理費用も決して馬鹿にはならない。外国に譲り渡すのは論外一択である。・・・ウイルクア王国には『桜風』を自沈処分させる以外の選択肢は無かったのだ。

「艦長。・・・準備完了との報告です」

「有難う御座います、ブラウン博士。博士にも、長い間お世話になりましたね・・・」

「その言葉は私から言うべきでしょう。潜水艦の乗員を助けて頂いた事、超兵器の魔の手から祖国を守って頂いた事。・・・私たちは、ずっと忘れません」

『エルネスティーン・ブラウン』博士。国防軍のクーデターと君塚艦隊の反乱により追いつめられたシユルツ大佐によって偶然救出されてからずっと対超兵器戦に関する考察や調査を行い続けた才女である。彼女は『桜風』の自沈処分を見届けた後、ドイツに戻るという。

ナギ少尉や筑波大尉、ブラウン博士だけでは無い。『桜風』に乗り込んで闘い続けた全ての乗員、そして『桜風』と共に戦い、『桜風』によって命を救われた各国海軍艦艇も、『桜風』の最期を看取りに、ここ日本海溝まで来ていた。ウィルキア海軍や日本海軍は兎も角、大半の艦艇は遠洋航海演習などの名目で自国政府の思惑を無視して集まって来た。海の戦士たちにとって見れば、戦友の最期を看取らないのは死んでも死にきれない、一生の恥なのだろう。

「艦長。．．．最後は、貴方の手で」

「．．．了解した」

自沈処分としては極めてオーソドックスにキングストーン弁に仕掛けた爆薬を遠隔操作にて爆破し、浸水させて沈める方式であった。艦砲射撃や雷撃処分と言う手も有ったが、誰一人として志願する者は居なかった。

そして．．．シユルツ大佐の手によって、爆薬は起爆。艦内の障壁は全て解放してある為に、後は沈むのは時間の問題であった。少しずつ沈みつつある『桜風』を前にして感極まった『桜風』の乗員が泣き崩れ、友軍艦艇乗員にもさまざまに思いが馳せ巡りだ

した時に、『彼女』は皆の前に現れた。

「……か、艦長！『桜風』に！『桜風』に人が！」

「ナギ少尉、何を言っている？既に『桜風』の乗員は全員移乗して……」

「居ます！艦長！船首部です！船首部に『女の子』が！」

何を馬鹿な、そう思いながら周囲の人間は『桜風』の船首部に目を動かし……言葉  
を失った。確かに『桜風』の船首部の船縁に立ち、こちらに向かって手を大きく振って  
いる『女の子』が、皆の目には映っていた。

……『桜風』乗員に、あのような少女は乗船していなかったぞ！

……何時の間に乗り込んだんだあの子？

……早く助け出さないと！『桜風』はそう長くは持たないぞ！

周囲が騒ぎ立てる中、今度はその『桜風』に搭載している探照灯が突然繰り返し発光し始めた。突然の事態に各艦が混乱する中、シユルツ大佐と筑波特務大尉のみは騒ぐ事無く平静であった。

「・・・『ワレ、サクラカゼ。カンチヨウタチトモニタタカエタコトヲ、フカクホコリニオモウ。イママデアリガトウ。サヨウナラ』・・・か」

「・・・クツクツクツク、ハツハツハツハツハツハ！まさか、『桜風』自身が挨拶してくれるとは！いやはや、長生きはする物ですなあ、艦長！」

「そうですね、筑波大尉。では、私達も『桜風』をしつかりと見送らねばなりませんね。・・・総員傾注！甲板に出て、それぞれの思う最上の敬意を持って駆逐艦『桜風』を見送られたし！」

「・・・まさか最後にみんな揃って敬礼してくれるとはねえ・・・『軍艦冥利に尽きる』とはこの事かな。いや、ちよつとちがうかな？」

『桜風』の意思は、艦全てが海中に没する中、誰にもなくそう呟いていた。彼女自身、唯々嬉しかった。『彼女』は元々極めて旧式な駆逐艦でしか無く、軍籍も名前も消された状態で何故か横須賀軍港の隅に放置されていたのをシユルツ大佐たちウィルキア近衛海軍に奪取された後、『桜風』の名前を与えられた。そして武装も船体も原型が無くなるまで改造、換装され、世界の海を駆け巡り、ありとあらゆる超兵器や敵艦隊と戦い抜い

た。そして今際の時に乗員に感謝の言葉を伝えたら、『桜風』の乗員だけでなく友軍艦艇の乗員からも様々な形で感謝の念を伝えられたのだ。これが『桜風』にとって嬉しくない筈が無い。

・・・私が沈んだ後のウイルクアや日本が心配だけど、まあ何とかなるよね。シユルツ大佐なら、どんな大艦隊相手でもきつと勝つだろうし。陸戦でも、仮想敵のソ連とは兵器レベルが違い過ぎるし

『フリードリヒ・ヴァイセンベルガー』率いるウイルクア帝国は、軍事通行権を認めたとソ連に対する見返りとして一部技術を譲渡していたが、それらは現在のウイルクア王国やその同盟国軍が装備している兵器と比べれば遥かにレベルが低い代物であった。此方側は『F-115 イーグル』の様な視界外戦闘が可能な超音速戦闘機を配備しているのに対して、ソ連空軍は未だにレシプロ機が主力なのである。その点、『桜風』は安心していられた。

・・・ああ、水圧で艦体がギシギシ言い始めた。もうそろそろ限界かな。でも不思議と痛みは感じない。海神の加護かな？

冗談めかして『桜風』はそう思うも、『桜風』の意思は否応無しに重く、静かになり始めた。水圧で艦体が少しずつ破壊され、海溝に落ちようとしているのだ。海溝に落ちれば最期、母なる地球のマグマに溶かされ、『桜風』は跡形も無く消え去るだろう。

…ありがとう、シユルツ艦長。ナギ少尉。ブラウン博士。乗員の皆。私は、『桜風』は、皆と一緒に過ごせて、戦えて、幸せでした。

『桜風』の意思が最後にそう念じ、意識が掻き消えようとした瞬間、なにも居ない、光も存在しない筈の深海で『猫を追いかける子供の声』と『猫の鳴き声』、そして『桜風』を呼び求める声』が、『桜風』には聞こえた気がした。



「……ハイ、どハイ。」

次に『桜風』の意識が覚醒した時に見えた光景は、『穏やかな海』『真つ青で雲が点々と有る綺麗な青空』『二頭身サイズの小人の山』『戦闘可能状態の自分の艦艇』であった。

彼女の……『桜風』の航海は、まだ終わっては居なかつた。

## 第一話 『桜風』の目覚め

「・・・それで、君たちは、えっと、その・・・駆逐艦『桜風』のクルー・・・って事で、良い、のかな？」

『はい!』『初めましてですね艦長!』『うわあー、艦長の髪、スツゴイ奇麗・・・』『お肌もスベスベく』『艦長!頭乗って良いですか!』『じゃあ俺は艦長の胸の谷間n』『やらせねーよ!!?』

駆逐艦『桜風』が自身の艦艇の艦橋で意識を取り戻した時、先ず目の前に飛び込んできたのは艦橋のガラス越しに見えた奇麗な『青空』と『大海原』。そして艦橋内に『雪山』の如く積み上げられた二頭身の変な生物』だった。当然ながら『桜風』の知識に『二頭身で饅頭顔の生き物』の存在は無く、未知の存在に思考停止していた『桜風』は、『雪山』を崩してバラバラになった後、次々と起き上がって自分の職種を報告してきた彼ら(?)にもみくちやにされるがままであった。

「それと、あう・・・なんで君たちは私の事を『艦長』って呼ぶの? 駆逐艦『桜風』の艦長は、わふ・・・シユルツ大佐、だよ?」

『何言ってるんですか艦長!』『艦長は艦長じゃないですか』『シユルツ大佐は確かに良き

艦長でした。ですが今の艦長は貴女です！』『よし今の内に艦長の鎖骨w』『はい変態妖精さんは此方でーす』『な、なにをするきさまらー！』

もみくちやにされながらもこの『二頭身の小人』に『艦長』と呼ばれる事に疑問を抱いた『桜風』が問いかけるも、返つて来た答えは『今の艦長は『桜風』だから』という事であり、否定しても『小人』は納得しないどころか『じゃあ認めるまで艦長に纏わりついてやるー！』等と言いだす者もいる始末であり、結局『桜風』はこう言うしかなかった。

「わ、分かった！私が艦長！『桜風』が艦長だから！だからもう身体からちよつと離れてお願いだから！」

総計して30分ほど経過してからようやく彼女ら(?)から解放された『桜風』は、この『二頭身の饅頭顔』が『妖精さん』と言う存在である事を、その『妖精さん』から説明を受け、理解した。深く考える事を止めただけでも言うが。とは言え『桜風』は『超兵器』と言う常識と不条理を水平線の彼方へとかつ飛ばす化物と戦ってきた過去も有り『そういう存在も有るんだな』とすんなりと受け入れる事が出来た為、特に気持ち悪く見える等の悪感情は起きなかった。

「……じゃあ、皆は職場に戻って現状報告をお願いします。どういふ訳か念じるだけで自分の『艦艇（身体）』の状態が分かるけど、一応ね」

『了解です！』

鶴の一声にて蜘蛛の子を散らす、と言う表現がスムーズに出て来るほど小気味よく『妖精さん』が散らばって行く中、『桜風』は艦長席に恐る恐る座りながら、否正確にはスツポリと収まりながら、自分が何故此処にいるのか、何故自分は人の身体を持つて此処に存在するのか、これからどうするべきなのかを考え始めていた。

——私は確かにあの時意思を持ってシユルツ艦長たちの目の前に出て、皆に別れの言葉を伝えた。……肉声じゃなくて探照灯による発光信号でだったけど、その点はこの際関係無い。

——……やっぱり、意識が消え去る時に聞こえた、あの『少女』と『猫』が何かを『桜風』にやったと考えるのが妥当……馬鹿馬鹿しい。あの深海で『生物』が存在出来るはずがないし、今そんな事を考えても仕方が無い。

——……今は故国のウィルキア王国や同盟国の日本やアメリカに如何にかして辿り着いて、私が『桜風』で有る事を証明して保護を求めるしか無い……けど、信じてくれるかなあ……

『艦長ー！現状把握終わりましたー！』

「いやいやいや、仕事早いね、妖精さん。私がここに座ってそんなに経って無いよ？」  
 『艦長、我等妖精さんは駆逐艦『桜風』を知り尽くしたクルーです！』『現状把握程度、早期に完璧にこなせないでななが妖精か！』『はーい、慢心している妖精さんはまつちゃおうねー』

初対面での印象と変わらずに相変わらず楽しそうに掛け合う妖精さん達。現状を本当に把握しているのかいないのか分からない位にお気楽で楽しそうな様子に、思わず『桜風』が無垢な笑顔になって一部の妖精さんに対して一撃轟沈級の打撃を与えながら、妖精さんから差し出された現状報告書を受け取り、目を通し、そしてこめかみを押さえる事となった。

——えーと・・・燃料弾薬は消耗皆無、現在艦艇に据え付けられている設備や艦装も問題無く使用可能。今すぐ戦闘になったとしても大丈夫、か。

——・・・でも、艦装内容がおかしい。『桜風』が最後に装備していたのは『280mmAGS三連装砲』や『新型超音速酸素魚雷』『ASROC I I I』だったのに、何

で『15・5cm75口径4連装砲』や『61cm7連装酸素魚雷』『新型対潜ロケット』にグレードダウンしているの・・・？

——機関も本来は『核融合炉IV』と『駆逐タービンε』の組合せだったハズなのに『駆逐ボイラーε』に代わっているし・・・まあしっかりと煙突が付いているのは良いとして、いや本当は良くないけど・・・

——極めつけは対空火器。なんでよりもよって『RAM』と『40mm4連装機銃』の組合せに？『対空ミサイルVLS I I I』は何処に？『35mmCIWS』も無い・・・どうして・・・

『艦長ー？』『艦装が何時の間にか全部格下げ装備になりましたからねー』『一応防御重力場は有りましたよ！IV型でしたけど』『はうー・・・悩むお姿も御綺麗ですー』『はーい、目をハートにしている妖精さんはしまっっちゃおうねー』『大丈夫です！例えこの装備でも、艦長ならきつと敵艦隊を殲滅出来ます！』『シエルドハーフェンの時見たいに無数の航空戦力が襲い掛かってきたら詰むけどな』

外野の妖精さんはお気楽に言いたい放題だが、当の『桜風』は改めて現実を突き付けられて焦っていた。補助兵装として取り付けられていた『無限装填装置』も『防御重力

場β』も『電磁防壁β』も存在せず、機関も『核融合炉IV』から『駆逐ボイラーε』へと変わっていた為に、早期に補給拠点を確保しない限り『桜風』は、何時か燃料切れでこの大海原を漂流する事になる。そうなたら完全に『詰み』だ。船体こそ変わらず『日本フリゲート艦II』のままだったのが不幸中の幸いでは有ったが、こんな中途半端な装備で改大和級や長門級、改加賀型の様な戦艦どころか、改ノーフォーク級や神風辺りと遭遇したら下手を打てばあっさり撃沈されるのが目に見えていた。

「……副長、今の我が艦の現在位置は分かる？」

『自沈処分されたあの場所と代わりありません。……ただし、GPSなどの装備が無い為に天測して位置を計算した結果であります。』

「じゃあ決まり。駆逐艦『桜風』は直ちに同盟国の日本へと向かいます。このままこの場所に居ても何の利益もありません」

『サーイエツサー!!』『いや正確にはママ！イエスママ！じゃなかったっけ?』『細けえこたあ良いんだよ!』『よーし！妖精さんの初仕事だー!』『いざ行かん！日本へ!』

一回目と同じく元気に彼方此方に駆けていく妖精さんを尻目に『桜風』は、自分の兵装や性能を副長から受け取った書類とボールペンを使用して記入し始めた。日本海軍

艦艇と接触した時に、自分が駆逐艦『桜風』である事を証明する為である。・・・とは  
言え、駆逐艦『桜風』はあの時、シユルツ艦長の手によって確実に自沈処分されている。  
沈んだ筈の駆逐艦の名前を名乗る国籍不明の艦艇が現れた場合、普通ならば相手の艦艇  
が戦闘する意思が無い事を確認した上で接舷移乗して艦内を確認するはず。そして艦  
内で発見するのは『妖精さん』を自称する『二頭身饅頭顔』と『桜風を名乗る少女』で  
ある。どう考えても研究所送りが関の山であるが、かといってこのまま大海原を漂流す  
る訳にもいかず、結局『日本に助けを求める』以外の選択肢は浮かばなかつた。せめて  
機関が『原子炉Ⅰ』であつたら、日本を素通りしてウイルクアに戻れたのだろうか：：

「・・・こんな装備で大丈夫かなあ・・・？」

『大丈夫です。問題ありません』

「親指立てながら根拠も無い事言わないの、副長・・・」

『桜風』に対して無駄に良い笑顔でサムズアップする副長妖精に頭を抱える『桜風』。こ  
の先彼女と妖精さんの関係が一体どうなるのかは現時点では見当も付かないが、少なく  
ともこの様子を見る限りは、『桜風』と妖精さんはそう険悪な関係になる事は無いであろ  
う。・・・まあ『桜風』が一方的に妖精さんに弄ばれるのはどうなるかは分からないが。



【駆逐艦『桜風』報告書より抜粋】

現在確認されている駆逐艦『桜風』に搭載されている艤装並びに簡易的性能表

主砲：『15. 5 cm 75口径4連装砲』4基

備考：15. 5 cm 75口径砲の単発火力は20. 3 cm 50口径砲に相当

雷装：『61 cm 7連装酸素魚雷』4基

艦艇後方部の片舷に二基ずつ搭載

対潜兵装：『新型対潜ロケット』4基

前艦橋側主砲を挟んで2基、後部艦橋近くに2基配置

対空火器：『40 mm 4連装機銃』並びに『RAM』多数

対空火力に不足が見られるため、可能な限り更新する事を望む

補助兵装：『音波探信儀V』『電波探信儀V』『自動装填装置VI』『電波照準儀V』『自動迎撃システムII』『防御重力場IV』『ナイトビジョン』『発砲遅延装置IV』

備考：補助兵装スロットには未だ二つの空きが有り

航空機：現在搭載機無し。

使用弾頭：近接炸裂弾、新型徹甲弾、新型弾頭装甲

速力：50ノット強

防装甲：25cm完全防装甲方式

駆逐艦『桜風』の総評：全般的に自沈直前の兵装よりもダウングレードしており、早急な改装がなされる事を願う。

## 第二話　フアーストコンタクト

「・・・平和だね」

『なにも接触してきませんからねー』

「・・・他の妖精さんたちは何してる？」

『日向ぼっこしていたり組体操していたり釣りしていたりですねー。あ、でも何か会った時はすぐさま持ち場に戻れますのでご安心をば』

「・・・あ、茶柱だった」

『おー、コレは何か良い事が起きそうですね！』

駆逐艦『桜風』が同盟国である日本へ向かう事を決定し、妖精さんがワイワイ騒ぎながらそれぞれの職場に戻り、航行を開始してから約一時間と三十分。『桜風』が最悪の事態を想定し、有り得ないと思いつつも懸念していた『帝国軍残党による襲撃』も発生せず、今艦艇のそこかしこでは暇を持て余した妖精さんが思い思いに寛いでいた。初め『桜風』は暢気にだらけている妖精さんに対して眉を顰めたが、副長から『何も起こっていないのに気を張っていたら倒れますよ』との説得にアツサリと折れ、結局副長と一緒

に艦橋でお茶をしばいていた。

「・・・副長たちはさ」

『なんですか?』

「不安じゃないの? 艦長がシウルツ大佐から『私』に代わったばかりか、兵装も変な風に改装されていたりでさ」

『有りませんよ不安なんて。艦長が艦長で無ければ私たちは一体誰を艦長とすればいいのです? 大丈夫です、艦長なら』

「そっか。・・・ありがとう、副長」

『どういたしまして。まあ行き成り身一つ艦一つで放り出されれば心配になるのも分かりますが、あんまり気に病むとお肌や髪に毒ですよ?』

別に肌や髪が荒れてもその位良いじゃない。そんな思いを抱きながらも『桜風』はお茶を啜る。

・・・うん・・・初めて入れたお茶だけど、まあ美味しい、かな。

今までの駆逐艦だった時代には体験した事が無い、と言うより有る筈が無い静かで平和な時間。そんな平和な時間は、レーダーに唐突に反応が現れた事で終わりを告げた。

「・・・副長」

『分かってます。総員！直ちに持ち場に戻れ！』

『おー！』『アイアイサーー！』『直ちに持ち場に戻りまーす！』『すみませんあと少しで魚が釣り上げらー』『はーい妖精さんは仕事場にしまっっちゃおうねー』

言葉や雰囲気は相変わらずだが、その動きは正しく熟練兵の動きを彷彿とさせる鋭さを見せながら彼方此方に向かう妖精さんの姿を見て、正直な所自由奔放な妖精さんの行動をみて少々大丈夫か不安に思っていた節の有る『桜風』は、その事に対して心中で反省と謝罪を行いつつも、レーダーに確認された情報を艦内に残っていたデータベースと照合させていた。そして適合するデータを呼び出して・・・副長共々、『桜風』は思いつきり頭を傾げていた。

「ねえ副長。・・・普通、私が沈んだ後にジェット戦闘機まで開発していた日本や世界各国が等しく技術後退するって事、有り得ると思う？」

『二度目の超兵器大戦か何かが発生して人類文明が崩壊したのなら有り得なくもないかもしれません・・・』

「そんな雰囲気無いよね．．．じゃあなんで『彩雲』が飛んでいるんだろ．．．？」

『桜風』と副長がいきなりそんな話をしだす事になった存在。それはあの大戦中に日本が開発するも、急速に航空機や対空火器が進化して行く時代にあつさり取り残され、結局余り有効活用される事無く終わったレシプロ軍用偵察機である『彩雲』だった。駆逐艦『桜風』が自沈される前は、日本もウィルキアも普通に超音速戦闘機を使用していた。今更『彩雲』の様な骨董品を態々使用する様な理由は無かった。まあ『骨董品』と言つても、『彩雲』が開発されたのは大戦中ど真ん中で、登場から終戦するまでの期間自体は一年も無かつたのであるが。

『艦長ー！彩雲から通信が入っていますがどうしますかー!?』

「．．．よし、取り敢えず繋げて。今は少しでも情報が欲しいから」

『分つかりましたー！では通信に繋げます！』

え、電文じゃなかつたの。そんな『桜風』の疑問を余所に、通信任務に就く妖精さんは軽妙に機器を操つて5秒と経たぬ間に準備を終えて『では音声入りまーす！』と『桜風』に報告した。本当にこの駆逐艦の妖精さんは有能である。

《・・・あ、繋がった？えっと、聞こえますか？》

「・・・はい、感度良好です。貴方の声、しっかりと良く聞こえます」

《・・・はい、こちらもしっかり聞こえます。私は日本海軍に所属している航空母艦『瑞鳳』です。貴方のお名前、聞かせてくれますか？》

・・・まあ、こんな状態じゃ、分かる訳無いわよね・・・

通信相手の女性の声に自重の笑みを浮かべる『桜風』。幾度と無く帝国軍の大艦隊や超兵器を撃沈し続けた『あの時』には、戦意高揚の為に良くアメリカやイギリスのマスコミによって報道されていたが、その時の『桜風』の艦装はこんな物では無かった。分からなくて当然であり、仮に実際に名乗ったところで信用されるとは思えなかった。無論、名前を聞かれた以上、答えるしかないが。

「こちらは、駆逐艦『桜風』。ウィルキア王国近衛海軍に所属していて、終戦後に日本海溝に自沈処分された後に、何故かこのような形に発現してしまったみたいでして。現在同盟国である日本に救援を求める為に・・・」

《・・・え、あの、ごめん！ちよっと待って!!?》

・・・まあ『沈んだ筈の駆逐艦が蘇った』なんて普通信じないよねえ・・・  
とは言え『桜風』にとつて見れば、この突拍子もない現象が事実なのだからどうしようもない。さて、どうやって説明したものか。そう考えていた『桜風』にとつて、航空母艦『瑞鳳』の通信手が放った一言は、全ての思考を停止させた。

《ウイルキア王国近衛海軍つて、一体何の事ですか？日本の同盟国に『ウイルキア王国』なんていう国は有りませんか？》

・・・え？

「・・・取り敢えず、『桜風』さんには横須賀に向かう様をお願いしました。・・・これで良かったですよね、青葉さん？」

「はい、有難う御座います瑞鳳さん！」



「・・・本当は、私たちが迎えに行く事が出来れば良かったのにね・・・」

「それは仕方が無いですよ。青葉達はかなりの時間本土近海の深海棲艦を調査し続けて来ましたから、もう燃料があんまり残っていませんし」

駆逐艦『桜風』とは違って木製の材質が目立つ重巡洋艦や木製甲板の軽空母、そして『桜風』よりもかなり小さな駆逐艦で編成された小規模艦隊が横須賀へと航行していた。艦載機と通信オンリーとは言え、駆逐艦『桜風』と初めに接触した艦娘たちである。彼女達は速度習熟に加えて、最近妙に大人しくなってきた本土近海の深海棲海艦の調査をしていた。『桜風』を発見したのは、本当にただの偶然であった。

「しかし『ウイルキア王国』に『桜風』ですか・・・青葉も色々取材してきた自負がありますけど、この二つは今まで聞いた事が有りませんねー」

「鳳翔さんや陽炎ちゃんは何か知らない？」

「いえ・・・私も聞いた事は有りませんね・・・」

「私も無いわ。少なくとも私の妹に『桜風』何て言うのは居なかったはず」

世界最初の航空母艦にして第二次世界大戦を最後まで生き残り、復員船で多数に日本

人を故郷へ送り届けた『鳳翔』も、帝国海軍駆逐艦の集大成である陽炎型駆逐艦のネーミングである『陽炎』にも一応瑞鳳は心当たりが無いか聞いてみるも、二人とも首を横に振るばかりであった。

「うーん・・・取り敢えず提督にこの事、報告するね」

「お願いします、瑞鳳さん」

・・・駆逐艦『桜風』。名前としては帝国海軍の駆逐艦と思われるも、終戦まで生き残った青葉も鳳翔さんも知らず、しかも本人は所属を『ウィルキア王国近衛海軍』と断言した。・・・ふふ、これは特ダネの予感です！『桜風』さんには横須賀に付いた後は事情聴取と言う事で全部話して貰いましょう！そして「週刊：艦隊青葉新聞」に個人情報や機密情報に配慮しつつも出せる情報はババーンと張り出すんです！ふふふ、青葉の記者魂が煮えたぎって来ました・・・！

新たな特ダネの予感に握り拳を作ってテンションが大変な事になりつつある青葉を見て、彼女の艦艇に乗っている妖精さんは『また青葉さんの発作が起こっちゃったな』『ああなったら気が済むまで取材相手を解放しないだろうなあ』『その癖相手が本気で嫌

がったらアツサリ引き下がるんだから性質が悪言ったらありやしないね』『取り敢えず被害者になるであろう『桜風』さんとやらに合掌』『なーむー』などと酷い言い様だが、この艦では割と日常茶飯事の光景であった。

・・・彼女達は知らなかった。本土近海の深海棲艦が突如消失したのは、AL/MI作戦で人類側の主要戦力が遠隔地に存在している隙に『戦艦棲姫』や『戦艦ル級flagship』、『新型艦載機を搭載した』空母ヲ級flagship』が本土に來襲してくる前触れであったことを。

・・・『桜風』は知らなかった。空母『瑞鳳』からの指示に従って横須賀に向けて航行した結果、深海棲艦でもトップクラスの精鋭艦隊と衝突するコースに乗っていた事を。

・・・深海棲艦の侵攻部隊は知らなかった。神の悪戯か、それとも悪魔の微笑みか。侵攻中に遭遇し、景気付けにとばかりに攻撃した一隻の駆逐艦が、別世界ではありとあらゆる地獄絵図を切り抜け、突破し、勝利し続けた『人類史上最高の戦闘艦艇』で有った事を。

いかなる絶望をも、たった一隻で覆し続けた駆逐艦『桜風』と、この世界の海洋の覇者と言える深海棲艦侵攻主力部隊が日本本土沖合で激突するのは、そう遠い未来の話で

は無かった。

## 第三話 初陣

横須賀軍港に居を構える、第3海上部隊所有の敷地内に立つ3階建ての建物の一室。建物の外では妖精さんや艦娘が和気藹々と過ごす声が建物内にも漏れ聞こえてくる中、小柄で弓道着を身にまとった少女と、ハーフパンツを履き、髪型がポニーテールであることも相まって活発な印象を与える少女が二人並んで、軍服を身にまとった女性と執務机を挟んで対峙していた。

「・・・駆逐艦『桜風』ね。今も『彼女』からくる定時通信記録や今見せてくれた写真を見る限り、やっぱり幻の産物とかではなさそうね」

「提督う・・・やっぱり、信じてくれてなかったの？」

「ごめんね瑞鳳。でも私の方で調べただけど、瑞鳳たちが通信を寄越してくれた頃には、あの海域には瑞鳳たち以外の艦隊は居なかったの」

「『艦娘が出現するのは、深海棲艦を艦娘が沈めた時だけ』・・・でしたっけ」

「そう。青葉の言う通り、私たち人間が持つ兵器では深海棲艦を沈める事は難しいし、膨大な労力をかけて通常兵器で何とか沈める事が奇跡的にできたケースはあるけど、いずれの場合も艦娘が出現した例は報告されていない。ただし、その条件外で発生した例外

が一つだけ……」

「『始まりの艦娘』。深海棲艦がこの海を跋扈し始めた時に、どこからともなく現れて人間を助けた駆逐艦娘。……今では『初期艦』と呼ばれている駆逐艦娘たちの事ですね」  
「Excellent。良く勉強しているわね、青葉。……まあ、そういう訳だから、本来瑞鳳たちしかいなかったあの海域で艦娘が出現するのは、これまでの定石でいえば瑞鳳たちが深海棲艦を撃破した時だけのはずなんだけど……」

その瑞鳳たち『本土近海調査艦隊』は、結局一度も敵艦と接触する事無く駆逐艦『桜風』と接触した。既にこの事は上層部に資料付きで報告しているが、その情報を知った上層部は『何かとんでもない事が起こるのではないか』と思われたようで、駆逐艦『桜風』と接触した瑞鳳たちの提督である『深山 満理奈』少将に『桜風』を保護するように命令してきた。今執務室で深山少将と青葉たちが話していたのは、駆逐艦『桜風』と接触した時の状況の再確認と駆逐艦『桜風』の保護の話をするためである。

……写真を見た元帥たちの泡を食った慌てぶりには心底同情するわ……。青葉や瑞鳳たちには分からなかった様だけど、この写真を見る限り、駆逐艦『桜風』には『RAM』と『40mm4連装機関砲』が搭載されている。過去、帝国海軍の駆逐艦に『40

mm4連装機関砲』がこんなに搭載されていた事は無いし、『RAM』なんて第二次世界大戦ごろの艦艇が装備しているはずがない。これまでの常識を打ち砕くこの艦娘は、絶対に沈まさせてはならないわね・・・

深山満理奈提督がそんな事を内心独白しつつも、本題の『駆逐艦『桜風』の保護』の話を青葉と瑞鳳に始めようとしたちようどその時、突如執務室の扉を叩き破らんばかりに連続して叩かれた。

「え、え、いきなりなんですか!？」

「大丈夫よ、入って」

突然の事態に驚く青葉をしり目に、深山提督は扉の向こうの人物に声をかけた。そして深山提督が声をかけたその直後に執務室内に転がり込む様に駆逐艦娘の『朝潮』が入室した。何時もの生真面目で謹厳実直な姿からは想像もつかないその姿に青葉と瑞鳳が目を見開く中、朝潮は敬礼しながら深山提督に対して口を開いた。

「失礼します司令官!司令官に硫黄島航空隊より電文です!」

そう言った直後に流れるように電文を渡す朝潮。「まるでフリスビーを取って飼いなすの処へ戻ってきたワンコ見たい」と言う極めて失礼な感想を執務室にいる誰かが思った直後、電文を一瞥した深山提督は思わず椅子を蹴飛ばして立ち上がった。

「し、司令官?」

「提督? いったいどうしたの?」

「……硫黄島航空隊から『我、横須賀に向け進撃する深海棲艦の大部隊を発見す』との電文よ。正確な居所と進行方向も載ってるわ」

見てみて。そう言いながら硫黄島航空隊からの電文を青葉、瑞鳳、朝潮たちに見せる深山提督。そして一齐に電文を一読する三人だったが、朝潮はともかくとして、青葉と瑞鳳の顔色が見る見るうちに青ざめてきた。なぜかといえば、先に接触して横須賀に向かうように指示した駆逐艦『桜風』の進行ルートと、硫黄島航空隊が発見した横須賀目掛けて進撃中の深海棲艦の侵攻ルートが完全に重なっていたのだ。『たった一隻の駆逐艦』がこの大部隊と遭遇すれば、ほぼ間違いなく轟沈する事を強制させられる。事情を青葉と瑞鳳から説明させられた朝潮も当然ながら顔色を変える。彼女も駆逐艦に属するがゆえに、今の駆逐艦『桜風』が置かれた事態がどれだけ危険な状態であるかは簡単に理解できた。

「青葉! 瑞鳳! 今すぐ出撃準備! 追加の艦艇は追って連絡する! 二人は『桜風』と交信して今すぐ退避するように連絡して!」



「はい！青葉、今すぐ向かいます！」

「わ、分かりました！」

「朝潮は今オフの皆に深海棲艦がここ横須賀に進撃して来ている事を伝えてきて！」

「了解です！朝潮、直ちに伝えてきます！」

・・・タイミングがあまりにも悪すぎる。足の速い空母主力艦隊や金剛型高速戦艦は遠くミッドウエー、打撃艦隊の主力である『大和』や『武蔵』、『長門』『陸奥』はここに残っているけど、戦艦の宿命である足の遅さは致命的。『桜風』が深海棲艦と接触するまでに救援できるとは到底思えない。巡洋艦と軽空母、駆逐艦編成での高速艦隊では敵艦隊に良い様に捌られかねない。

「・・・ごめんなさい、『桜風』。しばらくの間、耐えていて。必ず、救い出すから・・・！」

戦力が減少した隙を見事に深海棲艦に突かれ、『桜風』の早期救援が行えるような艦娘が払拭している中、それでも『必ず『桜風』を救い出す』と決意した深山満理奈少将は、出撃メンバーの選定と上層部への状況報告を行いだした・・・

「・・・なんていうか、拍子抜けしたね」

『ですね』『なんだよあの潜水艦』『ミサイル撃つてきませんでしたね』『それ以前に魚雷が空気魚雷な上に誘導能力も見られませんでした』『まさか新型対潜ロケット程度であつさり一撃撃沈とは』『潜水艦の面汚しよのう』

一方横須賀でそんな騒動が起きているとは露とも知らない『桜風』。航空母艦『瑞鳳』に指示されたとおりに横須賀に向けて航行している途中にて、搭載していた『音波探信儀V』が複数の不明潜水艦を探知し、てつきり『桜風』はあまりの探知のしやすさの前に『横須賀所属の練習潜水艦隊かな?』と誤解していた。そしてその不明潜水艦隊は突如転舵して『桜風』に向けて雷撃を一切の警告も無しに発射したのだ。無論黙って魚雷に当たるような『桜風』ではなく、回避運動を取る必要すらも無く搭載していた『40mm 4連装機銃』の迎撃によつて雷撃を処理。『桜風』は抗議と警告を不明潜水艦に通信す

るも、当の潜水艦からの返答は浮上でも逃走でも無く再度の雷撃であったため、やむなく『桜風』は自衛権の行使を宣言した上で『新型対潜ロケット』を不明潜水艦に撃ち込んだのだった。一艦残らず等しく一撃で轟沈したのは『桜風』にも、妖精さんにとつても予想外だった。

『艦長。やはり先ほどの『瑞鳳』からの通信と併せて考えますと、私たちが今いるこの世界は『ウイルクア王国』は存在しないのではありませんか？』

「私もそう思う。こんな低レベルな艦艇は私たちの世界ではとつくに淘汰されているし、あの『瑞鳳』の通信手が話しぶりを思い返してみても、私たちを何かにハメようというような意図は感じられなかった。・・・自沈処分の後で蘇って見たらそこは別世界、まるで小説ね」

『・・・艦長。取りあえずこれからどうしましょうか？』

どうしましょうか。そう言った妖精さんの意図は『このまま横須賀に向かうか、それとも現在通信傍受で存在が確認された敵艦隊を殲滅しに行くか』ということである。決断するのはあくまで『艦長』であり、よほどの事が無い限り参謀や副長らはあくまで『助言』するに止まるのが海軍における通例である。因みに何故敵艦隊と断言できたのかと

言えば、先の通信で航空母艦『瑞鳳』から深海棲艦の存在を警告されていたためである。妖精さんの奥ゆかしい心遣いに『本当に『桜風』の妖精さんは凄く有りがたい存在だなあ』との率直な感想を抱きながら、『桜風』はこう返答した。

「無論、敵艦隊を殲滅してから横須賀に向かいます」

『その心は?』

「手ぶらで行くより、気持ち程度でも手土産があつた方が先方に良い印象を与えるでしょう?」

そう笑顔で答える『桜風』であつたが、その表情は獲物を見つけた獰猛な猛獣のそれであり、その端正な顔付きと相まって、妖精さんに『笑顔とは、本来は攻撃的な表情である』事を思い起こさせるだけのインパクトは有つた。つまり要約するとある妖精さん曰く『カッコカワ(・▽・) イイ!!』と言う事である。

『了解しましたー!』『さあ異世界転移後初の艦隊決戦だー!』『自動装填装置の調子を確認してきまーす!』『ふっふっふ、我ら妖精さんの熱い一撃、その身に刻むがいい!』  
!』『はてさて、これからどれだけ戦果を挙げられるのか』『賭けでもするか?俺は艦長

が敵艦隊を殲滅するのに賭ける』『賭けにならんがな』

私語雑談しながらも高速で自らの職務をこなす妖精さん。この光景に早くも慣れ始めた『桜風』は妖精さんの私語を気にする事無く、自らの身体艦艇を動かし始めた。いわゆるウォーミングアップである。

：：良し。『15・5cm75口径4連装砲』や『40mm4連装機銃』、『RAM』に『61cm7連装酸素魚雷』の調子は、妖精さんに報告された通り問題なし。補助兵装も問題なく全力稼働状態。私の思い通りにしっかりと反応して動く。さつき撃沈した潜水艦のレベルを考えれば、レーザーやレールガンを敵艦隊が装備しているとは考えにくい。・・・とはいえ、油断して無駄に被弾したらそれこそシウルツ艦長や筑波大尉に怒られちゃうし、いつも通り油断なく全力で敵艦隊を殲滅しよう。今の私は、この駆逐艦『桜風』の艦長なんだから。妖精さんたちをケガさせたりしない様にしないかね。

横須賀の艦隊が必死の形相で駆逐艦『桜風』を救い出すために艦隊を編成しているその時、その横須賀の提督や艦娘から心配されている駆逐艦『桜風』はまるで散歩の途中

で買い食いするような気安さで敵艦隊に向かって進撃していた。

『桜風』と『提督と艦娘』と『深海棲艦』。この三者が同時に遭遇できるかどうかは、現在進撃中の『深海棲艦主力部隊』がどれだけ『桜風』からの攻勢に耐え切れるかにかかっていた。

## 第四話 突進、突撃、突破

「……青葉さん」

「……どうしましたか、大和さん」

「『桜風』さんには、ちゃんと退避するように通信してありますよね？」

「そうなんですけど……」

横須賀鎮守府所属の深山少将配下にある戦艦娘『大和』を旗艦とする『桜風』救援艦隊は困惑していた。事情説明もそこに緊急に出撃したのは良いとして、肝心要の救援目標である駆逐艦『桜風』に深海棲艦の大艦隊が横須賀に向けて侵攻中であり、直ちに退避するように通信するも、『桜風』からの返答は『委細問題無し。我これより敵艦隊と交戦す』と言うとんでもない物だった。

「青葉さん……大丈夫なのかなあ、『桜風』ちゃん」

「瑞鳳さん……」

…正直青葉は大丈夫じゃないと思います。いったい彼女は何を考えているんでしょうか？硫黄島航空隊からの偵察情報だと、敵艦隊は『空母棲姫』や『空母ヲ級 flagship』、『戦艦棲姫』に『戦艦ル級 flagship』と言った深棲海艦の中でも最上級の精鋭艦が存在することが確認されています。その精鋭艦隊相手に、たった一隻で何をやる気なのですか、『桜風』さん……？

「えーと、お話し中ごめん、ちよつといい？」

「陽炎か？ いったいどうした？ 敵艦隊か？」

「な、長門さん?! い、いえ、敵艦隊では無いです。ただ、ちよつと気になるものが海面に……」

…そんなに私は駆逐艦にとつて怖いのか。陽炎の深い意味はなく単純に唐突に声をかけられたから驚いたことにサラツと勘違いして落ち込む長門だったが、とにかく『桜風』救援艦隊』の面々は陽炎の言う『気になるもの』に目をやり……

「……深棲海艦の艦体や艦載機の残骸？」

異口同音にそう呟いた。



「……本来この海域に存在する艦隊は、大和たち『桜風』救援艦隊』しか存在しないはず。増援が出たという報告も無いし、仮に秘匿して出撃していたとしても、これだけの艦隊と戦闘したのなら、電探に何かしらの反応があったはずなのに……」

「ふむ……警戒して進む必要があるな」

自分たちの知識では、普通の艦娘であればこの大量の深海棲艦を撃滅する為にはかなりの時間と労力を要する。硫黄島航空隊からの報告を受け取ってすぐに本土で残っていた艦隊の中で即応できたのは、距離的戦力的な問題もあり唯一深山提督だけだったため、本来深海棲艦に対して有効的打撃を与えられる存在は『桜風』救援艦隊』だけだった。その為、自分たちが交戦していないのに大量に深海棲艦が沈没していたこの異常現象に、大和や長門たちは『深海棲艦の同士討ち?』『本土の秘密兵器?』などと言う的外れで摩訶不思議な考察をし始めていた。

……まさか、『桜風』さんが……いやいやいや、あり得ませんね、いくらなんでも『駆逐艦一隻』でこの戦果を出すのは無理です、常識的に考えて。

『あり得ない』と否定しつつも、唯一『正解』へとたどり着いた青葉を除いて。

「さーて、そろそろ敵空母部隊との交戦距離に入るね。各員、戦闘準備に問題ない？」  
『一切合切無問題です。それと艦長、くしゃみされたお姿もとても可愛かったです！』  
「通信手。あなた紐に括り付けて地引網のように海面に放り込むよ？」  
『それだけはご勘弁を！』

横須賀の『桜風』救援艦隊』が大量の深海棲艦の残骸と遭遇していたそのころ、その残骸を生み出した下手人たる駆逐艦『桜風』は、機関全開の最高速度で敵機動艦隊へと突っ走っていた。青葉たちが発見した『元』深海棲艦は『重巡り級 flagship』を旗艦とする高速巡洋艦部隊であったが、交戦した『桜風』は『ちようど良い実践演習相手』と見做された程度の脅威度の低い存在であり、雷撃どころか砲撃する事すら叶わずに一方的に『15.5cm 75口径4連装砲』4基の弾幕射撃の前にあっさりとは全艦撃沈される憂き目を見ていた。

『艦長！レーダーに反応！敵艦載機の大群です！』

「速度と性能解析の報告は？」

『失礼しました！解析したところ、敵艦載機の性能は『F6F ヘルキャット』や『B2C-1C ヘルダイバー』と推定されます！』

「・・・舐められてるね。確かに装備は依然と比べて画然の差があるけど、レシプロ機程度の航空機相手なら問題なく今の『桜風』は戦えるというのに」

『これが敵艦隊の最新鋭艦載機と言う可能性もありますか？』

「だったら逃げ出さずに『数で押しつぶせる』と断定したその慢心と誤断に付け込むだけよ。・・・総員、対空、対艦戦闘用意！敵艦載機を撃滅したのちに敵艦隊内部に突入し、殲滅します！」

『桜風』の一声にて、艦艇に搭載された『15.5cm75口径4連装砲』や『40mm4連装機銃』並びに『RAM』が動き出す。雲霞の如く迫りくる敵編隊に対して、一機残らず死出への旅路へと航路変更させるために。かかってこいやカトンボども。対空砲にかじりつく妖精さんのうち誰かがそう言った。

簡単な仕事のはずだった。無謀にもこちらに突撃してくる駆逐艦を、艦載機で袋叩きにして沈め、これからの戦闘に勢いを突かせる為の生贄にする。その筈だったのに。

『侵攻空母機動部隊』の旗艦である空母棲姫は、目の前で繰り広げられる『不条理』が束になって荒れ狂う『戦闘』をみて、一人静かにそう思っていた。護衛として随伴していた『重巡り級 flagship』と『駆逐二級後期型』は、敵駆逐艦の雷撃によって一撃で跡形も無く消し飛び、自分と『空母ヲ級 flagship』が搭載してきた新型艦載機は敵駆逐艦の放つ弾幕砲火と誘導弾によって次々と撃墜されていった。・・・どうしてこうなったのか。何の益も無いことは分かりきっていたが、彼女・・・空母棲姫は、ほとんど現実逃避気味に侵攻主力艦隊の旗艦である『戦艦棲姫』に対して、この『化け物艦娘』の存在を報告し始めた。

偵察機の報告により単艦で行動する駆逐艦を発見した『侵攻空母機動部隊』は、旗艦

の空母棲姫が『人類の先行偵察艦』と判断した事もあり、この駆逐艦の向こう側に艦娘の主力艦隊が存在すると推定した。その為あまりにも粗雑な人類側の行動に、今回の深海棲艦の侵攻が人類にとってが完全に想定外であった事を深海棲艦の侵攻部隊は確信。そして空母棲姫よりも指揮系統的に上位に当たる戦艦棲姫の命令により深海棲艦の士気向上の為放った大編隊は、『速力20ノット程度で動く哀れな獲物』目掛けて勇躍突撃した。・・・そして、その『獲物』を深海棲艦の艦載機部隊が確認した直後、その『獲物』は、深海棲艦にとって最悪の『死神』へと一瞬で変貌した。

『獲物』または『死神』こと駆逐艦『桜風』は、まずは『15.5cm75口径4連装砲』による対空射撃を開始。その砲撃の連射力に深海棲艦艦載機隊は少々動揺するも、どうせ距離での砲撃など当たらないと高を括っていた様子で、多少編隊をばらけさせた以外は何も対応しなかった。だが、その侮っていた砲弾は次々と『艦載機に直撃乃至至近距離で爆発』し続け、一瞬で深海棲艦をパニック状態へと追いやった。だがそこは歴戦の空母棲姫所属の艦載機隊である。空母棲姫の指揮にて分散し、全方位同時攻撃を敢行しようとするが、その間にも『15.5cm75口径4連装砲』による砲撃は一切止まなはいばかりか速力を『50ノット』へと増速させるばかりか、接近するにつれて『今まで艦娘が装備しているのを一度も確認していない大口径機関砲』と『高精度な誘導能力を

持つ対空誘導弾』が大量に艦載機隊に対して攻撃を開始し、異常な速さと転舵、旋回速度で回避運動を取り続ける『桜風』の前に、空母棲姫と空母ヲ級が誇る精鋭艦載機隊は、まともに雷撃も爆撃も行える事無く次々と撃ち落され、波間に揉まれ、母なる海へと還って行った。

護衛として随伴していた『重巡り級flagship』と『駆逐二級後期型』がこの事態にいじらしくも『空母棲姫様を逃すために』この駆逐艦『桜風』に果敢に挑みかかるも、『駆逐二級後期型』は滝の如く降り注いできた砲撃にて搭載魚雷が誘爆し轟沈。『重巡り級flagship』も『桜風』から先制して二回斉射された酸素魚雷によつて一瞬で消滅した。護衛の部隊が『桜風』と交戦してから全滅するまでの時間は、わずかに5分足らず。意地の一発も充てる事すら叶わなかった。

カッター……オモッテイルノカ？ カワイイナア…

だが、こちらには戦艦棲姫を旗艦とする深海棲艦侵攻主力艦隊がいる。あの戦力をどうやって攻略するのか、見ものですね。

駆逐艦『桜風』から十本以上の酸素魚雷が自艦に向けて射出された中。この駆逐艦の

情報を本隊へ送信した空母棲姫がそう思い、言い放つ。・・・その直後、発射された酸素魚雷が多数命中。空母棲姫、そしてその随伴艦は、日本本土をその目に見る事無く、全滅した。

## 第五話 トワイライト・シー

『それで、何か申し開きは有りますか？』

「有りません……」『申し訳ない』『正直スマンかった』

日本では『逢魔時』<sup>おうまがとき</sup>、欧米では『トワイライト』と呼ばれる、夕方から夜へと移り行くこの海で、巡航速度で航行する駆逐艦『桜風』の艦橋では、主計科の仕事をしている妖精さんが、艦内のどこかから調達してきた大きい台座に乗って、この駆逐艦の艦長である『桜風』と副長、そして対空砲を操っていた砲術科に説教をしていた。『桜風』は艦長席に座り、副長と砲術妖精は『桜風』の膝の上に正座した状態で、三名とも揃って妖精さんの身長の十何倍もある台座の上に立つ主計科妖精に対して頭を垂れているのは、ある意味滑稽な光景である。

『……良し。それでは、これからは補給が確保される事が確認出来るまで、可能な限り弾薬消費を抑える様に努力する様にお願いますね。特に砲術科の『RAM』は』

『ハイ、ワカリマシタ。コレカラハ、ココロライレカエテ、エイドリヨクスル、シヨゾンニゴザイマス、ハイ』



「……砲術妖精さん、大丈夫？目が死んだ魚の目になってるけど」

『……妖精さんの力関係は基本的に平等であるのですが、この様子ではしばらくの間は砲術科は主計科に対して頭が上がりませんね』

『艦長も、初陣で精神的に高ぶったのは仕方が無いとしても、あれだけのオーバーキルはもう止めてください。弾薬が勿体無いです』

「あ、はい。つい今までの勢いでやってしまったのは反省してます……これからは可能な限り自重します……」

つい先ほど深海棲艦の精鋭機動部隊を殲滅する戦果を挙げた矢先に、何故こんな『弾薬消費を抑えろ』などと言う戦場に有るまじき説教がなされているのか。それは『今の駆逐艦『桜風』は寄港先も燃料弾薬補給拠点も確保されていない状態』だからだ。

元々駆逐艦『桜風』は、最初に『軍籍も艦名も資料も抹消されていた状態で横須賀に置いていた日本帝国海軍から、君塚艦隊の魔の手から脱出する為にウイルクア王国近衛海軍に奪取される』という些か複雑な事情が有ったにせよ、最終的に所属していた国家は『ユーラシア大陸東端沿岸部を領有するウイルクア王国』である。その為『桜風』は、日本に対しては推定建造地であるためにある程度のシンパシーを感じてはいたが、自ら

の所属を尋ねられたら胸を張って飽くまで『ウィルキア海軍』と言い切る程度の国家所属意識でしかなかった。だが、その祖国である『ウィルキア王国』は、この世界には存在しない。つまり今の『桜風』は如何なる国家にも所属していない、無国籍の軍艦である。無国籍の軍艦からの補給要請に無条件で応じる様なお人よし国家は世界を探してもいる事は無いだろう。その為、どのような状況になろうとも対応出来るように『本来ならば』燃料、弾薬消費は抑える様にするべきだった。

『・・・でも主計科、そう言うならなんで戦闘中に言ってくれなかったんですか？』

『砲術科。・・・それは、無理だったんだ』

『それは・・・何ゆえに？』

『・・・気付いたのが戦闘終了してからだったから』

「それじゃ主計科妖精さんもあんまり偉そうな事言えないじゃない。あと主計科妖精も揃って砲術科を煽ってたような・・・」

だが実際にはこの始末である。『桜風』も妖精さんも、自沈処分される前の『無限装填装置』を搭載していたあの時の感覚のままに、空母棲姫と交戦している時は常時自動迎撃システムに任せて『RAM』と『40mm4連装機銃』を敵艦載機に向けて発砲し続け

ていた。ただし不幸中の幸いと言うべきか、最初に『15.5 cm 75口径4連装砲』の長距離対空射撃で敵艦載機を多数撃墜し、これに対して敵艦載機隊が『散開しての包囲攻撃を狙ってくれた』おかげで、結果的ではあるものの『RAM』や『40 mm 4連装機銃』が効率的に敵機を撃墜出来たので、搭載弾薬量には大した消費ではなかった。仮に敵機が一塊で突撃して来ていたら『一機に対して複数の火砲を撃ち込む』戦闘になって、もつと無駄な弾薬を浪費していた事であろう。

「・・・まあ、過ぎた事はもう取り戻せないし、今はこれから交戦する敵艦隊との戦闘の事を考えようよ」

そう言って『桜風』は妖精さんの意識を切り替えさせつつ、通信妖精に対して傍受した敵艦隊の通信内容を尋ねる。本来は『魂』のような存在でしかなかった『桜風』が実体を持つて現世に出現するばかりか、一切の説明なしに異世界に放り込まれておまけに戦闘もしていると言う異常現象のオンパレードだと言うのに、なんだかんだ言いつつもしつかりと『艦長』としての職務をこなす『桜風』には、やはり妖精さんの見立て通りに、前の世界で艦長だった『ライナルト・シユルツ』大佐のように『艦長』としての稀有の才能を持ち合わせていたようだった。

『先に撃沈した航空母艦から発せられた暗号を元に通信妖精を総動員して傍受した電文

を解読した結果、敵深棲海艦の主力艦隊は戦艦3隻、正規空母1隻、駆逐艦2隻の小規模艦隊のようです』

『畏……と言う事は考えられませんか？確かに今のこの艦に搭載している電子機器は、搭載している兵装内容の割には過剰なまでに優秀な物ではありますが、情報偵察艦でもないわが艦がそう易々と暗号解読出来るのは……それに、こんな小規模艦隊が主力？』

『と言われましても……相手の暗号強度はかなり弱い状態でしたので。それに先に殲滅した空母機動艦隊の編成の事を併せて考えますと、この暗号の内容は事実である可能性は高いかと』

「副長。多分通信妖精の憶測は真実だよ」

副長があまりにも都合良く敵艦隊の暗号を解読出来た事、そしてその内容に対して畏の懸念を抱くも、顎に手を当てて考えていた『桜風』は通信妖精の話を実実であるとあっさり断定した。

『艦長？その理由は一体？』

「勘」

『……艦長……？』

「アハハ、冗談だよ。．．．理由としては、さつき沈めた機動艦隊の旗艦の行動」

『．．．特段変わった行動は見られませんでしたが?』

「自身と僚艦が搭載していた艦載機が次々と叩き落され、飛び出して来た護衛の重巡と駆逐艦が砲撃と雷撃で瞬時に沈められたのに、あの空母は逃げる事もせずに敢えて『駆逐艦』『桜風』の戦闘を見ながら暗号を発信した」。失敗に終わったとはいえ、あれだけの艦載機をスムーズに編隊をバラシて包囲攻撃出来る程に指揮できる優秀な艦が、まさか恐慌状態になるとは考え難い。理由はそう言う事」

『．．．つまりは、私たちの戦力を測定していたのですか?自分が沈められかねない状況で?』

「だろうね。『桜風』の速力も見えていたから、逃げる事も出来ない悟っていたのかも。まあ、生憎彼女の勇敢な行動は我が駆逐艦『桜風』が誇る優秀な妖精さんに大きな手助けをする皮肉な結末になってしまった訳だけど」

とは言え、もし仮に空母棲姫の通信が『桜風』の元に届かなかつたとしても、駆逐艦『桜風』が搭載している電波受信装置やコンピューターは、自沈処分される時の物より劣るとはいえ相当な高性能であり、データ収集に時間がかかりはしただろうが、確実に深海棲艦の暗号を解読する事は可能だった。前提として前の世界で急激に発達し、複雑高

度化していたウィルキア解放軍が使用していた暗号と比べると、現在深海棲艦が使用している暗号強度は文字通り『紙以下』であった。最終的にウィルキア海軍では、公開鍵暗号レベルにまで発展していた軍用暗号を使用していたのだから、無限乱数方式も採用せず、未だに換字式暗号を使用している深海棲艦の暗号では話にならないのだから仕方が無い。

『それで艦長。この敵艦隊・・・どうします?』

「サーチ&デストロイ一択。今からの時間帯ならきつと優位なポジションに展開できるし。でも主計妖精さんに怒られるから出来るだけ無駄弾を撃たないようにしよう。無論、弾薬消耗を躊躇って皆を傷付ける訳にもいかないから、努力目標で」

『これから夜になりますからね』『上手くやれば奇襲出来て雷撃一斉射にて敵艦隊撃滅出来るかも?!』『ハイハイ、妄言吐く妖精さんは再教育しちやおうね』『御免なさい御免なさい! つい口走っただけで本当にそう思っではいけません信じてください!』『:あ、あいつ首根っこ捕まれた』『再教育場にしまっちやおうね』『NOoooooooooooooooo!!!』

『・・・全く。これから夜戦になるのだから身体を少しでも休めて置くべきだというのに、

わが艦の妖精さんたちと言ったら……」

「……ふふっ」

『……艦長? どうしました?』

「……なんでもない、なんでもないよ」

……始めはウイルキアが存在しない事に絶望したりもしたけど、妖精さんと一緒に、うん、大丈夫。『桜風』は、これからも勝ち続けていける……!」

「副長」

『はっ!』

「これからも、勝ち続けよう。誰が相手でも、何が相手でも。絶対に」

『……もちろんです!』

駆逐艦『桜風』の艦橋で、妖精さんたちが大騒ぎをする中、この光景を絶対に守ると誓う『桜風』と、その声に力強く答える副長。日が水平線の向こうへ没する中、艦旗として掲げられている『ウイルキア王国旗』が、夕日の光を浴びて美しく輝いていた。

## 第六話 暗き黄泉路の月明り、桜吹雪は舞い踊る

「・・・また、ですね」

「今度は正規空母・・・しかも、これは姫級？」

「艦載機の残骸が・・・こんな、に、たくさん・・・」

『『桜風』救援艦隊』の面々は、またもや海面に浮かぶ深海棲艦の残骸の山に遭遇して困惑していた。これまで彼女たちは出撃してから一度も深海棲艦に遭遇しておらず、しかし航路上には無数の『元』敵艦の姿が有った。深山提督と連絡を取り、他鎮守府の艦艇が来ていないか尋ねても『現在今海域に存在する艦艇は『桜風』と貴方達だけ』と言う事であり、他提督指揮下の艦娘の所業と言う線は消えた。上層部に黙って艦娘を出撃させた場合、同士討ちの可能性も少なからず有る為に基本軍法会議の後に厳罰に処せられる。独断専行でこの事をするメリットに対するデメリットが余りにも釣り合っていないのだ。

「・・・瑞鳳、『桜風』からの通信は？」



「えっと……今入った定時通信では〔我、正規空母ヲ含ム敵小規模艦隊ヲ殲滅セリ。コレヨリ現在存在ガ確認サレル敵戦艦ヲ含ム小規模艦隊ヲ撃滅後、横須賀ニ向ケ航行ヲ再開ス〕ですね。……え？え？ええー!？」

艦隊に瑞鳳の素つ頓狂な大声が響き渡る。そしてその定時通信の内容に、それぞれ違つた反応を見せた。

旗艦の大和は思わず右手で口を覆い、武蔵は『何を言っている?』と言わんばかりに口をぼかんと開け、長門は艦橋越しに本当かどうかの疑念の目を持って瑞鳳を見やり、陽炎は思わず天を見上げ、そして青葉は何も話そうとせず、静かであった。

「瑞鳳。……その通信は本当か?」

「う、うん。確かに『桜風』ちゃんからの通信です」

「長門さん。どう思います? 駆逐艦一隻で『正規空母を含む艦隊を殲滅』出来ると思えます?」

「戦艦娘である私よりも駆逐艦娘の陽炎の方が良く分かっているだろうに。常識的に考えて『不可能』だ」

「そう、ですよね……」

自分たちの常識と照らし合わせて、余りにもおかしい通信内容に思わず自らの常識を  
確認する『桜風』救援艦隊』の面々。『小規模艦隊』と言いつつ『正規空母を含む』『戦  
艦を含む』と書いて有ったり『敵艦隊を殲滅』と書いて有ったりと法螺話にも誤報にも  
限度がある内容に、陽炎や長門、武蔵、瑞鳳は『桜風』に何かあったのか、と勘違いし  
始めていた。

「・・・青葉さん？ いったいどうしたんですか、そんなに考え込んで」

「『始まりの艦娘』」

「・・・え？」

そんな中、何時もなら色々と言の輪に入ってくるであろうあの青葉が、会話に一切参  
加せずに考え込んでいたのに気づいた大和が声をかけるも、帰ってきたのは艦娘が初め  
て出現した時の事を総称した一言であった。

「深海棲艦が突然現れ、交渉も無く、会話も無く、ただただ人類の船舶を撃沈し、シーレー  
ンを破壊し、挙句の果てには陸地すらも占領し始め、しかし人類の兵器は一切の効力を  
見せず、このまま人類は滅亡するかと思われた時に、予兆も無く、前触れも無く唐突に  
現れて人類側に立ち、戦いだした駆逐艦娘・・・」

「今では『初期艦』と呼ばれ、提督となった新米少佐の元に必ず配備される『吹雪』『叢雲』『五月雨』『漣』『電』の五人の事ですね。・・・その、一番初めの彼女たちが、一体何か？」

「大和さん。そっくりなんですよ、『桜風』さんが現れた状況と『始まりの艦娘』とが。彼女との通信内容から、駆逐艦『桜風』は『自沈処分後、気付いたらこの海にいた』と言っていました。そして最初に接触した私たちは一度も深海棲艦と交戦していませんでした」

「・・・確かに『前触れ無く唐突に現れた』と言う点では同じかもしれませんが」

「『始まりの艦娘』が現れた後には、軽巡洋艦娘や正規空母娘、戦艦娘らが現れ始め、それに合わせる様に深海棲艦も強力になってきたと言います。もしかしたら、彼女が・・・『桜風』が、この世界に現れたのは、なにか深海棲艦を超える脅威が・・・」

「青葉さん！『桜風』ちゃんから通信！」

真剣な表情で考察する青葉の思考を遮って、瑞鳳が大声を上げる。『始まりの艦娘』と『桜風』の共通点の考察は取りあえず脇に置いた青葉と大和は、艦隊の皆と一緒に、瑞鳳

から各艦に転送された電文を読み……

【我、駆逐艦『桜風』。敵艦隊ト接敵。コレヨリ交戦ス。尚通信解読ニヨリ、敵旗艦ノ秘匿呼称ハ『戦艦棲姫』ナリ】

——すべての思考を、硬直させた。

『……艦長。そろそろ』

「ん、分かった。……さて、『ナイトビジョン』作動。照明弾や探照灯はまだ使用しない。可能な限り敵艦隊に近づいてから」

『了解!』

『皆を必ず守る』と決意をしたあの時より暫くしてから、副長から『少しでも良いので休んでください』との進言を受け、『桜風』は艦長席に座って傾眠していたが、そろそろ交戦海域に入る為に砲術妖精に起こされ、即座に覚醒して戦闘指揮に入った。何時の

間にやら『桜風』には『戦闘中、若しくは近く戦闘が起きる場合は精神、肉体共に常在戦場状態になる』と言う特性が備わっていたようだ。人の身を得てから一日も経っていない上に総数わずか二回しか戦闘を経験していないというのに、だ。駆逐艦『桜風』の妖精さんもそうだが、『桜風』自身も大概並外れて優秀である。本人は比較対象が存在しない上に人の身体を得てから殆ど時間が経っていないこともあって自身の事をサツパリ分かっていないが。

「・・・やっぱり『デジタルビジョン』と比べると、相当見難いね」

『何も無しよりはよっぽどマシです』『真つ暗闇の中敵艦の発砲煙や光とレーダーからの位置情報だけで砲戦するよりかは・・・』『個人的に『サマールビジョン』よりこっちの方が見やすい気がする』『緑の世界って、植物のように心が落ち着いて、なんだか、素敵・・・』『正気に戻らんとまた再教育喰らうぞお前』

『桜風』と妖精さんが話す目線の先には、艦橋の防弾窓ガラスに『ナイトビジョン』が作動したために、ガラス越しに見える辺り一面が緑と黒で映し出された海上の様子が映し出されていた。『デジタルビジョン』を使用していた過去と比べると余りにも不鮮明で頼りない光景だが、少なくとも『ナイトビジョン』を使用していないと本当に真つ暗闇

でも見えない為『無いよりマシ』と言う理由で使っているという『ナイトビジョン』に對して手厳しい扱いだった。

「・・・そうだ、通信手。さつき空母の瑞鳳さんに返した電文の返答つて来た？」

『はい、先ほど。・・・【危険だから撤退しろ】だの【空母部隊を本当に殲滅したのか】とかそんなんでしたけど』

「なにそれ。【危険だから撤退】【本当に殲滅】とか・・・。たかが6隻程度、しかも通信暗号もあんなにお粗末な艦隊がそんなに危険な訳無いし、しかも【本当に殲滅】って：私たちが嘘付く理由、これっぽっちも無いのに」

『やはりポット出の自分たちの言葉は信頼されていないんでしょうねー』

「じゃあ余計に無様な戦いは出来ないね。この世界の日本に對して多少なりとも発言力を得るためにも、今から戦う敵艦隊には一艦残らず沈んでもらおう」

『勝利条件は『敵艦隊の殲滅』。副目標『自艦艇の損傷を最低限に抑える』ですね』

「そういうこと」

『桜風』救援艦隊からの通信をいい感じに変な風に解釈する『桜風』と妖精さんたち。この世界に関する情報が不足するにも甚だしい為に、『超兵器』が存在した自分たちがいた

世界の常識で考えているのである意味仕方が無いのだが。

『・・・艦長！気付かれました！敵戦艦隊発砲を確認！』

「あーあ、バレちゃったか。一応こっちは灯火管制していたのにね」

『レーダーの逆探に引っかけましたので、奴さんも最低限のレーダー装備は有るようですね』

「そう。でもミサイルやレールガン等は搭載してないみたいだね。搭載して居るのは通常の艦砲だけか」

『しかも装填速度がかなり遅いみたいで未だに二射目が確認されておりません。と言うかなんかミサイルも荷電粒子砲も撃つてこない空母も戦艦と一緒にこっちに向かって突撃して来ているんですけど』

「艦載機発艦させているのを見ると、少しでもこっちの攻撃を阻害するのと、あとは最悪旗艦の盾になる事でも考えているんですよ。まあどっちにしても全艦纏めて撃沈するんだから、逃げ出したのを追いかけてすむと言う意味でむしろ手間が省けて有りがたいんだけどね」

そう言いながら『シユルツ大佐』が被っていたのと同じデザインの海軍帽を被りなお

す『桜風』。その脳内では『如何に自艦艇の損傷を抑えるか』『弾薬消費量をどう抑えるか』と言った事しか考えておらず、『敵艦隊の殲滅』は、すでに『桜風』とその妖精さんたちにとっては完全に確定事項だった。

・・・キタワ・・・前衛艦隊ヲ殲滅シタ・・・『駆逐艦』ガ・・・

一方『桜風』に相当前から暗号解読とリーダーによって完全に捕捉されている事など夢にも思っていない『戦艦棲姫』を旗艦とする『侵攻部隊主力艦隊』は、前衛として配備されていた『侵攻空母機動部隊』旗艦の『空母棲姫』から送られてきた最期の情報を元に、『戦艦棲姫の視点での』万全の迎撃態勢を整えていた。夜間飛行が可能な空母ヲ級 flag ship が装備する新型艦載機を爆装状態で偵察に出し、装備する電探を最大出力にして何時でも遠距離砲撃出来る様にして辺り一面を探查していた。本来ならば『たかが駆逐艦一隻』相手にこれほどまでに過剰な対処はしないのだが、空母棲姫からの最期の通信が、このような細密な探索をさせる結果となっていた。

・・・『最大速度50ノットで駆け回り、自立誘導型のロケット弾を大量に撃ち放ち、



異常な連射力を持つ主砲と魚雷発射管を持つ駆逐艦』……。空母棲姫、貴女ガ伝エテク  
レタコノ情報、無駄ニハシナイ……

戦艦棲姫と空母棲姫には、本当はそこまで深い交わりが有った訳では無い。むしろ深海棲艦の特性として常時離散集合を繰り返す為、例外的に存在するごく一部の存在を除けば、細かい連携を取れる様な深い交わりを持つ深海棲艦は居なかった。だが基本的に『姫級』や『鬼級』は高い知性を持ち、機械的に自らの役割を良くこなす性質が強い。『ふざけて適当な電文を味方に送る』ような人間的でおちやらけた行為は有り得ない為、この常識外れの電文は事実だと考えられた。

……ダガ、我等ノ砲撃力ヲ侮ツタノハ失策ダツタナ。T字優位ノ陣形テ放タレル『1  
6 i n c h 三連装砲』計27門ノ大火力ヲ、ソノ身ヲ持ツテ味ワウガ良イ……！

だからこそ、戦艦棲姫は慢心も油断も無く、暢気にこちらに向かつてきている『敵駆逐艦』に対して、考えられる限り最良の状態での戦闘を挑んだ。一般的な深海棲艦の戦艦部隊が行うような砲撃修正の為の交互撃ち方ではなく、自らの速度を頼みに初めから全門射撃するなど、仮に交戦相手が高速度の戦艦娘であっても、何らかの損傷を受ける

事は先ず間違ひなかつたであろう。

—— 深海棲艦の『侵攻部隊主力艦隊』にとつて唯一不幸だったのは、今対決している駆逐艦が『総数100隻を軽く超える敵艦の群れや単騎で数個艦隊を殲滅できる化物兵器と毎回単艦戦闘で勝利してきた戦歴と記憶持ち』だった事だろう。

深海棲艦の戦艦砲の発砲を確認した直後より、駆逐艦『桜風』より照明弾が射出。打ち上げ花火のように天高く舞い上がったのちに、闇夜をそれなりに照らす人工の太陽となる。最近の精鋭艦娘が夜戦に挑む際の常套手段である為、戦艦棲姫や戦艦ル級fighterは特に何も感じなかったが、その直後に『敵艦に張り付いていた機体が全て撃ち落された』と言う報告が飛び込んでくるにあたり、俄かに風向きが狂いだした事を、深海棲艦は本能で感じ始めていた。

・・・敵艦ノ発砲光ヲ確認！

・・・敵艦ヨリ飛翔体ノ射出ヲ確認！

・・・観測機、爆撃機ノ通信途絶！

旗艦の『戦艦棲姫』が必勝の念を込めた布陣と戦法は、いきなり前提条件とその初期段階から崩壊し始めていた。

『艦長、レーダーから敵機の反応消失を確認！』

「了解。砲術妖精、照明弾は適時発射するようにして砲戦用意。通信妖精、敵艦隊の暗号を受信したら即座に解読して艦橋に報告。主計妖精は砲弾使用量の確認と報告。あとはいつも通りに」

『了解！』

さて陣形としては駆逐艦『桜風』は、深海棲艦に対してT字不利と言った状況ではあるが、そもそも昔から単艦で陣形も何も無しに戦ってきているので実質誰も気にしてない。そもそも『桜風』は敵艦隊に対して20ノット以上の優速である為、戦闘の主導権は『桜風』の方が有している状況だ。『桜風』も妖精さんも、敵艦隊が整然と一列に並んで砲撃しているのを見て『反航戦で雷撃戦を行った方がいいかな？』と平然と考えられている始末である。

『・・・しかし、敵艦隊は全門斉射していると言うのに、命中弾どころか至近弾すら出てきませんね』

「こっちは電波妨害装置もE C Mシステムも搭載していないのにね」

そしてここでも、駆逐艦『桜風』と深海棲艦との常識の差が露呈する。『桜風』にとっては、艦砲は『敵味方共に捕捉した敵艦に発砲したら確実に標的の周囲に着弾する』物であり、『交互撃ち方や観測機などで弾着修正を繰り返し替えて敵艦に命中させる』物では無かった。深海棲艦にとってみれば『50ノットで疾走し、殆ど速度を落とさず激しい回避運動を繰り返す大型駆逐艦』への戦闘経験は皆無なのだから仕方が無いが。

・・・ナンダ!?ナンナンダアノ艦ハ?!何故転舵シテモ一切速度ヲ緩メズニ航行出来ルノダ!?

だからこそ、至極当然ながら、戦艦棲姫は大きく動揺した。空母棲姫からの最期の電文に基づいて艦隊を展開し、会戦したのに、相手は自分の常識を何処かに吹き飛ばす速度と旋回性能でガンガン自艦隊の先頭に潜り込もうと急速に距離を詰めてきていた。

だからこそなのだろうか、本来は圧倒的大戦力を目の前にしても恐怖を感じずに無機質に沈みきるまで戦い続ける深海棲艦が『怖い』と、『逃げたい』という、今まで感じた事のない感情を抱き始めていた。

・・・駆逐隊！イマスグアノ敵艦ヲ沈メテコイ！

自らに襲い掛かる恐怖を振り払うように、戦艦棲姫は護衛として付いていた『駆逐二級後期型』二隻に対して、駆逐艦『桜風』に対して攻撃命令を下す。命令を受けた『駆逐二級後期型』は、『姫級』や『鬼級』は勿論の事『戦艦ル級』や『空母ヲ級』のような人型の依代を持つ深海棲艦とは違って言葉を話せず、余り高い知性を持っていない事もあり、恐れる事無く命令一下勇躍『敵駆逐艦』に向けて突撃を開始した。

『艦長、敵駆逐艦がこちらに向かってきます』

「砲撃で」

『はっ！』

それに対する『桜風』の反応は極めて簡潔であった。『酸素魚雷もミサイルも持つてないような旧式駆逐艦に魚雷は勿体無い』と言わんばかりに、砲撃で沈める様に命令し、妖精さんもその命令を受諾した。まさしく長年付き添った夫婦のように以心伝心である。

『桜風』と妖精さんが現界してから一日も経過していないというのに。

砲撃命令が下されてからの砲術妖精の動きは素早かった。『桜風』自身の手伝いも有って瞬時に『駆逐二級後期型』に対して、船体前部に配置された『15・5cm75口径4連装砲』4基合計16門が瞬時に狙いを定め、何も知らずに突撃してくる『駆逐二級後期型』に砲撃を開始した。その砲撃音は、まるで『祭り太鼓を連打している』かのようだった。

哀れな『駆逐二級後期型』は、自艦の装備する『5inch連装砲』の最大射程を遥かに上回る遠距離から『15・5cm75口径4連装砲』を一隻当たり数秒で5斉射80発も撃ち込まれ、反撃どころかなにか具体的な行動に移ることも何も出来ずにその船体を撃ち抜かれ、あっさりと爆沈した。

『・・・脆いです』

「分かってた」

なんだろうか

——自分たちが元々いた世界と比べると、なんとこの世界は平和な軍艦が敵

『桜風』と妖精さんは、三度経験したこの世界での戦いで、そんな感慨深い溜息を吐いていた。

・ ・ ・ナンダアイツハ!? ナンナンダアノ化物ハ?! アノ主砲ノ連射速度ハナンダ!? アノ威力ハナンダ!? アイツハ一体何者ナンダ?!

一方目の前で迎撃に向かわせた『駆逐二級後期型』が、まともに交戦する事も出来ずに一瞬で撃沈され、その間も『戦艦棲姫』と『戦艦ル級flagship』が撃ち込む『16inch三連装砲』は敵艦の回避運動によつて命中どころか至近弾すら些少な状態である上に、どういう訳かその主砲を一発もこちら側に撃ち込んでこない『敵駆逐艦』に対して、『戦艦棲姫』はそれまでの不敵な笑みを携えた仮面をかなぐり捨てて、本気で敵駆逐艦の『桜風』に対して『恐怖』の感情を抱いていた。本来憎しみに狂い、たとえその身がどうなろうとも敵を沈めようとする深海棲艦がここまで恐れ、恐怖するのは有り得ないのだが、憎しみに狂った感情が強制的に恐怖で塗り潰されるだけの常識外れの駆逐艦『桜風』の動きが、『戦艦棲姫』に無理矢理『恐怖』の感情を呼び覚ましたのだ。

……イヤダ……クルナ……クルナクルナア……！  
 ……主砲装填イソゲ……アイツガ……アイツガクル……！  
 ……ドウシテ……アンナ艦ガココニイルノ……！?

そして、恐怖は伝染する。戦艦の重装甲でも、さすがに駆逐艦の雷撃には叶わない。敵駆逐艦が魚雷発射管を備えている事は、既に全機撃ち落されている偵察機からの報告で艦隊の全員が知っていた。例えば敵艦の魚雷が空気魚雷であったとしても、ここまで接近された以上大損害は不可避である。そも今となつてはそんな事はいつでもいいのだが。

……? 敵艦ガ……艦隊ヲ追イ抜イタ……?

統制射撃の為に速力を落としていた『侵攻部隊主力艦隊』の目の前を掠める様に横切つて高速で離れていく敵駆逐艦。丁度射撃可能だった『戦艦棲姫』の前部主砲6門が一斉に発射されるも、敵艦は『まるで未来が見えていたかのように』細かく転舵を繰り返して砲撃着弾点の隙間を縫つて航行し、一発も当たる事は無かった。



．．．我等二恐レヲナシテ逃ゲタ．．．？．．．モシヤ、兵装弾薬二不調ガ．．．？  
当然そんなわけがない。だがそんな希望的観測に頼つてしまふほど、この時の『戦艦  
棲姫』は精神的に疲弊し、追い詰められていた。そしてその希望的観測は、電探が『反  
転し反航戦で突入してくる敵駆逐艦』を捉えた事で完全に潰された。

『イイワ．．．ナンドデモ、シズメテ．．．アゲル．．．シズミナサイ！』

『逃げられない』事で完全に開き直つた『戦艦棲姫』の鶴の一声で、指揮下に有つた『戦  
艦ル級flagship』二隻と『空母ヲ級flagship』は、先ほどまでの恐慌  
状態から一瞬で立ち直り、それぞれ主砲、副砲のみならず機銃や高角砲すらも砲撃準備  
に入る。『勇将の下に弱卒無し』とは古来より洋の東西に関わりなく伝え聞く格言だが、  
この時の『戦艦棲姫』率いる『侵攻部隊主力艦隊』は、正しくその格言通りの艦隊だつ  
た。

『敵艦隊、一切変針せずに直進してきます』

「OK。これなら無駄弾を少なくできそう」

『・・・艦長。相手さん、通信からしても凄い悲壮な覚悟を決めています』

「そんなのにこちらが付き合う義理は無い。とつとと全艦沈めて横須賀に向かおう。だ  
いぶ寄り道したからね」

そして雷撃戦に移行しようと準備していた駆逐艦『桜風』では、文字通り命を賭して  
も一矢報いようとしている深海棲艦の通信を傍受した通信妖精がその事を『桜風』に伝  
えるも、その『桜風』は『深海棲艦の覚悟』に対して全く興味を示さず『極めてどうで  
も良い』と言った反応だった。

「・・・どうしたの？私、何かした？」

『いやあ・・・そのお・・・』『なんと言いますか・・・』『ちよつとは哀れんでも良いの  
では・・・』『なんか艦長、戦闘状態に入ってから雰囲気変わりましたね』『そうそう。日  
本刀みたいに鋭い雰囲気になってます』『戦闘前は凄く柔らかい雰囲気でしたのに』『性  
格豹変してます？』

妖精さんが自身に対して変な目線を向けている事に気づいた『桜風』が問いかけるも、

妖精さんからは戦鬪前と比べて相当冷たくなった物言いや雰囲気に対する感想が返ってきた。

「・・・別に変わったつもりは無いんだけどなあ。それより、今は雷撃戦」

『了解しました!』

深海棲艦の鬼気迫る心理的状况とは正反対に気の抜けた会話がなされている駆逐艦『桜風』。戦場にいるというのに余りにも緊張感が無いが、正直対『超兵器』戦どころか通常の艦隊戦と比べても、余りにも今回戦った敵艦隊は攻防走そして物量全てに置いて『桜風』に対して圧倒的に戦力的劣位だった。緊張感を持つと言う方が無理である。

「・・・さて、と。それじゃこれで今海戦は終了ね。雷撃、始め!」

威勢の良い『桜風』の掛け声と共に、艦尾側に搭載して居る『61cm7連装酸素魚雷』を『連続で』『敵艦隊の進行方向に』無数に射出し始めた。

・・・コンドハナンダ!?

指揮官先頭概念に則ってなのかどうかは分からないが、自然と『戦艦棲姫』が先頭で突撃していた『侵攻部隊主力艦隊』だが、反航戦で突っ込んできていた『敵駆逐艦』が、

突如離れた。もはや敵駆逐艦の行動の一挙一挙が何かしらの罠にしか見えなくなるほどに疑心暗鬼になっていた『戦艦棲姫』だが、不幸にもその『敵駆逐艦』からずつと目を離さずにいたためか、本来探照灯で照らしていても夜間では先ず見える事は無いはずの『酸素魚雷』の雷跡が見えた。『見えてしまった』。その、無数としか表現できない量の魚雷の痕跡が。

「・・・シズマナイワ・・・ワタシハ、モウ・・・ニドト・・・！」

『死神の鎌』として自身の喉元に迫りくる無数の『61cm酸素魚雷』の存在に、『戦艦棲姫』が最期の絶叫を挙げた直後、総数十本を超える酸素魚雷が命中。水柱と爆炎が収まった時には、『戦艦棲姫』も『戦艦ル級flagship』も『空母ヲ級flagship』も、全てが海面から姿を消していた。

「よし、敵艦隊の殲滅完了つと」

『お疲れ様でしたー』『あとは横須賀に向かうだけですねー』『主計妖精、弾薬の消費量は

？』『十分許容範囲内だと思えます。皆さん、艦長、お疲れ様でした』『被弾も無しで終えられましたねー』『何回か危ない場面もあったけどな』

戦闘終了しても、する前と対して雰囲気が変わっていない駆逐艦『桜風』艦橋では、この世界で初の対戦艦戦を終えた事でそれぞれが労を称えあっていた。

『艦長、お疲れのところ申し訳ありませんが、空母『瑞鳳』が所属している横須賀艦隊から電文が入っております』

「あー、やっぱり怒ってるかな？勝手に敵艦殲滅した事。でもある意味正当防衛だし……」

戦闘が終了したとたんに、先ほどまでの鋭い雰囲気は掻き消え、何時もの『ほんわか艦長』へと戻ったことに少なからずの妖精さんが安堵する中、通信妖精より『横須賀艦隊からの電文』が読み上げられた……

## 第七話 横須賀軍港の異色の艦隊

横須賀鎮守府第3海上部隊所属『深山艦隊』。この艦隊はある意味異色の艦隊である。『提督が女性だから』と言う理由だからではない。現在の提督の割合で言えば、男女割合はおおよそ6対4で、適正によつて艦娘の指揮が行えるかどうかは男女関係なく決まる為、本来男社会であるはずの軍隊に多数女性が入隊するのは必然だった。そうしなければ深海棲艦との圧倒的戦力差の前に屈してしまうからだ。故に『女性提督』と言う存在自体は日本全土の鎮守府、そして東南アジアに現地政府との交渉の結果間借りする形で置かれているそれぞれの泊地には、少なくとも数の『女性提督』がいた。

では何が『異色』なのかと言うと、その『艦娘の運用方法』である。具体的に言えば通常の出撃や遠征に加えて『国内や近隣海外まで移動する民間船の護衛』や『底引き網を使用しての漁猟』『民間のイベント出演』果てには『放棄された離島へ一時帰島する民間人の護送』『人類兵器との連携の模索』等々……。本来『提督』がする必要が無い、または本当は深海棲艦が出現してから『自衛隊』から『自衛軍』へと昇格した自衛海軍や、平和団体や一部国会議員による妨害にて自衛隊の出撃が遅らされてしまった中、民

間人を守るために最前線に居させられた末に多大な犠牲を払った海上保安庁などの他部署の職域に対して、『深山提督』の艦隊に属する艦娘は多数入り込んでいた。

その為、深山満理奈少将率いる艦隊は、自らの指揮する艦娘だけが世界の敵である『深海棲艦』を撃滅出来る事に『我は世界の救世主である』などと勘違いして傲慢に自惚れた提督たちからは白眼視されている状態だった。『上層部に取り入って本来の仕事もせずに艦娘を遊ばせているお遊戯艦隊』と陰口を叩く陰湿かつ陰険な提督もいる具合に。ただ基本そういうような提督に限って艦娘を必要以上に束縛していたり、憲兵の目から隠れて酒色に溺れていたりと、ちまちまと横領を重ねていたり、指揮下の艦娘からは最低限の接触以外拒否されるレベルで嫌われていると言っているような艦隊指揮以外は最低レベルの質の小物揃いなので、当の深山満理奈提督はそう言った雑音は馬耳東風で適当に聞き流していたが。

そしてその異色の艦隊を率いている深山提督は、駆逐艦『桜風』が巻き起こした『深海棲艦精鋭部隊殲滅事件』の後始末・・・と言うより上層部への事情説明をする為の情報を得るために、現在横須賀軍港に寄港している『桜風』の元に歩いて向かっていた。現在重巡洋艦『青葉』が『取材』と言って駆逐艦『桜風』の艦橋に押しかけているそうだ

が、やはり人伝えよりも直接話した方が『桜風』の人となりも把握できるために、わざわざ将官だというのに自ら出向いて言ったのだ。昔から変わらないこの自然体の誠実さを、先ほど述べた様な小物連中は『あるべき分を弁えない小心者』等と嘲笑っていたが、この誠実さを軍部や政府上層部、それに『適正持ち』と言う事で半強制的に艦娘を指揮する『提督』へとなった民間人上がりの中でも、歪んだりせずに『提督』として成長出来た者、そして国防、国民のために行動を共にした自衛海軍や海上保安庁が高く評価したり、頼もしく思ったりもしている。その為小物が深山提督に対して何かしらの行動を起こそうとしても、その大体は事前に封殺されている。提督たちだけで無く、指揮系統的には上位の自衛海軍、そしてその対深海棲艦戦での経緯から、国民からの評価も高い海上保安庁からの『深山艦隊』への支持もかなり強いのだ。

「……ごめんなさい提督。また青葉のわがままで……」

「古鷹が謝ることは無いわよ。それに、青葉は駆逐艦『桜風』と最初に接触した艦娘の中でも一番自然と相手の懐に入り込むのが上手だから、きつと大丈夫よ」

「提督……ありがとうございます」



そんな『提督』の一定数以外からは高い支持を得ている深山満理奈少将は、本日の秘書艦だった重巡洋艦娘『古鷹』と共に、駆逐艦『桜風』が寄港した港へ向かつて歩いていた。因みにこの古鷹と深山少将との付き合いは大分長いもので、深山少将がまだ新米少佐だったころに、青葉と一緒に建造された艦娘である。つまり青葉も古鷹も『深山艦隊』の中でも相当な古参の艦娘と言う事だ。

「・・・提督」

「どうかした？古鷹」

古鷹からの声掛けに首を僅かに傾げながら横を向く深山提督。年齢は既に二十歳を過ぎていくというのに、まるで高校生のような柔らかさを意識せずに見せる彼女に対して、古鷹はこう問いかけた。

「その・・・『桜風』さんは、いったいどのような娘なんでしょうか？」

「青葉や瑞鳳が言うには『芋っぼさが完全に抜けて成長した、肩まで伸ばした黒髪を一纏めになっている吹雪』らしいよ」

「・・・ぼんやりとは想像できませんでした」

芋っぼさの無い吹雪ってそれ吹雪と言えるのだろうか。そんな風に深山提督が考えている事が目で分かった古鷹であったが、きつと艦隊の皆が同じ事を思う事は想像に難くなかったもので、とりあえず黙っておくことにした。

「大きい・・・」

「近くで見ると、これは凄いね」

「・・・提督」

「どうしたの？」

「私より『駆逐艦』である彼女の方が、船体が大きくありませんか？」

「・・・そうかもしれないね」

そうこうしているうちに、深山提督と古鷹は駆逐艦『桜風』が投錨している棧橋へと到着したが、初めて写真ではなく近くで『桜風』を見る二人は、まずは船体の大きさに圧倒された。『駆逐艦』と言うのもっとこじんまりとした艦艇を想像していたが、実際

には古鷹型重巡洋艦を圧倒する威圧感と大きさを誇っていた。まあ古鷹型は史実でも改装後でも基準排水量が僅か8,700トンしか無いのだから、15,000トンを超える『桜風』と比べても仕方が無いのかもしれないが。

「提督。あれはなんですか?」

「『RAM』だね。近接防空ミサイルって言って、1980年代末頃に開発された兵器」

「・・・あの、提督?」

「古鷹の抱いている疑問に関しては多分私も持つてる。写真で見ているとはいえ、本当に目の前に実物が有るとね・・・」

背負い式に船体前部と後部に積み上げられた15.5cm 4連装砲4基。計4基搭載されている対潜ロケットランチャー。艦尾に二基有る7連装魚雷発射管。素人目でも最低20世紀末から21世紀レベルと見受けられる電子艙装。そして甲板の隙間と言う隙間に敷き詰められた大量の40mm 4連装機関砲とRAM。古鷹はもちろんの事、個人の趣味レベルとは言え艦艇の事は小さいころから調べてきていた深山満理奈にとっても、こんなチグハグな艦艇は記憶の何処を探しても存在しなかった。

・・・『ウィルキア王国海軍』・・・か。突拍子もない考えだけど『彼女』は『異世界』の軍艦と考えるのが自然かな・・・

最初に接触した瑞鳳からの報告に有った正体不明の国家。『桜風』はこの国家の近衛海軍に所属していたという。王室直属の海軍と言うものは、深山提督たちがいるこの世界ではどうの昔に途絶えて久しい。

「・・・古鷹」

「はい」

「絶対に『桜風』を、私たちの仲間に取り入れるよ」

「・・・分かりました！」

自分は別に聖人君子と言うような大層な存在ではない。『桜風』が辿ってきた過去も知らないし、『桜風』がどうしてこの世界に来たのかだって見当もつかない。だが、少なくとも『あの連中』の所に行くよりはよっぽど私の艦隊に所属する方が、『桜風』にとつても、『日本』にとつても、そして『世界』にとつても、ベストとは言われないがベターな選択肢だとは思う。

深山満理奈少将は、自らが『桜風』に出せる条件を頭の中で組み上げながら、『桜風』が自分の艦隊に入ってくれるように説得する材料を整え始めていた。

「分かりました。では私、駆逐艦『桜風』は、これより貴官の艦隊指揮下に編入させていただきます。これからよろしくお願いしますね、深山提督」

「・・・い、良いの？そんなにあつさりと即断しちゃって」

『袖振り合うも多生の縁』。自沈後この世界に生まれた私が、貴官の艦隊と最初に接触

出来たのも、何かの良き縁でしょう。青葉さんと話をしましたが、深山提督の所は居心地がよさそうですね」

・・・それに、態々戦艦3、重巡1、駆逐艦1、空母1の艦隊を『駆逐艦1隻の為に』救援に出すような人が、悪い人間とは思えませんね。

そう言つて深山少将の艦隊帰属要請に即時に『是』と答えて、深山少将が困惑するのを見て、『桜風』は笑いながらそう答えた。『桜風』とその妖精さん達は、寄港後直ぐに乗り込んできた青葉との会話と深山満理奈少将の物言いや雰囲気から、彼女を信頼できる人間だと判断していたのだ。無論危害を加える様な人間だったら即座に逃亡出来る様に機関はさり気無く稼働状態にしていたが。

「・・・ありがとう。『桜風』。今は艦隊の主力がミッドウエーやアリューシャン方面に居るから無理だけど、何時かみんなと一緒に歓迎会開くからね」

「え、別にそんな大仰にしなくても・・・」

「何言つてるんですか『桜風』さん！今回貴女が成し遂げた戦果は本当なら新聞の一面記事だったり勲章が・・・」

「ねえ青葉？」

「・・・ふ、古鷹さん？ど、どうしましたか？」

「正座」

「・・・え？」

「勝手に『桜風』さんの所に押し掛けて迷惑かけたんです。少しは反省しましょう？」

「・・・いつもこんな感じなんですか？」

「・・・まあ、ね。『桜風』はこういう雰囲気、嫌い？」

「・・・いえ。なんだか、とても楽しそうです。」

邂逅して数十分と経たないうちにアイコンタクトを交わす深山提督と駆逐艦『桜風』。その目線の先には正座させられた青葉を何時もの如く説教する古鷹の姿が有った。

尚余談だが、駆逐艦『桜風』の燃料弾薬を補充した明細書を見た深山提督は、その明細書と明細書を持ってきた明石と夕張を二度見したという。

## 第八話 『桜風』の第3海上部隊駐屯地見学会 《工廠

編》

「では『桜風』さん！今からこの不肖、重巡洋艦娘の『青葉』が第3海上部隊の駐屯地の案内を務めさせていただきますね！」

「は．．．はい。宜しくお願ひします。．．．あの、青葉さん？」

「なんですか？」

「あの．．．さつきから桃色の髪の人と緑髪の人が、私の『艦艇』をずっと見ているんですけど．．．」

「工作艦娘の『明石』さんと軽巡洋艦娘の『夕張』さんですね。二人とも工作や兵装関係の事が好きなので、『桜風』さんの搭載している兵装に興味があるんでしょうね。．．．大丈夫です！あの二人は悪い人では有りませんって！」

———そう言われても、あんなに穴が開くまで艤装や船体を見つめてスケッチしているのを見ると、凄い空恐ろしさを感じるのですが．．．



『心配しなくても大丈夫』と笑顔で力強く断言する青葉だったが、実際にエンジン系女子に熱い視線を注がれている『桜風』にとつては、艦娘として発現して三日も経つておらず、また直接『他人と関わる』と言う事が初めてと言う『海戦』以外の経験値が壊滅的に低い事もあつて、『明石』と『夕張』に芽生えた苦手意識は早期に払拭は出来なかつた。まあ誰だつて『桜風』と同じ反応を取つたとしてもおかしくは無いが。

古鷹による青葉の説教が終わつた後、深山提督はその古鷹と一緒に駆逐艦『桜風』の事を報告する為に、艦隊上層部に報告に向かい、『桜風』には『これからは貴女の家となる、私たちの艦隊を一回りして見てきた方がいい』との事にて、『桜風』の船体を調査兼燃料弾薬の補充のためにドックに入渠させた後、この艦隊の先輩たる青葉と一緒に一回りする事になった。明石と夕張が『桜風』の船体を嘗め回すように見つけて調査していたのはこの為である。決して私利私欲『だけ』で動いた訳では無いのだ、とは事情聴取で得られた二人の本人談である。

「まずは入渠ドックや建造ドック、兵装開発部があるここ、工廠ですね。青葉やさつき『桜風』さんが会った古鷹さんはここで建造されたんです」

「・・・『さんは』と言う事は、それ以外の所からも・・・えーつと、艦娘が来ているんですか？」

「そうですね。青葉たちのように建造で司令官の所にくる艦娘もいれば、深海棲艦を沈めて、その結果艦娘を『解放』して、艦隊に配備されるというパターンもあります」

「へえー。そうなんですか・・・でも、私が深海棲艦を沈めた時は、特に何も起きませんでしたよ？」

「基本的に深海棲艦を沈めても、どんな艦娘が来るのかは完全に『運』ですからね。凄い強い艦娘が連続してくることもあれば、駆逐艦娘すらも『解放』されない時もあります。因みにこれは建造でも大体同じです。資源投入量である程度建造する艦娘を調整出来たり、少なくとも建造失敗する事は無いみたいですけど」

「・・・不安定な戦力補充ですね」  
「ですね」

艦橋での話に加え、ドックまでの移動中に深山提督や古鷹、青葉の三人から『桜風』は、この世界の事を掻い摘んでだが教えられた。駆逐艦『桜風』の辿った航路とはかけ離

れた道を辿ったこの世界の歴史の流れの事。予兆も何もなく現れた深海棲艦の事。史上初と言える全人類の総力を挙げたシーレーン防衛作戦が無残にも一月と持たずに崩壊した事。日本の自衛海軍が深海棲艦と絶望的な海戦を行っている最中『始まりの艦娘』が現れた事。その艦娘との協力で人類がどうか息を吹き返した事。現在太平洋方面はアメリカ領アラスカ、アリユーション列島、日本列島、フィリピン等東南アジアを結ぶラインで人類の防衛線が安定していると言う事。その他色々。取り敢えず深山提督たちからの情報を得た『桜風』が抱いた感想は（何か一つ切欠が有るだけで崩れ去りそうな安定度合いだな）と言う事だった。

「まあ建造の方はともかくとして、これからは『桜風』さんは何度も『開発』する事になると思いますので、その時は取材を受けてくれるようお願いしますね！」

「取材は別に良いんですけど、青葉さん。『開発』って、具体的に何するんですか？まさか設計図を引くんですか？私はやった事無いんですけど・・・」

「大丈夫です！実際にやることと言ったら、投入する『燃料』『弾薬』『鋼材』『ボーキ』の4つの資材の量を決めてボタンを押すだけですから！あとは妖精さんが直ぐに作り上げてくれますので」

やった、言質が取れました！と心中で握り拳を振り上げながら、青葉は『兵装開発で何をするか』を『桜風』に対して簡潔に答える。それに対する『桜風』の反応は『そんなので本当に開発出来るの？』と言わんばかりに疑いの目が青葉に対して向けられていた。青葉は嘘を吐くような艦娘ではない事は『桜風』は分かっていたが『そのような『遊び』のようなやり方で兵器が作り出せるのか』と思ってしまったのである。

「まあ『百聞は一見に如かず』と言いますし、実際にちよつとやってみましょう！」

「え？いや、青葉さん？流石に深山提督から指示も受けていないのに勝手に弄るのは……」

「ふふふふふ、大丈夫です『桜風』さん。青葉に手抜かりは有りません！」

そう胸を張って取り出したるは、深山提督直筆の開発命令書。まあ『桜風』は一度も深山提督の筆跡を見た事は無いので本物の筆跡かどうかは分からないが、少なくともハシコが押してある以上公文書としては問題ない物ではあるだろう。

「……何時の間に調達したんですか？」

「……実はつい先ほど司令官から、『やってみた方が慣れやすいでしょ？』との事にて」

・・・まあ、提督が良いのなら、新兵器の『開発』しますか・・・

自分の提督が思いの外天然なのか狙ってやってるのかこれが素なのか良く分からな  
い『桜風』だったが、取り敢えず指示書の通りに開発する事となった。

「回数は十回。本土居残り航空母艦用の艦載機を開発して欲しいそうですね」

「・・・青葉さん？私一応『駆逐艦』ですよ？艦載機が開発できるとは思えないんです  
が・・・」

「まあ失敗したら失敗したらでそれで良いんです！さあさあ『桜風』さん、早く開発して  
みて下さいー！」

「・・・青葉さん。単に新聞に載せるネタが欲しいだけなんですよ？」  
「ギク」

図星ですか。そう思いつつも『桜風』は指示書に書いてあった通りのそれぞれの資材  
の数値を開発機械に入力し、スイッチを押す。開発装置は丁度アイロンを天井から押さ  
え付けるイメージで、四角い鋼鉄製の箱が天井から降りてきて特注らしい白色の床と接  
地。そして金属同士を叩きつけた様な金属音が3回なったかと思うとゆつくりと天井

に向かつて戻っていった。そして『開発』された兵器を見て、青葉は顎が外れんばかりにあんぐりと開け、『桜風』は『失敗したか』と顔をしかめている姿が対照的であった。

「あ、あ、あの、あのあのあの、さ……『桜風』さん？あの機体はなんですか？」

「『陣風』です。最大速度が時速685km、航続距離2700km、武装は『40mm航空機関砲』と『30mmバルカン砲』の二つですね。夜間戦闘は可能ですが悪天候では発着艦不可。……幸先悪いですね」

「いやいやいやいや『桜風』さん何を言われているんですか?!こんな凄い戦闘機を一発目で開発するって凄い事ですよ!」

「……そうなんですか？私が元々いた世界だとレシプロ軍用機は割合早期に二線級以下の存在になっていったんですが」

なにそれこわい。日本軍機共通の識別マークである日の丸が描かれた、何時も青葉たちが見ていた華奢な零戦とは全く違う大柄な戦闘機である『陣風』が格納庫に移動されているのを見ながら青葉は呆然とそう呟いたが、一度『開発』してみても『面白そう』と感じた『桜風』は青葉に触れないまま再度数値の入力を始め、もう一度ボタンを押した。

「・・・今度は『彗星五四型』ですか」

「なんでしよう・・・青葉は、こんな爆撃機を見た事が無いんですが・・・」

そう言いながら手に持ったカメラのフラッシュを焚く青葉。基本的に『艦娘』の装備は第二次世界大戦に装備していた、若しくはする『かもしれないなかった』装備で固定されている。人類側が戦力増強を期待して艦娘用に製造した未来兵器、又はマイクロ単位のズレも無く当時の製法で製造した艦娘用の装備はどれもこれもことごとく艦娘には使用不可能であったため、『艦娘』と『妖精さん』による『開発』でしか現状では『装備』は開発製造できない状況である。その為『開発』では『艦娘』の記憶から装備を呼び出している』と言う学説が実しやかに提督たちに囁かれている。

「時速602km、最大航続距離2520km、武装は『15001b爆弾』ボンドのみで、夜間戦は可能ですが悪天候は戦闘不可。せめて初期型でも良いんで悪天候でも戦えるジェツト機が欲しいです」

「『桜風』さん。この機体でも十分に超高性能機です。具体的には『Sレアホロ』くらいには」

「と申されましたも青葉さん。正直この爆撃機そんなに強くありませんよ?」

「・・・今度古鷹さんや瑞鳳さんから艦隊の良識派を招集して『桜風』さんにこの世界の常識を教える必要がありますね・・・」

「青葉さん、私の事呼んだ？」

そう言いながらひよつこりと入口から、紅白の弓道着を着こんだ少女が顔を覗かせた。大和や武蔵たちが提督に今回の顛末を報告した後、最終的に上層部に対しても今回の航海の事を深山提督と一緒に直接報告する事になってしまい『赤煉瓦』こと再建された海軍省へと向かい、居残りを命じられた瑞鳳はする事も無かつたので何の気も無しに工廠に来たのだ。因みに同じく居残りを命じられた陽炎は精神的に疲れたらしく、自室に戻って熟睡している。

「って、うわあー！なにこの機体！スツゴイ強そうー！これ『桜風』ちゃんを作ったの？」  
そして出来立てホヤホヤの陣風と彗星五四型を見た途端に目を輝かせて『桜風』に迫る瑞鳳。双方小柄であることも相まってか、傍目から見ると完全に『欲しい玩具を見つけてウサギのように飛び跳ねながら姉にねだる妹』の図式である。

「え、あ、は、はい。そうですつい先程開発したものです」  
「瑞鳳さん。ちよつと落ち着きましたよう？まだあと8回『桜風』さんは開発するんですから、今からそんなに興奮していると倒れちゃいますよ？」

「あ……。うん、二人とも、ごめんなさい。ちよつと、今まで見た事のない機体だった



から興奮しちやった」

テヘヘ、と右手を後頭部にやって苦笑する軽空母艦娘『瑞鳳』。その姿を写真にとつて、その手の好き者を集めてオークションをしたら確実に7桁を超える値が付くであろう可愛らしい姿を見せた事にも特に大きく反応する事無く『桜風』は、じゃあ続きをやらせて頂きます。と開発を続行するのであった。

「……そして、結果がこれですか」

『桜風』ちゃん、どうしたのその浮かない顔？ 今回の開発、大成功じゃない!」

「悪天候でも戦闘可能な戦闘機や雷爆撃機が出なかつたからと言つて、そう沈まなくても……」

「……いえ、想像以上に思い通りに行かなかつた事に少々打ちひしがれただけなので、もう大丈夫です」

そう言つて俯く顔を正面へと動かす『桜風』。その目線の先には、先ほど開発した『陣

風』と『彗星五四型』に加えて『AS332』<sup>スーパービューマ</sup>『流星改』『零式水偵一型甲』『彩雲』『強風』『雷電一型』『烈風一型』『晴風改』があった。『桜風』がこの世界に現界して二日目、初めて交戦した深海棲艦を損害皆無で殲滅出来て僅かながらに調子に乗った『桜風』が始めて得た敗北感だった。直ぐに立ち直ったが。

「青葉さん！『桜風』さん！ちよつとこの装備を見たいんだけど良い!」

「私たちは開発が終わった後は、このまま駐屯地を見学して回るので別に大丈夫だと思いますけど・・・」

「そう・・・ですね。出来れば次いで良いですので・・・」

「提督への報告書でしょ？大丈夫、瑞鳳がきっちりしつかりびつちりと詳細な報告書を提出するから大丈夫!!」

・・・これは手が付けられませんね。

・・・あとは任せられた方が無難かな。

青葉と『桜風』は、航空母艦娘としての血が沸騰状態にある瑞鳳の姿を見てそうアイコンタクトを交わして『じゃあお願いします』と異口同音に瑞鳳に調査を委託した。その後瑞鳳が本当に性能表や機体の図解すらも書き込まれた書類を大量に提督に提出する事を、今のこの二人は知る由も無かった。

## 第九話 『桜風』の第3海上部隊駐屯地見学会 《艦娘

## 宿舎編》

「・・・さて、少々予定とは違いましたが、次は私たち艦娘の宿舎に行きましようか」  
「そうですね」

駆逐艦『桜風』の荒ぶる開発と瑞鳳乱入にヒートアップと言う想定外の事態が発生したものの、当初の目的通りに艦隊駐屯地を散策する青葉と『桜風』。ちょうどこの日は暖かく日差しの差す五月晴れ。『桜風』が自沈した世界の日時とこの世界の日時にはほとんど差は無かった様子で、駆逐艦だった時には海の上か港の中でしか感じる事しか出来なかったこの陽気を、今では人の依代を持って、大地を踏みしめて感じられる。

「・・・『桜風』さん？どうしましたか？」

「いえ・・・なんだか、この身体を持つまでは感じられるはずの無かった感覚が、今は一身に感じられるのが・・・」

「戸惑っているんですか？」

「はい、正直に言えば。・・・でも、とても心地よいと感じます。この暖かさや、風の感覚が・・・」

——『桜風』さんは艦娘になってから三日と経っていないんですから、もつと遠慮しなくても良いんですよ

『艦艇』から『艦娘』になり、感じるはずも無かった感覚に顔を綻ばせる姿を見せる微笑ましい『桜風』に、青葉は自然と何時もよりも輝かしい笑顔を『桜風』に向けていた。工廠から艦娘宿舎に向かう道すがら、『景観の為』として植林された木々の中で話された二人の会話であつた。

「この建物が、私たち深山艦隊に所属する艦娘が過ごしている宿舎になります」

「・・・意外と大きい・・・」

「それは当然ですよ。なにせ深山艦隊には総数50隻を超える艦娘が所属しているんですから」

「・・・ねえ青葉さん。今『50隻』とかいう不穏な数字が聞こえた気はしたんですが」「間違いではありませんよ？今はミッドウェーやアリューシャン列島方面だったり、遠

征や日本各地に派遣されていますから艦娘は殆どいませんけど」

「50隻も停泊出来るような設備は、この艦隊の領有地だと物理的に設置不可能だと思うのですが」

「・・・ああ、その事ですか。大丈夫です！私たちが艦娘は『艦艇を艦娘個人の機装に変換して収納する事が出来る』んです！なので、実際にはそこまで広い土地は必要にならないですよ」

なにそれこわい。唐突に明かされた艦娘の・・・特技？特性？に衝撃を受けて先ほど工廠で青葉が放った言葉と同じ言葉が吐いて出た『桜風』に対して『艦艇の調査が終わったら、今度やり方を』ご教授しますね！』と更なる爆弾投下をサラッと青葉は行いつつ、宿舍の案内を開始し始めた。

『宿舍』と言いつつも、実際にはプレハブ住宅の集合体だったり、そこらへんのアパート形式ではない。深山満理奈少将が女性であることもあり、艦娘と提督が一緒に過ごせるように配慮された、遠目から見ると学校のように見える体育館や運動場を備えた鉄筋コンクリート造りの建物だった。元々は初期頃の深海棲艦の侵攻で『危険である』と判断

された沿岸部に近い公立学校だったらしく、その放棄された学校を軍は接收し、艦娘宿舍と艦隊司令部を併設した軍司令部を作るべく徹底的に改築。その後民間人上がりだと言うのに今まで一度も艦娘を轟沈させる事無く、それでいて戦果を十分に挙げているばかりか、他の提督は命令されない限り決してやらないような民間人との交流や自衛軍、海上保安庁との共同作戦の模索を自主的に考え、尚且つ上層部に意見する事は有つても基本的に従順な気が強い深山満理奈大佐（当時）の手に渡つたのだと言う。因みに初期の目的だった軍司令部は政治的軍事的云々の兼ね合いもあつて東京や横須賀から長野の松代市へと移転した。

「……本当に誰もいませんね。警備とかつて大丈夫なんですか？」

「艦娘の宿舍に乗り込むような人間はさすがに居ませんねー。一応ここ、軍事施設ですし。それに警備員さんならちゃんとそこにいますよ」

玄関から入るなりそう言った『桜風』に対して、青葉は大丈夫である旨を『桜風』に伝え、また『桜風』は青葉の言葉に従つて見てみると、左腕に『憲兵』と書かれた腕章をつけた、カーキ色、若しくは橙色と表現できる色の服を着た妖精さんがこちらに向かつて敬礼していた。腰には携帯式の警棒と思しき棒を装備しているが『威圧感無いな』と思いつつも、『桜風』と青葉は返礼を行う。本来はそこまで厳格にするのではな

いが、まあ『雰囲気』と言うやつだ。

「・・・まあ、妖精さんなら侵入者がいてもなんとかしてくれますね」

「最悪自分たちだけでも対処出来ると思いますけどね。こう、本気出したら」

「確実に血を見る事になりそうなので可能な限り回避したい未来図ですね」

「さて、お次は皆が止まる部屋の案内になりますね。すみませんが『桜風』さんの入る部屋はまだ決まっていないので、暫くは仮眠室で寝泊まりして貰う事になってしまいうんですが」

「決まっていないんですか？」

「通例なら『同型乃至その艦娘と縁の深い艦娘と同室になる』と言う事なんですけど、『桜風』さんは少々特殊ですので・・・。方々に出払っている艦娘が帰ってきてから改めて『桜風』さんも含めてのみんななどの話し合いで決まるんじゃないかなと」

・・・まあ『異世界からの軍艦』を唐突に放り込む訳にも行かないよね、うん。

申し訳なさそうに話す青葉に対して、ある意味当然の反応と対応に納得して気にしていない事を伝える『桜風』。ずっと単艦戦闘が基本で護衛対象は居ても『僚艦』と呼べるような存在が居なかった『桜風』でも、教科書レベルとは言え連携の大切さは一応理解していた。今まで気心の知れた仲間内に突如ぽつと出の駆逐艦が混ざり込んだら、相互に問題が発生するのは何となくだが『桜風』には想像できた。それも一方は『艦艇時代』は一度も艦隊を組んでの海戦も演習も行った事が無い』と言う連携の『れ』の字も知らない艦娘だったら、なおさらだ。

「・・・でも、教室をそれぞれの艦娘の部屋に流用したようですが、防音とかは流石に：」  
「その辺は大丈夫です！軍司令部の方々も私たちに気を使ってくれたのかは定かではありませんが、暖房や冷房、それに防音なども一般家庭よりもやや優れている程度に各部屋すべてを大改装してくれています！」

「・・・使うこちら側にとつてはともありませんが、軍司令部の人たちは一体何を考えていたんですか？」

「・・・さあ？」

軍令部直属の艦娘の士気を高めるためにも設備は整えなくてはならない、と言う名目



の元、本音としては『あんなに美しい女神たちに対して粗悪な住環境を与える訳にはいかん!』と言う紳士なのかどうなのか分からない思惑で改設計されたとは知る由もない二人であつた。なおこの艦娘に配慮した設計は、艦娘を『仲間』『戦友』として扱う普通、若しくは良識的な提督たちに受け、各地で艦娘用の宿舍を改装したり、場所によつては新規建築される始末であつた。現地の雇用促進を促すものだったり、名目は極めて正しいものである為、『艦娘』を『物』として扱うべき』と考える連中でも体面を気にして申請を却下出来ないのが余計に質が悪いが。

「まあその事は脇に置いて、『桜風』さん!こつちに来てください!」

「なんですか?・・・屋上?」

「はい!」

艦娘それぞれの部屋を一通り見て回つたのち、宿舍案内の最後に連れてこられたのは屋上だつた。元が学校だつたのだから、有るのはある意味当たり前だが。

「ここから見える景色が、とっても綺麗なんですよ」

「・・・本当だ。あ、工廠が見える」

「艦隊の皆が帰ってくる姿も、ここからなら見えますからね。時々酒好きな艦娘がここ

を占拠して宴会開いていたりしていますけど」

「いろんな艦娘が居るんですね・・・」

そう言いながら柵を握って横須賀の海を眺める二人の艦娘。深海棲艦の出現と侵攻により多くの人々は内陸部への退避を余儀なくされ、本来大量の民間人で賑わった場所に今いるのは軍人と艦娘、そしてその両者に物資を搬入する民間の輸送会社だけだった。

『桜風』さん

「はい」

今までの楽し気な柔らかい声では無く、青葉の真剣な声色に釣られて同じく真剣な声色と表情で答える『桜風』。少なくとも気の抜けた返事が出来る様な雰囲気ではなかった。

「青葉たちは、過去の戦争、太平洋戦争に置いてアメリカ海軍に敗北し、轟沈、自沈、解体・・・。最期はそれぞれ違います、皆あの戦争に置いて母国日本に勝利を齎せなかった事を、心のどこかで後悔し、自責の念を抱いています。もちろん、青葉も例外ではありません」

突然の青葉の独白に、『桜風』は何も答えずに、ただ青葉が次に言う言葉を一言一句漏らさずに聞き取ろうと神経を研ぎ澄ましていた。『口を挟んではならない』『口を挟むべきではない』と言う事は、殆ど対人経験が無い『桜風』でも分かった。

「ですが・・・神様の気紛れか、それとも奇跡の産物か。青葉たちはもう一度チャンスを得られました。母国日本だけで無く、今度は世界を、前の戦争で失った仲間たちを守るだけの力を。・・・しかも、人の依代すらも与えられた上で」

先程までいた港を見ながら語り続ける重巡洋艦娘『青葉』。彼女の今話している言葉には、基本的に勝者側だった『桜風』には無い圧倒的な『重み』が有った。物言わぬ艦艇時代、太平洋戦争の開戦時には完全に旧式化しながらも、乗員と共に必死に奮戦し、そして戦場を共にした戦友たちが次々と居なくなつてゆき、当の自分も何度も沈む寸前の損害を受け続け、最後は呉軍港で大破着底するも、最期の最期まで天を睨み続けた。『桜風』にはそんな経験は無かった。『何度も沈みかけながらも死地を生き抜いた』と言う一点では『桜風』も青葉も同じではあるが、ずっと単艦で、かつ最期まで勝ち抜いて、シユルツ艦長や筑波大尉ら戦友たちに見送られて自沈処分される望外の最期だった『桜風』には、青葉の言葉が計り知れないほどに重かった。

「『桜風』さん」

「はっ」

「青葉たちは、そういう理由もあつて、きつと沈むまで、日本を守るために戦い続けます」

「・・・はっ」

「ですが、『桜風』さんは違います。貴女の故郷はこの世界に存在しない以上、縁も所縁も無い異世界の為に轟沈するまで戦う義理も義務も有りません。先的大海戦であれだけの深海棲艦を撃沈してくれただけでも、青葉たちは・・・本来は、何も言えるような立場では有りません」

ですが、恥を忍んでお願いします。そう言つて『桜風』に向き合う青葉。その顔はいつもの快活な表情は嘘のように消え失せ、様々な感情が織り交じった真剣な表情だった。

「『桜風』さん。・・・日本を、この世界を救うために、貴女の力を、貸してください。・・・お願いします」

そう言い、頭を下げる青葉。その姿からは、日本の脅威である姫級や鬼級の深海棲艦よりも弱い自分に対する自責の念、本来この世界の為に命を捧げる義務などない『桜風』

を戦場に引き摺り込もうとする自分の言葉への怒り、綱渡りのこの世界の状況を救ってくれるかもしれない『桜風』に縋りつく事に対する情けなさ・・・その他、様々な感情が混じり合っていた。

「顔を挙げてください、青葉さん」

その青葉のお願いに対する『桜風』の答えは、ただ一つだった。

「怒りますよ？ 私は既に、この日本の為に戦う覚悟は出来ています」

「・・・え？」

『桜風』の答えに疑問符で答えながら顔を上げる青葉。顔を上げた彼女の目に入ってきたのは『思いつきりむくれた』『桜風』の姿だった。

「深山艦隊の艦娘全員が集まってから、私の身の上話をする事になっていましたから話していませんでしたが、私が所属していたウイルクア王国と日本とは同盟関係にありました」

「その事は、初めて接触した時の通信で聞いていました。ですが、その日本とこの世界の

日本は……」

「別の国である……と言う事でしょうか？ですが、少なくとも私には『日本と言う国』に対して縁があります。ならば、私がこの国の為に戦う理由にはなりません。……それに、第一ですね……」

私の力で助けられる人や国家が有るのに見捨てたら、それこそシユルツ大佐や筑波大尉に絶縁処分されちゃいますよ。

激怒したシユルツ大佐たちを想像したら恐ろしくなつて震えてきた。そう言いながら二の腕を抑える『桜風』に対して、青葉は二の句が継げなかった。確かに先の海戦では『桜風』は完全勝利を遂げた。だがこれからもそうだとは限らないし、『桜風』の力を見て策動するであろう愚物共の存在も無視できない。しかし『桜風』は事も無げに『青葉たちと一緒に戦う』と明確に宣言した。

「……先の海戦の様に、深海棲艦を一方的に沈められるかどうかは分かりませんが、それに『桜風』さんの能力を見て、『桜風』さんをあの手この手で手に入れようとする連中

は、きつとたくさんいますよ?」

「大丈夫です。自惚れてるように見えるでしょうけど、前の世界での海戦を超える絶望的戦況での戦闘は、この世界だと有り得ないでしょうし。仮にそんな状況が起こっても、頑張つて勝ちます」

『頑張つて勝ちます』つて・・・」

「それに、私は深山提督指揮下の艦娘です。他所からの勧誘が有つても絶対に乗りませんし、仮に勧誘力づくの誘拐をされたら、全力で相手を死なない程度に艦樓雑巾にして警察に引き渡した後で艦隊に戻りますから。それに、もしそんな状況になったら、青葉さんたちが助けてくれますよね?」

・・・言われたら、青葉は『当然です』と答えるしか無いじゃないですか

目尻に光る物を覗かせながら、青葉は苦笑いと共にそう返した。

夕日の光で屋上が赤く染まる中、駆逐艦娘『桜風』と重巡洋艦娘『青葉』は、まるで十数年来の親友同士であるかのような、屈託のない花の笑顔を交わし合っていた。

## 第十話 『桜風』の第3海上部隊駐屯地見学会 《艦娘

## 浴場編》

21世紀の現代に『省』では無く『庁』と言う中途半端な形で蘇った、深海棲艦を効果的に撃滅出来る唯一の存在である艦娘を掌握する組織である海軍庁。防衛省が有る為、その隷下に作られた庁である。その海軍庁が所有する霞が関のとあるビルから、複数名のスーツ姿の男性が窓から下界を見下ろしていた。より正確に言えば、つい先ほど自分たちへの報告を終えて自らの艦隊の場所へ戻ろうと車に乗り込んでいる一人の女性を見ていた。

「・・・彼女が、そうなんですか」

「なんだ、君は彼女を見た事が無かったのか？」

「直接、面と向かって会うのは初めてでした」

そうか。その一言だけ返して、彼女こと深山満理奈少将を始めてみたと言う防衛省の官僚から視線を再度深山少将が乗り込んだ車に乗り込んだ壮年の男性。名を『山本蒼一』。深海棲艦が出現したその時から海上自衛官(当時)として護衛艦に乗り込んで日本



を守る為に戦い、そして同盟国のアメリカ海軍と共に惨敗する辛酸を舐め尽し、そして『始まりの艦娘』と人類史上初めて遭遇した男である。現在では海軍庁長官の地位について艦娘に関係する職務を行っている。年齢や慣例的に彼がこの地位に就くのは早すぎるのだが、今は『戦時』であると言う事と『貴重な対深海棲艦戦の経験持ち』と言う事で、日本官僚組織としては前代未聞の大抜擢をされたのだ。

「駆逐艦『桜風』。本人からの証言では、出身地は推定横須賀軍港。所属はこちらの世界でいうロシアのウラジオストクやカムチャツカを主な領土とするウイルクア王国の近衛海軍。艦歴は1939年3月からわずか一年と数か月程度。だが【改】ですら無い現段階の装備でも『RAM』を満載し、近接信管や一式徹甲弾のような被帽付き徹甲弾を搭載。止めに史実では誰も開発しなかった、出来なかった7連装酸素魚雷発射管に15.5cm 75口径4連装砲を搭載し、最大速度50ノット超過・・・」

「深山少将の指揮下に編入出来たのは、きつと神の恩寵だろう。【悪夢の第二期生たち】を生み出す原因になった連中の手に渡ったらどんな事態になるか見当もつかん」

「・・・長官。・・・それ以上は」

壁に耳あり障子に目あり。未だに『戦時』と言う現実を認めようとせずに『平時』の感覚のまま、政府や自衛軍の邪魔をする事しか頭にない団体や勢力が、『戦前』と比べ

れば大幅に勢力を激減させたとはいえ、未だに日本には存在するのだ。今の長官の発言を聞いたら確実に無い事無い事針小棒大捏造祭りにして全力で喚き散らすだろう。

「・・・駆逐艦『桜風』か。・・・君の存在は、我が国にとつて吉と出るか、それとも凶と出るか・・・」

山本蒼一海軍庁長官が、そう言つて『桜風』の顔写真が張り付けられた資料を見ながらそう言つた頃。その『桜風』は何をしていたかと言えば。

「ごめんね。こんな身体見せちゃつて」

「いえ、こつちこそ驚いてあんな声出しちゃつてごめんなさい！」

「痛みが無いのなら良かったです。それと『桜風』の身体はとても綺麗であると、不知火は思います。だから、そのような事は言わないでください」

陽炎型駆逐艦娘の『陽炎』『不知火』と一緒に風呂に入っていた。

青葉と夕方の屋上でそれぞれの思いを吐露し合った後、二人は屋上から降りて一階へと向かっていた。

「そう言えばあのグラウンドって、艦娘用の訓練場である割にはサッカーゴールとか野球のマウンドとかが有るみたいなんですが」

「時々私たちだけでなく、交流会などの名目で他の鎮守府の艦娘や提督が集まってサッカーや野球をやっているんですよ。戦闘ばかりだと精神的に疲弊するだろうからって、司令官が。まあ元学校の設備を有効活用したかっただけみたいですけど」

「・・・なんていうか、本当にここは軍事施設と思えない設備の充実ぶりなんですけど」「福利厚生は特にしっかりとっているのが、深山艦隊の自慢の一つですから」

取り留めも無い雑談を楽しむ二人だったが、日も深まり、辺りもだんだん赤から黒色が混ざり始め、もう直ぐ夕方から夜になる頃に、偶然通りかかった廊下で丁度目の前の部屋から二人の艦娘が出てきた。

「お」

「あ」

「あら」

「あ、ども。陽炎さん！不知火さん！」

上から順に『桜風』、陽炎、不知火。青葉である。陽炎と不知火の二人は衣服とタオルを持つており、見るからに『これからお風呂に行きます』と言う状態だった。そしてその二人を見て青葉はいきなり顎に手を当てて考え出した。

「・・・青葉さん？どうしたんですか？」

「『桜風』さん。いきなりですけど着替え用の衣類は持つてきていますか？と言うかありますか？」

「え？」

いきなり青葉に衣服の事を聞かれて戸惑う『桜風』だったが、思い返してみると艦娘としてこの世界に現れてから衣類の事は一度も考えた事は無かった。当然ながら妖精さんも艦艇から出る時には衣類の事は一切触れておらず、そもそも『艦長』として駆逐艦『桜風』を掌握していた時には、そう言った物の存在は感じ取れていなかった。

「・・・多分、無いかも・・・知れません」

「それじゃお風呂入れないじゃないですか！青葉、ちょっと倉庫を探して『桜風』さんが着れる予備の衣類探してきますね！」

「え、ちよ、青葉さん!？」

「陽炎さん、不知火さん、『桜風』さんのお風呂への案内おねがいしまーす！」

事態の急展開に置いて行かれた『桜風』と残り二人を他所に、青葉はその一言を残して風のように倉庫に向かって駆け抜けていった。後の廊下に残ったのは『桜風』と陽炎、不知火の三人だけだった。

「……えつと」

「……どうしよう」

「では行きましょうか」

「え?どこに?」

「不知火?行くつてどこに?」

「お風呂場に」

「ここが不知火たちが入るお風呂になります」

「今は殆ど居ないから貸し切りに近いけど、何時もならこの時間帯だとたくさんの艦娘で埋め尽くされているわ」

「・・・何といえますか、この艦隊の福利厚生充実し過ぎですよ・・・」

「司令官が頑張ってくれているからです。もちろん、不知火たちも司令官の期待を裏切らない様に頑張らなければいけません」

「深海棲艦との戦争中だっていうのに、こんなに私たちに良くしてくれる深山司令の期待を裏切る訳には行かないからね」

『桜風』が溜息しながら見た『お風呂』は、流石に檜風呂レベルなまでに無駄に高級な物では無かったが、少なくとも銭湯の様に広々として解放感のあるお風呂だった。流石に百人入っても・・・とまでは行かないが、伸び伸びと気持ち良く身体を伸ばして入浴出来るのは確かだ。

「では『桜風』さん、不知火たちと一緒に風呂に入りましょうか。脱いだ衣類はその籠の中に入れてください」

「そうね。ここは同じ駆逐艦娘同士！裸の付き合いで親睦を深めちゃおうか！」

「ア、ハイ」

『艦娘』と言う形で人の依代を得て僅か三日。妖精さんとの交流は兎も角、対人経験は相変わらず『桜風』にはほとんどないド素人である事には変わりなく、冷静かつ速やかに事を進める不知火と陽炎型駆逐艦の長女としての経験からか、活発的に動く陽炎の前では、言われるがままに行動するしか選択肢は無い『桜風』だった。

「さーて、それじゃ『桜風』・・・え、さ、『桜風』!?その傷どうしたの?!」

「?どうしたんですか、陽炎さん?」

「『桜風』さん。後ろに鏡が有るので、それで見て下さい」

突然陽炎が服を脱いだ『桜風』に対して動揺した声で『傷』について問いただし、いきなりの事に疑問符を浮かべる「桜風」。そして不知火に言われるがままに背後に有った大鏡を見ると、当然ながらそこには『桜風』の下着姿の身体が映っていた。・・・全

身、特に腹部や右肩、右手全般にと両足に大量に傷跡が残る『桜風』の姿が映っていた。

「……なにこれ？」

『なにこれ』つて……『桜風』、貴女その傷大丈夫なの?!」

「陽炎姉さん、落ち着いてください。『桜風』さん。痛みは無いのですか？」

「……いえ、全く。……でも、艦娘でも傷を負ったら、傷跡は残るのでは？」

「いえ、艦娘の身体には、基本的に傷跡が残ることは無いわ。船体が酷い損傷を負って艦娘本体にも連動してダメージが言ったとしても、艦艇を入渠させて艦娘自身も入渠すれば傷跡は一切残らないから」

「それに陽炎姉さんから、『桜風』さんは無傷でここに来たと不知火は聞いています。損傷を負っていない筈なのに何故傷跡が出来たのか、不知火には分かりません」

そう言いながら心配そうに『桜風』を見つめる陽炎と不知火。だが『桜風』自身は自分の身体の傷跡をペタペタ触ったり、手足を回したりして異常が無いか確認してみても、特に痛みや違和感などを覚える事は無かった。

「……ごめんね、二人とも」



「え、え、『桜風』、どうしたの？」

「どうしましたか、『桜風』さん。やはりどこか痛みがありましたか？」

そして『桜風』はなにを思ったか、陽炎と不知火にいきなり謝りだした。突然の謝罪に二人が困惑する中、『桜風』が続けた言葉とは。

「痛みとかはないんだけど……二人がわざわざ連れてきてくれたのに、お風呂に入る前からこんな事になったのが申し訳なくて……」

そして話は初めの三人のお風呂での会話に戻る。

その後なんとか『桜風』を宥めすかして風呂場に入った三人は、洗身洗髪をしつかり熟したうえで並んで入浴していた。結局お湯に浸かつて『桜風』の傷跡は一切痛む気配は無く、最終的に手に負えないと判断した三人は『深山司令官と明石さんに話をしてみよう』と言う結論に至った。深山少将は兎も角、明石に関しては『桜風』が怖がつて

いたが。

「……気持ち良い……」

「身体の芯から温まるよねえ……」

「これだけの少人数で入浴できるのは、久しぶりですね」

陽炎と不知火は何度も入っているのに今更だが、艦娘人生で初めての入浴を体験した『桜風』は、そのお風呂の温かさの前に文字通り蕩けそうだった。芯まで温まりながら、全身に染み渡る気持ち良さによってぼんやりとした頭で、シユルツ艦長や筑波大尉もお風呂に入ったらこんな感じになっていたのかなあ、とうっすらと考えだしていた。

「……ねえ、『桜風』？」

「……なんですか？」

「……きつと、これからさ、『桜風』には色々と面倒事が降りかかってくるかも知れない。異世界から来た軍艦なんて史上初だからね」

「……だと思えます」

「……でもね、深山艦隊のみんなは、仲間を大事にする人しかいないから、何かあった

ら遠慮なく頼つてね」

「もちろん、不知火や陽炎姉さんにも色々と相談してください。可能な限り力になります」

「・・・有難う御座います、不知火さん、陽炎さん」

「不知火です」

「・・・え？」

「敬称はいりません。呼び捨てで構いません」

「ああ、私も呼び捨てで構わないわよ！他人行儀なものかどうかと思うしね」

そう言つて『桜風』に笑顔を向ける陽炎。個性溢れる、と言うより個性が限界を超えて溢れ出している妹艦だらけの陽炎型駆逐艦の長女としてしっかりと頑張っている彼女には、『桜風』は新しく出来た可愛い末っ子のような存在であった。特にどこか遠慮しがちな言動が。

「・・・分かった。じゃあ、これからよろしくね、陽炎、不知火」

「うん！これからよろしく、『桜風』！」

「これからよろしくお願いします、『桜風』」

お風呂場で呼び交わされるそれぞれの名前。『桜風』にとっては、艦娘人生三日目にし  
て初めてできた同年代ぐらいの少女との友好関係だった。

「『桜風』さーん！着替え持ってきて置いて置きましたよ．．．って、『桜風』さん!?!その  
傷は一体どうしたんですか?!」

「．．．あー」

「なんて説明すれば良いのか．．．」

「また騒がしくなりますね」

そして着替えを持ってきた後そのままお風呂に入ってきた青葉に『桜風』の傷跡を目  
敏く発見され、説明にまた少し時間を取られたのは、もはや言うまでもない出来事だっ  
た。

## 第十一話 『桜風』の第3海上部隊駐屯地見学会

《食

## 堂編》

「・・・やはり、相当疲れていたようだな、提督は」

「駆逐艦『桜風』救出のために貫徹しちやつたからねえ」

「提督は何時も、なんでも背負い込んで頑張りすぎです！たまには大和たちに仕事を任せて休んでくれても・・・」

「そうは言うがな大和、今国会で『艦娘保護法』の審議中だとは言え、今の私たちの身分は『艦艇』であつて『人』では無いんだ。『物』が『人』の代わりになつたとすると、後々面倒な事になる」

「あうう・・・それは、武蔵の言う通りだけど・・・」

駆逐艦『桜風』の顛末についての報告を上層部に行つた後、とんぼ返りで横須賀の自分の艦隊に戻る深山少将と護衛と運転手役を兼務する大和型と長門型の艦娘たち。その車の中では、後部座席の真中で陸奥にもたれ掛つて寝息を立てる深山満理奈の姿が有つた。硫黄島航空隊から深海棲艦の精鋭部隊が出現したと一報が入つたあの時から、

丸一日以上ずっと休まずに今まで動き続けていたのだ。駆逐艦『桜風』の行動によってその横須賀に向けて進撃していた深海棲艦は一夜にしてまとめて蒸発した為にまだ多少は仕事は減りはしたものの、貫徹して『桜風』の事情聴取をしてその足で上層部への報告をするという精神的、肉体的に疲弊する事をしていたのだから、今の大和の言葉は、この場にいる誰しもが共有していた。

「『桜風』か・・・」

「良い娘だとは思いますがすよ?」

「そう言う意味ではない」

—— たった一隻の駆逐艦に、あれだけの性能を求める必要があった世界。私には想像もつかんな・・・

軍艦のみならず、兵器と言うものは基本的に友軍戦力との共同作戦を前提として設計、開発されている。どれほど高性能でも単独では戦局を覆すどころか影響を与えるだけでも厳しい。『衆寡敵せず』。それが、大和や武蔵たちが身をもって証明した軍事的常識だ。だが、先日保護した駆逐艦『桜風』は『まるで単艦での戦闘が当たり前であるか

のように』行動し、深海棲艦との戦闘に入り、そして無傷で殲滅した。彼女の言動や艦艇の性能とを合わせて考えると、自分たちの世界の常識とはかけ離れた理論で駆逐艦『桜風』は建造されたようにしか、武蔵には思えなかった。

・・・これから、色々と忙しい事になりそうだな

夕焼けで霞が関のビル街が美しく染まつていく中、車を運転している武蔵は、そんな予感を感じていた。そしてその予感は、深山提督をベッドに放り込んだ直後に瑞鳳と明石、夕張がハイテンションに飛び跳ねながら大量の書類を持って来た事により早速的の中するのだった。

「食堂・・・広いですね」

「艦娘だけで50人以上も深山艦隊に所属していますから」

「広さだけで無く、出されるご飯も美味しいですよ！」

「給糧艦の間宮さんと伊良湖さん、そして二人が指揮する妖精さんたちの料理の腕凄いもんねー」

お風呂場から上がった四人娘は、さつきまで着ていた制服から着替えた後、艦娘が一堂に会して食事するその名もズバリな間宮大食堂に来ていた。何も知らない人間が傍から見れば『仲の良い女子学生が休日以後輩を連れて高級レストランに連れて来た』ような光景を見せているが、その『女子学生』が実は深海棲艦を唯一効果的に撃滅できる存在である艦娘と言う戦士であると言う事は、今の雰囲気からは欠片も連想させなかった。

「・・・あれ、鳳翔さん？珍しいですね、鳳翔さんがこの大食堂に居るのは」

「あら、青葉さん。それに陽炎さんに不知火さん、『桜風』さんも」

「鳳翔さん、こんばんはー」

「こんばんはです、鳳翔さん」

「あ、え、こ、こんばんはです鳳翔さん。・・・珍しい？」

鳳翔の方は、深山艦隊が初めに『桜風』に接触した、深海棲艦の出現頻度が激減した事を調べる『近海調査艦隊』に所属し、通信を聞いて居た為に『桜風』の存在を知って



いたが、当の『桜風』は鳳翔とは初対面で有る為に「面識の無い女性に名前を呼ばれた事」に一瞬動揺するも、何とか挨拶を行い、そして疑問を提示する事が出来た。

「あー、『桜風』はこの艦隊に来たばかりで未だ何も知らないんだっけ」

「鳳翔さんは、この艦隊の敷地内で居酒屋を営んでいるんです。艦娘のストレス解消と国民との距離を縮めると言う名目で、深山司令だけでなく海軍庁からも許諾を得ています」

「今では艦娘だけで無くて、時間や日時を区切つてですが一般の人からもたくさんのお客様がくる大盛況ぶりなんです！」

「私は、提督にお願いして好きでやっているだけですけどね。今日は艦隊の皆が遠征や出撃でいらつしやらないので、居酒屋はお休みにして間宮さんのお食事を戴きに来たのですよ」

そう言いながら右手を頬に当ててほほ笑む鳳翔。多くの提督から【お艦】と呼ばれる包容力や良妻力が全艦娘の中でも最上級である彼女は、全く意識せずにこうやって話し相手の懐に自然と入り込んで、本人も気付かない悩みを見つけ出して相談を行い解決策を見出したりして居る為に多くの者から慕われており、特に艦娘からが多いが常連客や相談相手から【お母さん】と呼ばれている事も多い。

「はあ・・・そうなんですか」

とは言え、【艦長】や【副長】と言った存在は兎も角【お母さん】と言う存在は知っていても概念は良く分かっていない『桜風』には、そんな姿の鳳翔を見ても、気の抜けた返事をする以外で余り大きな反応を見せる事は無かったが。

間宮大食堂では、入り口そばに設置してある食券販売機から好きな料理を選び、その食券を受付に渡し、椅子に座って妖精さんが机の間に作られた妖精さん専用通路を通して持つてくるのを待つスタイルになっている。言ってしまうえば回転寿司のレーン役を妖精さんがやっているようなものだ。注文された料理を運ぶ妖精さんと食事の終わつた皿やコップを下膳する妖精さんによる「無駄に洗練された無駄の無い無駄なように見えて実はお客さんの視覚的意味で有意義な妖精さん流スタイルッシュ運搬術」はこの間宮大食堂の目玉の一つである。無論最大の目玉は料理であるが。

「『桜風』は・・・ビーフシチュー？」

「うん。色々食べたかったけど、一番はコレかなって。そう言えば古鷹さんが見当たらないけど・・・」

「古鷹さんは朝潮さんと一緒に執務室に行ったみたいですよ」

「朝潮……は、名前からして駆逐艦か。……なんで夕食も取らずに執務室に？」

「なんでも、瑞鳳さんや明石さんたちが工廠からたくさんの書類を持ち込んだらしくて、今深山提督や大和さんたちがその書類を処理しているそうです」

「……青葉さん、これって……」

「あ、あは、あはははは……瑞鳳さんたち、やつちやつたみたいですねえ……」

鳳翔から瑞鳳と明石の妙な挙動を教えられた『桜風』と青葉は『どう考えても駆逐艦『桜風』関連だ……』と悟りつつも、正直今更どうしようもないので夕食を取る事を優先した。『青葉（私）は悪くない』。そう自分に言い聞かせながら。

「『桜風』さん……大丈夫ですか？」

「……御免、不知火。お腹が凄い張れて痛い……」

「間宮さんのご飯がいくら美味しいからって、いくらなんでもお皿がこんなに山積みになるまで食べ続けたらそうなるわよ」

「・・・だって、生まれて初めて食べたご飯、すつごく美味しかったんだもん・・・」

「こんなに美味しそうに食べてくれたのなら、給糧艦冥利に尽きますけど・・・」

「・・・陽炎さん、不知火さん。『桜風』さんを仮眠室に連れてやってくれませんか？青

葉たちは執務室に言つて大和さんたちと代わつて書類整理を手伝つてきますので」

「分かりました。陽炎姉さん、『桜風』さん。行きましようか」

「そうね。『桜風』、立てる？」

「・・・」

「あの、無理しないでくださいね？辛いのなら暫く休んでからでも良いんですよ？」

「・・・だいじょうぶです、鳳翔さん・・・」

その後、艦娘人生初の食事、そして場を盛り上げて雰囲気を楽しませる達人の青葉や上手く合いの手を入れる陽炎たちによる夕食会で、弾む楽しい会話に間宮特性の美味な料理に舌鼓を打ち鳴らして、自らの限界を全く考えないまま衝動的な欲望の動くままにお代わりして食べ続けた『桜風』は、その代償として胃袋が満杯になつて腹痛を引き起こし、陽炎と不知火に手伝われて今日の寢床に連れていかれると言う醜態をさらしてい

た。

「・・・『生まれて初めて食べたご飯』、ですか」

「『桜風』さん、本当に楽しそうに喋りながら食べていましたね」

「あんなに『桜風』さんがお代わりするから、てつきり大丈夫かなと思ったんですが：」

そしてその三人の後ろ姿を、鳳翔と青葉、そして間宮の三人は見送っていた。とは言え、間宮は明日の食事の仕込みの用意をし、鳳翔はその仕込み準備を手伝い、青葉は現在修羅場状態と妖精さんから伝え聞いた執務室に向かう為に、直ぐに三人に続いて間宮食堂から離れるのだが。

「——えー、続きましては、アメリカから速報です。先ほど入りました情報によりますと、現地時間の昨夜一時頃、アメリカ西海岸一带に深海棲艦による奇襲攻撃が行われたとの情報が入りました」

そしてそれぞれが自分の仕事場に行こうとした時、間宮大食堂に設置してあるテレビ

が流して来たニュースに、三人は自然と足を止め、テレビを見始めた。帝国海軍に所属していた艦艇である三人は、色々と仕方が無いとはいえ「アメリカ」と言う単語にかなり敏感に反応してしまうのだ。と言っても艦娘全てがそうであるわけでは無く、それぞれ個人差があるが。

「——アメリカ海軍、そして沿岸防衛隊の会見によりますと、深海棲艦は電波妨害を行いなから西海岸の沿岸部に大口徑砲による艦砲射撃を超高速度にて行つたとのことです。現在アメリカ軍と現地政府は被害状況の確認を……」

「……珍しいですね。深海棲艦との開戦初期ならともかく、戦争が開始してから大分たつたあのアメリカ軍が自国領土に奇襲を許すなんて」

「アメリカ軍も、そう何時も完璧に戦えると言う訳では無いのでしょうか。それより青葉さん、執務室には……」

「ああそうでした！青葉、執務室に行つて書類整理を手伝つてきます！」

鳳翔からの一言で本来の目的を思い出した青葉は、鳳翔からの言葉が終わらないうちに駆け足で間宮大食堂から執務室に向けて走つていった。後に残されたのは鳳翔と間

宮。そして調理を専門に行う主計科妖精だけだった。

「・・・いつも元気ですね、青葉さんは」

「あの元気に助けられている艦娘も多いんです」

そう言いながら、鳳翔は何度も間宮大食堂に手伝いに来ている事もあって、勝手知つたるなんとやら、手慣れた手つきでテレビのリモコンを操作し、誰も居なくなつた食堂のテレビを消した。

幸か不幸か、テレビが消える前に一瞬映つた「30cm砲クラスの砲弾で無数に穿たれた西海岸沿岸部の映像」が、鳳翔と間宮の目に映ることは無かつた。

## 第一二話 横須賀沖にて

昨日に引き続き五月晴れのここ日本国神奈川県横須賀軍港。日本国の首都東京を守護するこの軍港に所属している第3海上部隊の一つである『深山艦隊』の所属地からは、二隻の重巡洋艦、一隻の軽巡洋艦、三隻の駆逐艦、二隻の軽空母、二隻の戦艦、そして甲板上に様々な物が敷き詰められている誰から見ても異様な軍艦が出港していた。本土に居残っていた艦艇を動員した『AL/MI作戦参加艦艇出迎え艦隊』である。

「……ねえ古鷹」

「どうしましたか、提督」

「……流石に、海に出て結構経つのに縛り付けたままなのはどうかと思うんだけど」

「元帥や長官達からの命令ですから。『縛り付けてでも暫く休ませてやれ』、と」

「……まだまだ大丈夫なだけだなあ」

「【まだ大丈夫はもう危ない】んです、提督」

そしてその旗艦である重巡洋艦古鷹の艦橋では、この艦隊の司令官である深山満理奈



少将が、本人の意思を無視して艦長席に縛り付けられていた。と言つても深山少将の玉のお肌を傷を残すほど強く縛られているわけでもなく、単に『書類整理などが出来ない程度に』拘束しているだけだった。

上層部への報告が終わつて艦隊に戻つた後、武蔵達によつて提督の私室のベットに放り込まれた深山少将だったが、その直後に空気を読まずに大量の書類を持つて大騒ぎしながら瑞鳳、夕張、明石が乗り込んできた。当然疲れ切つた提督を起こさない為にもこの大騒ぎしている3人娘は即座に武蔵と長門によつて物理鎮圧されたのだが、武蔵たちの配慮は「市販の眠気覚ましと栄養ドリンクを一気飲みしながら起きて来た提督」によつて無意味となつてしまつた。そう、深山満理奈少将は提督の中でも有名な「ワーカーホリック症候群発症者」だった。その為に上層部からは、深山少将は特に気にかけてられている。「艦娘は提督にしか従わない」と言う特性と、雪だるま式に膨れ上がった組織構成のせいで「質の良し悪しに極度に差がある提督たち」、そして「【悪夢の第二期生】を生む原因となつた反抗的かつ悪質で一部政治勢力と繋がりのある提督勢」と言う三重苦の為に、深山少将の様な「基本的の上層部に対して従順で、尚且つ常に良好な戦果と犠牲者ゼロを成し遂げている清廉な熟練提督」は、それこそ寶石よりも貴重だった。過

劣で倒れられたら冗談でも何でもなく本気で上層部は頭を抱えて泡を吹きながら倒れるであろう。

「『桜風』の方は大丈夫？」

「・・・大丈夫なようです。ただ、頻繁に航行速度や艦艇同士の距離が変わっています」「艦隊運動なんて今まで一度も取った事無いです」つて言う『桜風』の言葉は、本当だった見たいね」

重巡洋艦娘の古鷹から伝えられる『桜風』は、先導している陽炎と『桜風』の後方から追尾している不知火に対して、艦艇間の距離を一定に保つために忙しく加減速と距離の確認を行っていた。一般的に缶の圧力を一定に保てば速力は一定に保てるはずなのだが、『桜風』は一般的艦艇とは違って乗員削減のために『ギア方式』、つまり圧力を細かに調整する能力は保持していない為、何度も『最大船速』と『通常船速』を繰り返し調整して距離を調整していた。艦艇距離や速度を一定に保つ方が無理である。しかも『桜風』の性能が他の艦娘とは圧倒的に違うのだから、余計に無理である。

「まあ『桜風』は、今の所大丈夫だとしても、AL作戦参加艦艇からの報告が無いのが気になるわね……」

「MI作戦参加艦艇の旗艦である加賀さんからは、AL艦隊とは先ほどまで通信出来ていたようですが……」

「襲撃を受けたにしても、一切の電波発信も無いのはまず無い。かと言って、AL艦隊すべての通信機器が一斉に壊れる事はもつと有り得ない……」

「……みんな無事だと良いんですけどね……」

そして基本真面目な性格のせいか、涙目になりながらも必死に艦艇間の距離を熟練艦である青葉たちの様に一定に保とうと奮闘する『桜風』を他所に、深山提督と古鷹はAL艦隊からの定時通信が無い事を気にしていた。飛鷹や隼鷹、熊野に鈴谷を主力とし、支援艦隊に翔鶴と瑞鶴に伊勢日向と云うかなり豪勢な艦娘で構成されたAL艦隊は、AL作戦を無事に成功させた後順調に横須賀に向けて航行していたはずだったが、今日の朝方になって突然通信が途絶した。その為、この『AL/MI作戦参加艦艇出迎え艦隊』が編成されていた。フットワークの軽い艦隊である。

「……提督、『桜風』さんからです」

「分かった、繋げて。あと古鷹、縛ってるの外して……」

『桜風』からの通信入ります』

いい加減二桁目に突入する縄ほどの懇願を古鷹の通信妖精の声によつてあっさり遮られ、その古鷹も縛っているのをほどく気配を見せない事に軽く涙目になる深山少将だったが、そんなことは知った事ではないとばかりに駆逐艦『桜風』からの通信が入ってきた。

「提督、こちら駆逐艦『桜風』です。現在レーダーに機影を探知。解析の結果彩雲と思われまます」

「多分飛龍か蒼龍の彩雲ね」

「また彩雲からの通信ではMI攻略艦隊は、未だにAL艦隊との通信はとれておらずとの事です。どう返答しましょうか？」

「……取り敢えずこちらと合流する様に伝えて」

「了解。……ああ、また近づきすぎてる！ちよつと速度緩めて！」

「……加賀たちも、搜索してくれていたみたいだけど……」

「一体、瑞鶴さんたち、どこを航行しているんでしょうか……？」

真剣な表情でA1艦隊の行方を考察し、艦隊の皆が無事かどうかを重巡洋艦の艦橋で心配する提督と艦娘。一方が椅子に縛られながらであるのが色々とおかしいが、この艦隊だと深山提督が働き過ぎた瞬間に艦娘の判断で良くやつている事である。お陰で無垢な『桜風』が色々と勘違いし始めているが。

「・・・本当にレシプロ機しか飛んでいない・・・」

『ある意味壮観ですな』『烈風に流星改、天山一二型に彗星一二型、そして彩雲と』『こんな航空機で大丈夫か』『大丈夫じゃない、大問題だ』『仮に今すぐあの機体が襲ってきて』『40mm4連装機関銃』だけで撃退できそうですね』『RAM』は・・・流星に勿体無いか』『また主計妖精に怒られるからな』

そして『M1攻略艦隊』と合流した時、駆逐艦『桜風』の艦橋ではM1艦隊に所属する空母が飛ばしている航空機を見てあつけにとられていた。脅威だったからではない。一応深山提督や青葉たちから聞いて居た物の、本当に『桜風』の世界では早期に戦場から姿を消した機体が大空を舞っている光景に壮絶なカルチャーショックを感じていたからだ。

「HEY、提督うー！そのNew faceは誰ですかー？」

無線に快活な女性の声が響き渡る。所々英語混じりな独特の口調に『桜風』が驚いていると、深山提督が苦笑しながら『桜風』に答えてあげる様に伝えて来た。因みに深山提督はようやく拘束を解かれたようだ。筆記用具はすべて隠されて居る為仕事は出来ないが。

「えーと・・・初めまして、私は駆逐艦『桜風』です。四日前に色々あつた末に深山提督の指揮下に編入されました」

「Wow! 私たちがMidwayに行っている間に・・・Wait、Are you a destroyer?！」

目の前の軍艦が駆逐艦を名乗った事に金剛から驚愕する言葉が飛び出て、それを皮切りにMI艦隊の他の面々からも驚きの声が聞かれ始めた。

「あの、始めまして『桜風』さん。私は高速戦艦の榛名です。失礼ですが、本当に駆逐艦ですか？」

「はい。始めまして榛名さん。『桜風』は駆逐艦です。正式名称で言うと『超甲種重武装

突撃型高速巡洋駆逐艦 『桜風』と云う長い名前になります」

「なにそのすつごくカツコよくて強そうな名前!? ねえねえ蒼龍!」

「飛龍、航空母艦から名称変更しようといつても誰も認めないよ」

「あ、やつぱり?」

「同じ駆逐艦なのに、夕立より船体が結構大きいっぽい! たくさん載せている艀装、どんなのか教えてほしいっぽい!」

「綾波の何倍も大きいですねー・・・」

「え、ええと、船体の、ぎ、艀装に関しましてはー・・・」

重厚な軍艦が集まる中少女たちの快活な声が響き渡ると言うアンバランスな状況の中、多数の艦娘からの視線と話題を総濼いしている『桜風』はどうかこうにか受け答えをこなしていた。半分緊張で言葉使いがおかしくなっているが、その点は仕方が無い。別にコミユ障と言う訳では無いが、対人での会話に関しては、『桜風』は絶対的に経験が少ないのだから。

「加賀。AL艦隊からの通信は未だ来ていない?」

「提督。・・・はい、未だに」

「一体どうしたんでしようね。AL艦隊のすべての艦艇の通信機が一斉に故障したとは思えませんし」

「また整備を怠ったのでしよう。五航戦には帰還した後で鍛えなおさないといけませんね」

「加賀さん……。いえ、何でもないわ……。」

そして初々しい新人が先輩に弄りまわされる世の常の光景をほったらかしにしている深山提督と一航戦コンビは、先ほどと同じくAL艦隊の話をしていた。基本真面目に職務をこなす翔鶴や瑞鶴、それに改最上型航空巡洋艦の鈴谷と熊野が定時連絡をすつぽかすなんてことは今までに一度も無かった。本土近海からは、駆逐艦『桜風』が深海棲艦による本土進攻艦隊を殲滅して以後は、未だに敵影は確認されてはいなかった。

「……。提督。レーダーに反応。これは……。航空戦艦？」

そんな中で、空気を換える一言を放ったのは、この艦艇の中で最も優秀な電子機器を搭載する駆逐艦『桜風』。彼女のレーダーが捉え、そしてデータベースではじき出した答えに、艦隊の皆は安堵の表情を浮かべていた。加賀は相変わらず無表情だったが。



「『桜風』さん。それはきつとAL艦隊の伊勢か日向です」

「本来は私たちMI艦隊より先に到着して居なくてはならないのに、ここまで遅くなるとは。やはり五航戦は弛んでいます」

「加賀さん。きつとあの娘たちにも何か事情が有ったんですから、話を聞いてあげてく  
らいは……」

「赤城さん……。分かりました。一度だけ言い訳を聞いてあげましょう」

そんな会話が『桜風』だけ置いてけぼりにして艦隊全てで交わされる中、その航空戦艦を通してAL艦隊との通信がMI艦隊、そしてAL/MI作戦参加艦艇出迎え艦隊全てに開かれた。

「MI艦隊より遅れる上に定時連絡をさぼるとは良い度胸ですね瑞鶴。教練を受ける覚悟は出来ていますね」

「開口一番それ言っちゃうの加賀さん!? こっちも連絡をサボったり遅れたくて遅れた訳じゃ無いのよー!」

「加賀。瑞鶴の言う通りだから少し待ってやってくれ」

「日向。・・・分かりました、では教練は一週間から三日に・・・」

「どっちにしても教練受ける未来しかないの私?!」

そしていきなり今までより更に騒がしくなる無線。名前こそ資料を見て知ってはいるが、それでも相手の人となりなどは大したことは知らない『桜風』は、ただ単に何も喋らずに嵐が過ぎ去るのを待つばかりだった。

「だってしょうがないじゃない! いきなり艦隊のみんなの電探や無線に大量のノイズが入ってきて、全然使えなくなっちゃったんだから!」

瑞鶴からこの一言が放たれるまでは。

「すみません瑞鶴さん。その話詳しくお願いします」

「え？良いけど・・・君は？」

「四日前に深山艦隊に編入された駆逐艦『桜風』です。そのノイズの事を教えて下さい」  
「え、君が駆逐艦?! そんなに船体が大きいのに!？」

「今は私の船体の事はどうでも良いです。それよりノイズの事を教えて下さい、今すぐ  
に！」

つい先ほどまで先輩たちにいじられていた姿とは一変して鬼気迫る声色と表情で瑞鶴を問いたただす『桜風』に、瑞鶴はタジタジとなりつつも言われるがままに大量のノイズの事について話し始めた。

「えつと・・・あれは熊野たちが北方棲姫を撃破して帰投している途中だったわね。前触れも無く艦隊の皆の電探と無線にノイズが奔って全然使えなくなつて、仕方が無いから誰も落伍しないように慎重に航行してたの・・・だよね翔鶴姉？」

「瑞鶴の言う通りです。荒天で海も荒れていましたので、せつかく勝つたのに落伍者を生んだら大変だと言う事で・・・」

「瑞鶴、整備不良の言い訳なら聞きませんよ?」

「加賀さんこれは本当だつて!なんならほかの皆にも確認してよ!」

「『これは』と言う事は、以前やった事が有るのね?」

「ただの言葉の綾だよ!」

そして正規空母娘同士で何時もの掛け合いが始まる中、瑞鶴に鬼気迫る表情で『大量のノイズ』の事を問いただした『桜風』は、唐突に黙り込んで考え込み始めていた。

「・・・『桜風』さん?どうしましたか?」

「『桜風』?何考えているの?」

「一体どうしたの『桜風』?」

そして『桜風』の妙な行動に疑念を抱いた青葉や陽炎、そして深山提督が話しかけたと同時に『桜風』は突如行動を開始した。

「深山提督。直ちに偵察機を全方位に出してください。彩雲だけで無くて艦載機全てを使つての偵察をお願いします。それと直ちに全艦艇を横須賀に帰投させましょう!」

「え?『桜風』さん?」

「自分はその『ノイズ』を発している主犯である超兵器を沈めてきますので、提督たちは……」

「HEY、『桜風』。突然何を言ってるデスカー？」

「『超兵器』？」

そして当然ながらいきなりの『桜風』の言動に疑問符を浮かべる艦隊の面々。『説明する時間も惜しい』と言わんばかりに苦り切った表情で二の句を告げようとした『桜風』の言葉に先んじて。

「……なに、これ……。『島』が……動いている……？」

瑞雲を飛ばしていた伊勢の一声が飛んできた。

それは、異常な戦艦だった。大和型戦艦を遥かに超える大柄な艦艇でありながら、異

常な速度で太平洋の海を走っていた。早い事で有名な駆逐艦島風の動きをそれなりに見ている日向たちであったが、その『見慣れた速さ』がまるで見戯に見える速度で航行していた。戦艦と判断したのも、ただ単に戦艦の主砲と思わしき艦砲を積んでいたからである。そしてその異常な戦艦は、まっすぐにこちらに向けて航行して来ていた。

「……え、なにこれ……夢……?」

「くっ、一手遅かった!」

余りの現実離れした光景に、深山提督を含めた艦隊の皆は呆然とする中、唯一駆逐艦『桜風』のみは艦隊から単独で飛び出した。

「さ、『桜風』さん?!」

「深山提督は直ちに艦隊の皆と一緒に避難してください! あいつは、『超高速巡洋戦艦ヴィルベルヴィント』は、私が沈めます!」

総員、第一種戦闘配備! 対超兵器戦に移行するよ!

サー! イエッサー!

通信を通じて『桜風』と妖精さんの声が響く中、何とか戻ってきた深山提督は日本本土への報告と、『桜風』の言葉を受け入れて艦隊の退避を開始させた。

見つけた・・・私が、ヴィルベルヴィントが超兵器で有ることを・・・証明出来る相手・・・

通信からは、深海棲艦とも、艦娘とも違う、新しい声が混線し始めていた。

## 第一三話 旋風、止むべし

「て、提督！あの大きくて異常に速い戦艦は何?!あれに臆せず向かっていった『桜風』って娘は一体何なの?!」

「落ち着け、伊勢」

「いやでも日向、アレを見て落ち着けって言われても!」

「伊勢、落ち着きなさい。今貴女が慌てふためいても意味が無いわ」

駆逐艦『桜風』が深山提督の指示を待たずに『超高速巡洋戦艦 ヴィルベルヴィント』へ突撃した後、『桜風』からの退避要請の声で我に返った深山満理奈少将は、本土に緊急電を発信しながら指示された通りに横須賀に向けて退避を開始していた。一応航空機を飛ばし、『桜風』に援護するか否かを問うも「援護不要。単独戦闘が最も敵超兵器を撃沈する早道なり」と言う今までにない強い口調で拒否された為、彼女たちは遠目で『桜風』の戦闘を見守るしかなかった。

「加賀さん。．．．『あの戦艦』に、命中させられると思いますか?」



「・・・難しいと思います」

「翔鶴姉、航空機用燃料や弾薬の余裕って・・・」

「もう無いわ、瑞鶴。後は高角砲弾や戦闘機用の機銃弾くらいしか残っていないわ」

現実問題。こういった事情もあつた。空母機動部隊はM I作戦、A I作戦での消耗が有り、対艦用兵装の残量が殆ど残っていないかつた。そして熟練の一航戦でも、いくら相手が巨大であると言つても『80ノットを超える速度で疾走し、大量の『20mm機銃』『12.7cm連装高角砲』『12cm30連装噴進砲』を大量に積み込んだ戦艦』相手に有効打を与えられると断言できる自信は無かつた。

「提督！今すぐ『桜風』の援護に・・・」

「・・・止めましょう、武蔵。私たちの速力だと、『あの戦艦』には到底追いつけない・・・！」

「大和!?!だが、このまま見ている訳には!」

「武蔵さん。『桜風』さんから態々「援護不要」と通信を入れてるんです。きつと今の私たちでは有難迷惑どころかあの戦艦・・・『超高速巡洋戦艦 ヴィルベルヴィント』を利する結果になりかねません」

「青葉っ?!・・・っ!・・・情けない!味方がたつた一隻で戦っている中、ただただ見守るしか出来ないとは!!」

「夕立も・・・武蔵さんと同じっばい・・・」

「装備が重いか、足が遅いかは・・・言い訳になりませんね・・・」

口惜しさ、そして自らの不甲斐なさにそう雄叫びを上げつつ、自身の艦艇の壁を殴りつける武蔵。空母機動部隊に続き、水上艦艇部隊でも駆逐艦『桜風』の通達通りに『超高速巡洋戦艦 ヴィルベルヴィント』と駆逐艦『桜風』の戦闘を傍観せざる終えなかった。水上部隊の彼女たちは、MI作戦、AL作戦に参加していた艦艇は兎も角として『AL/MI作戦参加艦艇出迎え艦隊』の方は、弾薬燃料こそ共に十分に有ったが、どう頑張っても『桜風』と『ヴィルベルヴィント』の速度に着いていけそうも無かった。駆逐艦島風の最大速度40ノットを軽く超える速度と狂った速度での砲撃戦を見ても戦闘介入しようとする艦娘が居たら、その娘の行動は『勇氣』では無く『蛮勇』と称されるだろう。それも、味方に損害を与えるタイプの。

それだけ、艦娘たちにとってみれば『超高速巡洋戦艦 ヴィルベルヴィント』は、あらゆる意味で手に負えないと言う表現が生易しくなるレベルでの脅威だった。

——・・・艦隊に入ってから一週間も経たないうちに沈んだら承知しないよ、『桜風』・・・

陽炎か、不知火か、それとも提督か青葉か瑞鳳か、誰の者とも知れぬ言葉が喧騒に包まれていた艦隊の中でつぶやかれている中、『ヴィルベルヴィント』と『桜風』の血戦は、未だに続いていた。

「・・・相変わらず、異世界に来てもその俊足は健在ねっ、『ヴィルベルヴィント』！」  
『『前』と比べたら相当速くなってますね！』『通信暗号解析です！武装は以前の物と大差無い様子！』『観測の結果、敵艦の損傷皆無！』『前』の西海岸沖とは違います！』『砲撃戦よーい！』『雷撃装填完了、何時でも雷撃可能！』『各種補助兵装に異常なし！いつでも行けます！』

一方こちらは少し時を戻して、深山艦隊を飛び出して『超高速巡洋戦艦　ヴィルベル

『ヴァイント』を捕捉した直後の駆逐艦『桜風』の艦橋。先の深海棲艦との戦いでは割とおちやらけた雰囲気の有った妖精さんたちが、今では全員が真剣な表情で自らの職務をこなし続けている。当然妖精さんたちの艦長である『桜風』も、真剣な表情で『ヴァインベルヴァイント』を睨みつけていた。

『……せめてもう4基くらい7連装酸素魚雷発射管があれば、直ぐに……』

「副長、今更練り言を繰り返しても意味ないよ。今はそんな不毛な事を考えずに……」

『艦長！』『ヴァインベルヴァイント』から主砲の発砲を確認！』

「回避は直前の転舵で大丈夫！今は『ヴァインベルヴァイント』の進路先に回り込む様にして距離を縮める事を優先！」

『サーイエツサー!!』

現段階でも50ノットを超える速度を誇る『桜風』だが、相手は『85ノット』と言う『桜風』を遥かに圧倒する『ヴァインベルヴァイント』である。だが追いつけない手段が無いわけでもなく、『ヴァインベルヴァイント』はその巨体が災いして旋回する時は極めて大きな弧を描かざる終えない為、『ヴァインベルヴァイント』の旋回時を狙って予測進路上の最短距離を直進すれば一気に近付けた。一撃離脱に徹せられたら、対艦兵装の弾薬搭載量

が少ない『桜風』の方が先に根負けしかねないが、何を考えているのか『ヴィルベルヴィント』は『桜風』を沈めようとする艦艇運動を展開していた。『桜風』にとつては勿怪の幸いである。

「・・・さて、戦法はいつも通りにやろうか」

『弾幕突破、敵艦突入、零距离雷撃ですね』

「うん」

『相変わらず普通じゃないですよねこの戦い方』

「『普通の戦い方』じゃ超兵器はどうやって倒せないよ。操舵手、右に転舵。そもそも

『普通の戦い方』つて一度も私たちが習った事無いよね。舵中央に戻して」

『それもそうですね』

こんな会話がなされている中、駆逐艦『桜風』の近くには『ヴィルベルヴィント』から放たれた28cm砲弾の至近弾が複数着弾し、大きな水しぶきをあげていたのだが、『桜風』には何時もの事でしかないので全く気にする事無く航行を続けていた。なお先ほどから深山艦隊から五月蠅く入ってくる通信は面倒かつ気が散るので「我戦闘中ニツ

キ通信ヲ遮断ス』と伝えた後は受信機能を強制シャットダウン済みである。

『敵超兵器『ヴィルベルヴィント』の接近を確認！もうすぐ主砲の射程距離に入ります！』

「主砲の狙いは比較的脆弱と思われる煙突や艦橋部分。雷撃はいつでも出来る様に準備！」

『サー！イエッサー！』

『ヴィルベルヴィント』、噴進砲をこちらに向けて連続射出！』

「『40mm4連装機銃』並びに『RAM』！迎撃はじめ！」

そして、駆逐艦『桜風』と超高速巡洋戦艦『ヴィルベルヴィント』との、異世界の海での血戦が始まった。

「さあ・・・かかってきなさい、『ヴィルベルヴィント』！今度こそ、貴女を海神の御許へと葬ってみせる!!」

敵艦捕捉……解析……駆逐艦『桜風』……間違いない……私を、『ヴィルベル  
ヴィント』を沈めた……駆逐艦……！

85ノットの高速で航行する巨大戦艦。その艦橋の中で、一人の女性がディスプレイに映る駆逐艦『桜風』を、歓喜の表情で見つめていた。彼女は『ヴィルベルヴィント』であつたが、深海棲艦でも、艦娘でも無い。その証拠に、本来なら深海棲艦に存在するはずの無機質で機械的な部分は存在しないし、艦娘に存在するはずの妖精さんのような存在も無い。彼女は超兵器の一角である『超高速巡洋戦艦 ヴィルベルヴィント』。それ以上でもそれ以下でもなかった。

私は勝つ……必ず勝つ……『超兵器』は……『駆逐艦』なんかに負けはしない……！

何故『ヴィルベルヴィント』がこの世界に居るのかは分からない。自身に対して命令する者もない。『彼女』はただ、『自身の存在』を証明する為に戦うだけだった。

28 cm 砲・・・48. 3 cm 酸素魚雷・・・32. 4 cm 誘導魚雷・・・駆逐艦『桜風』を・・・撃沈せよ・・・!

そして、『ヴィルベルヴイント』からも幾多の攻撃が放たれる。85ノット、時速157 kmと言う艦艇最高峰の速度からの攻撃は、『前』とは違い完全なる損傷皆無での戦闘である事もあり、『前』よりもはるかに精密に、大量に、濃密な攻撃であった。

「・・・な、なんですか、あれは・・・？」

「・・・二隻とも、すつごく早いっほい・・・」

「・・・信じられない・・・。こんな戦艦のデータなんて、何処にもない・・・」

「・・・『桜風』・・・」

その頃の深山満理奈率いる艦隊は、駆逐艦『桜風』の具申に従って戦闘海域の外へ脱出する事に成功していたが、伊勢と日向、そして熊野と鈴谷が交代しながら張り付けている瑞雲を通して『桜風』と『ヴィルベルヴイント』の戦闘を観察していた。武蔵が先



に言っていたように、この艦隊の皆が『桜風』一隻に全てを任せてのんびりできる様な精神を生憎と持ち合わせていない為、『桜風』の忠告を受け入れつつも援護の絶好機が訪れないか見ていたのだ。結果は先ほど感じた無常観を鼻で笑うレベルでの異次元の戦闘を直視した事による戦意喪失であったが。早い話一戦交える前の時点で足がすくみ、戦う意志が挫けてしまったのだ。

「・・・青葉。本土から偵察機とかは来ている？」

「・・・・・・・・」

「っ、青葉！聞こえてる!?!」

「はっ、ハイ！え、ええっと、ハイ！つい先ほど航空自衛軍所属の偵察機が出撃したと・・・・・・・・」

「直ちに『桜風』と『ヴィルベルヴィント』が戦っている海域に向かうように伝えて！」  
「は、はい！直ちに！」

・・・これは、重症ね。

深山少将は、何時も元気で反応も良い青葉が、今までに無い表情で呆けていた姿を見て、溜息を吐かざる負えなかった。艦隊のムードメーカーとしていつも元気で活動的な

青葉がここまで硬直している。青葉でこの状況ならば、他の艦娘も似た様な状況だろう。

「・・・提督。自衛軍の偵察機を送って、どうするつもりですか？」

深山少将が座乗している重巡洋艦娘の『古鷹』が、疑問を投げかける。今『桜風』が相対している『ヴィルベルヴィント』が深海棲艦なのかそうでないのかは彼女たちには分からなかったが、少なくともカメラ以外は何も搭載して居ないであろう偵察機を向かわせても『桜風』の直接的援護にならない事は明白だった。

「『桜風』を守る為。そして日本を守る為よ」

「・・・『桜風』と『ヴィルベルヴィント』との戦闘を撮影する事が、『桜風』と日本の為になるんですか？」

「ええ、そうよ」

「・・・実際に行動するのは内閣と政権与党に海軍庁や防衛省、それに自衛軍の将軍たちだけだね。」

古鷹の疑いの目線から目を逸らしながら、深山少将は内心でそう独白していた。深海

棲艦との戦争で、既に公安などの活躍によって国益を害するような反軍反政府勢力の多くは転向若しくは無害なまでに刈り取られつつある。今ネットやテレビ等で悪目立ちしている連中は国民全てから呆れられ、見捨てられつつある。この場面に新たにこの『超兵器と言う脅威』の存在が加われれば、少なくとも艦娘や自衛軍に対して無意味な妨害、侮辱行為を行う輩は殆ど居なくなるはずだ。少なくともそいつらを力づくで排除しても、国民は軍と政府を支持するだろう。そうなれば、残る日本国内の害は軍内部の事だけになり、今まで大事にしないようにしていた『世間への配慮』も常識的範囲以上では不要になり、悪質な提督などへの肅清もうまくいくはずだ。それら全ては艦娘、そして『桜風』を守ることに繋がる。

「・・・でも、『桜風』が生還しないと意味がないんだからね」

未だ遠征などに行っていて『桜風』と逢っていない深山艦隊の艦娘は大勢いる。皆に紹介する為にも、五体満足で生還する事を深く祈りだす深山少将だった。そして、その深山少将の行動を見て大和や青葉たちも、ある娘は静かに祈りだし、ある娘は伝わらないと分かっている上で、声を枯らして『桜風』を応援していた。必ず帰ってこい。皆『桜風』に会いたがっている。『桜風』の事をもっと知りたい。そんな色々な思いを込めて。

「・・・ふう、煙突、艦橋、全然破壊できない」

『ですが、今までにかなりの主砲弾を撃ち込みました！二回ほど『ヴィルベルヴィント』の炎上も確認しています！』

「しかし直ぐに消火されてもいる。既にある程度砲雷撃を叩きこんでいるとはいえ、少なくともあの『85ノット』の速度を何とかしないと、効率的に雷撃を全弾命中させられない」

『・・・それは・・・』

「まあ焦つても仕方が無い。制限時間は無いし、敵主砲弾の被弾も無い。『12cm30連装噴進砲』こそ被弾したけど、『防御重力場Ⅳ』と船体防御装甲でダメージ皆無。大丈夫、私たちは勝てるよ」

『ハッ！』

交戦開始から二十分近く経過するが、状況は戦闘開始時と比べるとあまり変化が無

かった。『桜風』が搭載して居る『15. 5 cm 75口径4連装砲』では『ヴィルベルヴィント』に対して即座に大きなダメージを与える事は不可能だった。所詮駆逐艦の主砲は豆鉄砲でしかないのだ。その為、『前回』と同じように少しでも『ヴィルベルヴィント』の排煙能力を削り、速度を低下させるべく艦艇中央部の煙突、そして指揮能力の低下を狙い艦橋を狙って撃ち込んでいるも、そう易々と破壊される事は無かった。彼我の速度差の関係で攻撃チャンスが少なすぎるのも有ったが。

「・・・そんなこと言ってる間に、来た！」

『艦長！やりました！』『ヴィルベルヴィント』の煙突を破壊しました！』

『見張りより艦橋！』『ヴィルベルヴィント』の速度が急速に低下しています！』

そしてそんな事を話していたのがフラグになったのか、何十射目かの斉射が『ヴィルベルヴィント』の煙突内部に飛び込み、蜂の巣装甲を貫通してそのまま機関部近くで炸裂。機関部に僅かながらにダメージが入り込んだ上に、『ヴィルベルヴィント』の煙突は根元から輝が入り、続けざまに15. 5 cm 75口径砲弾が3発煙突根元に命中。煙突の輝は一気に広がりを見せ、止めとなる同航戦で放たれた15. 5 cm 75口径12発が煙突部分に集中して命中。耐え切れなくなった『ヴィルベルヴィント』の煙突は崩壊し、排

煙能力は一気に低下。その結果は『20ノット以上低下した『ヴィルベルヴィント』の速度』とダイレクトに現れた。

「よし！これなら十分に行ける！十ノット少々の速度差なら艦艇運動でいくらでも、どうとでもなる！」

『よっしやあ！水雷妖精張り切つてやつたるでえ！』

『砲術妖精！同じく気合！入れて！！行きますす！！』

『気合入れるのは良いがマジでやってくれよお二方ア！もう機銃で魚雷や噴進弾迎撃するのはウンザリだ！』

延々と小回りを活かして『ヴィルベルヴィント』の行く先に回り込み、『15・5cm 75口径4連装砲』を撃ち込み続けると言う精神的に来るものがある戦闘からようやく解放された『桜風』の妖精さん達は、文字通り士気高揚状態だった。『これならこのまま『ヴィルベルヴィント』に打ち勝てる』。皆がそう感じていた。

・・・また・・・負けるのか・・・

『超高速巡洋戦艦 ヴィルベルヴィント』の艦橋では、一人の女性が項垂れていた。必死に戦った。『前』とは違って、今回は損傷皆無で、全力で駆逐艦『桜風』に挑みかかった。・・・だが、相手はこちらの攻撃を嘲笑うかのように加減速と転舵を繰り返して回避し続け、唯一命中させた『12cm30連装噴進砲』は、相手の防御重力場によつて無効化された。砲撃も雷撃も回避され続け、今度は攻守逆転して『桜風』に攻め立てられている『彼女』には、もう打つ手は無かった。

そして、『彼女』・・・『ヴィルベルヴィント』の脳裏には、早くも走馬燈が奔り始めていた。ウィルキア帝国初の超兵器として建造された事。初の実戦でアメリカ太平洋艦隊を『超巨大爆撃機 アルケオプテリクス』と共に壊滅状態に追いやった事。司令部からの命令でアメリカ西海岸を襲撃した事。アメリカ軍の沿岸砲台によつて速力低下の損傷を受けた事。その隙を突かれて、駆逐艦『桜風』に沈められた事。そして・・・

・・・『艦長』・・・乗員の皆・・・

アメリカ海軍に引き上げられた後、『ワールウィンド』として、アメリカ海軍に多大な

期待をかけられて修復後に再就役し、短期間とは言え大切にされた事。

『超高速巡洋戦艦 ヴィルベルヴィント』は、ウिल्キア帝国初の超兵器である。その為か、性能は後々出てくる同族と比べるととても慎ましやかな物であり、だからこそ母国である帝国からは『別に沈んでも惜しくない』とばかりにぞんざいに扱われていた。本来ならその圧倒的高速力を生かしての通商破壊戦や奇襲戦法がセオリーだと言うのに、厚い防御力を持つ重防御高火力の戦艦型超兵器か、若しくは多数の航空機を運用可能な空母型の超兵器にでもやらせるべき沿岸砲台の撃滅任務を、いくら『超兵器』であるからと言っても事もあろうに一番不適格である『ヴィルベルヴィント』にやらせていたのだから、帝国から見た『ヴィルベルヴィント』の存在価値が分かると言うものであろう。

だが、駆逐艦『桜風』に撃沈された後、『ヴィルベルヴィント』を引き上げて修復したアメリカ海軍は違った。ウिल्キア帝国以外で初めて超兵器を保有したと言う事もあるが、その薄い装甲を代償として得られた圧倒的速力を有効活用する方法を確りと見出したがゆえに、『ヴィルベルヴィント』改め『ワールウインド』は大切に扱われていた。元巡洋艦乗りでも若手のホープを艦長に据え、乗員もベテランとルーキーに若手と各種



混合だったが、ウィルキア帝国軍時代には無かった暖かい雰囲気があった。帝国の粗雑な扱いに絶望して、しかも駆逐艦如きに沈められた事に自棄になっていた『彼女』の意志も、習熟訓練中だったアメリカ人がやらかす事件や艦長たちの明るい雰囲気、次第に冷え切った心も解され、動かされていった。

だが、戦場の神は余りにも『彼女』に対して残酷であつた。『ワールウインド』が訓練を終えて通商破壊任務に就き、初陣を飾ろうとした当日に超兵器『フォーゲル・シユメラ』の襲撃を受けた。航空機としては有り得ない変則的機動で『ワールウインド』の対空射撃をあつさりと交わした末に、ホバー砲の一撃で『ワールウインド』は撃沈された。一瞬で爆沈した為に乗員は一人残らず全滅。『フォーゲル・シユメラ』に対する損傷は皆無。交戦時間、僅か243秒。：それが、『彼女』とアメリカ人乗員の『稼い<sup>命</sup>だ<sup>損</sup>戦<sup>傷</sup>果』<sub>値</sub>だった。

・・・私は負けない

その事を思い出した『ヴィルベルヴィント』・・・否、『ワールウインド』は、自らの

意志で、超兵器機関のセーフティ自身の枷を破壊した。『自身の存在の証明』の為？『ヴィルベルヴィントの汚名を返上』する為？『粗雑な扱いをしたウィルキア帝国を見返す』為？否、『彼女』は『そんな物』の為に、超兵器機関を暴走状態にさせた訳では無かった。

・・・艦長たちの、『ワールウインド』の乗員の命は、駆逐艦に負ける様な、そんなに安っぽい物じゃない！

泣きながら叫んだ『彼女』の言葉は、超高速巡洋戦艦 ヴィルベルヴィント【最弱の超兵器】の『彼女』を大切にしてくれた唯一の存在である『ワールウインド』の乗員に対する贖罪償の言葉であった。

「・・・嘘でしょ、『ヴィルベルヴィント』が暴走?!」

『『ヴィルベルヴィント』の速度、再度加速！推定100ノットを超えています！』

『オイオイオイオイオイ!!? 排煙が機関部に逆流している筈なのに大丈夫なの

かアレ!？」

『大丈夫な訳無いでしょ砲術妖精!あの状態だと何時『ヴィルベルヴィント』の超兵器機関が爆発崩壊してもおかしくありませんよ!』

『あと少しで撃沈できる』。そう思った矢先の『超高速巡洋戦艦 ヴィルベルヴィント』の暴走は、駆逐艦『桜風』の妖精さんと『桜風』自身を驚愕させるに足るものであった。『超兵器の暴走』自体は『グロースシュトゥール』や『ヴォルケンクラッツァー』で見慣れている。だが『ヴィルベルヴィント』の暴走と言う事態は全く想定外の出来事だった。

『『ヴィルベルヴィント』、高速で離脱して行きます!・・・いえ、転舵しています!』  
「まさか逃走する訳も無い・・・。つ、航海妖精!『ヴィルベルヴィント』と『桜風』の直線上に何かある!」

『・・・深山艦隊、それと東京湾です!』

「退避・・・は、もう間に合わない。そもそも今の状況だと、通常艦艇では100ノットを突破している『ヴィルベルヴィント』から逃げられる場所が無い!」

『桜風』と『ヴィルベルヴィント』の血戦による艦艇運動の結果、位置関係として小笠原

方面から東京湾に向けて『ヴィルベルヴィント』、『桜風』、そして深山艦隊の面々が存在する状態だった。『ヴィルベルヴィント』が『桜風』に向けて突入した場合、仮に『桜風』が『ヴィルベルヴィント』を回避したら『ヴィルベルヴィント』はそのまま深山艦隊に向かつて突入し、蹂躪する事は明白だった。それだけでなく、東京湾に突入されたら、28cm砲による砲撃で関東各地は火の海となるだろう。要約すれば、『ヴィルベルヴィント』は『桜風』に対して仲間、そして東京を見捨てない限り西部劇のガンマン同士の決闘の様に真つ向勝負せざる負えない状況を作り出したのだ。

「・・・上等じゃない『ヴィルベルヴィント』。彼女の望み通り、こっちも正面から挑みかかるよ！」

『了解です！』

「操舵手！水雷妖精！私の指示を聞き落とさないで！タイミングを間違えれば『桜風』は『ヴィルベルヴィント』との正面衝突で海の藻屑になるよ！」

『ハッ！』

当然ながらこの『ヴィルベルヴィント』からの挑戦状に臆する『桜風』とその妖精さんでは無く、速度を落として『ヴィルベルヴィント』との位置を調整しながら、正面か

ら高速で突入してくる『ヴィルベルヴィント』に向かい、こちらも真つ正面から突撃した。

「『桜風』が『ヴィルベルヴィント』に向かって正面から突撃したあ?!」

「無茶っばい! 無謀っばい!! 沈んちやうっばい!!」

「何やってるのよ『桜風』! いくら『桜風』が強いと言っても、あんなのと衝突したらただじゃすまないわよ!」

そして『桜風』の突撃を見た深山艦隊の面々は、『桜風』の無謀な行動に戦慄していた。煙突が崩壊し、速度が見るうちに低下した時は皆歓声を上げていたのだが、その後、『私は負けない』と言う謎の混線が入った直後に『ヴィルベルヴィント』は異常な加速を開始し、一度離脱した後に『桜風』に向かって突撃し、『桜風』も回避するそぶりも無く正面から最大船速で突撃した。『桜風』の分析が届いていない彼女たちには、『桜風』の行動の意味が分からなかった。

戦域外で慌てふためく深山艦隊の艦娘たちを他所に、『桜風』と『ヴィルベルヴィント』

の正対距離は急激に縮まりつつあった。当然相互に砲撃は繰り返されているが、『桜風』の砲撃の津波は『ヴィルベルヴィント』に対して有効な打撃を与えているようには到底思えず、対する『ヴィルベルヴィント』の砲撃は『桜風』に命中する直前に『まるで弾かれたかのように』明後日の方向へと軌道を変え、着水していた。

唐突に瑞雲と彩雲を通して深山艦隊の艦娘の艦橋に響き渡る金属同士の衝突音と鼓膜を殴りつける様な爆裂音。明らかに『桜風』と『ヴィルベルヴィント』が激突した音である。最悪の未来予想図が脳裏を過つて、深山提督も含めて血の気が完全に引いた艦娘たち。だがまたもや唐突に響き渡った爆発音に引き続き、先ほどまで沈黙していた通信機が作動した事により、真っ白になった顔色がもとに戻っていくことになるのだが。

「……最期の最期に、やってくれたね。『ヴィルベルヴィント』」

「『桜風』さん!？」

「『桜風』! 貴女大丈夫なの?!」

「……こちら、駆逐艦『桜風』。超兵器『ヴィルベルヴィント』の近接砲雷撃並びに艦尾への衝突により防御重力場を撃ち抜かれて一部兵装に被弾誘爆するも、戦闘続行に問題無し」

「問題無い訳無いだろう！無茶を言うんじゃない『桜風』！」

「正確な状況報告です。駆逐艦『桜風』はまだ戦闘可能です。……もう、戦わなくても大丈夫な様子ですけど」

そう通信機を通して深山艦隊に報告する『桜風』の目の前には、多量の被雷と自身の高速によって大量に艦内に流れ込んだ海水の量に耐え切れずに、この横須賀沖の深い海に沈んでいく『超高速巡洋戦艦 ヴィルベルヴィント』の姿が有った。

『……すれ違いざまに、文字通りの零距离雷撃で、敵艦を仕留める。『ヴィルベルヴィント』も、同じことを考えていたようですね』

「そうね。ただ、『ヴィルベルヴィント』の不幸は、搭載魚雷が比較的低火力だったと言っただけ」

『音速酸素魚雷や80cm酸素魚雷だったら、沈みはしないまでも大破は確実にでしたね……』

「あの近距離だと迎撃は間に合わないしね。それに、搭載弾薬の誘爆の可能性も考慮し

たらワンチャンスでこっちの方が爆沈していた可能性だつて零ではない」

綱渡りの血戦だつた。『桜風』にとつても、『ヴィルベルヴィント』にとつても、最後の一瞬の殴り合いで自身の持つ雷装も火砲もすべて相手に叩きつけていた。『桜風』が最後に勝てたのも『防御重力場Ⅳ』を搭載していたのと『ヴィルベルヴィント』の魚雷が『48.3cm酸素魚雷』と『32.4cm誘導魚雷』と言う低性能だつたからである。何か一つ変化があれば、この海で最後に残つたのは『桜風』では無く『ヴィルベルヴィント』の方であろう。

「ゴポツ・・・痛っ」

『艦長!?!』

「大丈夫、ちよつと痛んだだけだから・・・」

『「こちら深山提督。『桜風』、貴女本当に大丈夫なの？損害報告して』

『「こちら『桜風』。艦尾に搭載して居た『RAM』が3基、『40mm4連装機銃』が5基誘爆若しくは被弾し使用不能。艦艇前部の第一主砲と後部の第四主砲が使用不能。艦橋上部に敵主砲弾が命中し艦艇中央部にも酸素魚雷が二本命中。最後に『ヴィルベルヴィント』の体当たりで艦尾が一部抉れ、機関部にも衝撃が走つて速度低下している程度で



す」

【『完全に重症じゃない!?』】

【『というか『桜風』。今凄くいやな咳き込みが聞こえたんだけど』】

「ちよつと血が出ただけです。・・・血の味って、なんだか変な味ですね。美味しくないです」

【『何馬鹿な事言ってるの『桜風』?!』】

【『吐血って相当ヤバイですよ『桜風』さん！今すぐ入渠しましょう絶対しましょういや絶対させます!!』】

【『御免加賀、瑞鶴。邪魔が入らないように偵察を密にして！『桜風』を縛ってでも入渠ドックに放り込むわよ!』】

【『了解』】

【『分かったわ、提督さん!』】

・・・別にそんなに心配しなくても、『昔』と比べると重症じゃないんだけどなあ・・・  
駆逐艦『桜風』の負傷状態を知った深山艦隊の面々が慌てふためくのを疑問に思いながら、『桜風』は艦橋席から立ち上がって『ウイルスベルヴィント』の沈みゆく姿を見やる。周りで妖精さんが必死に座らせようとしているが完全に無視している。

「・・・超兵器『ヴィルベルヴィント』。貴女は決して【最弱の超兵器】なんかじゃない。ただ、貴女が生まれ、居合わせた場所が悪かっただけよ」

通信など出来ていない。『ヴィルベルヴィント』に届いている筈も無い。これは、ただの『桜風』の自己満足とも言うべき独白である。

「・・・私は、決して、貴女を忘れたりはしない。私も、ある意味貴女と同じだから。道が少しでもズレていたら、『駆逐艦<sup>私</sup>『桜風』も』超高速巡洋戦艦<sup>貴</sup>『ヴィルベルヴィント』になつていただろうから」

そう言いつつ、『桜風』は沈みゆく『ヴィルベルヴィント』に対して、見事な敬礼を行った。倒すべき超兵器ではあったが、最後まで勝利を諦めずに戦い抜いた『戦士』に対して愚弄するような術は、生憎と『桜風』は持ち合わせていなかった。

「さようなら、超兵器『ヴィルベルヴィント』・・・いえ、超兵器『ワールウィンド』。今はゆつくり休んでね。いつか、私もそっちに行くから、その時に色々話は聞いてあげるわ」

その一言を最後に、『桜風』は深山艦隊の元へと針路を向け、航行を開始する。相変わらず・・・と言うより『桜風』の損傷を聞いてより大騒ぎしている艦娘と深山提督に対して『心配性だなあ。私なんともないのに』と苦笑いしながら。

——  
ありがとう

その声が『ワールウィンンド』から来たものなのか、それともただの感傷に浸っていたが故の幻聴だったか、そしてどんな意味を込めて誰に対しての言葉だったのかは、妖精さんにも、『桜風』にも、誰にも分からなかった。

## 第一四話 超兵器戦闘の波及

「なあ龍田」

「なあに、天龍ちゃん？」

「提督、どうして艦隊の皆を集めたんだろうな？」

「『未知の兵器に襲撃された本土艦隊の防衛の為』でしょう？」

「……俺まで呼ぶ事は無いと思うんだがな。燃費だけが取り柄の万年遠征旗艦の旧式軽巡なんてさ」

……本当にもう、天龍ちゃんは提督の居ないところだといつもこうなんだからあー提督が居らず、そしてその場に妹の龍田しかない無いと言う状況でしか出ない姉である天龍の弱音を聞いて、龍田は何時もの如く困った微笑を浮かべていた。この意地っ張りの姉は何時もこうなのだ。常日頃駆逐艦娘には姉御肌で、事有る事に『世界水準』『世界水準』と強気な発言で皮を被っているも、龍田の前では自分の性能の低さを何時も嘆いている。

「そんな弱気な事言っていると、提督に心配されるよ？」

「い、いやそれは困る！提督には俺の弱音を聞かれる訳にはいかない！」

「……もうとつくにバレてると知ったら、天龍ちゃんどんな反応するのかなあ？」

慌てふためく自分の姉に『天龍ちゃん可愛い』と思いつつ『いつ本当の事話そうかなあ』とサデイスティックな氣質を覗かさせる軽巡洋艦娘の龍田。直情型でその実自身の性能不足を気に病んで気弱な姉をサデイスティックな妹が弄り倒す。この姉妹では何時もの事である。

「……あれ、あんな艦艇いたか？」

「……あら、本当ねえ。新入りかしら？」

そして自分の提督が居る母港横須賀へと到着した天龍と龍田だが、まず久し振りの母港で目についたのは『修理作業に入っている妙な艦装が施された見た事の無い軍艦』であつた。

「……すげえ。見た事も無い艦装が満載だ」

「でもスツゴイ損傷していた跡が見えるわね。どうしてあんな風になつたのかしら？」

「きつと油断して深海棲艦の奇襲でも受けたんだろ。良し！そうとなればこの天龍様が此奴を鍛えてやるか！」

．．．簡単に立ち直るのは良いけれど、本当に『深海棲艦との戦いで』出来た傷かしら？

弱気な姉が強気な姉に戻ったのを尻目に、龍田は冷静に『新入りの軍艦』を観察していた。自分たちが艦艇に据え付けている機銃よりも大きい事が一目でわかる大口径機関砲を4連装に纏めた対空機関砲、中口径砲を4連装で艦艇の前後に二基ずつ、口径61cmと思しき魚雷発射管が計4基、それも7連装と言う夢で見た事すら無い雷管。明らかに自分たちよりも洗練されている電子艦装と船体。そして何の用途に使うのか不明な白く塗装された艦装。どれも異様な艦装であった。

．．．天龍ちゃん、張り切るのは良いけど、この娘絶対『普通じゃない』わよく？

「・・・古鷹さん」

「駄目です」

「・・・もう大丈夫なんですけど」

「絶対、駄目です！」

・・・本当に大丈夫なだけどなあ

そう独白するのは、超兵器『ヴァイルベルヴィント』改め『ワールウィンド』を撃沈した殊勲艦である駆逐艦『桜風』。彼女は今、深山艦隊の宿舎で重巡洋艦娘の古鷹の護衛の元工廠にある医務室で療養に勤めていた。否正確には勤めさせられたと言うのが適切だろうか。今の『桜風』は深山艦隊の艦娘に代わる代わる監視された状態での軟禁状態だった。

「『桜風』さん自身は何とも思っていないなかったとしても、こっちはすっごい心配したんです！少しは反省して下さい！」

「いやでもですね古鷹さん。基本的に生きて帰れば後は万事オーケーだと『桜風』は思うのですが・・・」

「その考え方が駄目なんです！あんなにポロポロになって、『桜風』さんの身体も血塗れになって・・・なのに『万事オーケー』じゃ有りません！」

・ ・ ・ 駄目だ、本気で古鷹さん怒ってる

漫画的擬音表現だと『ウガー!』とでも付きそうな可愛らしい姿で怒りを表現している古鷹だが、流石の『桜風』も古鷹が本心では心の底から自分の事を心配してくれていて、だからこそ怒っているのは分かった。駆逐艦『桜風』に乗り込んだ時に『桜風』のあの状態を見れば当たり前だろうが。

「チーツス! 『桜風』、ちゃんと良い子にしてたー?」

「鈴谷、貴女もう少し言葉使いを直した方がよろしくてよ?」

「細かい事はいいじゃん熊野! ・ ・ ・ お、ちゃんとベットに居るね。よしよし、ご褒美にお姉さんが撫でてあげよう」

「ア、ハイ」

そしてそんな中医務室に参入してきたのは改最上型航空巡洋艦の鈴谷と熊野。この二人も帰還してきた駆逐艦『桜風』に乗り込んで血塗れだった『桜風』を確保して医務室に強制搬入した主犯である。

「『桜風』、貴女本当に大丈夫なのですか?」

「熊野さん。 ・ ・ ・ はい、もう体調は万全です。走り回っても大丈夫です」

「艦艇の方ももうすぐ修理が終わるからねー。でも『桜風』は期限が来るまでここでお姉



さんたちと一緒に過ごして貰うよー？だから、もう脱走しようとしなくてね？」  
「・・・もう諦めましたよ」

そうやって乾いた笑みを浮かべる『桜風』。鈴谷たちが駆逐艦『桜風』の艦橋に乗り込んだ時、丁度血塗れの衣服を脱いで居た為に上手く反応できないまま問答無用で簀巻きにされてこのベットに放り込まれたのち、『桜風』は自分の艦艇に戻ろうと試みた物の、外を見張っていた鳳翔に即座に捕捉されて一撃で昏倒し、その後は艦娘が交代で見張りについていた。不満が無い訳では無かったが、帰還後に見舞いに来た陽炎に『ワールウインド』戦で身体に出来た傷跡を見られて『こんなに無茶して！』と説教されて以降は、少なくとも完治するまではこの医務室に居る様に深山提督に宣告された。

「そういえば、深山艦隊に所属している艦娘が全員集結するのは何時でしたか？」

「三日後ですね。その時は『桜風』さんがみんなの前に出て自己紹介と超兵器に関するレクチャーをする手筈になっています」

「プレゼンテーションの資料はもう『桜風』の妖精さんが作成してくれているから、『桜風』は皆からの質問に答えるくらいで大丈夫だよ」

「鈴谷・・・『桜風』にもたれ掛かっては・・・はあ・・・一応あの場所に居た私<sup>わたくし</sup>たちも援護しますから、『桜風』は気にせず正直に全部話してくださいな」

「分かりました」

—— 大人数を前にしてのプレゼンテーションや質疑応答とか初めてなんですけど大丈夫ですか……

心の奥底ではそのような事を思いながらも『為せば成る、成さねば成らぬ、何事も』と出たとこ勝負で行くしか無い事は分かっていたので、取り敢えず『桜風』はそう簡潔に返答した。もし答えに困る質問などで答えに詰まったりして駄目だったら容赦無く鈴谷や熊野たちに助けを求めてブン投げる気満々である。

「……ところで、古鷹さんたちは深海棲艦との戦闘に行かなくても大丈夫なんですか？」  
「おく、舌の根の乾かぬ内に脱走するつもりかなー？でもそんな事したらいくら優しいお姉さんでもちよつち怒つちやうぞー？」

「違いますって鈴谷さん。単純に気になっただけなので」  
「海の方なら心配不要ですよ？加賀さんや瑞鶴さんたちが、『桜風』が開発した航空機の試験運用もかねて遊弋してますので」

「……何というか、貴重な資源を使ってあんなのしか開発出来なくて申し訳ないのです

が……」

……自己評価が低いと言うのか、それともこの世界の常識を知らないのか……この様子だと、きつと後者ですわね……

『桜風』の評価を聞いて、加賀や瑞鶴が瑞鳳の説明を受けながら『桜風』製の艦載機を見て目を点にしていた姿を思い出しながら、そんな事を思う熊野だった。

「……今日は何時もと違うわね」

「……そうですね。青葉にも加賀さんも瑞鶴さんもずっと黙って艦載機を飛ばしている姿を見た事は有りません」

「それだけ真剣に『桜風』製の艦載機的能力を把握しようとしているのは分かるんだけどね」

「正直違和感が凄いね、あの二人の掛け合いが無いと。ところで提督、あの箱に入れられ

たのは一体何？」

「あとで使おう」

場面は変わって此処横須賀の沖合では、深山艦隊の精鋭空母娘の代表格である加賀と瑞鶴が、駆逐艦『桜風』が先日開発した艦載機の運用試験を行っていた。因みにこの場に居るのは加賀と瑞鶴に加えて、カメラマン役に青葉、念には念を入れての対潜戦闘要員に陽炎、A S 3 3 2や零式水偵一一型甲、晴嵐改に強風の運用試験の為に伊勢と日向。そして二つ箱をこの場に持ち込んできた深山提督がいた。

「・・・本来は局地戦闘機の筈の雷電が空母から発艦しているのを見ると違和感しか出ない筈なんだけど」

「加賀は見事に操っているな。それに瑞鶴も陣風の様な大柄かつ大馬力の機体を操った事も無いだろうに、あれだけ綺麗に編隊を組むのも実に見事だ」

陽炎の呟きに日向が答える。陸上戦闘機である雷電もそうだが、史実では震電の開発に注力する為に開発計画を統合されて幻の戦闘機となった陣風に関しても、戦局が終末期に突入していた事も有って艦載機用装備は搭載せずに開発されていた。その為『本当ならば』雷電も陣風も艦載機として運用する事など不可能であった。

「でも瑞鳳さんのレポートには着艦フックは装備されているみたいですが・・・」  
 「私たちが進んだ歴史と、『桜風』が生きた歴史は違うのよ。装備に違いが出るのは当たり前でしょ?」

「・・・それは、そうですが・・・」

そんな事を話している深山提督たちの会話を遮る様に、通信機から今まで最低限の言葉しか発して居なかった二人の会話が聞こえて来た。

「・・・加賀さん、いったいどうしたの?何時もの加賀さんらしくないあの艦載機の動きか?」

「・・・初めて操る艦載機ですから、何時もとは勝手が違うのは当たり前です」

「嘘」

「・・・何?私の言っている事が嘘だとも?」

「ええ、そうよ」

会話が始まるや否やいきなり一触即発の不穏な空気が漂い出す。青葉は仲裁に入ろうか迷いだすも、深山提督からのアイコンタクトで『見守りましょう』と言われた為、そのまま流れるままに場を任せた。

「……加賀さん。加賀さんはきつと『桜風』に全てを託した自分が不甲斐ない』って思ってるんでしょ。今回瑞鳳のレポートでも十分だったのに実戦運用試験を求めたのは、自分の不甲斐なさに苛立つて少しでも艦載機を動かしたかったから」

「……」

「凶星かぁ……」

「悪いから瑞鶴。私の実力不足で、あの娘の援護に行く事も出来ず、そればかりかあの超兵器の姿を見て、恐怖の感情を抱いたのが不甲斐ないと思つて少しでも今以上に強くなろうとする事が」

「勿論、悪いに決まつてるじゃない」

「……理由を言つて見なさい、瑞鶴。」

通信越しにでも分かる加賀の怒りの声色。普段は感情を殆ど表に出さないから知られていない物の、実際の彼女は割と激情家の一面を持っている。ただ単に何時も平静を務めているから感情を表に出さないだけで、一皮剥けば加賀はこう言つた姿を見せるのだ。

「加賀さん。はつきり言うけど、今の私たちだとあの超兵器には勝ちようが無いわ」

「……ええ、そうよ。だから少しでも訓練を積んで、これから出てくるかもしれない

超兵器を……」

「加賀さん、根本的に勘違いしてるけど『今の私たち』だと、いくら訓練しても意味が無いわ。はつきり言つて今私たちはただ無為に、この場所に石油を消費しに来ているだけ」

「……どういう意味、瑞鶴」

瑞鶴の『今の行動は無駄』と言うのはつきりとした断言に、加賀は激高するのではなく返つて興味を惹かれた。普段強気な瑞鶴が今日は妙に後ろ向きな言葉が多い。なんだかんだ言つて瑞鶴の事を期待している加賀には、その姿には違和感が有った。何時もの瑞鶴なら軽口を叩きながら訓練に励むはずだと言うのに。

「『桜風』から軽く聞いた話だと、あの超兵器は速さに一点特化した高速巡洋戦艦ツィルベルウイントと言う話よ」

「……それが何？」

「……今日の加賀さん完全に頭に血が上つて駄目だ……。まあ一言で言えば『あの薄い装甲すら一発で破壊できそうも無い艦艇は呼びびや無い』って事」

瑞鶴のその一言に、加賀は一切の反応を見せなかった。艦艇時代の経験の違いなのだ

ろうか。加賀は索敵不足などが絡み合った結果の不幸な被弾によつて轟沈した。瑞鶴は搭乗員が次々と未帰還で失う惨劇の中、最後の最後まで針先よりも小さい勝利の光を追い求めて『おとり』の役割を果たして、轟沈した。加賀は不運と失策で沈んだだけでどうしようもない絶望を経験した事は無く、瑞鶴は覆しようも無い不条理なまでの戦力差での絶望を経験した。それが、不条理が姿を持って現れたような存在である超兵器に對する対応の違いを生んだのだろう。

「レシプロ軍用機だとしても兵装搭載量と速度が限られるけど、『桜風』はジェット戦闘機と戦ってきた過去が有る。それに彼女はミサイルも搭載して居る。現代型のヘリを開発した実績もある・・・『桜風』に頼るしかないのは情けないけど、『桜風』に私たちの兵装を開発して貰うのが、一番の超兵器に對抗する近道よ」

「・・・結局、『桜風』に頼るしか無いと言う事ね」

「今の私たちだと、深海棲艦を殲滅する事くらいしか出来ないから。・・・悔しいけど」

「・・・話はもう終わったかしら？」

瑞鶴と加賀の話が終わったのを見計らつて深山提督が二隻に呼びかける。青葉や陽炎はハラハラしながら見ていたが、提督自身は平静に場の状況を眺めていた。少なくとも



も致命的なまでに不仲を拗らせる事は無いと確信していたからだ。まさか瑞鶴から加賀に対して忠言をすると言う珍しいにも程が有る光景を目にするとまでは思つてなかつたが。

【「提督……すみません、もう大丈夫です」】

【「提督さん……うん、もう大丈夫！」】

「よし。じゃあ『桜風』謹製の艦載機の性能の報告をお願い。貴方達なら、過不足無く報告できるでしょ？」

—— 本当に、私には勿体無いほどに仲間思いな良い娘たちね。

他の鎮守府の加賀と瑞鶴とは違い、この艦隊では体育会系統染みた雰囲気があるものの、良き先輩良き後輩として、そして戦場では息の合った戦友として深海棲艦を叩きつぶし、切磋琢磨し合う好敵手として良好な関係を築いているこの両者。この二人がこんな関係を築けたのは深山満理奈自身のお陰なのだが、そんな事は欠片も思わずに、彼女は『陣風』や『彗星五四型』と言つたこちらの世界では日の目を見なかつた非業の機体、そして技術が異常発達した『桜風』の世界で育つた、こちらの世界の物とは似て非なる『流星改』『彩雲』『烈風一型』の性能評価を聞き始めた……

「……ここで良いわ。有難う、青葉」

「別に構いませんけど、どうしてここに来たんですか？」

加賀と瑞鶴の『良』や『最優』を超えて『最高』の評価を下された艦載機評価を聞いた深山提督は、一端休憩を挟む事を伝え、自分は乗艦していた青葉に頼んどある海上ポイントに来ていた。

「……ここは、超兵器『ワールウィンド』の沈没地点ですね」

「ええ。……これからやる事は、ただの私の自己満足よ」

「自己……満足？」

そう言いながらこの場に持ち込んだ箱を開封する深山提督。それを背後から覗き込んだ青葉は、納得した表情で言葉を続けた。

「お酒と花束。．．．『ワールウインド』への慰霊ですか」

「慰霊なんて大層な物じゃない。私はただ、通信を通じて届いたこの戦艦の戦士としての戦いに．．．いえ、私が偉そうに言えた話じゃないわね」

そう言いながら、花束を海面に投げ込み、酒を開封して一切の躊躇無く海へと捧げる深山提督。捧げ終わった後は、何も言葉を発さないまま黙祷を捧げていた。青葉は、自然と自分の持っていたカメラに手を伸ばし．．．その手を引つ込めた。シャツターチャンスでは有った。海風に髪を靡かせながら黙祷する深山提督は『絵』になった。．．だが、自然と青葉は『そうするべきでは無い』．．．そう、感じていた。

「．．．有難う青葉。．．．みんなの所に戻ろうか」

「分かりました！」

自分や仲間に対して害を与えた『ワールウインド』に対して、敵意では無く敬意を捧

い。げた『桜風』と深山提督。案外この二人は、根つこの部分からの似た者同士かも知れな

## 第一五話 深山提督主催対超兵器対策会議

．．．超兵器、ねえ。

「．．．？霞、何か言いましたか？」

「朝潮．．．。なんでもない」

．．．朝潮は嘘を吐くような艦娘じゃないけど、流石に信じられないわ。そんな化物が存在するなんて．．．まあ、朝潮の言う事だから信じるけどね

心中でそう呟く朝潮型駆逐艦娘の霞。彼女たちは今、多数の艦娘と共に体育館に椅子を運び込んでいた。彼女たちはこの場所で、先日横須賀沖で沈んだ超兵器『ヴィルベルヴィント』に関する話と、これからの方針を話し合う予定だった。その為、深山艦隊の艦娘が手分けして準備に取り掛かっていた。

「．．．でも、本当に雰囲気こそつくりだったのです、吹雪さんと『桜風』さん」

「そうだね、電。容姿や背格好は全く違ったけど、遠目で見た雰囲気は正しく瓜二つ感じだったね」

「でもこの艦隊だと暁が先輩だからね。私がレディーである事を見せないとー！」

「きつとこの艦隊に來たばかりで不安だろうし、この雷様がお世話してあげないとね！」

そして朝潮と霞が有る程度の椅子を並べ終わつて一息ついた時、暁型駆逐艦の4姉妹がパソコンとプロジェクターを持ち込みながらそんな話を交わしていた。霞は思わず天を仰ぐ。先ほどから艦娘の話題を独占している『超高速巡洋戦艦 ヴィルベルヴィント』なる軍艦を単独で撃沈した駆逐艦『桜風』。生真面目な霞には、楽しそうに『桜風』の事を話す艦娘を見ると、今回の会議を『新入りを持て成す会』か何かのイベントの様に受け取つて浮ついて居る様にしか思えなかつた。

「……ああもう、馬鹿ばっかり」

深山司令官は、わざわざそんな事をする為に大仰に体育館を使いはしない。倒れる寸前まで働く真面目過ぎる馬鹿な司令官が、歓迎会を開くならもつと体育館とは違う別の場所で行はす。今回の事は、きつと今までにないほどに重要な話の筈だ。

「……駆逐艦『桜風』。貴女は、一体何者？どうして、ここに來たの……？」

小声で呟かれた霞の言葉は、朝潮の第四駆逐隊に対する元気な挨拶に遮られ、誰にも聞かれる事は無かつた。

「・・・青葉さん」

「どうしました、『桜風』さん？」

「明らかに50名以上この体育館に居る様に見えるんですが」

「そりゃ深山艦隊直属の総数は87隻に上るからね」

「陽炎、それ表現的には百名弱の方が有ってませんか・・・？」

そんなこんなで『対超兵器対策会議』が始まろうとしていたが、ある意味今回の主役である『桜風』は、体育館に多数存在する深山艦隊の艦娘に尻込みしていた。むしろ医务軟禁生活でようやく少人数相手の受け答えがスムーズに進む様に慣れて来た状態なのに、いきなりこれだけの大人数の前で話す必要があるのである。尻込みするのは当然だった。

「大丈夫です、『桜風』さん。不知火たちが手伝いますから、どっしりと構えていれば問題有りません」

「問題しか無いです・・・ええい、もうどうにでもなれ・・・」

とは言え、もう既に舞台は整えられていた。どちらにしても深山艦隊の艦娘とは後で話す訳だから、遅かれ早かれ全員と顔合わせと会話をすると言う事で似たような事になる。それに超兵器に関して『桜風』は実戦経験に裏打ちされた極めて豊富な知識と情報がある。この対策会議から逃げる訳には行かなかった。第一逃げると言う選択肢事態『桜風』には欠片も思い浮かばなかったが。

「・・・時間ね。じゃあ皆。早速だけど対超兵器対策会議、始めるわよ。先ずは先に駆逐艦『桜風』の自己紹介からね」

——いきなりですか提督!?

とは言え、指名された以上答えるしかない『桜風』。マイクを持って立ち上がったその姿が僅かに震えていたのは気のせいだったのだろうか。

「・・・えーと。初めまして。私は元ウィルキア王国近衛海軍所属、現日本国海上自衛軍第3海上部隊隷下深山艦隊所属の、正式名称『超甲種重武装突撃型高速巡洋駆逐艦』『桜風』略称『駆逐艦』『桜風』です。縁あって深山提督の元に就くことになりました。これからよろしく願います」



そう言い切った後間を置かずに座る『桜風』。事前に練習していた通りの自己紹介文だ。緊張の余り詰まる事も無く言い切れた事に安堵する溜息を吐いたのは『桜風』のみならず練習に付き合った陽炎たちもだった。

だがそんな『桜風』たちを他所に、初めて『桜風』の声と自己紹介を聞いた多数の艦娘たちは騒めいていた。『桜風』の名前は誰も知らないし、ウイルクア王国近衛海軍と言うのも聞いた事も見た事も無い。やけに長い正式名称も無論知っている筈が無い。

「ハイハイ細かい質問は後で受け付けるから。今は先日起こった『横須賀沖事変』に付いての話からね。『桜風』の事と深く関わりが有るから」

様々な声と共に幾多の細く白い腕が拳手されるが、深山提督は『横須賀沖事変』…『超高速巡洋戦艦 ヴィルベルヴィント』に関する話を優先した。『質問は後』の一声で次々と手が下ろされていく光景は、少々大げさかつ妙な表現をすればモーセがエジプトを脱出する時に海を割ったような光景だった。

「手元の資料に書いてあるとは思うけど、『横須賀事変』が発生したのは今から10日前。MI作戦、AL作戦参加艦隊と出迎えの艦隊が合流した時に、『超高速巡洋戦艦 ヴィルベルヴィント』が出現。駆逐艦『桜風』の奮戦でこの超兵器は撃沈されたけど、『桜風』が言うには他にも超兵器が多数あるとの事。今回の会議はその事に付いて」

じゃあ『桜風』と『ヴィルベルヴィント』との戦闘映像を流すから、静かに見てね。その一言で、待機していた朝潮によって体育館の電気が消され、スクリーンに映像が写りだす。航空自衛軍の偵察機と、その時瑞雲や彩雲を飛ばしていた深山艦隊の艦娘の艦載機、そして『桜風』の妖精さんが何時の間にか撮影していた映像が組み合わさり、臨場感溢れる映画の様な映像が流されていた。

荒れ狂う砲雷撃と飛び交う双方の弾幕。時間にして30分近い激戦の末、クライマックスの『桜風』と『ヴィルベルヴィント』の正面からの殴り合いと体当たり、そして多大な損傷を負いつつも海上に浮かぶ『桜風』と、静かに横須賀の海に沈む『ヴィルベルヴィント』の姿を持って映像は終了したが・・・

「・・・これは駄目ですね」

「青葉さん・・・？」

「今の映像を多くの艦娘は、娯楽映画の様に受け取っています。・・・真剣に見ている艦娘は、全体の3割に行くかどうかでしょうね」

『あの戦闘』を生で目撃していない艦娘には、やはりこの戦闘は信じられるものでは無かった様子で、少数の艦娘を除くと真剣に受け取っている様子は見られなかった。艦娘の中の誰かが『良く出来たB級娯楽映画だ』『皆で戦えば怖くない』と言っている声まで

聞こえて来た。

「・・・これが『横須賀沖事変』の顛末よ。じゃあ『桜風』、超兵器『ヴィルベルヴィント』の性能を説明してくれる？」

「分かりました」

とは言え、これが事実なのだからどうしようもない。深山提督は艦娘の多くが真剣に受け取っていない事を悟りつつも、タイムスケジュール通りに事を進める事にした。

「『超高速巡洋戦艦 ヴィルベルヴィント』。最大速力85ノット。『28cm3連装砲4基』『12.7cm連装高角砲10基』『20mm4連装機銃8基』『48.3cm5連装酸素魚雷4基』『12cm30連装噴進砲12基』『32.4cm5連装誘導魚雷2基』  
防御装甲は存在しませんが船体そのものが頑丈で有る為、10数発程度の酸素魚雷ではそうそう打撃は与えられない高速戦艦です」

ざわめきが消失する。スクリーンの横に居る『桜風』や深山提督だけでなく、サポートにしている青葉や陽炎、朝潮たちも真面目な表情をしていた。態々艦娘を集めて嘘を吐くためにこんな事をする様な提督ではない為、この映像を信じていなかった艦娘も大真面目な事であるとは分かった。事の重大性は現実離れしているせいで全く理解できてはいないが。

「私が元々所属していた世界では、この『ヴィルベルヴィント』を皮切りに多数の超兵器が出現しました。空母や戦艦と言った水上艦艇タイプだけでなく、潜水艦タイプ、航空兵器タイプ、果てには陸上列車タイプも確認されています」

「ちよつと待つて。じゃあ何？今の戦艦見たいなのがウジャウジャ居るの？」

「はい。『今の戦艦』よりも遥かに厄介なのが、たくさんと」

朝潮型駆逐艦の衣装を纏ったグレーの髪を後ろで一束に纏めた強気な少女が立ち上がって『桜風』に質問を飛ばし、それに『桜風』は反射的に『是』と答えた。その声で再度騒めきだすその他大勢を他所に、質問を飛ばして来た駆逐艦娘の霞は、間髪入れずに再度質問を飛ばす。

「証拠はあるの？あんなのがこれからも日本に襲い掛かってくる証拠」

「有りません。ですが、襲い掛かってこないと言う確証も有りませんので、備えておいた方が無難だとは思いますが」

そう言いながら『桜風』はパソコンを軽やかに操作し、次々と様々な超兵器・・・『ハリマ』『アラハバキ』『アルケオプテリクス』『ムスペルヘイム』の戦闘映像を見せ、簡単な説明を行った。この4種の超兵器は比較的通常兵器の範疇に入っており、『桜風』はまだ『フォーゲル・シユメーラ』や『ヴォルケンクラツター』の様な天外魔境兵器を見

せるよりは未だ衝撃度が低いと考えたからだが、艦娘一同はそんな『桜風』の配慮は知る由も無かった。

「なに、あのデカいの・・・?」

「あんなに大きいのに、島風より早い・・・?」

「ぴゃ・・・」

「私の分析によると：：現段階の装備では、超兵器を撃沈する事は極めて困難ですね：：」  
「だっただだっただいだい大丈夫にに決まっつてんだだろおろ！せせせ世界水準超えてるこの天龍様があああんな艦全部沈めてややるに決まっつてる！」

「・・・天龍ちゃん、凄く震えてるよ〜?」

「こっこここれはむむ武者震いと言う奴だ！」

「・・・まさかここまで動揺するとは」

「事前に話を聞いて覚悟して見た青葉たちでも、冷静にはいられませんでしたからね・・・」

「資料を事前に渡していたとは言え、実物の映像見たら流石にああなるよね〜」

そしてその姿を見て苦笑いする『ヴィルベルヴィント』を直接目撃して『桜風』から

も大体の超兵器の存在を知っている提督と艦娘、そして『フィンブルヴィンテル見せたらひっくり返りそう……』と言う感想を抱く『桜風』であった。

「……ねえ『桜風』。今の映像見ていると、あんただけで戦ってるみたいだけど、友軍は何処にいるの?」

「……友軍?」

「普通いるでしょ!艦載機の援護とか戦艦の砲撃とか!駆逐艦一隻で戦うなんて有り得ないわ!」

「私は前の世界では、まともに友軍艦艇と共同での戦闘を展開した事は無いんですが、護衛対象の船舶はいましたけど」

「はあ!?!」

映像を見て駆逐艦『桜風』と思しき艦艇しか映っていない事に気づいた霞が問いたですも、その声に戻ってきたのはきよとんとした『桜風』と『常に単艦戦闘だった』と言う、ある意味ふざけた答えだった。

「確かに、『桜風』には艦隊運動の経験は殆ど無かったわね」

「横須賀から出迎えに行く時のアレね……」

「わわわ、忘れてください！れ、練習すれば多分なんとかなると思います！」

「でもいざ戦闘になると、『桜風』さん艦隊から敵艦に向けて一直線に飛び出していきませんか？」

「そ、それは、その……」

そして霞が啞然とした一方で、『AL/MI作戦参加艦艇出迎え艦隊』に参加していた艦娘は、あの涙目になりながら必死に艦艇間を調整する『桜風』の姿を思い出し、恥ずかしさで『桜風』が慌てふためくと言う中々に和む光景が展開される中、弱弱しく『桜風』にとある艦娘が声をかけた。

「あ、あの……『桜風』、さん？」

「あ、ハイ。なんですか？」

「わ、私、綾波型10番艦の潮です。あの、その……もし、超兵器と出会ったら、どうすれば良いんでしょうか？」

その言葉は切実だった。軽く説明しただけでも、全ての超兵器は『桜風』を除くすべての艦娘を圧倒する速力を誇り、そして火力も装甲もそれこそ桁違いだった。万事後ろ向き、と言うより気弱な部分がある潮にとって『戦って勝つ』と言うだけの勇気は無かった。

「その時は全力で逃げて、私に任せて下さい」

「待ちなさいよ。それだと私たちは足手まといつて事？」

「端的に言えば、そうなります。私が防衛重力場や新型機関に高火力の砲雷装や各種補助兵装を開発するまでは、皆さんは超兵器の餌食にしかありません」

そのはつきりとした言葉に、霞は一気に怒りの感情が込み上げた。理性の点では分からなくも無いが、感情の点では納得が全くいかない。極めて人間らしい反応である。

「じゃああんた一人で全部やるっていうの!? 馬鹿じゃないの!？」

「今まではそうでした。そしてこれからもそうなるだけです」

「たった一人で一体何が出来るっていうのよ!!」

「我が友を害する敵を殲滅出来ます」

「アンタは・・・っ!？」

その言葉からは、霞は二の句を告げる事は出来なかった。『桜風』の目は真つ直ぐ霞を射抜き、その視線で霞は『桜風』の顔から眼を逸らせなくなった。その瞳は、とても澄んでいた。

「十の敵艦がくるなら、砲撃で沈めて見せましょう。二十の敵艦が来るなら、雷撃で沈め



て見せましょう。百の敵艦が来るなら、敵艦隊に飛び込んで同士討ちを誘発させて殲滅して見せましょう」

朗々とした『桜風』の言葉に、誰も反応しなかった。否、出来なかつたと言うべきだろうか。止めていいものか良くないものか、判別が付かないままに『桜風』の言葉は続けられていく。

「戦艦型の超兵器が来るならば、砲弾の雨を掻い潜り酸素魚雷を叩きこんで見せましょう。航空型の超兵器が来るならば、砲弾の暴風雨を浴びせて地に落として見せましょう。潜水艦型の超兵器ならば、二度と浮かべぬ海底の底へと送り込んで見せましょう」  
「砲弾が欠乏したなら雷撃を叩き込み、魚雷が切れたらミサイルを撃ち込み、ミサイルが無くなれば機銃弾を浴びせて見せましょう」

「…私が、駆逐艦『桜風』が出来るのは、前の世界で受けた『災厄唯一の調停者』『ウィルキア解放軍不屈の小さき巨龍』『ザ・ラスト・ロイヤルガーディアン』…この評価に恥じぬ戦いをする事だけです」

「…言ってくれるわね。超兵器と出会ったら逃げもせず戦うって事？弾薬が欠乏したらどうするのよ!？」

そう絶叫する霞に、『桜風』はただ、美しく微笑んでこう答えた。

「『桜風』と超兵器が相對した時の結末は、『超兵器が沈む』か『桜風』が沈む』か……そのどちらかです」

「……霞、大丈夫？」

『桜風』の演説が終わった後、深山提督は大慌てで休憩を宣言。その言葉に従つて艦娘がそれぞれ行動に移す中、朝潮型駆逐艦の霞は俯いたまま椅子に座つたままであつた。その事に目敏く気付いた朝潮と満潮は、明らかに様子がおかしい霞に声をかけた。

「……朝潮、それに満潮……」

「……いったいどうしたのよ霞。何時もの霞らしくも無い」

「霞、一体何がありましたか？」

二人の姉妹の心配の言葉を切欠に、霞は突如二の腕を抱えてがたがたと震えだした。何時もの霞では有り得ない余りの変化に二人が動揺する中、霞はこう言い始めた。

「『桜風』が……」

「『桜風』さんがどうしたんですか？」

「『桜風』が何かしたっていうの？」

「……アイツの眼が、怖い……」

その言葉に『え？』と異口同音に発する朝潮と満潮。その二人の対応を他所に、霞の告白は続く。

「アイツ……死ぬ事を何とも思っていない……。あんな化物相手でも、何の恐怖も抱いていない……！」

「……霞……？」

「……アイツの眼……すっごく澄んでた……。なんの感情も浮かんでなかった……。あんな眼……見た事が無い……！」

「霞！ちよつと落ち着きなさい！味方を怖がってどうするのよ!？」

「……怖い……アイツが……『桜風』が怖い……！」

「……霞」

満潮が慌てる中、朝潮は妹の名前を呼びながら、正面から抱きしめ始めた。

「……大丈夫です。『桜風』さんは、とてもいい人です。仲間思いで、ちよつと一人でもやろうとする、まるで艦娘版の深山提督みたいな人です」

「……」

「また後で、少しづつ『桜風』さんと交友を深めていきましよう？大丈夫です。その時は朝潮も着いています。大丈夫、『桜風』さんは霞の敵では有りません」  
「・・・朝潮・・・」

・・・霞がこんな風になる『桜風』の眼。いったいどんな眼なのか、気になるわね。何時も強気な霞を、朝潮に落ち着かされると言う滅多にない状況まで弱らせた『桜風』の眼。満潮は二人が抱き合う光景を見ながらも、つい『その眼を見てみたい』と思ってしまう。

——超兵器対策会議は、まだ始まったばかりだった。

## 第一六話 駆逐艦『桜風』の兵装開発報告会

「さて、休憩も取れた事だし、対策会議を再開するわよ」

「……アー、提督？」

「川内？どうしたの？」

「『桜風』が突っ伏してるのとは一体どうして？」

「命を粗末にする様な言葉を発しましたから、少しばかりお説教を」

「鳳翔さん……うん、分かった。『桜風』南無」

そう言いながら川内に拜まれているのは、机の上に突っ伏している『桜風』。先の演説で『死を何とも思っていない』と受け取れる言葉を聞いて少し『カチン』と来た鳳翔と古鷹による『命を大事に』のお説教タイムを休憩時間中ずっと受けていたのだ。自業自得であるとは言え、過去に夜間騒いでいる事で説教を受けた事のある川内としては、少しばかり憐れみを覚える光景であった。

「……まあ『桜風』のさっきの演説は兎も角、今の皆の装備だと超兵器相手だと殆ど使

い物にならなきそうなのは、理解できたよね」

そして強引に話を元の路線へと戻す深山提督。その一言で騒めていた艦娘たちのお喋りは消え失せ、全員が真剣な眼差しを提督とスクリーンへと向けた。先とは大違いの様子だが、これは『桜風』の質疑応答と演説が影響していた。まるで芝居の様なセリフでは有ったが、表情と声色は真面目そのものであり、嘘や冗談で言っている訳では無い事が理屈では無く本能で理解させられたのだ。ただ艦娘を真剣にさせたその功績者は重い説教を喰らって机に顔を張り付けていたが。

「それで、『桜風』が工廠で開発した兵装をこの場で紹介するわ。それと一緒に装備する艦娘も伝えるから聞き落とさない様に。．．．まずは艦載機ね。瑞鳳」

「はい」

そうして立ち上がる卵焼き軽空母：．．．では無く、祥鳳型航空母艦の二番艦瑞鳳が、レーザーポインターを持ってスクリーンに映る艦載機の説明を始めた。

「『桜風』ちゃんが開発した航空機は、全て私たちが使用していた全艦載機よりも遥かに強力な物でした。例えば、この最初に開発された『陣風』と言う戦闘機」

その一言にに応じてスクリーンに現れる、日の丸が描かれ、今まで見慣れていた零戦とは全く違う無骨で大柄な戦闘機を見て、多くの艦娘は小さく近くの艦娘と小声で何かを話し合うも、次の瑞鳳の一言でその小声はとても大きくなることになる。

「この『陣風』と言う戦闘機の性能は、時速685km、航続距離2700km、武装『40mm航空機関砲』と『30mmバルカン砲』、夜間戦闘可能。因みに計測したところ、『40mm航空機関砲』は『20mm航空機関砲』の4倍の威力と二倍の射程、『30mmバルカン砲』は8倍の威力と3倍の射程を持つ事が確認されています」

「ねえーちよつとまつてよ瑞鳳！」

「隼鷹。瑞鳳の言っている事は本当よ。私と瑞鶴が調べ上げたのだから」

「アレを飛ばしたらもう既存機には戻りたくないよねー。ねえ翔鶴姉？」

疑いの声で質問を飛ばそうとした隼鷹の言葉を遮り、加賀と瑞鶴が瑞鳳の援護をす。二人は『桜風』の開発した機体を飛ばして居た為に、その惚れ込みそうな高性能は身体が覚えていた。

「・・・そ、そうか。それなら良いんだ」

質問を遮られ、仕方が無く座る隼鷹。深山艦隊の正規空母でも最も熟練している二隻が太鼓判を押す以上、隼鷹が言える事は無かった。因みに瑞鶴に水を向けられた翔鶴は、『桜風』製航空機を飛ばした事が無い為苦笑いするしかなかった。

「『陣風』も凄いけど、他の機体も、本当に凄いのよ！『烈風一型』も『雷電一型』もだけど、『流星改』は時速573km、航続力2470km、武装も航空魚雷に加えて『3

0mm航空機関砲』も搭載！普通に空戦だつて出来ちゃう！」

その後も細かい性能表が書かれた、事前配布された資料を片手に熱い熱弁を繰り広げて大暴走する瑞鳳。だが航空母艦娘や水上機搭載可能な軽巡以上の艦娘や潜水空母艦娘以外、つまり深山艦隊の中でも多数派である駆逐艦娘には退屈な時間であった。凄い事は分かるのだが、余り駆逐艦娘には関わりの無い話だったのだから、こればかりは仕方が無い。

「・・・瑞鳳、流石にもう良いわ。次は艦砲と魚雷と対潜兵装の解説に入るから」

「提督?!瑞鳳、まだ全然語り終わってないんだけど!」

「固定翼機だけでなくヘリコプターの『AS332』スーパージューマどころか水上機まで語ってまだ足りないの瑞鳳?担当だった日向が泣いてるよ?」

「・・・え?」

艦載機解説を止められて憤懣遣る瀬無い瑞鳳が、提督の言うままに本来水上機の解説をするはずだった日向の方を見やると、確かに唇を噛んで泣いていた。『瑞雲マスター』だの『師匠』だの一部から言われる航空戦艦日向の血はこの艦隊の日向にも受け継がれていたように、瑞雲では無かったが『晴嵐改』と『零式水偵一型甲』スーパージューマそして『AS332』スーパージューマと言う凄まじい兵器を、先の実践演習で飛ばして居た。その為この性能を張り切つて解説しようとしたら一度もマイクを離さない瑞鳳に全部持つていかれたのだ。日向は泣



いていいと思う。

「それでは、まずは艦載砲の解説に入ろうと思う。解説はこの私、長門が行う。皆、よろしく頼む」

裏で瑞鳳が必死に日向に謝っている中、我関せずと戦艦娘の長門は駆逐艦『桜風』の開発した艦載砲の解説に入る。尚今の段階になってようやく『桜風』の頭は机の上から青葉たちの頭の隣に戻っている。

「今回『桜風』には先の艦載機開発と同じく10回主砲レシピを回してもらっている。……きつと皆の中には『駆逐艦が開発した砲なんて』と思っている者もいるだろうが、『桜風』の開発した物は本当に凄いぞ」

そう言いながら、航空機から砲塔へとスクリーンに映し出される画像が切り替わる。そして直ぐに艦娘は全員騒がしくなり始めた。騒ぐのは当然だろう。映っていたのは二つの砲塔だったが、その二つとも『4連装砲塔』だったのだから。

「先ずは右側の砲塔。これは『41cm65口径4連装砲』だ。聞いてわかる様に私たちが何時も使っている『41cm連装砲』よりも遥かに強力な砲塔だ。単発火力は『46cm45口径砲』よりも僅かに上回るほどだ」

「Hey、長門！ Powerful weaponなのは分かりましたが、搭載してFireしたら転覆すると大変デース！ その点どうデースカー？」

「金剛か・・・大丈夫だ。既にこの長門と伊勢が実際に搭載して試射も行っている。結果は極めて良好。41cm砲を撃った時の感覚とそう変わっていない。金剛型や扶桑型が搭載しても大きな問題は無いだろう」

「Oh、i see！ それなら問題Nothingデース！」

そう言いつつ席に着く金剛。実際既に金剛型にも扶桑型にも46cm3連装砲を搭載して実践投入する事が可能であるのは過去に確認済なのだ、41cmとは言え『65口径4連装砲』と言う未知の砲塔をいきなり搭載するには勇気が居る。実戦で船体にダメージを与えながら攻撃する兵器など誰も載せたくはない。

「もう一つは『15.2cm75口径4連装砲』。単発火力は20.3cm砲と同等。これは・・・何故かは分からないが、駆逐艦にも搭載出来た。陽炎」

「はい、長門さん。・・・実験では、私の船体に搭載して砲撃しても異常は起こりませんでした。もちろん、何時も使っている『10cm連装高角砲』とは勝手が違いましたが、至って普通に砲撃可能でした」

そしてまたも飛び出た衝撃的情報に、今度ばかりは駆逐艦娘も騒ぎ出す。夕立や綾波

の様な例外的存在を除けば、否、その例外的存在にしても駆逐艦の砲撃力は極めて低い事はどう足掻いても覆しようのない事実であったため、もしこの砲を搭載出来れば：：そう考えるのは至極当然だった。

「・・・これで『桜風』の開発した兵器が高性能で有る事は分かってもらえたと思う。余り長々説明するのも問題だから、これからは軽く新規開発された砲の説明を流す。これと手元の資料を見て気になる事が有ったら後で私か陽炎に聞きに来てくれ」

そう言うのとスクリーンがスライドショーとなつて新規開発された砲兵装の説明が流れ出す。『12. 7 cm 70 口径連装砲』や『20. 3 cm 55 口径連装砲』と言つた見慣れているが砲身長が違う砲だけでなく『30. 5 cm 50 口径3 連装砲』『43. 2 cm 75 口径単装砲』『25. 4 cm 65 口径単装砲』と言う何とも反応し辛い砲が流れ、最後には『50. 8 cm 75 口径4 連装砲』『46 cm 75 口径4 連装砲』『61 cm 45 口径連装砲』と言う明らかな爆弾が流れるに従つて、艦種を問わずに艦娘たちの騒めきは津波の如く広がっていった。

「はいはい私語は止める様に。最後に魚雷の解説に入るから。・・・じゃあ『桜風』、この際貴女が説明してね」

「フアい!？」

いきなり深山提督に水を向けられて奇声を発して固まる『桜風』。本来の予定で有れば魚雷の解説は隣に座っている青葉がする予定であった。勢いよく振り返って隣に座っていた青葉を見やると、その青葉は何時の間にか席から離れてカメラを『桜風』の方へと向けていた。この時点で『桜風』は悟った。『提督たちにハメられた』と。

「・・・あー、えっと、その・・・。はい、では解説入ります」

そして人の依代を得て僅か10日かつ対人経験が少ない『桜風』がマイクを持つように突き付けられ、そして無数の艦娘の急かす視線に抗いきれるわけも無く、マイクを二度取り落としながらも立ち上がった。その声と身体が震えていたのはきつと気のせいでは無い。

「艦載機と砲レシピと同じく、魚雷開発レシピで10回開発しました。使える使えないは兎も角、一応全部開発成功しています」

そう言つて艦娘たちが、特に魚雷開発レシピを何度も回してことごとく玉砕し続けた雪風や時雨、初霜たちが大騒ぎしだすも、『桜風』の解説は止まらない。と言うより緊張の余りそつちに気を回す余裕が欠片も無かった。まだまだ大人数相手でのプレゼンテーションをするには、『桜風』には対人経験が壊滅的に不足しているのだ。一応コミュ

障と言う訳では無いので、慣れれば特に問題は無くなつていくだろうが。

「先ず開発出来ましたのは『感応機雷敷設魚雷』です。これは射出後に指定したポイントに機雷を大量にばら撒く魚雷です。多少なりともこの機雷は敵艦に向けて動きますので、うまく扱えば敵艦隊を効率的に足止め出来るかもしれません」

「はい！『桜風』さん、出来るかもしれないってどういふことですか？使った事は無いのですか？」

「・・・えつと、はい。すみません、私はこの魚雷は今まで使った事が無くて・・・すみません」

「いえ！気にしないで下さい！あ、雪風は陽炎型駆逐艦8番艦の雪風と言います！これからよろしくお願いします！『桜風』さん！」

「あ、ハイ。宜しく願います雪風さん」

元気に質問を飛ばして、納得したらついでに自己紹介もして座る雪風。まるでリスの様に人懐っこい笑みで僅かながらに緊張が解れた『桜風』。そのお陰か、極めて平坦で機械の様に堅い声色が少しづつ『桜風』本来の声色へと移りながらの兵装説明へとなつていった。この深山艦隊最強の幸運艦は、殆ど意識せずにその容姿と性格から相手の心を解きほぐす事が得意なのだ。

「それで、次は『小型機雷掃討連装魚雷』です。これは潜水艦用の魚雷で、文字通り機雷

を掃討するだけでなく、手動操作で敵艦の魚雷を迎撃する事も可能です。．．．使い勝手は．．．すみません、伊58さんからは微妙との評価を戴いております」

「『桜風』ー。さんはつげなくて良いでち。呼び捨てで良いでち」

「あ、はい、分かりました」

そして二連発で何とも使い勝手が悪い魚雷が出て来た事に、流石に艦載機と砲兵装の開発で運を使い果たしたかと、深山艦隊の艦娘たちは残念なようで、ある意味安心していたが、彼女たちの安心感は次から怒涛の如く説明された魚雷兵装によってあっさり打ち碎かれた。『桜風』の引きの強さは、そう弱い物では無かったのだ。

「次は『61cm7連装誘導魚雷』と『5連装対潜誘導魚雷』32.4cm誘導魚雷』の誘導魚雷です。これはロックオンした敵艦を追いかけ続ける魚雷で、迎撃を受けるか、電波妨害やデコイを射出されない限りは必ず命中します。威力はそれぞれ単発火力で『61cm7連装誘導魚雷』は『61cm酸素魚雷』と、後者二つは『53.3cm空気魚雷』と同等になります」

「最後の五つは普通の水上艦艇用の魚雷兵装です。順に『45cm5連装酸素魚雷』『80cm5連装空気魚雷』『61cm5連装酸素魚雷』『61cm7連装空気魚雷』『68cm3連装空気魚雷』になります。陽炎に実験して貰いましたが、特に問題なく使用可能との事です。．．．以上が、私が今日までに開発した兵装になります」

そう言った後、ポスリと椅子に座り込んで『やつと終わった』と安堵のため息を吐く『桜風』。良い写真が取れましたと笑顔ですり寄ってきた青葉を捕まえて「この裏切り者メ〜」「イタイイタイ、『桜風』さん痛いです」とじやれ合う中、深山提督が立ち上がり、騒めく艦娘たちに向かって宣言しだした。

「先ほど海軍庁から、深山艦隊は対超兵器戦闘に関して一切のフリーハンドの権限を与えられた。要約すると『超兵器出現時は、既存作戦を放棄してでも超兵器撃沈を優先任務とする』と言う命令ね。・・・確かにただの杞憂に終わるかもしれないけど、それでも備えておいた方が良いのは自明の理。皆も、協力してもらおうよ」

その一言に、体育館は一瞬で静まり返り、そして椅子を蹴り倒して一隻の戦艦娘が立ち上がった。

「Of course デース！超兵器？それが一体何したと言うのデース！『桜風』が沈められたのなら、私たちにだってきつと出来るはずデース！」

その一言で、静まり返っていた艦娘たちの眼には戦意の炎が灯った。『桜風』が勝てたのなら、きつと自分たちになんて出来る・・・。明確な根拠も『桜風』が開発した兵装が存在した。金剛の一声で、雰囲気は一気に切り替わったのが、誰もが感覚的に理解で

きた。

「……この様子なら大丈夫ですね。『桜風』さん、貴女と一緒に、皆も戦いますよ！」  
「はい、青葉さん。心強いです」

——仮に行けたとしても、『ドレッドノート』『デュアルクレイター』、運次第で『アルケオプテリクス』、十重二重の奇跡が起きれば『ハリマ』……。この辺りが限界かな  
口では青葉にそう答えつつも、『桜風』の脳内では『中盤以降の超兵器では、深山艦隊の艦娘は戦線離脱不可避』と言う冷徹な答えが出ていた。そもそも元来超兵器は、基本的に単艦戦闘しか考えておらず、僚艦無しでの対多数戦闘を前提にされていると言う、通常の兵器開発思考の常道から全力で逆走している兵器である。僚艦との共同での戦闘を本能レベルで刻み込まれている艦娘とは絶対的かつ致命的に相性が悪い。今更単艦戦闘の訓練をしても、極限まで単艦戦闘に特化した『桜風』レベルにまで矯正など出る訳が無かった。

「……まあ、それも戦い方次第かな」

「?何か言いましたか、『桜風』さん?」

「何でもありませんよ」



——でも、この世界は私が居た世界とは違う。今度演習で深山艦隊の艦娘の連度を確認してから最終判断を出した方が良かったか

だがその『答え』はあくまで『前の世界』での常識だ。もしかしたらこの世界の艦艇の能力は何かしら凄い物を持っているのかもしれない。それを見てから、答えを出した方が良い。

「Hey、提督——これで会議は終わりですかー？」

「そうね・・・これで終わりね。もうそろそろ良い時間だし」

「じゃあ後は机と椅子を片付けるだけですね」

「『桜風』——、一体何を言ってるデスカー？」

「え？会議が終わったのなら片付け・・・」

「何言ってるんですか『桜風』さん！深山艦隊の艦娘が集まったら『桜風』さんの歓迎会するって、前に言ってたじゃ無いですか！」

「青葉さん!?アレ本気だったんですか?!」

あんぐりと口を開ける『桜風』。確かに深山提督と初めて会って即答で参入する事を

決めた日に聞いたが、正直に言うとは本当にするとは思ってなかった。するとしても自己紹介程度で、『歓迎会』までの大きなものをしてくれるとは思ってなかった。特に超兵器が出現して大して間もないこの時期に。

「これから忙しくなるからこそ、今『桜風』の歓迎会をするの！今を逃したら何時出来るか分かったものじゃ無いしね！」

「陽炎?! いやそんな事して頂かなくても……」

「『桜風』さん」

「不知火! ちよつと不知火からも言つてやつてくれない?! 恥ずかしいか……じゃ無くて、超兵器が出現したつていうのに……」

「諦めましょう。皆この時を楽しみにしていましたので、今更中止には出来ません」

——…そんな……既に精神的に大分神経すり減らしたのに、これ以上摩耗しろと言うの……?」

その『桜風』の魂の叫びは声に出される事は無く、歓迎会の準備をする為に主役の『桜風』は強制連行されていた。さながら、その姿はボクシングの試合でKO負けした選手を、二人で肩を貸して運んでいる姿のようだったとは、綾波型駆逐艦の漣の証言であ



# 第一七話 AL/M I 作戦完遂兼超兵器『ヴィルベル ヴィント』撃沈成功祝賀兼『桜風』の歓迎会

深山艦隊に置いて、大規模戦役を終えた後の祝賀会は毎度恒例行事である。元々は深山少将と同期である『提督予科練』第二期生や、『始まりの艦娘』と遭遇した自衛隊出身者によつて作られた、提督と艦娘の関係を手探りで作り上げた通称第零期生出身の提督が多数戦死者や除隊者を出し『地獄』と称された『アイアンボトムサウンド攻略戦』を、ただの一人も戦没者無しに突破した事に関して感極まった深山満理奈中佐（当時）の発案で、艦隊の皆で祝った事を発祥としている。初めは提督自らのポケットマネーでやる深山艦隊のみでの行事だったが、時が経つにつれて艦娘を愛する提督たちの中に伝染して行き、現在では艦娘を戦友や仲間と見る提督の艦隊では、規模の大小こそ有るが大体似たような事が行われている。

そして三年も経つともはや伝統となつている今回の大規模戦役の記念祝賀会と一緒に駆逐艦『桜風』の歓迎会も執り行われている体育館の中では。

「えへへ、ぬい姉ちやーん」

『桜風』、『ぬい姉ちやーん』じやありません！それにいつまで抱き着いてるんですか!？」  
「んん、分かつた。．．．あ、瑞鶴さーん」

「え、ちよ、『桜風』?．．．うわ、お酒の匂い凄い．．．。『桜風』、どれだけ飲んだのよ?」

「隼鷹さんと、那智さんと、千歳さんと．．．三人とたくさん飲んだ」

酒に酔った『桜風』が抱き着き魔に変身しての大暴走を開始していた。お陰で誰彼構わず抱き着く『桜風』と抱き着かれた艦娘の困惑やら悲鳴やら愛情の籠った声、そしてそれをやんややんやと囃し立てたりする一部艦娘の声が木霊する体育館内は凄まじくカオスである。

「．．．それで、那智、隼鷹、千歳。いったいどれだけ『桜風』に飲ませたの?」

「うっぷ。．．．あ、あたしは、ビールジョッキ十杯を『桜風』と飲んで．．．」

「わ．．．私は、日本酒を二本．．．」

「しよ、焼酎を瓶四本だ．．．」

体育館中央部で『桜風』が自身の名の如く走り回って深山艦隊の艦娘に抱き着いている頃、深山提督は『桜風』に多量飲酒させた犯人である軽空母艦娘の千歳と隼鷹、重巡洋艦娘の那智を、体育館のステージ上に引つ張ってきて事情聴取していた。いや事情聴取と言うよりも深山提督の眼が全く笑っていない事を見ると、査問と言った方が正しいかもしれない。

「．．．お前たち、『桜風』が駆逐艦である事は分かっていただろうに、何故そんな事をした？」

「長門．．．いい、いや、私は千歳たちと飲んでいるのを見て、てっきり大丈夫だと．．．」

「．．．那智はこういつてるけど、千歳と隼鷹。釈明は？」

「あ．．．あたしはあ．．．『桜風』の顔が硬かったから．．．」

「私も．．．『桜風』がぎこちなかったから．．．お酒飲んだら良いかなと思つて．．．」

「．．．それで、『先輩の勧める事だから』と一切断らずに飲み続ける『桜風』を見て『仲

良くなるためだから』との理由を付けて好きなだけ飲み続けた結果か」

深山艦隊の全く誇れない酒飲み三人官女の言い訳を冷めた目で見る長門。本来この酒馬鹿娘を止めるべき深山提督や姉妹艦は、提督は祝賀会の開始の音頭を取った後で上層部から通信が入った為に一時離脱し、姉妹艦の千代田、飛鷹、妙高も丁度提督の残務処理の手伝いや他艦隊への警戒任務の引継ぎに手間取って宴席から離れていた結果が、この有様だった。

「……そういえば提督、上からいったい何を言われたんだ？」

「『桜風』の開発した兵装が本当だったのかの確認と、追加で許可するから他の艦隊に配備出来る分の兵装開発要請。後は演習で良いから『桜風』自体の戦闘データが欲しい……って」

「……別に、今言わなくても良い事だろうに。それに提督。本当にそれだけだったのか？」

「そうよ。それだけだった。……本当に、それだけ」

「……そうか。それなら良い」

駆逐艦に多量飲酒させた罪により、深山裁判長から『一か月の禁酒命令』が下され、判決を受けた那智、隼鷹、千歳がそれぞれの姉妹艦に引きずられながら提督に必死に拝み倒すのを完全にスルーしながら、長門と深山提督は体育館のステージ上に座りながら宴会風景を眺めていた。因みに今『桜風』は暁型駆逐艦の一番艦の暁を捕縛して猫かわいがりしている。

「・・・那智たちにはああ言ったけど、『桜風』の意外な一面を見れたのに関しては、良かったかもね」

「良かった探しか提督・・・。まあ、それには同意するが。『桜風』が艦隊に来てからずっと気を張って生活しているのは丸分かりだったからな、始めのころの提督の様に」

「長門・・・昔の事は言わないで」  
「・・・分かった。すまない」

テーブルからそれぞれ飲食物を持ち込んで、足をブラブラと自由にさせながら会話する両名。艦娘である長門もそうだが、深山提督も黒髪を肩まで伸ばしているために傍目から見ると仲の良い姉妹に見えたかもしれない。尚その二人の視線の先には『桜風』が飛龍に飛びつき、こちらも酒に酔って上機嫌な飛龍が同じく酔っている蒼龍と共に『桜風』を撫で回している姿が有った。



「……提督。提督は、本当に今の『桜風』が開発した装備で勝てると思うか？」

「……流石にそこまで傲慢だったら、私はとづくにこの世に居ないわ」

「そうか……。しかし、やはり歯がゆいな、ビッグセブンのこの力が、超兵器には全く通用しないと言う事が」

「こればかりは仕方が無いわ」

宴席の場で有りつつも、基本堅物と言うか生真面目な二人なので、自然と仕事に関する話ができる。やはり超兵器と言う異種の存在が居る以上、余り気を緩められるほど気楽な性格では無かった。抱き着き魔と化した『桜風』が台風の様に荒れ狂っている光景とは極めて不釣り合いであるが。尚今『桜風』は青葉に抱き着いてお腹に顔を埋めている。

「金剛がみんなの士気を盛り上げてくれたのは有難かったけど、開発の不安定さなども考えると、結局は少数のメンバーを選出して対超兵器戦に専念させて、他の大多数はそのサポートと通常の対深海棲艦戦に回ってもらえないかと思うけど、長門はどう思う？」

「……それが妥当だろう。超兵器には物量は通用しないと『桜風』が言っていた。だから」

ら極少数の精鋭をさらに鍛え上げて対超兵器に専念させるのが最良だろう」

『桜風』には対超兵器戦に加えて開発と訓練、それに状況に応じて対深海棲艦との戦闘にも参加して貰うけど……余り無理させない様にさせないとね」

「……『ヴィルベルヴィント』の時も、凄まじいケガを負っても平気な顔をしていたしな」

そう言つて、深山提督は鈴谷と熊野、青葉によつて担ぎ込まれた時の、長門は医務室に見舞いに行つたときに偶然目撃した『桜風』の傷跡を思い出していた。あの時の『桜風』は船体の打撃がしつかりと艦娘の身体に反映されており、『右腕全般の裂傷と地に滴り落ちる程の多量出血』『左脚中央部より下部分の肉が少量抉れて骨一部に輝が入り』そして『腹部に大きな打撃痕による大きな痣と上着を真つ赤に染めるまでの多量吐血』と言う気の弱い人間なら一目で即気絶する壮絶な姿だった。

艦娘である以上、船体が急速に修理されるに従つてその傷は消えて行つたが、それでもその状態で動き回ろうとした『桜風』の行動には、その姿を見た誰もが心配し、そして怒るのはごく自然の事であった。当の本人は今では逃げ出そうと喚き騒ぐ霞に対して「可愛い〜」などと言いながら抱きしめているが、お陰で霞の半泣き顔と言うレアな姿が青葉によつてバッチリと写真に収められている。

「……長門」

「……どうした、提督」

『桜風』の事、よろしく頼むわね」

「……ああ、分かった……！」

長門に『桜風』の事を頼む。それは言外に『長門は対超兵器戦メンバーに選出』されている事と同義である。そして長門は、深山提督の頼みに打ち震えていた。心の底から武人染みた気質を持つ彼女にとって、超兵器と言う未知の強敵には、恐れに加えてそれ以上に奇妙な高揚感の様な物が感じられていた。この長門の反応を頼もしいとみるか、それとも難儀な性格だと思ふかは、人それぞれではあろうが。

「提督〜。長門さーん」

「おお、『桜風』か。……まだ酔ってるのか？」

『桜風』、大丈夫？ 気持ち悪くなったりしていない？」

「だいじょうぶです〜。えへへ〜。提督〜」

そしてとうとうステージ上にまで辿りついた『桜風』が、他の艦娘にやったように深

山提督に抱き着いた。まあ抱き着くと言うより深山提督は座っているから縋りつくと言う方が正確な見た目表現かもしれない。

「提督く……ていとくく……」

「……これは、寝てしまったようだな」

「……そうね。やっぱり、大勢と話したりして、疲れていたのね」  
「酒のせいでもあるだろうがな」

そして深山提督に抱き着いてからそう間も経たないうちに、『桜風』は静かに寝息を立て始めた。大勢の人の前での説明やその時に鳳翔と古鷹から受けたお説教、そして酒好き三人娘に多量飲酒させられれば流石にそうもなろうと言う話である。

「どうする？ ベッドまで連れて行くのか？」

「……そうね。ここで寝ると身体に悪いからね」

そう言いながら優しくもサラッと『桜風』の小柄な身体をおぶる深山提督。傍目では完全に『歳が少し離れた姉妹』にしか見えないのは、深山提督が『桜風』に向ける優しい表情からだらう。

「……ていとく……かんちょう……わたし……がんばる……みんな……まもる……」

……もう大丈夫だから。今はまだ無理でも、必ずみんな、『桜風』を助けるから  
小さい『桜風』の寝言を聞いた深山提督は、心中でその言葉を呟きながら、小さく微笑みながらも、力強く再度の誓いを立てた。

……理想論だと笑うなら笑いなさい。夢想家だと嘲笑うなら勝手に嘲笑いなさい。私は、この戦争で、誰一人として、絶対に『仲間』を失いはしない。

『地獄』と呼ばれた『アイアンボトムサウンド』を、ただ一人幾多の偶然と必然、そして奇跡的な幸運の末『戦死者無しでの突破』と言う輝かしい実績を残している深山満理奈少将。戦況が逼迫する中、彼女自身は元々適正有りとの事にて『提督予科練』に途中編入された所謂『民間上がり』だったが、その為か『艦娘は兵器であり、人の形をした消耗品』とする『提督予科練』第一期生とは真逆の『艦娘は仲間であり、兵器では無い』と

する考えで定まっていた。だからだろう、余計なトラブルを起こさない為にも無駄なプライドや下らない虚栄心に凝り固まった第一期生が居る東南アジアの泊地に配置されずに少将でありながらも首都防備を担当する横須賀に配属されているのは。

そしてもう一つ、深山満理奈が第一期生の居る東南アジアに配属されない理由。

・・・仮に『桜風』を、私の仲間を傷付けようとするのなら、如何なる存在で有っても、どのような手段を講じてでもこの世から消してやる。

『仲間を傷付けた存在』に対して徹底的過剰報復行為を一片の躊躇無く行うほどに極度に振り切った強い攻撃性。それが、仏の様に穏やかで汚職など一切考えもしない真面目な深山満理奈の裏に隠された攻撃的性質が、余裕のない政治状況と戦況下で他提督に炸裂されて欲しくなかった上層部の配慮からだった。

深山満理奈と駆逐艦『桜風』。後方と前線。提督と艦娘。日本とウィルキアと言う違

いこそあれど、やはりこの二人の本質は魂からの似た者同士なのかもしれない。

## 第一八話 日本に残る最後の膿

「……『桜風』、もう朝御飯よ。早く起きなさい」

「昨日の事は誰も責めませんから、早く起きて皆と朝食を食べた方が良いでしょう!」

「御免なさい提督!大淀さん!無理です!昨日あんな事やっているのにノコノコとみんなの前に出れません!」

「……覚えていたのね、昨日の酔った『桜風』が抱き着き魔になって皆に抱き着いていた事。」

昨日の歓迎会で寝入ってしまった『桜風』を、執務室の仮眠室で寝かせた深山提督。その後の宴は『軽巡那珂主役のバックダンサー付きゲリラライブ』やら『重巡青葉秘蔵の写真スライドショー』等で少々盛り上がった後に解散した。殆ど『桜風』一人に持つていかれた感じがするが、まあなんだかんだ言いつつも皆楽しんでたのだから良いのだろう。そして翌朝になって酔いが醒めた『桜風』は、糞虫の如く布団に包まって離床拒否していた。まあ真面目な部分の多い『桜風』にとって、昨夜の暴走行為は恥ずかしい以外の何物でもない。

「……仕方が無い。夕立、時雨」



「ぼい！」

「うん」

「連行、お願いね」

「分かったよ。……『桜風』、行こうか」

「皆『桜風』を待つてるから早く来るっぼい！」

「え、いやあの……わ、わわわわ!」

深山提督の命令一下、夕立と時雨の白露型駆逐艦姉妹は『桜風』の布団を剥ぎ取り、『桜風』の両肩を引っ掴んで食堂に強制連行していった。『後生です！後生ですから！今日だけは！今暫くだけは！提督！大淀さん！ていとくー！ぴやあああああー……』との『桜風』の継る声だけが、執務室に取り残されていった。

「……ぼい」

その姿を見送った深山提督は笑みを零す。少なくとも昨日『桜風』が大暴走した事も有つて、深山艦隊の艦娘は皆『桜風』に対する無用な警戒などは一切抱いていない。誰であろうと『酒に酔って無邪気に抱き着いて甘えてくる少女』に対して負の感情を持つ事は殆ど無い。食堂に行つた後もきつと『桜風』は先輩方に良い意味で弄られるだろう。

「……さて、それじゃ私は……」

そう言いながら朝一番に届けられた書類を目にし……あからさまに顔をしかめる深山提督。同じく書類処理に向かおうとした大淀も深山提督の表情の変化に気付き、書類を覗き込み……深山提督と同じく、思わず眉を潜めてしまった。

「……また第一期生からですか」

「そうね。……上層部うえから拒否する旨は通達されていると言うのに、まだ諦めていないのね、あの連中」

そう言って興味を失くした書類を躊躇いなくゴミ箱に放り込む深山提督。その書類には『駆逐艦『桜風』の最前線転属要請』との題名が書かれていた。

「……もうこつちに来るのはいいい加減にして欲しいものだな」

「形式上は立派なお題目ですが、明らかに本心が駄駄漏れ過ぎるのは最早隠す気が無いんでしょかねえ」

『桜風』が間宮食堂に強制連行されている頃、海軍庁では山本蒼一海軍庁長官が朝つばらから押し掛けて先程まで嘔り付いていた『招かれざる連中』に対して、かなり強い毒を吐いていた。まあ部下が本心から追隨している時点で、山本長官だけで無く他の人間にも余り好まれていない人物である事は明白だが。

『アレだけの戦闘力と開発力を誇る艦娘を本土に留め置くとは何事か。前線に送り込んで深海棲艦との戦闘を有利にするのが本筋だろう。そもそも少将如きにあの艦娘を配備させるよりも、大将や元帥が居る第一期生に任せの方がよっぽど上手く使える』：「か」

「まだ艦娘以外には通用しない、実質名誉階級に近い提督の階級を振りかざす馬鹿が居るとは。そもそも『上手く使う』とか言い出している時点でまだ変心していないんですね……」

「……兎に角、あの連中には駆逐艦『桜風』を転属する事は認めない。そもそも『桜風』は『この世界の日本出身では無い』。無用な軋轢を招くような事態は絶対的に避けなければならぬ」

そう疲れた表情で言う山本長官。艦娘に命を救われたと言う個人的事情も有るが、それ以上に艦娘を『駒』や『紙面上の数字』としか見ない第一期生の傲慢さには辟易して

いた。何度『自分たちは艦娘に助けて貰っているのだ』と言う事を説教しても、返ってくるのは『提督が艦娘を使ってやっている』と言う返答か、若しくは適当な生返事だった。それでいて艦娘の轟沈率を無視すればしつかりと深海棲艦を撃沈しているのだから質が悪い。現状の法律では『艦娘＝兵器、つまりただの物』ではないので、艦娘の損害率を理由に更迭するには少々無理が有った。極論、いくら『備品が』沈もうが戦果拡張と資源輸送をやつていれば、それだけで上層部は何も言い出せなかった。何せ艦娘の建造費用や資源は『妖精さん』と言う未知の存在のお陰か異様に少なく済んでいる。

「・・・最近になって活発に深海棲艦との戦闘を、奴らは行っています。現在国会で『艦娘保護法案』が審議中の為、少しでも発言力を確保する為かと思われます」

「あいつらの脳味噌には『国防』と『国益』の4文字は無いのかね・・・。しかし、その法案は今はまだ衆議院を通過すらしていないものではなかったか?」

「はい。・・・だからでしょう。今大きな戦果を挙げて国民の脚光を浴びて、自分たちに不利になりそうな法案を施行される前にどうにかして潰そうと画策しているのですよ」

そう諦め顔で言う部下に対して、山本長官は思いっきり溜息を吐いた。

元々深海棲艦が出現した時の日本の政権は、今の日本を運営している保守政権では無くいわゆる『ポピュリズム型理想主義的左派政権』と言う、悪く言えば『口先だけの三流政権』が与党を担っていた。特に失点の無かった前政権を難癖付けて徹底的に批判し、文字通り『夢の様な政策』を訴えて国民を扇動した末に政権を奪取したのは良い物の、現実はその甘い物で無く彼らの『政策』は失敗し続けて、支持率が文字通り底値だった時に深海棲艦が出現した。はつきり言って日本にとって最悪のタイミング以外の何物でもなかった。

自衛隊や在日米軍から矢継ぎ早に飛んでくる深海棲艦の存在を、確かに理解不能な存在だったとはいえず、映像を見せつけられても頭から否定し続けて自衛隊の防衛出動を『対話による解決』『日本人が出なければ被害が出ない』等と言う空虚な妄言を吐いて拒否し続け、何とか強引に自衛隊と米軍による共同出撃を認めさせた時には既にミッドウェイやニューギニアと言った太平洋戦争時の激戦地を中心に各地域の要所を失陥しており、拠点奪還と国土防衛の為に文字通り死力を尽くした戦闘でも深海棲艦には攻撃が一切通用せずに多数の戦死者を出してしまっていた。

その後山本長官も参加した『始まりの艦娘』が現れた『硫黄島沖海戦』で、アメリカ海軍在日米軍所属の空母一隻撃沈、一隻中破し、日本海上自衛隊も虎の子のイージス艦二隻を喪失する大損害を受けつつも、『始まりの艦娘』の支援も有って何とか初めて深海

棲艦の撃退に成功。『艦娘』と言う未知の存在と『硫黄島沖海戦』での大損害に関係各所で混乱が発生するも、その混乱が発生している中当の与党は『艦娘管理法』なる艦娘を『物』として縛り付ける法案を強行採決して『文民統制に基づく暴力装置を制御する為の正当な行為』を成功させた事に勝手に酔いしれていた。ただ散々好き勝手に理想論を振りかざし続けたその結果が衆参総選挙で両議会併せて僅か7名にまで政党議員を落選させられ、最弱の泡沫政党にまで転落させられる末路であったが。

結局そう言った政治的なゴタゴタのせいで『提督予科練』第一期生は、艦娘が提督に對して極めて従順な事も有って手の付けられない所にまで増長していつていた。元々教育方針がまとも定まっていなかったり提督になれる人間を片っ端から集めたせいで思想チエックで振り落とす暇も何もなかったりしたせいでもあるので、ある意味彼らも被害者かも知れない。同情する余地は欠片も存在しないが。

「……それで、あの『女狐』もやっているのか？」

「はい。……今回の『桜風』の転属要求も彼女から出たようです」

「……奴は一体どれだけの艦娘を沈めれば気が済むのだ……」

海軍庁長官として本来は他の政府機関と同じく松代市に移るべき所を、前線に近いところに居たいとの要望を押し通してこの横須賀に居残っている山本蒼一長官。相も変わらずな提督第一期生の思考回路に、もう何百回目かもわからない深い溜息を吐いていた。お陰でもうそろそろ髪を黒に染め直す時期が近付いている様子である。

「・・・石頭にも程が有るお年寄りたちね。年取つて『兵器』を『孫娘』にでも見間違えるほどに老衰したのなら早く引退すれば良いのに」

トラツク諸島に存在するとある泊地では、うら若き女性が『桜風最前線転属要請書』を全て却下した上層部に対してキツイ毒を吐いていた。彼女の名は『仲本 穂乃果』。『提督予科練』の第一期を首席で卒業した要領の良さと優秀な才能に恵まれた女性である。容姿も優れ、『提督予科練』での成績も歴代第二位であり、ついでに言えば実家は相当な富豪でもあり父母を通して得られた人脈も多数存在する。正しく『天は二物を与えず』と言う格言を真つ向から否定する存在であったが、そんな彼女の致命的な欠点として『他人を駒としてしか見ない』のと『自分を絶対的に正しいと狂信する』性質があった。

「……あ、あの……ていとく……」

「……何？書類ならさっさとそこに出して待機所に戻りなさい」

「ひっ……て……ていとく……今日……帰還途中で……」

「……聞こえなかつたの？早く、戻りなさい」

「は……はい……」

……相変わらず覚えの悪い『兵器』ね。全く、使えないったらありやしない。

涙目で訴えようとする艦娘を一瞥もくれずに即座に追い出す仲本提督。彼女の艦隊では、深山提督の様な艦隊とは違って『艦娘Ⅱ兵器』として徹底的に扱っている為、殆どの艦娘は提督の一挙一動に終始怯えているか、若しくは仲本提督の臨む様に己を『駒』と自己暗示する艦娘のどちらかしかないなかった。

彼女：『仲本 穂乃果』が提督になったのは、紙面上や言葉の上では適当に取り繕ってはいたが、本心としては『日本を牛耳る為の踏み台』であり、際限なく無限に増大し続ける『虚栄心』や『権勢欲』を満たす為であった。欲しい物はなんでも手に入る富豪の家に生まれ、幼い頃から両親に甘やかされ、周りの人間からはおべっかを使われ続け、そして自分には他者よりも優れた容貌や能力が有って全てに置いて自分の思うがまま



に成功し続けたのだから、こんな人間になるのは当たり前だったのかもしれないが。

．．．しかも、その『兵器』を、あろう事か老衰した爺連中と一緒に『仲間』等と戯言言つて興じているあの女は、不遜にも『桜風』を手放そうとしない。．．．ああイラつく．．．！

『あの女』．．．深山満理奈提督の姿を思い出し、イラつきの余り手に持っていたボールペンを押し折る仲本提督。『民間上がり』かつ『途中編入』と言う大きなハンデを背負いながら、自らが記録した最終試験での首席成績を僅か一期で更新した深山提督の存在を知ってから、仲本提督は彼女に対して強烈な敵意を抱いていた。仲本提督の人生初の『敗北』であり、しかも深山提督はその事に対して『日本を守る為に勉強しただけなので、成績順位とかはあまり興味が無い』と発言していた。この言葉は仲本提督の風船の様に膨れ上がったプライドを甚く傷付けた。しかもその後起こった『アイアンボトムサウインド』では、仲本提督は多数の艦娘を轟沈させながらどうにか突破したのに対して、深山提督は誰も沈める事無く突破に成功し、上層部から名指しで激賞された。一方の仲本提督には何も無かった。仲本提督の『敵意』が『殺意』に変わるのに、そう時間はかからなかった。

・ ・ ・ とうよ。超兵器を私だけで沈めれば良いのよ。そうすれば私の発言力は誰にも止められない程に高まる。第一期生のメンツも甘言で適当に集めて、頃合いを見て蹴落とせば手柄は全部私の物。そうすれば私の出世も早まるしライバルも消せる。『駒』を『駒』のまままでいさせられ易くなるし『あの女』も今度こそ軍から消せる。まさしく一石四鳥ね。

そう脳内で結論付けて、つい先ほど艦娘が持つて来た書類に適当にサインして処理済みの箱に投げ込む仲本提督。その書類には『遠征並びに出撃で轟沈した艦娘名簿』が存在した。

仲本穂乃果海軍元帥。『提督予科練』第一期生首席卒業者にて、東南アジアのトラック諸島で対深海棲艦との戦闘を継続している彼女にとって、配下の艦娘は例外無く『己の栄誉栄達を達成するための踏み台であり補充が簡単に利く駒』であり、同期や後輩の提督も『上に上る為に使える者は甘言や誘導で徹底的に使い潰して蹴落とす』存在でしかなかった。無論この本心は誰にも言っていないし、そもそも外では徹底的に猫を被って居る為に山本長官を含む極少数を除いて、仲本提督の本性を知っている人間は少ない。両親ですらこの狂った性根を知らないのだ。

「……『超兵器に物量は効かない』？本当に救いようが無い馬鹿ね。『お手手繋いで仲良しこよし』な貴様には想像もつかないのね。『超兵器の搭載弾薬量よりも多く艦を突っ込ませればいい』だけじゃ無い。兵器は戦つて沈む為に存在するのよ。『駒』に情を向けるとか、本当に救いようのない愚物よね、深山満理奈は。」

脳内に深山提督の姿を浮かべながら、そう嘲る仲本提督。既に深山提督を失脚させるべく色々な手をバレないようにしながら打ったが、その全てで完全に失敗し、しかも生皮を剥がす様に己の打てる手立てや喉けられる輩を潰されつつある現状で深山提督を馬鹿に出来る立場では無いのだが、最早仲本提督は深山提督が憎すぎてそう言った事を考えられはしなかった。

「……『仲本穂乃果』は、石頭の上層部やあんな『甘ったれたお遊戯女』の様な愚物には、絶対に負けない。今に見てなさい、貴様たちを必ず地に引きずり落とし、私は頂点に立ち、地に這い蹲つた貴様たちを見下ろして見せる……！」

そう一人で、自分以外誰も居ない執務室で声を立てる仲本提督。その声に答える『物』

は誰一人としておらず、仲本提督の管轄するトラック諸島鎮守府は、仲本提督の声以外には海風と風の音しか聞こえない、まるで幽霊屋敷の様に静まり返っていた。艦娘の声は、一切聞こえる事は無かった。

## 第一九話 硫黄島沖大演習前日談

拝啓、直ぐ傍でお腹抱えて笑っている深山提督と青葉さんへ。聞くまでも無くお元気ですよねそうですね。因みにワタクシこと駆逐艦『桜風』は唯今現在

「む・・・むらくもお・・・。酷いじゃないか・・・これは、男の性と言うか、ただの社交辞令だ・・・」

「初対面の駆逐艦娘を口説いて食事に誘うのが『社交辞令』な訳無いでしょアンタ馬鹿あ!!? 大体アンタのその口説き癖を良い加減どうにか直しなさいよ!!!」

「それは無理だ。美しい女性を見るとどうしても、この俺の中の『漢の魂』が『彼女を口説け』と轟き叫ぶんだ!!!」

「……ああそう。言っても分からないのなら、覚えるまで身体に叩きこんでやるわよ!!」  
「え、いや、叢雲、流石に槍の穂先を突き立てるのはギャアアアアアア!!」

自分の配下である筈の駆逐艦娘の叢雲に自身の上官になる提督である筈の『大石翔』大將が全力でしばかれているのを見て大混乱しています。え、『提督』と『艦娘』の關係ってこれで良いの？

「『大演習』……ですか？」

「そうよ。『桜風』の性能評価試験と、今までに開発した新兵器の実践演習を纏めてする事になったの」

「……また急に決まりましたね、司令官」

「他所の提督が『桜風』の性能に疑いの目を向けているそうだし、もしかしたら救援や共同戦線を張る事になるかもしれないから、その時に『桜風』の指示を無視されない様にする為の予防線だからね。早い方が良い事には違いないから」

『駆逐艦『桜風』酒酔い大暴走事件』より早幾日。深山艦隊の艦娘は皆抱き着き魔となった『桜風』に対して暖かな……具体的には『いつでも抱き着いてきて大丈夫だよー？』

ほらほら、こつちに來なさいな』的な対応に終始し、それによって『桜風』の恥ずかしさと申し訳なきからくる引き籠り願望は、早々に無くなつていった。一部艦娘からは抱き着きや膝乗せをしないと犬が尻尾を丸めるが如くシユンとした表情になつてしまうのも要因の一つであつたが。

その後の『桜風』の日常業務は、深海棲艦相手だとオーバーキルにも程が有る為殆ど出撃する事も無く開発と建造、そして深山提督の仕事の手伝いに終始していた。ただ、開発は兎も角として、建造に関しては何度繰り返しても『一隻たりとも』成功する事は無かつた。戦艦や空母、レア駆逐艦等あらゆるレシピに加えて、最後の最後には意地になつた深山提督の指示で『資源消費量MAXでの大型建造』すら決行した物の、結果は『建造成功無し』に終わった。正気に戻つた深山提督はその後最終的な全消費資源量を見て引き攣つた笑みを浮かべた事は言うまでもない。

「相手は何処の艦隊ですか？」

「舞鶴鎮守府所属の第7海上部隊ね」

「舞鎮第7部隊……。ああ、あの部隊ですか」

「……『あの部隊』？」

「……まあ、悪い提督じゃ無いから、安心して良いと思います」

……眼を逸らしながら言われても説得力有りませんが青葉さん。

『桜風』と一緒に深山提督の手伝いをしていた青葉の行動を見て、そう思う『桜風』。幸か不幸か、青葉と深山提督が揃って小さく肩を震わせていた事には気付くことは無かった。

「やあやあお嬢さん。君が今話題の『桜風』ちゃんだね？俺は舞鶴鎮守府の『大石翔』つて言う者だ。どうだい？もし良かったら演習の後にも高級レストランで一緒に食事でもグボア?！」

「初めましてね『桜風』。舞鶴鎮守府第7海上部隊大石艦隊所属の駆逐艦娘の叢雲よ。この馬鹿の妄言は聞かなかった事にして頂戴」

「お、おう……おう?おう……?おう?」

そして初対面で軍服を着たイケメンに開口一番で口説かれ、白髪の駆逐艦娘が何処からか取り出した槍でそのイケメンが物理制裁された情景が、冒頭部である。『桜風』は処理が追いつかずどこかの駆逐艦の口癖になっているのはご愛敬である。



「では改めて。舞鶴鎮守府から来た『大石翔』、階級はこの前大将を拜命した男だ」

「その秘書艦で尚且つ初期艦の叢雲よ」

「はい、大石大将、それと叢雲さん。駆逐艦『桜風』と申します。明日の演習ではよろしく願います」

「へえー……。大石君大将になったんだ。寝技でも使ったの？」

「使ってませんよ!? 深山提督変な事言わないで下さい!」

「ふーん……。寝技、ね」

「天地天命に誓ってそんなことして無いからその冷たい目線をやめて下さい叢雲殿おー!?!」

「……いったいなんなんだこの二人。仲が悪いようには見えないけど……?」

『桜風』の頼りない知識と深山提督とその艦娘との生活で得られた経験では想像もつかない様子に、『桜風』はただただ、そんな感想を抱いていた。

「……えっと、大石大将と深山提督の関係って、一体どのような物ですか?」

取り敢えず深山提督と大石大将とは、雰囲気的に浅からぬ縁では無さそうだった為、

叢雲と大石とのじゃれ合いには介入する事無く深山提督に聞いてみる『桜風』。『お取込み中の所声かけるのは……』と言う判断からである。

「大石君は『提督予科練』における私の二期後輩ね。一昔前に長門型や一航戦に二航戦を建造して少々天狗になっていたこの子を、丁度演習相手だった私が教育してからそれなりに付き合いが有るの」

「いやあお恥ずかしい……。もしあの時に戻れたら全力で当時の俺を殴り倒したい位の黒歴史ですわ」

そう言つて冷や汗を流しながら右手を額に当てる大石大将。その脳裏に過るのは、強力な艦艇を建造して浮かれてしまい、つい演習相手の深山提督配下の駆逐艦娘に『貶されている』と勘違いされそうな言葉を吐いてしまった結果、その戯言の代償を骨身にどころか本能にまで染み渡るまで味合された過去の映像だった。お陰で自身の慢心と天狗鼻は消滅し、配下の駆逐艦娘との関係も、その後の努力も有つて良性化したので、結果オーライと言えればそれまでであるが。

「それで、大石君の艦隊からは誰を連れて来たの？」

「つい先ほど話に出た長門型と南雲機動艦隊。それに時雨改二や夕立改二、金剛改二の様な改二改造組。．．．つまりは俺の艦隊の精鋭全てを掻き集めてきました」

「．．．本気なのは分かったわ。でも舞鶴の方は大丈夫なの？」

「『極東唯一の安全地帯』に深海棲艦が侵入してくるのなら、その時点で日本は既に終わっていますよ。それにあつちには俺以外にも提督と艦娘が居ますし」

「そう。なら良いわ」

「．．．へへっ。深山提督、俺の艦隊は『あの時』とは違います。今度は、絶対に勝たせて貰いますよ」

そう言って不敵な笑みを浮かべる大石大将。元が日本型優男と言うか整った顔立ちのイケメンで有る為、その姿はまるで映画のワンシーンのようであった。脳天にまるで鏡餅の様なでっかいたんこぶを作っていないければ、もっと素晴らしい光景だったので。

「こつちからの第一陣は戦艦『長門』『大和』重巡洋艦『青葉』航空母艦『瑞鶴』『加賀』駆逐艦『陽炎』の六隻。事前計画の通り彼女たちには『桜風』の開発した兵装の実践演

習試験をして貰うわ」

「そして休憩を挟んでの午後からは、駆逐艦『桜風』一隻に対して俺の艦隊の全力が挑みかかる訳だな」

「・・・支援とかも含めたら一隻対二十四隻ってやり過ぎな気もするんだけど、上層部からの指示も有るからね・・・」

「・・・叢雲はこう言ってるけど、『桜風』はどう思う？」

「・・・そうですね・・・」

そう深山提督が言うと、顎に右手を当てて少し考える『桜風』。前は水を向けられたら奇声を発したり動揺で震えたりしていたが、今になるまで暫く他者と交流しながら時間が経つと、早々変な姿を見せる事は無くなっていった。適応化が進みつつあると言った方が正しいか。

「・・・問題ありません。無傷での完全攻略は難しいとは思いますが、少なくとも戦闘可能状態かつ勝利判定での終結は確実に迎えられます」

「へえ、言ってくれるじゃないか。俺の艦隊の艦娘は後発組では有るが、少なくとも俺より先輩の提督の熟練艦娘であっても勝てるくらいには相当の経験を積んだ歴戦艦揃い

だ。そいつらが群れになって襲い掛かっても勝てると言うのか？」  
「ええ、もちろんです。事実ですから」

涼しい顔で大石大将の挑発的な言葉に答える『桜風』。その言葉には特に深い決意や意図、虚勢などは込められていなかった。まるで『日本人だから当然箸くらい使えます』と言わんばかりに『当たり前前表情と声色』での返答だった。

「……そう言えば大石君。大挙して艦娘を連れて来たのは良いとしても、まだお昼食べて無いですよ？」

「う、まあ……はい、そうです。横須賀に来れると言う事で俺の艦隊の鈴熊コンビ筆頭に都会派メンバーが一刻も早く来たがったせいで早朝始発の新幹線で来たので……」  
「……青葉、『桜風』。アナウンスで大石君の艦娘を呼び集めるから、その娘たちを間宮食堂に誘導してくれる？」

「叢雲も頼む。駆逐艦勢とか大型艦連中とか、多分腹空かしてるだろうからさ」

「分かりましたー！青葉、叢雲さんに『桜風』さんと一緒に呼び集めてきますー！」

「……はあ、分かったわよ。なるべく早く早く食堂に来なさいよ、司令官」

「分かりました。深山提督も、ちゃんと来てくださいね」

そう言つて敬礼を行い、執務室から退室する三隻の艦娘たち。叢雲にどのような私服姿の艦娘が来ているのかを聞きながら退室する姿は、まるで学校教室から帰り支度をする女学生であつた。

「あ、そうそう司令官。深山提督に変な事したら・・・」

「しねえよ?!流石にもう殴られたくないわ!!」

執務室から出る最後の最後に、叢雲によつて大石大将にぶつとい釘が突き刺されたが。

「・・・それで、深山提督は未だ少将のままなんです。俺ですらもう大将になつていてつて言うのに」

「階級なんてただの飾りよ。自衛海軍における提督の権限は『艦娘への指揮』に限定され

ているから、私達提督に預けられた階級なんて『戦意高揚』くらいの意味合いしかないんだから」

「・・・『階級は飾り』と言い切るのは深山提督位な者ですけどね・・・」

「他人は他人、私は私。第一日本を守る為に戦っている以上、余計な荷物は要らないの。無駄に階級高いとマスコミ取材とかがうつとおしいらしいね。私は皆との時間をそんな事で削られたくないし」

「・・・こんな性格の人だから第一期生の連中に目の敵にされてるんだろなあ・・・。本当に相変わらず、権勢欲が極端に乏しい通り越して殆どない人なんだから・・・」

口には出さないが内心そんな感想を抱く大石提督。良識派とも言うべき提督たちの間では、『深山満理奈』と『提督予科練 第一期生』との関係は修復しようが無いほど悪化している事は、表沙汰にされていない為表面上は言われていないが、それなりに知られていた。まあ、悪化した原因が『深山提督を失脚させようとした人間が次々と提督の地位から様々な形で消えているから』と言う不気味にも程がある事例である為、この大石大将のような過去に深山提督と浅からぬ縁を持つ人間以外は、大半の良識派の提督たちからは『敬して遠ざける』とも言うべき対応を受けていたが。単純な話、安易に深山

提督と深く関わって現在でも少なからぬ勢力を持つ第一期生の連中に目を付けられないの、前述べの『失脚させようとした人間は例外無く消えている』事で怖がられているのだ。

「……深山提督、気を付けて下さい」

「……何を、かな？」

「このところ、『第一期生』は血相を変えて手柄と手駒の確保に奔走しています。實際俺の所にも来ました。当然ながら、即刻叩き出しましたが」

「……それがどうしたの？」

「連中、もしかしたら権力保持の為に『桜風』を謀略や武力で強奪しようとするかも知れません。……有り得ないとは思いますが、追い詰められた小物は何をやりだすか分からないものでは有りませんから……」

「まったく……心配性ね、大石君は」

そう言いながら、深山提督は大石提督に対して苦笑しながら、冗談めかしつつこう明確に切り返した。



「私の大切な『仲間』<sup>家</sup>に手を出す奴は……、例え如何なる存在であろうとも、例外無く『勝手』<sup>族</sup>にこの世から消えてくれる』から、心配いらなわ

## 第二十話 硫黄島沖大演習午前の部 〈開幕編〉

五月も終わりに近付きつつあり、やや曇りつつも梅雨入り前最後の晴れ間と穏やかな海のこの硫黄島沖。何時もならば穏やかにクジラや魚たちが遊んでいるこの海域には、傍迷惑にも本来の『海の住民』である彼らとは違う鋼鉄のクジラたちが大挙して押し寄せて来ていた。

その鋼鉄のクジラたち：：、つまりは硫黄島沖大演習に参加する艦娘の中にいる、周りがww2レベルの艦艇だらけの中で一隻だけ異彩を放つとある軍艦の中では、各地域に向けての電波が発せられ始めていた。

「さーていよいよ開幕します硫黄島沖大演習午前の部！今回の大演習は提督連中だけでなく自衛海軍のお方々も様々な形で観戦されている異例中の異例の大演習だ！実況は舞鶴鎮守府第7海上部隊所属の『大石翔』大将！そして解説役にはこのお二人方！」

「横須賀鎮守府第3海上部隊所属の『深山満理奈』少将よ」

「『超甲種重武装突撃型高速巡洋駆逐艦 桜風』、略称駆逐艦『桜風』です。．．．あの、

提督？」

「どうしたの？ 『桜風』」

「・・・なんで私の艦艇でこんな事をやってるんですか？」

「そりゃ 『桜風』 の艦艇が一番通信設備等が優秀だったからだよ。 『桜風』 の妖精さんの協力も有って、今まで苦労して運んでた観測機器が殆ど要らないんだからな」

そう言う大石大将の目線の先には、やっぱりどこからか調達してきたアシスタントディレクターの衣装を纏った 『桜風』 の妖精さん多数による、カンペやらテレビカメラやらを使用しての本業顔負けの本格的撮影を行っている姿が有った。カンペは 『桜風』 たちが見える様に妖精さん複数によって利用されていたが、テレビカメラ等の通信設備の方は妖精さんサイズの一見玩具の様な代物だった。だがこんな玩具の様な物で国営放送を超えるレベルでのハイビジョンでの生中継が出来るのだから世の中理不尽である。

「・・・そうですか」

「『桜風』 が納得してくれたところで！ それでは先ずはこの 『大石翔』 提督が連れて来た艦娘の紹介に入りませう！」

『一遍やってみたかった』との事にて演習実況をしている大石提督の合図にて、三人の背後に移る大型の液晶画面に大石提督傘下の艦娘が映りだす。配信されている各所での一部は一瞬のタイムラグも無くスムーズに進行する手際の良さに関心する声が聞かれているが、そんな事は知らずに大石提督は艦娘の説明に入る。

「先ずは旗艦である駆逐艦『叢雲』。俺の初期艦で、ずっと戦い抜いてきた歴戦艦だ。装備は『10cm連装高角砲』と『61cm四連装酸素魚雷』の一般的な兵装だが」

「足りない火力は腕と戦術でカバーする気ね」

「ですね。因みに俺の叢雲は改二になっているから、ただの駆逐艦と甘く見て襲い掛かったら痛い目見ますよー」

サラリと素面で『俺の叢雲』呼ばわりして、『桜風』から渡された手持ちの通信機器で映像を見ていた叢雲を茹蛸よりも真っ赤に赤面させつつ、大石提督は次の艦娘の紹介に入る。

「次は戦艦娘の『長門』と『陸奥』。言わずと知れた『日本の誇り』の二艦だな。装備は『試製41cm三連装砲』が両艦に主砲として搭載。長門にはそれに加えて『一式徹甲

弾』と『九八式水上夜間偵察機』、陸奥には『32号水上電探』と『零式水上観測機』を搭載させている」

そう言いながら画面に映るのは、史実では存在しない日本海軍の3連装砲塔を搭載した長門型のハイビジョンカラー映像が流されていた。『違法建築』と称される扶桑型戦艦の物とは全く違うスラリとした艦橋の前部に背負い式に存在する『試製41cm三連装砲』は、とても『絵』になった。

「・・・何と言いますか・・・」

「『桜風』? どうしたの?」

「・・・いえ、ただ何と言いますか・・・。この長門さん、凄く『綺麗』だなあ・・・と」

某所で同じ名前の戦艦娘が『私は綺麗では無いと言うのか『桜風』えー・・・』と嗚咽を嘯み殺し、『綺麗』と称された艦娘がまんざらでもない微笑を浮かべた表情になったりしているが、そんな事は知った事ではないとばかりに説明は続く。実際そんな事が起きている等放送中の3人は全く知る由も無い。

「お次は重巡洋艦娘の『羽黒』。この娘も叢雲と同じく改二になっている。俺の艦隊における重巡洋艦のエースだな。装備は『20・3cm3号連装砲』と『20・3cm2号

連装砲』の混載と『61cm四連装酸素魚雷』、『零式水上観測機』だ」

そう言う大石提督の映像を見て『重巡洋艦のエース……。司令官さん、私、頑張ります！』と小さな声で決意を固める黒髪の美少女。女性に対して軽薄な部分がある大石提督だが、配下の艦娘からは嫌われている訳でもなく寧ろ好かれていたのは、少なくとも相手が本気で嫌がる事は絶対にやらないのに加えてこう言った時に褒めたりするなど、細やかな対応をしているからだろう。因みに余談では有るが、外見的イケメンフィルターは外目の美醜は全然気にしない艦娘には通用しない為、この大石提督自慢の二枚目フェイスは艦娘に対する有効度強化には全く意味が無かった。

「最後に航空母艦娘の『飛龍』と『蒼龍』だな。二人とも改二になっている、我が艦隊が誇る最優秀航空母艦娘だ。装備に関しては……。あとのお楽しみと言う事でここでは伏せさせて貰う」

「……。総じて言えば、こっちの出す艦隊よりも若干劣る艦艇が居るわね。以前の意趣返しかしら？」

「まさか。俺たちは今回の演習に置いて、この編成がベストメンバーだと思っています。そもそも舐めてかかったら、深山提督絶対怒るでしょうに」

「まあ……否定はしないわ」

そう苦笑して答える深山提督。少なくとも今回の様な異例の演習で下らない個人的感情を混ぜる様な男では無い事は知っていた。本当に成長したなあ。そう心中で呟きつつも、次は自分の編成メンバーを説明する為に、深山提督は喋りだした。

「次は私の艦隊ね。まずは旗艦の戦艦『大和』。この戦艦も説明不要ね。大和に搭載した兵装は『桜風』が開発した『46cm 75口径4連装砲』『50.8cm 75口径4連装砲』の混載。対空火器として『12.7cm 70口径連装高角砲』と『28mm 3連装機銃』、艦載機は『桜風』の開発した『晴嵐改』ね」

「待った待った待った!!ちよつとその兵装説明待った!」

「……どうしたの?」

大和に乗せた兵装の説明を終えた途端に焦りまくる大石提督に遮られ、不思議そうに大石提督に疑問を浮かべつつ問いかける深山提督。因みに『桜風』も深山提督と同じく疑問符を浮かべながら大石提督を見やっている。

「いや戦艦の兵装スロットよりも一つ搭載兵装が多いじゃないですか！」

「どういう訳か『桜風』の開発した兵装だと、通常のスロット制限が存在しないみたいなのよ。代わりにフィット砲補正とかも何もないんだけどね」

・・・一言たりともそんな事聞いてないんですがそれは

明らかにそう思っている事が丸分かりなまでにあんぐりと大口を開けている大石提督を、目の前で手を振っても反応しなかったためにそのまま放置して、深山提督は説明の続きを始めだす。因みに『桜風』はその間に画面の向こうの視聴者に対してそれぞれの兵装の能力などを説明していた。その向こう側では未知の大口徑砲だけでなく『近接炸裂弾』や『新型徹甲弾』の存在を知って艦娘と一緒に祭りになっっている鎮守府も有れば、苦虫を噛み潰したが如く画面を睨んでいる鎮守府も有りと、反応は様々だったが。

「次は戦艦『長門』。彼女には『41cm 65口径4連装砲』と『41cm 50口径3連装砲』、副砲として『15.5cm 45口径4連装砲』、対空砲に『10cm 65口径連装高角砲』『57mmバルカン砲』を搭載させているわ。艦載機は『晴嵐改』と同じく『桜風』の開発した水上戦闘機の『強風』ね」



「ちよつとまつてそのへいそういみわかない」

「そんな死んだような顔しても、こつちは困るんだけど。正氣に戻りなさい、大石大將殿？」

「『いみわかない』と言われましても、これらは普通にとても大人しい兵装ですよ？『波動ガン』とか『αレーザー』とか『プラズマ砲』とか『レールガン』等と比べたら」

「なにそれごめんちよつとおにいさん『桜風』ちゃんがなにいつてるのかわかない」

顎が外れんばかりにあんぐりと口を開けて戯けた事を言う大石提督。そして今度は『波動ガン』だの『レールガン』等と言うSF兵器が『桜風』の口から飛び出た事に、この放送を見ていた関係各所は文字通り一斉に横須賀鎮守府や海軍庁に嵐の如く確認の通信を入れ始めるも、既にこの事を予期していた深山提督や山本長官の手筈によつて軍事的緊急通信を除いて回線を切断して居た為、業務が妨害される事は無かつた。

「取り敢えずサクサク行くわよー。次は重巡洋艦『青葉』。兵装は『20. 3 cm 55 口径連装砲』『25. 4 cm 50 口径3連装砲』『61 cm 7連装誘導魚雷』『対潜ロケット』『25 m m 4連装機銃』。映像を見て分かる様に『桜風』よりもマシだけど、元々重巡としては小型な船体だったから甲板が凄い事になっているわ」

「え？もつと載せられますよね？魚雷発射管とかあともう2基か4基、あとは機銃も甲板の空白部分に敷き詰められますが」

『桜風』と今の皆とは違うのよ。これ以上載せたら転覆しかねないから。寧ろこれだけ搭載出来ただけでも奇跡に近いわ」

「・・・そうですか」

「そうなのよ」

そう言つて真面目な表情でトンでも無い事を言い出す『桜風』を優しい笑顔で諭す深山提督。実際、事前の実験でも想像以上の重たさに青葉は暫くの間兵装に『文字通りの意味で』振り回されていた。その為この『桜風』の発言を聞いた青葉は、真つ白の顔をした自身の妖精さんと一緒に、自身も真つ白な顔をしながら引き攣つた笑みを浮かべていた。以前『桜風』謹製『深山艦隊対超兵器部隊兵装搭載案』を見て、その余りにも非現実的なトンでも武装を見た記憶が蘇つたのだ。

「えつと・・・、次は駆逐艦の『陽炎』ですね。彼女には主砲を『15.2cm75口径4連装砲』に換装して貰つて、後は雷装を『80cm5連装空気魚雷』と『5連装新型対潜誘導魚雷』を搭載。機銃は『28mm4連装机銃』を可能な限り搭載しています」

「雷巡を笑えないくらいに大量に艀装が施されているな……。失礼だが、これで本当に戦えるのか？」

「試験では問題有りませんでした。実践演習は今回が初めてですが、きつと大丈夫だと思います。私も過去に使用していた武装ですから」

大石提督の至極全うな疑問に『桜風』が答える。青葉と同じく、と言うより艦載機と高角砲を換装した程度の変化しか無かった加賀と瑞鶴とは違い、未知の新兵装を搭載した艦娘は、例外無くその兵装に振り回されていた。その事に一抹の不安が無かったわけでは無いが、前の世界では『新型兵装搭載後練習無しに即実戦』がほとんどの場合、デフォルトだった『桜風』に取って見れば『試験で感覚も掴んだだろうし、後は実戦で慣れて行けば良い』と自身の経験に照らし合わせて余り問題視していなかった。

「それで最後に航空母艦娘の『加賀』と『瑞鶴』ね。この二人の装備は今までの艦娘たちとは違って大分普通な方ね。自衛用の高角砲や機銃が『12.7cm 60口径連装高角砲』と『40mm連装機銃』に換装されて、艦載機が全て『桜風』開発の『陣風』『紫電改』『烈風一型』『流星改』『彗星五四型』『彩雲』。因みに『紫電改』以外は全部夜間戦闘が

可能よ」

「・・・深山提督。貴女、絶対感覚がおかしくなってますよ」

『桜風』の開発風景を見ていれば、誰だってこうなるわよ。後今回の演習だと意味ないけど、『彩雲』には磁気探査装置と航空爆雷が搭載されていて、対潜攻撃も可能よ」

「全く実戦では役に立たないと思いますけどね。直接『音波探信儀』で発見して対潜攻撃した方が余程早くて確実だと思います」

過去の記憶に『友軍機の対潜攻撃が全く功を奏していない光景』が有る『桜風』は、『彩雲』の航空爆雷に対して辛辣な評価を下しているが、深山提督や大石提督、そして放送視聴中の人間の受け取り方や反応は全く違った。『磁気探査装置』を搭載して居ると言う事は、少なくともこれまでよりも効率的に深海棲艦の潜水艦を発見し、攻撃可能で有る事は明白だったからだ。

「・・・それで総評としては、俺の率いる舞鶴鎮守府第7海上部隊は総じて不利みたいだな」

「どうしたの大石提督？もしかして戦う前から負けた時の言い訳作り？」

「まさか。こっちは使い慣れた兵装を装備した熟練揃いだが、そっちは歴戦であつても

兵装は今まで実戦投入された事の無い兵装だ。いくら高性能でも、使いこなせなければ何の意味も無い。艦隊の皆も、やる気満々だぜ」

そう大石提督が言うと、画面が切り替わって今回の演習に参加する大石提督の艦娘の姿が映る。彼女たちに渡された手持ちの通信機器を通して映る姿は、皆一様に不敵な笑みを浮かべているか、その瞳に猛りし戦意の炎が宿っている事は容易に分かった。まあそこまでは良かったのだが・・・

「…………え、え?も、もしかして…………映ってます?」

「よお羽黒。みんなしつかりと映ってるぞー」

「「ちよ、ちよつとアンタ! 私たちの姿が放送されるなんて何も聞いてないんだけど!」

「え? 『桜風』から話されているだろ?」

「…………え? そんな話大石提督から聞いていませんよ?」

「…………なるほど、伝達ミスね。報告・連絡・相談は大人としての基本よ? まあ、取り敢えず後で貴方の艦娘にこつてり絞られてきなさい」

そう笑顔で深山提督に宣告される大石提督。そしてその深山提督の言葉に大石提督

は何も言い返せなかった。

「嫌……ダメ……見ないで……見ないでえー！」

「あら、あらあら。じゃあ自己紹介しないといけないわね。舞鶴鎮守府第7海上部隊所属長門型戦艦二番艦の陸奥よ。今日はよろしくね」

「その姉の戦艦長門だ。……提督、最近こう言ったうっかりが多くないか？」

「そんな気もするねー。あ、皆知っているだろうけど、航空母艦の飛龍です！例え誰が相手であっても、矢尽き刀折れるまで戦い抜いて見せます！」

「航空母艦蒼龍です。私たちの艦載機の練度もバツチリです。皆さん、戦果を期待してください！」

そしてそんな自由奔放に画面の向こうの人相手に喋ったりしている中、ただ一人駆逐艦娘の叢雲だけは、大石提督に対して呼びかけていた。

「ねえアンタ」

「……な、なんだい、叢雲？」

「後で私の所に来なさい。良いわね？」

「……はい」

・・・あの様子だと気付いていないわね、大石君。叢雲も大変ね

自分のミスで説教される事が確定したと思ひ完全に項垂れている大石提督に対して、深山提督はそんな感想を抱いていた。深山提督の目には『俺の叢雲』の様な口説き文句は自身に対してだけに言つて欲しい』・・・と言つた可愛らしい嫉妬の様な物が、今の叢雲には有る様に見えた。画面の向こうの面々は兎も角、今この場でその事を分かっているのは深山提督だけだが。

「・・・あの、提督。もうそろそろ時間ですが・・・」

「あ、もうそんな時間？じゃあ始めないとね。・・・大石君。早く戻りなさい」

「ウイツす」

「・・・えつと、取り敢えず大石提督。お茶どうぞ」

「サンクス『桜風』」

「「・・・アンタ、寛いでいるんなら後で説教時間増やすわよ」」

「・・・ドウシテコウナツタ」

死んでいるかのような虚ろな眼と言葉で虚空を見つめて呟く大石提督。その姿で視

聴者の一部がツボに入りながらも、粛々と『硫黄島沖大演習午前の部』は始まりつつあった。

「・・・そうだ、深山提督」

「? そうしたの『桜風』?」

「さつき大石提督が言っていた『すろつと』って、なんですか?」

「・・・嘘、説明していなかった?」

因みにその演習中、隙を見て深山提督が駆逐艦『桜風』に対して『スロット』の概念を教えていた事を知っているのは、この臨時放送室に居た三人と『桜風』の妖精さんだけである。



## 第二一話 硫黄島沖大演習午前の部 理想と現実

大石艦隊と深山艦隊による硫黄島沖大演習。第四期生でも近年では取り分け抜きん出た戦果を出した舞鶴鎮守府第7海上部隊と、第一期、第二期生で唯一『アイアンボトムサウンド無傷攻略』と言う語るまでも無い伝説を成し遂げた横須賀鎮守府第3海上部隊の精鋭たち。

この演習を見ていた人間誰もが、血肉湧き踊る『正統的艦隊決戦』を想像したのは言うまでもない。双方共に精鋭であり、尚且つ片方は扱いは成熟していないが前人未到の新兵器を搭載していたのに対して、もう一方は従来兵装では有るがそれこそ自身の身体のように扱いこなしている。双方共に一長一短と言えたはずだ。

そしてその幾多の人間や思惑とは裏腹に、『正統的艦隊決戦』が『こんな展開』に発展するなどは・・・、恐らく、『艦娘』と『桜風』の両者と良く関わっていた深山提督を含めて、誰にも予測出来なかつただろう。

「・・・無様な失態ね」

「お互いにね」

そう神妙な面持ちで語る二人の空母艦娘。深山艦隊に所属している『加賀』と『瑞鶴』だ。彼女たちは艦橋でお互いに自身の飛行甲板から『事前想定の二倍近い時間をかけて』発艦完了する第一次攻撃隊の姿を眺めていた。

『何故二倍もかかったのか』と言う疑問には、こう答えるしか無かった。

「でも、まさか妖精さんが『ヒューマンエラー』を連発するとはねえ。あ、でも『妖精さん』だから『フェアリーエラー』かな？」

「五航戦。今は演習に集中しなさい。・・・疑問は、後で調査するのよ」

「・・・分かってるってば、加賀さん」

艦娘が現れて早三年以上たつが、その間に一度たりとも何処からも報告されていない『妖精さんの不手際やミスによる遅延』。それが、今回の演習に参加した加賀と瑞鶴では多数発生していた。確かに『桜風』が開発した艦載機は全部『未知の兵装』で有る事は

確かだが、それを言い出せば瑞鶴も加賀も『烈風』や『流星改』など昔の『物言わぬ艦艇』だった時代には搭載した事も無い『未知の兵装』だ。同じ『未知の兵装』で有るにも拘らず、一般的に使われている『烈風』や『流星改』は問題無く飛ばすことが出来、『桜風』が開発した『流星改』や『烈風一型』ではミスや事故を連発する。道理に合わなかった。

「……それに、『妖精さんの不手際』を笑える立場に無いしね……」

「……」

問題はそれだけでは無かった。試験では加賀と瑞鶴が直接操作して居た為に問題無かったが、通常の場合、戦闘では艦娘が全艦載機を操作するのではなく、大半の艦載機は妖精さんの手に委ねられている。これも本来は例え前日まで零戦21型に乗っていた妖精さんがいきなり烈風改にさせられても問題無く編隊を組んで戦えているのだが、今回は今までに無いほどにかなりグチャグチャな編隊構成であった。加賀と瑞鶴が必死に『いつも通り』に飛ばそうとしても、どうやっても編隊は崩れて行った。

「……やはり、修練が足りませんね」

「……甘く見過ぎていたね、『桜風』が開発した艦載機を」

理由は何となく分かった。艦娘が開発する兵装は例外無く彼女たちが所属していた軍とその時代に存在した兵装・・・つまりはWW2レベルの兵装に限定されている。欧州やアメリカではどうなのかは彼女たちは知らないが、少なくとも日本の艦娘はそうである。そして一つ例に挙げると、現状通常での開発可能な艦載戦闘機で最も優秀な艦戦である『烈風』は、『最小の2000馬力級エンジン』として名高い1800馬力の誉エンジンを搭載している。

だが『桜風』が開発した艦載機は、例えば『陣風』一つを例にとつても『40mm航空機関砲』と『30mmバルカン砲』と言う強武装を装備する機体強度に加えて『最大速度時速685km』『航続距離2700km』『夜間戦争可能な電子装備』の性能を実現する為に、発動機は圧巻の『3500馬力』である。誉エンジンを鼻で笑い飛ばせるこの怪物エンジンに、いくら艦娘と妖精さんが熟練揃いであったとしても、元々『歴史上存在しない筈の物品』に対してノータイムで適応出来るはずが無かった。

・・・まあ、私達はまだ良い方かもしれないわね

心中で瑞鶴がそう零しながら、視線を動かす。その視線の先には、『桜風』が開発した機関や主砲、補助兵装等を搭載した長門や青葉たちが、悪戦苦闘しながら航行している

姿が有った。

「……青葉、そっちはどうだ!？」

「……駄目です、処理しきれません……頭が、痛い……」

「青葉さん!無理しないで下さい!……っ、痛い……」

……まさかこんなことになるとは、夢にも思っていなかった……

事前の練習では問題無かった為に楽観していたあの時の自分を殴りつけたくなる長門。斯く言う長門も、青葉や陽炎、そして無言で歯を食いしばっている大和と同じく『桜風』が開発した補助兵装である、全力稼働状態の『電波探信儀I-V』『電波照準儀I-II』『新型火器管制装置』から大量に流れ込む情報量の前に、頭が激痛に苛まれる程に一杯一杯だったのだが。

瑞鶴と加賀の兵装に関しては、高角砲と機銃、後は艦載機の換装程度で終えられたが、大和や長門たちには『桜風』が開発した補助兵装が少ない事も有って集中的に搭載させられていた。開発された補助兵装は全て砲雷撃戦用で有る為、極々普通の判断だった。そして瑞鶴たちと同じく『フェアリーエラー』を無数に連発するだけでなく、艦娘本体自体が、補助兵装から大量に流れ込む情報の奔流の為に、完全にオーバーヒートに近い状態へと陥っていた。

・・・考えてみれば当たり前である。過去の艦艇時代には極初步的な電子装備程度しか扱った事が無いのに、今使っているのは『昔』よりも遥かに高度で、高精度で、そして濃密にあらゆる情報を取得し、運用できる電子装備である。仮に例えたとすれば、20世紀末期の旧式PCで最新のオンライン型FPSゲームをやるうとする様な物だ。経験皆無な艦娘がこの情報量をマトモに処理し切れるはずが無い。

「・・・ビッグセブンの誇りにかけて、無様な戦いは見せられない・・・」

己を奮い立たせるためにそう意気込む長門であったが、自身の妖精さんは『桜風』製の補助兵装が全力稼働してから相も変わらず脂汗と鼻血を大量に垂れ流しながら、初め

て扱う未知の電子機器と説明書を片手に向き合っていた。32号電探などを操作した事のある妖精さんですら例外では無く、この『電波探信儀ⅠⅤ』『電波照準儀ⅠⅠⅠ』『新型火器管制装置』の前では白旗を振るしか無かった。

「……青葉さん、針路が逸れていますよ……」

「……あつ、すみません、直ぐに戻り……痛い……」

「……陽炎も、艦隊から離れないようにな……」

当然ながら問題は補助兵装だけでは無い。副産物である砲兵装の開発の方が多かったが、機関レシピでも少数とは言え『桜風』は新型機関の開発に成功し、それらは長門たちに搭載されていた。長門と大和には『ガスタービンⅥ』、青葉には『巡洋ボイラーⅦⅠⅠ』と『標準タービンⅦⅠ』、陽炎には『駆逐ボイラーⅠⅤ』と『駆逐タービンⅤ』。お陰で速力は強化されているが、今度はこっちでも今までに無い性能や特性を持つボイラーやタービンに対して、機関科妖精さんが血反吐を吐きながらこの機関を動かしていた。当然連動して艦娘本体にも重い負担はのしかかっている。

【「・・・敵機、電探にて確認しました！一部が防空戦闘機隊を突破してきます！」

「嘘、加賀さんと瑞鶴さんの防空網を突破したの?！」

【「大和さん！今はそんなことより迎撃を・・・うう、頭痛い・・・」

だが演習相手である大石艦隊が、深山艦隊に発生している異常事態に配慮する訳も無く、遠慮無用に攻撃を開始した。身体的異常事態に苛まれる中演習を続行されると言うかなり酷い扱いを受けている長門たちだったが、少なくとも今回の演習の目的は『桜風』が開発した兵装が通常の艦娘でも実戦で使えるかどうか』の調査で有る為、その事を承知していた深山艦隊対超兵器部隊は演習中止を要請する事は無かった。流石にどうしようもなくなったら彼女たちの妖精さんが無理やりにも止めるが。

【「敵機確認・・・、え、うそ、爆戦!?!」

「爆装零戦だ?!?それになんだ、あの戦闘機の数は何?！」

【「・・・相手の機体は何であったとしても、どうでも良いです。早く全部落として、撃沈判定を挽ぎ取って、司令官と『桜風』さんの所に帰りましょう!」

「お、おう・・・そうだな、青葉」



・・・珍しいな、青葉がそのような荒々しい態度を取るとは

青葉の見せた珍しい反応に『頭痛のせいか』と一人答えを出した長門は、大和の『全艦全速前進！合図に合わせて砲撃を開始して下さい！』との命令に従いながらも、自身に搭載された『41cm65口径4連装砲』と『41cm50口径3連装砲』、『10cm65口径連装高角砲』、『57mmバルカン砲』が敵機に向けて狙いを定め始め、また水上戦闘機『強風』が射出される姿を感じ取りながら、戦闘態勢に入る。

・・・戻ったら、徹底的に調査しなければならぬな

「提督さん・・・『桜風』・・・御免なさい。瑞鶴がもう少し上手く戦えていれば・・・」  
「すまない提督、『桜風』。託された兵装を、上手く扱いきれなかった私の責任だ・・・」

【「…………ごめん『桜風』。今の私には使いこなせなかった…………」】

「いやあ…………まさかこうなるとは」

「そうね…………。まあ、今回はこっちの負けね」

「…………俺たちが受けたのは戦術的敗北のC判定でしたが？」

「それでもあの兵装でS勝利出来なかった時点でこちらの負けよ…………もうちよつと突っ込んで、時間をかけて調査や試験をするべきだったのに、皆には申し訳ない事をしたわ。ごめんね、皆」

結果、初手の開幕航空戦における『艦載機の9割方を熟練戦闘機部隊で編成した大石艦隊』と『性能は兎も角速度が極めてお粗末な深山艦隊艦載機隊』の空中戦は、双方『ノーダメージ』…………つまりは『深山艦隊の実質的敗北』と言う波乱の幕開けとなった。妖精さんが操る『桜風』製艦載機は、その高性能の前に妖精さんの方が付いていけず、『陣風』は何機も失速したり、敵機との巴戦で味方機と空中衝突したり、『流星改』『彗星五四型』は相手の激しい回避運動と叢雲の的確な対空射撃による妨害、そして飛龍と蒼龍の操る戦闘機隊によって悉く撃ち放った雷爆撃が失敗するばかりか、機体の引き起こしなどに

失敗して海中に突っ込んだ機体すらあった。その後の航空戦も、艦攻、艦爆を搭載せずに殆どを戦闘機編成にして時間切れになるまで戦い抜いた、大石艦隊の飛龍、蒼龍姉妹の徹底的な防空戦によって有効打を与えられずに終わった。

次の艦隊決戦でも、深山艦隊対超兵器部隊は散々だった。確かに深山艦隊の装備したそれぞれの兵装は強力だった。『50. 8 cm 75口径4連装砲』『41 cm 65口径4連装砲』『61 cm 7連装誘導魚雷』『80 cm 5連装空気魚雷』『5連装新型対潜誘導魚雷』その他多数。だがそもそも命中させられなければ、それらを幾ら砲撃しようとも空砲と同じである。そして武装に加えて機関や電子機器が『桜風』製の、自分たちにとって未知かつ極めて高度である装備に、大和たちの艦娘としての処理能力は終始オーバーヒート状態だった。終盤に意地の陽炎、青葉による近接雷撃が陸奥に、そして大和の放った『46 cm 75口径4連装砲』の一弾が、大石艦隊旗艦の長門に直撃し、一撃で轟沈判定を挽ぎ取るも、その時点で時間切れとなった。

最終戦績としては『深山艦隊の戦術的勝利』つまりB勝利判定であったが、誰一人としてこの結果に喜ぶ対超兵器部隊所属の艦娘は居なかった。

「……まあ、取り敢えずは一端休憩を挟みましょう」

そう言つて『硫黄島沖大演習午前の部』の終了を宣言した深山提督は、取り敢えずは自身の開発した補助兵装が、陽炎や青葉たちに対して過大な負荷がかかった事を知つた『桜風』を落ち着かせる作業に取り掛かった。百面相の如くコロコロ表情を変え、頭を抱えて画面を見つめたまま支離滅裂に言葉を呻く『桜風』の姿は、可愛くは有つたが、明らかに錯乱して居る様にしか見えなかつた。可愛くは有つたが。

「……『桜風』、午後からの演習に参加出来るのか？」

「あ、ああ、ああああ……なんで、ドウシテ、わたしだと問題無くつかえるのに、青葉さん、陽炎、瑞鶴さん、みんな……ガ……あわわわががが……」

「……完璧にアカン状態だぜオイ……」

そう言つて『あちやー』と言う表情で目頭を抑える大石提督。初めて会つた時は、男慣れしていないが極めて胆の座つた冷静沈着な少女のように見えた。だが今の『桜風』には、そんな雰囲気は欠片も無い。まるで世界の終わりを目の前にしているかのような状態だった。

「……補助兵装の全力稼働を止めたら、青葉たちは元に戻ったそうだから、彼女たちに直接修正して貰うわ」

「……駄目そうだったら、午後の演習は中止ですね」

「そうね……。まあ、事情説明したら納得してくれるでしょ」

……今の演習の様子だと、『桜風』の開発した兵装は、そのまま流用しても殆ど有効には使えそうにないわね。……本格的にあの兵装を使うとしたら、やはり『桜風』の『建造』した『アレ』を使うしかないのだろうけど……

心中でそんな事を考えつつ、『桜風』を抱えて青葉たちの元に向かう深山提督。今の所『アレ』に関しては、工廠を管理する明石と工廠に良く入り浸る夕張に、『お願い』して、誰にも発見されない体制を取っている。まあ仮に誰かが発見したら、確実に大騒ぎになるだろう。『桜風』が『建造』した結果現れた『船体』や『艦橋』『煙突』のパーツがそれぞれ存在する光景を見てしまえば。

……でも、仮に『船体や艦橋などを改造、交換』したら、『艦娘』は一体どうなるの

かが明確に分からない以上、改造で『コレ』を使えはしない。『改造、交換』して『艦娘』が消滅したら……致命的処の話じゃない

詰まる所、問題はその一点に尽きた。兵装ならば、ただ単に乗せ換えるだけで有る為、今までと同じく換装しても問題は無かった。だが『兵装』では無く『船体や艦艇設備』を『交換』した場合、『艦娘』がどうなるかは予想も付かなかった。現代科学でははつきり言つて何もわかつていないに等しい艦娘の『核』とも言うべき、艦娘を艦娘足らしめる『場所』は今も分かつていない。ここで誰かを実験台にすると言う選択肢が脳内に一切出て来ない深山提督を『小の犠牲を厭う軟弱者』と取るか『仲間を大切にする慈悲深い女神』と取るかは、人それぞれだろう。因みに『仲本穂乃果』なら即断で適当な艦娘を実験台として生贄に捧げている。

「……大丈夫だから、『桜風』。貴女のせいじゃない。誰も、貴女を責めないから」

「……あおばさん……かげろう……ながとさん……ヒツグ……ぐすん……」

……考察は後ね。今は『桜風』を落ち着かせないと

意外と精神的に打たれ弱いと言うか、不安定な部分が有る事が判明した『桜風』を連れ立てつつ、青葉たちの所に向かう深山提督。その後青葉たちに飛び付いて泣きながら謝り続け、必死に青葉や陽炎たちに宥められたのは言うまでもない。

第二二話 硫黄島沖大演習休憩時間  
～駆逐艦『桜風』  
食堂内部での一幕～

今回、上層部発案で行われたこの『硫黄島沖大演習』。午前の部は誰にとつても想定外の結末に終わったが、『桜風』製兵装によつて自身の処理能力を圧倒する情報量を流し込まれて演習中ずっとオーバーヒート状態になっていた深山艦隊の艦娘たちは、演習終了後スケジュール通りに休憩をとる為、自らの尊敬する、大切な提督である深山満理奈少将が座乗する駆逐艦『桜風』に乗り込み・・・

「ほらほら、もう泣かないの。陽炎たちは大丈夫だから」

「心配させたのは悪かったけど、今回は『桜風』のせいじゃないわよ？だから、もう大丈夫」

「『桜風』。貴女の責任では無いのに泣かれたら、その・・・私達が困るから、もうやめて



頂戴」

「あ……あの深山艦隊最大のクールビューティ加賀さんを困らせるとは……『桜風』、恐ろしい娘!」

「何馬鹿な事言ってるの飛龍……」

「うう……ぐすつ……ごめんなさい……ごめんなさい……」

長門たちを見るなり飛び付き、ボロボロと大粒の涙を流して唯々『ごめんなさい』を連呼する『桜風』に戸惑っていた。

「……びつくりしたね、曙ちゃん。『桜風』さんがあんなに泣いちゃうなんて」

「ふん……あんな泣き虫が、本当に午後までに泣き止むわけないでしょ。午後からの演習をする意味なんてないわよ」

「そんな事を言いつつも超兵器対策会議での『桜風』の戦闘映像では背筋を伸ばして目を輝かせ、今回の演習も危うく寝不足に成り掛ける位に超楽しみにし、泣き出したさーやんや体調不良を起こした長門さんたちを超心配していたボノボノなのでした」

「さーさーなーみー!!てか『ボノボノ』って何よ!」

「そうだよ漣。その渾名だと朧が呼ばれたと思っちゃうよ」

「Oh, S i t t e ! ならば『アケボノ』はこれから『アーボン』サンと呼ぶ事にしよう!」  
「さあーざあーなあーみいー!!! あと朧も乗るな!!」

そんな会話を駆逐艦『桜風』の食堂にて交わす曙たち第7駆逐隊。第7駆逐隊に加えて深山艦隊と大石艦隊の面々もこの駆逐艦『桜風』の食堂で仲良く喋りながら交流を進めている。彼女たちの中の多くは今回の演習には直接参加はしない艦娘も多いが、この『異世界出身の軍艦』に興味を持たない艦娘が居ない訳も無く、自分たちの提督と『桜風』を拝み倒して今回の演習中、午後の『桜風』の演習時を除いて乗艦する事が許されていた。当然ながら全員乗り込める訳も無かった為、『桜風』のコンピューターを使つてのラウンドムセレクトで抽選している。その為外れた艦娘は陸地か他艦娘の船体でこの演習を見学している。

「相変わらず楽しそうですね皆さん。一応名目は駆逐艦『桜風』の視察と言う事で乗り込んでるので、退艦後にレポートを提出する事をお忘れなきよう」

「あ、不知火さん」

「不知火、そんな事は一々言われなくても分かっているわよ」

「レ、レポート……」

「……言つとくけど手伝わないよ、漣。臍、怒られたくないから」

「はうっ……!」

その断末魔を最後に頭を机に引つ付かせる漣。まあこんな感じの癖してしつかりとやるべき仕事はこなしているのだから、人はパツと見の外見では分からない物である。何時もはネットから得た情報を元にワチャワチャやってるだけのアクティブ系面白少女なのだが。

「そーいえば陽炎はどうしたのよ。あんた何時も一緒にいるでしょ」

「陽炎姉さんは長門さんや『桜風』さんたちと一緒に居ます。不知火は一言断つてこちらに来ました」

「んぐ……ほうほう……。ん! その何時にも増した仏頂面。もしや『ぬい姉ちゃん』お姉ちゃんをさーやんに盗られて嫉妬……」

駆逐艦『桜風』の主計科から出されたデザートを食べ、そして不知火に対してからかう口調とにやけ面で言い出したその漣の言葉が唐突に途切れる。何故なら残像が見え

たかのように錯覚するほどの速度で、不知火が漣の背後に回って肩に手を置いたからだった。因みにこの時の不知火の動きを見切れたのは第7駆逐隊どころか周囲に居た艦娘の中では誰一人として存在しなかった。

「漣」

「は・・・はい」

「その渾名を使っているのは『桜風』さんだけです。良いですね」

「・・・え」

「良いですね」

「イエスマム！」

一切の反論どころかまともな言語を発するだけの余地も無く、不知火からの言葉を受け入れさせられた漣。『戦艦並の眼光』呼ばわりされている目つきな彼女が本気で凄んでニツコリ笑いかければ、大概の艦娘は首を縦に振るしかない。まあ深山艦隊の中でも特に真面目で友好関係に気を遣う彼女がこの手段を使う時は、本気で嫌な事をされた時くらいであるが。

「・・・それで、ちよつとレポートに関わる話をするけど、『桜風』の艦体つてやけに鉄使ってるよね。あとコンピュータが沢山ある」

「露骨な話題変えね臈。・・・でもまあ、そうね。私たちと違って全然木材が使われていない上、通路も空調も、ついでに調理施設も何もかもが電子制御された未来的な設備の数々。・・・本場に1940年頃の艦艇とは思えないわね」

「お、おお、お二方・・・。潮ちゃん、潮ちゃんは漣を慰めてくれるよね？」

「え、えつと・・・ごめん」

「グハア!!!」

「馬鹿な事やってないでレポートの話するわよ漣」

『『アーボン』サン酷い！漣泣いちゃう！』

「だから『アーボン』は止めなさい漣！」

横須賀鎮守府第3海上部隊の艦娘宿舎でも無いのに何時も通り大騒ぎし始める漣と曙。そしておどおどしながらどうか仲裁しようとする潮と我関せずとマイペースに『桜風』の主計科妖精さんが作ったデザートを食べ臈。他所の鎮守府ではどうかは知らないが、深山艦隊の第7駆逐隊ではこの光景は割と何時もの風景である。因みにこの休憩時間に『桜風』に乗艦した者に提供されているデザートは『マロングラッセ』や『ズ

コツト』等々の欧州仕込みのデザートなのだとか。

「・・・そうだ。不知火、ちよつと聞きたい事があるんだけど」

「曙？良いですが・・・レポートの事ですか？」

「それは自分です。聞きたいのは『何時になったら『桜風』は艦娘宿舎に入るのか』よ」

「・・・その事ですか」

「さーやん未だに仮眠室か提督執務室の仮眠ベッドを歩き来してるからねー。・・・真面目に話すから何卒、何卒デザート没収だけはご勘弁を・・・」

曙と不知火の無言の重圧に押しつぶされて五体投地状態な漣を他所に、残りの第7駆逐隊と不知火との間で『桜風』に関する会話の花が咲く。当の本人は艦長室で深山提督や陽炎たちと共に過ごしてこの場に居ないとは言え、いい気なものである。

「・・・一応、この演習が終了後に深山提督が『桜風』の入居する部屋を選ぶとの事です」  
「・・・『桜風』には同型艦が存在しないから』かな？」

その一言に、不知火はコクンと頷く。

「隴の言う通りです。通常であれば同型艦同士、若しくは縁のある艦と同室になるようになります」

「でもさーやんは異世界から来たからどの部屋に入れて良いのか分からないと言うねー。適当に入れて壁ドンカッコ・not色恋沙汰・カッコ閉じされたら溜まったものじゃ無いし」

「言い方は兎も角漣の言う通りです」

「・・・えつと、なら、仲が良さそうな陽炎さんや不知火さんの部屋に入れば良いんじゃないかな・・・？」

そう潮がつぶやくも、不知火は力なく首を振った後、乾いた笑みを浮かべながら言葉が続けた。

「・・・そうしたいのは山々ですが、長門さんや瑞鶴さん、青葉さん達が『桜風』の入居部屋に名乗りを上げまして、そして陽炎姉さんもなんだかい感じにヒートアップしまして、現在選択肢から凍結されています」

「なんでその人たちが出てくるのよ。確かに私たちの常識では駆逐艦とするには過大な排水量と武装だけど、『桜風』は駆逐艦でしょ。第一戦艦娘や重巡娘は兎も角としても、艦載機を飛ばせない駆逐艦を空母娘の部屋に入れるのはどうなのよ」

「……曙。『桜風』さんは、ヘリコプターと垂直離着陸機限定ですが、艦載機を搭載可能なんです。船体が『駆逐艦』じゃなくて『フリゲート』だから、と『桜風』さんは言っていましたか」

「……不知火、それって、若しかして……」

「……まあ、その事は今後の演習で明らかになると思います」

「スツゴイ気になるその引き！漣、気になります！」

ようやく復調した漣節と共に、第7駆逐隊や不知火たちがいる食堂にクラシック音楽が流れ出す。これは駆逐艦『桜風』の独自の習慣で、過酷な戦闘で必然的に発生する過剰なストレスに常時苛まれる乗員の慰撫に加えて、幾度となく更新され続ける最新の電子機器を扱うとどうしても集中し過ぎておかしくなってしまう乗員の時間感覚を正常に戻せるように、特定の時間になると艦全体に決まった音楽が流れ出すのだ。無論戦闘中や警戒態勢時に流れる事は無いが、因みに発案はシユルツ大佐にナギ中尉からである。

「あら。……もう時間ですね」

「あ、もう退艦時間……」



「そうね。じゃあ漣、早く降りようか」

「え、ちよ、あとちよつと、あとちよつとだけ！このデザートマジメシウマ・・・」

「良いから降りるわよ漣」

「おぐう?!首が、曙サン首が！ああ！デザート！せめて、せめてお持ち帰りいイー・・・」

クラシック音楽が流れ出す中、駆逐艦『桜風』に乗艦していた多数の艦娘が退艦する為に動き出す。午後からの演習では、演習に参加する『桜風』と大石提督の精鋭24隻以外は一部例外を除いて皆演習海域の外延部にて見学する事になっている。勿論、それぞれの艦娘が艦艇を出したままでは衝突事故が起きるのが目に見えているので、大和や翔鶴の様な余裕のある艦に乗り込んで、地上から持ち込まれたスクリーンなどを使用して見学する事になっている。尚余談だが、この事に関して大和は『戦時中を思い出しますね』と意味深な表情で呟いていた姿が目撃されたと言う未確認情報が有る。

「・・・陽炎姉さん?」

「あ、不知火じゃない。不知火も退艦するところ見たいね」

「はい。・・・『桜風』さんの方は大丈夫なんですか?それに陽炎姉さんも・・・」

そして不知火も例外では無く、駆逐艦『桜風』から退艦する為に移動中、偶然陽炎と

遭遇する。双方一人で移動して居た為どちらが何かを言うまでも無く自然と、連れ経つて歩き出す。

「……『桜風』の方はもう大丈夫。私たちが別に無理をしている訳でも無いと分かってくれたから、もう落ち着いている。勿論、私も体調に問題は無いわ」

「そうですか……それなら良かったです」

「……ふう」

「……陽炎姉さん？」

物鬱げな溜息を吐いた陽炎を訝し気に見る不知火。陽炎型駆逐艦の二番艦であり、又深山艦隊の中では陽炎と殆ど同時期に建造されている不知火にとつて、自らの姉が時々自分相手に色々と相談したりする事は良くあったが、こんな無防備かつ深刻そうな、憂鬱そうな表情は文字通り数えるほどにしか無かった。

「……いや、ね。『桜風』の作ってくれた兵装を上手く使いこなせなかったばかりに、『桜風』を傷付けちゃった事に……ね」

「……アレは陽炎姉さんたちの責任では有りません」

「それでも、ね。『何かあつたら遠慮なく頼つてね』と大きく言ったのに、『ウイルスベル

ヴァイント』は『桜風』に全て任せるしか無く、『桜風』と一緒に戦う為に『桜風』に開発して貰った兵装を全力で動かした結果は、あの様。・・・情けないわ、本当に」

結局は感情の問題である。理屈の上では『あくまで第二次世界大戦頃の、電子機器が貧弱な大日本帝国海軍の駆逐艦』ではない自分が『第二次世界大戦頃の技術レベルを逸脱した電子機器』を操作しようとしたら、大量の情報量を処理できずにオーバーヒートするのは当たり前である事は理解できている。だからと言つても、陽炎は『だから仕方が無い』と容易に諦められるような艦娘ではないのである。

「・・・確かに『今は』そうかもしれない。ですが『これから』そうなるとは限りません」

「・・・不知火」

「私も微力ながら、『桜風』さんや陽炎姉さんたち、そして深山提督を支える為に努力します。だから・・・その・・・」

言葉に詰まりながらも、だけど真剣に自身の事を案じてくれる不知火を見て、自然と陽炎は不知火に歩み寄り、正面から抱きしめた。

「か……陽炎……姉さん？」

「……ありがとね、不知火。お姉ちゃん、頑張るよ」

そう言いながら不知火に向けられた表情は、何処か憑き物が少しだけ取れた様な、そんな表情だった。

ウイルキア王国近衛海軍時代、『単艦対無数』の戦闘が常識だった駆逐艦『桜風』と、『桜風』が持ち込んだ戦闘映像を見て可能な限り優位に戦える様に戦術を練ってきた大石艦隊所属の精鋭艦娘24隻。

『桜風』が生きて来た、辿ってきた航跡が直接的に垣間見えた『硫黄島沖大演習午後の部』が開始される号砲が放たれるのは、暫くしてからの事であった。

## 第二三話

## 硫黄島沖大演習午後の部

## 〈開戦〉

「さーて！休憩時間を挟みましていよいよ開幕致しますのは駆逐艦『桜風』VS我が大石艦隊精鋭艦娘24隻による大決戦だああああ!!! 実況は午前の部に引き続きましてこの大石！そして解説にはこのお三方！」

「午前に引き続き深山満理奈です。午後からもよろしくお願ひします」

「深山艦隊所属の青葉型重巡洋艦一番艦の青葉です！」

「・・・大石艦隊所属、駆逐艦娘の叢雲よ」

時は休憩時間から少し過ぎた午後一三時。正午を過ぎた頃から空は雲量1か2程度の見事な快晴。そして海は荒れる事も無く穏やか。こんな日は釣り糸を垂らして日かな一日のんびりと過ごしたくなるものだが、今から行われるのは妖精さん印の演習弾が用いられた、爆音が轟き渡る実戦さながらの戦闘演習である。『のんびり』など出来ようはずがない。加古辺りは普通に寝られそうでは有るが。

「それでは午前中と同じく双方の戦力紹介となりますが、先ずは朝方と同じく我が大石艦隊からの説明に入ります。じゃあ叢雲、頼むわ」

「……はいはい。全く、本っ当に子供っぽいんだから……」

そう口では愚痴りながらも、よく見ると嬉しそうに口元が僅かににやけている叢雲が、指揮棒を持つて大石艦隊側のそれぞれの艦娘の装備や速度の紹介に入る。

「編成は『連合艦隊水上打撃部隊』の二部隊に属する、第一艦隊の旗艦、戦艦『長門』。旗下に戦艦『陸奥』、航空戦艦『扶桑』、『山城』。軽空母『飛鷹』、『隼鷹』。続いて第二艦隊旗艦、戦艦『霧島』。軽巡洋艦『神通』。駆逐艦『雪風』、『島風』。重雷装巡洋艦『大井』、『北上』」

それぞれの艦名が叢雲から読み上げられるに従って、この放送室に取り付けられたスクリーンに、画面分割されながら次々とそれぞれの艦艇のカラー映像が映りだす。この大石艦隊所属の『日本初の超弩級戦艦』扶桑型戦艦はいわゆる『IF改装』と呼ばれる改二にまで改造が施されており、以下神通、霧島、隼鷹、大井、北上にも同様に改二改造が施されている艦艇の姿が満天下に映し出される。常識的に考えれば『戦艦棲姫の群れとでも戦うつもりか』と言われても仕方がない重量編成である。

「そして支援艦隊として、前衛支援任務には第三艦艇から、旗艦、戦艦『金剛』『榛名』。駆逐艦『夕立』『綾波』。正規空母『赤城』『加賀』。艦隊決戦支援任務には第四艦隊より、旗艦、正規空母『飛龍』『蒼龍』。駆逐艦『時雨』『ベリヤ』。重巡洋艦『羽黒』『妙高』。尚兵装は、戦艦娘は『試製41cm三連装砲』『試製35.6cm三連装砲』空母娘の艦載機は『彗星一二型甲』と『流星』で統一している様に、大石艦隊の持ちうる全てのレア、ホロ装備よ」

そして止めとなる支援艦隊編成である。海軍庁からの指示とは言え、これほどまでに整えられた戦力は、普通は特殊戦闘海域・・・通称『イベント』と、そこかしこの提督による渾名が付けられた、深海棲艦の中でも一等脅威である『姫』や『鬼』クラスの戦力が定期的に多数出現する戦場に投入する物である。間違っても演習に投入する様な代物ではない。

「：：以上が、今回の硫黄島沖大演習午後の部に、我が大石艦隊が投入する戦力よ。：：深山提督、本当に演習相手は駆逐艦『桜風』一隻だけなのかしら？」

「『桜風』一隻では不足、と言わんばかりな、ずいぶん言いようね」

「気に障ったのなら謝るわ。・・・でも、隻数にして24対1。私達側の艦娘の速度はそう低くは無い。想像出来ないわよ、私たちが負ける光景が」

「心配しなくても、暫くしたら嫌でも分かるわ。……あの娘の、駆逐艦『桜風』の非常識っぷりが」

髪を掻き揚げながらそう言った深山提督の表情は、何処か悪戯を仕掛けた子供の様な表情であつた。

「『非常識』って、少し酷いと思います、深山提督」

「いやあ、この摩耶様が思うに、提督の言っている事は当然だと思うぞ『桜風』」

「鈴谷もそう思うよー。大体『桜風』は女の子としての常識を知らなさ過ぎ！前鈴谷の持つてたファッション誌のビキニ見て『これ下着ですか？』なんて真面目な顔して言うとかねー。あの時チョーウケたから！」

「お、面白そうな話だな。鈴谷、その話詳しく……」

『そろそろ深山提督と重巡青葉による駆逐艦『桜風』の解説が始まりますので、観客の皆様はお席に着くようお願いいたしますー』



「ちえ、タイムिंगの悪い・・・」

「あーじゃあ終わった後で話そうかー」

「・・・だって、あれどう見ても下着ですよ・・・」

『解せぬ』と言わんばかりの表情の『桜風』を他所に、駆逐艦『桜風』の艦橋では予定通り肅々と硫黄島沖大演習午後の部が続けられていく。今回は本来乗り込むはずだった対超兵器部隊が、午前中の演習で想定外のオーバーヒートを起こしたために急遽中止になったのに加えて、本人が強く志願した事も有って、観戦武官の形式で重巡洋艦娘の摩耶と、航空巡洋艦娘の鈴谷が『桜風』に乗り込んでいる。因みに『ビキニを下着と勘違い』したように、『桜風』の常識や知識は色々と様々な物が抜けていたり混ざり合っていたりして滅茶苦茶である。

スマートフォンやタブレットを説明書を読まなくともすぐさま使いこなし、パソコンのメモリ増設やプロも投げ出す複雑なプログラミング等だつて鼻歌交じりに完璧に出来る癖に、日本の誇る新幹線を見て『蒸気機関車じゃない弾丸列車だ!』と目を輝かせて言いだしたり、ファッション誌を見ても何でそれが可愛いのが全然分らずに疑問符を浮かべまくったり、秋雲に変な服を着させられそうになったりしている等、日常生活には問題無いが色々とチグハグな『桜風』で有る為、深山提督を含む艦隊のお姉さん

艦娘は日々『桜風』を気にかけている。・・・変な事を吹き込まれたら、素直な『桜風』が本当に実行しそうで有る為である。

「ねえ『桜風』。青葉がさつきから荒ぶってるけど、なにか聞かれた？」

「え、青葉さんにですか？んーと・・・特に何も。普通に性能や艦載機の話をしただけです。・・・青葉さん、無理して無いですよね・・・？」

「いやあ、アイツは正直あんな事でへこたれたりする様な奴じゃないぜ？むしろ『桜風』が気にし過ぎる方が、アイツへこむぞ？」

「だねー。だから『桜風』はあんま気にしないで何時も通りにするべき！・・・これから大事な演習だよ？ほらほら、元気出す！」

「・・・分かりました。『桜風』、頑張ります！」

・・・何というか、まるで『悪い事をして自分一人で反省している子供』見たいだねー。

ねえ摩耶っち

・・・摩耶っち言うな。その表現には同意するけどさ

神妙な顔で目を閉じて深呼吸をした後、改めて駆逐艦『桜風』の妖精さんと共に再度

自艦の状況把握を始めた『桜風』に気付かれない様に、摩耶と鈴谷は小声でそんな事を話す。金剛の様に外にグイグイ出てくるタイプではないが、別に引き籠りでも無い『桜風』は艦隊の皆と早期に打ち解けていたが、この所々で常識に疎い部分と今回垣間見えた妙に幼い、若しくは未成熟な精神性は、先述した様に鈴谷達を心配させるには十分であり、その為一部の艦娘には深山提督から秘かに『桜風』を守る様に指示を受けていた。『武力』に關しては『桜風』が抵抗するから兎も角としても、『桜風』が一人で居た時に詐術による誘拐等をされてもしたらたまったものではない。

「・・・ん、あれ？なあ『桜風』、以前の兵装とちよつと変わつてないか？」

「んお？ああ、本当だねー・・・。『桜風』、なんで艦載機の欄が有るか、あとあのへりコプターは一体何なのか、ちよつちお姉さんに教えてくれないかなー？」

そう『桜風』に呼びかける摩耶と鈴谷の目線の先には、現在目が誰にでも分かる位に輝かせた青葉が敏腕ニユースキャスターの様に分かり易く説明していたが、その青葉の指揮棒が指し示す映像には『カ号観測機』とは似ても似つかない、現在日向に搭載しているAS332スーパービューマよりも無骨に見えるヘリコプターが映っていた。因みにAS332スーパービューマ、そして『桜風』の開發で新たに追加されたSH-60J シーホーク』に關する話だが、今回の演習後に緊急に実戦形式で運用した際運用が固定翼機とは比べ物にならない程

に操縦難易度が高い為に、見事に20機近くを海の藻屑がスクラップにしてしまった日向が泣きながら始末書兼報告書を書いてる姿が目撃されている。まあ僅かA4版紙3ページ程度で済まされた辺り、大体こうなる事は予想されていたようだが。

「あれ．．．ですか？アレは『AH-64D アパッチLB』です。攻撃ヘリですね。Apache Longbow

ちよつと前に一人で開発したら出来たので今回投入させて頂く事になりました」

「攻撃．．．ヘリ？」

「何て言うか、本当に『桜風』って色々ともんでもないよねー。あ、因みに性能ってどんなもん？」

「時速800km、航続力280km、夜間、悪天候でも戦闘可能。今の武装は『30mm航空機関砲』と『空対艦ミサイル』の二つです。片方を外せば『航空魚雷III』を搭載出来ますが、今回は艦隊決戦なので止めました」

「．．．足が短いのは兎も角として．．．あんなナリで零戦や烈風よりも早いのかよ．．．」  
「あ、ヘリコプターなのでちゃんと空中で静止状態になれたり横滑りもちゃんと出来ますので、安心して下さい」

「へー、面白そうだねー。うーん．．．鈴谷にも搭載出来るかな？でも慣れるまでに結構時間かかっちゃうそうだし．．．うーん、悩むー」

『桜風』が開発した兵装の天外魔境っぷりを知っている深山艦隊の艦娘勢の反応はおおよそこのような物に終始しているが、放送でこの映像を見た各所の提督と艦娘の反応は、午前の部で想像の埒外に有った巨砲を見た時以上だった。午前の部に出て来た兵装は、色々とぶつ飛んでいたが基本的に『第二次世界大戦頃の技術で作れそうな兵装』である。実際に作れるかどうかは兎も角とするが。

だが『A H—64 D Apache Longbow アパッチLB』が開発され、運用が開始されたのは『1996年』である。ついでに言えば『桜風』が搭載して居る『RAM』も解説された為、この午後の部の演習結果と合わせて深山提督の元には文字通り書類山脈を生み出すまでに大量に、他鎮守府からの開発方法の問い合わせや勘違いしての技術支援要請、更にはとある極少数の提督から駆逐艦『桜風』の脅迫交じりの転属要請書が、硫黄島沖大演習終了後より一月近くの間押し寄せて来た。その為に暫くの間深山提督はその書類や要請の処理に専念させられる羽目に合うのだった。

『あ、そうそう。摩耶さんに鈴谷さん。これ渡しておきますねー』『お、主計科妖精準備良いなー』『それに・・・なんか輝いてない?』『久しぶりに手料理を多数の人に振る舞えて嬉しかったんだとせ』『あー、確かに。この艦がこれだけ賑やかになったのって自沈

処分される前からだから……一月以上か?』『正確には52日だな。あの時は廃艦か記念艦かで殴り合いになってたからなあ』『殆ど二か月じゃねーか』

そんな事が起こったりこれから起こる事を知る由も無い二隻の重巡洋艦娘に、駆逐艦『桜風』の妖精さんがわらわら集まってきて人間……否、妖精ピラミッド?を作り上げて、とある物を渡す。この妖精さんたちの一部の奇行は、初めて乗艦した艦娘の殆どが目撃しているが、基本的に『二等身の饅頭顔』である妖精さんのやる事ならば大概の事は微笑ましく映る為に、皆スルーしている。

「えつと……これ、マイク?」

「……エチケツト袋?なんでこんなモノ渡すんだよ?」

『骨伝導マイクです。戦闘中は通常の通信や応答ではマトモに通じませんので』『エチケツト袋は万が一の為です』『使われない事を切に願っています』『……ぶっちゃけ処理したくないですからね』『探せば需要あると思うが』『いる訳ないだろそんな特殊性癖者』『まあそんな訳なんです、取り敢えずマイクは装着してエチケツト袋は持つてご着席下さい』

「こんなの要らないよ、と言いたくなる鈴谷と摩耶では有ったが、実際に前に見た『桜

『風』の戦闘映像では、艦艇内部の人間がシエイクされて居そうなまでに激しい艦艇運動を繰り広げていたのを思い出した兩名は、取り敢えずその忠告をそのまま受け取って、今回特別に艦橋の艦長席後方部分に設置された特別席に着席する。曰く、この特別席は『例え天地がひっくり返っても床から絶対離れません!』との事だそうだ。

「んじゃ『桜風』。演習ガンバー!」

「応援しか出来ないけど、この摩耶様が着いてるからな!」

「有難う御座います。絶対勝ちますので、見ていて下さい」

鈴谷と摩耶の応援に、振り返って笑顔でそう答える『桜風』。

『艦長、今回の演習の戦い方はどうしますか? 対深海棲艦戦の様にセーブしますか?』

「副長。そうね…、今回の演習での消費資源は自衛軍持ちとの事。だから、今回はいつもの事全力でやろうか」

『了解です。つまりは制限なしのいつも通りですね』

「だね。結構前の戦闘から間が開いたから、感覚をしっかりと思い出していこうか」

そう語り合う『桜風』と妖精さん。以前『桜風』の戦場で消費した弾薬や燃料、鋼材の量数を聞いた事のある鈴谷は、自らの艦隊が使う物では無いとはいえ、確実に目を点にさせるであろう自衛軍の役人方に対して少しばかり同情心を抱く。とは言え別に資源節約の為に撃中止命令が下ったりする事は無い為、『昔』と比べて本当に『今』は豊かになったなあ。そんな気持ちを鈴谷は抱いていた。まあ出撃制限が無いのは、『昔』のままなら兎も角『艦娘』となった今では人件費や維持費、運用費が格段に、と言うより一発レッドカードからの出場停止なレベルで抑え込まれて居る為でもあるのだが。

そんな鈴谷の思いや、この演習に関わっていたり視聴している人間や艦娘の思いは兎も角、刻一刻と演習開始までの時間は迫り行き……

「……さあ、OPEN開戦WARよ」

駆逐艦『桜風』VS大石艦隊精鋭24隻とでの大乱戦激戦が始まった。

……あれ……？気のせい……かな？

……ん……『桜風』……？



演習開始の号砲が響き渡ると同時に、『桜風』の雰囲気は突如切り替わった事を感じ取った鈴谷と摩耶。『ヴィルベルヴィント』戦では通信を切られていたが為に伝わらなかった、『桜風』の戦闘中の様子に深山艦隊の艦娘全てが戦慄するのは、もう間もなくの話であった。

## 第二四話 硫黄島沖大演習午後の部 〔駆逐艦『桜風』〕

## 流戦闘航海術〔

「……赤城さん」

「加賀さん？ どうしましたか？」

「……今回の演習、本当に意味が有るのかしら」

「……まあ、ちよつと大きいとはいえ、駆逐艦一隻を袋叩きにするのは、少々気が引けますが……」

「命令だからやるけど……これであつさり終わつたら、提督はどうするのかしら……」

そんな事を言うのは、大石艦隊の前衛支援任務を遂行中の、第三艦艇所属の正規空母の元祖一航戦コンビである。彼女たちは既に『桜風』の性能などのレクチャーを受けていたが、殆ど眉唾程度にしか聞いていなかった。午前の部で深山艦隊対超兵器部隊が見せた醜態がそれに拍車をかけていた。『異世界出身』だの『常時単艦戦闘だった』だのと言つた情報をマトモに取りあえと云うのが普通は無理なのだろうか。

「加賀さん、今回の演習、やる気ないっぽい？」

「ヘーイタ立。今は演習中だから、私語はノーダヨー」

「そうですよタ立ちちゃん。ちゃんとしないと、提督に言われますよ？」

「・・・やる気が無い訳では有りません、タ立・・・」

そんな加賀の意識が伝播したのか、大石提督に通称『ぼ犬』と渾名を付けられた『ソロモンの悪夢』ことタ立が反応し、金剛型姉妹に窘められる。この白露型駆逐艦4番艦は、やはりよっぽど逝かれた艦隊でもない限り大体こんな感じに成長するようだ。

「ふふっ・・・、！加賀さん、金剛さん・・・発見しました。駆逐艦『桜風』です！」

「そうですか。・・・では、早く終わらせないといけませんね」

「早くこの演習をエンドさせてテートクとティータイムデース！」

「あー！金剛さんずるいっぽい！提督とはタ立と一緒に過ごすっぽい！」

「あ・・・綾波も頑張つて、司令官に褒めて貰います！」

・・・本当に、提督は皆に好かれているわね。まあ、深山提督に慢心を徹底的に折られる前とは大違いだもの、当然ね

そんな事を思う『あの時』の当事者だった加賀が軽くそう回想する中、戦友にして親友である赤城の『え?』と言う声が聞こえた。

「赤城さん? どうしましたか?」

「・・・は、発見した彗星が、『桜風』の居場所を報告した直後に音信不通に・・・」

「フーム・・・では『桜風』に落とされたのかもしれないネー」

「金剛? まさか・・・」

「これだけのメニーメニーなフリートを動かしている以上、相手がそんなに弱いはずが有りませーン。ミス加賀、ミス赤城。全力出撃をお願いシマース」

「・・・旗艦の命令ならば」

「分かりました。第一次攻撃隊、発艦始め!!」

二隻の号令と共に、それぞれの飛行甲板には流星と彗星がエレベーターによって上げられ、艦艇が風上に向かうと同時に発艦を開始する。その動きは熟練技としか良いようが無いほどに見事に進められており、午前中に深山艦隊の艦娘が見せた醜態とは比べ物にならない程に手早く効率的に発艦作業が済まされていた。

「・・・鎧袖一触よ。心配要らないわ」

『敵機撃墜を確認』

「敵機からの通信傍受と解析の上で、敵艦隊の予測位置を確認」

『・・・出ました。関係部署に送信します』

「よし。じゃあこのまま突入します。艦載機は時間を見て発艦準備」

『مامーイエスマム！』

『桜風』の号令に意気揚々と元気に返礼する妖精さんズ。赤城の放っていた彗星に対して『敢えて自身を発見させて位置情報を送信させ、飛来方向と通信傍受で逆算して敵艦隊の居場所を特定する』と言う『桜風』の思い付きが思いの外上手く行った為、艦艇の士気は上々だった。何せ演習とは言え『ヴィルベルヴィント』戦から久方ぶりの戦闘なのである。早く敵艦隊と交戦したいと言う物騒な妖精さんの意向が早くも叶えられそうなのだから、この士気高揚は当然なのだろうが、この様子を見てみると『攻勢に出る』と言う事は軍人の血を湧き立てる物なのかと思わせてしまうものだ。彼らは『人』では

無く『妖精さん』であるが。

「……えつと……『桜風』？」

「なんですか？」

「……ごめん、さつき、一体何をしたの？」

駆逐艦『桜風』全体がこれまで以上に活気に満ち溢れる中、艦橋にて『お客さん』として乗り込んでいた鈴谷が『桜風』に対して不明瞭な質問を飛ばす。彼女と摩耶は艦橋後方に設置された特別席に座って『桜風』の戦い方を余す事無く観察出来る様にしたのだが、初っ端から『艦橋のガラスが唐突にブラックアウト後、砲撃音と何かの爆散音が響き渡った一瞬後にガラスが元に戻る』と言う事態に目を白黒させていた。

「精密射撃<sup>ロッキオン</sup>にて偵察に来た彗星を撃墜しただけですが……」

「主砲の一斉射で出来るものなの？て言うか、普通に一発で当てられるものなの？それとなんか窓ガラスが一瞬真っ黒になったのってどうして？」

「あの程度、目測射撃なら兎も角精密射撃でなら一撃で命中させられなければ話になりませんよ。後艦橋のガラスは情報表示の為にディスプレイが取り付けられている

ので、自動迎撃兵装以外の全能力を使用する精密射撃モードだと、使用中はブラックアウトしちゃうんです」

その一言で顔を見合わせる摩耶と鈴谷。アイコンタクトにて『防空巡洋艦の経歴持ちな摩耶つつちって、アレ出来る？後言ってる意味分かる？』『一発狙撃の撃墜何て絶対無理。そして言ってる意味は良く分かんねえ。後摩耶つつち言うな』との思いを交わす。言っている言葉は分かる。だがその言っている意味は全く分からない二隻であった。

「……ごめん『桜風』。鈴谷、『桜風』が何言ってるのか良く分かんない」

「艦橋のガラス部分にディスプレイ取り付けたって、それも壊れたりしたら視界が塞がれないのか？それと『自動迎撃兵装以外の全能力を使用する精密射撃モード』の詳しい説明してくれないか？」

そして分からない事をそのままにする事は出来ず、摩耶が纏めて『桜風』に対して質問をぶつける。分からない事はその場で聞き出す。社会人としての基礎基本である。彼女たちは厳密に言えば法律上『人』ではないが。

「仮にデイスプレイが使用不可能になったら普通に破棄するので大丈夫です。それで『精密射撃モード』ですが……順を追って説明しますね」

そう言った『桜風』の言葉と共に、艦橋の窓ガラス……否、デイスプレイの表示がそれまでの青空と大海原を映す物から再度一変し、正面の中央下部には駆逐艦『桜風』の船体と兵装の状況を表す詳細な船体図面が映され、左右端には現在整備中の艦載機『AH-64D Apache Longbow』4機の状況が表示され、最後の艦長席正面の大部分を占める画面には自艦の位置と敵艦の予測位置、そして海面や岩礁等の海の状況や索敵範囲状況等が描かれた海図、最後に今まで『桜風』の入手したデータログが映し出されていた。

「……えっと、なに、これ?」

「私が戦闘中に常に把握している情報を画面に表示しました。このままだと戦闘中視界が塞がれて邪魔なので何時もは出してはいませんが」

「『常に把握』……って、まさか『桜風』、これだけの情報を全部把握しているのか?! この映像を見ないで!」

「え……何言ってるんですか摩耶さん? そんなの当たり前じゃないですか。それに元々これ以上に多量の情報を把握し、操作してきましたし、今は結構楽な方ですよ?」



「わー、『桜風』凄ーい」

最後の言葉は鈴谷であるが、その口調や表情は何時もの様な軽い物では無くとても棒読み口調で張り付けた様な笑顔であった。艦橋の画面一杯に映る情報は、それこそ各兵装に装填されている弾数や兵装の稼働状況、射角、艦艇の進行方向や速度、更には補助兵装によって判明している索敵範囲内の敵勢力の情報やら防御重力場の稼働状況等も映っていた。目を回しかねない程に大量に画面に流れる数字や英語、そして絵図が視界一杯に踊っているのを見れば、こうなるのは自然だろう。因みにもし漣辺りがこの光景を見れば『リアルヴァーチャル海戦ゲー||キタコレ!』とでも言うだろうと推測される。

「それで『精密射撃モード』<sup>ロツクオン</sup>についてですが、この機能は選択した一つの主兵装に、今画面に映っている情報処理能力の全てを集中させて、射程内に存在する目標を確実に捕捉する機能です。代償に自動迎撃兵器を除く全ての電波探信儀を筆頭とした電子機器や見張り員の能力等もその目標に一点集中するので、下手な場所で使えば視界不良で陸地に突っ込んでしまいますけどね」

「・・・いや、普通に撃つたら駄目なのか?」

「可能な限り弾薬は節約したいんですよ。無駄弾をばら撒いていざと言う時に弾薬欠乏

とか言う事態になったら洒落になりませんか」

「あー確かにねー。『昔』とかは良く油節約する様な話してたし、きつとそう言う感じなんだねー」

鈴谷の言う『昔』とは『第二次世界大戦中』の事である。若干鈴谷の認識と『桜風』の言いたい事とはズレが生じている気がしないでもないが、大まかには間違っていないので問題は無いであろう。

『はいーいお待たせしましたあ！本場ヨーロッパ仕込みの最高級品質のシヨートケーキでーす！』

「あ？・・・ケーキ？」

「ああ、私が頼みました。暫くの間交戦するまで時間が有りますので、その間暇でしょうし。駆逐艦『桜風』主計科の腕を振るつた逸品です」

「おー！『桜風』あざーっすー！んじゃ早速・・・んー！マジおいひー！役得役得！」

「・・・し、しゃーねーな。出されたモンはちゃんと食べないとな・・・甘いのは苦手なだけでな・・・」

日本海軍の艦艇である日本の艦娘にとって、艦艇搭乗中の休息時に出てくる甘味系統のおやつは基本的に最中や羊羹等の和菓子为主体であり、又冷蔵設備や調理装備関係の限界から大半の艦娘にとって洋菓子は陸地に上がってから食べるものである。何時も出撃中や演習中に暇を見て食べている甘味とはまた違った甘さと美味しさに食感、そして『桜風』の主計科妖精の技量によつて生みだされた日本人向けの本場の味は、甘い物が好きな鈴谷にとって至福のひとつを過ごさせるには十分すぎた。

『艦長』

「あ、副長。もしかしてもう?」

『はい。艦載機が多数此方に向けて殺到中です。奴さんかなり手際が良いみたいです  
ね』

「まあ演習だからある程度海域も限定されているしね。でも確かにこれだけの速さで戦闘状態に移行できるのは間違い無く手練れ確定、つと」

摩耶は兎も角鈴谷が半分自分の仕事を忘れて『桜風』の主計科妖精の生み出す甘味に夢中で没頭するのを、頬を綻ばせて嬉しそうに眺める『桜風』に、副長妖精が声をかける。『桜風』の装備する『電波探信儀V』が、敵艦隊の予測存在位置の方向から多数の航

空機が飛来するのを確認したのだ。その数200機弱。

「鈴谷さん、摩耶さん。もうそろそろ戦闘状態に入りますので・・・」

「ん！分かったよ『桜風』。さてさて、じゃあきっちりしっかり調べましょー！」

「おう、いよいよか！・・・って、200機?!」

「全力出撃させたと仮定すれば、今こっちに向かつて来ている艦載機部隊の所属は、第三艦隊の赤城と加賀見たいですね。初手様子見無しの全力出撃とは思いい切りの良い事です。あ、流石にもう情報表示は止めますね」

艦橋のディスプレイが映し出す捕捉した敵機の総数を見て、史実では防空巡洋艦となつた経験を持つ摩耶が驚愕するも、『桜風』の反応は至つてのほほんとした、全く危機感を感じていない様子であつた。

「それではこれから戦闘に入りますので、鈴谷さん、摩耶さん。これから宜しく願います。・・・総員に通達、今回の演習では大勢の観客が駆逐艦『桜風』の戦闘を見えます。『前』の世界で受けた評価を穢さぬように、其々が力戦奮闘する事を期待します」  
『ウオオオオオオオ——!!!』『ママ！イエスマム！』『言われずもがなですぜ艦長！』『各

兵装に異常なし！何時も通り、いやそれ以上に大暴れしましょう！』『駆逐艦『桜風』此処に有り！死にたくなけりやかかつてこいやワレエ！』『いや殺しちやアカンからね!? 単に殲滅判定出すだけだからね?!』『命だけは保証されるけど精神に関しては責任取れそうにないけどね』『そればかりはどうしようもない』

『桜風』の呼びかけに艦艇の彼方此方で妖精さんの雄叫びが上がり、鈴谷と摩耶はこの異様な情景に驚き、思わずビクついて座っていた椅子の肘掛を強く握ってしまう。普通の一般的艦娘の妖精さんは仮に土気が最高潮にまで上っついても此処まで攻撃的に感情を発露させる事は余り無いのだ。因みに駆逐艦『桜風』の艦橋内の様子は演習海域外の深山提督や大石提督、青葉たちの元にも届いているが、この雄叫びに潮や暁が過敏に反応して可愛らしい悲鳴を上げたりしていた。

「・・・敵機捕捉。編成は流星と彗星一二型、ジェット機、超音速機、対艦ミサイル無し」  
『突っ切りますか?』

「そうね」

『了解しました！総員喜べ！好きなかだけ撃ちまくれるぞ！』

「・・・『突っ切る』って・・・まさか・・・」

「・・・摩耶っち。覚悟決めた方が良いよ」

『桜風』の言葉に自身の本能が何かヤバイ位に警告を出していて引き攣った表情の摩耶に對して、『桜風』の先行映像を見て何となく予想出来ていたので既に覚悟完了済みの鈴谷がそう呼びかける。そしてその鈴谷の言葉に、摩耶は素直に椅子に座りなおす事のできた。

『40mm 4連装機銃』の奇数番は雷撃、偶数番は急降下爆撃機の処理を。『RAM』は射程に入り次第無差別に迎撃。『61cm 7連装酸素魚雷』と『15.5cm 75口径4連装砲』は私が操作します」

『イエスマム！』

そう妖精さんに呼びかける『桜風』の表情は、陸地に居た時や先程とは比べ物にならない程に一切の温かみを感じさせない、冷たい無表情であった。

初手の攻撃は駆逐艦『桜風』から始まった。眉唾程度に感じていたとは言え、それでも全力で『桜風』の撃沈判定を得る為に赤城と加賀の流星部隊は初めから捕捉されにくいはずの低空を飛行し、彗星はその高速性を活かして航空からの一撃離脱を狙うと言う手堅い布陣であった。彗星は兎も角何気に流星は全機が高度10メートル以下を編隊飛行しているの、大石艦隊でも古参級のこの二隻の速度の高さが窺い知れる。深山艦隊の加賀と瑞鶴の航空隊は高度5メートル以下で同様の事が可能だが。

そんな熟練の妖精さん達だったが、今回ばかりは相手が悪かった。『15.5cm 75口径4連装砲』の最大射程は『4080m』、『RAM』は『3000m』、『40mm 4連装機銃』は『1500m』の能力を持つ。数字だけを見れば一般的艦娘の装備する10cm連装高角砲等よりも最大射程距離は劣るが、そもそもそちらの数字は『届くだけ』で命中率は極めて低いのが普通である。だが『桜風』の居た世界ではこの射程は『命中させられる』と言う意味での射程であり、実際は『桜風』の火器の方が優位な部分が多い。

しかも『桜風』の使用する弾頭は例外無く『近接炸裂弾』『新型徹甲弾』『新型弾頭装甲』を搭載して居る。見た目のスペック以上の破壊力はそれなりに有った。

『敵機、射程内に入ります』

「・・・主砲、撃ち方始め」

『桜風』の号令一下、先ずは先行して突入してきた彗星爆撃隊に対して、精密射撃モードで瞬時に目標を切り替えながら多数放たれた『15.5cm 75口径4連装砲』の砲弾が牙を剥く。だが話半分に聞いていた『砲撃の津波』を目の前にして、赤城と加賀の妖精さんは一瞬動揺するも、即座に散開して各個突撃すると言う手段に打って出た。一塊のままでは集中的に射抜かれ続けると、歴戦ならではの直感が働いたのだ。ただ不幸な事に、『桜風』にとってはばらけて突撃して来ても集中して突撃して来ても、殆ど差は無いのだが。

『機銃、迎撃入ります！』

「そう。何か変化が有ったら追加報告お願い」

『了解しました』



付け加えれば、この世界の流星や彗星は『桜風』の居た世界と比べるとかなり防弾能力が低い。『15. 5cm75口径4連装砲』や『RAM』は勿論の事、実質魚雷処理位にしか使えない筈だった『40mm4連装機銃』ですら、この世界の彗星や流星相手だと極普通に一撃、もし奇跡的に耐えられても二撃目には防弾を撃ち抜かれ、例外無く爆散した。

駆逐艦『桜風』を中心として描かれた半径『4000m』の壁を突破した機体に例外無く襲い掛かる鋼鉄と爆炎の暴風雨。『桜風』の生み出す赤と黒で描き出された殺し間の前に、大石艦隊の精鋭艦娘の赤城、加賀の妖精さんから無線を通じて雪崩れ込む困惑と悲鳴、そして恐怖と絶望の絶叫が、この硫黄島沖だけでなく演習を視聴している各地の鎮守府にすら届いていた。本来妖精さんはこれほどまでに感情をあらわにする事は無いが、何事にも例外は存在する。

「……大丈夫……大丈夫だから……『桜風』は味方……味方だから……。敵じゃないから……。マリアナ見たいな事は起こらないから……」

「……瑞鶴?ちよ、一体どうしたんや瑞鶴?!もの凄い震えとるで大丈夫か!」

「……過去のトラウマを抉られた見たいね、瑞鶴は。龍驤、瑞鶴を……」

「だ……大丈夫です提督さん！瑞鶴は……大丈夫だから」

「……そう、分かったわ。でも駄目そうだったら無理やりにも医務室に叩きこむからね」

深山艦隊の瑞鶴が『桜風』の対空射撃を見て、自身の最大のトラウマである Great Marianas Turkey Shoot 『マリアナの七面鳥撃ち』を連想して顔面蒼白かつ腕を抱えて酷く震えてしまった様に、『第二次世界大戦中の大日本帝国海軍』の記憶を保持している艦娘や妖精さんは自身の『過去』の記憶から何かに対してトラウマを抱えている事例が報告されている。そのトラウマの中で多いのは『潜水艦』と『航空機』が多数を占めているが、一部の空母艦娘と艦載機部隊に関しては『対空火器』に対するトラウマを持つている事が多い。今の『桜風』の対空射撃は、そのトラウマを根元から抉りだすには十分すぎた。

「嘘……どんどん落とされていく……。あの赤城さんと加賀さんの航空隊が……何も出来ないまま……」

「……これは、ちよつと青葉にも予想外です……」

「……深山提督。航空母艦娘を中心とした見学中の艦娘への二次被害が割と洒落にならなくなつて来ているみたいですが」

「一応今回は臨時に大和艦内の医務室を拡張しているわ。もし不足しても他の艦も動員すれば大丈夫よ」

「・・・こうなる事、予測出来ていたのですか？」

「あの娘は出来ない事を見得張つて言う様な娘じゃ無いわ。一月も一緒に過ごしてはいないけど、あの娘はそんな娘よ」

そんな事が演習海域外で発生している中、次々と弾幕で形成された死の回廊を、数えられない程に幾多の僚機が撃墜されながらも極一部・・・数にして20機程度が突破に成功するが、その中で駆逐艦『桜風』を攻撃可能な射点に辿りつけたのはわずか4機しかおらず、しかもその4機の雷爆撃も『桜風』の回避運動によつて全弾回避された。50ノットを超える上に雷爆撃された直後に即応で柔軟に回頭可能な艦艇に対する攻撃訓練など一度も受けていないのだから、これは仕方が無いのかもしれないが。

『敵攻撃隊の撃滅に成功！』

「数機は遁走したけど、殆ど意味はなさそうだね。うーん・・・派手なのは良いんだけど、実際の効力は極めて微少。感覚的には『前』に近かったのは初めだけだったね」

『しかしこれで敵前衛艦隊の航空戦力は枯渇したと推測されます。艦長、この好機を逃

さずに『A H—64 D アパッチL B』による航空攻撃を具申します』

「許可します。目標は……今回は無理せずに駆逐艦を狙う様に。戦艦相手では対艦ミサイルは威力不足ですしね」

『了解しました！オラ出番だぞ艦載機部隊！』

『出撃命令キタコレ！』『いよ！待ってました！』『いよいよ、俺たちの出番か！』『アパッチ隊、出撃します！』

その声と共に、艦尾の艦載機発着場にローター音が響き渡り、暫くすると艦橋からは水平線に向かって低空飛行しながら向かう『A H—64 D アパッチL B』4機の姿が見えた。機首に描かれたシャークマウスやタイガー、ウルフマウスがそれぞれ重厚な威圧感を醸し出しているが、この一瞬に『A H—64 D アパッチL B』に見とれ、一目惚れした艦娘もいたがここでは割愛する。

「……えっと、鈴谷さん、摩耶さん。大丈夫ですか……？」

「……う、うん。鈴谷は、大丈夫だよ……」

「……『桜風』って、こんな風に戦っていたのか……」

今の『桜風』にとって、『A H—64 D A p a c h e L o n g b o w アパッチLB』のカッコよさなんかよりも鈴谷と摩耶が青ざめた表情で居る事の方がよっぽどの重大事件だった。因みに妖精さんに渡されたエチケット袋は使われていない為、青ざめている理由は別の物である。演習終了後まで使われずに済むかどうかまでは不明であるが。

## 第二五話 硫黄島沖大演習午後の部 小休止

「……ヘイ、ミス加賀、ミス赤城。ワンモアプリーズ」

「……攻撃隊は、全滅しました。今帰ってきた機体が、生還した全機体です」

「……帰ってきた機体、全部で10機も無いっほい」

「……海中投棄した機体と合わせれば、次に飛ばせるのは2機だけです」

艦隊に沈黙が広がる。『桜風』は特に通信妨害する事が無く、と言うよりする為の装備が無い為に赤城と加賀の妖精さんの通信は全てこの海域にいる全艦娘の元に届いていた。誰も信じなかった。誰も信じたくなかった。空母でも無い、戦闘機を一機も飛ばせない筈の駆逐艦一隻に、赤城と加賀の精鋭妖精さんが操る攻撃隊200機余りが、たった一戦で殲滅させられたなど、信じられる筈が無かった。……現実は、無情であったが。

「……デハ、砲撃戦で決着をつけマース。いずれにしろ、私たちに選択肢は有りませーン」

「了解つばい！加賀さんと赤城さんの敵、夕立が必ず取るつばい！」

「分かりました！綾波、頑張ります！」

「了解です金剛お姉さま！榛名、全力で参ります！」

とは言え、これで引き下がるような艦娘たちでは無い。赤城と加賀は完全に戦力外になつてしまつたが、駆逐艦娘と戦艦娘に関しては問題無く『桜風』と戦闘可能である。

『・・・？艦長？何か・・・』

「つばい？」

「どうしましたか？」

『・・・っ！何かがこちらに向かつて飛んできます！』

「い、今すぐ迎撃するつばい！」

「き、機銃、高角砲！てええええい！！」

・・・訂正。駆逐艦娘二隻は『桜風』と交戦前に撃沈判定を受けそうである。

海面を舐める様に進撃する、4機の鋼鉄の怪鳥。国籍マークにウイルキア解放軍軍旗を付けたこの攻撃ヘリ・・・『A H—64D A p a c h e L o n g b o w アパッチLB』のコックピットでは、ヘルメット・マウント・ディスプレイに代表される近代的な装備を纏った妖精さん達が会話を交わしていた。

『やつと出番だな』

『そうだなー。まあ演習とは言え初任務が対艦攻撃とはねえ』

『不満か？』

『いや。ただ事前情報を見たら相手は相当貧弱な装備じゃ無いか。正直ただのイジメにしかならんと思うが』

『お前それ艦長の戦歴を見て同じことが言えるか？』

『・・・艦長を例に出すのは卑怯だぜ隊長・・・』

そう言つて頭を振る、駆逐艦『桜風』艦載機部隊のフレイムアーツ隊二番機の火器管制員。『前の世界』での記憶が有る彼らには、自分たちの艦長である『桜風』が日本海軍



の特型駆逐艦にすら劣る初期頃の貧弱な火力で帝国海軍の精鋭水雷戦隊を夜戦で例外無く殲滅してのけた過去を知っていた。無論今交戦している相手と『桜風』とは色々と違うが、要らぬ油断を戒めて慢心しないだけの精神は有った。

『・・・そろそろ対艦ミサイルの射程内だな。各機スタンバイ』

『イエス、サー』

『一番機、二番機は白露型駆逐艦夕立に、三番機と四番機は綾波型駆逐艦綾波にそれぞれ一発ずつだ』

『先ずは様子見ですね』

『性能評価試験とも言うがな』

そして各機のレーダーに敵性反応を探知し、自分の機体と駆逐艦『桜風』からのデータを照合し、目標を捕捉する。尚この時点では大石艦隊からはこの4機はマトモに視認も電探でも探知されていない。帝国海軍の血を引く見張り員の妖精さんと言えども、流石に超低空飛行中のフレームアーツ隊を発見するのは困難だった。性能劣悪な電探は猶更である。

『・・・よし、敵艦捕捉！フレイムアーツワンより各機、敵艦を射抜け！』

『了解！フレイムアーツツォー発射！』

『フレイムアーツスリー発射！』

『フレイムアーツフォー発射！さあ行ってこい！』

アパッチの妖精さんの威勢の良いコールと共に、それぞれの機体から一発ずつの  
Long range Air to Ship Missile  
長距離空対艦ミサイルが放たれ、白煙を発して瞬時に加速して行く。各機全  
速で発射した為に、時速800 kmが発射直後から上乗せされ対して間を置かずにLASM  
は音速を突破し、自らに命令された目標に向かってシースキミング機動で突き進む。

『・・・ところで隊長。もしこれで撃沈出来たら、余ったミサイルはどうしますか？』

『・・・艦長に、余ったら戦艦に全弾撃ち込む様に具申してみるか』

現在全速力で発艦したフレイムアーツ隊を追い掛けるような形で敵艦隊に向けて航  
行中の『桜風』の艦影を思い浮かべつつ、フレイムアーツ隊隊長は部下からの質問に、そ  
う答えた。

「撃つっばい！撃つっばい！撃ちまくるっばい！ぽいぽいぽいー!!!」

「左舷！対空砲撃戦、用意!!よく狙って・・・てええええい!!」

「夕立と綾波を援護シマス！ファイアー！」

「榛名！全力で参ります！撃ち方始め！」

『当たれ！当たれよ！弾幕薄いぞ何やってんだ機銃班?!』

『こつちも撃つてるがアレ速すぎるんだよ!!』

一方艦艇の位置関係上、フレイムアーツ隊の対艦ミサイルを迎撃している駆逐艦娘の夕立と綾波、そして外側から援護する金剛と榛名だが、動かせる火器全てを使用しての迎撃戦は全く効力を発揮して居なかった。前提として射撃管制装置<sup>S</sup>が一般的な艦娘基準、つまりは第二次世界大戦の日本海軍のレベルで止まって居る為、四隻から放たれる火箭は美しいだけの花火でしか無かった。対空誘導弾どころか近接信管も無い様な、しかも駆逐艦が搭載できる程度の対空兵器で、超音速かつ超低空飛行で突っ込んでくるミサイルを迎撃出来たらそいつは超えてはならない一線を越えている。

『駄目です！命中します?!』

「っばい?!」

「そ、総員、衝撃に……」

そして夕立と綾波の努力もむなしく、迎撃には完全に失敗。無情にも4発の空対艦ミサイルは二隻に突き刺さり……

『駆逐艦夕立、綾波。対艦ミサイル命中。轟沈！』

『ほ、いいいいー……』

「あ、綾波は……まだ……戦え……」

『……綾波さん。諦めて下さい。貴女の戦いは、もう終わりました』

『演習』で有る為当然爆薬が炸裂する事無く、夕立と綾波の船体にド派手な、被弾した事を示す着色が花開き、二隻は轟沈判定を受けた。因みにこのミサイルは工作艦の明石と夕張が工廠妖精と一緒に徹夜で制作したものである。正しく『明石と妖精さんと夕張が一晩でやってくれました』状態の逸品である。尚その明石と夕張は徹夜明けだと言うのに餓えた獣の様に目をギラギラと輝かせながらこの演習データを記録中であり、その姿を見た万人から思いっきり引かれている。

「……シット! ……マサカ、こうなるとは予想外デース……!」  
「……金剛お姉さま……」

夕立と綾波が無念の様相を呈しながら演習海域外に離脱するのを悔しそうに見送る金剛と、その長女の様子を見て心中を察して心痛の表情を見せる榛名。だが、この二隻にも同じく、そして容赦無く同じ脅威が迫りくるのだった。

『艦長! 又です! また来ます!』

「っ?! 直ちに迎撃デース! 全砲門、ファイヤー!!!」

「榛名! 全力で参ります! 撃ち方、始め!!!」

戦艦で有る以上、装甲は駆逐艦よりも遥かに厚いし、搭載して居る対空砲火も多い。その為一、二発程度なら弾幕を集中させ、尚且つ奇跡的な幸運が重なれば撃墜出来たかもしれない。例え撃墜出来なかつたとしても、一発二発程度ならば、戦艦の重装甲で凌げる可能性だつて零では無かつた。

『敵弾……い、一発二発では有りません! 何発も飛んできます!!!?』

「ワッツ?!」

「そ、そんな・・・!?」

だが生憎、駆逐艦『桜風』の乗員は、艦長の『桜風』の影響からか常々『オーバーキル』を信条とする火力信者だった。元々『戦艦』が相手である以上、手加減無用の思考が働いたのも有るが。そして防御重力場も無い、大和型の様な装甲も無い巡洋戦艦上がりの金剛型戦艦が、『桜風』の居た世界では防御重力場や重装甲を打ち抜かれる様に設計された対艦ミサイルに、耐えられる筈も無かった。

『金剛型戦艦二隻、撃沈。航空母艦の赤城と加賀は降伏を宣言。敵前衛艦隊の殲滅完了です、艦長』

「・・・なんですか」

『・・・艦長?』

「なんで『戦艦』が、たかが空対艦ミサイル10発程度で撃沈判定を受けているんですか!? 再判定を要求します! 『戦艦』がああ程度で沈む訳がありません!」

「『却下です』『桜風』さん。艦艇の全体に対艦ミサイルが命中するだけに止まらず、トツプアタックで砲塔の天蓋を撃ち抜かれて搭載弾薬に誘爆したと言う判定となれば、撃沈判定を出すしかありません。すみませんが、私はこれから報告書を作成しなければならぬので!」

『分かりました。艦長も、よろしいですね?』

「・・・分かりました。お手数をおかけしました、判定員さん」

結局フレイムアーツ隊の対艦攻撃だけで大石艦隊前衛部隊を撃滅判定にさせ、想像以上の戦果に何故かお冠の『桜風』。この娘も自身の妖精さんの戦意に当てられたか、それとも何気に砲撃戦を楽しみにでもしていたのだろうか。

「・・・ねえ、『桜風』」

「あ、鈴谷さん? どうしましたか?」

「いや・・・『桜風』の居た世界では、こんな風に航空戦だけで全部終わった事って有ったのかなあって、ちよつちお姉さん気になつちやつてね」

「いやいやいや、流石に補助戦力ではない航空機だけで戦闘が終わった事は殆ど有りませんでしたよ？海戦の主力は戦艦とか巡洋艦の様な水上打撃艦です」

「あ、うん、分かった。ありがとな『桜風』」

『よろしかったら使つて下さい』と『桜風』の主計科妖精から渡されたタブレット型端末を通して、前衛支援任務に就いていた大石艦隊に降りかかった不幸を直視し、『桜風』の言葉が余計に引き撃った笑みを更に加速させざる負えない摩耶と鈴谷の両艦娘。その名前の通りに春風の様な温かい雰囲気で真面目な今の『桜風』と、戦闘中に見せる氷の様に冷え切り、日本刀の様鋭い雰囲気、冷静沈着な『桜風』とコロコロ変わる雰囲気、この二隻は時間が経つにつれてこの引き撃った笑みしか見せなくなって来ていた。

『艦長。次に交戦する相手は艦隊決戦支援任務に就く大石艦隊の第四艦隊であると思われ  
れます』

「中型正規空母二隻に重巡二隻、駆逐艦二隻の艦隊だったね・・・流石に性懲りも無くこのまま突撃してくるとは思えないけど」

『おそらく本体と共同でわが艦に攻撃を仕掛けてくるかと思われ  
ます。その方が勝率は高いでしょうから』



「だろうね。まあでも私たちがやる事は変わりない。前の世界で戦友だったフランス軍の精神に則り、勇壮に突撃して勝利しようじゃないか妖精諸君」

『艦長ソレ大損害かつ世紀に残る大惨敗フラグじゃないですかヤダー』

自身の妖精さんと和やかに会話する『桜風』。この光景からは全く想像が付かないが、戦闘中はスイッチが切り替わった様に別人の声色と雰囲気、そして冷たい表情で戦っていた。鈴谷たちは様々な戦場を駆け巡り、それ相応に様々な性格の艦娘と交流した事も有る。だが、この様な二重人格に等しい両極端な性質の艦娘と逢った事は無かった。

「・・・霞が『桜風』を怖がった理由、分かる気がするわー」

「鈴谷?・・・どういう意味だ、それ」

小さく溜息を吐きながら鈴谷が言った言葉に、摩耶が目敏く反応する。因みに今『桜風』は副長たちと一緒に大石艦隊の本体を捜索中であり、鈴谷達がそのような話をしてる事には気付いていない。帰投して補給が終わった直後に威力偵察に向かわされたフレイルムアーツ隊の動向の方を気にしている。

「『桜風』ね、『敵』と認めた相手には容赦しないの」

「……当たり前じゃないか？」

「ただ容赦しなただけなら、鈴谷も何も思わないって。問題なのは『戦う行為に何も感じていない事』」

「……？」

まるで意味が分からない、と言う表情の摩耶に、鈴谷は鈴谷なりに感じた『桜風』の姿を言葉にする。

「鈴谷達は、戦う時は、少なからず『恐怖』だったり『戦意』だったり、とにかく何かの『感情』を持つてる。流石にここまででは良いよね摩耶っち？」

「そんな事当たり前だろ？後摩耶っちは止めろ」

「……だけど、『桜風』は『何も感じていない』。戦闘中は『恐れ』も『猛り』もせず、ただただ『何の感情も抱かずに』戦っている。まるで『無垢なる機械人形』<sup>Pure massacre d'oi</sup>みたいじゃん？」

「……機械人形って……」

「だってそうじゃん？200機の大群を見ても何の感慨も浮かばず、一瞬の迷いも無しに無表情で最効率の戦闘を実行する。……戦っている時の『桜風』には、『怖い』とか

『嬉しい』とか、そう言ったのが無いようにしか見えないよ」

例えどれだけ装備が整っていたとしても、普通ならば敵と接触する時には必ず何かしらの感情を抱く物である。弱敵であつたら『哀れ』んだり『舐めきつた』り『残念』がったり、強敵であれば『意気高揚』したり『早く終えたい』と思つたり『活躍したい』と考えたり、『機械』とは違う感情を持った『艦娘』にとつて、そう言う思念を持つ事は普通である。

然れども対する『桜風』には、そう言つた感情は無い。何も感じず、最適な行動を選び、探し、戦うだけである。それは、『桜風』に対して他の艦娘が『畏れ』を抱かせるには十分だった。無表情に、無感情に、そして強烈な威圧感を発しながら、圧倒的な能力を持つて敵対者を殲滅し、だが戦闘が一度終ひととぎわつた瞬間には温かな雰囲気を持つた真面目で世間知らずな少女に様変わりである。外野や『桜風』と余り関わっていない者が見れば、まるで『強大な力を持つた機械が人間の振りをしている』様にも見えて、不気味さや恐怖心を感じて余りある。

「・・・じゃあ、どうするんだよ? 『桜風』に『敵の攻撃を怖がれ』とでも言うのか?」  
「言える訳無いじゃん。それにそんなことしたらまた『桜風』が変に勘違いして泣いちゃ

いそうだし」

「・・・その点、妙に感情的に不安定だよなあ、アイツ」

「鈴谷が言いたいののは、提督が言っていたように『桜風』を守るの。それも、心の方をね」  
「・・・ああ、そう言う事か。『桜風』が傷付かない様に心無い罵倒とか脅迫してくるような奴を片っ端からぶっ潰すんだな」

「さっすが摩耶っち。脳筋の鏡だねー」

「オイなんであたしが脳筋なんだよ。脳筋は霧島とか天龍だろ」

実際のところ、駆逐艦『桜風』は縁有つて深山艦隊に身を寄せているが、経歴も能力も既存の艦娘とは全く違う部分が多い、と言うより違う部分しかない。つまり『通常の艦娘と同じく自分の提督に絶対服従』するのか確証が持てていない。杞憂かも知れないが、仮に『桜風』を精神的か何かで追い詰めて暴走させたとしたら一体どうなるのかは見当もつかない。ある意味特別待遇であるが、『桜風』の戦闘力や不安定な精神、そして部分部分で欠落したこの世界の常識と言った、改めて見ると凄まじい爆弾になりかねない彼女を大切にするのは、感情を抜きにしても当たり前であった。現場の艦娘にとって『新しく出来た世間知らずな後輩のお世話』感覚だったりしているが。

「・・・あのー、鈴谷さん？」

「んー？どつたの『桜風』？」

「いえ、何か私の事を呼んだように聞こえてまして・・・」

「あー、えつとー・・・」

「単に摩耶つちと夏に着ていく水着の事話してただけだよ。それで『桜風』の着ていく水着とか何が良いかなーって話が出てさー」

「そつ、そうだぜ！『桜風』可愛いからなー、何着て行ったら良いかなーって話をしていただけだぜ!!・・・べ、別に、変な話はしてないぜ！」

艦長席から背もたれを両手でつかんで頭を覗かせた『桜風』が、鈴谷と摩耶の会話で出て来た『桜風』の単語に反応して会話に混ざる『桜風』。フレイムアーツ隊に集中して居た上、終わりかけの部分の会話を途切れ途切れに聞こえただけの為、都合の良い事に鈴谷と摩耶の会話は『桜風』には届いてはいなかった。

「水着・・・ですか。もし使おうとしたら、あの潜水服見たいな『すきゅーばーだいびんぐすーつ』って言うのが良いですね」

「えー？アレ超地味だよ？」

「普通にワンピースタイプの水着でも良いと思うんだがな、摩耶様的には」

「いやー……。私、身体に何でか凄い範囲にずっと傷痕が残っているんです。なので、そう言った肌が見える水着を着て行ったら大変な事になるんじゃないかなーと」

「……え、？アノ傷、治ってないの?!」

「……若しかして、今までずっと仮眠室とかで寝泊まりして、そこで何時も着替えやシャワー浴びていたのって……。その傷痕を見られたくないからか？」

「私としては傷痕に関してはどうでも良いんですが、こんな物見せて皆に不快な思いをさせたくないので……。後は提督から『今部屋割りを選出している最中だから待って』との事ですので」

誤魔化す為に適当な事を言ったらある意味それ以上に問題な事を初めて聞いた二人。『桜風』の事を慮って陽炎と不知火、青葉は一切『桜風』の『消えない傷痕』には言及しなかつた上、超兵器『ヴィルベルヴィント改めワールウインド』との戦闘にその対策会議、そして今回の演習と続けざまに色々な事が発生して居る為に、『桜風』の傷跡の事はマトモに触れられておらず、その為深山艦隊の艦娘の殆どはこの事を知らない。

——アレこの事実どうすれば良いの摩耶っち？

——あたしに聞くな鈴谷。それと摩耶っちはやめろ

取り敢えず演習が終わった後に考えよう。そう心に決めた二隻であった。

「…ふふふ。良いわ、良いわ。最っ高に私の求めていた『兵器』じゃない！駆逐艦『桜風』!!」

トラック諸島に存在するとある鎮守府の執務室にて、豪勢かつ高性能なPCに映る駆逐艦『桜風』の戦闘映像を見て、口角を釣り上げて本心から嬉しそうに笑う、提督としての制服に身を包んだ美しい女性。名を『仲本穂乃果』。表情はとても美しい物であつ

たが、隠しようも無いほどに滲み出る黒い雰囲気は全てを台無しにしているが、今この執務室には一切誰も居ない為、何の支障も見られていない。

「あの不必要な感情が欠片も存在していない！そして一切の躊躇無く敵を撃滅出来る性能！最高の『兵器』よ！『あんな女』なんかには猫に小判処の話じや無い！アレは私の所で使われるべき！」

目を輝かせて思いを発露する仲本元帥。過去鬱陶しく纏わりつき、戦闘中にも泣き言を言ったりしていた『兵器』とは違い、戦闘中の『桜風』の様子は『仲本穂乃果』の欲する『最高の兵器』の完成形であった。先の『桜風』の転属要請書は、ただ単に『桜風』の性能を小耳にはさんだが為にだけに出しただけに過ぎなかった。

「・・・絶対に、アレは私の所に引き込む。アレを使えば、私はもつと登れる！更に高い地位に！『あの女』や老害共を早く地に叩き伏せられる！待つてなさい駆逐艦『桜風』！必ず私が教育して、お前の有るべき場所に、必ず連れて来て上げるわ!!!」

だが今回の演習映像を、裏に手を回して深山艦隊にしか見れていない筈の駆逐艦『桜風』艦橋内部の映像を見て、仲本提督は『如何なる手を使っても、必ず『桜風』を配下



に引き込む』事を決意する。戦略的な理性的云々よりも、殆ど感情的な欲求からくる行動であり、まるで子供の我儘のように思えるが、『仲本穂乃果』の皮を一度引ん？けば中身は実質的にこの程度の子供と変わらない精神年齢である。知性と天性の生き抜く事と手駒を見つける才覚だけが成長して居る為に手が付けられないのは事実であるが。

．．．任務。『連合艦船、並びにウイルクア王国海軍の撃滅』。本国通信．．．反応無し、途絶中。

．．．一時任務を中断。本国ウイルクア帝国に帰還し、指示を仰ぐ。尚遭遇した連合軍艦船、並びにウイルクア王国海軍艦艇に対する攻撃は継続する。

．．．私は．．．どうして、ココニイルノだ．．．？私は．．．ナンナノダ．．．？

トラック諸島に身体と頭脳だけは大人である子供の哄笑が響き渡り、硫黄島沖では駆逐艦『桜風』が大石艦隊の懐に殴り込もうとしている時、遠くカリブ海では『詳細不明の広範囲に広がるノイズ』が、人知れず発生していた。

## 第二六話 硫黄島沖大演習午後の部 〔砲火の花弁、

## 波浪の風〕

「……意外と、戦う時は違う表情をするのね、『桜風』は」

「……深山提督、それだけですか？」

「……これ以上何を言えと言うのよ、大石君」

そう言葉を交わす二十代前半の軍服を着こんだ男女二人。現在大石提督と深山提督は戦艦大和に設置された大型スクリーンに映る、硫黄島航空隊所属の偵察機が撮影し転送している駆逐艦『桜風』の艦影を眺めていた。この大型スクリーンに映りだすのは終始外側から見た『桜風』の戦闘の様子であったが、深山提督だけは『桜風』の艦内の様子が分かる様に、今回の演習の為に海軍庁が用意した軍用のタブレット端末を通して駆逐艦『桜風』艦橋の様子を見ていた。仲本提督が艦内の様子を見れたのは秘かにこの深山提督が持つタブレット端末映像を転送出来るようにした為である。無論、演習後には転送された痕跡は一切合切残さず抹消される用意周到さである。

「200機の大群を被弾ゼロで潜り抜け、しかもロング・ボウ・アパッチの様な現代兵器を飛ばしてくるなど予想外にも程が有るのですが。『桜風』ちゃんつて建造されたのは1940年代ですよね？」

「正確な建造年月日は『桜風』も知らないようだけど、艦歴としては1939年から1940年頃の一年程度、つて言っていたわ」

「・・・今度、正確な『桜風』の歴史を教えてもらっても良いですか？」  
『桜風』が嫌つて言わなければね」

そう答えながらも、深山提督の視線はそろそろ大石艦隊の本隊と交戦に入り始めている『桜風』の方に向けられたままであった。

「攻撃機が来ませんね」

「流石についさつき200機を撃滅させられたからじゃねーか？」

「同じように繰り出しても同じように撃ち落されるだけだー、って考えたんじゃない？」

『事前情報を元に勘案すれば、次に襲い掛かってくる航空機は最大数で切り良く333機ですね』『狙ってたのかどうかは知らんが見事に確変ゾロ目だな』『・・・ん？空母の艦載機、そんなに多かつたか？』『航空戦艦の扶桑、山城の瑞雲も計算に含めました』『あー、そうか』『今まで来ていないと言う事は、やはり3部隊共同で『桜風』に殴り掛かってくるつもりだろうなあ』『なあに、その方が帰って感覚を思い出せる』『装備は返つてこないけどな』『言うな。・・・空しくなるから言うな』『何時になったら復活するんだろうな、前の装備』

一方駆逐艦『桜風』の艦橋では、艦長の『桜風』とその妖精さん、そして観戦武官として乗り込んでいた摩耶と鈴谷が色々と駄弁っていた。赤城達が所属する第三艦隊を弾薬以外の消耗も無く一方的に殲滅して以降、巡航速度で演習相手の大石艦隊本隊に向かつて居た為、暇だったのだ。因みに空母の赤城、加賀が降伏を宣言して演習海域を離脱した時『桜風』は「なんで砲撃戦かミサイル戦に打って出ないんですか」と素で言い放つて、鈴谷達を筆頭に関係各所を絶句させている。陸でもそうだが、戦闘中は本来属していた世界の感覚や記憶が陸地以上に強く蘇りでもするのか、今いるこの世界の常識

とはかけ離れた事ばかり大真面目に言い募っていた。

『ところで艦長。次に交戦する大石艦隊本隊との戦闘方法は、一体どうしますか?』

「さつきと変わらず流れに任せて殲滅する感じでしょうか、副長」

『了解です。やっぱり何時も通りですね』

「この手段に限る・・・と言うより、このやり方しか知らないからね」

「・・・あー、『桜風』?」

「はい、なんですか?」

「やっぱり、さつきみたいに突撃するの?」

「はい、そうですけど?」

何言ってるんですか、と言わんばかりに小首を傾げて不思議そうな顔で疑問符を頭の上に浮かべさせた表情で鈴谷の問いに答える『桜風』。流石に先ほど同様の事を体験した鈴谷と摩耶は、それ以上に問い質す事はしなかった。有言実行かつ不言実行。今までの交流で既に『桜風』は真面目で嘘を言わない素直かつ純粹な・・・要約すれば聞き分けの良い小さい子供の様な性格で有る事は分かっていたし、最高速50ノット、時速にして約90kmを超える高速で荒れ狂う駆逐艦『桜風』の激しい回避運動を見れば、圧倒的

劣位の自身の艦艇性能を鑑みれば余りその行動に対して多くを言う事など不可能だった。

「……『桜風』は、怖くないの？」

「……怖い、ですか？」

「一緒に戦う艦も無しに、ずっと一隻で戦って来て、何時も『ヴィルベルヴィント』の時みたいにいっぱい傷付いて、さ……怖く、ないの？」

——鈴谷、『桜風』にいきなり何聞いているんだろ？

『桜風』へ向けた問いかけに対し、鈴谷の心は自身に対してそう言いだした。『桜風』に対して傷付ける様な言葉はぶつけない、とついさつき自ら発言したと言うのに、今鈴谷の口から出たのは『怖くないのか』。陸地でなら兎も角、戦場の雰囲気があり、尚且つ過去の記憶が蘇りやすいこの海でのこの言葉は、下手すれば『桜風』に存在するかもしれない隠された地雷を踏みかねない。今回は何ともなかったが。

「ん……自分が損傷を負うのは別に何とも思いませんね。痛いのは嫌ですけど、何時

もの事なのでもう慣れましたし。沈まなければ何ともなりません。……それに……」

「……私は、駆逐艦『桜風』は、友人や仲間が傷付いたり、あまつさえ沈んでしまいうくらないなら、自分が致命傷を負ったり、超兵器や敵艦隊に単艦突撃する方を選びます。その方が気持ち的にも楽ですし……誰も、傷付いて欲しく無いですから」

—— ……駄目だこりや。コイツ、艦隊戦には根本的に向いていないぜ

鈴谷への回答を外野ながらに聞いた摩耶は、自然とそう感じた。艦隊戦では、余程のパーフェクトゲームでない限りは、必ずと言っていいほどの確率で、僚艦は損傷を負う。中破、大破するだけならまだしも、場合によっては轟沈の可能性も有る。現在の深山艦隊は3年以上に亘る深海棲艦との戦闘でも、今まで一度も轟沈艦を出してはいないが、これから交戦するであろう『超兵器』では、どうなるかは全く予想が付かない。自己犠牲精神は一見立派に見えるが、メンタルがそこらの駆逐艦娘以上に脆い様子が見受けられる『桜風』が仮に僚艦の断末魔、乃至長時間にわたる苦痛の叫びを直視した場合、いわゆる心的外傷後ストレス障害が容易に発症するかもしれない……。そう感じさせるには十分だった。

無論、ただの杞憂である可能性も十分にある。『桜風』は子供っぽいが、『桜風』の戦闘経験は少なくとも今摩耶たちが居る世界全ての艦娘を圧倒するだけの物では有る。味方が傷付いても戦闘中は動揺を見せずに敵艦に飛び付いて、味方艦を守りつつ冷徹に戦い抜く可能性も考えられる。だがそうなると、今度は深山艦隊から抽出した対超兵器艦隊の艦娘が不味い事になる。具体的には「対超兵器艦隊」と言う名を冠しながらも結局は『桜風』に全てを託さざる負えなかつた場合の、対超兵器艦隊所属の艦娘のメンタル面である。

「……ずっと単独で戦ってきたが故の弱点……か」

「……摩耶さん？」

「ああ……？何でもねえ、ただの独り言だ」

——提督、正直これからのかじ取りは台風のご真ん中を突つ切るよりも難易度高いぞ……

『桜風』が生きた世界のドクトリンに則れば、単純作業的に『桜風』を単艦で敵艦隊や敵超兵器に突撃させ続けなければならないのだが、生憎摩耶の属する深山艦隊の艦娘は、たった一



隻に全てを任せて高みの見物と洒落込めるような精神はしていなかった。特に対超兵器艦隊に志願した長門たちはそうである。軽い部分の有る様に見える青葉も、艦艇時代の過去が影響させてでもいるからか、味方艦艇の損傷を殊の外嫌う。その為深海棲艦とは比べ物にならない脅威である超兵器に対して、『桜風』製の新兵器を全く使いこなせないが為に『桜風』に全負担を押し付けざる負えない現実、彼女たちの『心』に対して極めて大きな負担がかかっている。表面上は何とも無い様に振る舞っているが、年単位で苦楽を共にした摩耶や鈴谷には、薄らとでは有るが彼女たちの胸の内の叫びが聞こえた気がした。

『艦長、アクティブソナーに反応！反応から小型潜水艦らしき物かと思われます！』

「潜水艦らしき物？ソナー班、報告は正確にして」

『いや、でも海中に反応があるので潜水艦だとは思われるのですが、ライブラリーには存在しない未知の代物なので……』

「分かりました。では『新型対潜ロケット』準備。何かされる前に沈めます」

『了解！』

そんな摩耶の心中を知る余地も無く『桜風』は、妖精さんからの報告に直ぐに戦闘中に見せる冷徹な表情に戻り、再度戦闘態勢に戻る。これからは摩耶や鈴谷と私語を交わす事も無く、全力で大石艦隊本隊を叩き潰す作業に戻るだろう。

「・・・ねえ摩耶っち。『小型潜水艦』って、多分アレの事だよね・・・？」

「だから摩耶っちは止めろ鈴谷。まあ、『小型潜水艦』って言ったら、多分『甲標的』の事だろうな・・・」

本来『甲標的』をソナーで捕捉するのは、演習でも深海棲艦との戦闘でも例外無く一度も無かったのだが、恐らく『桜風』は正確無比に大石艦隊本隊に属する北上と大井が放った『甲標的』を捉えている。とは言えここまで来れば『まあ『桜風』だからなあ』と言った風に、諦めとも慣れとも言い難い状態になる二隻の艦娘たちなのであったのだ。た。

「・・・そろそろ、だな」

「そうだね、長門さん。今までのセオリーを無視した戦法だけど、こうしないと彼女には勝てそうに無いからね」

「私の戦況分析によれば、航空攻撃と同期した艦砲射撃と雷撃が成功すれば、必ず駆逐艦『桜風』に対して打撃を与えられる筈です」

「まーそうだねー。赤城達があつさりと粉碎されたのには驚いたけど、こつちもむざむざ負ける気はこれっぽっちも無いからねー。ねー大井つちー」

「そうですね北上さん！北上さんとなら、駆逐艦の十隻や二十隻、直ぐに沈められます！早く勝つて横須賀の街に遊びに行きましよう北上さん！」

『桜風』が『小型潜水艦』を探知した頃、大石艦隊本隊では最終調整を終えた全艦娘が戦闘態勢に入りつつあった。前衛支援任務に就いていた第三艦隊の犠牲の元、可能な限りの情報を集めて即席ながらも対抗策を作り出していたこの18隻に上る艦娘たちは、通常の戦闘における常道である第四艦隊による先制攻撃を放棄し、『桜風』の放つ『AH-64D Apache Longbow アパッチ・L.B』の対艦ミサイルを比較的打撃力の低い第四艦隊が、主力艦隊の盾となる形で受け持ち、第一、第二艦隊が共同での海空共同立体的同時攻撃を実行する

プロセスを組み上げていた。

「……妙高お姉さん。本当に、大丈夫なんでしょうか……？」

「……はつきり言えば分からないわね。でも、私たちは何時も通り……いえ、それ以上頑張るだけよ」

とは言え、口では強気な発言を発しているが、この艦娘たちはそれなりに修羅場を潜り抜けている歴戦艦揃いである。たった一隻で第三艦隊を文字通りのワンサイドゲームで叩き潰した『桜風』の戦闘能力を軽く見てはいはしなかった。ベテランが戦闘開始前に良く交わす軽口のたたき合い、の様な物である。

「……あ、あれ？お、おかしいな……」

「……ちよつと、どうなってるのよ……」

「んー？どしたのお二人さんー？」

そんな中、唐突に北上と大井の雷巡姉妹が困惑する声が聞こえ、代表して軽空母の隼鷹が二人に問いかける。何時も酔っぱらっている疑惑がもたれているこの軽空母艦娘だが、大石艦隊に所属する隼鷹は比較的真面目な方の性格で有り、出撃中やその出撃前

は我慢して一滴足りとも酒は飲まないタイプである。つまり他の艦隊の隼鷹の中には飲酒して酔った状態で出撃している不屈きな輩も居ると言う事である。流石に提督がよっぽど隼鷹に甘くない限りは最低限矯正されているので、少数派ではある。

「いやー．．．なんかね、甲標的からの通信が無くなっちゃってさー」

「こつちも全部の甲標的からとの連絡が取れません．．．いったいどうして．．．」

そうして返ってきた言葉は『甲標的との連絡途絶』であった。どちらか片方だけならば、何かしらの事故か不具合が発生しただけという可能性も有った。だが今回の場合は『ほぼ同時に大井、北上両方の甲標的との通信途絶』と言う、今までに無い事例であった。そもそもの話、重雷装巡洋艦として数々の戦場や演習に投入されてきた歴戦の両艦が扱う甲標的が今まで事故や不具合を起こした事は無かった。

「．．．これは、まさか．．．」

「．．．神通、どう思うっ？」

「．．．警戒を通常体制程度で良い、と言う事は無いと思います」

おつかしーなー、等と言いながら甲標的との交信を繰り返す北上と大井の姉妹の通信

を聞いていた長門や神通、扶桑と言った、過去の艦艇時代の記憶、そして今の艦娘となつてからの戦闘で磨き上げられた『勘』が警鐘を鳴らしだしたが、具体的に何か行動や発言に移れる前に、状況は一気に動き出した。

「……っ!?! 水上電探に反応! え、ちよつと待つて、『桜風』にはアパツチが搭載されているのでは無かつたの!?! どうして航空攻撃を仕掛けずに突撃してきているの!?!」

水上電探で捕捉した『桜風』の想定外なぶつ飛んだ手段に陸奥の驚愕の聲が艦橋に響き渡るも、周囲の艦娘はそんな事は知つた事ではないとばかりに、先に作り上げた対抗策に基づき、全力出撃させた艦載機やそれぞれの魚雷発射管、砲口を完璧に『桜風』に捕捉する為に艦隊運動を開始する。50ノットを超える速度で駆け回る『桜風』相手では一瞬の遅れが命取りである事を第三艦隊の通信を傍受して理解して居た為の行動だった。

「・・・良し、じゃあやりますか。総員、死力を尽くされたし」

『了解！』

『これで感覚が取り戻せると良いんですけどね』

「まあ正直に言つて望み薄だね。敵艦の能力の問題もさることながら、前提として今駆逐艦『桜風』が搭載している兵装が極めて貧弱と言う、敵艦の状況とは関係無い部分での問題を抱えているんだから」

『・・・あの艦長、もうちよつとオブラートに包んでも良いのでは・・・』

「事実を嘘で塗り固める事程戦争に置いて害になる事は無いよ、副長」

一方大石艦隊に向けて全力突撃中の駆逐艦『桜風』の艦橋内部。副長妖精と『桜風』が会話していたように、今回は『前の世界での戦い方』の感覚をほんの少しでも取り戻すべく、先制航空攻撃と言うセオリーを無視して戦闘を開始している。無論艦載機を出さないわけでは無く、単に『戦闘中の発着艦と航空管制を同時並行させた砲雷撃戦』と言う『何時もの戦い方』をやるだけの話である。





取った上に実現させた事に驚きつつも、全く気にせずに戦闘準備を続ける『桜風』とその妖精さんの姿を見て大石艦隊に対して冥福を祈っていた。とは言え、先ほどの様に外野の野次馬気分でいられたのも此処までであつたが。

雲霞の如く迫る300機を超える大編隊と精銳の水上艦艇が迫る中、駆逐艦『桜風』は一切針路変更する事も無く『AH-64D Apache Longbow』アパッチLB』4機編成のフレームアーツ隊を出撃させる。因みにこの部隊名は演習直前に開発成功後殆ど間をあげずに搭載して居る為に出撃させる直前にその場で適当に付けた、言ってしまうと仮名である。この演習後、妖精さんや名前付けのセンスが良さそうな艦娘と共に部隊名を改めて決める予定である。

速度を調整しながら『桜風』と共に進撃する、一般的な固定翼機ではまず不可能な芸当を見せて演習を見ている空母艦娘や航空巡洋艦娘を感嘆させながらも、先ほどの様にフレームアーツ隊が対艦ミサイルを射出する事は無かつた。既に射程圏内に敵艦を捕

捉している距離で有る筈だが、『桜風』から攻撃命令が下される事も、フレイムアーツ隊の妖精さんから攻撃命令の要請や催促がされる事も無かった。その不可解な行動による演習海域外の艦娘たちの疑問は、『桜風』から発せられた「Enemy In Range. All Weapons Free, Start fighting. Went into actions as predicted」の一言と共に消し飛ぶ事となる。

先行して突入してきた、飛鷹と隼鷹の烈風制空隊。この部隊に与えられた任務は『フレイムアーツ隊の撃墜若しくは拘束』そして『可能であれば駆逐艦『桜風』への機銃掃射による妨害』の二つであった。だが命令した二隻の艦娘も、その命令を受けた妖精さんも、前者は兎も角後者は『天運が味方しない限り難しいだろう』と判断していた。既に判明しているだけでも、『AH-64D <sup>Apache</sup> Longbow』の速力は時速800km。対して烈風の最大速度は史実4式戦『疾風』と大よそ対等の時速620km。実に200km近い速度差を誤魔化すのは流石に不可能であり、兎に角数で囲んで袋叩きにして拘束するのが関の山でしか無かった。まあ、その選択も殆ど意味のない物であったが。

『機銃掃射開始。1, 2, 3...五機撃墜!』

『ヒヤッハー! 入れ食いだー!! 撃つて撃つて撃ちまくれー!!』

『あーあ、調子に乗っちゃって...。三番機、敵機直上! 連続してくるぞ!!』

『うお?!』

フレイムアーツスリー

「F A 3、針路そのまま10mパワーダイブ。機銃援護射撃開始。...敵機撃墜」

『...す、すみませんでした、艦長』

フレイムアーツスリー

「構いません。F A 3、今から出す指示に従って敵攻撃機編隊の内部に突入、敵機を

掻き乱してください」

『りよ、了解!』

『艦長! 敵雷撃機より雷撃確認! 3本です!!』

「見張り員の報告とソナーにて魚雷スクリーン音を捕捉、位置を確認。機関全速後進、面

舵30度、5秒後舵中央戻し全速前進。雷撃の隙間を抜けます」

『ハッ!』

21世紀現代における攻撃ヘリの頂点に君臨する性能を持つAH-64Dと、第二次世界大戦末期によくやく試作機が飛び立った、ある意味仮想の戦闘機である烈風との航空戦と言う、一時期流行った架空戦記でも先ずお目にかかる事は無い組み合わせの光景

もさる事ながら、多少余裕のある者は『桜風』が一切フレンドリーファイア無しに航空管制も行いつつ間断無く対空射撃と回避運動を敢行している』事に気付いて背筋を凍らせていたが、それらが見戯に思える程の『本番』は余り間をあけずにやってきた。

『妙高型重巡洋艦の妙高、羽黒！白露型駆逐艦の時雨と暁型駆逐艦のВерныйが接近中！その背後には大石艦隊本隊が追隨しています！』

「OK、予定通り。対艦戦闘準備。取り舵一杯」

『敵重巡洋艦、並びに本隊の敵戦艦からも発砲確認！』

「問題ありません、全て遠弾です。第一目標、妙高。第二目標、羽黒。主砲、撃ち方始め。フレイムアーツ」

F A 隊、現在逃走を図る敵中型空母と此方に向けて突撃中の駆逐艦へ対艦ミサイル攻撃を実行せよ」

大石艦隊の決戦支援艦隊である重巡洋艦娘の妙高と羽黒、そして長門たちの先制砲撃に対して欠片も動揺する事無く、転舵して10秒とかけずにT字を描き、反撃にて最大射程圏内に入った妙高と羽黒に対して精密射撃にてそれぞれ5回斉射を開始。僅か5回と言えども、一隻に向かって飛んでくるのは80発にも上る20・3cm50口径砲

相当の破壊力を持つ15.5 cm 75口径砲弾である。弾速も通常の20.3 cm砲よりも早く、弾頭も『新型徹甲弾』となっている。

今相対している妙高型重巡洋艦ならば普通にヴァイタルパートに施された装甲を撃ち抜くのはそこまで無理な話でも無く、それ以前に魚雷発射管の様な危険物をマトモな対策無しで完全に丸出しの上に防御重力場も装備していないこの世界の日本型重巡洋艦の場合『どうぞ沈めて下さい』と言っているようなものである。威力過剰である事が判明したばかりの対艦ミサイルに至っては、完全にオーバーキルですらある。

『ああっ！．．．まだ．．．まだ、退けません．．．！』『被弾．．．二番砲塔!?!』  
いえ、まだ行けます！』『流石にこれは．．．恥ずかしいな．．．』『くっ．．．この僕を、ここまで追い詰めるとは．．．』

『．．．あー、すみませんが判定員です。大石艦隊決戦支援艦隊の皆さまに轟沈判定が下されました。今から出す指示に従って演習海域を離脱して下さい。では先ず．．．』  
『．．．何と言いますか、その、もう、あれですね。凄い哀れですね』

「演習とは言え、ここは戦場よ、砲術妖精。魚雷が節約出来て良かったとは思うけど、それ以上の感想を抱くのは時間の無駄。タダでさえ今航空爆撃を受け続けているんだから」

『とは言え爆撃3発、航空機の雷撃1発受けた程度で、防御重力場のお陰で殆どダメージ有りませんでしたけどね』

「でも既に発覚した問題も出て来ている。反省会は演習後にするから今は自分の仕事に集中しなさい」

『了解！』

通信に紛れて艦橋内に流れる大石艦隊の艦娘や妖精さんが発する悲鳴やら何やらを軽く流して、此方に臆する事無く突撃を継続中である大石艦隊本隊と、味方艦の砲撃に撃ち落とされたりしながらも必死に損傷を与えようともがき、足掻き続ける敵艦載機部隊に対して『その勇氣は素晴らしくあります』とさり気無く相手の評価を上方修正しながら、戦艦砲と雷爆撃の雨あられの中を再度突き進む『桜風』。今の彼女には『やや相手と自身の装備が期待外れとは言え『前の感覚』を少しでも取り戻す絶好機』で有る為に、遠慮無用にあらゆる兵装を動かし、射撃し続け、思うがままに艦艇を駆け回らせていた。

「……うう……もう、マジテンション下がる……身体痛い……食べなきや良かつた……あう」

「……が、頑張れ鈴谷……。た、多分もう少して終わるからな……」

そして『桜風』が戦闘に全神経を集中させ続けていたが為に、シートベルトの様なものなど無い、床と固定されているだけの椅子に座っていた鈴谷と摩耶が、唐突な急加減速と連続的転舵、そして無数に降り注ぐ至近弾の豪雨に『桜風』自身の兵装による射撃振動によつて幾度となく椅子から振り落とされて床に叩きつけられ、身体的な打撃だけでなく『艦が船酔いする』と言う前代未聞の感覚に苦しんでいる事には、演習が終了するまでついに気付く事は無かった。

## 第二七話

## 硫黄島沖大演習午後の部

## ～異世界の戦争

駆逐艦『桜風』による日本国首都東京に侵攻してきた深海棲艦の侵攻部隊主力艦隊を一夜にて殲滅した、正式名称「関東沖事変」。超兵器『ヴィルベルヴィント』と駆逐艦『桜風』が殴り合った「小笠原沖海戦」。深海棲艦との戦争により制度的には戦時体制となった日本国であっても、この二つの海戦を隠匿する事は不可能だった。壁に耳あり障子に目あり、人の口には戸が立てられない。今回の硫黄島沖大演習は、現在深海棲艦との戦争状態にある各国に超兵器の情報を伝えると共に、それに対抗する手段が有る事を通達すると言う主目的が有った。実の所、第一期生の『桜風』の転属要請等はただの切欠に過ぎない。

「全く……。想像を遥かに超えてとんでもない力であるな、駆逐艦『桜風』」

『これは参った』と言わんばかりに苦笑いしながら会議室のプロジェクトに映る、駆逐艦『桜風』と大石艦隊との大乱戦を眺める海軍庁長官の山本蒼一。幾多の砲弾が飛び交い、無数の機銃弾と短距離対空ミサイルが火箭を描き、多数の固定翼機と相対する僅か



4機の回転翼機が空を支配し、海上は秒以下の単位で斉射される酸素魚雷の津波が覆いつくしている。確かにとんでもない光景である。

一応山本長官を含む海軍庁上層部は、駆逐艦『桜風』のカタログスペック自体は把握していた。だが流石に現実的な視野を持つ彼らの頭脳では、この様な白昼夢の様な非現実的光景は想像出来ていなかった。あくまで海上自衛軍が現在所有している最新鋭艦である「いぶき型イーجزス駆逐艦」から対艦ミサイルとファランクスを取り外し数段強化した程度のイメージで、単艦戦闘であれば物量に押しつぶされて終わると思われていた。

「……これは面倒な事になりそうですね、長官」

「そうだな……。だが、そこを何とかするのが、我々後方の人間の役目だ。悔しい限りだが我等には深海棲艦、そしてこれから交戦すると推測される超兵器と戦う力は無いのだから、彼女たちがまともに戦える様子を整えなければならん」

「外務省や警視庁、自衛三軍等の関係各所との連絡をこれまで以上に緊密に致します」  
「よろしく頼む」

深海棲艦がこの世界に出現し、既存の兵器は全く通用せず、深海棲艦と戦うには艦娘

が絶対必須、と言う状況になった現在、日本を始まりとしてアメリカや欧州でも『始まりの艦娘』が現れたが為に、世界各地で戦闘中では有る。だが、一番最初に『艦娘』を確保し、尚且つ『提督』も多数戦力化に成功している日本に対して様々な物良いを付けてくる国家は、この状況となっても未だに複数存在する。病的なまでに『大日本帝国軍の艦艇』と言う物の存在自体をこの世から抹消したい国、戦略上どうしようもないとは言え自身の生命線である海上通商路を握られているのが面白くない国。この深海棲艦との戦争で日本の国威が増すのを嫌う国。日本が世界で一番大量に抱え込む艦娘の戦力を、国連軍と言う旗の下に自国の制御下に置きたい国。

勿論、日本の保護下に入る事によって、日本艦娘の武力によって深海棲艦からの侵略を防いでいる東南アジア各国や、ハワイやミッドウェー等が陥落した為に、実質的に太平洋の通商路が完全に途絶状態でありながらも未だ深い同盟関係を続けているアメリカ合衆国、艦娘の運用方法に関する情報を濃密に共有する英仏伊主体の欧州諸国等からは絶対的とも言える支持が有るが、それでも外交的に面倒で有る事には変わりない。今回の演習では色々悲惨な具合では有ったが、『桜風』の生み出す現代兵器が一般艦娘にも問題無く搭載出来る様になったら、確実にこれまで以上に風向きが強くなることは予想できた。まあ確かに、運用コストが極めて低い現代艦艇が唐突に100隻単位で出現し

たらパワーバランスがどうのこうのと云う問題では無い。

「・・・またぞろ『アジアへの侵略』だの『反省していない』『肅軍しろ』等と喚き立てるやかましい輩が増えそうですね。国内だけでなく、国外からも」

「適宜反論して潰していくだけだ。今のわが国にはそんな野心も、出来るだけの国力など欠片も存在しない」

人類滅亡、とまでは今の所は行っていないが、それでも日々少しずつ増大傾向を見せる戦費問題や、極めて安価に『調達』可能な艦娘の存在が無ければ即時破綻一直線間違いない無しの防衛領域、そして全く意思疎通も不可能な深海棲艦と実質内ゲバにしか目が行っていない一部の人類国家と各種勢力と言う4連コンボの前に、正直言えば全てを投げ出したい海軍岸上層部の面々であったが、今ここに集まっている人間は幸か不幸か、どこぞの振り切った政治的思考を持つ人間ならば『過去を全く反省していない、今すぐ全世界に謝罪して辞職するべき侵略主義者』と言われるであろう現実的愛国者たちであった。日本と言う国家が危機に瀕すると極々自然に頭角を現した優秀な人材が続々と各地から集結するのは、日本人の本能なのだろうか。別に日本人だけに限った話では無いだけだろうが。

「敵決戦支援艦隊の殲滅を確認。後は戦艦と水雷戦隊混合の水上打撃艦隊を殲滅すれば勝利です。総員、気を抜かない様に」

『イエスマム!』

本土の海軍庁でそんな会話がなされているとは露とも知らない駆逐艦『桜風』の艦橋では、大石艦隊本隊との海戦の最終段階へと突入していた。この会話中も普通に雨あられとばかりに砲爆撃を受けていたが『こんな物は小雨です』と言った感じで事も無げに回避し続けていた。お陰で駆逐艦『桜風』に同乗している鈴谷と摩耶は何回目かも分からなくなる位には椅子から弾き飛ばされ、床に叩きつけられていた。

『残存敵兵力は戦艦3隻、航空戦艦2隻、空母2隻、巡洋艦3隻、駆逐艦2隻の合計12隻。陣形は低速戦艦が単縦陣にて、高速水雷戦隊は同じく単縦陣にて西側から包囲する形で進撃中』

「これなら分断する必要性は有りませんね。水雷妖精、雷撃準備。面舵一杯にて敵艦隊

を中央突破し連続雷撃で撃滅します」

『いよつつつつしややあああー！！！待ってましたああああー！！！！』

『うるせえよ水雷妖精！手前今は真面目な演習中なんだからちったあ黙れよ！』

『黙ってられるかボケええええええー！！俺は苦節数週間、一月弱この魚雷を撃ちまくれる時を今か今かとだなあ！！』

「水雷妖精。静かに」

『はい』

『………』

『……何か言えよ』

『いえ、やめときます』

妖精さんと『桜風』との間でどうでも良い漫才を繰り広げている駆逐艦『桜風』艦橋内部であつたが、そんな事がなされていても『40mm4連装機銃』と『RAM』は、銃身加熱等の故障や問題を一切起こす様子も無く攻撃を続けており、お陰で先程まで空を覆いつくしていた日の丸軍旗を記した航空機は今では大分『掃除』されて綺麗な青空が見える状態である。

「……さて、相手は如何出て来ますかね」

『さて……砲撃投射数も少ないですし、何か秘策が有るのかも知れませんね』

「心当たりが有るのは、あのライブラリーにも無かった小型潜水艦位ね。……でもあんな物を、普通戦場に投入するとは思えないし……」

——「すまん、『桜風』。『桜風』の居た世界では無かつた見たいけど、あたし達の世界では実戦投入された物なんだ、その小型潜水艦こと『甲標的』……」

未知の感覚である重度の船酔いかつ全身を打ち付け続けた結果完全にグロッキー状態で言葉も発せ無くなった摩耶と鈴谷の兩名。特に演習開始直前に『桜風』の主計科妖精から提供されたキーキをお代わりした鈴谷に関しては文字通り危機的状況であった。何がと言わない。察して欲しい。

「……ごめん摩耶っち。鈴谷、離脱するね……」

「……おう」

そうしてとうとう限界が迫ってきた鈴谷は、摩耶に一言告げて艦橋から退室する。鈴谷が観戦武官の任務を放棄してどこに向かうのかと言う疑問には、彼女の名譽の為に回

答拒否させて頂こう。

「何なんだよーあの駆逐艦ー！こんなとんでもない相手だなんて聞いてないよー!!」

「口を動かしている位なら対空砲と艦載機を動かして隼鷹!!このままだと一矢すら報えないままに終わるわよー!」

「分かってる!分かってるけどさあ飛鷹!でも、でもあの4機の壁を突破出来ないんだよお!!」

——…くつ、まさか、此処まで強いとは。…恐れ入りました。駆逐艦『桜

風』…!」

平和で平常運転状態な駆逐艦『桜風』の艦橋とは違い、その『桜風』の鉄火の暴風雨を一身に受けている大石艦隊は文字通りに修羅場状態だった。空がきれいになつてきていると言う事は、大石艦隊本隊の飛鷹、隼鷹の操る艦載機が次々と撃ち落されているという事であり、それは即ち弾着観測の為の水上観測機も落とされ始めていると言う事でもある。最早『駆逐艦『桜風』への航空攻撃』等出来る状況では無く、全航空機は死ぬ気で『桜風』からの対空砲火と『A H—64 D Apache Longbow』の銃口から逃げ回っていた。尚逃げきれている訳では無い。

『R A M』から放たれるミサイルの噴射煙が空を覆い、『40 mm 4連装機銃』の銃座が煌く度に、彗星や烈風、流星が被弾炎上しジュラルミンの流れ星となつて海へと落ちていく。栄え有る『華の二水戦』の旗艦であり、太平洋戦争では敵手のアメリカ人から『太平洋戦争に置いて最も激しく戦った軍艦』と称えられ、艦娘としてこの世界に現界してからも戦場ではその勇猛さを保持している神通も、流星にこの様な『雨の様に味方機が撃ち落され、海に降り注ぐ中を強行突撃する』と言う経験は初であり、得体の知れない『桜風』の戦闘力に、知らず知らずのうちに『畏れ』の感情を心底に抱き始めていた。

「神通達の道を酸素魚雷で作らないとね。大井っち行くよー！……甲標的、どこにいったらいいか……」



「はい！北上さん！酸素魚雷！20発！発射です！！」

「全主砲、斉射！てーっ！！」

「敵艦捕捉！全砲門、開け！」

一方空から視点を移して海上では、決戦支援艦隊を砲撃と『A H—64 D Apache Longbow』の対艦ミサイルでアツサリと一蹴した『桜風』への攻撃を大石艦隊本隊は決行していた。元々航空機と共同で仕掛けて『桜風』を立体的に包囲攻撃する予定だったのだが、肝心の艦載機部隊が異常な速さで消耗して行った為、結果論的には各個撃破される形となっていた。

『艦長、敵巡洋艦から酸素魚雷の発射を確認』

『遠距離かつ射角も広い。牽制の積りだとしても早計ですね』

「取り舵45度を取りつつ全速後進で一端停止し雷撃と正対して回避、その後先頭艦の長門に対して牽制砲撃開始。射点に着き次第転舵しながら雷撃を開始」

『了解』

雷撃巡洋艦姉妹の大井と北上、通称ハイパーズの歴戦で磨き上げた勘に基づいて発射

された先制雷撃も、既にレーダーで観測した敵艦の艦体の向きとソナーで探知した魚雷疾走音、そして見張り員の報告で完全に命中ルートが割り出されている以上容易に回避された。長門と陸奥の砲撃も、射程距離の問題も有って航空攻撃を処理して居た頃から散布界のど真ん中を航行していたが、レーダーで砲弾の飛翔状況を測定して着弾点を推測し、その着弾点の中にある隙間を突破し続けたために、至近弾こそ続出していたが、それだけに終わっていた。至近弾の爆発と回避運動による衝撃で鈴谷と摩耶が死体撃ち状態だが、被害はそれだけな物である。

「くっ……せめて、せめて一撃だけでも叩き込めれば、あの回避能力も低下する筈だ……」

！

「主砲、副砲、撃てえっ！」

「主砲、よく狙って、てえーっ！」

「長門、大丈夫！作戦通りよ、もう相手は罠の中に入り込んでいるのよ！」

「罠と言うのは、恐らく味方艦の誤射を厭わぬ包囲攻撃でしょうが、ならば私たちはその罠ごと貴方達の全てを喰らい尽すだけです」

『敵艦主砲射程圏内！』

「主砲、撃ち方始め。十秒後に面舵一杯、雷撃始め」

近距離で有る為か、大石艦隊の艦娘同士の通信が混線して聞こえたが、その内容は殆ど戦局を左右する様な物でも無い物であつた為に軽く流され、予定通りに攻撃が開始された。

——目の前の光景が信じられなかつた。

「がっ……、なんの、まだまだ、この長門は戦える……！」

『戦艦長門、艦橋に砲弾20発命中、指揮不能。前部第二砲塔、ターレット破損、砲撃不能』

「なっ……判定員、冗談を言つて貰つては……」

『艦長！ぎよ、魚雷が、魚雷多数接近！数不明！無数です!!!』

「やだ魚雷?! 取り舵一杯！絶対に回避して!!」

「機関最大船速！取り舵一杯！第三砲塔、何をしているの？砲撃して!!…って、舵損傷?!」

「取り舵一杯！主砲、副砲！撃てえ！山城、回避して!!」

『だ…駄目です！命中します!!!』

滝の如く浴びせられた『桜風』の主砲弾が、大石艦隊の旗艦である戦艦長門の艦橋と艦艇前部に集中して命中。演習弾で有る為に本当に炸裂して殺傷する事は無いが、代わりにカラフルな色彩で長門が彩られて大変無惨なオブジェクトへと変貌する中、『桜風』は反航戦で長門たちのすぐ脇を突き進む傍ら、その身に搭載した『61cm7連装酸素魚雷』を連続して射出。距離としては一キロも無い距離で大量に放たれた酸素魚雷。それも大和型戦艦すらも数発で大破させられる事が可能なこの高火力魚雷を『一艦に付き最低5本以上』喰らえば、どんな艦でも一溜りも無い。特に何の因果か、唯一舵が故障を起こして碌に回避運動も取れずに直進状態となった陸奥には総数18本が命中判定を受けている。いと哀れなり。

「じ、神通さん！霧島さん！『桜風』さんが反転してこっちに向かってきます!!」

「・・・わ・・・私の計算では、こんな事になる筈は・・・」

「霧島さん！敵艦です！指示を下さい!!」

「えっ・・・げ、迎撃！全艦、一斉回頭！砲雷撃戦、開始します！」

「おうっ！島風、砲雷撃戦入ります！私には誰にも追いつけないよ!!」

「はいっ！雪風、頑張ります!!」

第二艦隊に所属する戦友が、第一艦隊の戦艦娘が悉く爆沈判定を受ける惨事にも関わらず『桜風』に対して突入を仕掛ける。『駆逐艦『桜風』の艦隊中央突破』と言う想像外の展開に呆けていた霧島も、雪風の声にて正気に戻り、戦闘を再開していた。

『艦長!』

「!!」

『了解しました！機関最大船速！敵艦にぶつけるつもりで行きます!!』

自分が、軽巡洋艦娘である神通の口が何を言ったのかも、自分にすら分からない。だが自身に染み込んだ戦い方、そして妖精さんと積み上げた戦闘経験が、霧島と似て呆然とした状態である神通の精神に関わらずに船体と兵装を、極々自然に動かしていた。

「艦隊をお守りします！主砲、撃ち方始め！当たらなくても良いです！牽制出来れば……！」

「砲撃する速さも、誰にも負けないよ！撃ち方、始めー！」

「北上さんに近付けさせはしません！酸素魚雷！今度こそ喰らいなさい！」

「妖精さん、砲撃開始してねー。あー、でもなんか嫌な予感がする……」

戦闘中で有るにも拘らず、単縦陣から一糸乱れぬ回頭にて駆逐艦『桜風』に対して舳先と砲口を向ける霧島率いる第二艦隊。本来の主敵である深海棲艦が相手であれば、これだけの一発芸をアドリブで完遂出来る様な艦娘たちには蹴散らされるのがオチであろうが、彼女たちが砲口を向けている相手は、彼女達と同じくらい、否それ以上の連携能力を發揮して、通常艦艇で編成された艦隊で唯一『桜風』を撃沈寸前まで追い込んだ天城艦隊を沈没寸前の状態から一艦残らず撃滅し返した、端的に言つて狂っている過去を持つ駆逐艦である。

【『艦長』】

【「砲撃開始」】

つい先ほど、戦艦長門を襲った『15.5 cm 75口径4連装砲』前部砲塔二基から放たれる、重巡洋艦娘が扱う『20.3 cm 連装砲』の砲弾よりも高威力を持った中口径砲弾が、一秒間に2斉射以上の連射速度で再度砲撃を開始。

『雷撃巡洋艦』北上』前部砲塔、艦橋、魚雷発射管に被弾！砲弾、魚雷に誘爆、轟沈判定！』

「くうー……。防御力は無いんだよう私」

位置関係から『桜風』に真正面から突っ込む状態となった北上が、その砲撃を艦艇全体に万遍なく被弾し、文句無しの轟沈判定を受ける。元々旧式で防御力も弱い軽巡洋艦に酸素魚雷を満載した艦艇である雷撃巡洋艦は、被弾に対して極端に弱い。こうなるのは必然であった。

「そんな、北上さん?!……北上さんを傷付けるのは、許さない、つて、こつちにも砲弾が?!」

そして愛する北上の轟沈判定に大井が完全に逆上するも、何かしらの行動に移す前に

『桜風』が撃ち込んだ砲弾が艦橋に3発直撃。その直後に前部砲塔にも15発以上の15.5cm 75口径砲弾が命中。判定員からは『艦橋被弾、指揮不能。前部砲塔崩壊、砲弾誘爆、艦首部分断裂、浸水多量。雷撃巡洋艦大井、沈没判定』との裁定が下され、大井が全力で食って掛かるも、判定は覆される事は無かった。

「主砲！敵を追尾して！撃てっ！」

「艦隊をお守りします！雪風達は負けませんっ！」

「連装砲ちゃん！まだまだ行くよー!!」

「じ・・・神通、いきます！」

明らかに自身の声の上擦っているのが分かる。だが幸いな事に、戦友にも、傍にいた妖精さんにも、『桜風』から放たれる砲撃の爆音に紛れた為に、自身の上擦った声を聴かれる事は無かった。

【『艦長』】

【「雷撃戦用意。斉射、始め」】



——「まただ。あの声が、通信に混線して聞こえるたびに、私の中の何かが、打ち震えだす……」

何時もの自分に有るまじき感覚に襲われて困惑する神通だが、戦闘は神通の事を斟酌する事無く進んでいく。因みに先程大井が再度放った渾身の酸素魚雷20発はもの見事に回避されている。と言うよりまともに回避運動を取る事も無く僅かに取り舵を切っただけで『桜風』が酸素魚雷の網の中を突っ切って回避してのけた事実には、大井は完全に打ちのめされていた。

「全艦回避して！面舵一杯、主砲！敵を追尾して！撃つ、きゃ!?」

『桜風』の雷撃しようとする行動を即座に看破した霧島が回避を命令し、自身は砲撃を続行しようとするも、その前に『桜風』から撃ち込まれた主砲弾が、戦艦霧島の艦橋ガラス部分に直撃。流石に中口径砲としては高威力を持つとはいえ、戦艦の重装甲を撃ち抜けないが、脆弱な艦橋部分ともなれば話は別だった。無論実弾では無い為、艦橋のガラス部分がカラフルに彩られただけであるが。

『戦艦霧島。艦橋大破、指揮要員全滅』

「くっ……これでは……!」

『か、かかか艦長!!!魚雷が、魚雷が来ます!!』

「数はいくつ!!?」

『……じゅ、十以上……!!』

「……ごめんなさい。神通、後はお願いな」

『艦長!こつちにも魚雷が!!?』

「おうっ?!」

霧島のその言葉を最後に、進行方向に被せる形で『桜風』の放った酸素魚雷が命中。余波の流れ魚雷で島風にも酸素魚雷が4本命中し、轟沈判定が下される。島風は、相変わらず無茶苦茶な動きで回避し続ける『桜風』への砲撃に注意を向け過ぎていた事に加えて、『桜風』が長門たちに大量の酸素魚雷を発射した為に『駆逐艦に回すだけの魚雷は残っていない筈』と言う予測によって回避運動が遅れてしまったために、起きてしまった結果だった。神通と雪風に魚雷が届かなかったのは、神通は偶然霧島が庇う様な陣形だった為、雪風は回避運動に加えて見様見真似の機銃による魚雷迎撃が奇跡的に成功した為である。実力と言うよりも、殆ど運任せで成功したような物だが。

——魚雷も次発装填済です……これからです!

理由が良く分からない、自身の震える心を叱咤激励して無理矢理奮い立たせ、霧島に託された望みを一欠けらであらうとも叶える為に、神通は修羅となる。雪風こそ生存したが、代わりに島風が敢え無く撃沈判定を受けており、その事からも神通は引き下がることは出来なかった。今が実戦では無く演習である事は、完全に頭の中から飛んでいた。

「取り舵一杯、機関最大船速！ 駆逐艦『桜風』に突撃します！！ 二水戦の戦い方、あの娘に教えます！！」

『了解！ 突貫します！！』

「雪風。分かっていますね？」

「はい！ 神通さん！！」

艦長である神通の命令に即座に反応して転舵と機関増速を開始する妖精さん達。物言わぬ艦艇時代には同じ二水戦に所属して居た為か、余り多くを言わなくても意思疎通を図れる雪風に己の意図を察しさせつつ、反転して三度目の突入を図る『桜風』に対して、残存する僅か二隻の軽巡と駆逐艦が行動を開始する。最早体面だの戦訓の洗い出し等の理屈云々の問題では無い。太平洋戦争で勇猛な艦艇として戦い抜いた魂が、『桜風』

に対して一方的に、戦闘らしい戦闘すらも出来ず、一矢報いる事も出来ずに敗北するのを拒否しているだけである。

「砲雷撃戦・・・開始します！探照灯、照射開始!!」

『はっ！探照灯、照射開始!!』

神通が探照灯を『桜風』に対して照射するが、現在時刻は日も未だ沈んでいない、夕刻とも言い辛い時間帯である。本来の使用方法とは全く違うやり方では有るが、少なくとも神通は破れかぶれになつたわけでも、何も考えていない訳では無い。

【『敵軽巡洋艦、探照灯を照射!?!』】

【「・・・何が目的？総員、警戒を怠らない様に」】

—— 良いです、そのまま私に注意を向けていて下さい・・・!

神通が狙っていたのは、自身が沈む海戦となつた coronaban ガラ島沖海戦の変形とも言えるかもしれない、自身を囷として本命である雪風の『桜風』への突撃の援護である。その本命の雪風も神通のすぐ傍で『桜風』から見れば重なる様に航行しており、視認出

来る様な陣形では無かった。仮にリーダーを『桜風』が装備していたとしても、電波を飛ばしてその反射で索敵すると言う技術的構成上、神通の影に完璧に隠れ込んでいる雪風を捕捉するのは困難で有る筈だった。一瞬でも雪風が存在を隠す、又は誤魔化すが出来れば、雪風の技量であれば『桜風』の喉元まで迫れるはず。神通の頭脳で弾き出された目算は、そうだった。

「よく・・・狙って！砲撃戦、始めて下さい!!」

号令一下、神通が装備する『20・3cm連装砲(3号砲)』が咆哮し、その内一発が『桜風』に直撃する。『桜風』の様に高度な情報処理能力や高性能コンピューターも無い、技術的にはWW2時代の日本の持つ技術で可能な程度に強化されたレベルでしか無い神通が初弾命中と言う神業を行えたのは、運もさることながら積み重ねた実戦経験によって導き出した『勘』である。人員の交代で容易に速度が乱高下する通常の艦艇とは違い、疲れを知らない妖精さんと経験を積み続けられる艦娘の組み合わせだからこそ実現可能な『奇跡』である。

『・・・駄目です！効力無しと認む！あの【壁】に弾かれています!!』

「なら【壁】が壊れるまで撃ち続けるだけです!!」

初期型電探に勝る視力を誇る見張り員妖精からまた【壁】の報告が飛び込んでくるも、既に幾度か【壁】によって大石艦隊の面々の攻撃が防がれているのを知っている神通にとつては、今更な報告であつた。一発で駄目なら二発を、二発で駄目なら三発を、それでも駄目なら撃沈できるまで撃ち込めばいい。単純明快な話である。

【『艦長』】

【「分かりました。．．．終わらせましょう」】

【『はっ!』】

そうこうしている内に、『桜風』も応射を開始。15.5cm 75口径砲弾が着弾し神通の周囲に多数の水柱が立つも、何とか思い通りに進んでいる状況に、神通は『最悪でも意地だけは見せられる』．．．と、どこか安心し始めていた。

．．．やはり、この短時間で経験した無茶苦茶な光景が、神通達の精神を知らず知らずの内に疲弊させていたのだろう。彼女の考えた作戦は『冷静に考えて作られた作戦』では無く『そうなって欲しいと言う願望』にすり替わっていたのだ。

「雪風！」

「はい！雪風は沈みません!!」

神通の合図によつて、伏兵状態だった雪風が飛び出し『桜風』へと肉薄を開始する。その直後に『桜風』の砲撃が神通の艦艇全体に命中して判定員から爆沈判定が下されるも、悔しがる妖精さん達とは違つて、神通自身は『役目を終えることが出来た』と、少しばかりほつとしていた。

「沈むわけにはいきませんっ！」

「……もう、終わりですよ」

その通信が神通の耳に届いた直後、判定員からの『駆逐艦雪風、魚雷6本命中。轟沈判定』と言う通信が流された。

「……あ、あは、あはははは……」

白目を剥いて絶句する周囲の妖精さんを他所に、神通は思わず笑いだす。ここまで良い様に『桜風』に手玉に取られた末に盛大に敗北してしまうと、恥等と言った感情も湧

き出て来ず、最早笑い出す位の事しか出来ない。

「・・・これが、これが、異世界の戦争、ですか」

見た目一切被弾した痕跡も見られない『桜風』の艦影を見ながら神通は、自身の経験した戦争の記憶と照らし合わせ、そう呟いていた。

『今回の演習はお味方大勝利、と言う事になりますね』

「副長、それ本気で言ってる？」

『いえ全く』

「私も同感。・・・まさか此処までとは、ね」

一方見た目完全勝利で演習を終えた駆逐艦『桜風』だったが、艦内の雰囲気はお祝いムードなど欠片も無かった。

『二回敵旗艦を連続的に撃沈させたと言うのに、すぐさま指揮系統を回復させて戦闘継



続するとは予想外でした」

「『前の世界』では考えられなかった事だね。それに、今の大石艦隊は相当貧弱な電子機器しか装備していない筈なのに、相手方は普通に至近弾どころか命中弾も出して来た」

『今の私達は何処かコンピュータの処理能力に依存している部分が有りますからね。まあ、別にCPUが唐突に全滅しても砲雷撃戦は可能ですが』

「・・・艦艇の装備だけで、皆の戦力値を相当低く評価し過ぎていたかも知れないね。私達の兵装を使わない限り超兵器の撃沈は出来ないと言う判断は変わらないけど」

駆逐艦『桜風』が元々存在していた世界では、超兵器機関の影響からか技術進化が異常なレベルで発達した為、僅か一年程度の期間で多数の海上戦力を投入する必要があるたウイルクア帝国は『艦隊の徹底的無人化』と言う手段で戦力を揃えていた。ウイルクアの人口自体が少ない上に、技術者集団である海兵の新規錬成には最低でも一年以上の時間が必要となる為、『人』と『時間』を節約するにはこうするしか無かったのだ。だからと言って一個艦隊に必要な人数を僅か20名程度に抑えたせいで、艦隊の指揮を行う旗艦が撃沈された場合、指揮系統の委譲に人入りの時よりも遥かに時間がかかって艦隊全体の攻撃能力が一時消失すると言うのは流石にやり過ぎであっただろうが。

その事を問題視した天城大佐率いる天城艦隊は、省力化こそ進めるも各艦から人員をゼロにする事に関してだけは徹底的に避けた。その選択の正しさは、『桜風』と交戦した通常艦隊の中で唯一『桜風』を沈没寸前にまで追い込めたのは天城艦隊だけだった……と言ふ事実が証明している。

「……これが、異世界の戦争、ですか」

『……あのー艦長。感慨深い状況の所申し訳ありませんが、宜しいでしょうか?』

「どうしたの?」

『あの、摩耶さんがついさつきから……』

「え?」

そして妖精さんの声でようやく摩耶の方を顧みた『桜風』。その『桜風』が見た光景とは……

「……沈む、かあ……ちよろい、人生、だった……なあ……」

「摩耶さん!?!ちよ、ちよつと摩耶さん一体どうしたんですか?!え、えええ衛生兵!衛生兵お願いしますー!!!摩耶さん!摩耶さん!摩耶さん!しっかりして下さい!……返事をして下さいーい

!!  
」

何時もの元気な姿はどこへやら、青や白を通り越して土気色の顔色と何かが抜け落ちかけている状態の摩耶が、うつ伏せのままうわごとを呟いている姿だった。

「……あ、やっと終わったんだ。摩耶うちには悪いことしたなあ、後で間宮連れていこ」  
艦橋で『桜風』が荒ぶっている中、その頃の鈴谷は某所から艦橋へと帰投している最中だった。そのまま棺桶にいれてもパツと見違和感が無さそうな顔色の摩耶とは違い、鈴谷の表情はそれなりに血色が戻りつつあった。

「……ん？」

そんな中、鈴谷は偶然とある一室の前で止まり、その部屋のネームプレートを確認する。そこには『駆逐艦『桜風』艦長室』と言う名が刻まれていた。

「……入っちゃダメだろうけど……」

自身の良心が常識的に咎めるも、自然と自身の手は艦長室の扉に手をかけ、一瞬動きが止まった末に開かれた。

「……うわぁ……すつごーい……」

そうして艦長室に入った鈴谷の眼に飛び込んできたのは、部屋中を埋め尽くす、ケースに大事に保管されている大量の勲章。アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、日本等各国海軍から受勲したと分かるペナント。そして駆逐艦『桜風』の八面六臂の大活躍が乗った各国の新聞の切り抜き。鈴谷の所属していた大日本帝国海軍には、艦艇に対して勲章を授与する習慣は無かったが、太平洋戦争の敵手であったアメリカ海軍にはそう言った慣習が有る事は、鈴谷は偶然ネットで知って居た為に『そういう物なんだ』と納得出来た為に、そこまでおかしいと思う事は無かった。

「・・・何ていうか、本当に『桜風』って別世界の駆逐艦だよなー」

圧迫感を感じてしまうほどに壁一面に埋め尽くされた勲章やペナントを見て、思わずそう呟く鈴谷。何を今更と言う話では有るが、こうして自分達の世界に存在していた艦艇とは全く違う事を改めて突き付けられて仕舞うと、そうも言いたくなる物である。

「・・・んじゃもう戻らないと・・・お?」

唐突に自身が不法侵入しているような物である事を思い出した鈴谷は退室しようとするも、扉に振り返る際に偶然視界の端にとある物が映ってしまう。

「・・・航海日誌?」

机の上に置かれた、黒地に糸で綴じられている、何処にでも有りそうな日誌。一瞬逡巡するも、またもや好奇心に負けてしまった鈴谷はその『航海日誌』に手を伸ばし：

「・・・なに、これ・・・」

己の不用意な行動を後悔した。

「摩耶さん……大丈夫かなあ……」

『医務室に早急に叩き込みましたので、まあ後は時間が解決してくれるでしょう』

『取り敢えずエチケツト袋は使用されなかったのは不幸中の幸いだったのかさうでなかつたのか』

『……残念だ。転売したらきつといい値段が付いただろうに』

「ボソツと小声で馬鹿なこと言ってる妖精さん。地引網の重りとして海底を引き摺られたくないなら黙りなさい」

『はい』

『……そもそも誰も買う奴いる訳無いだろうに』

幾つかの妖精さんを肩や頭に乗せて、艦内の廊下を歩く艦長の『桜風』。摩耶が文字通り川を超える五歩手前だったのを医務室に即座に連行して休ませる事で何とか事なきを得た後、演習途中で艦橋から離れた鈴谷を迎えに来ていた。

「あ、いたいた。鈴谷さーん」

「ひゃひい?!」

丁度艦長室の前に居た鈴谷に対して『桜風』が声をかけ、後ろから声を掛けられた為か奇声を発して文字通り飛び上がった鈴谷。鈴谷の妙な反応に驚きつつも、『桜風』は再度声を掛ける。

「す．．．鈴谷さん？ 一体如何したんですか？」

「な、なななな何でもないよー鈴谷さんちよつと後ろから声かけられてびっくりしただけだしびびビビツて何か全然無いし?!」

『いや幾ら何でも動揺し過ぎや有りません?』

「ソナコトナイヨそんな事無いよー

ホント本当だダヨよースズヤウソツカナイヨ鈴谷、つかないよー

鈴谷動揺してないよー  
スズヤドウヨウシテナイヨ

「．．．えつと、取り敢えず大石提督や深山提督からの総評があると言う話なので、鈴谷さんも艦橋に来てくれませんか?」

「あ、うん分かったよー．．．あれ、摩耶っちはどうしたの?」

「．．．えつと、今は．．．医務室に．．．」

「あ、うん。大体分かった」

鈴谷の変な反応は兎も角として、つい先ほどの摩耶よりも血色の良い鈴谷の姿に安心した『桜風』は『じゃあ行きましようか』と言いながら踵を返す。

「あ、御免『桜風』。ちよつと良い？」

「え？何ですか？」

「あの艦長室には……『桜風』は入った事有る？」

「あー……。ちよつと今まで入った事は無いですね。色々有りましたし、何でか艦橋に居る方が落ち着きますので。仮眠室や給湯室も併設されていますしね」

「そ……。そうなんだーへー。ソレなら良いんだー」

「……。変な鈴谷さん」

言動がやけに妙な鈴谷に対してそう漏らす『桜風』であったが、何故かその時はそれ以上の疑問となる事は無く、数時間もすればその違和感も疑問も勝手に消えて行つていった。



・・・アレはただの間違いだね・・・きつとそうだね。うん、きつとそう！鈴谷が勝手に変な想像しているだけだもんね！つて言うか、『桜風』に無断で艦長室入りちやつた事どう言おう・・・

身体に乗せた妖精さんと語らう『桜風』の背を追いながら、鈴谷は兎に角先程艦長室で見たあの光景を記憶から消去しようとしていた。『桜風』に無断侵入した事に関する引け目も有るが、あんな物の存在を『桜風』に伝えるべきか等、今の鈴谷には判断が付くはずが無かった。

——同じ年月日から始まり、全く異なる日付と終わり方が書かれた4冊の航海日誌

の  
事  
を。

## 第二八話 日本国海軍庁山本蒼一の憂鬱と駆逐艦『桜風』が沈んだ日

水無月こと六月の上旬も過ぎ、日本全土が梅雨入りして久しい今日この頃。深海棲艦が太平洋や大西洋、インド洋と言った大洋を支配する前には世界各地で日常茶飯事であった気温の乱高下や季節外れの降雪や真夏日に渇水その他諸々は何処へやら、現在ではそう言った天候は文字通りの『常とは異なる気象』へと、ある意味本当の有るべき形へと原点回帰している状況であった。そんなある日、梅雨特有の一日中続く長雨が日本列島の街中に降り注ぐ中で、スーツ姿の男達が首相官邸の会議室に詰めていた。

「さて、今回諸君に集まつて貰つたのは他でも無い。前回の硫黄島沖大演習の結果発生した諸外国や国民の反応、そして現段階で収集出来た超兵器に関する情報を報告して貰い、それらの諸問題に対して対策を練る為だ。どんな情報でも構わないし、この場に居る全員の忌憚の無い意見が出される事を期待する」

司会役には現在の日本国内閣総理大臣の職務を務めている『浅野幸喜』が執り行う今

回の会議には、各国务大臣に加えて海軍庁長官の山本蒼一に自衛三軍や防諜等の為に軍と関わる事の多い国家公安委員会だけでなく、外務省等の関係部署から来た役人、国内治安維持に日夜奮闘している警視庁の代表として幹部、変わり種としては実動戦力が少なくなりつつも今なお日本国に駐留している在日米軍からの人間も出席していた。色々と異例かつ前例の無い出席者の所属組織であるが、此処でその様な事を指摘して時間を潰す様な暇人は流石にいなかった。

「では先ず外務省からですが……。駆逐艦『桜風』と超兵器の情報や映像を公開した結果、大よその国家の反応が以前の会議で発表した予測通りでした」

「東アジアや東南アジアは特定の数か国を除き日本支持を継続し、その数か国も現在では表立った批判は超兵器の存在も有り停止中。欧州は英仏と独間での関係悪化と対日援軍要請の継続、アメリカは日本艦娘の増援要請の更なる強化……。つまりはこれまでもよりもマシになった所が有るも大体は今まで言う事だな」

「はい……。結局はそうになりました。日本が強大な戦力を保持する可能性があると言うのに、思っていたよりも大半の諸外国の政府は批判では無く賛同されておりました」

「それだけ日本が信用、信頼されていると言う事なのだろうが、かといってこれに胡坐をかいてはならない。難しい難題だらけと思うが、外務省の各職員にはこれからも宜しく

頼む」

ある意味一番の難題とも言える諸外国との関係悪化だが、思いの外すなりとクリア出来た事にホッとして居た者が多かった。確かに『始まりの艦娘』がこの世界に出現して以降、どういう訳か本来存在して居なかつた筈の場所・日本で言えば沖ノ鳥島や沖大東島、南鳥島に油田や鉄、金銀銅にレアメタルと言つた地下資源が多量に産出され始め、ある程度の資源は自活で賄えているが、日本全てを活かすには湧いて出て来た資源では未だ不足しているのです、外国からの輸入は今でも必要だつた。それに、無資源国かつ富裕国でもある日本だからこそ切れる『資源輸入』と言う外国へのカードを捨てるのももつたいたないと言う理由も有るが。深海棲艦でシーレーンを潰されている現状、律儀に資源国へ艦娘の護衛付きタンカー等を派遣して大量に輸入する様な国は、今では日本ぐらいな物なのだから。

・・・まあ『表向き』はそうだろうが、本当の所は『いい加減黙らないと本当に引き上げるぞ』と遠回しに脅したのだらうな、外務省は。艦娘を二週間あの海域から引き上げさせたのは「本気である」と信じ込ませる為のブラフだろうに

すまし顔で報告する外務大臣の顔を見ながら、誰にも悟られない様に頭の中でそう考える山本長官。実際の所、深海棲艦に対して特攻効果のある唯一の兵器である艦娘を多数所有している日本の腕力と影響力は、当たり前であるが深海棲艦が出現する前よりも遥かに強化されていた。この最新兵器でも歯の立たない化物が跋扈する戦乱の世の中で『艦娘』と言う強大な武力が存在する事は、国家生存に加えて自国の都合を押し通す為には極めて有意義である。話し合いで全て解決できると頭から信じ込み、宗教の様に『反軍』『反政府』『平和主義』を唱える人間は絶対に認めないであろうが。

「それで．．．欧米の艦娘事情の方はどうなっていますか？やはり．．．『あの時』から変わっていませんか？」

そしてつい先ほどまで脳内で考えていた事をおくびにも出さずに、山本長官は報告している外務大臣へと問いかける。問われた外務大臣は多少は驚くも、問われた内容を理解するとすまし顔から一転して苦笑いしながら報告を開始した。

「欧州の艦娘事情ですが．．．やはり深海棲艦の直接的脅威を受けている英仏伊は独艦娘の保護と戦力化に積極的ですが、肝心の独は『キールの悲劇』から変わららず反ナチス法を旗印にドイツ人提督やドイツ艦娘を例外無く逮捕、拘禁し艦娘の解体を続行する意

向を翻していません。その為ドイツ人提督と艦娘の仏英伊への亡命が続発し、引き渡しを要求するドイツとそれを拒否するフランス、イタリア、イギリスとの間で一触即発しかねない状況です」

会議室が沈黙に覆われる。日本に『始まりの艦娘』が現れてから時間にして大よそ一か月後、第二次世界大戦に参戦した列強交戦国の内、有力な海軍艦艇を揃えていた英米仏独伊にもそれぞれ艦娘が現れていた。深海棲艦による本土への攻撃を受けた英米仏は諸手を挙げて歓迎し、一応本土攻撃を受けていないイタリアでも『ワルキューレの再来』と美人だらけで可愛らしい艦娘をイタリア全土を挙げて歓迎するムード一色だったのだが、唯一ドイツのみは『反ナチス法』に基づいて『ナチスドイツの軍艦』であるドイツ艦娘とその指揮官役であるドイツ人提督を問答無用で逮捕する選択をした。

不幸にも提督個人の指揮で出撃からキール軍港に帰投直後に捕縛された不運な数隻と数名のドイツ艦娘やドイツ人提督は必至の説明も弁解も行うが政府には一切聞き入られず留置所に叩きこまれ、当時艦娘の事など一番初めに艦娘と接触した日本ですら殆ど分かっていたいなかった時代、ドイツ政府はドイツ艦娘の艦艇（身体）を一般的工法で解体した為に、人で言えば生きたまま四肢、内臓、筋肉、神経全てを解体される生き地獄を、艦娘特有の痛みへの頑丈さの為に皮肉にも狂う事も出来ずに味わい続けた末に、この世から消

滅。この『キールの悲劇』を知った、幸運にもドイツ官憲に見つかつていなかったドイツ人提督と艦娘は、当然ながら例外無くドイツから亡命。この亡命したドイツ人提督や艦娘は、W W 2の経緯からか質こそ良好だがフランス人提督と艦娘の根本的な数が足りないフランスが主な受け入れ先となった。しこりが無い訳では無いが、ドイツ艦娘の惨状と危急を要する戦況が、その様な贅沢を言う暇を与えなかった。

「イギリスとフランスが楯となつて北海への深海棲艦の侵攻を防いでいる状況だと言うのに、ドイツは一体何を考えているんでしょうかねえ・・・」

「・・・『反ナチス法』がいわゆる「不磨の大典」と化して自己中毒を起している現状、こうなるのは避けられなかつたかと。今のドイツは『反ナチス法』の改正や、ドイツ艦娘の支持等を少しでも匂わしたら反ナチス法違反容疑で即逮捕される大変な状況です」  
「・・・もう80年近い昔の事だと言うのにな・・・未だドイツは『あの時』に縛り付けられたままなのか・・・」

「・・・『ドイツは』では無く『ドイツも』ですよ、大臣。我が国も、未だに『80年近い昔』に縛られている人間が、たくさんいますよ・・・」



「少々よろしいでしょうか」

会議室に微妙な沈黙が流れる中、この会議室で唯一のアメリカ人である在日米軍司令官『リアム・バトラー』が流暢な日本語で、発言を求める。因みに在日米軍の現在の状況だが、本国に帰還しようにも既に深海棲艦によって太平洋は分断されており、深海棲艦相手では殆ど日米同盟が機能していない状況下の為現在の在日米軍の発言力は相当低い。だがそんな状況でも自分たちを尊重して物資供給等を行ってくれている日本政府や自衛軍には感謝するしか無い状態の為、在日米軍は極めて日本に対して協力的である。

「本国からの情報ですが、気になる情報が入ってきました。・・・カリブ海にて深海棲艦とは全く違う戦闘艦が出現。当時カリブ海を航行していたアメリカ艦娘やアメリカ海軍が護衛する輸送船団が複数攻撃を受け、多数が轟沈若しくは大破したとの事です」

「全く違う・・・戦闘艦、ですか？艦種に関する情報は？」

「夜間戦闘の為不明確ですが、ソナーに反応が有ったとの事なので恐らく潜水艦、それも戦艦砲を搭載した艦艇との事です」

「・・・俄かには信じがたい話ですね。潜水艦と戦艦の混合編成の敵艦隊だったのでは？」

「それならばリーダーにも反応が有る筈です。．．．そして、その不明艦と戦闘した船団は例外無く解析不能なノイズを観測したとの事です」

そう結んだ『リアム・バトラー』の言葉を聞いて、一斉に複数の両眼が山本蒼一の元に向けられ、向けられた本人は苦い表情で目頭を押さえるしか無かった。解析不能なノイズ．．．それは、駆逐艦『桜風』が証言し、また超兵器『ヴィルベルヴィント』によつても証明されている『超兵器の存在』だった。

南北アメリカ大陸を一手に防護するアメリカ海軍所属艦娘は、隻数で言えば日本に次いで二番目に艦娘が存在しているが、第二次世界大戦に無数に艦艇を量産したせいか建造しても現れるのは大半が『カサブランカ級護送空母』『インディペンデンス級軽空母』『フレッチャー級駆逐艦』等であり、有名な『アイオワ級戦艦』『エセックス級空母』『ヨークタウン級空母』『サウスダコタ級戦艦』『ボルチモア級重巡洋艦』等が建造確認されたのは極僅かだった。その為広大な防衛領域の大部分を軽量級艦娘主体の編成で回さざる負えず、必然的にアメリカ艦娘の連度は『逃走、生存能力』に関してはある意味日本の艦娘を超えていた。敵を沈められなくとも、どれだけスタボロになろうとも、生還さえ出来ればそれでよし。そこまで割り切っていた。

『生き残る』能力、そして艦種の構成上対潜戦闘に關しては全世界トップランクのアメリカ艦娘が多数一戦で轟沈したと言う事は、確実に相手は艦娘の対深海棲艦への特攻防衛を貫通出来る能力を持ち、尚且つ逃走させる間も無く撃滅可能な速力や火力を保持している。そんな事が可能な化物は、超兵器しか存在しない。

「・・・現状、深山提督所属の艦娘を選抜して訓練に当たっていますが、駆逐艦『桜風』が開発した高ランク兵装には未だに振り回されている状態であり、ランクの低い兵装を開発しつつ少しずつ習熟度を上げて言っている段階だとの報告が入っています」

「現在本国からの情報によれば、その不明艦・・・仮称『超兵器 ドレットノート』ですが、現在までに艦隊が被害を受けた地点、状況を解析すると、欧州には向かわず大西洋を南下しているようです」

「我が国にとつては悲報だが、欧州にとつては朗報だな。・・・恐らく、報告に合った様に、その超兵器の本国が有ったと言うウラジオストクに向かっているのだろうか。対策は有るのかね、山本長官」

「訓練を重ねて速度を高めつつ、最悪の場合は『桜風』本人に交戦して頂くより他は有りません」

首相からの問いに勤めて無表情で答える山本長官。正直山本長官含めて日本政府としては異世界の艦娘に頼らずとも自らの危機は自らで何とかしたいのだが、そんなプライドで日本に対して無意味な損害を与える訳には行かない。感情に振り回されずに理屈に基づき日本を守る為に動く彼らは、銃を持たないも立派な戦士たちだった。

——会議はまだまだ続いて行く。日本を守る為に、自らに与えられた職務を果たす為に。

「……うあ……?」

—— 駆逐艦『桜風』が目覚めた時、その視界に入ってきたのは白い天井とカーテンに覆われた周囲の映像だった。

「……あれ……私……なんで……医務室に……?」

グワングワン揺れ動く視界と胃袋の異様な違和感。そしてつい先ほどまで何をしていたのか思い出せない自分。

「はわわっ、『桜風』さん!? 起きちゃって大丈夫なのです!? し、司令官さん呼んできますね! 司令官さん! お姉ちゃん! 『桜風』さんが、『桜風』さんが!! はわ!? なんてこんなところに雑巾が!? み、深雪ちゃんそこ危ないのですー!!?」

ベッドの脇で座っていたらしい電が大慌てで医務室を風の如く走り去って行った直後にどんがらがっしやん、と医務室にまで聞こえる転倒音を聞きながら、駆逐艦『桜風』は『なんでここにいるんだろう』と言う思考を、何時に無く回らない己の頭で考え  
ていた。

「ひえー……ひえー……ひええええー……」

「くっ……この磯風……こんなところで、航行不能になるわけにはいかない……」  
「磯風は良い加減反省しなさい。……『桜風』、本当に大丈夫？自分の事、思い出せる？」  
「はい、もう大丈夫です。深山提督」

駆逐艦娘の電が医務室から出て行つてから大体20分後。ベットで長座位となつて  
いる『桜風』の目の前には、比叡と磯風が、それぞれの保護者的存在である金剛と陽炎  
の監視のもと硬いコンクリート製の床の上で正座をさせられていた。尚『桜風』の両隣  
のベットには駆逐艦娘の深雪と電が横になっているが、この話は横に置いて置く事とす  
る。

「……じゃあ、悪いけど事情聴取させてね？思い出せる事だけで良いから。青葉は書記  
をお願い」

「分かりましたー！」

そうして駆逐艦『桜風』は語りだす。少し前の自分に何が起こったのかを。

「……えつとですね、あの時は確かヒトゴーマルマルで、調理室で……」

「……する事が無いなあ……」

『あの時』こと15時00分。その時『桜風』は、特に与えられた仕事も無く、また演習の予定も無く、そして友人関係にある陽炎や不知火、瑞鶴や青葉たちはそれぞれ出撃やら演習やらで艦娘宿舎に居ない為に、暇を持て余していた。普通の艦娘ならば外出許可を取って街に行く事も可能なのだが、『桜風』はその存在が特殊で有る為に今なお外出については認められていなかった。現在他の艦娘の護衛付きならば街に行ける様に深山提督と関係者たちが調整中である。

「……あれ、『桜風』ちゃん?どうしたの、こんなところで」

「あ、比叡さん。……いえ、特にやる事が無いので歩いていただけです」

そうして艦娘宿舎内を適当に散策していた『桜風』は、調理室の前にて比叡に呼び止められる。エプロンと調理用の帽子をかぶっているその姿は、いかにも様になってい

た。

「そう・・・なら、もし良かったら私の新作カレーの試食をしてくれませんか？」

「・・・えっと、良いんですか？比叡さん。その、新作カレーの試食役が私で」

「はい！『桜風』さんの舌に見合うのならば、きっと他の皆にも自信を持つてお出しできます！」

そう言われて断れる『桜風』では無く、言われるがままに、招かれるがままに調理室へと入る『桜風』。調理室は間宮や鳳翔の様な調理関係の仕事をする艦娘だけでは無く、誰にでも開かれているオープンな場所である。ただ、基本的に食材は艦娘個人が持ち込むか、大淀に理由を申請して供給して貰うと言うのが普通である。

「・・・いい香りですね。見た目も美味しそうです」

「はい！その点はもうバッチリです！」

椅子に座って新作カレーを目にした『桜風』の言葉に対して、そう言つて胸を張る比叡。『桜風』が暇な時間で漁った書物の知識から、戦艦比叡は御召艦だったと言う事、そ



して艦娘の性質は艦艇時代の経験が反映されている事が多いと言う事例を中途半端ながらに知って居る為、『桜風』は『きつとこのカレーも美味しいのだろう』と当たりを付け、躊躇無くこの比叡新作カレーを口に放り込んだ。

「つーーー?!」

「ひええ!?ど、どうしましたか『桜風』ちゃん!」

そしてカレーを一口食べて二秒後に突然口を押えて両足をバタつかせる『桜風』。比叡がいきなりの『桜風』の奇行に慌てまくるも、水を飲んで少しすると『桜風』の奇行は止まり、数回深呼吸をしてから比叡に対して口を開いた。

「比叡さん・・・これ、大分辛いです」

「ひええー!?そ、そんな筈は・・・すつごく、すつごく甘く仕上げたはずなのに・・・」  
「・・・あ、はい。何となく分かりました」

他鎮守府では『料理の天災』だの『ナチュラルバイオウエポンメーカー』やら『悪飯艦』だの酷い渾名が着いている事が多い金剛型戦艦二番艦の比叡だが、この深山艦隊に

所属する比叡は希少種乃至絶滅危惧種扱いを受けているメシウマ型比叡だった。・：苦味やうま味等その他の感覚は至って正常だと言うのに、何故か辛さの感覚だけは虚数空間の彼方に光速でカットピング状態である事を除けば、だが。

「あ、でも私だとちよつと辛すぎますけど、もつと大人の人ならこのままでも美味しく食べてくれる人は居ると思いますよ」

「・・・本当ですか、『桜風』ちゃん？」

「はい。・・・この辛さに慣れたら、結構癖になりそうな美味しさが有りますし。こう、具材とカレールの美味しさが良い感じにマッチしています」

「・・・よっし！ではこの比叡！これからも！頑張つて！改良していきます!!」

そう言つて両手に握り拳を作り、気合を入れる戦艦娘の比叡。姉の金剛が大好きで、精力的な努力家で有り、何時いかなる時でも変わらぬ元氣つ子であるこの少女の真つ直ぐな表現に、知らず知らずのうちに微笑ましい表情を浮かべていた『桜風』だった。

「・・・なんだ、比叡さんに『桜風』か」

「ひえっ」

「磯風？」

そんな温かい雰囲気にも包まれた調理室に来たのは陽炎型駆逐艦の12番艦である磯風。比叡が凄まじい形相で固まっているのを疑問に思いながらも、『桜風』は磯風に話しかける。

「一体どうしたの？調理室に来て」

「何、ちよつとこの磯風も杏仁豆腐と言うデザートを作つて冷やしておいたのだ。『桜風』も食べてみるか？」

「杏仁豆腐・・・知らない料理ですね・・・。良いんですか？」

「ああ、もちろんだ」

「ひえー?!」

——さつきから比叡さん、なんでそんな反応しているんだろう・・・？

ひえーひえーしか言わなくなっている比叡の事を尻目に、磯風は嬉々として冷蔵庫の中から彼女が作った『杏仁豆腐』を取り出し、スプーンと共に『桜風』の前に供した。

「これが・・・杏仁豆腐・・・？」

「ああ、そうだ」

「・・・羊羹見たいな見た目だね」

「ちよつとこの磯風が普通の杏仁豆腐を改良したんだ」

「ひえええー??！」

——違います！『桜風』ちゃんそれは杏仁豆腐では有りません!!磯風今度は何を混ぜたんですか!!?

良く調理室を利用する兩人の為、比叡は磯風の料理の技量を知っていた。彼女の料理方法を一言でいえば『ケミカルクッキングマイスターIISOKAZE』。いわゆる『メシマズ』のお手本の様な存在である。尚その為矯正を幾度も試みられるも磯風単独での場合では料理技能は全く好転せず、結局料理する時は誰かほかの艦娘と調理する事を言われているが、それでも時々人目を盗んで磯風単独で調理しているのだ。

「さ、『桜風』ちゃん食べちゃダメです!!」

「なんだ、比叡さんも食べたいのならそう言ってくればいいのに。ほら」

「モグア!!」

その為磯風製料理風のナニカを『桜風』が食べない様にさせようとすると、変な思考の飛び方をした磯風によって自作の『杏仁豆腐』を口に突っ込まれ・・・衝撃で昏倒した。辛味の味覚以外は一流調理人並に優れていたが為に、理解不能な味が脳処理の限界を超えるまで理解出来てしまったのだ。

「ひ、比叡さん?!」

「はっはっは。まさかそこまで美味しかったとまでは思っていなかったぞ。さあ『桜風』。『桜風』もこの杏仁豆腐を食べてくれ」

「え・・・えつと・・・」

比叡がぶつ倒れていると言うのに何事も無かったかの如く自身の杏仁豆腐を進める磯風。そのキラキラした目で進められている上に一切比叡を心配している様子の無い姿に・・・

「・・・わつ・・・分かった・・・。い・・・頂きます」

『桜風』は、後々まで後悔する最悪の選択をしてしまった。

「．．．ひえっ．．．!」

磯風製杏仁豆腐bio-weaponを食べて、味覚から伝わる脳髓へと叩き込む衝撃の余り気絶してしまつた比叡。開眼して数秒はボーつとしてしまつた末に、『桜風』の事を思い出して飛び跳ねた比叡が目にしたものは。

「．．．ごっ．．．ごち．．．そう．．．さま、でした」

「うむ、確かこういう時には．．．お粗末様、だつたな」

磯風謹製杏仁豆腐を、あろう事か完食する事に成功した『桜風』の姿だつた。目に涙を貯め込み、嘔気を抑え込み、身体がかすかに震えている様子を見るからにお世辞にも大丈夫そうには見えないが。

「．．．ああ．．．比叡さん．．．『桜風』．．．頑張り．．．ましたあ．．．頭に．．．  
ガーンつて．．．ガーンつて、何度も．．．来ました、けど．．．」



「・・・私が覚えているのは、此処までです」

「なるほど、良く分かったわ。磯風」

「な・・・何だ、司令」

「貴女、これからは調理室に入る時は何時如何なる時であろうとも私の許可を直接取つてからね。勿論、書類を提出してから」

「な・・・」

「言い訳や弁解は一切聞きません、以上。後は陽炎に説教されてきなさい」

今回の【駆逐艦『桜風』轟沈事件】の主犯で有った磯風の判決が下った後、長女陽炎に引きずられていくのを見つつ、深山提督は『桜風』に再度問いかける。因みに比叡に關しては今回は無罪判決である。



「……今海軍庁から話が来たんだけど、カリブ海で潜水艦型の超兵器と思われる存在を  
確認したわ」

「つ、超兵器……ですか」

「ええ。でも今の所、その超兵器は大西洋を南下している段階だから、こつちに来るまで  
には大分時間が有ると思うわ」

「じゃあ早く開発や訓練を、うぐう?!……お、お腹、が……」

「……今のあなたの任務は『身体を休める事』よ。焦る気持ちも分かるけど、今は我慢  
してね」

「……はい」

そう言つて素直に横になる『桜風』。最後に『もし脱走したら鳳翔に説教させるよ』と  
ぶつとい釘を突き刺しつつ、深山提督は医務室から退室する。

「……はあ。……ある意味では平和、ね。……磯風の、料理になると無茶苦茶な思  
考発展させるあのおかしい癖、どうにかならないかしら。料理以外だとすつごくマトモ  
なのに」

そう言いながら思考をめぐらす深山提督。だが思いつく限りの矯正法を試すも磯風のとんでもない料理改造癖は全く修正されない為、現状磯風に料理させないと言う対処法しか方法は無かった。この磯風の料理下手が少しだけ修正されるのは、大分後に艦隊に浦風と浜風が加入してからになるのだが、その事は深山提督を含む深山艦隊の全員は知る由も無かった。

## 第二九話 深山艦隊のとある一日『午前中のお話』

「…………ふあ……………うーん…朝…………」

マルロクマルマル、つまりは午前六時の朝方。自身の正確な体内時計に基づき離床した黒髪の少女・・・駆逐艦娘『桜風』は、布団から起き上がって軽く背伸びした後、手早く寝具の片付けに移る。今『桜風』が泊まっている部屋は陽炎と不知火が入居している部屋である。硫黄島沖演習後によく『桜風』の入居部屋が決定したのだ。因みに最終段階まで陽炎と不知火の部屋と青葉たち第6戦隊の部屋とのどちらに入るかで纏れ込んでいた。

「おはようございます、『桜風』」

「あー、『桜風』ー。おはよー」

「二人ともおはよー」

『桜風』が起きる少し前に既に起きていた陽炎型の長女と次女。艦娘を統括する海軍庁隷下の、主に軍事作戦等を担当している筈の軍司令部の策動により魔改造されたこの

深山艦隊が使用する元公立学校の艦娘宿舎は、人類と艦娘の共存のテストケースやら情報収集やらと様々な名目を付けていた事も有り、元は極々普通の教室であった筈なのに今では各部屋には必ず洗面所やトイレ、居間風の空間に大型テレビやテーブルが据えられ、その他の設備も設置されている。ホテルと言うよりかは旅館の一室に近いかもしれない。

「今日は珍しく遅めに起きましたね」

「やっぱりつらかった？昨日の神通さんと那智さんの教練」

「あはは………うん、正直に言えば、体力よりも、精神的に」

そんな話をしながら、『桜風』は寝間着から普段着でもある制服に着替え始める。成長途上の青い果実とも言うべきかもしれない瑞々しい三人の肌の内、『桜風』だけには相変わらず無数の傷痕が刻まれている。何回も艦娘用の高速修復材に浸かったり、人間の医者に診察して貰ったりしたのだが、結局このままだった。

「…不知火」

「了解です、陽炎姉さん」

「うっ……え、ちよ、ちよつと!」

『桜風』の返答を聞いた陽炎型の長女と次女、阿吽の呼吸にて不知火は『桜風』を確保し、陽炎は『桜風』の両足をまじまじと確認し始める。三人とも綺麗な美少女だから良い物の、役者が変われば確実に犯罪臭しかない絵面である。

「…うん、確かに足は治ってるね」

「昨日、ちゃんと明日には治るって言ったよね…?」

『桜風』の言葉は信用出来ませんので。特に無茶しかない『桜風』自身の身体のことなれば」

「ううー…」

何故こんなことをしたのかと言えば、昨日駆逐艦娘『桜風』は『通常艦娘との船団護衛共同戦闘訓練』を行い、その際他艦娘と速度を併せる為に『機関の出力を強引に抑え込んで速度低下させ、僚艦と共に行軍する』と言う無茶を行い、その結果最終的に訓練こそ終えられたもののボイラーが一基熱暴走にて部分的に熔解し、二基が通常の艦船ならオーバーホール必至になるまで疲弊すると言う重大故を引き起こしていたのだ。船団護衛の為に艦隊陣形を乱す事無く僚艦と同じく10ノットを出す必要があったし、そ

れに神通や那智から聞いた通常の艦娘や艦船が行うボイラーの圧力調整を『桜風』なりの解釈で行った結果の事故だった。当然艦娘の身体にもそれは反映され、本人は平然としていたが鎮守府に帰ってきた『桜風』の両足には焼け焦げた跡が有った。当然、『桜風』は工廠にて説教を受けている。

「ああいう艦隊行動は一度もやった事無いから、私なりに頑張ったんだけど……」

「だからと言ってあんな『頑張り』をされたら困ります」

「次に何か思いついたことをやる時は、必ず誰か年長者と相談する事！じゃないと皆で困ってお説教よ、良いわね？」

「ひいん」

そんな話を交わしながら、三隻の駆逐艦娘は着替えを終え、食堂へと向かう。この三隻、特に『桜風』は化粧などには手出ししないタイプで有る為、女性としては結構早く行動に移れるのだ。まあ普通にお洒落を楽しむときも有る陽炎やそれに引きずられる不知火とは違い、『桜風』はファッション等には『良く分からない』との事にて興味が全然無いが。

「おお、陽炎に不知火、『桜風』もか。足の状態は大丈夫か『桜風』？」

「陽炎、不知火、『桜風』、おはようございます。『桜風』は、足の方は大丈夫ですか……？」

「那智さん、神通さん！おはようございます！」

「おはようございます」

「あ、おはようございます。はい、もう足は何とも有りません。もうこの通りに……」  
「いや今私達しかいないがこんな往来のど真ん中で見せなくても良い。大丈夫ならそれでいいんだ」

マルナナマルマル。『桜風』達は丁度食堂に向かう廊下にて重巡洋艦娘の那智と軽巡洋艦娘の神通と遭遇。昨日の演習での『桜風』の奇行を目にした二人は『桜風』の怪我を心配するも、当の本人は至って元気な様子で有り、演習を監督する立場にあつて『桜風』の奇行を予測できず、大事故を発生させたと気に病んでいた真面目な二人は安心してた。だがそもそも擁護すれば、まさか『一番遅い前進1ギアでも18.4ktで固定だけど僚艦の10ktに常時合わせる』為に『機関部の設計や仕様を無視して力づくでボイラーの圧力を抑える』と言う暴挙に出るなどと、誰が予想出来るのだろうか。

「あー! 『桜風』さん! もう足は大丈夫なの!？」

「『桜風』さん、それに皆さん。おはようございます、なのです」

「Доброе утро、皆、それに『桜風』さん。足はもう大丈夫そうだね」

「ふああ〜…あ、み、皆さんお早う御座いますしゅ?!…あうー…」

そうして食堂では、先の演習で僚艦となった第六駆逐隊とも遭遇し、挨拶を交わす。若干一名は気付くのが遅れた為にえらい事になったが、極めて些細な事である。その後多数の艦娘が集まり、『桜風』の奇行に対して様々な言葉や反応を掛け、間宮食堂は何時以上に騒がしく朝食の時間が過ぎる。『桜風』がこの艦隊に加入して以降、結構な確率で何がしのイベントを起こす為、硫黄島沖大演習で魅せた冷厳な声色や表情は、割とアツサリ受け入れられていた。まあこの艦隊の場合、『桜風』とは全く違うミスティアスかつ『美しい怖さ』とも言える恐ろしい薙刀使いで姉弄りが大好きな竜田揚げが得意料理の軽巡洋艦娘が居るからかも知れないが。

「…うん、やっぱり誰も居ない。好きだけ動けそう」

マルハチマルマル、つまりは午前8時。演習後で有る為に休日を与えられた『桜風』



は、今日は武道館へと足を運んでいった。因みに今では深山提督の手伝いとして書類整理などの仕事は行ってない。何故ならこの仕事に対しては真面目である『桜風』、書類整理等でも自身の処理能力を全力全開で発動させて極めて素早く処理出来るが為に『深山提督の仕事量が消滅して、提督が落ち着かなくなる』と言う顛末を齎してしまうからだった。仕事人間、ワーカーホリック症候群を罹患しているこの女性は、仕事が何も無いと自然と忙しくなってしまうのだ。現在治療を進めているので、段階的に削って行つて、最終的には数日間仕事なしでも大丈夫な様に全力で修正中であるが。

「…ノートに名前を記載して……、何でか近接武器持つてる木曾さんや天龍さんたちは兎も角、何で演舞場利用者ノートに那珂さんの名前が有るんだろ。あの人が何か武術でもやってるのかな？」

『桜風』視点では、軽巡洋艦娘の那珂が『あいどる』なる面妖な慰撫活動をしている事は知っていたが、こういう武技を磨く場所を頻回に利用するような艦娘ではないと記憶していたので、この事に多少の疑問を抱きはしたが『まああの人も武人なんだろう』と一人納得して、道着に着替えた後敷き詰められた畳へと昇る『桜風』だった。

実際の那珂の利用理由である『アイドル活動の為にここを踊りや歌の練習会場に利用している』と言う発想は全く浮かばなかった様だ。因みにここ深山艦隊の那珂は、出演

した動画の多くがミリオン動画を達成し、とある大手芸能プロダクションの社長が入社してくれるように直々に交渉に来る程度には人気である。現在艦娘は『兵器』扱いなので、法律上の規制に加えて本人の意向と合わせてその社長の願いは叶っていないが。

「…よしつと。じゃあ…時間は一時間刻みでの合計3時間、使用武器は…素手にしよう。仮想敵は…適当で良いかな」

ここで『桜風』の言った『適当』とは、軍隊用語の意味での『適当』である。つまり3時間ぶっ続けて対精鋭歩兵相手の仮想組手練習をするのである。人間どころか鍛え方が不十分な艦娘でも途中で根を上げかねないが、そうなくても『桜風』は『自身の限界を知ることが出来る』と考えているので、問題無かった。

「…ふうー……」

一度深く息を吐き、軽く構えを取る『桜風』。自身の『記憶』に残る、駆逐艦『桜風』の乗員だった精鋭陸戦隊の動きを脳裏と肉体に呼び覚ましつつ、持ち込んできた時計の秒針が12時を刻んだ瞬間に、目の前の存在しない敵兵に対する『攻撃』を開始する。そ

の動きは、空手や柔道の様なスポーツ化した『武芸』では無く、敵兵を最効率で殺せるように磨き上げられた『武術』……『軍隊格闘技』である。

「……わあー……すつごーい」

「『桜風』さんが動く度に、空気が唸りをあげてるわねえ……」

「む、睦月たちは、今とんでもない物を見てるにやしい……」

ヒトマルマルマル。『桜風』の無手格闘演習を、御団子の様に頭を重ねて柱の陰より隠れながら覗く三人の少女。名前は下から順に睦月、如月、皐月の三名。この三隻の駆逐艦娘は遠征任務を終了後に、深山提督からサプライズにて間宮食堂のデザートを自由に選べる『間宮券』を貰い、歓喜した三隻は即座に給糧艦間宮からデザートを確保後『あそここの屋根からだともたまたま宿舎とは違う良い景色が見られるから』と皐月の提案で武道館

に来たところ、偶然『桜風』の無手格闘演習を目撃したのだった。

「動きは小さく、そして鋭く……。なんか映画を見ているみたいだね、睦月姉」

「にやしい……」

「映画よりも、もつと張り詰めた雰囲気とかが有るけどねえ」

小声で『桜風』の修練を見て、三者三様の感想を漏らす少女たち。アニメやゲーム等で有る様な派手だったり、大振りな動きは少ない。最小限の動きで、最大限の攻撃力を叩き出す。格闘には殆どと言って良い程知識の無い三隻の駆逐艦娘でも、『桜風』の動きが見様見真似だったりカツコついたりしているような物で無い、本格的で並外れた物である事は、何となく『心』で理解できた。『本能』と言い換えても良いかもしれないが。

「……ふうー……。…ねえ、4人とも。私の格闘練習を見ていて、そんなに面白いかな？」

「にやしいいー?!」

「あ、あはは……。気付いていたの？」

「あらあら、まあ面白いというよりも、興味深いって感じかしらねえ。…4人？」

そうした中、動きを止めて一息吐いた『桜風』が唐突に睦月達の方向を向いて語り掛け、一応『桜風』からは分からない様に隠れていたつもりだった睦月達はそれぞれ驚きの反応を返す。『桜風』視点では、いくら陰に隠れていようととも輝く三者三様の髪や瞳が視界の端にチラチラ映り込んでいたのだから、気付いて当然と言う意識だったが。

「……一人出て行ったみたいね。まあ良いか」

「『桜風』さん、どうして格闘練習しているのか、理由聞いても良いかい？ 艦娘にこういった技術が求められる事って、あんまりないと思うんだけど……」

「臆月ちゃん。……まあ、そうだろうけどね。特に深い意味は無いよ。単純に今の自分の依代で何処まで動けるかなあ、って思ってるね」

「でも、その理由ならランニングでも良いんじゃない？」

「……まあ、ちよつと『艦娘』の状態で何処まで戦えるか』と言う疑問が有ったのは事実だけ」と

「どうしてそんな疑問が出てくるか、睦月には分からないにやしい……」

普通、艦娘は自分の艦船を繰り出して深海棲艦と戦う事は有っても、艦艇を出していない艦娘の状態で『何か』と戦う事は先ず無い。艦娘は人間体型の状態でも、それなり

に鍛えた一般的成人男性よりも身体能力は上回っている為、仮に人類から喧嘩を売られても容易に逃走可能だからだ。勿論何事にも例外は存在するし、そもそも『深海棲艦に對する唯一の特攻兵器』である艦娘に對して暴力的、精神的問わずに攻撃を仕掛ける様な団体はそれほど多くは無いし、第一艦娘が居る鎮守府に近付けさせない様に警察や公安がそう言った団体には常々注意を向けている。最近は特に横須賀鎮守府周辺の警邏に当たる警官や公安の仕事が激増しているようだが。

「ところで、三人はどうしてここに？」

「ボク達は、ここの武道館の屋根で間宮券でもらったおやつを食べようと思って来たんだ」

「今日は珍しく良いお天気で、涼しい風も吹いているからねえ」

「うーん…そうだ、『桜風』さんも睦月達と一緒におやつ食べるにゃしい？」

「え？いや、そのおやつは三人の…」

「たくさんあるから大丈夫だよ！」

「それに『桜風』さん、大分運動した見たいだから、少し休憩を入れた方が良いんじゃないかしら？ほら、こんなに汗が滴り落ちて……」

「にやにやにや？如月ちゃんが『桜風』さんの髪を触る姿、これが秋雲さんの言う『ナマ

メカシイ』と言う物なのかにや？」

睦月が陽炎型か夕雲型か良く分かっていない某駆逐艦娘から吹き込まれた言葉が純粋な睦月の口から飛び出しても、他の三人は敢えてこの睦月の発言は聞かなかつた事に、畳張りの道場から二階、そして屋根へと向かうのだった。

「…よ、よし。やってる事には気付かれずに脱出出来た……」

『桜風』が言った『4人』の最後の一人である駆逐艦娘の秋雲。彼女は睦月型三姉妹が顔を覗かせる少し前に偶然『桜風』の無手格闘演習を発見し、下駄箱の上に隠れて腹ば

いになりつつ『桜風』をスケッチしていたのだ。勿論、許可など取ってはいない。

「『桜風』さん見たいなタイプは、今まで鎮守府には居なかったからねー。創作意欲が捗る捗る」

基本的に艦娘は、所属する鎮守府や泊地、そして艦娘として成長した経歴がそれぞれ違っても同様の趣味を持つている事が多い。この秋雲の場合、過去の艦船時代の逸話からか絵を描く事が趣味である事が多い。…ただ、描くのが普通の人物画や風景画である様な大人しい性質の秋雲は少なく、大半は同人誌を制作している、所謂オタク系統の艦娘である事が多い。深山艦隊のこの秋雲も、後者に属する少女だった。

「さてさて、どんなの描きましようかねー…。くっころ系は何か違う気がするし、純愛が王道？世間知らず、しかし才色兼備で心根も真っ直ぐ…。うんうん、次に入稿する奴の内容は決まり！題名は…」

その後者の部類の秋雲にも、またそれぞれ細分化できる程に多種多様なタイプがいる。一人で全てを書き上げるタイプ、その道に引き摺り込んだ同僚と共に同人誌制作をするタイプ、他鎮守府の秋雲と連携を取って作り上げるタイプ…。ジャンルにしても、



現代、近代、中世、未来、ファンタジー、SF、王道、詭道、ほのぼの、シリアス、R18系、非R18系：兎に角ありとあらゆるタイプの同人誌を生み出す秋雲が、この世界には存在する。この秋雲はある意味一番悪質な『身近にいる艦娘を題材にするタイプ』だった。

「よおし！そうとなれば早速…」

「どこに行くつもりかしら、秋雲」

「ちよお?!や、やややや矢矧さん!?ど、どどど、どうしてここに…?」

脳内で次に出稿する同人誌の題材を纏めた秋雲が嬉々として一步を踏み出した瞬間に、阿賀野型軽巡洋艦の三番艦で、鎮守府では艦娘の綱紀粛正に対処する事が多い、つまりは委員長的な事をやっている矢矧が出現する。周囲に誰も居ないと思いい込んでいた秋雲の後方からいきなり声を掛けられれば、誰だつて動揺するであろう。

「ランニングしていたら、明らかにコソコソした動きの貴女を見かけたのよ」

「そ、そそ、そうですか。いやその、ちよつと秋雲さんは自室に戻ろうとしただけで…」

「うふふ……今『入稿』とか『くつころ』とか言っていないかったかしら?秋雲さん?」

「ふひゃう?!ゆ、ゆゆ夕雲姉さんまで!?何時此処に!?!」

間髪入れずに、秋雲の視線が矢矧に向かつている隙にまたもや背後から秋雲に声を掛ける夕雲型駆逐艦の一番艦、夕雲。こう言った表現をすると、矢矧や夕雲にはステルススニーキング技能が有ると勘違いされそうだが、実際には秋雲には一度同人誌の事を考えるとそつちに集中しすぎるあまり、極端に知覚能力が激減する為、普通に近付いても秋雲が気付かないだけである。

「うっふふ……ねえ、秋雲さん？」

「はっ……はひ……」

笑顔で秋雲に歩み寄る夕雲に対して、妙な重圧を一身に浴びていて金縛りに有ったかの如く身動きが取れない秋雲。良く見ると僅かながらに全身が震えている秋雲を他所に、夕雲は悠然と秋雲の肩に手を置き、こう声を掛けた。

「ちよつとお姉さんと……お・は・な・し………しまししょう？」

——秋雲は氣絶した。

後日、死んだ魚の眼をした秋雲が多数の薄っぺらい本を自ら焚火の中に投入し、その姿を少数の艦娘が監視している光景が目撃されるも、『桜風』には一切関係の無い話である為、あまり深くは触れないでおこう。なお、秋雲は未だに同人誌活動を辞めては無い。作風は今までの『P—18かつシリアス系』から『非R—18かつほのぼの系』へと様変わりしていたが。

## 第三十話 深山艦隊のとある一日『午後からのお話』

時刻はヒトフタマルマル。オータムでクラウドな同人誌系女子が俵持ちで艦娘宿舎の一室に搬入され、その一室を鶏を絞め殺した様な鳴き声を響かせている頃。睦月、如月、皐月、そして『桜風』は武道館から間宮食堂に戻る為にゆったりと歩みを進めていた。

「……三人とも大丈夫？」

「へ……平気にやしいく……」

「うふふつ。睦月ちゃん、意地張っちゃって……」

「ボクは何ともないよ！」

武道館の二階に上って間宮特製の甘いお菓子を、ガールズトークを主に睦月達が繰り広げ、『桜風』はそれに時折言葉挟みながらで食した後、睦月が『睦月も、ちよつとやってみよう』と言いだした為、それに引き摺られる形で如月と皐月も『『桜風』流格闘戦臨時講習会』に参加したのだ。尚、いの一歩に言い出した睦月が慣れない筋肉を使い過ぎたせいか、このメンバーの中で唯一歩みがおかしい事になっているが。

「うーん……よし」

如月と皐月が有る程度セーブした動きに止めていたのとは違い、『桜風』の動きを再現しようと思地を張った睦月が少し辛そうに歩いているのを見て、一時間『桜風』の感覚で軽く簡単な指導にとどめたとは言え、申し訳なさを感じている『桜風』。何を思ったのか睦月の前で座り込み、背中を差し出す。

「……にや？」

「食堂までおぶっていくよ。睦月がこんな事になったのも、私のせいだしね」

「……じゃあ、お願いするにやしい……」

『桜風』の言葉に、先ほどまで張っていた意地はどこへやら。言われた通りに『桜風』の背中に負ぶさった睦月は、間宮食堂製のお菓子で小腹が膨れ、又自身も気付いていなかった遠征で溜まっていた疲れと一時間の格闘戦講習を本気で受けた事による再度の身体的疲労によって、『桜風』に負ぶさって暫くすると、静かに寝息を立て始めていた。

「あらあら、睦月ちゃんつたら。『桜風』さんの言葉には素直ねえ……」

「良い顔で寝ちゃってるね睦月姉。可愛いね！」

「……やっぱり睦月の希望、退けた方が良かったかなあ……」

三者三様の、睦月に対する感想を交わしながら、梅雨の時期には珍しい青空を視界の中に入れつつ、彼女たちは歩いて行く。もう直ぐ間宮食堂での昼食の時間だ。

「はふう〜〜……。お腹、一杯にやしい……」

「睦月ちゃんは本当に元気ねえ……。御馳走様」

「御馳走様〜。やっぱり間宮さんのご飯は何時食べても美味しいね！」

「……まあ、元気ならそれで良いか」

ヒトサンマルマル。『桜風』の背中で少々寝入った睦月が目を覚ますと、既に間宮食堂近くの廊下であった。周囲に漂う良い香りでお腹を鳴らして某少女が赤面する中、4人はテーブル席に着いて楽しく昼食の時間を過ごしていた。傍目から見れば『従妹を世話するお姉ちゃん』と言う風景は、一部の者達の脳内フォルダを埋め尽くす程度には微笑ましい光景であった。

「あ、長門さん！こんにちわ〜」

「おお、臯月：それに『桜風』たちもか」

「あらあ、長門さん。お疲れ様です」

「およ？長門さんも、お昼ご飯ですかにや？」

「こんにちわです、長門さん」

そうして4人が昼食を食べ終わって妖精さんと呼ばうとした時、長門に声を掛けられる。丁度お膳を持った妖精さんがレーン上を疾走していたので、長門も『桜風』と同じく昼食を食べ終えた様子だった。

「長門さん、補助兵装の状態はどうですか？」

「ああ、今の所は大丈夫だ。……未だに『音波探信儀Ⅰ』で潜水艦を探知して、『対潜口ケツト』を撃ち込む感覚には慣れないが、もう暫く使い続けられれば何とかなるさ」

「戦艦が対潜攻撃出来る様になったら、睦月達はお役御免になりそうにやしいー……」

「睦月姉、きつとボク達にはボク達にはしか出来ない事が一杯あるから、そんな事言っちゃ駄目だよ！ね？」

「そうねえ。『桜風』さんも、そう思うわよねえ？」

「当然だよ。睦月もそんなにしよ気ないで、ね？この間宮アイスと伊良湖羊羹あげるから」

「！『桜風』さん、ありがとうにやしい！！」

——良かった。機嫌直って

——臯月、そうむくれた顔をするな。後でやるから、な？もちろん、如月にもな

——ホント!?有難う長門さん！

——本当に？有難う、長門さん

現金な事に『桜風』の間宮アイスにて、落ち込んだ睦月の気分も吹き飛んだ所で、この場にもう一人が登場する。

「あら、『桜風』さん、それに長門さんたちも。皆さんお揃いで」

「夕雲さん？」

「夕雲?どうした?何か用か?」

「ええ、少し長門さんにご足労をお願いしたくて……」



「……うむ、今日の午後は休養となつてゐるから、問題無いぞ」

「……あ!? そ、そう言えば睦月達、遠征の報告書を書いてない!」

「あれ、ご飯後に皆で書くつて、如月姉が伝えて無かつた?」

「ああ、そう言えば良い忘れてたわあ。ごめんね、睦月ちゃん」

「……んーと、じゃあこの場で解散つて事で良いのかな?」

「『桜風』はこの後どうするのだ?」

「資料室に言つて色々読み漁ろうと思います」

夕雲の一言を切欠に騒がしくなる『桜風』の周囲。そして何となく雰囲気を呼んだ『桜風』の一言によつて、この場に集まつていた6隻の艦娘はそれぞれ歩み始める。因みにこの後、艦娘宿舎内の自室にてワイワイ騒ぎながら報告書を仕上げていた睦月達が、突如宿舎内に響き渡る殴打音に続く悲鳴に驚いて、睦月に要らぬ言葉を吹き込んだ事のある某駆逐艦娘の部屋に入ろうとして、その部屋から出て来た真っ赤な顔をした長門、そして巨大なタンコブを作つた陽炎型駆逐艦娘と遭遇して目を白黒させるのだが、『桜風』には関係の無い話なので此処では置いて置く事にしよう。

ヒトゴーマルマル。深山艦隊の宿舎には、巨大な公立校を全力で匠たちが改造した経緯も有って極めて立派な元図書室、現資料室が存在する。蔵書には艦娘用に作成された戦術教本や、古代地中海のサラミスの海戦から現代のフォークランド紛争に至るまで網羅された海戦の歴史書、戦史書のような鳥海、吹雪、霧島等と言った真面目だったり自己鍛錬好きで艦娘御用達のお堅い書籍から、主に駆逐艦娘や巡洋艦娘が読む様な漫画雑誌、果てにはファッション誌に至るまであらゆるジャンルが網羅されている。娯楽系雑誌の多くは深山提督の私費で、艦娘の要望を集めた上で購入しているが。お陰で将官で有る割には深山提督の懐は少し寒めである。

「……やっぱりのこの世界の技術進化は、私がいた世界よりも格段に遅い……。まあ、こっちの方が本来の正常な速度なんだろうけど」

その資料室にて『桜風』は、10冊程度の本を並べて読み漁った末に、そんな感想を漏らしていた。その『桜風』が集めた本は、殆ど触れられた形跡の無い様子である近代の歴史書に加えて各分野の技術史や専門書である。核融合炉や対空パルスレーザー、荷電粒子砲、レーザガン等を装備したり、装備している敵艦と交戦して来た記憶を持つ『桜

『風』にとつて、未だに原子力機関やガスタービン、そして普通のミサイルや小口径速射砲が主流であるこの世界の艦艇には、大きな違和感を持たざる負えなかつた。今更そのような繰り言を言つても、詮無きことであるが。

「違うのは……やはり…超兵器機関……か……。一体、何だつたんだらう……」

「…もし、『桜風』殿。もしよろしければ、『桜風』殿の世界の兵器の事を教えて頂けませぬか？」

「うひゃあ?!」

前触れも無く後ろから声を掛けられて、驚きの余り文字通り椅子から飛び上がった『桜風』。

「さ、『桜風』殿！自分で有ります！あきつ丸であります！」

「落ち着きなさい『桜風』。あきつ丸は敵じゃないわよ？」

「え、あ。あきつ丸さん？それに…提督？」

『桜風』に声をかけたのは、白粉を塗つた様な白い顔に黒い学生服の様な軍服を着た揚陸

艦あきつ丸。ちよつとした悪戯心で『桜風』にささやきかける様に呼びかけた結果、『桜風』は飛び上がった直後に流れる様にあきつ丸に対して反射的にCQC近接格闘を行いかける顛末を齎し、深山提督に『軽い気持ちで『桜風』を驚かせない様に指導しないと』と、最近生真面目系トラブルメイカー化しつつある『桜風』を見ながら、深い溜息を吐かせたのであった。

「……えつと、私の世界における兵器や技術の進化について……ですか？」

「そうであります。以前の映像にて、艦艇の進化した状況は大体把握出来たと自分は思うのであります。ですが『では陸軍の方は一体どうなっているのでしょうか』と、あきつ丸は少し疑問に思ったのであります」

「あきつ丸は陸軍出身だからね。因みに私も同じく興味本位だけど『桜風』の事をもっと聞いてみたいね」

「記録はこの青葉にお任せ下さい！」

「……え？青葉さん？いつの間に此処に？」

「きょーしゆくです『桜風』さん！記事のネタのある所に青葉あり！最近は演習にずっと集中していたので青葉新聞が丸一月と少しの間取材皆無の休刊状態だったのです！」

——なので今回は『桜風』さんの特集を組ませて欲しいのです!……駄目ですか? まるで子犬の様に潤んだ瞳でそう問いかける青葉に対して、『桜風』には断る術など存在しなかった。『桜風』にとっても、別に知られて困る情報などないと、本人は思っているのだから、態々断る理由だつて無いのだが。

「私のいた世界では、此方の世界とは違って一年程度で急激にあらゆる技術が進化しました。その主な要因は『超兵器機関』に依る物です」

「『超兵器機関』……」

「超兵器の機関だから『超兵器機関』……そのまんまネーミングですねー」

「その『超兵器機関』と言う物は、一体どこの国家が開発したのでありますか?やはり『桜風』殿の敵対していたウィルキア帝国で有りますか?」

あきつ丸の問いに対して、頭を振って答える『桜風』。

「『超兵器機関』は何処の国家も開発、製造していません。『超兵器機関』は例外無く火山から発掘された物です」

「発掘……それも火山から、でありますか?」

「まるでオカルトですな……」

「古の古代文明の産物か、それとも惑星外生命体が置いて言った物なのか……あの時超兵器に関して調査を行っていたブラウン博士も、結局結論は出せませんでした。唯一つ言えるのは、あの超兵器機関は『あの時の人類』には理解不能な科学力で構築された代物であると言う事です」

「防衛重力場や電磁防壁を作り出した、『桜風』の世界の技術力でも解明出来なかったの？」

「微細な破片となっても稼働し続け、測定不可能な出力を發揮可能であり、そして一定の出力ラインを超えるかどうか足掻いても暴走する。こんな訳分らない物、アメリカの口スアラモスに集った世界最強の頭脳群どころか一番精通していた筈のウィルキア帝国すらも解析不能に終わりました。後、防衛重力場等を開発出来たのも、超兵器機関を使用して出来た超高精度の電算機や超兵器自身に存在していた技術情報の為です」

言葉にすると改めて分かる、超兵器を超兵器足らしめる『超兵器機関』の意味不明さに『桜風』は『良くもまあ、あの時マスターシップに打ち克てたなあ』と、昔を思い出して自然と遠い目をせざる負えなかった。懐かしくは有るが、絶対にもう一度は体験したくない想い出の日々であった。

「……ならば一つ聞いても良いで有りますか？ 『桜風』殿？」

「なんですか、あきつ丸さん？」

「そこまで技術が発達していたと言うのであれば、何故『桜風』殿は新幹線の映像を見てあれほどまでに驚かれたのでありますか？」

「……えつと……鉄道は変わらなずと蒸気機関車だったので、それに新幹線を見たのは初めてだったので、あの時は、つい……」

「……ちよつと無理有りませんか？ 航空機は音速ジェット機、艦船もミサイル等を搭載しているのに、鉄道は変わらずに蒸気機関……？」

青葉の当然の疑問に対して、『桜風』は『うーん……』と言いながら、顎に人差し指を当てて、小首を傾げて答えを纏めだす。因みにあきつ丸の言った新幹線の話は、『桜風』が『ヴィルベルヴィント』との戦闘で負傷した身体を休めている時に、病室に有ったテレビで偶然流れた映像を見て『蒸気機関車じゃない弾丸列車かあ』と口走った物である。

「……細かい所までは良く知りませんが、多分技術面の問題よりも利権調整とかの問題が有ったんじゃないかなと思います」

「利権……？」

「これはまた面白そうなネタが……」

「軍艦建造や航空機増勢の場合、民間の港湾施設や工廠、飛行場の近代化とそれなりに拡張を済ませれば対応可能ですけど、鉄道の場合は既存路線の改良や新規敷設をする場合でも、長距離に跨るが故に発生する複雑な土地利権や駅の配置場所等で面倒が有ったんじゃないかと思います」

「……まあ確かに、たった一年程度で広範囲の土地の買収や敷設計画、ダイヤ設計をするのは難しそうですね。しかも主に戦場となっているのは海空と言う状況で」

「因みに日本だけじゃ無くて、ウイルキア帝国軍の陸上部隊と主に戦っていたドイツに關しても、蒸気機関車のままだった筈です」

「え、ウイルキアの場所って、コッチで言うウラジオストックですよ？どうやってドイツまで軍を派遣したのですか？」

「ソ連に技術提供する代価として無害通行権を得たんです。勿論ヴァイセンベルガーもそう甘くは無かったので、提供したのは全て低位の技術に限定していました。お陰で終戦した1940年でソ連軍が装備していたのは2000馬力級のレシプロ軍用機や第一世代型主力戦車ですらない旧式戦車だらけでしたけど」

「またボルシェビキの仕業でありますか!!やはりアカはこの世から消毒すべきであります



す!!!」

陸軍の記憶のせいか、何故か全艦娘の中でも特に共産主義が大嫌いなあきつ丸の絶叫は軽く流されつつ、『桜風』の話は陸上兵器へと移り、海空の技術発展の余波で戦争主要参加国の中でも一番陸上兵器の発達が遅れていた日本帝国ですら、終戦時点には数的主力として74式戦車、近衛師団や樺太防衛部隊には90式、試験段階として10式相当の戦車が開発、生産されていたと言う事実を知ったあきつ丸が死んだ目で大口を開けて魂の抜けた顔を晒していたが、その話はまた置いて置くとしよう。

ヒトキュウマルマル。深山艦隊程に艦娘が多数所属していると、いくら大きい浴場があるとはいえ、流石に一度に全員が入浴する事は無理で有る為、艦娘それぞれの入浴時間は分散されている。出撃した艦娘の方が優先されるなどの例外は有るが、深山艦隊は17時から19時にかけて全員が入浴する様に設定されている。『桜風』は本日は休日だった為、少し遅めの入浴時間の配分だった。

「……うーん……」

「ぴゃ？どうしたの『桜風』ちゃん？」

「……いえ、やつぱりこんなに傷跡が有るのは、皆の目に悪いのではないかなと……」

「そんな事有りません『桜風』さん！その傷は『桜風』さんが頑張ってきた証じゃ無いのですか！」

「そうだよ『桜風』ちゃん！そんな風に隠さないで胸を張っていれば良いんだよ！酒匂くらしいしかお胸無いけど」

「なにゆえそこで胸の事を言うんですか酒匂さん？後吹雪、ありがとね」

『桜風』とは又違う方向性の天然気質な酒匂と、良く『桜風』の比較対象として引き合いに出来る吹雪によって、今なお入浴時に自身の傷痕を衆目に晒す事に色々と思う事のある『桜風』が励まされている時、後ろから眼帯をした少女が忍び足でにじり寄っていた。

「そうだぜ『桜風』！その小さめの胸張って傷曝せばいいんだぜ！」

「ぴゅあぁー?!」

「ゴアツ!？」

深山艦隊切つてのカッコつけ型自爆系艦娘筆頭格である天龍型軽巡洋艦娘一番艦の天龍が、思春期の男子中学生レベルの悪戯心で『桜風』の背後からその小さめの果実をバスタオルの上から揉みしだき、いきなりの奇襲で『桜風』は反射的に背後の天龍に対して、マトモな警告を発する事も無く右ひじで天龍の米神を精密無比に撃ち抜いた。この光景を見ていた吹雪曰く『桜風』さんの動きが残像を残さない程に速かったです』との事であり、狙撃した衝撃で天龍が5メートルほど吹っ飛ばされて浴場に墜落しているのを見ると、『桜風』渾身の一撃であつた事は容易く推測される。尚その天龍は水面に浮かんだ状態で、完全に白目を剥いて気絶しているが。

「はひっ……はひっ……え、天龍、さん？」

「あらあく……ごめんね〜『桜風』ちゃん。天龍ちゃん時々こういう悪戯しちゃうの。私がしつかり叱っておくから、許してくれないかしら？」

「え、ええ……分かりました。龍田さんに全部お任せします」

「ありがとね〜『桜風』ちゃん。じゃあ、ちよつと天龍ちゃん連れて行くね〜」

そう言うと、龍田は己の姉を背負つて脱衣所へと歩いて行く。何時もと変わらぬ龍田の美しい微笑に、超兵器とは別物の得体の知れない恐怖を感じざる負えなかつた『桜風』だった。

「お願いします、龍田さん。……大丈夫ですか？『桜風』さん」

「ぴやあく……『桜風』ちゃん、大丈夫？」

「う、うん。私は大丈夫。……天龍さん、思いつきりやつちやつただけど、大丈夫ですかね……？」

「天龍なら龍田さんに任せておけば大丈夫だよ！それより、大丈夫ならお風呂に入ろうよ！」

「酒匂さんの言う通りです。天龍さんなら放っておいても大丈夫です」

「お……オウ……良いのかな、それで……」

何かやけに酷い扱いな天龍に一抹の同情心を覚えつつ、『桜風』の脳内人物相関図に『天龍の威厳はそんなにない』事をしっかり記録している辺り、深山艦隊なりの流儀と云うか、雰囲気のような物に慣れつつある『桜風』である。尚、その後何でかツルツルテカテカでキラキラ状態になっている龍田に連れられた天龍が、真っ白い顔をして『桜風』に謝るのだが、それはまた明日の話である。

フタマルマルマル。この時間帯となると夕食を取る為に深山艦隊の艦娘の殆どが集結する為、間宮食堂は大賑わいの大盛況である。一部の戦艦娘と駆逐艦娘は珍しく此処には来ずに、艦娘宿舎に食事を取り寄せていたが。勿論『桜風』も風呂上りから直行してこの席に混ざって居たが、夕食よりもよほどの大事に遭遇していた。否、遭遇したと言うよりも発見したと言うべきだろうか。

「……………それで那珂さん。本当の事を言ってお下さい」

「もー、『桜風』ちゃん、那珂ちゃんの事は那珂ちゃんて読んで欲しいの!」

「額の傷、那珂さんは『転んだ』と言ってますけど、それ……………石か何かを投げつけられたんですよね?……………そうですよね?」

「那珂、本当なのか?」

「……………本当だ。那珂に言わない様に止められていたが、コンサート中に石を投げつけられてな……………」

「ちよつと那智さん!?!那珂ちゃん言わないでっってお願ひしたのに!!」

深山艦隊イチのアイドル艦娘、と言うより唯一のアイドル系艦娘である、川内型軽巡

洋艦娘三番艦の那珂。その額に張り付けた絆創膏の事を『那珂ちゃんちよつと転んじやっただけだよ』と嘘の説明をしたのを、『桜風』は即座に看破したのだ。とは言え、別に『桜風』で無くとも那珂の嘘は直ぐにバレたであろう。本当に『額から出血する勢いで』転んだのであれば、額以外にも何かしらの傷が有る筈なのだから。

「那智。……那珂に一体、何が有ったの？」

「川内。……コンサート中に観客席にいた複数の人間が、いきなり掌サイズの尖った石を投げつけて来たんだ。即座に周囲に居た那珂のファンや警備員に取り押さえられたが、それが運悪く那珂に直撃してな……。その後、数百人ぐらいが押し寄せて来て抗議活動始めて、結局コンサートは中止だ」

「それどう考えても那珂さんが普通の人間だったら殺す気満々の所業じゃないですか。艦娘頑丈何でそれくらいじゃ怪我はしても死ぬ事は有り得ませんが。と言いますか、何故コンサートに対して抗議活動を？」

『桜風』ちゃん……それだと那珂ちゃんが乙女じゃ無いって感じになるから、もうちよつと言い方変えて欲しいかなーって、那珂ちゃん思うんだ……」

直球ど真ん中の170 km ストレートな感想を投げまくる『桜風』にそう哀願する那珂

を他所に、『桜風』は話を進めていくが、その那珂に対して石を投げつけた犯人の供述に話が及ぶと、『桜風』は絶句せざる負えなかった。

「……那智さん。その那珂さんに石投げつけた野郎と婆ババア、それに抗議活動した連中が『これは軍国主義を滅ぼす正義の戦いだ』『化物は鎮守府から出てくるな』と言つてのけたのつて……冗談……」

「……だと、良かったのだがな……。これは事実だ」

「『桜風』は未だ知らなかったんだね。今の日本には…そんなに多くないけど、こういう人たちや団体がいるんだ。でもだからと言つて、何か変な事しちやだめだからね？」

「……………ええ、はい。分かっています、川内さん。深山提督や、陽炎や、不知火や、青葉さんや、皆に、迷惑、かけちゃ、駄目、です、から、ね……。……ええ、分かっています、分かっていますとも……」

「さ、『桜風』ちゃん!? 湯呑! 湯呑に輝入っているから! 力抜いて!! あと落ち着こう! ね! アイドル那珂ちゃんのお願ひ!! 那珂ちゃん負けたりしないから!!」

「……………若いつて良いな、川内」

「艦娘になつてから年寄り染みた言葉言える程歳喰つてないでしょ、お互いに」

お風呂場で酒匂と吹雪から武道館に記載されていた那珂の名前の事を聞いて、人知れず艦娘としての仕事を完璧にこなしながらも、仕事後に疲れ切った体で夜中までダンスや歌の自主練習に励んでいる事を知って那珂の事を尊敬した直後にこの顛末である。青筋立てて湯呑を再起不能にするまで音を立てて握り潰して怒りをこらえている『桜風』程で無くとも、大なり小なり似たような思いを抱くのは普通であろう。

「……深山提督は、なんと？」

「警察や公安に連絡して動いて貰って、提督自身も動くってさ。でも『桜風』も以前聞いたと思うけど、罪状は『器物破損』になるだろうってさ」

「『艦娘管理法の為、艦娘は例外無く海軍が所有する物品扱いとなる』ですわ。……物を食べられて、自分で創作も出来ると言うのに物扱いには、釈然としませんよね……」

「まあそれも今暫くの辛抱だと思うよ。国会会で『艦娘保護法』が審議中だから、何事もなければ私たちは人権を、ちゃんと艦娘に配慮した形で得られるだろうし」

「……もー！暗い話はもう止め止め！那珂ちゃんの事心配してくれるのは有難いけどー！那珂ちゃんこんな事で負けたりなんかしないもん！だってアイドルだから!!」

そう宣言した後、軽やかに間宮食堂に設置してあるカラオケボックスへと駆け寄り



『深山艦隊のアイドル！センターの那珂ちゃん！スペシャルなゲリラライブをお届けするよー!!』といきなり歌いだす。色々鬱陶しがられたりもしているが、その那珂の血の滲む努力と天性の才を好むメンツも意外と多いもので、この突然の事態でも那珂のフアンな艦娘は黄色い歓声を上げていた。この位メンタルが強くないと、アイドルにはなれないと言う事だろうか。とは言え、『桜風』の那珂を本気で心配している反応に救われた部分も少なからずあるだろうが。

マルフタマルマル。既に深山艦隊の宿舎は完全に消灯時間となり、数多くの艦娘がそれぞれの床に就いている頃、『桜風』もまた、陽炎たちと共に布団を敷き、床に入っていた。三人仲良く川の字で休む姿は、見ていてとても微笑ましい光景だ。

——今日は色々あったなあ……

そんな中、ふと目が覚めた『桜風』は今日の出来事を思い出していた。朝起きて、陽

炎たちとあいさつを交わし、朝食を賑やかに食べ、武道館にて身体を思いっきり動かし、睦月達と語らい、たくさんの本を読み、あきつ丸や青葉、深山提督に故郷の話をし、お風呂では……色々あつて、夕食では那珂の受けた仕打ちに義憤にかられ、それを吹っ飛ばす那珂の生ライブに目を白黒させ……駆逐艦『桜風』では体験する事など無い、駆逐艦娘『桜風』で有るからこそ経験出来る、この楽しき日々。

——きつと、そう遠くない未来に、超兵器『ドレッドノート』が来る。……この生活を、日常を、絶対に壊させはしない。……絶対に……どんなことをしても、例え何が有ろうとも

そう誓いつつ、再度眠りにつく『桜風』。彼女が超兵器『ドレッドノート』と何時相対するか、そして彼女とどうなるのかは、今はまだ分からない。だが一つ言えるのは、『ドレッドノート』と『桜風』が遭遇する事だけは、確実に起こる未来である、と言う事位である。

「……こんな梅雨真つ盛りな時期なのに、ビルのワンフロアを焼き尽くす大火事だつてさー」

「不用心だな、全く。こう言う時期だからこそ、火の気には注意しないとイケないと言うのにな」

「ホントだねー。……あれ、この写真の人たち、どこかで見た様な……」

「……ん？……なんだ、コイツ確か那珂ちゃんのコンサートを誤分からん理屈で妨害した連中じゃないか」

「あー、そうだったねー。でもお酒飲んでからの寝煙草で火事起こして逃げ遅れて全員

死ぬって結構お間抜けさんだよ。それに鎮守府への襲撃計画書はすっかり残って  
たみたいだし」

「……相変わらず可愛い顔して結構辛辣だな、我が姉は」

「ふえ？……あれ、長月ちゃん」

「何だ？」

「コメンテーターの人たち、この人たちは他殺じゃ無いかって言ってるよ？この人たち、  
皆みんな酒も煙草も飲まない人たちだから、だつて」

「馬鹿らしい。どうせそう言いながら裏で隠れて飲んでいたに決まってるさ。……ほ  
ら、もう直ぐ遠征だから早く行くぞ」

「あ、ちよつと待つて待つて」

二隻の駆逐艦娘が、急いで港に向かって走り出す。食堂で電源が点いたままのテレビ  
は、誰も居ない食堂に『まるで推理小説の様な複数焼死事件』の報道を流していた。

「……急いでいたのはいいけれど、テレビはちゃんと消さないと、ね」

そう言いながら食堂に入り、テレビの電源を消した深山満理奈少将。彼女の表情は、

その『複数焼死事件』の報道内容を見ても、一切変わる事は無かった。

## 第三一話

## トラック諸島行き輸送船団護衛戦

## 《序》

「……それで、結局あの複数焼死した事件は事故と言う事で処理されるのか」

「はい。鑑識が何重にもチェックしましたが、やはり失火による事故に依る物と断定されました。発火装置の様な物も無く、鍵も内側からかかっていたので」

「それと公安と警視庁の方からは、その火災現場で発見した横須賀鎮守府襲撃計画書に元に芋蔓式に多数のテロリスト予備軍を逮捕しました。現在尋問中との事ですが、一部の人間は逮捕される前に自殺しています」

「……………そのテロリスト予備軍の連中が全員日本人であったならば、未だ面倒が無かったかもしれんな」

部下からの報告に頭を抱えなくなる山本蒼一海軍庁長官。ただ単に、今回の火災が純日本人で構成された反軍系市民団体の起こした失火と言う事であれば、そう大事にはならなかった。一部の人間が陰謀論を喚き散らしているが、逆に言えばそれだけで終わった筈だった。……火災現場に外国籍の人間が複数存在したのと、その襲撃計画書を精査すると資金や情報関係で外国からの手が入っていたのでなければ。

「……公安や警察のみならず、外務省や首相官邸、更にはホワイトハウスやダウニング街10番地、エリゼ宮殿更にはクレムリン等でも大騒ぎになってますよ、今回の事件。精強を持って成る日本艦娘を強奪しようとしたんですから、当たり前と言えば当たり前ですが。出来る筈も無いと言ふのに」

「とは言え……まあ、自分たちが出来るのは、関係部署に話を通して、各鎮守府の防諜の強化を強く進める事位だ。そう言った外交的な物は全部政府に任せるしかあるまい」

———— 深山満理奈君。……これは、やはり君の仕業なのか……？だとしたら……？  
いったい、どうやってこの事故を引き起こしたのだ……？

今まで深山提督には、様々な人的災禍が降りかかっていた。元々第二期生途中編入かつ高卒民間出身と言う経歴でありながら、並み居る先達をアツサリと飛び越えて歴代トップの成績を残すだけでも妬み、やっかみを持たれると言うのに、いざ実戦となつても高度な戦果を挙げ続け、そして上層部からの命令には従順な美麗な女性提督。才色兼備を体現した彼女にとって「艦娘の指揮が出来る」と言う一点の才だけで提督に成る事の出来た劣等感溢れる連中にとっては、神に愛された存在に見えた深山提督に陰湿な

妨害工作を仕掛け、排除しにかかるのは当然の責務でもあった。腐臭漂う醜い嫉妬である。

「……長官。一応調べましたが、深山提督やその艦娘のアリバイには隙が有りません。その為、今回の火災が事故では無く事件であったとしても、犯人は別の勢力に依る物だと思われまず」

「……その言葉、一体何度聞いたのだろうな、私たちは」  
「馬鹿が深山提督の艦娘を攻撃して、その馬鹿が居なくなる度に、ですね」

そうして深山提督への妨害工作が、嫌味等の精神攻撃は徹底的に正面論破され、裏工作で陥れようにも深山提督自身の隙は皆無でもあり、階級を楯に集団強姦して従わせようと短絡的になった真性の馬鹿は纏めて自衛軍の警務官に捕縛され：そんな中、彼女への妨害工作の一環として彼女の艦娘に手を出した輩だけは、例外無くえげつない最期を迎えている。前者の連中は少なくともある程度の社会生命を保っている者が多かったのだが、後者の場合は完全に人としては再起不能にされている。社会的、生命的両方の意味を問わずに。そして例外無く、深山提督達のアリバイは完璧で穴など存在しない状況である。



「……はあー……。本当に、深山君の艦娘に手を出す輩が、どうして此処まで絶えないのだろうな」

「……………これまで以上に、深山提督や配下の艦娘の警護を嚴重にします。我らに取つても、彼女たちにとつても、これまでの様な面倒事に対応する暇はもう有りません」

……頼む。そう部下に伝える山本長官の脳内には、先日日本海軍最大の膿兼問題兎である、仲本穂乃果元帥が居を構えるトラック諸島行きの輸送船団の護衛部隊に編制された、深山提督直々に率いる艦隊のメンバー構成が浮かんでいた。水と油の何物でもない深山満理奈少将と仲本穂乃果元帥を顔合わせ等したくないのが嘘偽り無い本音では有るが、少なくとも思考の中身は兎も角仲本元帥のやっている事は対深海棲艦の撃滅である。最近深海棲艦の活動が少しずつ活発化し始めた為多くの鎮守府はその対応に追われて居る為、仲本提督の物資補充要請に答えられるのは、艦娘全てが精鋭でそれなりに余裕のある深山提督の艦隊しかいなかった。

海軍庁を牛耳る男達の憂鬱と会議は終わることなく続いて行く。三年以上続く深海棲艦の悪夢を少しでも払う為に、そして超兵器と言う新たな悪夢と、それに乗じる愚物

共も追い払う為にも。

……尚、深山提督率いる護衛艦隊と、その護衛対象である輸送船の数が事前報告とは全く違う事を知るのは、翌日の昼になってからの事であった。

「……しかし、本当に『桜風』の艦隊運動能力は低いわね……」

「まあ、仕方が無いと言えば仕方が有りませんけどね。『桜風』さんは初めから単艦戦闘を絶対的なコンセプトとして設計されていますから、艦隊運動の事は一切考慮されていません。例えるなら、遠距離ミサイル戦の事しか考えていない戦闘機に對地支援攻撃と格闘戦をさせる様な物でしょうか？」

「兎に角『相当無理させる行為』である事は分かる例えね……。それで、青葉？」

「仕事は終わっていますから、司令官は座っていれば良いんですよ？」

「……………あおばあ……………」

「涙目になっても駄目な物は駄目です。……………もう、少しはワーカーホリックが直つ

てきたかと思えば、これなんですから……」

本土でそんな会話が話されている中、渦中の深山提督は、トラツク諸島行きの輸送船団の指揮の為に、青葉型重巡洋艦の一番艦、青葉に乗り込んでいた。編成としては深山提督の乗艦する重巡青葉を輸送船団の護衛艦隊旗艦とし、同じく重巡洋艦の古鷹、駆逐艦の陽炎、不知火、朝潮、満潮、正規空母の瑞鶴、そして駆逐艦『桜風』と言う編成である。通常、艦娘が艦隊を編成する時の常道である6隻制限を無視しているが、これには色々と理由が有る。

「司令官。やはりこれだけの輸送船を、たった8隻で護衛するのは難しいのでは無いのでしょうか？」

「そうよ司令官。何で30隻もの輸送船をこれだけで護衛しなきゃならないのよ、いくら陽炎に青葉、それに『桜風』が居るとは言え……」

「仕方が無いでしょう。先方が『当方激戦地にて余裕が無い為、最大8隻の護衛艦にて来航されたし』『尚、戦艦の来航はご遠慮願う』とか注文付けて来たんだから。……それにこの輸送船の数も、命令して来た大本営に一応話だけはしたのよ？却下されたけど」

「大本営は、いくら何でも『桜風』さんの能力を過信し過ぎていると思うのですが……」

「もう此処まで来てその事を話しても、意味の無い事ですよ、古鷹さん。それと先程深海棲艦の潜水艦を二隻探知、撃沈しました。現在レーダー、ソナー上に敵影見られず」  
「……取り敢えず、愚痴をするにしても護衛作戦を終えてからね、皆」

深山提督の指示に対して十人十色に了解の意が帰り、響く青葉の艦橋にて、深山提督は物鬱げな表情で艦橋から見える蒼海を眺めていた。

カリブ海に出現したと推測される超兵器『ドレッドノート』は、運悪く遭遇したアメリカ大西洋艦隊やイギリス本国艦隊の艦艇や艦娘の多くを撃沈、若しくは損傷を与えながら大西洋を南下し、チリ軍の偵察機がホーン岬を超えて太平洋を航行する『巨大な連装砲塔を艦艇の前後に一基ずつ搭載した巨大潜水艦』を確認したのを最後に、『ドレッドノート』の消息が途絶えている。その脅威に対抗する為にも最前線に配置された仲本提督は支援を要請。それに対して大本営は即座に答え、深山艦隊に対して出撃を命令。経緯としてはおおよそこのような物である。

陣形としては極々オーソドックスに、輸送船団の周囲を青葉や陽炎たちが輪形陣で取

り囲み、相変わらず艦隊行動をまともに取れない『桜風』は単独で駆け回って脅威を排除する戦法である。因みに深山艦隊対超兵器部隊に属している青葉、陽炎、瑞鶴の装備に関してだが、共に硫黄島沖大演習の時に搭載して居た兵装では無く、例外無く『桜風』の開発した物の中でも低位な兵装か、それか何時も使っている通常の兵装になっていた。出撃する以上、演習の時の様な事態が発生したら話にならないので、当然の処置であるが。

「……青葉、陽炎、瑞鶴。大丈夫？」

「はい！『音波探信儀ⅠⅠ』も『電波照準儀Ⅰ』も『噴進爆雷砲』も、その他兵装にも何も異常ありません！」

「陽炎よ。私も今の所問題無いわね。『10cm65口径3連装砲』や『28mm3連装機銃』『20cm12連装噴進砲』その他の調子も良いわね」

「瑞鶴よ。私の方も大丈夫。まあちよつと、ちよつとだけ動きが鈍い感覚が有るけど、ちゃんと『彩雲』も『零戦五四型』『彗星三三型』の機体もちゃんと戦えてるわ……だから、皆大丈夫だからね？そんな雨の日の子犬見たいな目をしなくても大丈夫だから、『桜風』。ね？ね？」

「……………取り敢えず大丈夫そうね、安心したわ」

「司令官、遠い目をしながら言っても説得力が有りません」

取り敢えず大丈夫そうな三隻と今なお硫黄島沖での事を気にしている『桜風』の様子に、朝潮に言われたように様々な感情をこめて遠い目で天井を眺める深山提督であった。

「……司令官。ちょっと内密に聞きたい事が有るけど、良いかしら？」

「満潮？良いわよ。……回線は遮断したわ」

「……司令官。『桜風』は何時になったら船体を仕舞える様になるの？それと、どうして『桜風』は私たちの様に艤装を必要としないの？」

「……………それね……………」

「……一応青葉たちで話をしてみて両方ともやってみて貰ったんですが、何方も『桜風』さんには出来ませんでした」

「……………どうしてよ？」

「それが分かれば苦勞はしないわよ、満潮……」

駆逐艦『桜風』の通常艦娘と違う性質。一月以上かけて様々な角度で演習や調査を行った結果、通常の艦娘では極自然で当たり前の事である『自身の艦艇仕舞い込み機能』や『補助として艦娘に装着されるデフォルメ艤装』が、『桜風』には存在しない事が判明している。どうやっても出て来ない後者は兎も角、前者に關しては『こう……ですね、艦艇を自分の身体に戻そうとするんですよ。そうして力を籠めたらパツと光ってシユバツと仕舞えるんです』程度の具体性の欠片も無いフワツとした説明でどうしろと言う話では有る。

【『桜風』が艦艇を仕舞えないとなると、あの一万トンを超える船体が常に工廠の大部分を埋める事になるわ】

「既に海軍庁には話を通してある程度の土地を融通して貰える事になったから、工廠を拡張すれば容量の問題は解決するわ」

「妖精さんなら直ぐにやってくれますからねー」

【「……そう。なら、良いわ。じゃあ、あと一つだけ」

「なに？」

「司令官、あれだけ黒い噂の絶えない仲本提督の所に『桜風』みたいなのを連れて行って大丈夫と思ってるの？」

—— 答えは返ってこない、ね。やっぱり司令官が『桜風』を連れて来たのは、本心からじゃ無かつたのね

—— ……この船団を僅か8隻で守り切るには、『桜風』さんの力が無ければ不可能ですからね……青葉にとつては、悔しい限りですが

満潮の問いかけに対して、先ほどの様に明快に言葉をつなげない深山提督の様子に、満潮や会話に混ぜて居た青葉は『やはりか』と、無言で理解していた。護衛艦の4倍近い隻数の輸送船を護衛するには、速度や艦隊運動で如何にか出来る次元の話では無い。極めて速く動き回り、敵艦よりも早く捕捉し、相手に何かしらの行動を起こす前に撃滅する。対超兵器部隊はある程度既存艦娘よりも『桜風』製の装備によつて強化されているが、酷評してしまうと「今までよりも少し長めに毛の生えた程度」の強化ではない。強くなっているのは確かだが、この無茶苦茶な状況では幾ら何でも青葉や陽炎た



ちに頼るのは酷な話であった。

「提督。現在輸送船団8時方向を航行中ですが、特に敵性反応は見られていません。引き続き時計回りに航行しつつ警戒に当たります。定時通信終わり……で、良いですか？」

「了解、『桜風』。あとそんな感じで大丈夫よ。……満潮の懸念はその通りよ。だから、『桜風』は基本艦隊の誰かが常時付き添って貰うわ。何かあったら即時皆に連絡して」

「……分かったわ」

「……そんな顔しなくても大丈夫ですよ、司令官。満潮さんも、分かってくれていますから」

満潮のぶつきらぼうな返答に渋い顔をした深山提督に対し、青葉はそう声をかける。口には一切出していないが、週刊青葉新聞を作る為に行ってきた青葉の自己流素人取材で養った目には、満潮自身も気が付いていない様だが『桜風』に対して妙なシンパシーを感じている節が見えていた。

艦艇時代、満潮は過酷な艦歴を辿っていた。1942年11月、鼠輸送作戦中に敵機

の攻撃を受けて中破した彼女は、その損傷を修復している間に所属していた第8駆逐隊の朝潮、荒潮、大潮が撃沈された。その後第8駆逐隊が解隊されて他の駆逐隊に編入されても僚艦が次々と戦没して解隊されて編入されてを繰り返した末、満潮自身が『地獄』と称するスリガオ海峡海戦にて、絶望的な戦力差を覆せずに撃沈された。安住の地など無く、臨時編成の部隊を徹底的にたらい回しにされた末に、『地獄』で沈んだ。

対する『桜風』だが、彼女自身は一度も駆逐隊などに所属した事は無く、常に単艦で行動していた為に『戦友』と呼べるような僚艦は存在していない。工廠艦『スキズブラズニル』に関しては僚艦と言うよりも『母港』感覚であった。その点戦友を失い続けた満潮とは大きく違うのだが、代わりに使い減りのしない駒の様に僚艦を付けられる事無く、スリガオ海峡海戦が兇戯に見える程の、敵艦で海が埋め尽くされている戦場へ常に突っ込まされ、戦い抜いて来た。ずっと単艦ひとりで、僚艦などいない、『地獄』の海で。

「満潮さん、意外とああ見えて面倒見がいいですからね。この前も『桜風』さんが戦術教本を見ながら艦隊運動の仮想演習をしていた時も……」

「ちよつと青葉?!?なんでその事知ってるのよ!? ああもう、馬鹿ばかり! 絶対言っちゃ駄目だからね!?!」

「…………ふふつ、そうね。青葉の言う通り、大丈夫そうね」

——方向性こそ違えど、地獄の戦場を生きた者にしか理解できない……覚える事も感じる事すらも無い感情、か

いくら功績を称えられたとしても、指揮官である深山提督自身が直接深海棲艦を沈めている訳でも無く、実際に血を流し、深海棲艦の恐ろしさに面と向かって対抗し、被弾して生まれる痛みを堪えながら戦うのは艦娘……それも、それに加えてほぼ全ての艦娘それぞれが、平成の平和な世に生まれた日本人には想像もつかない様な過酷な〔歴史〕を抱いている。理屈や理論で語れるはずの無い、現代人では先ず紙面上の物事以上には理解しようのない世界の話ともなると、深山提督でも口を挟めなかった。

今も満潮に対してニヤニヤしている、何時も明るいムードメーカーな元気娘である青葉も、その身に抱え込んだ〔自身の艦歴の暗黒暗い歴史〕の深さと、それに対する〔無念と後悔思い〕の深さも、深山提督に計り知れない程に深い。その青葉が『大丈夫』と言っているのだから、自身の艦娘に全幅の信頼を預けている深山提督は青葉の言葉を信じるのだった。

〔提督、こちら駆逐艦『桜風』。現在レーダーにて多数の航空機と水上艦艇を確認〕

「提督さん！『彩雲』から数隻の潜水艦の反応有りとの報告！」

そんな事を深山提督が考えた直後、艦隊に緊張が奔る。こんな大船団をむざむざ見過ごす様な深海棲艦では無く、三年以上経過した今でも全く分かっていない深海棲艦の索敵に引つかかかったらしく、先行していた『桜風』は、恐らく空母機動部隊と思われる水上艦艇と航空機の群れを探知し、爆雷を搭載して磁気探査装置を搭載して居る『彩雲』で対潜哨戒を行っていた瑞鶴からは潜水艦の存在を察知。

「……………『桜風』、頼める？」

「了解です。駆逐艦『桜風』、これより先行して敵艦隊を撃滅してきます。船団の方はお願いします」

「分かったわ『桜風』。でもくれぐれも、くれぐれも！無茶して怪我しないでね！分かった？」

「……………鋭意努力します」

「……………まあ『桜風』さんなら大丈夫だと思えますけど、もしまた何かやらかしたら、司令官からも何か言ってやってください」

「まあ、その位はするわよ」

そう答えつつ、深山提督は海図を広げて輸送船団と敵艦の配置状況を確認する。この輸送船団の輸送船は全て妖精さんの操る輸送船で有る為、速度調整や連携に関しては人間の操る最新鋭の技術で建造された輸送船よりもある意味上である。とは言え所詮武装も施されていないWW2時代の技術で建造された輸送船で有る為、敵艦に襲われたら一溜りも無い。

——まさか、仕組まれた？………いえ、何をするにしても今は深海棲艦の対処の方が優先。一隻たりとも沈ませない様にしなければ………！

半ば予想されていた、深海棲艦による輸送船団への襲撃。この戦闘に置いて、『桜風』の生み出した兵装能力の真価が発揮される事になるとは、この時の深山提督や艦娘たちには思いもよらなかつた。

## 第三二話

## トラック諸島行き輸送船団護衛戦

## 《破》

暗い深海の中を、一隻の潜水艦が漂っていた。その潜水艦には現代の潜水艦の様に小口径砲を搭載せず、艦中央部にVLSが搭載されている訳では無く、かと言って小口径砲を搭載して居る潜水艦娘の様にネイビーブルーに統一されたカラーリングが施されている訳でも無かった。暗闇の様な黒と、鮮血の様な赤い色。彼女の人類側識別名称は、深海棲艦〔潜水ヨ級 flag ship〕。所謂海の狩人である。

——……なぜ?……どうして?……どうしてこんなに、かたんにみんなをみつけているの?

その潜水ヨ級が何故海中を漂っているのかと言えば、答えは単純で『漂わないと生き残れないから』だった。

10隻にも満たない護衛艦に守られた大規模輸送船団がトラック諸島に向かっている事を知った深海棲艦は、極々自然に周囲に居た同族同士で艦隊を組み、その中でも上位種の深海棲艦を司令役として、輸送船団への襲撃を実行する。この点、人類が今まで経験してきた戦争における常識とはかけ離れた行動だ。人類における戦争は、その戦争によつて『何かしらの利益を得る』事を目的として行われている。その為その『利益』を大きくする為に『損害』を抑えるべく何かしらの行動を起こすのが普通なのだが、深海棲艦の場合は『例えどれだけ戦力差が有ったとしても』『全滅必至の大損害確定な状況』であつても、戦闘を仕掛けてくる。損切り等の概念など無く、まるで『海戦をする事』『殺し殺され、沈め沈められる事』だけが目的で有るかのよう。

無論その様なまるで獣の深海棲艦だけでは無く、定期的に発生する大規模戦役に置いて度々出現している『鬼級』『姫級』の様なトップランクの深海棲艦には、人類側の知る限りでは明確な思考能力が存在すると考えられていた。〔AL/MI作戦〕に置いて、多数の艦娘がアリュージョン列島や中部太平洋に大挙進出している中、精鋭クラスの深海棲艦が日本本土に対して進撃してきたことが、その証拠の一つである。まあその精鋭ク

ラスの深海棲艦は、この世界に来たばかりの『桜風』によつて一捻りで全艦残らず殲滅されてしまったが。

今現在海中を漂っているこのヨ級も、『姫級』や『鬼級』程では無いにしろ、その辺の海の藻屑となつている同族よりも高い思考能力を持つていた。とは言え、それは幸運だったのかは定かでは無い。潜望鏡に輸送船を捉えるどころかスクリー音の聴音を聞き取る事すら出来ずに『爆雷を搭載して正確に潜水艦を探知しているらしい単発機』と『強烈なピンガーで潜水艦を捉え、殆ど過たずに精密に爆雷やロケットを直撃させてくる数隻の護衛艦』と言う今までに無い『敵』によつて、不用意に浮上したり、魚雷発射管に注水する等して音を発生させた深海棲艦の同士たちが、一方的に、反撃も出来ずに続々と圧潰音、爆裂音を海中に轟かせて永遠の沈降を行つていたのだから、このヨ級は艦橋で一人恐怖に打ち震えていた。

——— 　　まただ。またあの『おと』がやはりはじめた……

最大潜航深度にて無音停止状態で有る為、その『妙な護衛艦』が打ち鳴らすピンガーの音はヨ級 flag shipの艦内に極めて大きく鳴り響く。もし他の同族の様に思



考能力が低ければ、こんな思いをする事も無く直ぐに沈んでいただろう。もし『鬼級』や『姫級』までに思考能力が高ければ、こんな恐怖は意志の力で抑え込めていただろう。このヨ級は不幸にも突然変異的に獲得してしまった、この海に沈む同族よりも高く、『姫級』や『鬼級』よりかは低い程度の中途半端な思考能力が有ったが為に、得体の知れない恐怖でなすすべも無くその真つ白い歯を打ち鳴らして震えていた。

——…いやー！いやいやいや！！おねがいー！みつけないで！！ばくらいをうたないで！！わたし、わたしなにもしないから！！

ピンガーの音が強くなるにつれて、ヨ級は一人頭を抱えて『妙な護衛艦』に見つかからない様に、必死にその『妙な護衛艦』に対して『お願い』をしていた。今まで人類や艦娘に対して執拗に攻撃して来て置いて『お願い』等と言うのは失笑物だが、このヨ級には『神』等と言った存在を知らない為、こうやるしか無かった。

——…あ……………みつかつ……………ちやつた……………

ピンガーの音が、今までの何かを弾く音から金属を叩く様な音に変わった直後、ヨ級

は頭上に爆雷を撃ち込まれた事を、自身の艦艇が持つ聴音機能で悟る。完全に動きを止めていた彼女に残された生き方は、爆雷が自身の居る深度に達するまでただただ茫然とするだけだった。

「…………敵潜水艦撃沈確定です！」

「了解、青葉。今の所『彩雲』も敵潜水艦の存在を探知していないわ」

「陽炎よ。こつちも敵潜水艦の存在は確認出来なかつたわ」

「…………私たちが来る意味無かつたんじやないのかしら？」

「満潮、もし一隻でも抜けられたら、最後の砦になるのは私達ですよ？」

「満潮ちゃんは対潜哨戒出来るから良いじゃないですか…………古鷹は普通の重巡洋艦ですから、潜水艦相手では何も出来ないですよ…………？」

「ふ、古鷹には瑞鶴たちが対潜哨戒に回っている間に、水上艦艇や航空機が来ていないか

索敵すると言う重要な任務があるから、ね？」

パツシブソナーで確認出来る圧潰音を聞き取った青葉が嬉しそうに報告を入れ、それに対して和氣藹々と言葉を交わす深山艦隊の艦娘たち。つい先ほどの危機感はその昔に何処へやら、瑞鶴が操る多数の『彩雲』が深海棲艦の潜水艦を徹底的に焙り出し、瑞鶴の指示に従って青葉と陽炎がそれぞれ『桜風』が開発した『噴進爆雷砲』『新型対潜口ケツト』で一隻残らず確実に撃沈していた。イザと言う時の為に覚悟を決めていた朝潮、満潮、古鷹の元には魚雷が一発も飛んでくる事も無かったのだから、ある意味当たり前だが。

もちろんこれほどまでに一方的にまで深海棲艦の潜水艦を刈り取れたのは、相手がウルフパツクの積りか波状攻撃を仕掛けて来た為、コレを各個撃破する形で撃沈し続けることが出来たからだ。初めての実戦における『彩雲』を用いた対潜水艦戦闘と指揮を大きな失策を起こす事も無く完遂した瑞鶴や、『桜風』開発の補助兵装を実戦で使っても異常や手違いを発生させずに戦い切った陽炎、青葉の努力の成果を否定する訳では無いが、やはり深海棲艦の攻撃が比較的少数での襲撃を繰り返す形になっていたのが一番大きいだろう。

【「ねえ、青葉さん」】

「陽炎さん？どうしましたか？」

【『桜風』の開発した兵装、本当に凄いいね！】

「……本当、そうですね」

短くも、万感の思いを込めて言葉を交わす二隻の少女。『桜風』の開発した音波探深儀<sup>アクティブソナー</sup>は、今まで陽炎たちが使っていた「三式水中探信儀」とは様々な意味で性能面が違っていた。過去、夕雲型駆逐艦などに搭載されていたこの「三式水中探信儀」は、艦娘化した米軍潜水艦よりもお粗末な為なのか、大昔の様に『掃海中に敵潜水艦に逆襲されるのが日常茶飯事』と言う事は無くなっていたが、伝え聞く欧州戦線や東太平洋戦線での米英艦娘の使うアクティブソナーよりも貧弱な対潜能力だった事は否定できない。

一方現在『桜風』の作り出した『音波探信儀』『新型対潜ロケット』『噴進爆雷砲』を実戦で使ってみて下された陽炎と青葉の感想は、『もう大日本帝国<sup>あ</sup>海軍<sup>の</sup>の装備<sup>具</sup>には戻れない』と言う物だった。ランクの低い『音波探信儀』の探知範囲は「三式水中探信儀」よりも狭いが、その代わり効果範囲内に深海棲艦が居れば無音潜航していようが何しているようが問答無用で確実に捕捉確実であり、その合わせ技で放つ『新型対潜ロケット』『噴

進爆雷砲』の威力や精度は、普段陽炎たちが使う【三式爆雷投射機】よりも桁違いだった。

一応擁護するとなると【三式爆雷投射機】の威力が弱すぎる訳では無く、『桜風』の開発する装備は例外無く、元々『桜風』の存在した世界の産物で有る為、通常の深海棲艦相手では完璧にオーバーキル以外の何物でもない威力過多なだけである。そもそも此方の世界では深海棲艦どころか艦娘でも、潜水艦には一切装甲が施されていないのが普通なのだが、『桜風』の居た世界では、戦争開始初期は兎も角中盤以降では潜水艦にもある程度の装甲が施されて居て居る為に爆雷数発程度では沈む事など有り得ない為、その装甲を破壊するだけの威力が対潜兵装には求められていた。色々とおかしい部分しか無いのだが、これが『桜風』の世界の『普通』である。

【……………やっぱり青葉たちもそう思う?】

「瑞鶴さん」

【「瑞鶴さん?」】

【「私も改めて、深海棲艦を次々と容易く屠れる事に興奮していたわ。前に使っていたのよりも、『桜風』の開発発した『彩雲』の方が、性能が上と言うのも有るけど、飛ばして居て楽しいし。……………まあ、慣れるまでが大変だけど、て言うか未だに慣れ切っている訳

「じゃ無いけどね」

通信を聞いていた瑞鶴も、青葉たちと同じ様に感想を漏らす。瑞鶴たち正規空母娘が通常運用する【彩雲】よりも、時速こそ609kmと変わっていないが、夜間飛行能力を持ち『あの時の帝国海軍』では45年一月と言う戦争末期も末期に投入された【東海】が装備した磁気探査装置よりも高精度な装置を搭載している。それに加えて機体防御力も【彩雲】より高い為にエンジン馬力が2300馬力だったりするが、『陣風』の3500馬力と比べれば操縦難易度も整備時間も楽だった。比べる対象がおかしいだけかもしれないが。尚通常の艦娘が使う【彩雲】のエンジンは史実『誉』の1800馬力エンジンである。

「提督さん。やっぱり『桜風』の開発した兵装、他の皆にも分け与えた方が良いんじゃない?」

「将来的にはそうしたいけど、今の所は時期尚早ね。大体、低位の『桜風』兵装の数もそこまで無いからね」

「それに、青葉たちも未だ高位の兵装には手を出せていませんからねえ」

「それを言ったら御仕舞だよ、青葉……」

外から見ると、戦場に居ると言うのに雑談に興じている様に見える少女たち。だが口では兎も角、彼女たちの視線や思考は今なお海や海図の方を向いており、『桜風』兵装の優越した性能に驕る事無く戦う立派な戦人の姿と雰囲気は、その美しい外見と合わさって芸術的な一枚絵となっていた。惜しくらむは、この光景を模写したり写真に収めたりする様な空気を読めない読まない読む気すら無い奴がない事だろうか。

「提督、此方駆逐艦『桜風』です！敵艦隊の殲滅を完了しました、そちらの状況は?!損害は?!」

「『桜風』、お疲れ様。コッチは大丈夫よ。『桜風』の開発した兵装、瑞鶴や青葉、陽炎が有意義に使ったおかげで損害は皆無な状況よ」

「それと、青葉たちに対して過負荷等の現象は起こっていませんので、安心して下さいね、『桜風』さん」

「……………よ……………良かった……………。もしかた何か起こって居たらどうしようかと……………」

「艦長すげえ焦りまくってましたからねえ」『ああ、まさか精密射撃無しで流れる様に全ての敵艦の艦橋を打ち抜くとは』「そして止めに零距离雷撃。ミンチよりひでえや」『被雷の衝撃で戦艦も正規空母も船体を最低2から3個に分割され』『駆逐艦と

軽巡洋艦と補給艦に至っては一艦残らず木片一欠けらも残さずに存在全てを爆裂消去』『尚交戦開始よりこの間僅かに45分程度』『そしてその時の艦長の表情は……』

「待ちなさいーい!?ちよつと何喋ってるの皆?!」

「『だつて』」「『そりゃあ』」「『ねえ』」「『艦長』」「『ぶつちやけ』」「『あの時』」「『鬼神もかくや、的な』」「『威圧感半端なかつたですし』」「『閻魔大王鬼阿修羅、みなして往来立たぬなり、つて感じでした』」「『戦闘映像録画は任せろーバリバリ』」「『良しでかした!すぐさまダビングからの全力拡散だ!』」

「よし最後から二番目ちよつとその映像器具寄越しなさいー!!!」

最後の『桜風』の言葉から後はわーきゃー騒ぐ妖精さんの楽しそうな声と、自身の妖精さんに全力でおちよくられている『桜風』のドタバタしている騒がしい映像と音声へと続くに当たり、つい先ほどまで少なからず漂っていた暗い雰囲気や雲の彼方へと消し飛び、何時もの深山艦隊らしいそれなりに肩の力が抜け、明るい雰囲気漂う艦隊となっていた。



「取り敢えず、後少しでトラック諸島に入港出来そうですね。こつちだとチューク諸島と言うのが正式名称…なんでしたっけ」

「そうですよ、『桜風』さん。第二次世界大戦頃を生きた日本艦娘にとつて、此処は『チューク諸島』じゃなくて『トラック諸島』ですからね」

「深海棲艦の侵攻で陥落して現地住民が全滅したから、今となつては名称に抗議する住民も居ないからね。良く勉強したわね『桜風』。偉いわよ」

「あ、ありがとうございます…えへへ…」

『桜風』の艦内で唐突に発生した『桜風』VS妖精さんによる鬼ごつこの結末は正直どうでも良いとして、出港前では強く不安視されていたこの輸送船団護衛戦も、結果だけを見れば損害無しでの完全勝利に終わった。そして任務達成に付属した成果としても、今回の戦闘で『桜風』の開発した兵装が、艦娘の錬成を絶対条件とするが極めて有効である事、そして何気に海戦成分が不足している結構プラスチックの溜まっていた『桜風』の妖精さんの血の氣が有る程度収まった事、おまけで多数の深海棲艦を撃沈する事が出来た事だろう。暫くの間、日本とトラック諸島間の海域では深海棲艦、特に潜水

艦の活動を一切確認しなかった事からも、如何に深海棲艦と言えども痛手を負った様子だった。

「トラック諸島……南の島、かあ……」

「『桜風』？どうしたの？」

「いや、鈴木さんに『夏になったら泳ぎに行こう』と誘われたんですけど、どう返事を返したのかなあと思い返しただけ」

「『桜風』さんの傷痕ですね……熊野さん辺りなら何か良い物を知っていると、青葉は思うのですが」

「……ああそうだ、夏で思い出した。『桜風』、いきなりで悪いんだけど8月に私と一緒に実家に来てくれない？」

「え？提督の……実家、ですか？」

「そうよ」

いきなりの提督の頼みに、目を白黒させる『桜風』。勿論『桜風』だけでなく、青葉や満潮たちも深山提督の唐突な頼みに対して驚いていた。艦娘から深山提督に何かを頼むことは多々有れど、深山提督から艦娘に対して個人的な頼みごとをする事は今まで一

度も無かつたのだ。

「司令官、ご実家に何か起こりましたのでしうか？」

「いえ、朝潮が心配しているような事じゃ無いのよ。……実家のお祖母ちゃんから『一族会議するから帰ってこい』って言われてね。『桜風』には護衛任務と言う名目で骨休めさせようかって。勿論、人数に限りは有るけど他の艦娘も連れて行きたいわね」

「……何よ、作戦中にそんな話をしだすなんて、意味分かんない」

「……そんな事言つてそっぽを向いても、『私も行きたい』と言わんばかりに足を激しく震わせていたら恰好好きませんよ、満潮さん」

「な、ななな何意味分かんない事言つてるのよ!?!青葉、貴女うざいのよ!!」

顔を真っ赤にして青葉の言葉を否定している時点で語るに落ちたり状態の満潮は兎も角、『桜風』は『骨休みと言うほど働いていないのですが』と深山提督の言葉に異を唱えるも「『桜風』……この一月位で『桜風』の挙げた戦果を数えた方が良いわよ」と言う陽炎の呆れた言葉によって否定された。今更だがこの駆逐艦娘、先ほど挙げた戦果を加えると既に100隻近い数の深海棲艦を海の藻屑へと変えている。深山提督が『桜風』を休養させようとするのは割と普通であろう。『桜風』は全く持つて異常も問題も無

いのだが。

「……分かりました。じゃあ鎮守府に帰った後にスケジュール設定をしないといけませんね」

「『桜風』、それより先にする事があるでしょ？」

「……………何か有ったつけ、陽炎？」

「……………外出用のお洋服、今来ている制服以外一着も持ってないでしょ」

「服？別にこのままで……」

「良い訳無いでしょ！あーもー、私が選んだげるから、この作戦終わったらカタログ漁るわよー」

「……………相変わらず自身の事には無頓着ですね、『桜風』さん」

「本当にね。…………陽炎と不知火とでの共同生活もだいぶ経つけど、こればかりは年単位で見守らないといけないかもね」

そんな何時も通りの『桜風』の無頓着発言に陽炎が適度に軽く怒る景色に、これまた何時も通りの反応と答えを返す青葉と深山提督だったが、その深山提督の脳内では青葉や『桜風』たちの様子を視界に捉えつつ、別の事を考えていた。

——…ある程度予測は付いていたから心の準備は出来ていたけど、また皆と一堂に会すのかあ…。実家や叔父さん達には何時もお世話になっているから仕方が無いけど

深山提督の一族は、口伝では現在の滋賀県、神奈川県、山梨県の「三か所の山深き土地より集いし一族」が由来で、先祖は戦国時代から江戸時代にかけて男は「刃心衆」年少の女は「妙采女衆」として京都のとある家に仕えていたと言う。公的資料は皆無である為に真実かどうかとは立証不可能だが、少なくとも深山提督の親戚が各地に居るのは事実である。その為、お盆やお正月等にはたくさん人間が深山提督の実家に集結するのだ。

深山提督が艦娘の提督になれる適性が有った事が分かった後は、一族あげての応援体制が呆れるほどに早く、深山提督の祖母によつて構築され、今も様々な差し入れを受けたりして居る為、この久方ぶりの祖母からの一族会議開催を断れなかった。因みにこの深山少将のお祖母ちゃん、子供好きなのは兎も角完全に高齢者の御歳であるにもかかわらず「冬の富士山に単独登山」をやらかす高性能御婆ちゃんである。勿論下山後皆に怒

られたが。

——まあ取り敢えずは、この輸送船団をトラックに送り届けて蜻蛉帰りしないとね。……私と仲本提督には面識無い筈だけど、何でか嫌われているみたいだし

そうやって、最後に考えを纏めた深山提督の視界には、現在太平洋戦線における対深海棲艦の最前線であり、深海棲艦の本拠地と現状目されているニューギニアの喉元に就き立てられた短刀であるトラック諸島の姿が浮かんでいた。

## 第三三話

## トラツク諸島行き輸送船団護衛戦

## 《急》

正式名称はチューク諸島、現在ではトラツク諸島が一般的な通り名である北緯7度25分、東経151度47分の場所に存在するこの小さな島々の一つに、艦艇全般に木材が使われていない、その代わりに何か色々ごちやごちや沢山甲板の至る所に搭載して居る奇妙な軍艦が停泊していた。

「……綺麗な景色だね、朝潮、瑞鶴さん」

「そうですね、『桜風』さん」

「戦争が終わったら、旅行でこういうところに行きたいよね」

その『奇妙な軍艦』では、3人の黒髪少女が、第一砲塔右舷側の甲板で椅子に座り、深海棲艦の侵攻によって元来存在していた筈の人工物が跡形も無く無くなっていたトラツク諸島の島々を眺めていた。尚、3人して『桜風』の主計妖精が持つて来たデザートとジューズを、美しい眺めを着に食べている最中、その他の駆逐艦『桜風』の艦艇に残っていた面々が何をしていたのかと言えば。

「…ですから、余り肌を見せたくないと言う『桜風』さんには、こう言ったワンピースタイプかセパレートタイプの水着で有る方が良いと、青葉は思うのですが」

「分かってないわよ、青葉さん。『桜風』の身体つてね、とてもスレンダーでスタイル抜群なの。だから、こう言ったタンクトップタイプのビキニがきつと一番可愛らしいわ。傷痕もきつとクリームで消せるしね。満潮もそう思うでしょ？」

「……私に聞かないでよ」

瑞鶴の艦内に何故か紛れ込んでいた水着写真集を囲み、年頃の女の子らしく陽炎と青葉が夏に『桜風』の着る水着に付いてのガールズトークを繰り広げていた。因みに満潮は逃<sup>Escape</sup>走に失敗した為に、『桜風』の主計妖精の持つて来たオレンジジュースとチョコレートケーキを食べて、嵐が過ぎ去るのを待つている状態だった。その両目からハイライトが失われている様に見えるのは、きつと気のせいだろう。

「……それで、『桜風』自身はどう思っているの？」

「正直な話、どんな水着が良いのかがまるで分からないので……。あ、でも流石に……えつと、まいくろ・みに？とか言うのだけは、この世で流行っていたとしても、ちよっ



と……」

「大丈夫だから『桜風』。そんな水着を着せようとする変態はこの艦隊にはいないから。それに流行つても居ないから」

「まいくろ・みに……瑞鶴さん、それは一体どのような水着なのでしょうか?」

「ごめん朝潮。流星にその質問には答えられない……」

一部常識欠落型真面目系と純朴型真面目系に挟まれながら目頭を押さえるお姉さん系瑞鶴。暇に飽かせてガールズトークを展開している青葉と陽炎がマトモに統制活動出来るとも思えない為に、同じく暇を持て余している『桜風』の護衛している瑞鶴は『早く帰ってきてよね、提督さん、古鷹さん』との言葉にならぬ思いを、蒼天を舞うカモメを眺めながらつぶやくのであった。

「……あ、あの……お、お願い!お願いします!!」

「え?」

「……この艦娘、のようですね」

「一体なんなんでしょうね?」

「いよいよ、陽炎の出番ね!」

「反応早かったねお二人さん。後その物騒な艤装を早く引つ込めなさい姉バカ一番艦」  
「……………やつと終わった」

特に予告無く、見知らぬ艦娘から大声で呼びかけられて甲板の縁に集合する6隻の艦娘。若干一名が今なお再起動の為の処理シークエンス真っ只中だが、そんな事とは関係無しに、恐らくこのトラック諸島の艦娘と思われる少女から飛んできた言葉によって、深山提督と古鷹が戻ってくるまでの間に、小さな騒動が起きるのであった。

「あ、貴女が有名な、さ、『桜風』さんであるとお見受けしました!!お願いします!私、私たちを、トラック諸島を助けて下さい!!」

「これが、今回トラック諸島に入港した輸送船団の内容です」

「拝見するわ。……………私は、確かに8隻程度に護衛艦を抑える様に要請はしたけれど、輸送船をこんなに連れてくるように大本営や海軍庁には要請していないわ。どういう事かしら?」

「さあ? 私としても大本営に護衛艦の隻数を伝えはしましたが、正式な命令書が来た以上、命令に従っただけです」

「そう……………でも、これだけの輸送船を一隻も沈める事無く、護衛艦の損失も弾薬以外存在しないと、余程の熟練艦で構成されているようね。最近深海棲艦の間引きが追い付かなくなっている此方に数隻移籍できないかしら?」

「お生憎ですが、此方も超兵器対策と首都防衛でそこまで余裕が有る訳では有りませんので」

「そう、残念だわ。此方には一日たりとも休ませる時間も無いのだけれどもね」

……………古鷹です。言葉や表情の交わり具合は至って普通なのですが、深山提督と仲本元帥の間の空気が吹雪のように感じられて仕方が有りません……

深山提督の付き添いとして来た重巡洋艦娘の古鷹がそう脳内で呟いたように、言葉での、表面上の受け答えには問題無く和やかそうに見えて、二人の提督間の空気が雷鳴と

吹雪で荒れ狂っている様に見える。先程の会話にも、注意深く聞くと皮肉を被せ合っている様にも聞こえており、面会と会話が開始して5分も経っていないのに早くも胃が締め付けられる感覚に苛まれ始めた重巡洋艦の天使であった。天使で無い艦娘がこの世に居るかどうかは不明だが。

——……深山提督、初対面の人に対してこんな風になった事って、大体駄目な相手だけど、この仲本元帥もそうなんですか？古鷹には、そうは見えませんが……

深山提督配下の艦娘でも、青葉と並んで最古参格である古鷹は、深山提督の艦娘に喧嘩を売ったり攻撃して来た提督やアレな人たちを何度かその眼に見て来た事が有る。その時、そう言った連中の応対をしている深山提督の雰囲気は、高い感受性持ちか付き合いが長くないと分からないが国宝レベルの日本刀の様に鋭く、そして冷え切っている。因みに古鷹の知る限りでも最上級の悲惨な最期を遂げた、深山提督の艦娘に対して【兵器を人間として扱う】事を徹底的に嘲笑した人間の末路は「自分の今までに犯した罪が何時の間にか全世界に公表され、今までに積み上げられた名誉も財産も全て灰になる光景をテレビで懇切丁寧に一から十まで繰り返し報道され、最後は逃走先の山で熊に生きたまま一人貪り食われる」と言う物だった。尚この末路を辿る経緯は、喧嘩を打った

輩の遺書と射殺した熊の胃袋からの推測になるのだが。

……仲本穂乃果元帥。その采配は神の如く、艦娘が現れたばかりのあの時代、数少ない艦娘を縦横無尽に操つて人類史上初めての勝利と反撃となつたトラック諸島攻略戦を成功させ、現在も深海棲艦を多数撃沈し続けて深海棲艦撃沈数単独ワールドレコードを更新中な、人類最強の提督指揮官。噂は兎も角、公にはこんな話しか有りませんが……この人も、駄目な人なんですか？

資材搬入や輸送船団の処遇、並びに深山提督の配下の艦娘への補給などの細々とした話になされている間、古鷹はそんな事を考えて居た。時間が経つに連れて激しくなりつつある胃痛を誤魔化すためとは言え、真面目な古鷹がこんな事を考えたりするのは大分珍しい事である。

……そう言えば、他の提督の鎮守府だと必ずいる秘書艦が、仲本元帥にはいませんね……。今日はお休みなのかな？

「……では、もう本土に戻るのかしら？ 慣例では、輸送任務を完遂した艦隊は輸送先で暫

く休養するのが普通だけど」

「折角のお心遣い頂き有難う御座います。ですがなるだけ早く横須賀に戻りたいので」  
「そう……残念だわ。色々と話してみたかったのに」

特に一言も話す必要性が無く、本当にただついて来ただけの古鷹を他所に、提督間の報告は全て終了した。古鷹視点では、終盤になると何故か狼と蛇が牙を剥きだして威嚇し合っている光景が幻視されたが、取り敢えず何事も無く終わりはした。因みに深山提督の方が狼である。

「じゃあ古鷹、『桜風』の所に帰ろうか」

「分かりました、提督」

「……深山提督。悪いけど『桜風』の所まで私も一緒に同行させて貰うわよ」

深山提督と古鷹が仲本元帥の執務室から退室しようとした直後、かかってきた電話にワンコールで対応し、応対に10秒と経たずに済ませて切った仲本元帥が、二人に対してその声をかける。当然疑問の表情を浮かべて振り返った二人に対し、仲本元帥は『桜風』と自身の艦娘が諍いを起こしているらしい』との言葉を伝えた。

「……………どう……………して、どうじで、わだしだちを助けて……………くれないの…?!」

「……………貴女の訴えは理解したよ。貴女が言う通り、このトラック諸島が大変な状況にあると言う事も」

「じ……………じゃあ、なんで……………」

ひやかかほるいたつてたがためにかひらく

「百花春至為誰開」

「……………え？」

「……………私は、駆逐艦『桜風』の根は、既に横須賀の深山提督の元に根付いている。例えいかなる言葉も掛けられたとしても、私の咲かせる桜の花は、深山提督と、艦隊の皆が居る場所以外には存在しない」

「……………ひつぐ……………お、お願いします……………お願いだから、助けて、『桜風』さん強いんですよ……………じゃあ、皆を助けてよお……………!」

「……生憎だけど、私の手は、ここトラック諸島にまで届くほどは長くは無いよ」

急いで深山提督達が駆逐艦『桜風』の停泊地に辿りつくくと、そこには大粒の涙を流して嗚咽を堪える一隻の潜水艦娘と、自身に縋りつくその潜水艦娘を悲しそうな目で見降ろす『桜風』。そして周囲には青葉や陽炎が如何して良いのか分からずにオロオロしていた。朝潮と満潮は提督に連絡しに走り、瑞鶴はその潜水艦娘を如何にか落ち着かせようとしていたと言うのに、肝心な時に全く役に立たない『姉』共である。

「……全く、此処まで物資を護衛してくれた艦娘に何をやっているの？」

「な、仲本元帥……で、でも、でも『桜風』さんが、深海棲艦が……」

「報告は聞いているわよ。でも対処出来るから。もう戻りなさい」

「……はい」

「申し訳無いわね、深山提督」

「別に構いません。『桜風』、一体何が有ったの？」

鶴の一声と言うべきか、仲本元帥の一言で瞬時に泣き止んで島内に歩き出す潜水艦娘を他所に、仲本元帥の謝罪を軽く流した深山提督の興味は、既に『桜風』が今の艦娘に



何を言われたのかと言う事にシフト済みであった。

「はい、えつと…要約したら彼女が偵察に行った先に『今までに見た事のない規模の深海棲艦』が存在したらしく、それで『助けて欲しい』と言われまして」

「……断つたのね」

「はい」

『桜風』にも謝っておくわね」

「……いえ、気にしないで下さい。それより提督、もう帰投されるんですよね？既に機関部、動かしてあります」

「ありがとうございます。……それでは仲本元帥、お元気で」

「……ええ、深山提督もね」

事態の急展開ぶりに目を白黒させている駄目シスターズを尻目に、深山提督と『桜風』は慣例を無視して手早く駆逐艦『桜風』に艦娘全員を載せて、トラック諸島より出港した。

「……………あんな泣き落とし程度では落ちないか。まあ、仮に落ちたとしても横須賀に戻させるつもりだったけど」

既にトラック諸島から出港し、水平線の彼方へと消えつつある駆逐艦『桜風』の後ろ姿を見ながら、誰も居ない波止場にて仲本提督は一人、そう言葉を零していた。仲本提督が異常な戦闘力を誇り、尚かつ異世界の兵器を多数開発出来る『桜風』の身柄を欲している事には変わりがないが、流石に『桜風』を自分の艦隊に引き込むには時期尚早かつ不利益が大きいと知っていた。因みについ先ほど仲本提督配下の潜水艦娘が言っていた『見た事も無い数の深海棲艦』が存在するのは事実である。現時点までの情報では能動的にトラック諸島にまでは進出してこないようではあるが。

『桜風』が我が艦隊に編入される時は、最低限深山満理奈が永久に提督業務の任務を果

たせない状態にあり、尚且つ『桜風』自身が此方の艦隊に編入を希望しなければならぬ。通常の艦娘で実行可能な海軍庁からの転属命令は、完全に逆効果になりそうね」

基本的に艦娘は一度所属した提督の元から離脱する事は、轟沈若しくは解体の二つである事が圧倒的多数なのだが、極少数ではあるが『提督が提督としての任務を果たせないと認定された時』や『艦娘を管理している立場である海軍庁からの転属命令』と言った事例の場合、艦娘の意志に関係無く元居た鎮守府や提督の居場所から別鎮守府へと移動する場合は有る。前者の場合は、対深海棲艦に対する戦果が著しく低く、日本や周辺諸国防衛を果たせないと判断された場合が大半で、後者は戦力の均質化をお題目に御飾り状態だったり死蔵状態の艦娘に対して出される事が有る。

とは言え、これらの事例は全て今までの艦娘：つまりは『元々この世界に所属していた艦娘』に対して有効なだけであって、異世界から来たが為に今までの艦娘に対して通用していた命令が『桜風』にも通用するかは不明確だった。下手にトラックに来るように命令書を出して、『桜風』に臍を曲げられたら溜まった物では無い。

「……まあ、『桜風』の事は良いでしょう。『桜風』の事を考えるよりも先に対処すべき事がある」

そう言いながら提督執務室に向かう仲本提督が懐から取り出したのは、本土に居る使  
い捨てかつ繋がりが存在しない手駒を動員して調べた深山満理奈、そしてその一族の情  
報だった。

……公的文書は例外無く隠滅済みとは言え、探ればいくらかでも情報は集めら  
れるのよ、深山少将。古臭い遺物は、新しき物に取って代わられるのが世の常。復権を  
狙って湧いて出た貴女の一族も、例外ではないわよ？

そう思考する仲本提督の視界には、「甲賀流、風魔一党、三つ者。それぞれに属した忍  
びが京都に集い一つになったのが深山一族の起源であり、現在では繋がりはもう存在し  
ないが、彼ら、彼女らは戦国時代中期ごろから明治期まで畏きところへと仕えていた」と  
言う、一般人どころか歴史学者でも先ず信用する事など無いであろう、深山一族の辿っ  
た歴史が書かれていた。

……ああそうそう、忘れる前にちゃんとやっておかないと

執務室に戻り、深山一族の事が記された資料を仕舞うと、仲本提督は自前の電話を用いて本土に対して通話を掛ける。そうして通話相手と繋がってまた一分と経たない内に電話を切る。変わらずスピーディーに通話を終えた仲本提督の表情はほんの少しばかり渋い表情だった。

「……全く、適当に粉かけておいただけなのに、私の手助けになるとか勘違いして了承無しに勝手な事されると困るわね。……さて、友人として遺族や世間、出席者の連中に受けの良い文面を適当に書いて送っておかないと」

— そう言いながら適当に書面を出して弔文を描き始める仲本提督。その弔文は一か月後〔誤って輸送船の数を多数送り込んだ事に責任感を感じて自宅に火を放ち焼身自殺をした、防衛省に所属していた仲本提督の大学時代の友人数名〕に対して贈られた。無論キツチリと、その「友人」が好きだった花束も添えて。

「……『桜風』、ちよつと良い？」

「提督？はい、何ですか？」

トラック諸島から出港し、一路横須賀に向けて航行中の駆逐艦『桜風』の艦橋にて、深山提督と『桜風』が話を交わしていた。因みに青葉や陽炎たちは艦艇を仕舞い込んだ艦娘状態にて駆逐艦『桜風』に乗り込み、戦艦大和や武蔵と同じくらいに高い居住性を前にして、思いつき遊びだしていた。自動化を徹底的に進めた結果かなり余裕のある乗員の各部屋全てにクーラーによる冷暖房が完備され、ダーツ等の小型遊具も存在し、当然の如くアイスクリームやラムネ製造機が存在し、場所によつてはベッドだけでなく畳と布団も有ったのだ。ハンモック等非常に倉庫に仕舞われている以外には存在しない。高い性能と引き換えに居住性が悪いのが当たり前だった日本艦娘に取って、興奮しない訳が無かった。

「……あの潜水艦娘の言葉を拒否したのは、私達と一緒に居たいと言うだけの理由？」

「……やっぱり、深山提督に隠し事は出来ませんね」

「それは、ね。流石に一月以上一緒に艦隊で過ごしているんだから、ちよつとした違和感位は感じられるわ」

『そう言う物なのかな』と言うちよつとした疑問が浮かぶ『桜風』では有れど、それよりも深山提督の疑問に答える事が優先事項で有る為、そのまま『何故あの潜水艦娘の言葉を拒否したのか』と言う疑問に対する『桜風』の答えを話し出す。

「あの時の言葉は本心でしたが、後は単純に、軍事的重要性の差を加味した結果も有ります」

「……トラック諸島と横須賀との軍事的重要性の違い、ね？」

「はい。横須賀鎮守府は文字通り日本国の首都東京を守る最後の盾であり、陥落は絶対に許されません。対してトラック諸島は、深海棲艦の住処となつているニューギニアに對する刃であり偵察拠点ですが、本土からもファイリピンからも遠く離れた、事実上孤立した飛び地です。偵察ならば精度は落ちますが人工衛星も有りますし、航空機や潜水艦

を多数巡回させる事でも補えます。最悪捨ててもカパー可能な土地と、絶対に死守すべき土地。優先するべき場所は明確かと」

「……なら『桜風』、敢えて軍事的と限定したのは？」

「資料を読み漁った限り、現状トラック諸島は人類が深海棲艦から奪還に成功した唯一の場所です。深海棲艦に対する唯一の勝利のトロフィーであるトラック諸島を捨てる事は、政治的に許される事ではないと考えました」

——パーフェクトよ、『桜風』

思わず拍手したくなる『桜風』の推察に、感心する深山提督。実際の所、日本のシーレーン防護の為に最低限必要なのはフィリピン以西であり、トラック諸島は事実上そのフィリピン防護の為の盾若しくは警報機のような存在でしかない。無ければ面倒では有るが、最悪捨てても替えが効かないと言う場所では無いのだ。

とは言え、それはあくまで『桜風』のいう通りに軍事的観点と言う一点だけで見た場合である。今なお世界各地に深海棲艦の攻勢で陥落した人類側領土が存在する状況では、このトラック諸島は『人類は深海棲艦に勝利できる』と言う物的証拠となっている。再度陥落すれば世界的な士気も弱まるであろうし、日本本土では又この事をネタに政争に走る政治屋連中がしやしやり出てくるだろう。軍事と政治は表裏一体で有り、どちら



か一方だけで語れるものでは無いのだ。

「……それに、業腹物では有りますが、あの仲本提督の対深海棲艦戦における手腕に関しては確かな物です。上がっている戦果だけを見ればの話ですが」

「……ああいう人間は、嫌いなようね」

「確かに戦争である以上、犠牲が出るのは極々自然ですし、それ以上に戦果を出している事は認めます。ですが、あの提督は必要以上に戦果を求めて多めに艦娘を磨り潰している。磨り潰すにしても、今はまだその磨り潰し時ではないでしょうに。私が偉そうに言えた義理では無いですけど」

「……全く、打てば響くと言う言葉を此処まで感じられた日は、今までに無かったわね」

「……?何か、言いましたか?」

「何でも無いわ。…何でも無いわよ」

疑問符を浮かべて深山提督を見る『桜風』に対して、深山提督は艦長席に座る『桜風』の頭を撫でて先の言葉を誤魔化す。確かに仲本提督は多数の艦娘を消耗品の様に沈めている。だが代わりに戦果に關してはそれ相応以上の物を得た上で沈ませている。現在確認できただけでも、キルレートとして軽量級艦娘10隻か重量級艦娘8隻と引き換

えに姫、鬼級20隻かレ級50隻、若しくはflagship改級の深海棲艦100隻を海の藻屑にしている。損失に対する戦果としては十分お釣りが来て余りあるだろう。

いわゆる『捨て艦』と言うやり方が始まったのは、深山提督初めての特別戦役<sup>イベント</sup>となつたアイアンボトムサウンド戦だが、大半の提督は自身の艦娘を自ら選択して失う事に耐えられずに『捨て艦』戦法は棄却された上に一部提督は精神を病んで病院送りとなつていたが、第一期生の中でも仲本提督の完全な同類だけはこの『捨て艦』戦法を海域突破に有効として嬉々として使っていた。そうしてまで海域突破一番乗りを目指していたと言うのに、最初にアイアンボトムサウンドを突破したのは『捨て艦等愚の骨頂』と公言して憚らず、有言実行して一隻も喪失しなかつた深山提督だったのだから、皮肉にも程が有るだろう。

『長髪美女に撫でられて目を細める美少女艦長かー』『かんちよー』『絵になりますなー』『かんちよー』『写真撮ろうぜー』『かんちよー』『ビデオカメラで良いかー?』『かんちよー』『4Kカメラか?』『かんちよー、何か変な艦船が居るのですかー』

『今すぐ通信を開いて。それとカメラは仕舞つて部署に付きなさい砲術妖精』

『えー』『えー』『別に良いじゃないですかー』『艦長命令は絶対です。早く仕舞つて部署に付きなさい』『そんな事言つて、副長が一ぱnあああ?!:貴重なカメラ壊さないでー?!』

「……いつ見ても楽しいわね、この光景」

「餌食になっっている私としては、頭が痛い限りなんですけどね……」

そう言いつつ目頭を押さえる『桜風』を他所に、その変な艦船ごと単艦で漂流している航空戦艦に近付く駆逐艦『桜風』。艦内放送で陽炎達も艦橋に続々と集合し、それぞれが通信で呼びかけている最中、それは起こった。

「……うーん……本来レ級がここに居る筈無いんだけどね」

「……あ、でも何か反応がありましたよ!？」

「さて、鬼が出るか蛇が出るか、ですね。……此方、日本国海軍所属、駆逐艦『桜風』です。貴艦の状況を答えられたし」

「『……ふむ。『桜風』がウイルキア解放軍では無く日本海軍を名乗るか……。やはり、此処は我が居た世界では無い、か」

「え、ウイル……キア?」

『?!艦長! 微少ながら超兵器機関の反応有り!』

「『ああ、心配するな。少なくとも今は貴殿と交戦する意思は無い』」

「『……超兵器『ドレッドノート』……間違い無いわね』」

「その通りだ。我が名を覚えておいてくれて光栄だ、ミス『桜風』」

「戦艦砲や対艦ミサイルを乱射する巨大潜水艦を忘れると言う方が無理です」

「ははっ、確かに、そうかもしれないな……ああそうだ、この通信はミス『桜風』の目の前に居る航空戦艦を通じて送っているから、探しても無駄だぞ」

『ドレッドノート』の声色は極めて平穏だが、駆逐艦『桜風』の艦内では妖精さんがソナーを打ちまくって『ドレッドノート』の位置を測定しようと躍起になっていた。だがそれらしい反応は見られず、『ドレッドノート』の言う通り『この海域にはいない』と言う事を証明するだけに終わった。

「……大西洋からわざわざここつちに来たのは、ウィルキアがこの世界に存在しない事を確認する為？」

「ああ、そうだ。我はそこまで頭が回る訳でも、諦めが良い訳でも無いからな。異世界に転移したなどと言う世迷い事、直接確認しないと信じられなかった。まあ、ミス『桜風』の言葉で、この世界に我が本国が存在しない事が理解出来たがな。感謝する」

「……そうですか。では『ドレッドノート』、これからは一体如何するのですか？可能であれば……」

「ミス『桜風』の居る場所に来て欲しい…か？」

「ええ。貴女の戦闘力の恐ろしさは、私自身が身を持って知っています」

勝手に話が進んでいるが、深山提督達は一切言葉を挟もうとする気配はない。青葉たちは『桜風』の戦場における雰囲気には知らず知らずのうちに呑まれ、深山提督は口出ししない方が良くと直感的に感じ取って居た為である。

「ミス『桜風』の折角の申し出は有難く思う。だがその誘いは受けられない」

「……なぜ？」

「我は栄え有るウィルキア帝国海軍所属、超兵器『ドレッドノート』である。例え異世界に来たと云えども、我にはウィルキア解放軍に属していたミス『桜風』と共に有る事は許されないのだ」

「この世界には、私たちの故郷は歴史上何処にも存在していません。もうウィルキア帝国海軍として縛られる必要も有りませんが」

「心にも無い事を言う物だな、ミス『桜風』。我は超兵器『ドレッドノート』で有るが故に、ウィルキア帝国海軍でなければならぬのだ。その事は、ミス『桜風』にも何となくであろうが分かるだろう」

「……そうですね。失言でした」

「構わぬ、が……。もし本当に失言だと思っっているのなら、私の要求を聞いて貰いた  
らう」

「なんでしよう?」

「我と決闘しろ、駆逐艦『桜風』よ」

「良いでしょう。場所はここで、時間は二週間後で如何ですか?」

「ちよちよちよちよ、一体何言ってるんですか『桜風』さん?!」

「そ、そそそうよ! また大怪我するつもり!? 下手したら沈むかも知れないのよ! 決闘な  
んて!」

いきなりの『桜風』から飛び出たトンでも発言に、溜まりかねた青葉と陽炎が口を挟  
む。『決闘』と言っている以上、この『ドレッドノート』と『桜風』は一对で戦うのは  
明白。『ヴィルベルヴィント』の時でもズタボロになっている姿を見た青葉や陽炎とし  
ては、容易に了承出来る事では無かった、が…。

「すみません、青葉さん、陽炎。流石に今青葉さん達が思っ  
ているであろう提案は受け入  
れられません」

「……………いいのか、ミス『桜風』。我が言うのも何だが、増援が居る方が貴艦の優位に戦えるであろう?」

『ドレッドノート』、その言葉そっくりそのままお返しします。それに、貴女は失言の対価に『決闘』を求めているのだから、此方もそれにこたえろと言うのが筋と言う物でしょう?」

「……………全く、我としては有難いが、大分損な性格をしておるな、ミス『桜風』」

「奇襲を仕掛けずに通信を回す等と言う潜水艦に有るまじき行動をしている貴女程では無いですよ……………多分」

「……………良いの、提督さん?」

『桜風』が良いと言っている以上、その言葉を信じるより他無いでしょ?」

「……………有難うございます、提督」

「……………では二週間後、この海域にてまた逢おうぞ。ミス『桜風』……………貴艦と戦える日を、我は楽しみにしているぞ」

その言葉を最後に、『ドレッドノート』からの通信を送信していたレ級の船体が唐突に爆発。遠隔起爆式か、若しくは通信が切れた時に爆発する様に仕込まれていたと思われる爆発を最後に、超兵器『ドレッドノート』からの通信は一切途絶えた。

「……まさかとは思うけど、その『ドレッドノート』とか言う奴、いくらノーマルタイプとは言えレ級を戦闘不能に追いやった上で此処まで引つ張ってきたの……?」

「だと思ふよ、満潮。……昨日の昼の戦闘で嗅ぎ付けられたのか。開発で兵装の換装もしたいですが、対超兵器部隊の修練も未だ途上。やる事山積みですね、提督」

「そうね。でも取り敢えず『桜風』、その事を考える前にやる事が有るわよ」

「え?……何か有りましたか?」

「勝手に単独で死地に飛び込む気満々な友人に激昂している二人を早く鎮めなさい」

その深山提督の言葉が紡がれるより早いか、一隻の駆逐艦娘と一隻の重巡洋艦娘それぞれの片手が、駆逐艦娘『桜風』の方の片方ずつに置かれる。易々と逃げ出させない為か、その片手の力はかなり強い。

「……………」『桜風』さん?」

「……………」『桜風』?」

「あの、青葉さん? 陽炎さん? 声色だけでスッごく怒っている事が丸分かりなんです、が、『桜風』、何かいたしましたでしょうか……?」



『友人に何も頼らずに一人で死地に飛び込む事を決めた事に、友人として怒っている』  
と言う事に今なお気付いていない『桜風』。その『桜風』の様子に、太い荒縄が千切れる  
様な音を『桜風』以外の全員が聞いた直後には。

「これはお説教が必要なようです、陽炎さん」

「ええ、そうですね、青葉さん」

「え？え？え？なんで？なんでですか？え、わ！？ひ、引き摺らないで二人とも！ちよ、  
ちよつと肩が！肩引つ張らないでえ！？びやあー！……」

「司令官」

「きつと大丈夫よ……きつと」

『頑張ってください深山提督』『ぶつちやけ艦長のアレは完全に素です』『涙吹きましょ  
う、艦長のハンカチ渡しますから』『因みに我らに艦長を止める事は出来ませんのであし  
からず』『寧ろ止めたら死ぬしな』『大丈夫ですか？ケーキ食べますか？』

『桜風』が居なくなつた艦橋では、シリアスな雰囲気が見事に黄泉の彼方に消し飛んだ

事と相も変わらず能天気な駆逐艦『桜風』の妖精さんズに、これからの予定を考える気力も無くなった深山提督であった。

——…：…超兵器『ドレッドノート』との交戦予定時刻まで、後14日間…：

## 第三四話 起 对超兵器『ドレッドノート』戦の準備期間

「……あの日から二日。『桜風』との決闘まで、残り12日か。……それまで、我はこの残された生をどう過ごすべきなのやら」

西太平洋上に浮かぶ、一つの鋼鉄の島。その鋼鉄の島：超兵器『ドレッドノート』の船体の縁に腰かけた一人の女性が、一面の青い世界を眺めながら、そう呟いていた。ウイルキア帝国海軍が採用していた、白と青を基調とした女性用軍服を身に纏い、白磁の如く白に透き通った肌に対比するかののように深紅に輝き、海風に靡くシヨートヘア。『ドレッドノート』<sup>この潜水艦</sup>がこの世界に来て得た依代である。

「……たった一隻の駆逐艦に撃沈されるばかりか、気付いたら女性の依代を得て、沈んだはずの海域に浮かんでいる。超兵器だった時代、まさかこの様な事態になるとは思いもよらなかつたな」

しかも、艦内には女性の依代を得た『ドレッドノート』を除いて乗員は誰一人としてお

らず、ウィルキア帝国との通信は皆無であるばかりか、『桜風』に沈められる前には周囲が旧式の電子機器を搭載していたが為に大半が使う必要性が無く動いても意味の無かった電子機器が全力で稼働しており、その電子機器で集めた情報は全て『ウィルキア』と言う国家等歴史的に存在していない』と言う物である。『この様な事態』を予測できる存在など、神で無ければ余程の空想作者ぐらいな物だろう。

——…それにしても、女性の身体とは不思議な物だな……。こんなに重い物を常に二つぶら下げているとは、人間とは難儀な生き物であるな

スイカとまでは行かないが、少なくとも良く熟れたメロン程度の大きさは普通にある乳房を持ち上げて見下ろし、自分の身体的特徴の一つにそんな事を考える『ドレッドノート』。駆逐艦『桜風』に対して決闘の申し込みを成功させたのは良かったのだが、その間の時間の消費の仕方が全く浮かばなかったので、取り敢えず一日目と今日の朝方は何をするでもなくのんびりと海風に当たりながら綺麗な大海原や、澄み渡った満天の星空を眺めていたりしていたのだが、早くも飽きた『ドレッドノート』なのであった。

「…………ふむ。今更で有るが、あの時に何か暇つぶしの本か何かを貰えるよう交渉すれば

良かったやも知れぬな。だがそうすると、確実に我と『桜風』だけでなく、余計な介入が有るであろう。あの選択は正しかったと自分を慰撫するしかあるまいな。どうせ沈められるにしても、雄々しく戦って沈みたいのう……」

既に『ドレッドノート』は前の世界で与えられた通商破壊任務に従い、この世界のアメリカ海軍やイギリス海軍に対して攻撃を行い、多数の艦艇を撃沈、若しくは大破等の大損害を与えている。一応純粋な民間船と思しき船舶には手を加えていないが、軍艦に与えた損害だけでも相当な物である。

『この世界』が、『ドレッドノート』が本来生きるべきである『あの世界』ではない以上、『ドレッドノート』の行った行為は全て『ドレッドノート』自体が責任を負う事になる。もし『桜風』の誘いに乗って『桜風』の属する艦隊に入ったとしても、確実にアメリカとイギリスからの猛抗議で『桜風』の居る別世界ウイリアムス帝国とは無関係の國家の日本に多大な迷惑がかかるだろう。【勇敢な】「恐れを知らない」『ドレッドノート』であるからこそ、そんな醜態や無様、迷惑を晒してまで生きたくは無かった。そう考えた結果が『決闘』と言う風に変に飛んだのは、やはり女性の依代を得ていても『ドレッドノート』は『超兵器』のままであるからだろうか。

……しかし本当にする事がないのう……艦内になんぞ面白い物が残ってお

らぬかな？此処ままでは我は暇に殺されてしまうぞ…

そう考えて縁から軽快に後転して甲板に立ち、艦内に戻って各所を物色し始める『ドレッドノート』。その後倉庫の一室から釣り道具一式を発見した為意気揚々と釣りを始めたら、一発目から体重が400キロ近いマグロをヒットさせて数十分にわたる激闘を大騒ぎしながら繰り広げるのだが、それはまた別の話である。因みに釣り糸一本と引き換えにそのマグロを釣り上げる事には成功した模様。

横須賀鎮守府の第3海上部隊所属に所属する深山艦隊が管轄する港は、通常の艦艇が停泊する軍港とは比べ物にならない程に小さい。元々艦艇は自身の艦艇を仕舞い込めると言う反則技が有る為、海上に艦艇を停泊させる必要性が全く無いのだ。損傷を負った艦艇に関しては流石にドッグで入渠させる必要があるが、それでも通常の艦艇とは話にならない程の速度で修復作業が完遂し、尚且つ妖精さんのお陰で必要とする面積も少ない為、工廠やドッグは地方の小さな漁港レベルの敷地面積でも何の問題も無く鎮守府は戦えている。

もちろんこれは深山艦隊だけの専売特許で有る筈も無く、この妖精さんと艦娘の特性を生かして日本の各地や東南アジアの、妖精さんや艦娘の居心地が良いとの事にて旧日本軍が駐留していた土地には複数の各提督が管轄する鎮守府が有る。一例をあげると、現在では管轄する場所こそ違うが深山艦隊の居る横須賀鎮守府には6名の提督とそれぞれの艦隊が存在している様に。そんな本来の常識では有り得ない位に小さい港に有る埠頭では、数名の少女たちが屯っていた。

「……………結局、『桜風』の案はあんまり上手くいかなかったようね」

「うう……………すみません、皆さん……………。態々協力して頂いたと言うのに、この始末で……………」

『桜風』は悪くないでち……………悪いのはゴーヤたちの能力不足でち……………ひいつ、い、嫌でち、もう魚雷は浴びたくないでちいいい……………」

「大丈夫です『桜風』ちゃん！ボロボロだったけど、でも、比叡は負けません……………はい！ソロモン見たいな事になりましたけど！比叡は大丈夫です!!気合!入れて!いきますッ！」

「アカン……………アカンで……………二人の眼が完全に死んでほるで司令はん……………」

「……………イムヤ、金剛。お願い」

深山提督のその一言にて、ゴーヤはイムヤに、比叡は金剛の手によって曳航されていった。『もう浴びたく無いでちもう浴びたく無いでちもう浴びたく無いでち……』と涙を流して呪詛の言葉の如く繰り返す伊58と『気合！入れて！いきますッ！気合！入れて！いきますッ……』とハイライトが掻き消えた目で連呼する比叡。この光景を目撃した漣が『SAN値直葬キタコレ』と表現していたが、妥当ではあるだろう。そして失礼な事を言っていると認識した妙高の手によって制裁された漣に祈りを捧げてあげよう。

「……いやあ、正直言うと話半分に聞いとつたんやけど、『桜風』はんの力つてホンマ凄いなあ」

「スツゴイ皮肉にしか聞こえないわよ、黒潮」

「……や、ややなあ陽炎姉、そ、そんな事あらへんよう？」

「……ああ、うん……私にとつては普通だけど、皆から見れば思いつきり気持ち悪いよね……アハハ……」

「ち、違うでな『桜風』はん！そう落ち込まんといてな！アツチで貰ったこのスルメやるで機嫌直して、な!?!」

比叡に負けず劣らずにハイライトが消滅した眼で水平線の海を眺める『桜風』に対し



て、一時期新設された幌筵泊地に配備された新人提督や艦娘の教導に向かっている『桜風』達がトラック諸島から横須賀鎮守府に帰港した日に深山艦隊に復帰した黒潮が必死に宥めに入る。駆逐艦『桜風』が深山艦隊に加入してから既に二カ月近く経過しているが、『桜風』の戦闘機動が通常の艦娘とは全く違う……有体に言えば『キモイレベル』で違っている事を昨日『桜風』の演習時の映像に乗せられたコメントを見て思い知った『桜風』は、何時ものほんわかしている状況から代わって、今日はネガティブな感情や言葉に終始していた。コメント主自体は褒めているつもりだったのだけでも。

「あーうん……『桜風』、結構打たれ弱いみたいだからねー。『桜風』、あのコメントなんか気にしなくてもいいのよ？」

「陽炎姉さんの言う通りです。ああ言ったコメントは嫉妬や称賛の裏返しでもありませんからね」

「……まあ、うちらとは段違いの機動やったのは事実やけどな……」

「おお……もう……」

「ねえ黒潮、『桜風』をイジメて楽しいの？ 教導に行っている間、何か嫌な事でもあったの？」

「黒潮……見損ないました」

「え、今のもアウトやの?! あ、あああ!?! ホンマ堪忍して『桜風』はん! 体育座りして海眺めんといてな!」

埠頭の先つちよに体育座りして、どんよりと暗い雰囲気纏って海を眺める『桜風』と、それを何とか元氣付けようとする妖しい関西弁使いの黒潮。改装する前の扶桑姉妹とタメを張れそうな不幸オーラによって『桜風』の周囲がどんより曇り空となっている中、深山提督と陽炎型駆逐艦の一、二番艦は揃ってため息を吐いた。

超兵器『ドレッドノート』と二週間後に決闘する事が決まっていたからの『桜風』の行動は早かった。青葉と陽炎の説教を何とか交わしてから、駆逐艦『桜風』の最大船速で進路上に存在したはぐれ深海棲艦を6隻の内4隻を爆殺、2隻を轢殺して母港横須賀鎮守府に帰投後、休む間もなく工廠に突撃し……工廠の主である工作艦『明石』に追い返された。明石としては『桜風』の望みは叶えなかったのだが、タイミングの悪い事に深山艦隊の通常の出撃に向かっていた艦娘が数名損傷を負っており、其方に注力しなければならなかったのだ。流石にその事情を説明されれば、『桜風』は引き下がるよりなかった。

焦りに焦る『桜風』だったが、深山提督の一言、すなわち『北方から黒潮が帰還したわ。部屋は陽炎達と同じだから自己紹介して着なさい』との言葉にて一端『ドレッドノート』の事を脇に置くことが出来た。その後母港に帰投した昼に初対面した黒潮から『なんや陽炎姉。何時の間にか恋人作つとつたんか』と関西人っぽくからかつて陽炎が慌て、『桜風』は意味を良く噛み砕けずに不思議そうな表情を浮かべたりしていたが、その話は横に置いて置こう。

「あの後比叡さんとゴーヤさんに明日の演習を頼み込んで、深夜になるまで対潜水艦戦術を探し回るとは思いもませんでした」

「資料室で山と積んだ本と熱い位にパソコンを酷使している『桜風』、集中し過ぎて昼も夜もご飯食わず、お風呂にも行かなくて、肩掴まれるまで何時かすら気付かなかつた位だもんね……」

「……それで、その時にインターネットで自身の演習動画コメント見たのね……。焦るだけだと、最良のパフォーマンスを發揮出来ない事は分かっているみたいだね、『桜風』自身は」

「頭では分かかっていても、心は正反対の事を叫んでいる。……その気持ち、不知火には良く分かります」

そう言つて、右手を胸に当てながら『桜風』を見やる不知火。駆逐艦の頃、不知火は混乱する戦況の中既に沈没していた鬼怒の救援に知らぬまま向かい、捜索を断念し撤退中に大破擱座した夕雲型駆逐艦の早霜を救援しようとして米軍機の爆撃にて爆沈し、乗員全員が戦死している。その早霜を救援する際『敵襲ノ恐れアリ、来ルナ』と信号が送られるも、不知火は構わずにカッターを下して救援しようとした。危険で有る事など百も承知で友軍を助けようとした乗員の想いを良く知っている不知火には、超兵器に対抗できるのが自身しかないと言う状況である『桜風』の焦る気持ちが良く分かった。

「……………しかし、そうして実施した『桜風』さん考案の対『ドレッドノート』戦の演習が全く意味を成さなかつたというのは、司令……………」

「対超兵器部隊には……………悪いけど、今回は後方待機か、若しくは深海棲艦相手の戦闘をして貰うわね」

「……………仕方が無い、か……………。悔しいなあ……………何時になつたら、ちゃんと戦える様になるのかな……………」

「……………陽炎姉さん」

「焦つても仕方が無いわ。一步一步、着実に……………」

今回臨時に行われた演習では、水面上では戦艦並の砲撃力、防御力、速度を持ち、海中でも潜水艦らしく自由自在に暴れまわる正しくその名の通りな超兵器である『ドレットノート』に対する仮想演習を実現する為に、深山艦隊の戦艦の中でも足が速い金剛型戦艦の比叡、そして歴戦の伊58を動員して二隻に綿密な連携を取らせる事によって疑似的に『ドレットノート』との戦闘状態を再現しようとした。結果は比叡と伊58が『桜風』の本気の砲雷撃の弾幕で精神が耐え切れず、また『ドレットノート』の性能再現も全く出来なかつた為に見事なまでの大失敗に終わつたが。

「……………うう……………もうやだ……………私、堤防のフジツボになりたい……………」

「『桜風』はーん!?頼むで正気に戻ってえな!?『桜風』はん頼むで元氣だしてな!比叡はんとごーやはんにお礼のお菓子持っていけば必ず許してくれはるで!!」

「……………陽炎、不知火。姉としての二人の意見は?」

「取り敢えず明日になれば吹っ切れてると思つたわよ、司令」

「不知火も同意見です。ですが、今は『桜風』と黒潮との間が親しくなるようにした方が良いのではないかと思います」

「……………二人もそう思うか。じゃあ、『桜風』の事。何時も通り宜しくね」

そう言つて、未だかつてない程に暗い『桜風』の事を任せつつ、深山提督は踵を返して有る場所へと歩き出す。草陰に隠れて『桜風』を見ている、グレー色のサイドテールに艤装の黒いシヨルダーベルトが特徴的な、先日中破状態で帰還後に改二へと改造されたばかりの朝潮型駆逐艦の霞、そしてそのお仲間たちの元に。

「……それで、未だ『桜風』の事が怖い、満潮？」

「……別に、そんなんじゃないわよ」

「ではなぜ？『桜風』さんは悪い人では有りませんかよ？」

「そんな事くらい分かつてる……御免、朝潮。でも……やっぱり無理よ……」

膝を抱えて座り込む霞の相変わらぬ弱音な発言とふさぎ込んだ表情に『処置無し』と言わんばかりな表情でアイコンタクトを交わす朝潮型駆逐艦の一番艦朝潮と三番艦満潮。以前『桜風』による超兵器対策会議で、『桜風』の演説に加えて余りにも純粹過ぎる戦意の様な物を直視したが為の『桜風』に対する恐怖感が、今なお霞からは消えていなかった。

「……頭じゃ分かつてるのよ。アイツは、味方に砲口を向ける様な奴じゃ無い事位。……でも、アイツの顔を見るたびに思い出しちゃうのよ……」

「……それで、霞は何時までも『桜風』の事を避け続けるつもり？」

「しっ司令官?!」

「司令官? どうして此処に来られたのですか?」

「……何よ、笑いにでも来たの?」

——これは一筋縄には行かないわね。……もしかしなくても『ドレッドノート』と遭遇して帰港してからの『桜風』の鬼気迫る表情でなおさら霞の恐怖感が煽られたのかしら

自身の上官である深山提督に対してこう言った不適切な言葉はもう今更では有るが、

霞本来の強気な性格が完全に消え失せ、怯えたウサギの様な表情と元気の無い姿は相当珍しい。と言うより『桜風』の超兵器対策会議以前には絶対に有り得ない姿でもあった。

「『桜風』、ちよつと気にしていたわよ? 『私、霞になにか避けられるような事を言いましたか』って」

「……司令官、それホント?」

「嘘言つてどうするのよ満潮。まあ、少なくとも『桜風』にとつて『あの時』の言葉は、疑う事も無い『当たり前的事』だったわね。例えるなら日本人が家に入る時は靴を脱ぎ、ご飯を食べる時には箸を使う位の」

「確かに、『桜風』さんに取つて見ればその位の常識的な感覚で有れば、あの時の堂々とした言葉は寧ろ普通なのでしょう」

「『桜風』の世界の常識は、コッチの世界だと非常識の塊なのよ……って、これ何回言つたのかしら」

最後の満潮の言葉は、『桜風』が深山艦隊に加入して暫くの間多くの艦娘が幾度と無く感じた思いである。天龍が『桜風』の肘撃ちで吹っ飛ばされたり、艦隊行動に係る能力が壊滅的であつたり、先進的な兵装を操つていふと言ふのに微妙に現代技術に適応



出来ていなかったり。『桜風』の性格は基本真面目で有り、又陽炎や深山提督、青葉たちが『桜風』と深山艦隊の艦娘との橋渡しを行った為『異物』として忌避、迫害される事は一度も無かったが、『桜風』の余りにも突拍子も無い言動には呆れ混じれになるしか無かった。飛龍や蒼龍等一部の豪の物は酒や食事の肴として面白おかしくネタにしていたりもしているが。

そして、その深山提督の言葉に対して、霞は何も答えなかった。

「……………霞も知っている通り、超兵器『ドレッドノート』の出現が確認され、12日後には『桜風』と『ドレッドノート』は南洋で激突する」

霞からの返事は無い。無口なまま、自身の提督を見上げるだけであった。

「霞。貴女も来なさい。艦艇では無く、艦娘の状態だね」

「司令官!?!」

「……………分かったわ。12日後ね。……………それまで準備しておくわ」

朝潮の驚きの声を他所にアツサリ深山提督の言葉を受け入れた霞は、幽鬼の様に力な

く立ち上がり、艦娘宿舎に向けて歩き出した。力無い後姿に完全に動揺する二隻だったが、霞を追い掛けるのは直ぐにでも出来るとして深山提督の言葉の真意を問いただし始めた。

満潮と朝潮

「……どういふつもりよ、司令官。今の霞を戦場に連れて行ったら……」

「もつと悪化する、つて言いたいんでしょう？ 私も正直そうなるかも知れない事は重々承知の上よ」

「司令官、ではなぜ……？」

「これからは否応無しに『桜風』と朝潮たち普通の艦娘と共同戦闘を行う可能性が極めて大きいのだよ。なのに『桜風』を畏怖して思考や行動を鈍らせている今のままだと、確実に霞は沈みかねないわ。……それも、場合によっては僚艦も巻き込んだ上で」

「……だから、無理矢理にでも『桜風』の存在に慣らすってわけ？」

「そうよ。本当はこんな事したくは無いです……今は悠長な事を言つて居られる状況では無いしね。『ヴィルベルヴィント』に続いて『ドレッドノート』が出現した以上、その他の超兵器もいつかは出てくると想定するべきだから」

戦争に絶対と言う物は存在しない。今回の輸送船団護衛戦では速力等の関係によつ

て深山艦隊対超兵器部隊所属の長門や大和が編成から外され、緊急に『桜風』製兵装を搭載して居ない深山艦隊の朝潮、満潮、古鷹が動員されている。『桜風』製の兵装の開発は基本的に一般的な艦娘と同じように不安定であり、尚且つ処理能力関係もあつて深山艦隊全ての艦娘を早急に強化するのは夢物語以外の何物でもない。

その関係上、深山艦隊は一般の艦娘が今まで通りの兵装や耐久力で『桜風』と共に海戦を行わざる状況が発生する可能性も確実視していた。超兵器だけが敵ならば自衛軍や在日米軍の輸送機やヘリコプター、そして現在日向が100機程海没、墜落させながらも必死に修練を積んでいる『UH-60J ブラックホーク』を使えばどうにかなるかも知れなかったが、生憎敵は超兵器だけで無く深海棲艦と言う意思疎通不可能な難敵が多数存在する。超兵器の出現でどのようにパワーバランスが崩壊するかが分からない以上、『桜風』との共同戦闘に拒否反応を示す艦娘の存在を許容する事は、指揮官として出来る筈も無かった。

「……では司令官。……もし霞が『桜風』さんに適応できなかった場合、どうするのですか？」

朝潮のもつともな言葉に、小さく乾いた笑みを浮かべた深山満理奈少将は、簡潔にこ

う答えた。

「少なくとも、既に決意を固めてはいる霞が完全に折れる事だけは無いわ」

「……もしもし？一応私勤務中だから、日中の通話だけは出来るだけ避けて欲しいのだけど。頼んでいた件の話？」

霞を追い掛けていった満潮と朝潮を見送った深山満理奈は、『桜風』の元に戻りながら電話をしていた。黒髪を靡かせながら歩き電話をする軍服の女性。そう言うのが好きな人間にとっては鼻血物の光景かも知れないが、生憎この場にいるのは深山満理奈だけ

一人であつた。

「……ああ、うん。ありがとう。大体予想は付いていたから。全く持つてスマートフォンじゃないけど一番確実だからね、情報封鎖の為なら」

事も無げに通話相手の謝罪に対して軽く返す深山提督。通話の声色や表情がそこそこ柔らかい物である為、結構親しい間柄で有る事は容易に見て取れる。見る人が見れば、今の深山提督が見せた表情は艦娘に対する『友愛』の情では無く『親愛』の情であつた、と評価するだろうか。

「……うん、うん。分かつた。じゃあまた今度の里帰りの時に逢おうね。取り敢えず前に君が求めた飲み物持つていくから、用法容量は厳守した上で相手との同意はしっかりと取る事。私の事を訴えても意味ないし知らないからね」

電話先で慌てた青年の大声が右手に収まる携帯から漏れるのを無視して電話を切りながら、深山提督は簡単に考察を始めていた。

——うーん……結局あの輸送船団が何故あんな無茶苦茶な数になったのかは詳細不明のままか。確たる証拠が見つからない以上、何も出来そうに無いし……

視界だけは前方を向いてしつかりとした歩を進めながら、脳内では様々な考察を高速で、まるで機織りの如く細かく積み上げ出していった。今回は問題無く終えられたものの、下手すればアレだけの輸送船が海の藻屑となる危険を冒したのだ。何が有つてあの数となったのかは可能な限り知る必要が有った。

——……今の段階では証拠も情報も無いから考察は不十分かつ不正確な物に成らざる負えないわね。現状でやれる事は今までと変わらず『桜風』と交流を深めて日本に対して攻撃しない様に、又人類を攻撃するスイッチが一体何処に來た、或いは何処にあるのかも調べないと。あんまりする意味もなさそうだけど

そんな風に脳内でタップリー10分ほどかけて出した結論に軽く自嘲の笑みを浮かべながら『桜風』の元に辿り着いた深山提督が目にしたものは。

「……………陽炎」

「えつと……………取り敢えず『桜風』の落ち込み具合が改善されたから大丈夫かなあつて……………」

「大物！これは絶対大物！！早く釣り上げられなさい謝罪の為の料理を生み出す為の糧とする為に！！」

「さ、『桜風』はん？結構釣り上げたと思うんやけどこれ以上釣るんか？」

「黒潮。もう『桜風』の思うがままにさせましょう」

バケツ3個に満載するだけの魚を釣り上げながらも、今なお大物を求めて釣りを行っている『桜風』の姿であった。因みに釣り上げられた魚類は例外無く一部が『桜風』の手によって伊58と比叡の元に謝罪料理として献上された後、その日の夕食を彩る一品となったりしているが、この時の深山提督はこの平和な『桜風』の姿にこれからの将来が心配になってしまふのであつた。

## 第三五話 対超兵器『ドレッドノート』戦の準備期間 承

「……ぐぬぬう……何故です、何故あのバケモノどもを我が国に受け入れようとするのですか！この国は！この国民は!？」

「その通りです鳩鷹監事。あの様な生態が不明確にも程が有る、しかも旧日本軍の軍艦の化身等と言う恐ろしくおぞましい存在をわが国の統制下に置くだけでも空恐ろしいと言うのに、あまつさえ人權を与えて日本国への加入を許可する等、もはや今の政府は日本を独裁国家にさせようとしているとしか断じられません!」

「鯉江代表、現在インターネットや広告にて我等と危機感を同じくする有志が多数集まっています。ここは今日日本が危機に有る事を政府、そして世界に知らしめるべきだと思われまます！戦前の様な軍国主義国家に日本を逆行させてはなりません!!」

首都圏の某所に有る雑居ビルの一室にて、大声で持論を叫び血走った眼で二日前の国会中継を映すテレビを睨みつける人間達が居た。テレビが映し出す映像では、現在では弱小政党以外の何物でもない前政権政党党首が『艦娘保護法案』に対して『今なお生態



系が不明確な存在を国内に入れた場合、新種の疫病が齎されたり、容易に器物破壊可能な生態能力によって事件が発生する可能性が有る為、時期尚早である』と発言し、現在の与党の党首、即ち現在の日本国総理大臣である『浅野幸喜』内閣総理大臣直々に『艦娘が今までに日本に対して行った無数の貢献』と『その貢献に対する正当な報酬が必要である事』そして止めの『これまでに集計した鎮守府勤務人員の発症履歴』『艦娘が人間に対して能動的に暴力を振るう事は絶無』である事を艦娘が現れてから集計したデータ数値すら示して前政権党首の発言を正面から叩き潰し、それに野党の一部が『論点をずらすな』等の野次を飛ばす醜態が映されていた。

「しかし瑞野委員長。現在我らの呼び掛けに答えて参加を表明して頂ける政治家や著名人は殆どおりませんが…」

「心配はいりません。インターネットにて平和への戦いに賛同する有志は既に多数の反響があります。我らの強固な意志を世間に見せていけば、おのずと私達の高貴なる戦いに心動かされるはずですよ」

欠片も答えになっていないが、彼女の答えに構成員は特に何も反論をする事は無い。既にこの団体の構成員や後援者の多くは絶対的な『戦時下』と言う現実によってこの団

体に所属するだけの余裕が無くなったか、『戦時下』と言う現実を突き付けられた結果思想を拗らせて明後日の方向に全力大暴走し続ける彼等幹部の極まった思想に着いて行けずに離脱しており、現在ではこの幹部たちの思想を本気で心酔している同類か、若しくは何らかの事情でこの泥船から逃げ出せなくなっている人間しかいなかった。本当は都心に居を構えていたと言うのに、今では都心から離れた雑居ビルに移転せざる負えなくなっている事が、彼等の過激な平和思考団体の凋落具合を明確に示している。

「その通りだ、瑞野委員長。現在の日本には悪しき思想が蔓延している。70年前の侵略行為を肯定する様な無知な者達には、私達が教え導かなければならない!!」

「鯉江代表……!!」

「確かに今の私たちは、今の独裁政権とそれに連なる扇動者によつて東京都心から追い出されましたが、この非人道的な行為に怒ってくれる正義の人はたくさんいます!ならば、私たちはその彼らの声なき声に答え、独裁国家へと突き進む今の日本を変えて見せようでは有りませんか!!」

「……………此処まで逝かれた連中が未だに日本に居るなんて、俺知りたくなかったよ。何だよ追い出されたって。実際にはただ単に構成員もスポンサーも続々と居なくなつて、結果金持ちな癖して自腹で賃貸料を払いたくないが為にグダグダ言い募つた結果叩き出されただけだろ……………」

「諦めろ才牙<sup>さいが</sup>。大体風馬の家に生まれて、尚且つこの道を選んだ以上、こういつた輩と時には面と向かつて笑顔で会話と取引を成立させたり、装備の設置もしないといけないんだからな」

「うへえ……………俺、笑顔の仮面張り付けるの苦手なんだけどなあ……………」

「十分合格ラインを越えているだろうが。その顔立ちで今の女に尻引かれるまで同級生を良い様に粉かけておいて」

「お、おとおおお女って何言ってるんだよ父さん俺と彩夏はそう言った関係じゃ、つか俺は粉なんか掛けてねえ!!?」

「以前家にお前の同級生が何人も来ていたぞ」

「……………なん……………だと……………?!」

それぞれ双眼鏡と鳥類凶鑑を持ち、イヤホンをしてバードウオッチングをしている様相でカモフラージュしながら、雑居ビルでの頭が悪くなる咆哮を聞いていた少年と壮年の男性二人組。現在風馬家の当主である壮年の男性、風馬虎一とその息子である風馬才牙は、日曜日を丸一日潰して神奈川県から一度東京都まで出て、東京の各地に設置された各種装置の生存状況を確認しに来ていた。因みに今盗聴しているこの雑居ビルで装置の確認作業は終了である。

「……………しかし、ここまで精密に一言一句聞こえると言うのも問題だな。才牙の言う通り、あの逝かれた連中の声を聴き続けていたら精神が参りかねん」

「と言っても仕事なら大丈夫だしそもそもあの連中と顔合わせして室内清掃ついでに設置設置したのは自分らじゃ無いけどね。……………でも父さん、普通100年を軽く超えてとうに失効して居る様な前の時代の約束、守らせるなんて一体どんな鼻薬嗅がせたの俺は聞きたい」

「何も嗅がせてなどおらん。昔からの約束はそうそう切れただけだ。……………ふっ……………才牙

もそれなりに警戒心が抱けるようになったな。初めは無警戒過ぎて容易に騙され続けた末に訓練相手の満理ちゃんに何度も川や穴、果ては田んぼへ落とされていたと言うのに」

「父さんその昔も昔な事はもう良いだろ!?今はもう大丈夫だし!!」

「ほう……なら、今度里帰りした時に満理ちゃんともう一度勝てるまでやってみるか?」  
「すみません父さんお慈悲を100%勝てないのでそれだけはマジでご勘弁ください……」

思春期真つただ中で有る筈の年頃の少年が自身の父親にからかわれ、それに対して真つ赤になってスグサマ青になりつつ言葉返す。『核家族化』だの『親子関係の希薄化』等が叫ばれる事の多い現代ではめつたに見られなくなった仲良い親子のホッコリする光景だ。話している内容が普通の親子間の会話で混ざる事の無い単語が複数混ざって居るが。

「でも公安や自衛軍が諸外国からの浸透に対処に追われているからと言って、昔は兎も角現在ではガチの民間人でしかない自分らが出る事になるって、世も末だね。まあこんな弱小木っ端連中に力割く位なら別の方面に労力を向けたい気持ちは分かるけど」

「満理ちゃんが『適正有り』と言う事で横須賀で提督をやる事になった以上、こうなる事は大体予想ついていたであらうが」

「そらそうだけどさー。まさか一回二回程度ならまだしも、二桁突入する位に何度も『お仕事』する事になるとは流石に予想外だったのは皆も同じだったと思うよ?」

「……まあ、その点に関しては否定は出来んな」

「だよ。なんだかんだ言われる事が多いけど、日本の警察はトップクラスに優秀だからねー、見つからない様に、発覚しない様に『お仕事』するのって、何回やっても慣れない物だよ」

世間話をするかのように違和感満載の言葉を交わす兩名。場合によっては警察官に職務質問からの最悪任意同行を求められかねないが、生憎この二人が居るのは完全に清掃済みのビル群の屋上で有る。展望台等のような多数の人込みの中でこのような会話を交わせるほど壊れた感性はしていない。

「……さて、野暮用も終えた事であるし、帰るとするか」

「了解。あ、帰りに彩夏にお土産買いに行きたいんだけど」

「……やはり尻に敷かれているではないか」

「し、しししし敷かれていなどないわ何言ってるんだい父さん!」

そうして神奈川の自宅に帰る風馬家当主と次代当主。後に里帰りにて大分久し振りに深山満理奈と逢うのだが、それはまた大分後の話である。

「フフフフフフ………スーパービューマAS332ロクケマだけでなくSH60Jも大量に海の藻屑とし、あまつさえ瑞雲の飛ばし方すら忘れかけるなど……。私は何だ、航空戦艦日向か、そうか、日向か、瑞雲の飛ばし方を忘れかけた日向か、フフフフフフ……」

「日向さん?!お願いですから戻ってきてください!!?なんで、なんで日向さんまでこうなるんですかー!!?」

「……伊勢」

「御免提督、アレはもう無理だよ」

「伊勢、お願いだから遠くを見ながらそんな事言わないで、提督からのお願いだから」

神奈川県に住む深山提督の親戚が色々やっていた頃、その深山提督は先日『桜風』が体育座りしていた埠頭で、今度は航空戦艦娘の日向が先日の『桜風』と同じく体育座りで改装前扶桑姉妹並みの不幸オーラを発しているのを目撃し、完全に諦めきつた眼の伊勢をどうか日向の再生事業に参加させようとお願ひしていた。こうなった原因は、まあ、日向が咳いたとおりに『多数のへりを落した上に今度は瑞雲の飛ばし方も忘れかけた』せいである。

「そうは言うがな『桜風』。私は日向だ。瑞雲を姉より劣る程度に愛している日向だ。その日向が瑞雲を海没させるなど有ってはならない事態なのだ。そうか、もしや瑞雲よりも姉の伊勢を大事にしているから瑞雲神が御怒りになられたのか？ならば日向は瑞雲に、瑞雲は日向に……」

「日向さんお願いだから元に戻ってください!!いきなり『AS332とSH60Jと瑞雲を全機出撃させての対戦掃討訓練』してもらったのは謝ります!謝りますからあ!!お願いですから元に戻ってー!?!」

「……日向にとって、私は瑞雲以下なんだ」

「伊勢、日向は今錯乱しているだけだから。きつと瑞雲より伊勢のほうが大事に思っ



いるから……」

涙目の『桜風』がハイライト消失済みの両目で口から魂を漏れ出させている様な表情の日向をガツクンガツクン揺さぶり、遠い目で黄昏る伊勢を現世に引き戻す深山提督。先日の『桜風』と黒潮の一件とはまた違った、色々とカオスな光景が此処に有った。

朝潮型駆逐艦の霞が持つ『桜風』に対する恐怖感、不信感を聞き届けた深山提督は、荒療治として『桜風』と超兵器『ドレットノート』戦に帯同させることを決めたのだが、『桜風』はこの事に対して難色を示した。否、正確に言えば拒絶した。『桜風』曰く『戦場に非戦闘員を載せる訳には行かないし、それに超兵器と戦闘する時は単独戦闘が最良の手段である為、近場に友軍艦が存在する事は不測の事態を発生させかねない』と言下に深山提督の提案を完全否定した。

『桜風』の言っている事は至極もつともである。何せ以前摩耶と鈴谷を艦橋内に入れた状態で戦闘した事は有るが、アレは演習内での話である。実弾が飛び交う戦場に非戦闘員を連れて行って100%無傷でいられる自信や度胸……と言うよりも驕りは流石の『桜風』にも無い。特に全てが異次元の性能を誇る『超兵器』相手の場合は、不確定要素は一つたりとて例外無く排除するべきであった。

当然ながらこの『桜風』の反応を予期していた深山提督は、次善の策として『ヘリコプターに搭乗して対ヴィルベルヴィント戦と同じく戦闘区域外での観戦』を提案し、『桜風』は『戦闘時は即座に離脱する事』を絶対条件として渋りながらも承諾した。本当はまるで島津兵の如く自身の身を一切顧みずに敵艦に突貫する『桜風』を、状況によつては霞に引き戻させるようにしたかったのだが、『桜風』の意志の強固さ……有体に言えばどうしようもない頑固さには白旗を上げるしか無かった。

「でもさ提督、実際どうするのさ。ずっとヘリコプターの操縦に修練してきた伊勢でも一斉に動かすとあんな感じになるし、私だと安全に飛ばせるのは集中して5機か6機だよ？実戦だと直線航行しかできない低速戦艦なんで、護衛が居ても的にしかならないと思うんだけど」

「その分正規空母の艦載機で目を増やして護衛が駆けまわるから問題無いわ。……でも、これで日向もヘリの喪失機数が三桁の大台に突入したわね」

「……何時も扱う瑞雲とは全く勝手が違うと言つても、喪失し過ぎだよね……。日向に代わつて謝るわ、提督」

「伊勢は気にしないの。それに『桜風』の開発した艦載機も艦娘装備の範疇に入っているお陰で、調達する為の資源もそう多くは無かったしね」

「……一機に付きボーキサイト100もかかるんだけどね」

余談だが、今日に至るまでに日向が着艦、着陸失敗や失速、操縦不能等で墜落、水没させたヘリコプターの数は、一番初めに開発成功した為に搭載して訓練に励んでいたスーパードューマ AS332が79機、10日前に開発したばかりのSH60Jは22機。後濃密にヘリばかりを考えて飛ばし続けた結果操縦方法を忘れた瑞雲はつい先ほど3機海没している。また、スーパードューマ AS332は一機約16億円、SH60Jは一機50億円の調達費用が必要である。つまり日向はこれまでに艦娘や妖精さんが関わる事の無い通常兵器であれば既に2300億円以上の損失を出していると言う事になる。深山提督がいくらかの報告書を出す程度で終わる妖精さんの謎な超パワーが無ければ、責任問題待った無しの大スキャンダルである。

「そうか、そう言う事なのか。瑞雲が日向となれば、日向は瑞雲となれる。良しならば往かねばならない」

「え、ひゅ、日向さん!?何処に行こうとしているんですか!?そっちは海ですよ工廠や宿舍は反対ですよ!」

「止めてくれるな『桜風』。今日向は瑞雲の神へ謝罪し、そして瑞雲となる為に海に沈む

瑞雲と一体にならねばならないのだ」

「日向さーん?! お願いですから正気に戻ってー?!」

「……提督」

「……何、伊勢?」

「如何にか出来ない? アレ」

「……伊勢の泣き顔に免じて如何にかしてやりたいけど、如何やれば良いのか分からないわ……」

知ってた。そう煤けた笑顔で呟く伊勢の眼球には、堤防の先端から自身の操作ミスで墜落させた瑞雲の元に泳いでいこうとする自身の妹と、それを泣きながら力づくで抑える今回の騒動の大本の元凶である小さい少女が映し出されていた。元凶と言っても『そう言えばヘリコプターの習熟度具合ってどのくらいですか』と言う事を不用意に言っただけなのでは有るが。

「…………ふむう。流石にそう何度もは釣り上げられはせぬか」

横須賀で色々と真面目にカオスな情景が作り出されている中、そんな頭が痛くなりそうなほどに面白い光景が有る事など想像だに出来ない『ドレッドノート』は、先日マグロを一本釣りして味を占めたのか数日の間はのんびりと釣りをしていた。とは言え、流石にそう幾度も大物が釣り上げられるはずも無くここしばらくは坊主の状態が続いていた。

「…………果てさて。釣りも暫く休まざる負えんが…………今度は一体何をすべきかのう…………」

半日近く粘るも戦果は鯛のような小物がいくらかだつたために切り上げた『ドレッドノート』。釣りの為の用具を手早く片付けながらも、彼女は未だ『決闘』までに相当の時間が有るこの余暇時間を如何に使うかに思考を割いていた。とても平和である。

「……………うむ……………そう言えばこの世界ではあの妙な軍艦に大海原を支配されたが為に、太平洋の多くの島々を失って負ったな……………深海棲艦と言うておったか」

甲板から艦内を戻り、釣り道具を片付ける為に歩く彼女は唐突に、この世界における常識を知ったあの頃を思い出していた。カリブ海でいきなり復活した時には、乗員を捜索しても当然ながら誰一人としておらず、自身に搭載されている、今の今まで黙り込んでしまっていたパーソナルコンピュータを使用して、この世界の全容を確かめていた。その時に『深海棲艦』と『艦娘』とか言う今まで聞いた事も無い『兵器』の存在と、故国ウィルキアは存在しない事を知って人知れずに頭を抱えていたりしたが。

「……………ううむ……………よし、我は決めた。一度ニューギニアに行き現地での物資回収を行うぞ。私の望むものが存在すると良いのじゃが……………まあ、無ければ無いで如何にかして見せようぞ」

日本本土では様々な言葉や思惑が飛び交っている中、『ドレッドノート』はそんな事を知る事も無いまま自由に行動を開始する。『超兵器』時代とは違う世界で初めて得られ

た自由な選択。例え『桜風』との決闘で如何なる結末を辿ろうとも、決闘が始まるまで全力で悔い無き最後の生活を送ろうとする。それが今の『ドレットノート』の行動規範であつた。

## 第三六話 対超兵器『ドレッドノート』戦の準備期間

転

「『桜風』!!今日は鈴谷たちとお洋服買いに行くよ!!」

「……………はえ?」

その日、行儀悪く対潜哨戒関係の本を読みながら朝食を流し込んでいた『桜風』は、鈴谷に熊野、青葉の重巡洋艦娘トリオとプラス深山提督のカルテットに唐突に包囲された上、鈴谷に上記の言葉を宣告された上で強制連行されていった。

……………うーん……………目新しい物は見当たらなくなってきたなあ……………

食堂にて分厚い本を読みながら、注文した食事を待つ黒髪少女。深山艦隊に加入してからおおよそ二カ月経ち、その間に結構な頻度でイベン<sup>騒</sup>ト<sup>動</sup>を発生させて艦隊の皆に話題の種を提供している『超甲種重武装突撃型高速巡洋駆逐艦 桜風』は、完全に手詰まり



感を感じていた。

前回戦った『ヴィルベルヴィント』戦では、搭載していた兵装こそ『前の世界』と同一では有ったが、撃沈する直前に、本来『ヴィルベルヴィント』に存在する筈の無かった『暴走状態』へと移行していた。あと暫くすれば交戦する『ドレッドノート』も、この世界に来て何かしらの新しい能力に覚醒している可能性も高い。杞憂の可能性も有るが、情報も無しに『前の世界』と同じだと断じる様な楽観的な『桜風』では無かった。

『はい『桜風』さんお待ちどうぞ！ご注文の朝食簡易セットです!!』

「ん、ありがとう」

間宮食堂では余りにも質素かつ量も少なめで、良い点は注文から出されるまでの時間だけと言う事も有って注文される事は殆どない朝食簡易セットを本を読みながら妖精さんより受け取った『桜風』は、そのまま本から視線を移す事無く朝食を食べ始めた。食べると言うよりも大して嘸まずにお茶で胃に流し込むと言う摂取するとも言わべきな粗雑な味わい方であったが。

——資料を見ても正直『ドレッドノート』戦に役立てそうなのはあんまり無かつたし……

元々対潜戦闘に関しては第二次世界大戦でのトラウマから対潜哨戒機をアメリカ以上に保有し、戦術も高度に練り込んでいた海上自衛隊が発展して生まれた海上自衛軍らしく資料は豊富だったか、深山提督の伝手とインターネット等で収集したそれら資料は多少は参考に成らないまでも無くは無かつたが、決定的に対『ドレッドノート』戦に役立てそうな情報は無かつた。よくよく考えなくとも『超兵器』なる物が存在しない世界なのだから当たり前な話であるのだが。

——やっぱり深海棲艦の住処に単艦突撃した方が良いか、提督に依頼しないと

最終的にそう結論付けた後、善は急げとばかりに焼き御握りをお茶とみそ汁で一つ流し込んだ直後に、冒頭の情景へと相成った。尚『桜風』本人の意見や抗議は一言も聞かれなかつた模様。

「……あの、鈴谷さん？提督？青葉さんに熊野さん？」

「どうしましたか『桜風』さん？」

「んお、どしたの『桜風』？お姉ちゃんに言ってみ？」

「もう直ぐ『ドレッドノート』戦に突入すると言うのに、何故衣服を買いに行かないといけないんですか……？」

「『桜風』、貴女今まで自身がずっとマトモに休んでいない事、自覚している？」

「提督。……ちゃんと休んでいますけど……」

「日中殆ど座りも立ち止まりもせずに工廠での開発や資料の調査、それに近海での対潜掃討をやっつけていて、睡眠時間も長くても3、4時間程度と言うのは到底休んでいるとは言えませんわよ？それに、『桜風』が近海の敵潜水艦カ級、ヨ級、ソ級が一時全滅するまで戦闘を繰り返したお陰で『戦力育成が出来ない』と他鎮守府からの苦情も……」

「……………はい、分かりました……黙って洋服購入に行かせて頂きます……」

「素直で宜しい」

深山提督の運転する普通自動車にて近くの洋服店に向かい走る中、最後の抵抗を試みた『桜風』は熊野の言葉によってとうとう観念させられるしか無かった。因みに熊野の言う敵潜水艦の一時全滅は法螺でも何でも無く事実である。一応深山提督や海軍庁の

許可の元行われはしたものの、深海棲艦の増殖速度よりも圧倒的に『桜風』の撃沈スピードの方が速く「新米から中堅提督が狩る潜水艦が物理的に居なくなる」と言う前代未聞の事態が起こっていたのだ。因みにこの事を『桜風』が知ったのは10分ほど前の事である。

「でも珍しいよねー。提督が運転してくれる上に私達に付き合ってくれるのってさー」

「まあ、仕事に関してはある程度用途が着いていたし。それに大淀に今日の事言つて休みを申請したから、一日何処に行くとしても問題無いよ。……休日申請した時、大淀に『もちろんです！寧ろそのまま一週間位旅行にでも行かれてはどうですか!？』と笑顔で泣いていたんだけど、どうしてか知らない？」

「え……と、言う事は……今回提督はお休みを取った上でプライベートと言う形でお買い物に付き合つて下さると……？」

「そうよ。……どうしたのよ、その顔」

「……あの、何をそんなに驚いているんですか？」

かなり不思議そうな表情でバックミラーに移る熊野と鈴谷の硬直した表情、そして何時の間にか何時も愛用しているカメラを取り出していた青葉を横目に見ながら、『桜風』

と同じく鈴谷たちの反応の意味を分からずに目を点にさせていた。

「ねえ、青葉さん？」

「この買い物終了後即座に号外を出します。題名は『取った!?提督が休みを取った?!』辺りが適当ですかね？」

「印刷とかは鈴谷も手伝うよ。これはとてつもない大事件だからね……」

「……たかが休みを取ったくらいで大げさな……」

「提督?今の今までお盆も正月も無しに働き詰めでした事、忘れさせはしませんわよ?」  
「提督ってば、誕生日もクリスマスも関係無しに働き過ぎだからねー。この前提督自身の誕生日も忘れてたし」

「……そこまで根詰めて働かなくとも、祝日や誕生日位休んでも罰は当たらないと思うんですが、提督」

「青葉が思うに、それは『桜風』さんが言えた義理では有りません」

最後に見事な『お前が言うな』セリフを発した『桜風』に綺麗に青葉が突っ込みを入れ、『桜風』が何も言えなくなったところ、目的地であるデパートへと到着した。平日かつ一応日本が戦時体制で有る事も有ってなのか、駐車場に存在する車両も広めの駐車場に

まばらに点在している程度であった。

「平日ど真ん中と言う事も有って、お客さんも少ない見たいだねー。これは掘り出し物が見つかりそうだね熊野！」

「そうですわね。出来るだけ『桜風』には可愛らしくて良い物を着て貰わなければなりませんわ」

「……………えつと」

「言いたい事はたくさんあると思いますが、『桜風』さんは鈴谷さんと熊野さんの言う通りに試着してくれば大丈夫ですからね？」

「いや……………その……………別に、安いTシャツやジーンズとかで……………」

「……………『桜風』？」

「『桜風』？少々勘違いされているようですけれども……………」

外見の華美よりも実用性、耐久性特化で流行りやファッション性等には欠片も興味が無く、某お昼のバラエティー番組の辛口評価型ファッションコーナーでは審査員から『女を捨てている』とでも言われかねない格好を好む『桜風』。本人の感覚から言えば『服なんかに多額の現金を使わなくとも他に使い道が有るのに』と言うのが嘘偽りない本心

なのだが……。

「乙女の戦場に来た以上は……」

「貴女に発言権は有りませんかことよ？」

「……………ハイ」

一度海へと飛び出せば無類の強さと行動力、発言力が有る『桜風』と言えども、この陸の戦地では深山艦隊の中でも一家言の有る鈴谷フアツシヨウや熊野界の鬼神に到底歯向かえない、新兵にすら劣る発言力しか無かった。

「うーん……確かに可愛らしいつちや可愛いけどさ……地味じゃない？」

「地味では無くて清楚と言って下さいまし！大体鈴谷の選ぶ『桜風』の洋装は……その……露出が激しいですわ！」

「えー、でも今梅雨でもう少ししたら夏じゃん？だったらさつきみたいなのが『桜風』」

の魅力を引き出せると鈴谷は思うよ？肌の傷も、クリームで誤魔化せるし」  
「……そ、それは……そうですけれど……」

殆ど引きずられるように連れて来られた『桜風』に先ず待ち受けていたのは、女性用衣類品店による熊野と鈴谷が執行する着せ替え人形の刑であった。このデパートに来る時に来ていた単色かつ飾り気皆無のジーンズとジャージは既に剥ぎ取られ、現在試着室で着替えた『桜風』の新しい装いを撮影する青葉の隣で苦笑いしている深山提督の手に渡っている。

「ほうほう……良いですねー。やっぱり『桜風』さんって、普段色気の無い恰好しかしていませんから、そのギャップも有ってすごく可愛らしいです！」

「鈴谷と熊野のセンスが良いのも有るだろうけどね。当の本人は顔真っ赤で床ばっかり見ているけど」

「駄目ですねー。それだと『桜風』さんのお顔がカメラに収まりません！『桜風』さん、コツチにつこりとした笑顔を向けて下さい！後出来ればピースもお願います！」

カメラマン根性全壊の青葉の声にビクンと反応した『桜風』は、おずおずとながらに



ゆつくりと面を上げて、目尻に軽く涙を溜めながらに目を細めて口角を上げて「えへへ……」と言いなから言われるがままに両手でVの字を作った。綾波型駆逐艦の9番艦が言うところの、いわゆるエヘ顔ダブルピースと言う奴である。

「良いですぬー良いですぬー！その表情とっても良いですぬー『桜風』さん！」

「更衣室を背景に撮影された、清楚な白いワンピースと麦わら帽子を被った黒髪少女の赤面写真……犯罪的な香りが凄いわね」

——ううう………もう止めて下さい………もう服は上下合わせて5着は買ったじゃないですか………何時までこんな事続けるんですか………

艦娘の依代を得てから味わうこれ以上無い恥ずかしさとは何時もは味わう事の無い空気が風の感覚で思考力が鉦山でボーリングされるが如く、アラハバキのドリル突撃かヴォルケンクラツターの四国縦断砲の様に『桜風』の思考力がゴリゴリ削られ続ける中、鈴谷と熊野が満足するまで時間にして約2時間余りの間、この戦場では二等兵以下でしかない『桜風』は『耐えがたきを耐え、忍び難きを忍ぶ』より他無かった。因みに後の週刊青葉新聞のファッション特集で『桜風』の写真が大々的に使われ、それを目撃

した本人が真っ白に灰となつて銅像の様に硬直したりするのだが、それはまた後日の話である。

「……こんなに買つてどうするんですか……水着まで複数購入するつて……深山提督のお金なのに……」

「気にしないの。一応私も将官の端くれなのだから、給料も結構あるからね」

「その割には、提督つてどこかに遊びに行つたりとかしないよね」

「みんなと出来るだけ一緒に居たいからね。……嫌、かしら？」

「そんな事有り得ませんわ。……ただ、これからも今の私達と同じようにお出かけして頂けると、皆も喜ぶと思いますわ」

「……仕事……」

「鈴谷たちに任せれば良いだけの話じゃん。雷とか夕雲とか『司令官が私を頼つてくれない』つて、最近とうとう鬱っぽくなってきた位だから……」

「なんだか猛烈に仕事を手伝つて貰いたくなってきたわ」

「よろしいですわ」

最終的に暴走する欲望に対して忠実に動き続けた結果、『桜風』用に合計12着の普段着や外出着、そして計3着の水着も追加購入してご満悦の極みである航空巡洋艦娘の二隻に、怒涛の如く着せ替え人形にさせられて、最終的に先ほど購入した白のワンピースと麦わら帽子を着させられて色々と疲労困憊しきった『桜風』。そして本格的に自身の艦娘にも仕事を手伝って貰う事を考慮する深山提督とその驚天動地の変革をする様子をしつかりとカメラに収める青葉。5人とも例外無く綺麗で有る為に目立つのだが、平日で有るだけに彼女たちの歩く駐車場には殆ど人影は少なかった。

「お、おとお。こんな平日真昼間にどうも！世界一かわいい美女5人も居たんで流石に声掛けました!!」

「もうご飯とか食べちゃった？この近くに美味しいお店あるんだけど、良かったら俺たちと一緒に入らない？」

「……はい？」

人影が少ないだけで、全くいない訳では無かったが。

——なにがどうしてこうなった……？

「この私に気安く話しかけるなんて、何か勘違いされてるのではなくって？」

「あー、ツンツンしているねー。でもその表情可愛いよー！」

「えっと……青葉は、もうそろそろ帰ってやりたい事が有るので……」

「お昼だしご飯食べるくらい大丈夫でしょ？俺たち退屈させないよー？」

「んお、ナンパ？いやいや、こんな真昼間につて、暇なんだねー」

「暇じゃなくても、声かけるのは当たり前だろ？君たちみたいに可愛らしいのならばさ」

「……彼方達、可及的速やかにこの場から帰ってくれないかしら？」

「良いじゃないですかお昼おごらせて頂きますよ！」

6人の青年に行く手をふさがれ、拒否の意を伝えても全く意に返さずにナンパとしか言いようのない言葉を言い続けられ、深山提督や鈴谷たちの後ろに引つ込んでいる『桜風』は、今までに感じた事の無い『不気味さ』『気味の悪さ』を感じていた。別にこの現

在全力ナンパ中の青年たちの顔立ちや肉体が醜悪と言う訳では無い。寧ろ最低でも平均以上、中には俳優でもやって居そうな洒落つ気の有る男も居るし、物腰も言葉使いも柔らかな物だ。

——でも……………目から漏れ出す妙な思考だけは隠せていない……………それに、言葉も純粋な日本語じゃない…？

「……………おつ、後ろにも小さい子が居るじゃんか。ねーお嬢ちゃん、お腹空いていない？お兄さんたち美味しいお店知っているから、このおねーさんたちと一緒に食べに行かない？」

「ひえっ……………い、いえ、私はもう帰りたいので……………」

「ちよつと！その子に手を出さないでっば!!」

現在駐車場のど真ん中でナンパと言う相当アレな事をしている連中に対して『桜風』がそんな考察している最中、ズケズケと横から割って入った青年の一人が『桜風』と視線を合わせてそんな事を言い出す。本来ならば力づくで押し通りたいのは山々だが、生憎この5名は国家公務員たる軍人とその配下の軍艦である。下手に力を振るって怪我

でもさせたら、ほぼ間違い無く横須賀鎮守府に『文句のつけようのない正義の御旗』を満面の笑みで掲げた連中が大挙して：は言い過ぎかもしれないが、少なくとも数が来るのには疑う余地も少ないだろう。要するに、もう少して『ドレッドノート』と交戦するこの時期に余計な厄介は抱えたくなかったのだ。

「うんうん、お姉さんたちと一緒に君も可愛いねー。どう？お兄さんテレビの人と知り合いだからテレビに出てみない？」

「……はう……？」

—— ああ、分かった。こいつは、敵で間違い無い。

と言っても、その『正義の御旗』は『無力な一般市民に対して』力を振るった場合のみ限られる。不躰かつ失礼にも程が有るが、まるで品定めをするかの如く『桜風』の顎に右手をやって表情を眺めているこの男には妙な衣服内のふくらみが有る事に、目敏く『桜風』は気付いた。そして敵であるならば、『桜風』は手加減はしても一切容赦する事はない。



「うわあ……痛そう……」

鈴谷と熊野が呆然としながら『桜風』を見ている様に、先ほど深山提督たちをナンパしていた男達や青葉も啞然としながら、この荒唐無稽な光景を見ていた。例外は今なお冷徹に周囲を見渡す深山提督だけである。

「いてえ……痛え……おいこの餓鬼!!人が丁寧に下手に出てやつてるのに何やらかしてくれとんじや!?!ああ!?!」

『桜風』の捻じりから解放されるや否や、右腕を庇いつつ早速涙目で本性を現したナンパ男改めチンピラその一。言葉だけは何処かの筋の者のようで勇ましい限りだが、それ以外で全てが台無しである。

「……………初対面の人間に対して、いきなり品定めする様な蛮人にかける情けなど不要です」

情けないチンピラその一に対して、自身の両手首を片方ずつ揉み、回しながら事も無げに言い放つ『桜風』。全くと言うほど『貴様等、眼中にない』と言わんばかりの反応に



『侮られた』と感じたチンピラその一が取る行動は、古今東西代り映えの無い物だった。

「このクソガキ……この俺が蛮人だと、野蛮人だと言うのか!？」

「……最低限の礼儀すら知らぬ者など、禽獣にすら劣る存在では？」

「このアマ……!」

「お、おい……子供に對してやりすぎだぞ」

「ああ?うるせえ引つ込んでろ!」

「がっ!？」

仲間と思われたチンピラと一緒にナンパしていた男の一人が止めに入るも、当のチンピラは痛んでいない左腕で止めに入った男を躊躇無く裏拳で殴り飛ばし、仲間で有る筈の男たちが目に見えて動揺します。どうやらこのチンピラと組んでいたナンパ男達とは何か違うようだった事は、色々と展開に置いて行かれかけている青葉たちにも何とか理解出来た。

「……クツクツク……この俺を怒らすとは、良い度胸を……」

「……丁度良いわね。喉乾いているでしょ?コレ飲みなさい」

「あ、有難うございます」

右腕を振り回して痛みを隠すチンピラが改めて凄み直そうとするも、凄まれている『桜風』は全く意に介さずに深山提督から投げ渡された缶コーヒーのプルトップを開けて喉を鳴らして飲みだし始める。まるで目の前のチンピラが存在しない物の様に思わせる『桜風』の行動は、大して堪え性の無いこの男をキレさせるに十分な行動だった。

「このクソアマ……ぶっ殺してやる!!」

ようやく右腕の痛みが治まったのか、いかにも三下らしいセリフと共に、自身の懐から隠し持っていた拳銃を取り出し……

「……銃火器と言うのは、素人が操れる様な玩具では無いですよ、っと!!」  
「ウゴオ?!」

標的<sup>『桜風』</sup>に銃口を向ける直前に、飲み干したばかりの缶コーヒーを上<sup>敵</sup>に放り投げ、某少年探偵の様に右足でチンピラ<sup>敵</sup>の顔面に空き缶を蹴り込む『桜風』の一撃によって呆気無く

昏倒。頭部への強烈極まりない一撃に加えて、アクション映画でのショットガンの直撃を受けたやられ役が良くやるその場での宙返りからの地面への叩き付けでうめき声しか上げられなくなったチンピラを他所に、『桜風』はチンピラのベルトを取り外して拘束しつつ、拳銃を確保した。

「……………うん……………ブローニング製のM1910。密造銃では無い、純正の正規品。密輸品なのは確定かな？」

「……………あ……………え……………?」

「一応聞かせて貰うけど、いまこの場に居る貴様達。まさかあの娘を攫おうと結託……………」  
「しっしししししていません!!」

「は、はい!誓ってその様な事は考えておりません!!」

「アイツとは酒場で知り合って二日前に逢ったばかりの男なんです!!俺たちは単にナンパして皆で遊ぼうって集まった田舎者なんです!本当です信じて下さい!!」

深山提督の詰問に、あつさりと直立不動になった上に聞かれても居ない事すら話し出す青年たち。成程確かに、あのチンピラとは違ってしっこくナンパはしていた者の、それ以上の行動はしなかった。された方の深山提督御一行に取ってはたまったものでは

無かった事はさておき。

「……まあ、それはそれとして。貴方達も事情聴取で連行されるから、洗いざらい話す方が身の為よ?」

深山提督がそう宣告した直後、エンジン音を響かせながら数台の車両が駐車場に雪崩れ込んで勢いよく停車し、下車したスーツ姿の男たちが手早く『桜風』に拘束された上に足蹴にすらされている襲撃犯に手錠をかけ、その男と共にいたナンパ集団には警察手帳を見せた上で事情聴取の為に同行を求め、集団は一切抵抗せずに車に乗り込み始め出した。

「……なんとまあ、お早いお出ましで?」

「すみません。元々警護要員は早期に派遣する手筈だったのですが、あのデモ行進の混乱に巻き込まれてしまって……」

「……そう。状況はあの青年たちが説明してくれるから、私たちは帰らせてもらうわよ?何か聞きたい事が有ったら鎮守府に人を寄越して。出撃して留守の時も有るだろうけどね」

「了解しました。それでは、失礼します……」

この言葉を最後に、この警察官のリーダーと思しき中年の男性の指示によつて気絶したままのチンピラと今なお呆然としたままの青年たちは纏めて連行され、排気音と共に今来た車両が居なくなつた駐車場には、深山提督や『桜風』たち御一行だけが居た。

「……『桜風』は、どう思う？」

「十中八九……否、ほぼ確実に捨て駒ですわね」

怒涛の展開に少々置いてけぼりな青葉たち巡洋艦娘トリオを他所に、深山提督と『桜風』だけは自身の考えが同じである事を確認し、深い深いため息を吐いていた。

「……それで、お前は どう思う？」

「今回の容疑者<sup>星</sup>では、本丸にまでは手繰れそうに無いですね」

「……そうだな。今公安調査庁や他部門と共同で銃の出所を洗いざらい探っているが、正直に言つて期待出来そうにないな」

「前政権の規制緩和に一律の公務員削減のせいで相当な量の銃火器と作業員が日本に入り込みましたからね……。捨て駒の現地作業員一名にM1911一丁位、捨てても惜しくはないでしょうから」

「反戦デモだの何だの言いつくろつて、あの道路を封鎖して邪魔してくれおつた輩の首領共からも、何も出てきていない。……出来れば、芋蔓式にあの知恵遅れ共を引つ立てたかつたのがな」

「先輩、気持ちは分かりますがそういう事は公では言わないでくださいね？」

深山提督と『桜風』が巡洋艦娘トリオに呼び掛けて横須賀に車を出した頃、警察庁の指揮下にある公安部所属の警官二人は、『桜風』に襲い掛かつて無残に返り討ちにあつた現行犯の所有し、襲撃現場の駐車場に駐車していた車を押収した帰り道に、そんな雑談を始めていた。因みに公安警察と言う組織はあくまで俗称であつて組織としては存在せず、警察庁警備局や各都道府県警察の中にある一部門でしかない。

「……しかし先輩。自分には正直に言うとかかなり不自然に思えます。艦娘の拉致をする

にしては、人数も脱出手段も粗雑ですし、殺害するにしては悠長でしたし……」  
「……こちらの反応を見る為、かも知れないな」

期待の若手としてひそかに期待されている後輩の疑問に対して、そう答える壮年の男性警察官。因みに公安部所属と言う事も有つて、この二人は有名大学を成績トップ5以内で卒業している。

「仮にこんなやり口で艦娘の拉致、乃至殺害が出来るようなら、他所でも一気呵成に艦娘の奪取をする為の活動を開始し、一応防げたのなら政治的手段や更なる謀略の準備に入る……。今の情報で推測できる情報など、こんなものだ」

「そんな事の為にですか……。まあ、あんな捨て駒程度ならいくらでもいると言う事なのですかね」

——全く……。今世界は深海棲艦の猛威に晒され、艦娘によつて何とか侵攻を防いでいる様な状態だと言うのに、今なお戦前の論理で動く奴らの気が知れん。……そんなに、日本の存在が邪魔なのか？そんなに、貴様らに使いもしない艦娘の力が欲しいのか？

戦前の論理で動く国家や勢力の策動を、職務上真つ先に直視し、対処している彼等の中には、本来常に冷静さを保つべき公安部所属の警察官に有るまじき事だがこう言つた過剰な感情を抱き始めるまでに神経をすり減らしている人員も存在した。人間らしいと言えばらしいのだが、職務上不要な感情に苛まれ始めた彼等に一時の休息が与えられるのは、未だ大分先の話である。

「良し良し。まさかこれほどまでに良き物を得られるとは、我は良き運を持つておるな。これだけの量ならば十分じゃ」



日本本土でとうとう『桜風』に対する襲撃が発生していたりする中、超巨大潜水艦『ドレッドノート』は遠くニューギニアのある港町へと上陸していた。勿論航行中に多数深海棲艦と遭遇するも『ドレッドノート』の放つ多数の酸素魚雷に38・1cm砲によつて纏めて漁礁へと転身させられると、恐れをなしたのか近辺に近寄らなくなつたのを良い事に、船体は沖合に停泊させて『ドレッドノート』は生存者は誰一人存在しないゴーストタウンに乗り込み、自身の欲していた物品を確保出来てご満悦であつた。火事場泥棒以外の何物でもないが、本来の持ち主は既にこの世に居ないのだから誰も咎める者等居ない。

「…………お主も不運よのう…………。スマヌが、貰つていくぞ。さて…………ん?…………貴様、何奴じゃ」

最低限の礼儀として、侵入した一室に横たわつていた白骨化した人間の遺骸に対して、軽く手を合わせて冥福を祈つた『ドレッドノート』であつたが、戦利品を大袋に背負つて一軒家から出ると同時に視界には妙な戦車が飛び込んできていた。何が妙かと言えば黒と銀に塗装され、国籍表示も無いリベット打ちの戦車と言う物だったからだ。

「……ふむ……。成程、貴様らが陸地への侵攻を行っていたのだな。艦艇で陸地に出来るのは破壊のみで占領など不可。なれど人類が細々とした諸島どころか、このニューギニアやハワイなどすらも喪失したのは、貴様らの為か」

一人頷いて納得している『ドレッドノート』であったが、彼女の目の前の戦車はそんな彼女の言葉を無視して：若しくは理解するだけの知性も無いのか、攻撃する為に砲塔を旋回させ始めていた。

「……全く。我は今少なからず感傷に浸っておったと言うのに、無粋な奴め」

そう言うと、『ドレッドノート』は背負っていた大袋を地面に置くが早いか、突如疾走を開始。当然敵戦車も砲塔と共に車体を動かして『ドレッドノート』を捉えようとするも、旋回速度よりも遙かに『ドレッドノート』の走りの方が早く、あっさりと索敵範囲から見失ってしまう。

「……ふむ、まあこれを使った方が手っ取り早いからう」

この戦車が、この『ドレッドノート』の言葉を聞いたかは定かでは無い。だが少なくとも仮にこの戦車に『意志』と言う物が存在して居れば、確実に目の前の有り得ない光景に固まるか、即座に逃げ出していただろう。逃げ切れるわけも無いが。

「ふっ……さっ……て。我が道の邪魔だてを、する出ない！」

『ドレッドノート』の一喝とほぼ同時に彼女を視界に捉えたこの戦車が最後に見たと思われる光景は『成人女性程度の身体を持つ艦娘が、コンクリートが着いた鉄骨を自らに勢い良く叩き付けてくる』と言う荒唐無稽極まりない物であった。

「……流石に、やりすぎたかのう？」

右手で軽く頭を搔き、髪を手櫛ですく『ドレッドノート』の眼前には、つい先ほど砲撃か爆撃によつて破壊され、鉄骨がむき出しになつていた建物から引っこ抜いた代物を叩き付けられた、余りにも哀れ過ぎる元敵戦車の姿が有った。超兵器の持つ力を

即席超巨大ハンマー  
コンクリート付き鉄骨によつて全力で叩き付けられた為に、被害は一撃で平らにされた敵戦車に止まらずに地面にすら小さく罅が入つてすらいた。

「……まあ、ええじゃろ」

目の前の惨状に対して最終的にそう結論付けた『ドレッドノート』は、数分前に置いたばかりの大袋を回収し……何を思ったか先ほどまで居た一軒家にまで戻つて行つた。大袋以外は手ぶらで来た為に何かを忘れた訳でも無い。『ドレッドノート』のやりたかつた事は、ただ一つだった。

「……この海域に蔓延る深海棲艦を掃除し、あの妙ちきりんな戦車を一両潰し、主らもこうした。そして、これも渡す。……仕事量としては十分じゃろう？ じゃから、これらは頂いて行くぞ。……では、さらばじゃ」

一人の女性が立ち去つた一軒家。長年手入れもされず、補修もされていない為に周囲は雑草が蔓延り、家の至る所は破れ、雨漏りも有る為か腐り始めている部分すらも有る。

そんな廃墟という言葉が極めてよく似合う建物には、一つ寢室が有る。

そのベッドには、大人が二人。子供一人の骸骨が丁寧に川の字で寝かせられ……この三人を見守る様に、一つの写真立てが枕元に立てられていた。劣化が進み、黄色く変色していたその写真には、一組の夫婦、そして一人の少女が楽し気な笑みを浮かべる姿が有った。

## 第三七話 対超兵器『ドレッドノート』戦の準備期間 結

深山提督たちがデパートの駐車場にてチンピラに絡まれて『桜風』の手、いや足？によつてぶつ飛ばされた日から二日後。カンカン照りの青空が綺麗なここ東京都千代田区永田町2丁目3―1では、外の熱い熱気とは真逆の凍り付く様な寒気で覆いつくされていた。冷房が効きすぎている訳では無い、単にこの住所の主である男が放つ絶対零度の威圧感からであった。

「……それで、君たちの言い訳を纏めると海軍庁から彼女たちの護衛依頼を事前に受けていた上に匿名のタレこみすら有ったと言うのに、人員不足で手を回すのが遅れた……と、言う事か？」

「はっ……はい」

「……まあ、公安部に関しては未だに、以前の打撃から抜けきっておりませんからなあ。確かに不手際である事には違いありませんが、その点に関しては考慮出来なくも無いと思います、首相」

「……そうだな。一時半壊した人材育成に今なお苦しんでいるのは事実だ。……次回以降は、本当に止めて貰いたいものだ」

「……あ……有難うございます」

財務大臣の助け舟で出された浅野首相の言葉に対して冷や汗を滝の如く流すスーツ姿の男は、何とか言葉を絞り出した後に退室した。その後、『次は無い』と言う言葉と共に送られた予算増額と、海軍庁や自衛軍からの冷たい視線によつて組織としての面目も面子も完璧に丸つぶれな警視庁公安部に怒号染みた訓示が響き渡つたのだが、この話は『桜風』とは大して関係ないために割愛する。

「……それで、山本長官。彼女の様子はどうなっているか？」

「深山少将からの報告によれば、特にあの襲撃から変わった行動や発言はしていないようです。今は『ドレッドノート』の事が気にかかっているのでしょう」

「……そうか。何かあつたら報告してくれ。最悪、私の首が必要ならば……」

「総理。……いくらなんでも、その様な言葉は……」

「……失言だった。忘れてくれ」

駆逐艦『桜風』への襲撃未遂から僅か二日で5年は老け込んだ様に疲れ切った浅野首相の言葉を遮る山本蒼一長官。一国の首相閣下が弱気と言うかともない言葉を発していたが、この場に居る首相の腹心達には首相の心情が理解出来ていた為に、誰も彼もが聞かなかつたことにしていた。

当時打撃を受けて敗走だった日米艦隊を追撃する深海棲艦に前触れも無く割つて入り、下手すれば全滅する未来凶を書き換えた5隻始まりの駆逐艦娘は、深海棲艦を追い払って救助活動にて多数の日米海軍人を救出して横須賀に入港した後に、当時の自衛隊、並びに在日米軍によって嚴重に保護と言う名の軟禁を受けた。本来存在しない筈の第二次世界大戦ごろの軍艦と、それに乗り込んでいた二等身鰻頭と可愛らしい少女と言う突っ込みどころ満載のまるで意味が分Mからん何Aかに対する対応としては、割と普通と言うより穏当な方だろう。

その後『取り敢えず危険性は無い』と判断された末に、監視付きで解放された直後に横須賀の海岸部の空き地に駆逐艦娘にくっついていた妖精さんが勝手に工廠を建立し



たのが、現在日本や東南アジア各地に存在する鎮守府の始まりである。工廠の艦娘建造、装備開発システムや資源の異常に少ない消費量、そしてワラワラ簡単に増える艦娘に艦艇仕舞い込み機能の存在で当時の自衛隊を含む関係各所の官僚達は、控えめに言つてパニック状態だったが、その艦娘の存在を当時『公務員と国家から国民と民間に！』のスローガンの元、一律で警察や自衛隊含む公務員の削減に移民や入国審査基準の弛緩化によつて一年たらずに諜報員だらけでポロポロになつた防諜体制では防げずに殆どスルーパス状態で諸外国に渡り、何時もの国家から何時もの通りな威圧を受ける事になつてしまつていた。現場は情報隠匿に努力はしていたのだが。

艦娘の情報を知れば知るほど、その特性の破壊力が野放図ともなれば、日本との関係が悪くなつていた国家は恐怖し、可能な限り自身の制御下、そうでなくとも出来る限りの可視化を、日本に対して要求していた。その気になれば艦娘は気に入らない国の沿岸都市に一瞬で戦艦<sup>水</sup>や重巡洋艦<sup>上</sup>を召喚して艦砲射撃を行い壊滅させる事が可能なのだ。前政権下で施行された『艦娘管理法』も、諸外国に対する配慮と言う点ではある意味間違つた物でも無かつた。『兵器は確実に管理して野放しにしない』事を明言したのだから、少なくとも日本に文句をつけてきていた一部国家は溜飲を下げる事が出来た。代償に戦局不利や艦娘を管理する事をマスコミに叩かれた末に政党が壊滅的打撃を受けたが。

第二次世界大戦頃の艦娘の装備ですらコレなのだ。一見すればただの綺麗な少女や女性で、一般の人間と見分けは付かない。どんな検査でも普通に通過する。だがその気になれば、艦艇が浮かべる水場、海上限定とはいえ何時でも自身の艦艇をその場に召喚できる。しかも有り得ない程のローコストで。今の時点ですら戦略的、戦術的破壊工作にはもってこいの逸材なのに、『桜風』の存在が艦娘の価値をさらに加速させた。RAMやAH—64D Apache Longbow アパッチLBを持った艦娘など、戦力的価値は計り知れないにも程がある。

「……深海棲艦だけですら頭が痛いと言うのに、この上超兵器などと言う化物と戦うには、今の日本……否、人類にはあの少女駆逐艦『桜風』の存在は絶対必須だ」

誰も浅野首相の言葉に口を挟む者はいない。既存の第二次世界大戦時代の装備しか持たない艦娘の能力では、どうあがいても超兵器に対しては一撃入れる事すら至難の業である。現在の政府に『桜風』の存在を深く刻み込んだ『ヴィルベルヴィント』でも、元々の世界では最弱の超兵器と陰口を叩かれた性能と聞いていたが、驚異的な足の速さで好き放題に通常艦娘を蹂躪する事は可能だったはずだ。これから現れる可能性の高い後続の超兵器ともなれば、正直時間稼ぎに成れば奇跡と言える。

その為に、駆逐艦『桜風』の協力が絶対必須なのだが……。そのチンピラが『桜風』を襲撃しようとした時の『桜風』の対応が、深山少将によつて伝えられた上層部に破壊的な衝撃を与えていた。具体的には、書記や秘書は全て外された上に首相の本当の腹心だけにこの情報が伝えられ、緘口令が敷かれたくらいに。

「……命令も無しに能動的に人に危害を加えたと言う事は、つまりは命令されずとも自身の思うままに行動できる……と、言う事でも有りますからなあ」

「一般的な艦娘は命令無しに深海棲艦以外には攻撃しない事は、つい先日、首相が国会で言った通りだが、この法則は彼女にだけ通用しない。……下手をすれば、彼女にこの国に見切りを付けられて見捨てられるだろう。いや最悪の場合、彼女に日本が攻撃……」

「つ、それだけは、最後だけは有り得ないと深山少将は断言しています！」

「……前者に関しては、否定していかないのだな。山本長官」

「……まあ、はい。彼女の生きた世界と、今我々が生きている世界は違います。……自身の母国ですらどうでも良いと考えて動く様な人間が居るのです。縁も所縁も無い完全な他国に身を寄せたとして、その国から手酷い扱いを受ければ、余程の聖人でなければ失望して見捨てるのが普通です」

駆逐艦『桜風』は異世界で建造され、自沈処分された艦娘である。その為か、今回の襲撃事件では提督に明確に指示される前にチンピラに対してスチール缶を蹴り飛ばして攻撃した。以前深山艦隊の那珂のコンサート中に投石を受けた上にライブ会場をぶち壊すデモ部隊の突入を受けたが、那珂は逃げるだけで反撃はしなかった。一般的な艦娘は那珂の様に、人類から攻撃されても逃げはすれど反撃はしない。本能なのか何なのか、絶対しないように刷り込まれている。だが、『桜風』にはそんな制約など一切ない事が、今回の事件で判明した。今の日本によって『桜風』にかけられた首輪は、実質深山少将とその艦娘の関係しか無い。その気になれば、『桜風』は命令無く何処へでも行こうと思えば行けるのだ。

「山本長官」

「はっ」

「……駆逐艦『桜風』、それに彼女の友人たちに宜しく、と……。そう言っておいてくれ」  
口先は兎も角やっている事は効力が殆ど無い事実上の無為無策な状態だった前政権から政権を奪取して以降、日本国史上でも元寇や第二次世界大戦頃に匹敵するか凌駕するであろう国難に正面切って立ち向かっている男の言葉や姿は、数年前と比べてもくたびれている様に、山本長官は思えた。

永田町にて最近胃薬等の消耗が激しくなりつつある男達が話し合っていた日の夜。その男達の胃痛や毛根破壊の原因である一人の少女は、自身が身を寄せている深山艦隊の艦娘宿舎の屋上に来ていた。同室の陽炎や不知火、黒潮には何も言わず、熟睡している三人を起こさない様にこっそりと抜け出していた。

——もうしばらくで、『ドレッドノート』との決戦する日が来る。……結局、あの  
買い物後は殆ど休養日に回されちゃったなあ……

日本海軍伝統の銀蠅など現在ではただの窃盗でしか無いのでするわけも無く、以前黒潮に「親善の記念や」の一言と共にプレゼントされてそのままだった日本酒と御猪口を持ち込み、月見酒と洒落込んでいた。因みに『桜風』が暴走するスイッチはアルコールの連続一気飲みであり、ほんの少しずつ飲用するのなら問題は見られない。そうなる前に飲むのをやめるからだ。

——…結局開発でも対戦ヘリ以外対して良い物出来なかったし、最終的な武装は『RAM』と『40mm4連装機銃』をいくらか下して『5連装新型対潜誘導魚雷』を二基追加した程度。…不安しか無い

後部主砲二基を前部に背負い式に移設し、船体を埋め尽くす対空火器をある程度まで削減し、空いたスペースに『5連装新型対潜誘導魚雷』を二基捻じ込む。防御装甲は速度重視の為にそのままであったが、この火力でも満足等していない『桜風』であった。因みに『5連装新型対潜誘導魚雷』は、硫黄島沖大演習で陽炎が搭載していた物である。

——…まあどちらにしても、逃げると言う選択なんて端から無いし、後は突撃してから流れに任せてどうにかする。うん、何時も通り、何も問題無い

「………隣、良いかしら？」

「問題無いよ……霞」

屋上のベンチに座り、手酌でぐいぐい飲み干す『桜風』に銀髪サイドテールの髪形をした少女の声が投げかけられる。朝潮型駆逐艦の10番艦、そして朝潮型駆逐艦として

一番最後まで生き残り、沈んだ駆逐艦である。

「……………もう一度聞いわ。……アンタ、一隻で行く気？」

「当然。あ、この御猪口使つて？注ぐから」

「え、あ……………ありが、とう」

深刻そうな表情で語りかけた霞を他所に、『桜風』は能天気な表情で霞に御猪口を渡して酌をする。いきなり機先を制された霞が手渡された御猪口に注がれる酒と『桜風』を注視するが「はい、どうぞ」の『桜風』の一言に、軽く頭を下げた無言で呷った。

「……………結構、美味しいわね」

「黒潮がくれたんだ」

「……………そう。意外と良い趣味しているじゃない」

ポツポツと話す霞と共に、『桜風』は月を見ながら日本酒を飲み続ける。今の月は満月よりやや欠けているが、『ドレッドノート』と交戦する予定日には満月になる事である。夜間に戦う訳ではないが。

「……『桜風』」

「何、霞？」

そうして少し時間が経ってから、霞はどうとう意を決して『桜風』に対して本題を切り出した。

「対『ドレッドノート』戦、私もアンタと行くわ！」

「却下」

「……どうして？」

——……アレ？霞って、こんな風に説明も無しに否定されるのが大嫌だっていう話じゃ……？

そんな心中の疑問を他所に、『桜風』は霞を『ドレッドノート』戦に連れて行かない理由を、もう一度手酌で酒を呷ってから語り出す。因みにこの『桜風』の霞情報は、深山艦隊のこれまでの戦闘詳報を読み漁って知った情報である。某敏腕美少女新聞記者か



らの情報は一切受けていない。

「対超兵器戦の場合、この前の演習の時みたいに物見遊山気分では非戦闘員を連れて行ける様な戦闘になる可能性は零。だから、戦闘海域外で霞たちは見えて欲しい」

「……その言葉、本当ね？非戦闘員は連れて行かないって」

——ん？……雲行き、何かおかしくない？

コクンと頷きつつも、霞の真剣な眼差しと言葉に疑問を抱く『桜風』。その疑問は、正しく『してやったり』と言わんばかりの黒く小さい笑みを浮かべた霞の肩に、見覚えのある妖精さんが飛び乗った事で直ぐに氷解する事になる。

「……………まさか、霞。……………本気？」

「当たり前よ。……………覚悟は完了してる。後は、行くだけ！やるわ！」

『許してやってくれねえかな、艦長？霞ちゃんのパッシブソナーでの聴音能力、本気で使えるレベルなんだわ』

決意の炎を目に宿らせた霞の肩に乗る、苦笑いした表情の駆逐艦『桜風』のソナー員を纏める水雷妖精。艦長である『桜風』の鋭い目線に対してそう答えた以上、この妖精さんの言葉は嘘では無い。

「……良いでしょう。……が、深山提督には霞から話を通して、許可を……」

「問題無いわ。もう許可は取り付けているから」

『後艦内の妖精さんズも既にこの件は了承済みです』

明日にでも書類は来る筈よ。そう事も無げに言い放った朝潮型10番艦に寝耳に水の事を言った水雷妖精。あの太平洋戦争で発生した日本海軍の組織としてのどす黒い闇、そして劣化の一途を辿る過酷な戦場を戦い抜いた彼女のため込んだ経験は、基本的に単艦で戦場に突っ込まされる以外はマトモな上司や戦況に恵まれた『桜風』に無い物だった。つまりは裏の手回し等の手腕に劣っていると言う事である。そもそも艦としての年季が違う。

「……………ああーもう！分かった、分かったわよ！駆逐艦娘の霞！乗艦を許可します！  
そしてお酒飲もう！艦長命令！」

『おぉー！艦長有難うございます！』

「……水雷妖精に誰が飲ますと言いましたか？」

『フア!? そ、そんなご無体な!』

「……ええ、頂くわ。……フフツ」

——……やっぱり、一方的な先入観は良くないわね。……あの時の目は、忘れな  
いと。アレは、ただの見間違いだから

艦長と水雷妖精がやいのやいのと騒ぐ中、小さい笑みを浮かべながら御猪口を煽る霞。対超兵器対策会議にて直視した『桜風』の異様な価値観、死生観は、ただの気の迷い、何かの間違いでしか無い。そう思い込む事で、『桜風』の恐怖感は抑え込まれた。言葉では死ぬ事を恐れなくとも、自身の命を実際に賭けの代金にするだけでなく、何の恐怖も無く死地に赴く艦娘が居る筈が無い。霞は、今なお『桜風』の事を自身の常識に則って買いかぶり過ぎていた。

「……良き月よのう」

日本本土にて夜回り中だった妙高に『桜風』が酒盛りしていたのが発見され、気配を察知して一隻だけ上手く身を隠した霞を他所に「うらぎりもの」の『桜風』の悲鳴が艦娘宿舎の屋上に木霊して、妙高からの有りがたい一撃に『桜風』が沈んでいた頃、此処南洋の海でも、超巨大潜水艦『ドレッドノート』が、自身の艦艇にて月見酒をしていた。

「……艦長は、どう思うかのう？我が、この世界でやった事に」

そう言いながら、此方も漆塗りの杯を手酌で呷る『ドレッドノート』。『桜風』との違いは、この場に存在するのは『ドレッドノート』ただ一隻であると言う事。そして、二人分のお膳に料理が作られている事だった。

「……我は、勇氣有る者。じゃが、この世界でやって来た事は、ただ逃げていただけじゃな……」

そう自嘲する『ドレッドノート』。この世界に来て目覚めた当初、乗員が誰も居ない事や、完全に周波数全てがオープン状態でも今までロクに稼働しなかった電子機器から流れ込む大量の情報に、『ドレッドノート』はパニックになっていた。

——自身は沈んだはず、なのに何故人間の身体を持つている？今大量に流れ込んでいる電波は一体どういふことだ？そもそも何故乗員が誰も居ない？なんで？どうして？

転移したばかりの『桜風』には、妖精雑に積まれた二等身機頭の山存在が居たのに対して、『ドレッドノート』には何も無かった。誰も想定などしていないこの環境化に置いて、双方に

とつて不運極まりない事に、アメリカ本土から欧州諸国に向けて進発していた米英合同輸送艦隊と遭遇。よくよく観察すると自身の知っている米英艦隊とは似ても似つかない艦艇が混ざって居たりしたのだが、怒濤の展開でそんな考察をする余裕が掻き消えていた『ドレッドノート』は、事前にウィルキア帝国海軍から与えられた通商破壊命令に従つて攻撃を開始。

「……我にとつて、最大の汚点じゃな……。何故、何故あの時攻撃してしまったのか、何故、あの時救助活動せずに逃げ出してしまったのか、何故、もつと慎重にならんかったのか……」

超兵器機関の放つ異常なノイズによる通信、索敵妨害、そして『ドレッドノート』自体が持つハイスペックな戦闘力、止めに完璧な真夜中で名実ともに完全に奇襲された事も有つて、米英艦隊は多数の艦娘、通常艦艇を含む戦力を戦力外とされた。応急修理要員を載せていた物が多かったアメリカ海軍の艦娘での轟沈艦は比較的少なかったし、38.1cm砲も威力過大で現代の駆逐艦の装甲を貫通して爆発した為に艦砲で撃沈された現代駆逐艦は極めて少なかったりしていたが、撃沈率74%と言う異常な数字の前では大した意味は無かった。

その後『ドレッドノート』は潜水艦のセオリーとして、重量物と認識した多数の救難ボートを艦内から放棄して戦闘海域から逃走した。乗り込むべき乗員も居ないのでから当たり前である。それに、この逃走時点での『ドレッドノート』は、今いる世界は前の世界と誤解していたのだから、すぐに追撃の艦が多数来ると考えていた。それが勘違いで有り、この世界が別世界であると気付いたのは相当後だったのであるが。

「……そして、私の故国ウィルキア帝国が存在しない事を信じられずに太平洋からウィルキア……この世界で言うウラジオストクとやらに向かい……あの艦駆逐艦『桜風』と出会った」

—— 救い様の無い臆病者で、屑の極み以外の何物でもないな、我は

酒に酔って居る為か、自身の奥底に無理矢理押し込んでいた感情が沸々と湧き出てくる『ドレッドノート』。今いるこの世界で行った行動は、全て『ドレッドノート』自身にかかってくる。母国であるウィルキア帝国が存在しないのだから当然である。そして、本来であれば『ドレッドノート』は誤って攻撃し、多数の人員を殺傷したアメリカ合衆国やイギリス連合王国へと出頭し、処罰を受けるのが筋である。だが『ドレッドノート』

は駆逐艦『桜風』と決闘する道を選んだ。自身の『桜風』と戦いたいと言う欲望に負け、筋を通さない。『勇氣有る者』に有るまじき行動であるが、心底ではこの行動を喜んでいゝ自身には嫌悪するしか無かつた。

「……じやが、最早既に賽は投げられた。艦長たちに殴られるのは、沈められてからのお楽しみじやな」

『ドレッドノート』の艦長は、先祖がロシア貴族だったためか『正面切つての誇り有る戦い』と言う物を先天的に好んでいた。奇襲戦法が常套手段の通常潜水艦だと先ず相性的に有り得ない配置なのだが、配属先の『ドレッドノート』の場合は潜水艦とも言うべき装甲や武装を誇る超兵器である。単独行動で艦隊に殴り込んだりする事が求められる『ドレッドノート』とは意外と相性が良かった。超兵器機関を稼働させていればノイズで必然的に戦いのゴングを鳴らしてしまうのだから、奇襲も何も有つたものでない。

『一対一での決闘』自体には、『ドレッドノート』の艦長も賛同はするだろう。だがそれに至る経緯に対しては多分認める事は無いだろう。『全てを清算してからやれ』と言



うのが目に見えている。

——すまぬのう、艦長。そして乗員の皆。『ドレッドノート』の依代が、この様な情弱な女子と成つて。……じゃが、せめてあの駆逐艦駆との海戦だけは、全力を持つてやらせてもらうでな

そう心に決めた『ドレッドノート』は、この世界に亡き艦長や乗員たちへの膳を、少しでも艦長みや乗員ん全てなに届くことを願い、海へと捧げる。世界が違う上に、自身が沈んだ場所からも何千キロも離れた場所での捧げ物が到底届くとは思えないが、やらないよりはやったほうが断然確率は高い。やらなければ、届く確率は零なのだから。

「……さて、我、は………」

そして捧げ終わった『ドレッドノート』は、自身が使っていた漆塗りの杯に、最後の一杯を並々と注ぎ、一息に飲み干し……

「……天地天命御照覧有れ、愚かしく醜くも武人足らんと足掻く、異界の軍艦の生き様

を」

自身の杯を、膳に叩き付けて砕く。

「……さて、では寝るか。身体的不調を抱えて『桜風』と戦うのは、無礼極まる」

そう呟いて、膳を片付けて艦内に戻る『ドレッドノート』。既に彼女の中には、先ほどのウザウザとした余計な感情や思考は存在していない。軍艦として、戦士として、誇り有る武人として戦う為の『ドレッドノート』へと、戻っていった。

……最後に行った、自身の杯砕き。それは、ウィルキアの同盟国であった日本に伝わる古い風習の一つ。

死地に赴く、別れの盃。『ドレッドノート』は、『桜風』と交戦して生きて帰るつもりなど、毛頭無かった。

## 第三八話 矢合わせの鏑始め

駆逐艦『桜風』と超巨大潜水艦『ドレッドノート』間で交わされた決闘の日当日。二週間前に指定した海域に向かって航行する駆逐艦『桜風』。だがその鋼鉄で整えられた装いは、超巨大潜水艦『ドレッドノート』と初めて通信を交わした二週間前と比べると少々、否かなり異なっていた。

「……『桜風』」

「何ですか、霞」

「……主砲がピラミッド見たいに積みあがっている様な、あんな状態で本当に戦えるの？ トップヘビーとか、問題無いの？」

「有ったらやる訳が無い。そんな事言っている暇が有ったら聴音作業の習熟に専念して……もう少しで始まるんだから。ちゃんとしないと強制退艦させる約束、忘れてないよね？」

「わ……分かってるわよ」

駆逐艦『桜風』の艦橋内部。『桜風』を強引にやり込めて今回の対『ドレッドノート』戦にソナー要員として乗艦した朝潮型駆逐艦の霞は、鈴谷や熊野から聞いていた『桜風』の雰囲気の変貌に驚きつつも、自ら言い出した事も有り『桜風』のソナーを操る妖精さんと共にヘッドフォンを耳に当てながら眼前のタッチパネルの操作練習を行っていた。普段のアナログ極まりない従来式の機器とは根本的に隔絶した装備では有るが、元々機械に疎い兵員が配置される事を想定でもされていたのか、初めて扱う霞でも十分に扱える様な説明や操作感覚で済んでいた。

『別に心配しなくても大丈夫だぜ、霞ちゃん』『そうそう、第一この駆逐艦の主砲配置は昔からこんな感じだったし』『前後二基ずつの主砲配置って何時振りだったのやら、って感じだしな』『やつと本当の『桜風』に戻ったって気がするよ』『正し装備レベルが段違い過ぎる件』『その辺はご愛敬と言う奴だ』『そう焦らんでも大丈夫さ嬢ちゃん。何ならこの焼酎でも飲んで気晴らしでもするか?』『戦闘中並びに駆逐艦娘には飲酒厳禁だよ』

——理性で抑え込もうとしても、どうしても駆逐艦『霞』としての本能が口に出してしまうのよ。あのふざけた砲塔配置には……

超兵器戦が近いために極めてキツイ反応を示す『桜風』とは違い、相変わらずなお気楽極楽蜻蛉に見える雰囲気であるこの駆逐艦『桜風』の妖精さんの雑談染みた助言を聞き流しながらも、心中では一夜で変貌した駆逐艦『桜風』の奇天烈極まりない兵装配置への感想を漏らす霞。確かに一言位は言いたくもなるだろう。今の『桜風』の兵装配置については。

霞が『桜風』に乗艦する事を認めさせた翌日の早朝。一時的とはいえ、自身の艦長となる『桜風』や、『ドレッドノート』との戦闘海域までの護衛を行う対超兵器部隊と共に簡易的な打ち合わせを交わしながら出撃ポイントである工廠に入った時、乗り込む駆逐艦『桜風』の外見を見た霞たちは、見送りに来た深山提督を除き口をあぐりと開けて目を丸くする程度には駆逐艦『桜風』の姿に衝撃を受けざる負えなかった。

艦尾に新しく、硫黄島沖大演習で陽炎に搭載されていた『5連装新型対潜誘導魚雷』が据え付けられているのは別に良い。雷撃巡洋艦が裸足で逃げ出すレベルで甲板に多数

の魚雷発射管や対空兵装等の危険物を満載した状態なのは既に見慣れている。だが流石に艦艇前部に背負い式に搭載された『15.5 cm 75口径4連装砲』4基に關しては、見慣れる見慣れない以前に普通は有り得ない光景だった。真横から見ると、素人が見てもトップヘビーなのが丸分かりな位に、ちよつとした揺れや横風で転覆しそうな砲塔配置なのだから。

「あー、やつと何時もの兵装配置に戻った。お疲れ、工廠の妖精さんたち。帰ったらお礼持っていくから」

想像通りの周囲の反応に苦笑する深山提督を除く対超兵器部隊に霞を加えた艦娘全員が、目の前の奇怪な光景に固まるのを他所に当の駆逐艦『桜風』の艦長は、隙間無く艦橋の眼前にまで迫り出しているピラミッド乃至階段状若しくは段々畑風に設置された『15.5 cm 75口径4連装砲』に対してその様な反応を笑顔で返していたが。

出撃前にそんな事が有ったりしたもの、深山提督や手隙の艦娘による見送りと対超兵器部隊による指定海域までの護衛の末、駆逐艦『桜風』は一発の銃弾も放つ事無く、一滴も燃料を無駄にする事も無く到着した。海域に至るまでの途中で分離した戦艦長門

を旗艦とした超兵器部隊は、海戦の匂いにも釣られたのか何時も通り湧き出て来た深海棲艦の撃滅に向かった。つまりは、前の世界における何時も通りの状況：単艦である。

取り敢えず自身の扱う機器の操作方法を、持ち前の負けん気と理解力、後帝国海軍流の根性で習得した霞は周囲を見渡す。普段自身の艦艇では多数のスイッチや大型の機械、地図が鎮座して妖精さんも艦娘も真面目に仕事しているのだが、この駆逐艦「桜風」にはその常識等どこ吹く風。自身の搭載している真空管を使用したアナログ機械とは遥かにレベルの違う液晶画面に超小型機械によつて小さくスッキリと纏められている各種装置。もう直ぐ戦闘だと言うのにカタパルト射出機を組体操で再現しようとして遊んでいる『桜風』の妖精さん。そして眼前にまで積み上がって居た筈の主砲塔が艦橋のガラスに映らず、代わりに戦闘海域の海図や艦艇状況が表示されている眼前の画面を見て持ち込んでいた資料集を、副長を肩に乗せて読みふける『桜風』駆逐艦「霞」の今の艦長。

——いつつもこんな感じなのかしら？

素朴な疑問を持つ霞だが、24時間365日がこうである訳が無い。

『……艦長、SH-60J搭乗のスクーフエイズ隊より入電。超兵器機関から発するノイズを探知しました。分析の結果、超巨大潜水艦『ドレッドノート』と確定です』

仮名であるフレイムアーツ隊から改称したスクーフエイズ隊からの緊急電が入り、その言葉が艦内に伝わった瞬間、つい先ほどまで遊んでいた妖精さんは一瞬で持ち場に戻った上に総数10秒と経たずに何時でも戦闘可能なように自らの仕事場に囁り付き、『桜風』は自身の操る砲塔や魚雷発射管の最終調整を行います。つい先ほどの緩い雰囲気から一変、今まさに駆逐艦『桜風』は第一種戦闘配置を整え終えた。先ほどの空気が春風のように暖かい物だとすれば、今の空気が静かな粉雪が降りしきる真冬の冷たい物であった。

『あー、霞ちゃん?もう戦闘になるからぼーつと見ていないで配置に戻ってくれねーか?パツシブソナー要員が聴音していないとか話にならないから』

「ぼっ……ぼーつとはしていないわよ!!」

新入り<sup>霞</sup>が激変した場の雰囲気<sup>霞</sup>に呑まれて居たのを見るに見かねて砲術妖精が声をかけると、口では兎も角アタフタして自身の配属場所に意識を戻す。その際慌ててヘッド



フォンを取り落しかけると言う、普段強気な少女の見せる可愛らしい姿をこっそり隠し持ったカメラで某A氏張りの精密技術で30連写した妖精さんが居たが、持ち場を少しの間と言えども離れた為に『桜風』の肩から何時の間にか移動していた副長妖精によって三途意訳：拘束、絞め、落しの川往復の刑されたの言うまでもない。後カメラは荒潮に献上された。

「スカーフフェイス。現戦闘予定海域の気象状況は？」

『……駄目ですね。少しずつつ荒れてきている上に、レーダー上に雨雲を捉えています。恐らく、戦闘中に荒れ出す可能性は極めて高いかと』

「ん、了解。……前よりは状況不利か。時期と海域が7月の南洋なのだから、海が荒れやすいのは当たり前だけど」

夏真っ盛りの南洋は、日本に恵みの雨兼破壊の暴風雨をもたらす台風が多数生まれる、極めて危険な海域である。その為、この海域をこの時期に通過しようとするような艦艇や船舶は通常存在しない。電波状況が悪化するだけで無く危ミサイルや魚雷、砲弾等険物を大量に使用する海戦など以外の外である。だからこそ『桜風』は、二週間の期間を開けた上でこの海域を指定した。思う存分周囲を気にすることなく『ドレッドノート』の望むように好きに決闘出来るのだから、気象によるいくらかの悪条件程度は織り込み済みだった。

『それと艦長。少し気になる事が』

「どうしたの、スカーフェイス」

『ハツ：ブリーフィングでは、深山提督は今海域には如何なる艦艇も侵入させない様に、軍上層部から各部隊に厳命されたと言いました。そのはずですよね？』

「そうよ。……まさか、とは思うけど」

『はい。……そのままか、です』

「……ああ、もう。何考えているんだろ、完全無欠な命令無視とか……」

頭の片隅に置いていた極めて小さい可能性の一つがピンポイントで的中して居た事に『桜風』は軽い頭痛を覚えて片手で面を覆い、話の内容で何となく察した霞も同じく軽い頭痛を覚えて目頭を押さえざる負えなかった。

「……ふむ、来たか。駆逐艦『桜風』」

「ええ。……二週間前の様に通信上では無く、こうやって直接面と向かって話すとは。想像だにしていませんでしたよ」

「何、これから正面から戦い、そして討ち取る者の首級を見るのも、又一興であろう?」

「……戦国時代の日ノ本武士の生まれ変わりですか、貴女は」

「奇襲謀略裏切り上等じゃったその頃の武士と一緒にしてほしくは無いのう。言うとしても新撰組じゃろう?」

「ならば、私はさしずめ新政府軍ですか」

「違うな。主は京洛に蔓延った攘夷志士じゃ」

「……言いますねえ」

「今日の日の入りにはもう二度と語らう事など出来ぬのじゃから、存分に言わせてもらうぞ」

——……何コレ。これから戦う相手と、しかも強大極まりない超兵器の艦娘と面と向かつて話し合うとか、前代未聞にも程があるんだけど

周囲の妖精さんに悟られない様に軽く胃を擦る霞。『桜風』に乗り込んでから状況に

振り回され続けている彼女だが、この状況は極め付けで有った。彼女と艦長『桜風』に手隙の妖精さんたちは、現在機関停止させた上で船体前部に集まり、同じく機関を停止させて『桜風』に横付けにしている超兵器『ドレッドノート』の依代艦娘と直接対峙していた。

「ふむ、それでは『桜風』。釈明を聞こうか。我と交わせし約定は、守るに足らざる程度の物であつたか？」

「……その点に關しては謝罪せざる負えません。此方としては、自衛軍から今海域には如何なる事情が有ろうとも一切進出させない様に厳命されていた筈ですので」

「……勝手に独走した輩の行為、と申すか。近代軍隊としての第一条件である部下の統制も取れぬとは、もう」

あきれ顔の『ドレッドノート』に対して、素直に頭を下げて謝罪する『桜風』と、その光景を複雑極まりない表情で見守るしかない駆逐艦帝國軍出身艦娘の霞。彼女たちが居る海域の海上、そして海中には、本来存在する筈の無い、してはならない筈の多数の日本艦娘の成れの果てが沈み、また今もお沈みつつあつた。

『ドレッドノート』曰く、先んじてこの海域に到着しようと航行していた際、『桜風』を通じてこの海域に部外者が存在しない様に自衛軍が防ぐと思われていた、日本海軍の艦娘が多数この海域に存在していた。そして疑問に思った『ドレッドノート』がその目前の不明艦に通信を入れようとした直後、不明艦隊は問答無用で『ドレッドノート』に対して攻撃を開始した。

「…攻撃されたと言う割には、被弾した筈の『ドレッドノート』には全然損傷が無い様に見えるんだけど」

「ぬ…主は？」

「霞よ。朝潮型駆逐艦の10番艦、霞」

「ふむ…まあ、良いわ。その疑問じやが、単に奴らの攻撃が貧弱でしか無かっただけじゃ。12.7cm砲に低威力の爆雷に加えて、あんな脆い水上機や竹蜻蛉ごときで我を沈められるはずも無かるうて」

「竹…蜻蛉？」

「…多分、私達の対潜兵装の一種の『カ号観測機』と『三式指揮連絡機』の事よ。『桜風』の世界のヘリコプターとは、耐久力が段違いに低いから」

「そう言えば…そんなのも有ったっけ…ああ、そう言えば。あきつ丸さんが『使って

みるで有ります』って貸してくれたんだっけ。機体強度弱すぎて空戦機動でアツサリ折れたけど」

うんうんと暢気に頷く『桜風』とは対照的に、霞は一見無表情に見えて、その実とても悲しそうな表情をしていた。『ドレッドノート』は日本海軍の艦艇を正当防衛で多数沈めたと言った。それも、沈めた艦艇には確認出来ただけでも、本来記されている筈の艦名や掲げられる艦隊旗が存在しなかった、とも言っていた。つまりは不運にも事故で戦闘海域に入り込んでいたのではなく初めから全てを承知の上で戦闘海域に侵入していたと言う事である。そしてこの海域に入り込める人類側の艦艇は、日本海軍しか存在しない。

アメリカ？ 『第二次ダンケルク作戦』と呼ばれる、軍艦だけでなく民間協力者の船舶も総動員してのハワイ諸島大撤収作戦に置いてミッドウェイと共にハワイを喪失してから南北アメリカ大陸の東西海岸線防衛に奮闘している軍に、態々こちらに艦艇を回せる余裕は無い。そもそも太平洋上の補給拠点が皆無である為、長距離航行は絶望的である。補給艦で物資を補給できても、それだけで戦える訳では無いのだ。

欧州諸国？ 大西洋の深海棲艦の脅威を放置して、貴重な戦力を割いて南洋に来るよう

な余裕など、アメリカ以上に存在していない。何せ戦力不足の余り、つい先日日本に対してインド洋のみならず中東方面に至るまでの航路防衛すらも依頼してくるほどに少しずつ疲弊の一途を辿りつつあるのだから。因みにこの事に関しては一応機密である。大前提として、仮にそんな事を実行して居たら、事前に日本海軍がその南洋に向かう艦隊の事に気付く筈である。

オーストラリア？ 絶対にありえない。深海棲艦が出現して以降、本土の目の前に深海棲艦の強固な要塞が建造された事も有つて事実上見捨てられてから、月3回のペースで本土に対して艦砲射撃と航空攻撃を喰らい、撃退できたとは言え一度は本土侵攻を許してしまつたような状況で有る。一か月前に第二次世界大戦頃にオーストラリア海軍が所有していた重巡洋艦のキャンベラ等が着任した事でお祭り騒ぎに成る程、戦力枯渇で喘いでいる。こんな場所に出す筈が無かつた。

——『ドレッドノート』が嘘をついている可能性も低いわね。『ドレッドノート』には、嘘を吐く理由が存在しない……

割と豊かに突っている脚部装甲が特徴的  
深紅のシヨートヘアに白磁の肌のいかにも女武人を絵にかいたような艦娘である『ド

『レッドノート』の様子を見る限り、『桜風』を動揺させるために嘘を吐いたりしている風には見えなかった。風貌や目、言葉でその者の事は割と分かる物で、『レッドノート』には裏表の無い、威風堂々とした態度しか見せていなかった。

「……それでじゃ、『桜風』」

「なんでしようか」

「この非礼の詫びは、お主は何を出す？」

「……では、一度仕切り直しとして、時を空けて再戦すると言うのは？」

「我に対して配慮しているように見せかけて、その実お主の戦いやすい様に誘導しているだけであろうが」

「……流石に露骨でしたか」

「主が飛ばしていた、SH-60J<sup>シーホーク</sup>。アレで、我を見つめるだけでなく気象状況も調べていたであろう。見れば分かるぞ、余り我を舐めるでない」

霞の憂鬱な気持ちを他所に、早くも『桜風』と『レッドノート』との間で火花飛び



散る会話がなされる。出来れば天候の良い日に開戦したい『桜風』のスケスケの思惑は、『ドレッドノート』の目こぼしを得る事は無かつたようだ。

「……ふむ。まあ、その点はもう良かろう」

「……詫び、は……必要ない？」

「ああ、そうじゃ。そもそも決闘などと言う我の我欲を即時承諾しおつた主に、余り多くは言えぬしな」

だがこの詫びの争いは、被害者側である『ドレッドノート』がアツサリ権利を放棄した事によって直ぐに終結した。当然疑問に思う『桜風』であつたが、次に『ドレッドノート』が繰り出した言葉で納得する事となる。

「代わりに……主が今載せておるその小娘に関してじゃが」  
「……」

小娘呼ばわりされた事に、顔を赤くして激昂仕掛ける霞であつたが、『ドレッドノート』が続けた言葉に、その激発しかねないまでに一気に高ぶつた感情は冷水をぶつ掛け

「られたが如く静まり返る事になる。

「……小娘とは、誰ですか？」

「いけしやあしやあとしらばつくれる出ない。……主が載せておる、霞……とか言う娘じゃ。我と『桜風』の交わせし約定は決闘。……まさか、堂々と二対一で開戦する気で連れて来たとは、夢にも思っていないかつたぞ」

その言葉と共に、今までとは桁違いの威圧感が『ドレッドノート』から放たれる。『ドレッドノート』の表情自体は穏やかなのであるが、その目は貴様も約定を果たさぬのか、と言う言葉を、声に出さずとも雄弁に語っていた。

「霞に関しては気にしないでください。彼女はソナー要員として乗り込んでいるので、艦艇を出しての2対1による海戦は行いません。絶対に」

『ドレッドノート』の目線に射竦められた霞を他所に、『桜風』は涼しい顔をして『ドレッドノート』の威圧を軽く流す。未知<sup>組</sup>の魔物<sup>兵器</sup>に対して初めて直接至近距離で対峙している霞に関しては兎も角、『桜風』に関してはもう嫌と言うほど多数の超兵器と交戦を繰

り返してきている。今更超兵器に対して萎縮する様な細やかな神経は保持して居なかった。つまりは感覚麻痺である。

「その言葉だけで信用しろとな？」

「…副長」

『こちらです』

言葉だけでは信用出来ない事例を先ほど体験した『ドレッドノート』の言葉に、『桜風』は副長から紙を受け取る。何も言われずとも用意した副長の行動に、霞がいつの間にと呆れて居る中『桜風』の次の行動は余りにも突拍子が無かった。

「……筆記用具は良いよ、副長」

『え？ですが、これが無ければ書けませんか……』

「自前で書くよ」

そう言うが早いのか、『桜風』は人差し指を口に突っ込み、己の犬歯で血管を噛み千切った。

「……ハア!? な、なにやってんの!？」

『はいどうどう霞ちゃん。俺達も驚いているのは本ただけど、艦長の好きにさせてやってくれ』

自身の細い人差し指を筆とし、自身の紅い血を墨として紙に書き記す『桜風』の奇行に対して、一拍子置いて驚愕する霞に艦長の邪魔をさせない様に押し止める水雷妖精。外野のそんな情景など全く意識を向けないうまま、『桜風』は紙に書き記す。風も穏やかで、『ドレッドノート』の深紅のシヨートヘア、一束に纏めた『桜風』の漆黒のミドルヘアが風に小さく靡く中、たつぷり5分の時間をかけて『桜風』は書き上げた。

「……では、これで如何?」

そう言った『桜風』は、書き上げた一枚の紙を『ドレッドノート』に向かって投げ渡す。

「つと………主は一体何を考えておるのだ? わざわざ、この様な事を……」

「勇有りし武人には、それ相応の仕儀が必要。そうでしょう?」

「……まあ、良いわ。では、今より30分後に会敵じゃ」  
 「ええ。では、30分後に。……また」

『桜風』から受け取った直筆文字通りの血判状の手紙を一瞥した『ドレッドノート』はそれ以上何かを言う事も無く、その巨大な潜水艦内に戻り、潜航を始めた。当然ながらそれを見送る『桜風』の備砲も魚雷発射艦も、1度たりとも微動だにする事は無かった。

「それじゃ、早く艦内に戻って……」

「その前にその指見せなさい！」

「え」

「え、じゃない！……ああ、もう！こんなに深く噛み千切るなんて馬鹿じゃないの!？」

「適当に舐めて放っておけば治る……」

「訳が無い！」

——副長、助けて？

——諦めて下さい

新入りの部下の行動が抑止出来ない為に助けを求め、そして副長に笑顔で拒否された『艦長桜風』。どちらが上位者なのか分からなくなる姿である。

「……さて、配置に着いたが……開戦まで、後10分か」

『桜風』と会敵時間を設定した後、深海に沈降している超巨大潜水艦『ドレッドノート』の艦橋にて、自身の艦艇の状況を確認した上で自身の望む位置に係留していた。

「……勇有りし武人には、それ相応の仕儀が必要。あやつめ、言うてくれるな」

これから殺しあう相手 駆逐艦『桜風』との邂逅にて、まさかその様な言葉を掛けられるとは思っても居なかつた『ドレッドノート』。それに加えて、『桜風』が指を食い破って書いた誓約書に着いても衝撃的であつた。

「……真摯な思いを抱えている事は良く分かつたが……あやつの間も苦労しているであらうな」

これから魚雷や艦砲を撃ったり撃たれたりする関係だと言うのに、『桜風』は律儀にも『ドレッドノート』の問いかけに対して誠意と本気の証拠として血染めの誓約書をその場で書き上げた。その誓約書には『朝潮型駆逐艦の霞に対して、絶対に艦艇は出させない事』『再度日本本土に報告を入れて、今海域には如何なる邪魔も入れさせない様にする事』『仮に警告を無視して侵入して来た艦艇は、駆逐艦『桜風』が責任を持って処理する』と言う、控えめに言つて狂気染みていた内容であつた。紛う事無き敵艦である『ドレッドノート』との誓約を守る為ならば、書面上とは言え味方殺しも厭わないと宣言したのだから。

「……駆逐艦『桜風』」

——私の想いにそこまで答えるのであれば、よろしい。我も全身全霊、総力を挙げて、貴艦をこの海に沈めて見せよう

「まあ先ず有り得ないであろうが……そう簡単に、沈むでないぞ」

そう呟く『ドレッドノート』の表情は、これから戦場に向かうと言うのに場違いなほ

どに、穏やかな小さい笑みを浮かべていた。

『……ところで艦長』

「どうしたの、副長。何か不具合でも有ったか？」

『一番の心配事であったスカ―フェイス隊のSH―60J<sup>シー</sup>含めて問題ありません。……艦長は、あの不明艦の出処は何処だと思いますか？』

一方の駆逐艦『桜風』の艦橋。こちらも戦闘準備を終えて配置場所に着き、後は戦闘開始時刻まで待機するだけの空白時間。手持ち無沙汰となっていた副長は、こちらも同じく開戦時刻まで待機するだけの『桜風』に対して、ある意味どうでも良い雑談を持ちかけていた。因みに霞は『桜風』の勧めで処理をしに向かっており、この場には居ない。

「少なくとも東南アジアに駐留している日本海軍の提督配下の艦娘である事だけは確定。それ以上は情報がちよつと足りないね。まあ私達にはこれ以上関係する事は無いだろうし、それに日本政府や現地政府が共同で適切に処置してくれるだろうから、放置



しても良いでしょ」

『……この前の輸送船団護衛任務で寄港したトラック諸島の提督。あの女元帥の可能性は？』

霞が居ないからと言つても、軍規的に少々問題の有りそうは発言を言葉を濁す事も無く発言した副長妖精に対して、『桜風』の考えは違つていた。

「……流石に仲本提督が、こんな粗雑な行動を起こす訳が無いよ。何かの行動を起こすにしても全般的にデータ不足だろうし、この海域には明確に進入禁止の通達が出されている、それにこんなマグマにバターを投げ込むような戦い方はしないと。戦力をすり潰すにしても、もっと良いすり潰し時を考えている筈」

『……意外と艦長は、高評価なんです。仲本提督の事が』

軽いジト目で無為に犠牲を出している奴に対してそれは無いのでは、と目に声色が雄弁に物語っている副長妖精に、『桜風』は苦笑するしか無かった。

「少なくとも、あの人は成果を出している。死地に置かれながらも、戦果を挙げ続けてい

る。それに、現在の提督階級に置いて最高階級である元帥号が許されている以上、戦闘指揮の才能だけでなく確実に生存能力に優れている筈。そんな人間が、少し考えれば分かる異常な場所に無作法に入り込みはしないよ」

人の依代  
艦娘

となつて暫く経つ『桜風』の基本的スタンスとしては『自身の妖精さんや友人と言つた身内に関わらない限り』感情論を排して数字で考察する傾向が出てきている。元々自身とは縁も所縁も無い世界に真つ新たな状態で現れ、そして転がり込んだ先の深山満理奈少将の性格上『日本政府や上司への忠誠の刷り込み』『身を捨てても人類を守護する事こそ至上の行為と認識させる洗脳』と言つた所業もしなかつたからか、それとも『桜風』自身の根の性格なのかは分からないが。

そんな彼女『桜風』に取つて見れば、仲本元帥は『敵中ど真ん中と言う立地的不利な戦略状況で、良くやっている方では?』と言う認識を抱いていた。勿論戦果を追い求めて無為に犠牲を排出しているのも事実であるが、少なくとも本国からの増援を受ける事も無く、一定の資源供給以外はほぼ自立に近い形を安定して取り続けていると言う事実は、まだまだ厳しい日本の懐具合を見るからに称賛されるべき物であつた。少なくとも、『桜風』自身の考えでは、そうであつた。

「まあ、今はそんな事はどうでも良いでしょ。これからみんなで、久しぶりの  
何時もの海戦  
 対超兵器戦闘をするんだからね」

ね  
 —— 久しぶりに、本気でやれる、血潮沸き踊る、本当の海戦。……皆、楽しもう

「……………楽しもう……………」

事前お花摘みに処理に向かい、艦橋に戻って来た霞が聞こえ、見た『桜風』の言葉表情は、ま  
 るでお出かけ前の楽しみで堪らない子供の様な、無垢な笑顔と声色で有った。

「……そろそろ、だな」

「ハッ……」

「私たち以外で覗き見をしているのは？」

「アメリカを筆頭として常任理事国は例外無く、また先進国の多くも同じく」

「……そう、か」

日本国首都東京霞ヶ浦の首相官邸。現在この場には海軍庁長官である山本蒼一、自衛三軍の大將格である統合幕僚長・陸上幕僚長・海上幕僚長・航空幕僚長を初めとした軍務関係者に最近ネットから『こんな有能な外務省が外務省である訳が無い』と酷い評価を受けている外務省の大臣や実務者、更には財務省の幹部官僚等の日本国首相『浅野幸喜』が選別した人間が集結していた。もし仮にここに爆弾でも投げ込まれた場合、最低半年から1年は機能不全に陥るであろう事は間違いない、錚々たる面々で有った。

「……どうにかして、妨害する事は出来なかつたのですか？」

「今の我が国の技術では不可能です。それに現在彼女たちの戦闘を監視している他国の衛星は全て民間偽装済み衛星です。妨害した場合、我が国の方が批判される可能性は極めて大か  
と」

彼等がこの首相官邸内地下にある会議室に集まっている理由。それはアメリカ艦隊に対して一方的な損害を強いた超兵器潜水艦と駆逐艦『桜風』との戦闘を何らかの形で嗅ぎつけた連中への対策会議の為であった。情報封鎖しようにも各方面に指定した海域への進出禁止の命令を論拠無く行つたために、例え何が起るかが分からなくとも何が起きる事くらいは、誰にでも予想は付く物だ。だがつい先ほど防衛省幹部が発言したように、八方塞がりの為に結局苦々しく放置するしか無い結論に達したのだが。

「前向きに考えましょう」

「山本長官?」

「現在彼女は我が国以外に所属する気はない事を、深山少将を通じて宣言してくれています。その事に焦れた他国が彼女に対して工作を仕掛けてくるようならば、カウンターで大きな外交的得点となるでしょう」

「……外務省としては、紳士協定として結ばれた艦娘取得協定を論拠に交渉しますが、超兵器と言う存在の為にその協定は容易に崩される可能性も出て来ました。今なお遅々として進んでいない『艦娘保護法案』の早期施行と万全な防諜体制の確立を、切に願います」

外務省からの明確極まりない皮肉に、引きつった笑みを浮かべざる負えない防諜関係者。実際の所、先日の『桜風』襲撃未遂事件のお陰で余計な仕事が増えたのだから、外務省としては一言位言いたくもなる話である。

「……話を戻すが、彼女から送られてくる戦闘データの受信体制は整っているのだろうか？」

「はい。スーパーコンピューターを大量増設し、回線も徹底的に強化しています。これで駄目なら、お手上げです」

その言葉を最後に、会議室は沈黙に包まれる。後方に居る人間としては、もうやる事が無いのだ。元々戦争の常識として、後方の人間が働くことになる本番は戦闘後である事が多いのだから、ある種当然でもあるが。

「……では、見守ろうか」

そう、浅野幸喜首相が発言した頃、北京、モスクワ、ワシントン、ロンドン、パリ、ベ

ルリン等：日本の妙な行動に敏感に反応した各国首脳陣も、衛星を通じて『桜風』と『ドレッドノート』による決闘を監視し始めていた。まあ、明確に海戦が起これと察知していたのはアメリカぐらいで、他国の殆どは『日本軍による機密兵器試験』『未知の資源地帯の発掘』『他国侵攻の事前準備』等と言った愉快的予測を立てたり立てなかつたりしているが。

だが、そんな事は、これから由緒正しき砲雷撃戦を開始する『桜風』と『ドレッドノート』には全く関係の無い話である。

「……時間じゃな。砲塔、魚雷、機関部異常見られず。戦闘準備ヨロシ」

……深海にて『勇氣ある者』が眩き

「……戦闘開始時刻です。総員、総力を尽くされたし」

……海上にて『不屈の小さき巨竜』が眩き

「……元ウイルクア王国近衛海軍、現日本国自衛海軍所属。超甲種重武装突撃型高速巡洋駆逐艦『桜風』、交戦開始！」

「……ウイルクア帝国海軍所属、超巨大潜水艦『ドレットノート』、交戦開始。さあ、思いついた残りの無きように、全力で楽しもうぞ!!」

—— 最高の場所 蒼き海 最高の死合い による決戦が始まった。

その日、衛星を通じてこの両艦の戦闘を見ていた先進各国首脳陣は、例外無く悪夢と死神がダース単位でやって来た事実を、その心に刻み込む事になる。



## 第三九話 南洋の海魔

南洋の大海原にて開幕した異世界出身艦同士の決闘。その初動は、超兵器『ドレッドノート』による魚雷攻撃にて幕を開けた。

「『桜風』！魚雷発射音!!」

「全速前進、機銃、迎撃開始！スカーフエイズ隊は直ちに出击せよ！」

『了解!』『戦果、期待して下さい!』『ハッ!』『ドレッドノート』なんか指先一つでダウンさ!』『だからお前は死亡フラグを何でそう立てまくるのかと……』

聴音員としてのいきなりの初仕事を問題無く成功させる霞の一声に、『桜風』は即座に回避と迎撃、そしてSH-60J搭乗のスカーフエイズ隊4機をセオリー通りに出撃させる。演習ではふざけていた部分の見受けられた妖精さんも、口では兎も角顔つきや視線は戦人へと完全に変貌している。

「射出地点の特定は?」

「……無理。音が足りない」

『現在アクティブソナーでも索敵中ですが、こちらも現在サツパリです』  
「……分かった」

本来雷撃を受けた場合、魚雷発射管からの魚雷射出音、そしてアクティブソナーによる探知にて早期に敵潜水艦を捕捉するのが望ましいのだが、通常の潜水艦なら兎も角、あれだけの巨体でありながらも静穏性も極めて高い『ドレッドノート』相手では、そう望むべくも無かった。加えて、今回は前の世界とは少し戦況が変化していた。

『……え？か、艦長！』『音波探信儀V』と『電波探信儀V』より超兵器ノイズが消失しました!!』

「私も確認している。『ドレッドノート』……超兵器機関を停止させたのね」  
「……超兵器が超兵器機関を停止させて戦えるものなの？」

『超兵器には、万が一の為に補助機関を搭載しているのが存在してんだ。多分超兵器機関が何らかの理由で稼働不可になった場合の為だろうな』

「と言つても超兵器機関は構造上止めようとしても完全に停止するわけじゃ無く、ほぼ停止させているだけだし、それに補助機関だけでも水中10から12ノットくらいは出

せる。霞はそのまま聴音に専念して」

「わ、分かったわ……」

——……？私、そんなデータ、何時取得したっけ……？

一瞬思念に雑念が混ざるも、戦場ではそう言った思考に耽られるだけの時間を与えられる贅沢を与えられる事は少ない。今も、水雷妖精からの『ドレッドノート』の魚雷の推測が完了したとの声が飛ぶに及び、雑念は容易く消え去った。

「水雷妖精。『ドレッドノート』の魚雷性能は？」

『航行の痕跡から見ても酸素魚雷である事は確定です。迎撃で発生した爆発の大きさからすると……恐らく、『53. 3cm 酸素魚雷』と『48. 3cm 酸素魚雷』です！』

「……やはり、『ドレッドノート』も強化されていたのね」

『こっちは弱体化したつてのに、酷い話ですよね』

「対艦魚雷が『61cm 4連装魚雷』だったあの時よりははるかにマシだよ。船体だつて『フリゲートII』な上、『5連装新型対潜誘導魚雷』にスカーフェイス隊のSH-60J<sup>シィホーグ</sup>だつてあるんだし」

そんな会話を『桜風』は自身の妖精さんと交わしつつも、『ドレッドノート』の搜索は一切怠つて居なかつたが、あの時とは違つて早期に発見は出来ていなかった。勿論、あの時は一応友軍艦艇の存在も有つて早期に『ドレッドノート』の射点等を確認出来るだけの情報を確保出来たのだが、今回は『桜風』単独である。

『……あー、クソッ！駄目です艦長、アクティブソナーには全く反応がありません！新入り、そつちは!』

「五月蠅い騒がないで！気が散る！……敵艦？全然分からない！機関駆動音に迎撃で水面下がグチャグチャなのよ?!」

その為に、現在アクティブソナー〔音波探信儀V〕、零式聴音機改〔零式聴音機改〕を探している訳なのだが、アクティブソナー〔音波探信儀V〕はサツパリ『ドレッドノート』を捉えられず、パッシブソナー〔零式聴音機改〕は高速で駆ける『桜風』の機関駆動音に加えて、魚雷迎撃にて発生した爆裂音で全く使い物になる状況にはなかつた。

「機関減速、前進微速のまま固定。……これは、長期戦になるね」

『現在戦闘海域外に雨雲が存在し、こちらに向かつて来ています。……早期に発見し、撃沈しなければ圧倒的不利になります』

「その点は皆分かっている。……でも、『音波探信儀V』、『零式聴音機改』、『パッシブソナー』の両方とも『ドレットノート』を探知出来ないんじゃないかね……」

因みに現在『桜風』の搭載している『パッシブソナー』だが、これは元々駆逐艦『桜風』の船体の固定装備で有り、『音波探信儀V』の様な補助装備とは違って取り外しが不可能な装備である。丁度秋月型駆逐艦自身に搭載している高射装置と似たようなものだ。

『……ですが、何故なんでしょうか？』

「副長？」

『確かに、理由は分かりませんが『ドレットノート』の性能は前の世界よりも強化されているでしょう。ですが、基礎性能が強化された程度で『音波探信儀V』の探知から逃れられるとは思えないのです』

「……それは……」

一瞬考え込んだ『桜風』の副長に返そうとした言葉は、唐突に入り込んできた通信に

よって遮られた。

『艦長、スカーフフェイス隊、配置に着きました。これよりディッピング・ソナー並びにソノブイを投下し、『ドレッドノート』の捜索に入ります』

「ん、了解。くれぐれも気を付けて」

『大丈夫ですって艦長！『ドレッドノート』には対空ミサイルなんか搭載していないんですからさあ！』

『だからスカーフフェイス3は良い加減そのビッグマウス兼フラグ建立癖をどうかしろと小一時間……』

前の世界では開発未了の為に行えなかったが、今回の対『ドレッドノート』戦における切り札の一手と目されているSH-60J<sup>シーホーク</sup>機。時速300km、航続距離257km、武装に『航空爆雷II』と『対潜ミサイルI』、夜戦、悪天候共に戦闘可能な対潜ヘリコプターの存在は、十分に切り札足り得る存在であった。潜水艦に取って航空機は、ある意味一番の脅威であるのは、どの世界でも違いは無かった。

『ソノブイ投下、データリンク開始』

「受信確認。……やはり反応が見られない、か」

『ですが、このまま搜索して居れば、いつかは必ず』

「……だと、良いんだけどね」

そう答えつつ、『桜風』は自身の艦橋ガラス面の表示を、通常時から戦闘海図へと一瞬で変更させる。自身の艦艇、スカーフェイス隊4機それぞれの位置並びに高度、加えて『桜風』とスカーフェイス隊4機それぞれの索敵範囲を一面に表示した物だ。普段は映像表示などせずに処理しているのだが、敵艦状況不明確かつ情報を整理したかったために、今回は表示を行った。

駆逐艦『桜風』を映像上右下に置いて俯角を取りつつ見下ろす戦闘海図が示す現在の状況は、スカーフェイス隊の内3機が索敵を行い、1機が何時でも攻撃可能な状況にて空中待機。そして『桜風』はスカーフェイス隊のカバー範囲外ながらも直ぐに援護可能な様に比較的近距离に存在する立ち位置であった。実の所、今回の陣形は深山少将を通じて入手した海上自衛隊の対潜戦闘の教本を参考にしている。

「……『桜風』、機関の騒音が酷くて、余り遠くの音までは拾えないわよ」

「……一応前進微速のままだけど」

「それでも17ノット以上も有るでしょ。もつと下げないと、私が聴音している意味が余り無いわ」

「……全身微速と機関停止を繰り返して如何にかする。これでいい?」

「……これなら、何とかなりそう。でも……いえ、何でも無いわ」

——加減速を繰り返すせいで、やっぱり無駄に騒音が発生している、か

霞の進言により、機関を全身微速<sup>1</sup>と機関停止を繰り返して可能な限り低速かつ騒音を少なくする努力を行う『桜風』。とは言え、元々の根本的設計構造として兵員削減の為に機関圧力はギア方式設計である為、缶の圧力を調整可能な陽炎や霞、大和たちとは違って機関後進、機関停止、前進微速<sup>1</sup>、前進強速<sup>2</sup>、全速前進<sup>3</sup>しか機関調整が出来ない『桜風』では、細かい速度調整はどう足掻いても通常の方法では不可能である。無理矢理やった場合の末路は機関部溶解&暴発の悪夢待った無し、である。

『……取り敢えずは、『ドレットノート』が網に捉えられるまで待つだけですわ、艦長』  
「ん……そうだね、副長」



——そうそう上手くいくとは、到底思えないけど

『ドレッドノート』が潜伏しているとと思われる海域を、駆逐艦『桜風』の  
『音波探信儀』 アクティブソナー、『零式聴音機改』 パッシブソナー、『シーホーク』 SH-60J3機のソノブイにディッピング・ソ  
 ナーによって立体的に搜索を続行する面々。そんな中『桜風』の危惧は、目を閉じて  
『零式聴音機改』 パッシブソナーが拾う音に集中していた霞からの報告によって、早くも現実のものとな  
 る。

「……『桜風』！注水音確認!!」

「霞、場所は!？」

「……えつと……(ハハ)！」

機関部の動作音に邪魔されつつも如何にか居場所を捉えた霞により、『桜風』の眼前に  
 表示される艦橋ガラス画面に『ドレッドノート』の兵装からと確実視される注水音が捉  
 えられたポイントが瞬時に表示される。そしてその場所は……

『ハ、此処って!？』

「スカーフフェイス3！操縦借りるよ!!」<sup>I have control</sup>

必殺の『航空爆雷Ⅱ』と『対潜ミサイルⅠ』を抱えて『ドレッドノート』に打ち込むべく空中待機していたスカーフフェイス3の至近距離で有った。

「スカーフフェイス3！操縦借りるよ!!」<sup>I have control</sup>

『え？わつうおおおおおー!!』

『ちよ!?!がああああー!!』

唐突な『桜風』<sup>艦長</sup>の宣言に、スカーフフェイス3の妖精さんが何かしらの反応を起こす前に、妖精さんが搭乗するSH-60J<sup>シブホク</sup>の操縦が『桜風』に奪われ、すぐさま右後方へと横滑りを開始。勿論の事、妖精さんたちははっきりとシートベルトを着用しているために機体の計器などに叩き付けられる心配は無いのだが。

『艦長?! 行き成り何を?!』

『き、機長! ミサイル警報!!』

突然の『桜風』<sup>艦長</sup>の奇行を問いただすスカーフエイズ3であったが、その問いを遮り機内にはミサイル接近を知らせる警告音がかなり立て始めた。

『スカーフエイズ隊! 直ちにその空域から退避せよ!! 現在貴隊の真下に『ドレッドノート』が存在している!!』

『ス、スカーフエイズ2了解!!』

『スカーフエイズ1了解』

『スカーフエイズ4了解!』

僚機が次々と空域から離脱を始める中、今なお『桜風』のコントロール下から離れていないスカーフエイズ3のSH-60J<sup>ホーク</sup>が『ドレッドノート』から放たれたミサイルから逃れるべく水面ギリギリ、高度にして僅か2メートル前後の低空にまで全速力で降下する。妖精さん二名が操縦権とレール無きジェットコースターの前に抱き合いながら

顔面蒼白で絶叫しているが、そんな事は些細な事である。

「霞！水雷妖精！『ドレッドノート』の居場所は?!」

「『音波探信儀アクティブソナーが欠片も意味を成していないです！全く『ドレッドノート』の居場所が特定出来ません!! オイマジでぶっ壊れてんのか?!」

「『桜風』が全速出しているせいで失探状態よ！今の状態じゃあ『ドレッドノート』の居場所を特定なんて出来ないわ！」

『艦長こっちの方に意識向けて下さいってばー?!』

『ミサイル！ミサイル!! ミサイルこっちクンナー?!』

『ウヴァアアアアアー?!』

『艦長ヘルプミー!! I don't want to die!』

通信で流れ込む駆逐艦『桜風』の艦橋内の騒ぎをよそに、全ての生殺与奪を『艦桜風』に握られているスカーフエイズ3妖精さんコンビとしては、メインローターが海面に接触しそうなまでに機体を傾斜させて低空で回避運動を行うSH-60J操縦席で流されるがまま恐怖に恐れ戦き、妖精さん同士で抱き合うより他の選択肢は無かった。艦長には全幅の信頼を置いているが、だからと言って恐怖心まで掻き消える訳では無い。

妖精さん二名の悲劇は兎も角、操縦権を握った『桜風』の操るスカーフェイス3のSH-60J目掛けて海中から飛び出した後、弧を描いて天から垂直に迫りくる『ドレッドノート』のミサイルは、時速300km超の高速でミサイルが描いた弧の内側に滑り込むSH-60Jの機動に追従出来ず、機体から僅か5mの至近距離を通過して海面に激突、爆散した。

『うおっつあ!!』

『抜つけたあ!!』

『……よし、スカーフェイス3、操縦権をそっちに返す。直ちに帰投して!!』

『はっ……ハイ!!』

『艦長?! 空からの攻撃は!?!』

『「たった四機しかないのに一機でも落とされたら取り返しがつかない! 以上!」』

進言を言下に一刀両断された直後、いつの間にか至近距離にまで突入していた駆逐艦『桜風』が『新型対潜ロケット』を、先ほどミサイルが射出された海域を中心に複数撃ち込んでいた。が…

『……何か、おかしくね?』

『……です、ね。艦長、今日はやけに広範囲に撃ち込んでいる見たいですね……』

『……取り敢えず、帰るか』

『そうですね』

その言葉と共に、スカーフェイス3は母艦へと帰艦する。あの至近距離でミサイルが撃たれたと言うのに何時も通りの一点集中攻撃をしていないと言う事は、結局発見できなかった。その事は、何時もおふざけしかしていない様に見えるスカーフェイス3で無くとも、駆逐艦『桜風』の妖精さんなら誰でも理解出来た。

『今回の戦、一筋縄ではいきませんね』

『何時もの事だ』

『……駄目です。効力無しと思われます!』

「……兵装選択を間違えたね。『新型対潜ロケット』と『5連装新型対潜誘導魚雷』じゃ、範囲攻撃は出来ない。『ドレッドノート』の居場所を完全に特定出来ない限り、一撃も与えられない……か」

スカーフェイス3が駆逐艦『桜風』艦尾の発着場に着艦する頃、『桜風』は『ドレッドノート』の居場所を今なお特定出来ぬまま彷徨っていた。否、一応は搜索してはいるのだが、その目標である『ドレッドノート』が今なおアクティブソナーとパッシブソナーを酷使しても捉えられていない為、搜索と言うよりも彷徨うと言うべきな艦艇移動であった。因みにこの頃にはとうとう水雷妖精が整備科に怒鳴り込み、仕事の邪魔をするなど蹴り出されている。

『……艦長』

「何、副長」

『『ドレッドノート』は対空ミサイルをも追加装備しているのでしようか?』

「それは無いね。スカーフェイス3の記録映像を見ると、あのミサイルは対艦ミサイルVLSだった。前の世界と同じく、ウィルキア解放軍とほぼ同一の様式だったし直ぐに

分かったよ」

「……あの映像、一瞬だったのに良く分かったわね」

「艦艇時代に散々見続けたんだから。それに大層な異名を頂いている以上、あのくらいは出来ないよ」

『因みに対艦ミサイルを『ドレッドノート』が対空ミサイルとして流用出来た理由は？』  
「こつちだつて手動入力で対艦ミサイルを対地、対空目標に、対空ミサイルを対艦、対地目標に流用可能でしょ？ 私達に出来る事が、相手に出来ない訳が無い」

直接映像に捉えられたのは時間合計にして3秒も無いと言うのに、『ドレッドノート』の撃ち放ったミサイルが対艦ミサイルVLSと断定出来た事に呆れる霞に事も無げになんだか常識から身投げしている返答をする『桜風』。尚、誘導ミサイルを本来の想定された目標物以外に射撃した場合、威力は兎も角誘導性能は例外無く本来の誘導ミサイルよりも低下している。今回低速航空機の代表格であるヘリコプターがギリギリとは言え被弾を回避出来たのも、『桜風』の操縦が優れていたのも有るが飛来したのが比較的低速であるVLS型の対艦ミサイルで有った為である。

「……副長。この海域の変温層を表示するよ」



『え?……あ、そうか!』

「ある程度は絞り込める筈だから、多少は判断材料になるよね」

「……『桜風』、行き成り何言ってるの?」

以心伝心で少数の単語で意思疎通を終える『桜風』と副長に、多少機器的に軽減されているとはいえそれでも爆音を何度も聞いた耳を休める為に本来のソナー要員の妖精さんと交代した霞が問いかける。

「海には温度が低温へ急激に変化する層が存在して、その層の下部に存在する潜水艦はアクティブソナーでは探知が殆ど不可能になるの。特に正午ごろだと海面温度が上昇して、その温度変化する層が顕著になり、アクティブソナーの探知能力が激減する」  
午後「アフタヌーンエフェクト」って言う現象が見られるんだって」

『提督さんから借り受けた対潜戦闘の教本に書いてありましたしね。……所で艦長、何故今頃になつて?』

「………だつて」

『だつて?』

「………完全に頭の中に無かつたから、その変温層とかの事」

視線を床に逸らして白状する『桜風』。『桜風』と同じくスツポリ忘れ去っていた妖精さんも同じく気まぎれになる中、霞だけは呆れかえっていた。

「……あれだけ過酷な戦場を戦って来ているアンタがこんな事も忘れてるって、何やってんの」

「仕方が無いでしょ……こつちの世界とは違って、潜水艦は偵察位にしか使えないって事で、水上艦艇の方が重視されていたんだから……」

10割方言い訳にしか聞こえないが、事実では有る。霞や深山提督の居る世界では、その隠密性によって強力な戦力価値を誇る潜水艦だが、『桜風』の存在した世界では余りにも技術進化が早すぎた結果、潜水艦は偵察と多少の奇襲戦力以外では殆ど戦力価値が認められていかなかった。早い話が、仮に最高のタイミングで主力艦艇を奇襲できたとしても、高度な防御重力場を備えている為に有効な打撃を与える前に発見されて撃沈されるのがオチなのだ。

加えるとなれば、各種技術進化に対して潜水艦が全く追従出来なかつたのも大きかつた。戦争期間はわずかに一年。そのたった一年で最低でも一世紀、物によってはそれ

上にかげ離れたレベルの未来兵器が実用化されたが、今となつては『桜風』にもどうだったか判別は付かないが、潜水艦の少ない制限重量はどうしてもクリア出来ず、結果的に武装も防御力も強化出来ず、限界を知らぬとばかりに強化され続ける水上艦艇の攻撃力と防御力の前に続々と敗北していった。そんな状況で、戦術が練り込まれる程潜水艦が重用される訳が無かった。飛躍的に強化、又生産性が向上した水上艦艇を突撃させた方が何もかもが早かった。

とは言え、これはあくまで『桜風』の居た世界の話では有るが、この世界ではあまり関係は無い。

「……超兵器相手に油断は禁物つて口を酸っぱくして言っていたの、『桜風』じゃ無い。その当の本人が通常の潜水艦戦を基準に考えているとか、馬鹿じゃないの?」

「返す言葉もございませぬ……」

霞が駆逐艦『桜風』に乗り込んでから大体半日。これまで振り回されて来た霞が初めて『桜風』に対して優位に立てた歴史的瞬間であった。

『……遊んでいる暇は有りませぬ艦長! 浮上音です! 『ドレッドノート』浮上!!』

そんな妹に怒られる姉の様な微笑ましい両者の姿はさておき、パッシブソナーで『ドレッドノート』の浮上音を確認した妖精さんの報告によってどこかホンワカした艦橋内の雰囲気は一気に切り替わる。

「位置は!？」

『浮上位置確認! 艦尾方向、『ドレッドノート』の砲口全てが此方に向いています!!』

「はあ!？」

「直ちに反転! 魚雷、ミサイルに注意!! 砲雷撃戦用意!」

完全に此方の位置を把握していたとしか思えない『ドレッドノート』の状態に思わず唾然とする霞と、そんな霞を無視して瞬時に修羅へと舞い戻る『桜風』。霞の栄光は、僅か3分と持たずに儂く終焉を迎えた。

『『ドレッドノート』、艦体前部の魚雷発射管より雷撃確認! 並びに発砲確認!!』

「そのまま直進……今は『ドレッドノート』を射程に捉える事を最優先! その為なら多少の被弾は捨て置いて!」

「捨て置いちゃ駄目でしょアンタ馬鹿あ!？」

『了解!突撃します!!』

「了解しちゃうの?!」

『霞ちゃん、そんな事より、席空いたぜ』

「……あ、うん、分かったわ……」

妖精さんの声によって今の自分聴員席の職場席に座ってシートベルト特注のブツを着用する霞を他所に、最大速度にて転舵し『ドレッドノート』へ向かつて突貫する駆逐艦『桜風』。霞常識人の無駄に鋭い突っ込みは何時も通り流された。

巨大潜水戦艦『ドレッドノート』は、多数の魚雷や対艦ミサイルVLSもさることながら、戦艦の名を持つ通りに『40.6cm砲』と言う大口徑砲を搭載している。此方の世界では第一次世界大戦末期に大英帝国海軍がM級潜水艦と呼ばれる305mm単装砲を主砲として搭載した物が建造されているが、潜水艦本来の運用に正面から喧嘩を売る面白仕様とあらゆる意味で性能的欠陥を抱え込んでいた為に、『潜水戦艦』は壮大な失敗作として記録されている。

「取り舵10度、機関後進、面舵23度、全速前進！左舷艦首前方魚雷接近、機銃迎撃！砲術妖精！」

『駄目です！射程圏外で届きません！くそつ、沈降速度が速い！』

「水雷妖精！」

『命中する前に『ドレッドノート』の潜航が終わるのが先です！畜生、コツチの雷撃を讀んでやがったのかあの女武者!!』

「ソナーは!?!生きてる!?!」

『今は未だ捉えられています！しかし……ああ、クソ、反応消失!』

「海中の爆裂音が酷くてもう何処にいるのか分かる訳が無いわ！」

当然、超兵器を名乗る以上M級潜水艦の様な欠陥満載仕様になる訳が無く、超兵器機関が放つ膨大と言う言葉すら過少でしかない機関出力と演算能力、そして超兵器『ドレッドノート』に宿った依乗員全ての経験代が、『ドレッドノート』の持つあらゆる戦闘能力を徹底的に底上げしていた。前の世界で『ドレッドノート』を撃沈出来た『桜風』と言えども、早々容易く撃沈出来る様な相手では無かった。

『……駄目です、反応無し』

「聴音も全然駄目。……何も聞こえない」

「……了解」

最終的に『ドレッドノート』への雷撃は空振り、砲撃に至っては射程圏内に入れる事すら出来ずに取り逃し、変わって『桜風』には二発の40.6cm砲の至近弾と6発の雷撃の至近弾を受けていた。船体に対するダメージは無いに等しいが、このままではジリ便になった末に戦闘海域内に嵐が乱入し、『ドレッドノート』の独壇場となる事は予想出来た。『音波探信儀V』が意味を成さず、零式聴音機改も嵐で使い物にならなくなれば、潜水艦最大の強敵〔桜風〕であつても、刈り取られる獲物へと容易く成り下がる。

「……やっぱり、絶対おかしい」

『……艦長?』

「確かに『ドレッドノート』の性能は強化されている。だけど、それだけで『音波探信儀V』の探知から逃れられるとは思えない」

今までの交戦で「長期戦は必敗確実」と確信していた『桜風』は思考する。『桜風』が

心の底から敬愛し、尊敬し、そして崇拜する己の艦長が、自身に乗り込んでいた副官がそうしていたように。

……ウイルキアのアクティブソナーは、効果範囲を狭める代償に出力任せで潜水艦を捉える兵装。それは超兵器が相手であつても変わりはない

——電波妨害？いえ、なら『ドレッドノート』から電波が発せられている筈……  
——何か……何か……何か、カラクリが有る筈……超兵器と言えども、物理法則を無視は出来ない筈……

『あー、もう！なんでだよ！なんでなんだよ！前は普通に音跳ね返していただろうが『ドレッドノート』！』

「私が知る訳無いでしょ……と言うか煩いから静かにして……」

『……あ、わりい』

……音を跳ね返す……ッ？！

「……そう言う事。超兵器らしからぬ機能ね。まあ、潜水艦だからある意味搭載して当



然の機能かな」

『ふあ?!』

「……『桜風』？」

勝手に理解して納得する『桜風』の独り言に、当然ながら置いてけぼりの艦橋要員。そんな彼女たちに対して、『桜風』は艦橋ガラスに表示されたデータ、画像を激しく操作しながら解説を始める。

「確信に近い予想だけど、恐らく『ドレッドノート』は『音波探信儀V』<sup>アクティブソナー</sup>に対してアクティブステルスを実行して逃れている」

『アクティブステルス?!』『ああ、その手が有ったか!』『で、でも処理能力足りるのか!』『常識的な範疇の初期型とは言え超兵器だぞ!その位出来ない訳が無い!』『てことは俺らは今の今まで自身の位置を暴露してただけで事か!』

「……御免、なにそれ」

『知ら……ないのか』

「アクティブステルス。この世界でも開発されている技術で、自分に飛んでくる電波を自分から電磁波を放って打ち消すスタイルのステルス技法。『ドレッドノート』は、アク

タイプソナーが放つ音に対して同じく音を叩き付けて打ち消している……きっと、確実に」

艦長の考察に一気に湧き上がる周囲を他所に、あくまで第二次世界大戦頃の軍事技術が戦闘思考の基軸である霞が疑問符を浮かべ、『桜風』は簡単に解説する。現実では自ら電波を発する為に開発が難航しているアクティブステルスだが、超兵器の持つ演算能力ならば敵艦に探知されない様に調整して狙い撃ちする事は出来る。『桜風』は、そう考えた。

「……さて、手品の種が分かれば、もうマジックショーは閉店ね。今度はこっちが仕掛ける番」

『早っ』『…まあ艦長だしな』『ああ、そうだな』『やっと反撃開始かー』『よっしや、『ドレッドノート』を泣かせるチャンスだ!』『……お前、案外下種かつたんだな』『何故そうなる?!』

「……それで、どうするのよ『桜風』」

「まあ、それより先に先ずやる事が有るから」

沸き立つ妖精さんを横目に『桜風』に問いかけた霞に対して、『桜風』はこう答えた。

「霞。貴艦は直ちにSH-60Jシーホークに搭乗し別海域で戦闘中の対超兵器部隊に転進しなさい。これは艦長命令であり、異論は認めないから」

「……はあ?!」

此処に、超巨大潜水艦『ドレットノート』と駆逐艦『桜風』との戦争は、新しいステージへと移行する。狩られる側から狩る側へと『桜風』が豹変する一手を打ち出す為にも、『桜風』は霞が何と言おうとこの戦争から離脱させる気であった。

## 第四十話 死地を越えて求しもの

「……なあ、大和」

「何ですか、長門さん」

「……『桜風』が開発した兵装、本当に凄まじいな」

「……はい。本当に、そう思います。ですが……」

「分かっている。…分かっているんだ」

そう会話を交わす深山艦隊対超兵器部隊所属の戦艦娘二隻。『桜風』と別れて、『ドレッドノート』と『桜風』が交戦する海域に侵攻する気配の見た深海棲艦の艦隊を、少の損害を負いつつも全滅させた感想であった。

現状、対超兵器部隊が装備する『桜風』が開発した兵装は、押し並べて低位の兵装に限定されている。高位な兵装は一応開発されてこそいるが、それらを装備した結果が硫黄島沖大演習の惨事である。実は処理能力だけでなく、長門や大和が搭載した『46cm 75口径4連装砲』『50・8cm 75口径4連装砲』『41cm 65口径4連装砲』『41cm

50口径3連装砲』は、その大きすぎる発砲振動がそれぞれの船体の許容範囲を大きく逸脱しており、帰投後調査すると船体の一部に亀裂が入りかけていた。

『桜風』の開発した砲塔兵装の砲弾には『近接炸裂弾』『新型徹甲弾』が既に固定で搭載されている。その砲弾事態には大きな問題は起きなかつたのだが、代わりに『桜風』の開発した大口徑砲は例外無く『発砲速度が異常に早かつた』。『桜風』の視点では自動装填装置を一切使用していない為相当な低速なのだが、長門達から見れば有り得ない高速装填であつた。長門が愛用している41cm連装砲の装填速度は最高40秒、最悪1分30秒だが、一番口径が大きい『50・8cm75口径4連装砲』でも再装填には20秒とかららない。連射し続ければ、船体が振動に耐え切れなくなるのは自明の理である。

「……一応、今回は『桜風』さんが開発できた低位の兵装を搭載していますが……」

「それでも完全に使いこなせているとは到底言えない。……向こうでは『桜風』が『ドレッドノート』と死闘を繰り広げていると言うのに、此方は深海棲艦相手に苦戦。……自分が情けない」

「長門さん。それ以上は士気に関わります。反省は母港に帰つてからに」

「……そうだな、大和。……着任直後と比べると、成長したな。あの時は……」

「む、昔の事はもう終わった事です!!」

既に戦艦夕級 flag ship と重巡り級 flag ship が基幹である敵深海棲艦打撃艦隊を殲滅しているとはいえ、この談笑中も索敵は欠かしていない。この点は、熟練艦である二隻には当たり前の行動である。因みに今回長門に『40. 6cm55口径3連装砲』大和に『45. 7cm50口径4連装砲』を搭載して実戦投入を行っているが、砲撃戦にて夕級 flag ship に対して水中弾の一発で爆沈させる結果を得ている。この事からやはり威力は申し分無いのは明白なのだが、船体に対する振動対策は根本的有効策は出ていなかった。その為現状は振動が完全に治まるまで待つてから斉射を行う、装填速度の速さを殆ど生かせない戦闘方法である。一応この戦法でも破壊力は凄まじいではあるが。

「大和さん。長門さん」

「瑞鶴か？」

「瑞鶴さん？何か問題が起きましたか？」

そんな中、通信が長門たちの元に入る。今回は二隻ペアとなつて深海棲艦との戦闘を行う手筈になっている。本来戦力の分散は愚の骨頂でしかないのだが、元々6隻とも戦闘経験はそれ相応に積み上げているし、確認出来た深海棲艦には姫級や鬼級が混ざつて

いない事は既に何度も確認済みであるし、その上で何かあった場合はすぐさま合流する為比較的近距离を航行している。

「いえ、問題は起こって無いです。此方も終わりました」

「戦果はヲ級eliteを二隻、又級flagship一隻、その他小艦艇。ロングレンジでの二撃で決着しました」

「分かりました。それでは一度合流しましょう」

「後は陽炎と青葉か……」

そうこうしている間に、再度通信が入る。従来型の装備で有れば、彩雲や水偵などの航空機を経由したとしても相当な遠距離間では通信は不可能のだが、『桜風』が開発した兵装、特に航空兵装に関しては相当強力な通信機器が搭載されていた。『桜風』曰く「被撃墜されるのが大前提とは言え、どれだけ離れて居ようとも、確実に少しでも情報を伝える為」なのだ。

「青葉です。此方の戦闘も終了しました」

「戦果は雷巡子級flagship一隻、戦艦ル級flagship改一隻、その他雑

兵が幾つかね」

「…………え？ル級…………flagship改？」

「待った。陽炎、それは誤認では無いのか？」

「誤認では有りません。後で写真も見せますので」

「6連装酸素魚雷が上手い具合に命中したから、意外と簡単に沈みましたよ？」

事も無げに、さも当然とばかりに言う青葉と陽炎に対し、当然ながら大和と長門は驚き、疑念を抱く。陽炎は、大日本帝国海軍艦隊型駆逐艦の集大成たる陽炎型駆逐艦のネームシップだが、所詮は駆逐艦でしか無く戦艦相手では勝利するのは極めて厳しい。青葉に至っては1927年就役の初期も初期な重巡洋艦であり、ある意味駆逐艦以上に戦艦相手の戦闘は厳しい。

「…………二人とも、一体何をしたのですか？」

「いえ、別に変な事はしていませんよ？」

「『桜風』の作った補助兵装の『バウスラスト』で回避しただけだしね。まあ、お陰で船体が痛んじやったけど」

「やつぱり未だ修練が足りませんねえ」



「……………は……………？」

何時もの凜々しい長門からは連想できない間の抜けた声が出る。今自身が耳にした陽炎と青葉の言葉は、長門にそうさせるだけの衝撃力が有った。

「……………お前達、何時のまに？」

「……………えっと、『バウストラスター』の事ですか？」

「『バウストラスター』なら、五日前に『桜風』が二個開発成功したから、搭載して実戦運用しているだけだ……」

「……………あの……………大丈夫なのですか？」

「心配しなくても大丈夫です、大和さん」

「この位は大した負担じゃありませんしね。処理能力的には」

——いや、そう言う意味では無くてだな……！お前たちは、『桜風』が開発した兵装に、そんなに簡単に命を賭けられたのか？！

歴戦の兵士と言う物は、例外無く信頼性の低い物は忌避する傾向にある。例えどれだ

け高性能でも、戦闘中に使い物にならなくなったらその瞬間に自身の生命に関わるからだ。長門達は『桜風』が開発した兵装の能力は極めて高く評価していたが、かと言ってそれらを今すぐ使いたいとは思えなかった。有体に言えば、硫黄島沖大演習での惨事の記憶が、自然と『桜風』が開発する高レベルな補助兵装の搭載を避けていた。

未知の大馬力エンジンや大口径機関砲、重装甲に独特の操縦感覚を持つ航空機の操縦に今なお四苦八苦している加賀と瑞鶴にしても、補助兵装に關してはまずもって殆ど搭載していない。これ以上の物を抱え込んだら、確実に取得する情報が自身の処理能力以上に簡単に飽和して操る航空機全てを墜落させるのが目に見えていた。大型艦全てがそうである中の青葉と陽炎の今回の行為は、対超兵器部隊の中では異端だった。

『艦長、ただいま見張り員より『桜風』さんと『ドレッドノート』との戦闘海域方面から、一機<sup>S H I 6 0 J</sup>ヘリコプターが飛来しているとの報告が入りましたが……艦長?』

「……あ、ああ……分かった」

「……何か、有ったのかな」

「私たちは早く長門さんたちと合流する事を優先しましょう、陽炎さん」

——……陽炎と青葉の二人を問いたただすのは帰投してからだ。今はそのヘリコプターの事だな

そうして後回しにした長門の思考は、『桜風』が派遣してきたヘリコプターが搭載していた積み荷によって跡形も無く消し飛ばすことになる。

「……袋？……モゾモゾ動いているな？」

「何が入ってるんでしょう……？」

『艦長のご命令で、霞さんをお連れしました。それでは、私たちは戦場に戻りますので、この娘をお願いします！』

「……は？」

「……え？」

『桜風』航空隊所属のSH—60Jが長門たちの元に到着する時より1時間前。

「……冗談にしても笑えないわよ、『桜風』」

「この命令は嘘でも冗談でも無い。霞、今すぐこの場から離れる事。時間の猶予は……」  
「嫌よ！絶対に嫌!!此処まで来て、此処まで来て私を置いてけぼりにするなんて許さないわ!!」

「確かに中途半端なところで放り出す形になるのは重々承知している。だけど……」  
「馬鹿言つてんじゃないわよ『桜風』！」

戦場にて、二人の少女が争っている。一方は淡々と自身の言いたい事を言い、一方は激昂して感情の赴くままに叫んでいた。淡々と話す黒髪の少女は、艦橋ガラスに映し出され、滝の如く流れ落ちる情報の海から一切視線も身体も動かさず、灰色のサイドテールの少女は持ち場から立ち上がり、今の上司を睨んで両手に握り拳を作りながらに。

「……スカーフェイス隊、SH-60Jはどう?」

『何時でも飛ばせますが……』

「待ちなさい『桜風』！私は絶対に認めないわ！大体、聴音員として使えるって話だったじゃない！それを……」

頑として説得を聞き入れようとしない少女に対し、もう一人が取った手段は短絡的、かつ有効な手段。

「……やって、皆」

『ハッ！』

「え、ちよ…は、離しなさい！ 『桜風』、止め！ 止めて…！」

「……ごめんね、霞。貴女を、守る為だから」

妖精さんが寄ってたかって袋詰めにして、強制的に連れ出す方法であった。

『……本当に良かったんですか？』

「こうした方が、今からの戦闘を効率的に出来るからね」

『それでもって霞ちゃんを怪我させずに済みますしね。こっち、と言うか艦長への配慮もして欲しい物ですが』

「……先ほど通達した策は変更しないよ。皆には悪いとは思うけど」

『じゃあ少しは艦長自身の身体を慮って下さい』

「却下」

『ですよねー』等の妖精さんたちの諦めの声が艦橋に、そしてSH-60Jの駆動音が艦尾より響き渡り、そして遠ざかる中、『桜風』たちは今なお居場所を特定できていない。『ドレツドノート』への次の一手打とうとしていた。

『艦長。……本当に、やるんですか？多分、成功率は一桁クラスですよ？』

「副長、低く見積もり過ぎだよ。成功、失敗率は共に f i f t y | f i f t y」

『……その心は？』

「フフツ」

……駆逐艦『桜風』が超兵器と会敵した時に辿る航路は、『沈める』か『沈められる』か。その何方かに決まってるでしょ？

『それ完全なる詭弁極まれりじや無いですか艦長』

「……そんなに言下に切り捨てなくなつて、ちよつとカツコつけるくらい良いじやない

……」

『と言うか誰に吹き込まれたんですかそんなセリフ』

「対ワールウインド戦で負傷した後、工場の医務室に軟禁されてたでしょ？あの時に秋雲が漫画持つて来てくれてね。この時代の漫画つて絵柄もストーリーも多種多様で面白かったよ」

——まあ本当は以前の、対超兵器対策会議で話した事そのまんまだけど

妖精さんたちが騒めく中、真実は話さず適当に返した『桜風』。お陰で妖精さんたちの中での秋雲への評価が下落したりしていたが、そんな事は実際どうでもよい話である。因みに彼女たちは秋雲が過去やらかしていた同人誌関連の事は知らない。

「さつて……アクティブソナーの使用停止。機関減速、ボイラー圧力、並びにスクリユ速度調整し速度8ノットに固定」

『了解！』『サーイエツサー!!』『あーもう！また鳳翔さんや古鷹さんに怒られますよ！』『と言いますか艦長。本当に来るんですか!?!』

「必ず。釣り針付きと言えども、これだけ無防備となった獲物。『ドレッドノート』ならば、確実に獲りに来る」

『その心は?』

「『ドレッドノート』が超兵器だから」

『身も蓋もねえツスね!?! 反論し様が無いですけど!』

何時もの様にゴチャゴチャと騒ぎながらも、『桜風』を含む戦闘要員全ては自身の職務に邁進している。普通なら命を賭してでも『桜風』の策を止めるべきのだが、現状その『桜風』の作戦案以外で『ドレッドノート』を捕捉出来る手段は見当たらず、そもそも妖精さんは艦長たる艦娘に対して『意見具申』や『感想』を述べる事は出来ても『命令拒否』をすることは不可能である。この点は提督と艦娘との間柄にも同じことができる。

『……艦長』

「どうしたの、副長」

『……仮に、仮の話ですが……この手段が失敗したら、どうするんですか?』

最後の確認として、己の字義通りの腹心たる副長妖精からの問い。



「ああ、その点なら大丈夫」

その問いに対する『桜風』の答えは、簡潔極まりない物であった。

——しくじったとしても、たかか死ぬだけよ

悪戯を仕掛けて相手の反応を楽しむ幼児おとこの様な声色と可愛らしい笑顔で返した『桜風』。己の身の安全を天秤どころか歯牙にもかけない、硫黄島沖大演習で鈴谷たちが見た物よりも遥かに色濃何かがく、極狂い、壊れめて純粹無垢きつたバケモノなる狂気が、そこには存在した。

光り無き深海に、一匹の鋼鉄くろがねの大鯨おおくじらが潜っていた。

「……ふむ。アクティブソナーの反応停止、かつ機関騒音も極度に低下……全く、無茶を  
しおるな、あ奴は」

『ドレッドノート』その大鯨の頭脳は、自身の持つ優れた耳……ウイルキア帝国軍が採用した  
08式水中聴音機バツシソフ改二型を用いて、己が好敵手桜風の異変を感じ取っていた。尚『ドレッド  
ノート』には特注改造が施された曳航式ソナーが装備されていたのだが、あの海カリフ海ですら  
イギリス海軍に目敏く発見され、全滅する直前の意地の一発で破壊された程度の装備で  
あり、『桜風』には通用していない。

——ウイルキア軍の艦艇は、帝国軍、解放軍ともに例外無く乗員削減のために一  
部機能を犠牲にしておる。『桜風』、主は我を見つける為に爆沈の可能性がある賭けに出  
たか……

音無き深海にて、『ドレッドノート』は一人思案に耽る。元々当たり前だと言うべきか、超兵器技術を除けば根本から枝分かれした存在であるウイルクア帝国軍とウイルクア解放軍が保有する艦艇や兵装、航空機の設計、技術思考は殆ど同一である。超兵器技術もさることながら米英日独それぞれの国家が持つ技術も、一方は撃沈艦、撃墜機又は鹵獲、一方は購入や供与又は技術交換によつて入手しており、枝分かれしつつも殆ど同一の方向へと進化していた。その為、『ドレッドノート』は『桜風』の奇怪な行動に辺りを付けることが出来た。

それにウイルクアは、此方の世界で言うウラジオストクからカムチャツカ半島に至るまでの海岸部分を領土とした国家であるのだが、その為大した穀倉地帯は保有しておらず、そもそも当時ロシア帝国に支配されていた日露戦争時に置いて日本と共に戦い、独立したという経緯でもある為に、人口は同盟国である日本にも及んでいない。マンパワーが絶対的に不足している以上、特に海軍にとつてはダメージコントロール時の対応力低下を甘受してでも艦艇の必要乗員を削減するのは、ウイルクアにとつて9割方本能染みた行動でもある。有意義な削減が行えたのは超兵器技術が流入してからだか、『桜風』にその技術が流入していないと考えるほど『ドレッドノート』は楽天家では無い。

——はてさて、これは困ったぞ。理で考えれば、この場はあやつが自滅するまで待ちの一手であるが……

今現在『桜風』の行っている設計無視の速度調整は、仮に車両で例えたとすればアクセルを全開にしながらかつドブレーキとサイドブレーキを同時に踏み込んで力尽くに速度を抑え込んでいると言う無謀などの次元を通り越した自殺行為であり、尚且つ決戦の場であるこの8月の南洋の海水温は例年よりも温かかった。放置しておけば機関部に多大なダメージが入り続けた末に溶解、爆発して勝手に轟沈するのが目に見えていた。

「……雷撃準備。二、四、六、八番」

だが、その様な消極的姿勢を取れるほど『ドレッドノート』は懦弱でも無く……そして、利口では無かった。『ドレッドノート』の名の意味は【勇氣ある者】。ある意味『桜風』が正面切って叩き付けた挑戦状から逃げられるような、そんな大層な神経は持ち合わせていなかった。

……………悪く思うでないぞ『桜風』。これも、戦場の習いやでな

「……………撃つ」

小さい一言と共に、『ドレッドノート』から12本の『53・3cm酸素魚雷』と『48・3cm酸素魚雷』が放たれる。既に魚雷発射管内部に注水を済ませており、尚且つ無駄な振動も出さない様に細心の注意を払って放たれた隠密魚雷は、『ドレッドノート』の意志に違ふ事無く突き進んでいく。『桜風』の逃げ場をなくすように、教科書通りの扇状に。

そして、『ドレッドノート』は動かない。本来であれば雷撃後はその場から高速で離脱するのがセオリーなのだが、流石に雷撃に引き続きそんな戦術教本通りの型に嵌った行動をすれば、今まで苦勞して隠密行動をしていた意味が無くなってしまふ。

「……………機関音に変動無し。弾着まで……………」

自身の声と鼓動、そして08式水中聴音機改二型から来る僅かな音以外何も響かない無機質なCICにて、『ドレッドノート』は待つ。潜水艦の本分は「機が来るまでただただ待ち続ける事」で有るがゆえに。

……………そして、『ドレッドノート』の耳に飛び込んできたのは6回の爆裂音と3回の船体着弾音。

「良しっ……………六発は迎撃されたが、三発は命中確じ……………っ……………？」

そしてその自身の口から発した言葉に、『ドレッドノート』の思考は停止する。

……………奴には防御重力場が装備されておるはず。ならば、なぜ着弾したのだ？

防御重力場を使用した場合、文字通り艦艇周囲の重力を変化させる事により物理的な物質を破壊乃至その物質の速度を減殺する兵装である。レーザーや荷電粒子砲の様な光化学兵器に対しては一切の効力を発揮しないが、ミサイルや艦砲、航空爆弾等の物理

兵装に対しては防御重力場が發揮する効力は大きい。魚雷に關しても例外ではなく、高度な防御重力場持ちの敵艦に対しては、命中する前に強烈な重力變化に耐えられない魚雷その物が破壊されるケースが頻發していた。……普通であれば。

「……何だ……何を考えておる、『桜風』」

「……………見つけた、『ドレッドノート』の居場所」

「っ?!……………幻聴?じゃが、今の声は紛れもなく……………」

その答えは、被雷した『桜風』の行動によって示された。

——……………き、機関駆動音!?馬鹿な!?我的居所は發覺しておらぬ筈、それにあ奴は被雷したのだぞ!?

今現在『ドレッドノート』の耳には爆発的な速度で増大する『桜風』の独特極まりないスクリー音<sup>スクリーン</sup>が飛び込んできており、状況からしてどう考えても被雷してから一切修理を施さずに全速前進しているとしたか断定できなかつた。先ほどの車両の例えを再利用するならば、『桜風』はエンジンが<sup>ひしゃ</sup>拉げる程壊れながら、全速で疾走し始めている状況

である。有体に言つて、何時暴発してもおかしくはない。

「……メインタンクブロー!!直ちに浮上じや!」

正直に言つて常識的に考えるとあり得ない意味不明な状況ながらも、『ドレッドノート』は行動を起こす。動かないと言うリスクよりも、行動を起こすリスクの方がまだマシであると、『ドレッドノート』の本能が警告していたのだ。

彼女は誇り有る【勇氣ある者】の名を持つ、常識的範疇にある非常識な超兵器『ドレッドノート』である。……だからこそ、『ドレッドノート』は超兵器で有りつつもこの程度でしか無かつた。『ドレッドノート』の最も優れた点は、基本本に忠実勇者らしく正道で有れる事であるのだが、逆に言えば『ドレッドノート』の最も劣つた点は、勇者らしく正道基本に忠実で有らざる負えない事でもあつた。要は決闘などと言う世迷い事時代迷れの遺物を好む騎士は、『ドレッドノート』歴戦の精兵『風』が積み重ねて来た死地の重みを見誤つていたので。

「魚雷疾走音!くつ……!」



『ドレッドノート』の決断は半分成功した。ノーロックで『桜風』の放った『5連装新型対潜誘導魚雷』の網を全て避け切る事こそ自身の巨体によってかなわなかったが、それでも浮上しなかった場合には20本近い対潜誘導魚雷が突き刺さっていた筈であった。『桜風』の行動に驚愕して動きを少しばかり止めてしまった代償はそれなりに着いたが。

「ぐっ……がつ……！浸水箇所、障壁封鎖！09式電波相殺装置アクティブステルスは……やられた、か。仕方あるまい……！」

『ドレッドノート』への直撃弾は6本。『桜風』へ与えた本数の丁度二倍だが、双方の魚雷性能の差も有り、魚雷戦におけるダメージレートのには『桜風』の圧倒的勝利である。無論『ドレッドノート』も超兵器であり、幾ら『5連装新型対潜誘導魚雷』を6発撃ち込まれたと言っても、その程度で致命的な損傷を負う事は無かった。電波が反射する前に敵性電波を捉えて適度に打ち消すと言う性能と性質上耐久力に難の有る09式電波相殺装置アクティブステルスが破壊されたのは痛手には違いないが、それだけである。

『ドレッドノート』への被雷箇所は幸運にも対艦ミサイルVLSや魚雷発射管などの脆弱箇所ではない、防御装甲が施された部分であったために、搭載弾薬の誘爆は発生し

ていない。水圧による浸水の被害は笑って済ませられるモノではないが、直前に急浮上して水圧が多少軽減していたことも有って多少の痛手程度の損傷である。

「やって……やってくれおつたな、『桜風』……！ よろしい！ なればこそ我が死合いの敵手に相応しいという物よ!!」

虚勢染みた言葉で有りつつも、『ドレッドノート』の本心からの言葉が叫ばれる。元々『桜風』との殴り合いで損害皆無で勝利出来るとは露ほど思っていなかったし、そもそも0<sup>0</sup>式電波相殺装置アクティブステルスが破壊されたと言っても、魚雷発射管の対艦ミサイルVLSも40・6 cm砲もすべて生き残っている。戦闘力的には『桜風』とイーブンになったのと大差は無い。

——…一瞬では有るが、海上より爆音が聞こえた。恐らく『桜風』<sup>あ</sup>の機関部が耐えられなくなったのであろう。ならば、仕切り直しの時間は有る筈じゃ……！

そして、強気の要因の一端はこれである。機関の無理な抑圧と被雷による強力な打撃に加えてのインターバル無しでの全力稼働を行えば、想定を遥かに上回る負荷をかけら

れば如何なる努力を施そうとも爆発するのは当然の帰結である。『ドレッドノート』の推測では、機関が暴発した程度で『桜風』が沈没はしないであろうが、最低限の修理を施す為に流石に一度離脱するだろうと踏んでいた。

「……待つておれよ我が強敵<sup>桜風</sup>。ここからが戦いの本番じゃ……」

……事ここに至つても、不幸な事に『ドレッドノート』は『桜風』の本質を全く理解できていなかった。超兵器の中でも、ヴィルベルヴィントと同じ位に常識的なタイプの超兵器なのだからかも知れないが。

「海面まで、あと少し……!」

垂直に近い急角度で急速浮上し、その勢いで海面より文字通り飛び出た『ドレッドノート』。知らず知らずのうちに掻いていた手汗と額の汗を拭った直後。

「……馬鹿、な……!? 貴様、何故!? 何故此処に来るのじゃ?! 死にたいのか!? 沈みたいのか  
!?!」

『ドレッドノート』の装備し、自身の居場所が発覚した為に全力稼働を開始した電波探  
信儀、音波探信儀、そして視覚補助の為に各所に配置された多数のカメラが爆炎を撒き  
散らしながらも『ドレッドノート』目掛けて突貫し続ける『桜風』の姿を捉えていた。

## 第四一話 龍虎相打つ夢の痕

『ドレッドノート』搭載するアクティブステルスソナーは、『ドレッドノート』自身に向けて照射されたソナーに対してピンポイントかつ照射されたソナー以上の威力を発揮しない様に調整して打ち消すと言う夢物語の様な装備である。自身から音を出すと云うのに、敵手に捕捉されない様に調整すると言う矛盾した行動を実現出来るのは、超兵器が発揮する電算能力において他は無い。

その為、『桜風』は『ドレッドノート』がアクティブステルスソナーを装備している事を看破した瞬間に、アクティブソナーとパッシブソナーを用いて行う通常の対潜搜索術を放棄する事を決めた。『ドレッドノート』の静粛性は極めて高い為にパッシブソナーによる探知は先ず持って絶望的。アクティブソナーでは肝心のソナーが打ち消されて意味を成さず、それどころか自身の位置を精密に暴露するだけであつたからだ。

『じゃあどうするんですか？ソナー両種使用しないって』

「まずはちよつと前の第六駆逐隊と共同で行つた船団護衛訓練の時の様に、機関制御で

速度を低下させる。10ノット以下が目安かな」

『機関が死ぬウ?!』

霞を何故か艦内に有ったボテイ<sup>道</sup>バッグ<sup>体</sup>に無理矢理詰め込み、SH<sup>シー</sup>—60J<sup>ホー</sup>に乗せて安全圏に脱出させたのち、『桜風』は妖精さんたちに対して『ドレッドノート』の探知方法の説明を行っていた。因みにボテイ<sup>道</sup>バッグ<sup>体</sup>には何も記載されていない無地の物であったため、詰め込まれた霞は自身を覆う袋の事は知らなかった。まあ後でバレるのだが。

「その次は『ドレッドノート』に魚雷を撃たせる。直進限定の酸素魚雷……それも、最低二本以上。一本だと幾ら何でもデータ取りが不足している」

『……雷撃させただけだと方位くらいしか推測出来ませんが』

妖精さんの疑問は最ものである。二次元移動しかできない水上艦視点では、潜水艦から放たれた魚雷の速度と方位だけで敵潜水艦の居所を特定するのは不可能である。そもそもソナーを使用せずにそんな事が出来るほど『桜風』は化物では無い。別方向に化物なのは否定出来ないが。

「撃たせたただけだね」

『……一体何する気ですか』

「単純明快。被雷して『ドレッドノート』の深度を特定すれば良いだけだもの。その後は『ドレッドノート』に向けて、『5連装新型対潜誘導魚雷』をノーロックで撃ち込めば……恐らく、アクティブステルスソナーは破壊出来る可能性はそこそこある」

『……あの、えつと、艦長？今自分の耳が壊れてないとするならば、今被雷してとか言いました？』

「言ったよ。それがどうかした？」

『どうかした？じゃ有りません!!機関部に大ダメージ必須の暴挙に加えて、その機関部に喰らう可能性の高い魚雷攻撃を敢えて受ける!?どう考えても狂ってます!正気じゃありません!大体被雷して深度特定とか何言ってるんですか?!』

「……?被雷時に計測した威力から逆算すれば発射地点は特定可能でしょ?魚雷内部の燃料や酸化剤の残存量でほんの僅かとは言え威力は変わるんだし」

副長妖精の極々当たり前の感性に基づく言葉に対して、正しく「なにいつてんだこいつ」と言うありありとした疑問符付きの表情でぶつ飛んだ言葉を返す『桜風』。基本艦娘の妖精さんはそれぞれ自身の艦長の気質は熟知している筈なのだが、流星にこんな事を

真顔で言われたら一言物申さずにはいられないだろう。どうせ聞き入れられないと理解していても。

「まあ大丈夫。計算したけど酸素魚雷数本と機関が一部爆発したくらいじゃ沈まないし、戦闘継続も可能だから」

『どう考えても艦長に対するダメージのフィードバックで大変なことになりますか?!』

「今まで船体を展開した状態の艦娘が、船体の沈没以外で消滅した事例は報告されてないから。ね?」

『ね?じゃ無いですってばあ!!』

頭のネジが良い感じにぶっ飛んでいる艦長戦人とそれを支えている副長常識人に外野ではやし立てたり火に油や水をぶっ掛ける観客その他大勢連中。この駆逐艦『桜風』における戦闘中の艦橋内部では、このような図式へと転移当初からいつの間にかやら変化していた。

「…『ドレッドノート』からの雷撃が止まった。各員準備、やるよ」

『……………ああ、もう!分かりました!やります!やります!やりますよ!!』



結局副長妖精の諫言は『桜風』には届かず、『桜風』原案のまま『ドレッドノート』釣り出し作戦は決行された。とは言え、『桜風』も自ら沈みたがる様な酔狂な存在ではない。寧ろこう言った超兵器戦常識外れの戦闘が求められる場合、『桜風』が持つ最大の長所たる自身を数字として認識出来る事が最大限の威力を発揮する。

『……艦長！魚雷発見！此方に来ます！』

「迎撃開始、指定魚雷以外は破壊しないで」

『了解!!』

『艦艇』が『艦娘』となった時の良い点は感情と精神が有る事であり、悪い点もまた同じく感情と精神が有る事である。良い様に作用すれば自身の実力以上の能力を発揮可能である代償に、悪い様に作用すれば案山子にすら成れない程脆弱な存在になる可能性も否定できない。だが一般艦娘とは違い『桜風』の場合は、自己を艦娘意識ある生命体である事と艦艇物言わぬ無機物である事と言う矛盾した二つの命題を同居させている。所謂二重思考と言う物である。

『魚雷、来ます!!』

「防御重力場解除、魚雷三発通せ！」

二重思考とは、一つの精神が同時に相矛盾する二つの信条を持ち、その両方とも受け容れられる能力のことをいう。意識ある生命体艦娘であるからこそ存在し、生かせる恐れや勘といった生命にしか發揮出来ない非理論的な能力と、物言わぬ無機物艦艇であるからこそ可能な、すべての感情を排した混ざり気なしの機械でしか不可能な論理的な分析の同時両立。ありとあらゆる死地を潜り抜け、自沈する最後の瞬間に人の形を生み出す奇跡を成し得た彼女桜風だけが得る事が出来た、如何なる武器にも勝る最大の切り札である。

『がっ……報告！被雷により浸水発生！く、加えて機関部の一部が熱暴走を開始していきます!!』

「損害即応班は直ちに修理作業に移れ！機関一杯、全速前進。捕捉完了した『ドレッドノート』へ攻撃する!!」

……これが、『桜風』がアクティブステルスソナーを操る『ドレッドノート』の居場所を特定出来た裏事情である。勿論、これだけの無茶をした代償は、『桜風』も、その妖精さんたちも察していた通りに、そう軽い物では無かったが。

『……火の勢いが止まらない……消火剤だ、早く……!』

『……障壁封鎖急げ……破られるぞ……!』

『……早くしろ……もうこの区画は持たない……!』

『……こちら第三班……駄目です、手が付けられません……撤退の許可を……!』

『……もう諦めろ……このまま居ると皆死ぬぞ……!』

通信を通して艦橋要員の耳に飛び込む、機関部に配置された、又機関部に増援されたダメージ妖精コントロール精チームさんたちの報告は、例外無く芳しくない物だらけであった。

『艦長!機関部の緊急修理に当たっていた第三班が限界です!撤退指示を!』

「溶解、暴発した第2タービン室、第8、第9、第10ボイラー室は現時点を以て封鎖し放棄、損害即応班第三班は即時退避し鎮火作業に回れ。船体尾部並びに中央部の浸水は障壁封鎖後第一、第二班が対応。戦闘要員は『ドレッドノート』への攻勢を継続」

『イエス、マム!』

『報告！被雷と機関暴発の衝撃で発着艦場が損壊！現在第四班が復旧作業に入ります！！』

「第四班、発着艦場の修理は中止。鎮火作業中の第三班の応援に回れ」

『え?!へ、ヘリはどうするんですか!?!』

「すでに天候が荒れ始めている。この状況下で発着艦しようとするれば確実に二次災害が発生する。命令は撤回しない」

『りよ、了解!』

矢継ぎ早に飛び込む損害報告の山に、『ドレッドノート』への攻撃能力の保持を最優先事項とする『桜風』は殆ど報告を入れる妖精さんを視界に入れる事も無く艦橋ガラスに映し出した気象状況を見ながら指示を出す。現状は何とか安定しているが、開戦前に確認した雨雲が発達しつつ現海域にまで浸食を続けていた。

——…『ドレッドノート』への攻撃は成功し、アクティブステルスソナーを機能不全にする事には成功した。でもそれ以外に『ドレッドノート』への目立った戦果は無し、か

アクティブステルスソナーを破壊した事は紛れもない大きな戦果では有るが、そうではなくとも『ドレッドノート』の持つ素の静音性は意外と高い。時間をかけ過ぎれば、今『桜風』の居る海域は潜水艦最大のホームグラウンドと言っても過言ではない嵐になる。

「……コレは……つ、ぐ…!!ゲホツ……!」

『艦長!!……やはり、やはりこれ以上通常体制での修理作業は無茶です!!戦闘要員からも人員を割きましょう!!』

「……き……却下に、決まってるよ。そんな具申」

『ですが!』

「副長が傷付いている訳じゃ無いのだから、気にしないで。今は成すべき事を成しなさい。……早く」

加えて、戦闘の長期化を行えないもう一つの理由。

『……ですが!艦長自身の身体に船体の損害が反映されているんです!!このまま戦闘を継続すれば船体よりも先に艦長の方が死んでしまいます!!』

三本に渡る酸素魚雷の直撃、そして機関の溶解、暴発と火災発生は、彼女の肉体を徹底的に痛めつけ、傷付けていた。雷撃損害の反映により腹部が引き裂かれて血肉が艦長席に滴り落ち、機関部の暴発は心臓と肺に張り裂けんばかりの衝撃を与えて右肺に至っては本当に張り裂け、脚部に至っては火災と機関部の暴発、溶解を反映して赤黒く焼けた爛れ、一部に至っては肉片が剥がれ落ちかけ始めかけてすらいた。

両足の焼け爛れで滲み出た血液に加えてつい先ほどの吐血で『桜風』の薄水色を基調としたウィルキア解放軍軍服が血に染まり、『桜風』の表情も強烈な痛みの影響か、僅かながらに苦悶の表情を浮かべていた。それでも、普通の人類のみならず一般艦娘なら確実に狂乱する大怪我を負いつつも、叫びものた打ち回りもせずにはやる事と言ったら思考を切り替える為に口内から滴り落ちる血を腕で拭うだけに済みますのが『桜風』なのだ。

『ドレッドノート』は現在アクティブソナーで捕捉中。機関部の損壊である程度速度低下していると言えども、戦闘機動によって修正は可能。弾薬庫への延焼は防止済みの為に『新型対潜ロケット』と『5連装新型対潜誘導魚雷』の残弾は今なお存在。結局昔ながらの『ドレッドノート』が沈むか『桜風』が沈むかのチキンレースね

『……艦長』

「そんな顔しないで副長。実際問題、耐久力にはまだまだ余裕が有るんだからさ」

そう言いつつ艦橋ガラスの表記の一部を駆逐艦『桜風』の全体図に変え、艦艇内の被害状況などをもとに算出された耐久バーを見せる『桜風』。一応耐久バー表記では残り体力60%を少し割った程度、と言ったところだろうか。炎上中である為じりじりと削れつつあるが。

『報告！報告！此方第一班！水密区画の封鎖完了！浸水停止!!』

「第一班、排水作業は既存機器の自動装備に任せて鎮火作業の応援に……全速後進面舵一杯！機銃迎撃用意!!」

『見張りより艦橋！艦尾より魚雷接近つてどわあ?!』

歴戦の勘による唐突に感じ取った得体の知れない恐怖に逆らう事無く緊急回避を行う『桜風』。自身の目たる各種電探機器や見張り員の反応よりも若干早かったのは兎も角として、警告無しにいきなり急旋回を行ったが為に現在鎮火作業に当たっている妖精さんの一部が踏ん張り切れずに火の中に突っ込んで消火剤塗れになったりしているが、彼らの叫びは割愛する。被害も精々泡塗れになった程度でもあるのだから。

『ドレッドノート』再補足！攻撃よーい！！』

『こちら水雷妖精！敵さん艦尾からの奇襲雷撃外れて慌てているみたいですよ！！』『5連装新型対潜誘導魚雷』ロックオンよろし！！』

「了解！撃て！！」

機関が一部崩壊しようとも、それでも『桜風』の發揮可能な速力は潜航中の『ドレッドノート』の全速よりも上をいく。丁度V字状のT字を描きながらの一航過で文字通り魚雷とロケット弾を雨霰と叩き付け、その『桜風』の連続射出中の魚雷発射管の船体真下の機関部では妖精さんがどうにかこうにか火炎の勢いを抑え付けつつある状況。

『艦長！『ドレッドノート』より巨大な破壊音を聴音にて確認！！恐らくバラストタンクが破損した物と思われます！』

『ドレッドノート』急速浮上……なら……砲術妖精、『RAM』にて敵対艦ミサイルの迎撃用意！』

『了解しま……』

その言葉が来るのが早いのか、『ドレッドノート』の十八番たるホエールダイブにて『桜



『風』右舷後方に『ドレッドノート』が出現。見張り員の報告を待つまでも無く、水中から飛び出した多数の飛翔体が此方に向かって白煙を撒き散らしながら突進してくるのが即座に見て取れた。

『『ドレッドノート』より主砲発砲並びにミサイル多数接近！『RAM』『40mm4連装機銃』、撃ちー方始め!!』

「取舵一杯、砲雷撃戦用意!!此処で『ドレッドノート』を……」

『見張りより艦橋！魚雷が……』

『桜風』の宣言を遮る見張り員の絶叫が途切れたその直後、駆逐艦『桜風』の船体右舷……それも、先ほど障壁封鎖が完了したばかりの被雷により発生した破孔へと魚雷が直撃し、艦橋を超える程の水柱が発生。

『……ぐあ……か、艦長……?』

間髪入れずに続けざまに『ドレッドノート』の40.6cm砲弾が直撃し、衝撃にて床

に叩きつけられた副長妖精にたみ掛けるが如く艦橋内の照明が消失。補助電源が作動したらしく戦闘用の電子機器は兎も角それ以外の照明は文字通りの最低限で薄暗く変化した艦橋。

「……機銃並びにミサイル迎撃にて、これ以上の被弾は回避……。『防御重力場Ⅳ』で衝撃と水密区画の障壁以外の大きな損害は無し……電源復旧は比較的早期に完了可能……残存機関稼働確認……」

その状況下でも、我らが艦長は艦橋ガラスに映し出された駆逐艦『桜風』の状況を冷静に確認していた。防御重力場で被雷と被弾の爆裂はある程度抑えられたが、防御重力場の壁を突破した衝撃が水密区画の障壁にも一撃を与え、耐え切れなくなり断裂。加えて主砲弾の一撃で電装機器が一部破断。だが両者とも幸運にも比較的近くにダメージコントロールチームがいた為に分派して対処した為、最低限の損害で事なきを得た。

『報告！報告！艦長！！此方第三班！我、火災鎮火に成功！！繰り返す！火災鎮火に成功！！誘爆の危険性は回避されましたあ！！』

「……大丈夫、私たちは勝てる。立って、副長。未だ戦闘は終わっていないよ？」  
『……は、はい!!』

薄暗がりでも何となく分かる、自分の艦長の笑みと差し伸べられた手。正常な神経をしていれば狂いたくなるほどの傷を負いながら、余りにも不釣り合いな優しい微笑みを見せる『桜風』に、文字通りの鉄火場であると言うのに柄にも無く副長は見惚れてしまっていた。

……副長妖精が『桜風』<sup>艦長</sup>の身体に新しき袈裟斬りが刻み込まれ、算出された駆逐艦『桜風』の耐久値バー表記が30%を切っていた事実を知るのは、もう少し後の話である。

「もはや……これまで、か」

——……よもや、これほどまでに、我とあ奴の力量がかけ離れておったとはな  
 ……

超兵器『ドレッドノート』のCIC内部。今なお砲撃戦が続く中、短髪深紅の女性『ドレッドノート』の依代は、自身の運命を悟っていた。

「浮上時の勢いに紛れて本命染みだ牽制の対艦ミサイルを発射、すぐさま追撃の40.6 cm砲を放ち、その波間に紛れて『48.3 cm誘導魚雷』をあ奴の破孔へ多数叩き込む。船体が『フリゲートII』本来の耐久力であれば、とつくに沈んでいる筈なのじゃがな」

『48.3 cm誘導魚雷』が低威力で有ったのは事実であるが、そもそも『48.3 cm誘導魚雷』でなければ一度深海に潜り込んで艦艇直下から破孔へピンポイントに命中させると言う芸当は不可能である。加えてそれ以上に、『桜風』の乗員妖精さんが想像以上の速度を發揮し、今の今まで存在を隠蔽していた『48.3 cm誘導魚雷』による奇襲攻撃に対する間接防御を完遂した事。この事は完全な誤算で有った。

「……排水も追い付かぬ上、補助機関も雷撃にて損壊し発電量が低下。無数の警報音が

が鳴りたてた末、兵装も補助装置も次々と落ち始めとる。……超兵器機関を暴走させれば、我は未だ戦えるが……」

——…まあ、決まっておるな

「我は〔ドレッドノート〕の名を穢す面汚しじやが……断じて、理性も知恵も無い獣にあらず」

超兵器機関に施された人為的制限を、それこそワールウインドの様に枷を破壊すれば、例えどのような道筋を辿ろうとも戦闘終了後に、己の船体が耐え切れずに崩壊する一点を考えずに今この場だけを考えれば、『桜風』のに対する勝ち筋が出てくる可能性は少なからずあつた。

「これほどまでに、良き戦場死に場所を与え給う武士ものものに……そのような、無礼かつ無様極まりない死に狂いを見せる訳にはいかぬな！ハツハツハツハ……」

だが……悲しいかな、『ドレッドノート』はあくまで勇者正らしく正道面で有る事かを望んで

居た。意図誘り的な超兵器無き機関論道の暴走類は、例え自身がどうなろうとも選択出来ない、勝利する事こそが存在意義たる軍艦に有るまじき愚欠陥兵器か者だった。

「……………ふむ、時間……………か」

既に装甲が施された外殻は砕かれた。機関部も浸水にてもはや復旧は不可能。超兵器機関も最低限の電力供給以外では殆ど活動を停止。兵装も被弾による損壊に加えて電力供給の停止により文字通りに全滅。完全なる詰みである。

「……………聞こえるかのう、我が強敵『坂風』」

ならば、最後の儀式を終えるだけの話である。

「……………ええ、聞こえています。『ドレッドノート』……………未だやる気ですか？」

【「本気で言つとるのか、主は……。その様な気が有ろうとも、もう無理に決まつとろう。完敗も完敗、完全なる、私の負けじゃ」

「……」まで檻樓雑巾にしておいて……。よくもまあ、完敗などと言えますね」

【「その言葉、そっくりそのまま返させて貰うぞ」

『ドレッドノート』最後の賭けである誘導魚雷の直撃を喰らいつつも、寸前で持ち堪えた駆逐艦『桜風』。そして水上戦ともなれば、そこは『桜風』の独壇場である。超兵器と言えども、大元の基礎設計が潜水艦である頸木から逃れられなかった『ドレッドノート』にとつて、水上戦は完全に不得手である。詰まる所、潜水可能な間に『桜風』を沈めきれなかった時点で、『ドレッドノート』の敗北は確定していた。

【「……何、大した事では無い。……私は、主に感謝しとる事を伝えたかった。……それだけじゃ」

「……感、謝？」

今『ドレッドノート』の発した言葉の意味が飲み込めず、困惑した表情を浮かべる『桜風』。常識的に考えて、今の今まで命の取り合いをしていた相手から恨み言やら憎し

の言葉が来るのなら未だしも、まさか感謝の言葉を受け取るとは想像の埒外に有った。臓物や骨肉が引き裂かれようとも戦えるなら戦闘継続する気しかないようなぶっ飛んだ『桜風』が常識の事を言えた立場ではないが。

【「勇有りし武人には、それ相応の仕儀が必要」

【「……戦闘開始前に、私が言った言葉ですな」

【「加えて、主の血判状」

【「ただの署名では説得力皆無かと思ひまして」

【「……主にそんな感情は無かつたやも知れぬが……我にとつてみれば、主の独特な礼儀には救われた様な物なのじゃ。想定外の事態と言えども、元の世界と誤認した末に無関係な者達を複数殺め、その場から遁走した輩にはな」

駆逐艦『桜風』の艦橋に響く『ドレッドノート』の肉声。映像こそ入ってきていない物の、それでも『ドレッドノート』の余りにも穏やかな肉声は、『桜風』に話しかける『ドレッドノート』の表情をありありと脳裏に浮かべさせるには十分すぎた。

【「……取り敢えず、一つだけ訂正して置く」



「……………なんじゃ？」

『ドレットノート』<sup>貴女</sup>が攻撃したアメリカ艦隊。奇跡的に死者並びに重篤な負傷者ゼロだから」

「……………担ぐのも、慰めも要らんぞ」

「嘘を言ってもこつちに利益は無い。人類側の艦艇に命中したのは低威力の『48.3cm誘導魚雷』で、損害復旧も容易かった。アメリカ海軍の艦娘には確かに轟沈艦が出たのは事実。だけど全艦〔応急修理要員〕や〔応急修理女神〕で復活している」

「……………相も変わらず、世界が変われども贅沢な戦をしとるのだな、アメリカ合衆国は」

「戦争中のアメリカは、昔から人員を救出するために機動部隊や特殊部隊を動員し、有効とあらば機材も平気で使い捨てする国家ですから。まあ、この世界のアメリカはある程度常識的になっていますが」

『桜風』の言葉は嘘等無い、本当の真実である。守備範囲が比較的狭く大和型戦艦やら南雲機動部隊がゴツソリ存在する日本とは違い、アメリカの艦娘は軽量級が多く、尚且つ防衛範囲が両南北アメリカ大陸沿岸部全てと常人なら発狂したくなるほどの遠大さである為、一隻たりとも喪失する訳にはいかず、加えてアメリカ軍の性質と伝統として

人員保護は全世界で最も重要視している。今回は『金で済むなら安い話だ』と言う第二次世界大戦中のB-29伝説の様なノリで艦娘全員に【応急修理要員】【応急修理女神】を搭載していたのが功を奏した形である。アメリカ合衆国財務省はまだまだ問題無い上に必要性は理解しているとは言え、それでも結構な出費に対して軍に皮肉の一つや二つは言いたくなる気分であろうが。

「……………すると、何じや……………。我は、今の今まで……………」

「勝手に早合点して、勝手に自分を思い詰めて、勝手に覚悟決めて、私と殺しあつた。客観的にみると、こうなります」

「……………ハハ、アハハハハ……………我は、我は何をやつておつたのであろうな……………」

乾いた笑い声が艦橋内に木霊する。自己嫌悪に苛まれ、禊の意味も含めて『桜風』との決闘を態々申し込み、激闘を繰り広げ、だがその自己嫌悪や禊は一部の外れであつた。茫然とするのは仕方がないのかも知れない。

「さて……………少なくとも、私は『ドレッドノート』がそう言つた失策を気に病む様な正道か

つ勇氣に優れた者で有る事は認めますが」

「だが、艦艇……特に潜水艦としては失格以下の性格じゃ。そうであろう？」

……………それは……………

何か言い返そうとして……結局、『桜風』は何も言えなかつた。潜水艦の本分は通商破壊と隱密奇襲。大日本帝国海軍は例外的に劣勢な国力面と独特なドクトリンに基づき、通商破壊では無く艦隊決戦用の大型高速潜水艦を整備したりしていたが、世界の主流は『ドレッドノート』の様な正面対決では無い隱密と奇襲を旨とした、至極真つ当かつ常識的な戦い方になっていった。前の世界ならば話は別だが、今この世界に居る『ドレッドノート』の性格的には「居るかも知れない」と言うだけで敵軍に負担を強いる様な器用な真似は出来なかつた。何せ我よ我よと先に立つて突撃していくのだから。

「……主の気性、余りにも優しすぎるようじゃな。我と主は厳然たる敵同士じゃと言うに、我を氣遣うとはな」

「唾棄すべき様な下劣な者と、間違いを犯せど一本の芯が通つた良き信念を持つ者。対応が違うのは当然だと思ひますが」

【「……主の異常な攻撃性は、その優しき心根の裏返しやもしれぬな」

「……異常?」

【「……本気で言つとるのなら、一度主の友に話を聞くが良い」

「以前ヴィルベルヴィントとの戦闘で、何故か命を大事にしなさいと説教されたのです  
が……戦闘、それも対超兵器戦となればこの程度の損傷を負うのは普通ですよね?」

【「お主、馬鹿じゃろ。否、寧ろここまでの底抜けの大馬鹿者とは到底思わなんだわ。こ  
のたわけが」

「いや何ですか!?!私当たり前の事……痛、うう……」

つい先ほどまで殺しあっていたとは思えぬほどに、穏やかかつ親し気な会話を交わす  
『桜風』と『ドレッドノート』。『ドレッドノート』側は兎も角、『桜風』の方は艦長席を  
血に染め上げ、床に血の池と肉片の小島を作っている中穏やかな談笑を交わしているの  
は、『ドレッドノート』の言う通り明らかに馬鹿以外の何物でもないが。因みに『桜風』  
の妖精さんは治療の為必死に包帯やら消毒液やらピンセットなどを艦橋に搬入してい  
る真最中だ。

【「……まあ、よかろう。もう我も終わりに至るのでな」

「ヴィルベルグ・ヴィント改めワールウィンダが、貴女を待っています。時が経つにつれ、超兵器貴女の同類も黄泉の國貴女の元へと送られるでしょうから、寂しくは有りませんよ」

「……今の主の武装で、勝てると思うておるのか？」

「勝てる勝てないじゃ有りません。……勝つんです」

「……ハハ、先の言葉は訂正しよう。主は底抜けにあらす。文句なしの、底なしの大馬鹿者じゃ！」

『ドレッドノート』の気持ちの良い呵呵大笑が、駆逐艦『桜風』の艦橋内に響き渡る。停泊中の駆逐艦『桜風』から見える『ドレッドノート』は、『ドレッドノート』と『桜風』との対話が始まる前から少しずつ沈没を始めていた。今では艦橋が何とか水面に顔を出している程度である。

「まこと、まこと、我は果報者じゃ。主と、主と、死力を尽くす大戦を、わおいくせ異界の海で、思う存分、行えたのじゃからな……！」

今まで鮮明に聞こえていた『ドレッドノート』の肉声に、少しずつ雑音が入り込み始める。精密部品は例外無く水没に弱い。超兵器が搭載している各種機器が例外で有る

はずも無い。もう少しで、己の性質と正反対の能力に苦悩し、それでも愚直な正道を望んだ『ドレッドノート』がこの世から消え去る事は明白だった。

「……………感謝、するぞ……………重雷装高速装甲フリゲート『桜風』。我は……………主と戦えて……………幸福、じやった……………!」

……………え?

『敵超巨大潜水艦、急速沈降!!』

見張り妖精からの報告が、艦橋に響く。

「……………『ドレッドノート』、爆発確認!!『ドレッドノート』撃沈確定!!我々の勝利です!!!」

その言葉が艦艇全てに広がるが早いか、艦艇全ての乗員から爆発的な歓声が響き渡る。アクティブステルスソナーと言う、今までにない兵器を操る『ドレッドノート』を相手に、文字通り沈む可能性極めて大なる博打を打ちまくり、そして勝利を収めたのだ。

脳内麻薬が大爆発せざる負えないのは明白であった。

『…………ふう…………。やりましたね、艦長。後は帰還して入渠……………艦長？』

初めに『桜風』の異変に気付いたのは、『桜風』の腹心である副長妖精であった。

「…………重雷装…………装甲…………フリゲート…………超甲種…………突撃型…………重武装…………種別…………駆逐艦『桜風』の…………正式名称…………」

文字通りの応急手当の為に包帯で身体の至る所をグルグル巻きにされた『桜風』。そんな状態でも、と言うより応急手当される前からずっと平常な表情と態度であったのだが…………

『…………あの？艦…………長…………？』

「…………違う」

『え？』

「違う、違う違う違う…………！私、知らない、こんな事、こんな戦場、こんな光景、知らない

い、見てない、行つた事が無い……！」

右手で顔を抑え、左手で血に染まつた胸元を握り締め、目を見開き鬼気迫る表情で否定の言葉を繰り返す『桜風』。先ほどまでの凜々しきは完全に掻き消え、今の『桜風』は必死になつて怖い物を追い払おうとするかのような、か弱い少女であつた。

『か、艦長?!』『艦長?!何が有つたんですか?!』『お、おい今艦長に何が起こつた?!』『分  
からん!行き成り錯乱し始めた!!』『落ちて着いて下さい!艦長!艦長!!』『通信妖精!対  
超兵器部隊は今どこに?!』『現在こつちに向かつて急行中ですが未だ時間がかかります  
!!』

何時もは平静沈着で、時々妖精さんと遊びだす位に余裕のある『桜風』が見せる突然の奇行。いつもとはかけ離れた『桜風』の狂乱する姿に、誰も彼もが動揺し、混乱して  
いた。

「……違う……沈めていない……筑波大尉は、日本に残っていない……副官も、筑波大尉  
……ブラウン博士じゃ、無い……私は……やってない……筑波大尉を……殺していない



……！」

『艦長！艦長！！しつかりして下さい！』

「……冰山空母『ハボクツク』……違う……アイスランドなんか……私、行ってない……！私は、私は…………！」

血に染まりきった、ウイルキア王国軍女性士官用制服。その血染めの羽衣に身を包んだ少女は、心の奥底では完全に分かってしまった事実に対して、愚かにも必死に抗っていた。どう足掻こうとも、消すことも塗りつぶす事も出来ないと言うのに。

「……私、は……覚えて……いる……」

……駆逐艦『桜風』には【筑波大尉を副官として戦った世界】と【ブラウン博士を副官として戦った世界】。二つの世界の当事者として……そして、戦争の勝者として戦い抜いた過去がある事を。

## 第四二話 尊ぶ夢が醒めし日に

超巨大潜水艦ドレットノートが南洋の海に没してから早幾日。深山艦隊隷下の工廠内医務室にて。

「……古鷹さん」

「……何ですか、『桜風』さん」

「私、やつぱり……」

「駄目です。これはお仕置きですから」

「そんな……酷い、酷いです、古鷹さん……」

椅子に座つて本を手取る古鷹の冷酷な宣告に、『桜風』は絶望する。恐れ知らずに敵艦に殴り込むのが日常な過去の為にぶっといハズの精神力を持つはずの彼女は何故絶望したのか。

「…… は い！ 皆 さ ま こ ん に ち は！

Fleet<sup>F</sup> girls Aoba Network<sup>N</sup> ニューズの時間がやってまいりましたー! リポーターはこの私、重巡洋艦娘の青葉が務めさせていただきますー!

姉妹艦である衣笠が担ぐテレビカメラに向けて楽しそうにリポートを行うこの元気娘に、今から一横須賀鎮守府深山艦隊所属艦娘全員に向けた公開全カ全開インタビュー公開処刑されるからであった。拒否権? 罪人にそんなものが有る筈が無い。因みに加古は機器の調整を終えた為椅子を並べて古鷹の膝を枕に転寝している。古鷹は台本を持つてのディレクター役だ。

そう遠くない将来にそんな事になるとは全く予想も想定もしていない、超巨大潜水艦ドレッドノートを撃沈して約30分ほど経過した駆逐艦娘の『桜風』。

『……艦長、本当に大丈夫なんですか?』

「うん。身体は、まあ、痛いけど」

『普通痛い、で済む傷じゃ無いんですけどね……』

「あはは……あ、床と椅子の掃除、痛っ……」

『お願いですから座っててください。いやホントお願いします。コレ妖精さん一同心からのお願いですから』

ドレッドノートの最期の言葉によって別世界の記憶回復が起こり、当然ながら矛盾した記憶の同時混在と言う未知の状況に一時錯乱した『桜風』であったが、時間にして僅か5分弱程にて、表面上は何時も通りの『桜風』へと戻り、帰投の為の航海を始めた。

「機関部の状態は？」

『第2タービン室、第7から第10ボイラー室が溶解と暴発、それに追加して浸水にて使用不能です。有体に言つて、船体後方部の機関は全滅ですな』

「機関が全て全滅していないのなら上等な方よ。艀装は？」

『物理的損壊に関しては、魚雷攻撃が主体だった事に加えて防御重力場によってある程度減殺出来たので『40mm4連装機銃』と『RAM』の一部が基部損傷の為使用不能になった程度ですね。加えて現在は機関損壊による電力不足で主砲や一部機能への電力供給を止めていますのでこちらは直ぐには使えませんな』

「……やっぱり、損害は船体に集中している、か。ワールウィンドの時はラム<sup>体</sup>ア<sup>当</sup>タ<sup>た</sup>ツク<sup>り</sup>と

は言え、艦上構造物に結構な被害が出てたんだけどなあ」

ダメー<sup>妖</sup>ジコン<sup>精</sup>トロー<sup>さ</sup>ルチ<sup>ん</sup>ームによる血と汗と涙の結晶たる熟練の修理体制によつて艦装には如何にか大きな影響は無かつた物の、幾度となく魚雷が突き刺さり炸裂した船体に関しては応急修理でどうにかなる次元の話であるはずも無く、帰投後は船体の入渠が確定であつた。

「……それで、最後だけど。油は本土まで持つ？」

『無理つす！ぶつちやけどどう足掻いても足りません！仮に帆を張つたとしても航行できる気がしないツス！』

「……戦闘速度は厳禁、経済速度で可能な限り節制しないと。合流した大和さんや瑞鶴さんたちから油を分けて貰わないといけないね」

『大分流出してしまいましたからねえ……』

そして『桜風』たちの脳髓から先ほどまで完全に抜け落ちていたのだが、ドレツドノートの猛攻により一部燃料タンクが破損し燃料が流出し、又破孔から海水が流入して燃料としてマトモに使えない物が増えたが為に、現在の駆逐艦『桜風』が持つ燃料の残量が

結構怪しくなつて来ていた。『前の世界』ではすぐそばに大概浮きドック艦『スキズブラズニル』がいて損傷しても即修復に入れた上に初期を除く相当の期間は原子力乃至核融合炉機関だったのだから、ある意味この事をこの場に至るまで完全に抜けていたのは仕方が無いのかも知れないが。

「……………ふうー……………ふあ……………ああ……………」

『艦長?』

「ああ、うん。大丈夫……………ちよつと眠くなつただけ」

『アカン艦長それフラグや!!』『えらいこつちやえらいこつちや!』『早よ! 医務妖精早よ!』『分かあつてる! 今ダツシユでこつちに來てる!』『よつしやあモルヒネいつちよ上がりつてゴア?!』『ああ! 医務妖精が血みどろ雑巾ですつ転んだ!』『ぬわー!?』『不味いモルヒネが水雷妖精に?!』『ああ!?! 眼がー! 眼があー!!』『水雷妖精の眼が死んだ!』『この妖精でなし!』

肉体的、精神的疲弊によつて至極当然ながら眠気が來たことに対して、大怪我（桜）している張本人（風）をほつたらかしにして大騒ぎの妖精さんたち。本人たちの多くは至つて真面目なのだが如何せん容姿（二等身）が容姿（頭）な事が有り、はた目から見ると遊んでいる

ようにしか見えない。……一部は本当に遊んでいそうだが。

「……騒ぎすぎだつて。心配性だなあ、本人が大丈夫つて言ってるのに。ね？」

『血塗れの間人が眠くなつたとか言い出したらこうなります』

「……副長も、そう言うんだ」

『これが仕事ですし』

そして真顔で何時も通りな思考と発言をする『桜風』に何時も通り突っ込む副長妖精。周囲が大騒ぎする中、この空間だけは戦闘開始前と大差無い雰囲気であった。

『……えー、艦長』

「通信妖精？どうしたの？」

『対超兵器部隊からの通信が入ってきています』

「ああ、分かったよ。繋げて」

『……良いんですか？』

「……え？」

『繋げちゃって……本当に、良いんですか……？』

何時に無く哀愁の雰囲氣に何かしらの覚悟を決めた表情と言う何とも形容し難い状態の通信妖精の返答。因みにこの通信妖精は先のモルヒネぶつ掛け騒動には我関せずとばかりに参加せずに通信機器に向かい合っていた為、二次被害は無かつた模様。

「……繋げないと、報告出来ないよ?」

『……了解しました。それでは、繋げます』

疑問符を浮かべながら指示をだす『桜風』に、何かを諦めきつた澄んだ目で通信機器のスイッチを入れる通信機器。

「『……よし、こちら深山艦隊対超兵器部隊旗艦の長……『桜風』、その恰好、まさかとは思うが……』」

「あ。長門さん」

そうして艦長席正面の艦橋ガラスに映し出されたのは、相も変わらず凜々しい姿の戦艦娘である長門。ただ立ち姿は兎も角、その表情は眉間にしわを寄せて片手で抑えると



言ういかにも「またやったのか」との感情がありありと表現されていた。

「えつと……現状報告ですが、敵超巨大潜水艦ドレッドノートの撃沈に成功。損害は船体後方部分の機関が浸水と延焼で全滅、その為電力供給が足りなくなつたので一部兵装が使用不可です。あ、それと燃料がかなり流出しちやつたので、すみませんが燃料を分けてくれませんか？」

「な……ち、超兵器を撃沈出来たのは良いが……『桜風』、大丈夫なのか？」

「まあ、燃料問題以外は特に有りませんね。機関も生きてますから、航行も可能ですし」  
 「……お前はあつけらかんとし過ぎだ。此方の身の毛がよだつ程の怪我を負っておきなから……」

「そんな大袈裟な。別に大した事じゃ無いですよ」

『いや、ホントすみません、うちの艦長がこんなので……』

既に『桜風』の負傷無視戦闘時の暴走行為は、長門達は直接間接問わずに見聞きしていたので、今更必要以上に驚くことはない。ただそれでも、赤黒く染まった衣服や焼け焦げた脚等を全く気にせず桜風に長門相手に穏やかかつ微笑んですら見せながら会話をする少女の姿は、流石に違和感を通り越して鳥肌を掻き立てざる負えなかつた。

「……………まあ、説教に関しては鳳翔や古鷹に任せるとして」

「……………え？」

「何が『え?』だ、この馬鹿者」

「私、何も恥じる事も怒られる事もしていないのですが」

『すみませんすみません、ウチの艦長がホントすみません……』

呆れ顔の長門と何故説教されなければならぬのか全く意味が分からない『桜風』に、文字通り平謝りに謝る妖精さん。

「……………さ、く、ら、か、ぜ……………?」

「ヒュイ?!……………な、なに……………陽炎……………?」

このどことなく言葉に表現し辛い微妙な空気をぶち壊したるは、新規の妹艦（坂）が素で巻き起こす流血沙汰に怒り心頭な陽炎型駆逐艦の長女である陽炎。細目で微笑みながらも青筋を作ったその表情は、艦娘特有の生来の美麗さと快活な顔立ちと相まって画面越

しでも威圧感満載であった。

「……………約束したよね……………出撃前に、私と、『桜風』貴女と、絶対、無茶しないって」

「しつした！したけど！戦えば損傷するのって普通でしょ!?!」

『ちよ、艦長、その言い訳は……………』

出撃前、陽炎と『桜風』の双方で交わされた『無茶しない』と言う約束。現状の『桜風』の姿とその追及に対する反論は、明らかにその約束に反していた。

「……………この、お馬鹿……………!!!」

「ぴやああああー!?!」

……………まあ、こうならざる負えない。三月と言う期間、陽炎は姉代わりとして不知火と共にこの『桜風』の世話をやってきているのだ。陽炎自身の陽炎型駆逐艦の長女としての世話焼きも相まって、『桜風』に対して深い情を向けるのは、必然だった。

「……………あ、裂けた」

『艦長ー!? 塞がりかけてた脇腹から血がー?!』

「……………この位で騒がないでよ。ちよつと驚いて力が入って裂けただけだし、圧迫止血していれば、そのうち止まるから」

『自分たちはもう戦闘中以外の艦長の言葉を信用する事はやめました!! 特に怪我関係! 衛生兵! 衛生へーい!!』

「……………陽炎、すまないが私の艦上機で、あの馬鹿桜風の所に行つてくれるか」

「……………有難うございます、長門さん。一撃入れてでも治療に専念させます」

そして今度はこの始末である。

「……………どうしてこうなるの……………?」

『桜風』が何故自身の負傷で怒られるのか。その意味を本当に知るのは……………一体いつになるのだろうか。

「……あの、やつぱり私、少し一人になりたいので……」

「そう言つて、以前窓から脱柵しようとしてましたよね？」

「……いえ、その、もうしませんから……」

「ふふつ……駄目です」

「……おうふ」

その後、長門が搭載していた『零式水偵一一型甲』にて陽炎が駆逐艦『桜風』の艦橋に突入。勢いよく飛び込んでお約束の様に掃除し切れて居なかつた『桜風』の血糊で顔面ダイブ後、心配して性懲りも無く安静保持せずに陽炎に歩み寄つた『桜風』の捕縛と強制安静保持を遂行。燃料供給する暇も惜しんで艦艇を召喚した陽炎によつて一路横須賀まで曳航された。現状『桜風』の船体は明石と夕張に今回は瑞鳳も加入して修復作業と再調査が行われている。

「んー……でも『桜風』が悪いんだよー……古鷹をこんなに怒らせるんだからさー……  
んうー……くかー……」

「だからなんで戦闘に出て傷を負う程度の事をあれだけ責められるのかが分からないんですってば」

「幾ら何でも限度と言う物が有ります!」  
「じゃあどうしろって言うんですか……」

こんなやり取りの末『桜風』が目頭を押さえるのは、もはや何度目になるのだろうか。結局の所、徹頭徹尾生還出来さえ出来れば幾ら損害を負おうとも問題無いと信奉する『桜風』の挙動を深山艦隊の面々が本気で心配しているのが問題なのだが、前の世界における対超兵器戦の事を常に念頭に置いている『桜風』に取っては、生還しても怒られる現状に全く納得出来ていなかった。

「……はいーではそろそろ『桜風』さんへのインタビューへ参りたいと思います!!」

——……あ、不味い。とうとう時間が来た

内心今までにないほどに焦る『桜風』を他所に、一三か月過ぎしても今なおミステリアスな『桜風』の全てを暴き立てるべく《どうやっても不足する娯楽成分を生み出す為の贅として選出された哀れな新人ちゃんに》、今は艦娘では無くジャーナリズム魂全開のインタビューを行うアナウンサーと化した青葉が、一片の容赦無くマイクを向ける。

「えーでは『桜風』さん！これから艦隊の皆から集められた質問票を読み上げますので、恥ずかしい質問でも全部しつかりきつかり答えて下さいね！」

「……も、黙秘権を行使します！」

「もちろん駄目です！」

「横暴！青葉さん横暴です!!と言いますか即答!?!」

例えどれだけ大暴れして戦果を挙げ続ける麒麟児と言えども、この深山艦隊内部においては加入して僅か三か月程度の新米である。軍隊では基本的に階級の次に年功序列が重視される物であり、見た目は華奢な美人揃いの艦娘であつても例外では無い……と言うより、旧軍の思想をそれなりに受け継いでいる日本型艦娘の場合、年功序列制度は初めから大分強く浸透している。割と自由な雰囲気のある深山艦隊であつても、例外では無かつた。

「この場では『桜風』さんに拒否権などは有りません！神妙に質問に答えて下さい！」

「うう……」

哀れ『桜風』。彼女はそのまま青葉の毒牙に掛かってしまうのだろうか。

「……ん……んあ……古鷹ー」

「どうしたの、加古？」

「何か……聞こえない……？」

否、天は『桜風』を見捨ててはいなかった。

「……あ、扉……」

『桜風』がふとその言葉を洩らしたと同時に。

「きゃあ!?! い、犬!?!」

「え、あ、ちよ、待って待って!」

「あああー! 折角設置した機材がー!?!」

「ワン! わんわんわん!!」



器用に扉を開けて室内に突入して来た成犬の柴犬が、尻尾をぶんぶん振り回して室内を思いつきり駆け回りだして来たのだから。因みにこの工房内治療室の扉は一般的な病院の物と同じ引き戸タイプである。

「あああー……設定とかコードとかがもうグチャグチャだよー……」

「もう、何処から入って来たの？こんな事したら駄目でしょ、メツ！」

「くうーん」

「……あれ？青葉、『桜風』はどこ？」

「え……」

「……思わず抜け出しちゃったけど……まあ、大丈夫だよね、うん」

衣笠や古鷹たちが室内を駆け回る柴犬の捕獲に躍起になっている隙に、気付かれる事無く窓から抜け出す事に成功した『桜風』。気付いた青葉たちが真っ青になって工廠方

面へと激走している中、当の本人は全く正反対の艦娘宿舎方面へふらふらと歩いていった。天気は晴れ間に見える曇り空、先ほどの小雨で舗装された地面は少し湿り気を見せていた。

「……………ふう……………ちよつと休もう」

いくら常人と比べて頑丈な艦娘の身体でも、蓄積された疲労やダメージはそう易々と抜ける事はない。一般的な艦娘では耐えられない負傷でも平然としていられる『桜風』でも、超巨大潜水艦ドレッドノート戦で徹底的に艦艇身体を破壊されたダメージや戦闘中に溜まった精神、肉体双方の疲労による残り火は、数日程度で回復出来る筈も無かった。

「……………7, 8割方は同じ……………沈めた敵艦も、超兵器の多くも……………でも、矛盾している二つの記憶……………」

道中に設置されている屋根付きベンチに座りながら、物思いにふける『桜風』。考えている内容は論ずるまでも無く、既に深山提督や艦隊の皆に伝えている【筑波貴繁特務大尉がライナルト・シユルツ少佐の副官となつて戦つた世界】と、ドレッドノートが今わ

の際に発した重雷装高速装甲フリゲートの言葉にて蘇った「エルネステイーネ・ブラウン技術将校大尉がライナルト・シウルツ少佐の副官となつて戦つた世界」の記憶である。

「なるほど、つまりあなた方は家庭内の喧嘩に他者を巻き込むのを良しとするのですね」  
 「同胞や母国の人間を母なる海へ還すことで得られた勲章の具合はいかがですか？」

「どうせあと暫くすれば何処かで沈むだろう。そうなれば、我が国が更に艦艇売却で利権を獲得出来る。何なら今すぐ沈んでくれた方が清々する」

「何故だ……何故、何故こんな艦艇ふねが、しかもたった一隻であるバケモノ共に打ち勝てるのだ……!?!」

「元はと言えばあの国の内乱が原因ではないか……何故我が国が、血を流さなければならぬのだ……!?!」

「我等はあの艦艇が、戦後もこの世に存在する事を認める事は無いでしょう。もしあの国がごねたとすれば……」

「英雄……? ふぎけるな……あの駆逐艦死神は、世界に不幸を振りまく疫病神じゃないか!」

「はは……夢だ、これはきつと夢なんだ。そうだそうに決まっている! 夢じゃ無ければ、100隻の戦艦と空母で編成した大艦隊を一瞬で蹂躪したあのモンスターを、あんな小舟駆逐艦が沈めれる訳が無いじゃないか!?!」

「いかなる手段を取っても、あの駆逐艦（物）の保有を阻止する。その為なら、相当な譲歩をする事になつても構わない。……寧ろ、国が滅びずに譲歩だけで済めば御の字だ」

幾多の老若男女の声が、『桜風』の頭の中で響き渡る。筑波大尉たちと過ごした世界では、一度たりとも聞く事の無かつた声だ。

「……まあ……そう考える人もいるよね……ウイルクア解放軍との関係悪化を恐れて、物言わぬ軍艦（物）にストレスぶつけるだけ、まだ良心的だけどさ」

そう独り言をぼやきつつ、膝を抱えて顔を埋める『桜風』。ブラウン博士が副官となつた世界の記憶が戻ると、筑波大尉が副官であつた世界では感じ取れなかつた他者からの言葉……具体的には国を失い、根無し草へと成り果てたウイルクア解放軍に対する嘲笑、蔑視、嘲りから始まり、次いで自国に降りかかる厄災からくる嫌悪や憎悪、最後には軍事的常識を破壊する狂つたキルレシオ（K i r l e s i o R a t i o）を叩き出し続ける『桜風』への畏怖、恐怖、そして排除へと移り変わっていく様々な悪意の籠つた言葉が、次々と脳内で反響し続けていた。

「……英雄などで無く、不幸を振りまくただの死神……か」

—— 駆逐艦『桜風』は、みんなに不幸を呼び込む疫病神……なの、かな

「まあ軍人なんて、とどのつまり他者の命を奪うのがお仕事だからね」

「うひゃあつつあ?!」

「つと……危ないわよ『桜風』。貴女は今けが人なんだから」

「あつ……はう……すみません、提督」

『桜風』が全く気配を感じる事も無く『桜風』の隣まで来た深山提督。『桜風』の視点ではまるで湧いて出た様な感覚で唐突に声を掛けられ、驚きでベンチから落ちて危うく後頭部を地面に叩き付ける直前、深山提督の左手で地面に激突する寸前で支えられた。

「それで、何を悩んでいるの?」

「…………えっと」

「私には、話せない事かな」

「…………いえ」

少し迷った素振りを見せるも、ほんのわずかに首を振って思考する。恐らく…………否、まず艦娘がこの世に出現してから確認されていないであろう、あり得ない自身の二つの記憶の事を話すか否か。

「…………じゃあ」

不安が無い訳では無かった。この異常な事例を話して、今後どうなるのか？深山提督は間違いなく優しい女性だが、その前に軍人である。不安要素は可能な限り排除したがるだろうし、そもそも異例だらけのイレギュラー艦娘である『桜風』に対する扱いや対処方が今なお外野と一部上層部では二転三転七転八倒を繰り返している事は、深山艦隊で過ごした三か月間で『桜風』の元にも漏れ伝わっていた。

「…………少し、話をしても…………良いですか？」

だが……迷った末に、全てを話す事とした。根本が真面目かつ隠し事をしたくない性質で有った事、断り無く勝手に医務室から抜け出した事への罪悪感からくる精神的負担という二つの面もあつたが……結局、嘘はつきたくなかつた。行き成り転がり込んできた異世界出身の艦娘に対して、害意も隔意も無く今まで良くしてくれている深山提督への、裏切り行為になるかも知れない。『桜風』は、そう思っていた。

「当然」

『桜風』の意図する事無く、身長差から不安げに縋る様な表情から放たれた言葉に、深山提督は何の迷いも無く答えた。

「……成る程。帰投時ちよつと妙だったのは、そう言う訳だったのね」

「……分かつていたんですか？」

「何となく勘で、だけどね」

『桜風』が全てを話し終えた後、深山提督はそう返した。因みに深山提督だけでなく同室者の陽炎や観察眼に優れている青葉も『桜風』の些細な変化を感じ取っていた。明確には察して居なかった為「また医務室から抜け出すつもり?」と思い違いをした結果、冒頭の行動に出たのだが。

「んー……よし、『桜風』」

「はい」

「ほいっと」

「へ……?」

「良い子、良い子」

そうして考えが纏まったらしい深山提督。纏まった考えの元彼女のとった行動は、『桜風』を引き寄せて、『桜風』の頭を撫でる事であった。……まるで、泣き虫の子供をあやすかのように。

「え、えつと……提督……?」

「無理しなくても良いのよ」



「…………？」

困惑する『桜風』を他所に、静かに語り出す深山提督。

「『桜風』のそのもう一つの記憶は、間違いなく『桜風』と言う存在を構成する物の一つ。忘れようとしても、その存在が消えてなくなる事は無い。これが現実」

「…………」

「…………『桜風』は頑張った。戦って戦って戦い続けて、多くの人を失っただろうけど…………それでも『桜風』は、その分多くの人を助け出したのだから」

「…………でも」

「私は肯定するよ、『桜風』。誰が何と言おうとも、貴女は艦艇軍人としての義務に従い、任務を遂行した。そうして、沢山の人を沈めたかも知れないけど…………それ以上の人を救い出した。ただ、それだけよ」

「…………艦長達が居ないと微動だに出来ない、物言わぬ軍艦だったんですけどね、あの時は」

「今は、違うでしょうか？」

そう言つてほほ笑む深山提督。一切の害意も無いその笑みと、今なお続く優しく頭を撫でられる行為は。

「……………う……………うう……………沈めたくなかった……………死なせたくなかった、殺したく無かった……………！天城大佐も、筑波大尉も皆、みんな死なせたくなかった……………！うう……………ひつぐ……………」

「……………よし、よし。……………幾らでも泣いて良いよ。誰も怒らないから……………。……………誰にも、『桜風』を傷付けさせないから」

人の依代を得て  
艦娘となつて初めて感じる未知の感情を、『桜風』へと齎した。

「……………ああ、青葉？私よ。『桜風』を確保したから、搜索は中止つて、皆に伝えてね。……………今私の背中で泣き疲れて寝ているから、取材申し上げはまた今度にしてあげて」

携帯で搜索中止命令を下し、最後に『それと、やり過ぎたら『桜風』製新兵器の標的

艦だから』と付け加えて先方を凍り付かせた深山提督。その背中には、顔に沢山の涙痕を残す『桜風』の姿が有った。

「……うん？」

「ワン！」

「ああ、コタローか。何時も通りだけど、ちゃんと来れたの？」

「ワン!!ハツハツハツハ……」

「なにコタロー? 『桜風』が気に入ったの？」

「ワン！」

「はいはい。今寝ているんだから飛びつこうとしないの。また今度会えるんだから、仕事はしてね」

「……くうーん」

『桜風』を背負って工廠へと戻る途中、前方より砂埃を巻き上げる勢いで全力疾走してきた柴犬を目視。だが深山提督はこの柴犬を知っているのか、何も躊躇う事無く頭や背中を撫でまわしていた。ハーネスの裏側に至るまで、しっかりと。

「……良し。じゃあコタロー、帰り道気を付けてね。怪我もそうだけど、襲われたりしないように」

「ワン!!」

その一声に応じて、コタローと呼ばれた柴犬は林の中へ去っていった。林に入った直後はガサガサと音が出ていたが、それも直ぐに聞こえなくなっていた。

「……じゃ、行こうか」

柴犬を見送り後は『桜風』を医務室へ還すだけになった深山提督。その後医務室で目覚めた『桜風』は、日を改めた上で青葉たちに加えて今度は深山提督と陽炎も加わっての公開インタビュー<sup>全</sup>Part<sup>全</sup>2<sup>開</sup>に参加する事になるのだった。ソロモンの狼は諦めが悪いし、意外としぶといのである。

「……で」

「はい。……今度の仏さんです」

「それも二人か……。名前は、青山春夫と高谷亮、28歳と32歳。鑑識の報告は？」

「両者とも滑落して、一人は地面の大岩にて頭部を強打しての脳挫傷。もう一人は折れた大木の切り株で腹をザックリやつての急性ショック死です」

「……状況を見る限りでは、事件の可能性は無さそうだな。いや、別の意味で事件っちゃあ事件だが」

「もうこれで何度目になるんでしょうねえ……。深山満理奈さん近辺での不審死」

深山艦隊全体への公開インタビューにて、『桜風』が根掘り葉掘り青葉に掘り返されそうになるもそもそも掘られる程の事が余り無くて事実上の企画倒れ状態になりつつあったその日。県警察は死体発見の通報を受けて深山艦隊隷下の鎮守府より少々離れた山中へと駆け付けていた。

「通報者は、山中をパトロールしていた猟友会所属の男性二人。彼等曰く、鹿狩りの最中に倒れていた二人を発見するも、既に死亡していたとの事です」

「……公安から協力要請が来ている。この二人、公安がマークしていて行方を追っていた……いわゆる、スパイだったそうさ。名前も身分証も戦争開始前に作られた偽装の物らしい」

「……それは、また……」

先輩刑事の言葉に対し、渋い顔をして口を噤ませる若手刑事。前政権の推し進めた偏愛的な外交政策に公務員無差別削減や移民政策、そして深海棲艦に対して完全に無策状態のままだった結果、この若手刑事は警察官として任官した初日から日本国内の治安悪化の悪影響をモロに受けていた。そんな若者が、こういった連中に対して好意的になれるはずも無い。

「持ち物が、高性能カメラに……登山用の靴、頑丈なロープとやけに磨かれているピッケル。……そうして、最後にはまさかの拳銃だ。密輸品だがな」

「……襲撃、ですかね」

「若しくは……拉致か、諜報目的。この前深山提督さんとこの艦娘（艦さん）に突つかかったチンピラが居たが、あんなのとは格が違う。見る限り、中々に鍛えられた男だ」

「……そんな奴が、滑落なんて馬鹿げた死に方で死にますかね？」

「弘法にも筆の誤りと言うだろ。死亡推定時刻の日には小雨とは言え丁度雨が降ってたんだ、慣れない土地と言うのも有ったんだらう。まあ、俺はこういつた事には素人だからな、後は専門家に任せるさ。諜報員の彼是等、知る気にはなれん」

……全く持つてやつてられんな、そつちは俺の管轄外だぞ

そう言つて年寄り臭く「よっこいしよ」とも言いながら立ち上がつて軽く背伸びするベテラン刑事。長年警察官僚組織にて活動してきたこの壮年の刑事の耳には、愉快不愉快問わずに色々とした噂が入つてきていた。噂の出処元は前政権の公務員リストラ祭りで職を追われた元上司だったり、各鎮守府に配備された警察官仲間の線だったりするが。

「まだまだ、俺たちが税金泥棒呼ばわりされる日は遠そうだなあ」

「税金泥棒呼ばわりされる時になつたらまた公務員の首切りが始まるかも知れませんね」

「流石に無いとは思うが……：そうなつたら政治家にでもなるかねえ。俺みたい年寄りが真つ先に肩たたきされるだらうしなあ」

「警部が年寄りだったら自分は赤子なんですすがそれは。……ですが、もし警部が政治家になつたら、警部に投票しますよ、自分は」

「何言つてるんだ、そうなつたらお前も俺の秘書としてこつちに来るんだよ」

「……え？……じよ、冗談ですよ……ね？」

とつとと日本が警官昔が税金様泥棒な呼ばわり平される和国なに戻る事を切に願う警察官たち。ただ深海棲艦との戦争が終わる気配を欠片も無く、加えて無数の宝娘玉を日本が抱え込んでいる今、彼らの願いが叶うのはまだまだ先のように有る。

——私の仲間は……絶対に、誰にも、傷付けさせはしない……誰が相手でも……絶対に……フフツ……フフツ……



## 第四三話 日出ずる国の行く末は

「さて、それでは定例会議を始めようか」

二隻目の超兵器を撃破した殊勲者が、先任によつていじくりまわされていた日。ここ永田町では、超巨大潜水艦ドレッドノート撃沈によつて生まれた余波や今までの情報の再整理の為の会議が開催されていた。

「では、まず防衛省からです。えー、現在防衛省や大学、企業等により合同で『桜風』さんより提供された兵器の解析を官軍民一体となつて必死に進めておりますが……」

「駄目だったか」

「……はい。未知の素材や製法が使われている事は事前に推測出来ていましたが、肝心の解析が全くな状態です。現場の技術者や科学者たちはこれらの解析の為に研究所に泊まり込む位に躍起になっていますが」

そしてその会議の皮切りは、駆逐艦『桜風』の持つ異世界の技術解析がもの見事に進展なしと言う、研究チームを代表した防衛省からの報告であった。

「『桜風』さんの対ドレッドノート戦の際に得られた各種データも、余りにも情報量が膨大過ぎたせいで解読出来たのは数字にして僅か6%程度にて研究中止に追いやられています。掻き集めた最新鋭のスーパードコンピュータも、防御重力場使用時の情報量に對して全く歯が立ちませんでした」

「それは、残念な事です。私は軍事には詳しくありませんが、その防御重力場が生産できるようになったら、自衛軍の損害を有意に抑えられたでしょうから。特に、海上自衛軍が一番求めていたのでは無いですか？」

「……財務大臣の言われる通りです。海上自衛隊時代の隊員削減、そして今戦争による多数の人員、艦艇喪失により海上自衛軍の人的資源はもう限界です。既に予備役は一人残らず現役復帰させている為、これ以上損耗が重なるようなら、海上自衛軍は屋台骨からへし折れてしまいます」

防衛省……もつと正確に言えば、海上自衛軍が必死になつて『桜風』から得た技術情報解析しようとしているのは、そう言う訳であつた。前政権下における公務員と予算削減の波を真っ先に受け、しかもその状態のまま艦娘が現れるまで自国民保護の為深海棲艦相手に必死に戦い、多数の艦艇と乗員を喪失した。予備役の総動員と急拡大した軍

事予算を元手に再建に奔走している自衛軍と防衛省だが、たかが数年程度で割単位で失われた人員を復活させるのは不可能であった。予算確保するだけで装備や人員が湧くのはゲームの中だけでしかない。

背広組、制服組が双方頭を抱えざる負えない状況に置いて、唐突に現れた駆逐艦『桜風』が持ち込んだ多数の兵器は、自衛軍と防衛省にとつてあまりにも甘美な果実であった。オカルト的に艦娘が開発、建造した兵器や艦船は人類に動かせないのは何時も通りであったが、技術情報に關しては別だった。ヘルファイヤと同等の大きさでありながら、異次元の破壊力を發揮する対艦ミサイルを装備した『桜風』製『AH-64D Apache Longbow』。砲撃も雷撃も被弾回避が可能なSF兵器『防御重力場』。造船学上あり得ない程機敏に転舵、航行、艤装搭載が可能な船体<sup>フリゲートII</sup>。その他諸々全てが仮に再現、複製出来れば、対深海棲艦、対人間わすこれからの戦争で優位に立てる事は明白であった。解析出来なければ全く意味が無いのだが。

「次は外務省からです。今回の超兵器、ドレッドノートと駆逐艦『桜風』との戦闘光景は、やはり諸外国に覗かれていました」

「やはりか。ではそれぞれの具体的な反応は？」

「大陸方面は何時も通りに通り一遍の非難をした後は国内統治に四苦八苦しておりま

す。グチグチ言われたので大使召還しようとする面白く様に幹部クラスが低頭平身してくる状態です。裏は兎も角、ですが」

「分かつていると思うが、余り行き過ぎない様にな。あの地域は極めて面倒なのだから」「もちろんです。精々外交取引のネタを蓄える程度に止めますので」

———こいつ……よっぽどイラついていたんだな……。取り敢えず合掌だけしておきましょう  
この人<sup>彼</sup>、こいつとやりあう人身御供<sup>生</sup>に対して

防衛省からの報告に引き続き、『浅野幸喜』総理大臣の軽い忠言に涼しい顔をしてこれまた軽く返す外務大臣。前政権の無残な失政の山と歴史に残る選挙での大敗北に連座して既存の勢力も半壊した外務省のトップに君臨したこの男。外務大臣に就任してから日本外交が一変した立役者なのだが……友好的な相手やマスコミ向け等の表向きは兎も角、その実態はかなりの嗜虐志向持ちで、戦時中でも無駄に意気軒昂な多くの外務官僚を大臣就任より僅か一月でプライドをズタズタにし、日本と自身の思うがままに動けるように改革した危険人物である。有能かつ愛国的なのは確かなのだが、あくの強い人物には違いない。

「続きまして欧州方面ですが、米英仏露は基本的に日本の戦力増強を歓迎。正し英仏は自国の窮状を理由に日本艦娘の大規模増援を希望しています」

「……通常の艦娘だけか？『桜風』<sup>彼</sup>を求めたりはしなかったのか？」

「そうです、総理。流石に『桜風』<sup>彼女</sup>の要求に見合う対価は用意出来なかつたようです。なお、ロシアは資源輸出や漁業保護関係でより一層日本との連携、友好を要望する……と」

口は兎も角日本の援護無しでは事実上外洋に出れない連中は実質的にそれだけで流され、本命とも言える4か国の反応だったが、これも事前の想定からそう大きく外れる事も無かつた。西太平洋からインド洋に至るまでの広大な海域の防護を一国で遂行している日本の功績は大きい上、諸外国との貿易を今なお続けている為崩壊するか否かの世界経済を何とか支えているのだ。それに加えて超兵器なる異次元の敵とも戦おうとしている。無茶な要求を押し付けて日本を怒らせる訳には行かなかつた。……まあ、そう言う前提条件の上で日本艦娘の増援要求が来たという事は、つまり『我が国は自国防衛で手一杯の為、増援は無理だ』と言う言葉の裏返しでもあるのだが。

「……山本長官」

「はっ……。長期間の増援を行えるか否かと言えば、行えない事は無いです。……ただ、

その場合日本や東南アジアに残るのは大多数の筭兼苗木提督と極一部の普通乃至中堅提督と言う事になりますか」

「……再教育は……上手くいっていないようですね。あつ別に責めているわけでは有りませんが……」

「……御心配、有難うございます、内務大臣。現状、鋭意努力を行っておりますので、今暫く時間を頂戴致したく……」

「可能な限り早く再教育が完了する事を願うが、焦つてしまつては元も子もない。その点、十分留意してくれ」

国家統治者に悩みが尽きる事はないが、現在の艦娘と提督を統制している立場の日本自衛軍や海軍庁の目下一番の悩みは、対超兵器関係を除けば前政権の下で執り行われた促成栽培の提督たちであつた。戦果をしつかりと挙げているとは言え、艦娘をゲームの駒の様に非人道的に扱い、消耗と増強と深海棲艦の撃滅を日夜繰り返している第一期生主体の過激派提督勢に関しても頭が痛い。

「現在すでに着任済みである経験の薄い新任や若手の提督には、自衛軍やベテラン提督による再教導を行っておりますが、元々彼等は艦娘への指揮能力が有ると言う一点だけ

で極短期間の教育と不十分な説明により戦線に投入されています」

「確か、第一期、第二期辺りの教育期間は半年弱。そこからは6か月、4か月、3か月と急速に削られていき、最終的には一月未満で前線に送られたのでしたか。ようやく認識した深海棲艦の脅威でパニック状態になった前政権の命令で」

「その通りです。防衛省や当時自衛隊の方々が意見や抗議、最終的には直訴すらされましたが、ヒステリックになった彼等が聞く耳を持たなかったのは皆様も知られているかと」

「数が揃わなければ意味が無い。その一点だけは正しかったですけどね」

「戦地で一番の害悪は、無能な味方です。それもただの無能で有るだけならば未だ何とかできなくも無いですが、それが無能な働き者で有った場合などは、取り返しのつかなくなる事件が起きるかも知れません」

現在、日本には深海棲艦に対する特攻兵器たる艦娘を指揮可能な多数の提督が所属している事、それ自体は事実である。だが、深山提督や仲本提督の様な生まれる時代を間違った様な英才やそうで無くとも大石提督の様に元から若しくは教育の結果良識、良才を持つ提督、そして元の所属が自衛官や警察官等の出身者の提督だけで構成されている筈も無く、数的主力は艦娘への指揮が可能な一点だけで集められた軍事系の知識も覚悟

も殆ど無い一般人だった。

艦娘は、その外見に似合わずに海戦や軍事関係の知識は元から保有しているが、そもそもが軍艦である艦娘が出来るのはあくまでサポート役……軍事組織で言う参謀役が限界であり、艦娘たちに直接指示を出して死地に突っ込ませる事が出来るのは提督のみである。当時艦娘や深海棲艦に関する情報は前政権の命令で多数が封鎖されていた日本では、殆どの日本人は深山提督等が前政権の意志や望み、警告を積極的に無視して艦娘を表に出すまで、多くは知らなかった。

「その結果、アメリカのハワイ諸島撤収作戦の側面援護としてアイアンボトムサウンド戦（アイアンボトム諸島解放作戦）が政府のスタンドプレーにて決定され、多数の自衛官出身提督が新米提督の援護の為最前線に出た末に戦死。また提督のみならず、援護していた海上自衛隊の艦艇の多くも撃沈されました」

「加えて、短時間で適応したり何とか堪えられた者を除く新米提督の一部が艦娘の連続した轟沈でPTSDを発症し、これを聞いた政府は即時拘束かつ病院へ強制監禁、正し戦闘指揮だけは継続するよう命令。正直、この情報を知った時は連中（前政権）の正気を疑いましたよ……」



そして、極めて短期間かつ詰め込み式で行き当たりばつたりの教育方針とは言えそれでも多少はマシな軍としての教育を受けられた仲本第一期、本第二期、生第三期らとは違い、戦場に出る事の意味もマトモに教えられる時間も無く慌ただしく東南アジアの最前線に送り込まれた後期出身の大多数の提督は、ほとんど実地で指揮等を習得させられる羽目に合い、拳句の果てには無茶な政治的決定により死アイアンボトムサウンド地へと配下の艦娘を送り込ませられ、多数が轟沈戦死した。

だからこそなのだろうか。何もかも不慣れな自身と共に歩み出したばかりの可愛い艦娘仲間を殺させるような命令を出した日本政府に対しての極めて大きな不信感と共に、喪失した艦娘への過大な罪悪感その他諸々によって、自己防衛の為か色々と腐った提督が現在多数存在し、そしてあの地獄から戦没者ゼロで大戦果を挙げた上に日本政府に忠実な深山満理奈提督へ様々な感情が向けられているのは。まあ深山提督にとつては本気で知った事では無いだろうが。

「最終的には全責任を発足直後の海軍庁やなし崩しで指揮していた自衛隊に押し付けようとしたしね……。今なお不明なのですか？ マスコミに真実をリークして政権を崩壊させた人物は」

「はい。元々情報管理が杜撰過ぎた上に一部意図的にしていたらしき状態でもあった為に、情報流出ルートが多すぎて特定出来ません。それに、何故マスコミが握りつぶしも大した脚色もせずに自分たちが好き勝手やれる前政権を崩壊させるだけの真実を報道したのかも……」

現在では旧軍以上に末期的な教育期間と体制は改められて、新任提督や経験の浅い提督にはじっくりと心理チェックや戦場に出す事の重大性や覚悟を教え込む様になっているが、それでも政権交代までの間に着任した多数の心理的に未熟な提督を代替出来るだけの数はそう手早く錬成出来る筈も無く、そもそもその未熟だったり腐っている提督が居ないと現在の制海権が深海棲艦の物量的な意味で崩壊する無情な現実の前に、前政権の負の遺産は今なお清算し切れていなかった。ついでに言えば、清算完了予定日など全く不明である。数が多い上に海路が途切れ途切れなのだから。

「……何と言いますか、政権を奪還してからこの方尻拭いばかりしていますねえ。私達は」

「そう言うな財務大臣。……それに、私達は未だマシな方だろう」

「そうですね……上の無能や都合に負担を何とかこなして頂いている現場の方々には

本当に頭が下がります。財務省としては、予算は可能な限り自衛軍や海軍庁に対して融通するつもりなので、宜しくお願いします。山本海軍長官

「……………」配慮、感謝します」

「何、これが仕事でもありませんから」

政権を奪還してからこの方、文字通り正月もお盆も何も無しの休日返上にて働き詰めの日本政府や本格的な日本国の危機を目の前に色々と覚悟を決めた官僚陣。基本、マスコミ等で表沙汰になり、知名度やら人気やらが出て光り輝くのは、見るも麗しい艦娘であつたり彼女たちを率いる提督達と、後は無駄に声の大きい反政府、反軍運動が大半であり、裏方に近い存在である政府や官僚は影の薄い存在に見えるが、彼等壮年の大人達の働きによって日本は回っている。

「……………会議中失礼します。総理、野党や団体が会談を要求しておりますが」

「……………既に野党等に、今日の予定は通達していた筈だが。それにアポも無かつたはずだ」  
「緊急を要する為、との事です。内容は、これからの日本の未来の為の重要な話である為、会談時に話す為に言えない……………」

「……………また後日にするよう伝えてくれ」

だが、彼等の働きを全員が全員認める筈も無く、性懲りも無く権力者張の席りの甘い香ほりに憑りつかれた復権や根拠なき自信を元に政権奪取を狙う俗物や、一面の事実しか見ずに、若しくは見もせずに無責任に自身の理想安をぶちまける右左の思想、業界を問わない団体、更には日本が墜落する事を望む国内外勢力と、数十年の平和の内に巢食つた日本の暗部が、駆逐艦『桜風』と超兵器の出現に合わせてまた芽吹き始めていた。今の段階では、直ぐに摘み取れる程度では有るが。

「……これで、一体何度目だ……?」

「取り敢えず二桁は有りますね。さて、また近隣諸国が反省が、戦犯がうんぬんかんぬんでマスコミ等が騒がしくなるでしょうから、後で返しの文句も考えておきます」

「……繰り返すが、程ほどにな。外務大臣」

その後、マスコミを用いて政府の揚げ足を取ろうとした野党や団体がクロスカウンタ―で反対に社会的常識の無さを突かれて叩き潰され、ネット住民やどうい風の吹き回しか唐突に報道方針を180度変えて業績を回復傾向に乗せた一部マスコミから冷笑と失笑されたの言うまでもない。

「……会議終了後にすみません。総理、山本長官。そして防衛大臣」

「一体どうしたのかね？また厄介ごとか？」

「何事ですか？首相や自分達の呼び出しとは、ただ事ではない様に思えますが……」

「……宮内庁から、いえ……兎も角、向かつて下さい。大至急です。……彼女、について  
です」

「わー……」

「これはまた……」

「予想出来ていた事ですけどね……」

「はい、まあ、これに関しては流石に……」

大人達が胃を破壊しながらの政策会議陰險な策謀を繰り広げていた日より暫く経った頃、『桜風』は大和たちと共

に埠頭へと来ていた。尚、今回の『桜風』は車椅子座乗である。

「だが『桜風』。あの戦闘機は実戦投入されていたのだろうか？」

「ええ、まあ……。一応、私の所の航空妖精さんも扱えはしますけど……」

「大和たちには無理ですね……。もし扱えたら相当な戦力の強化になりますけど」

「流石に私は嫌よ……。性能表スペックがどれだけ良くても、あんな色物を載せるのは」

武蔵や大和、そして『桜風』と霞が口々に語り合いながら眺めているその目線の先には。

『ぶつかるぶつかるぶつかるイヤー!?』『ウワー!こっちくんなん!?』『あかん落ちる落ちるギヤー!?』『ダーああプロペラがー!?』『機器が壊れ、ジャー!?』『暴れるな暴れるなどーどードオー!?』『ウオー、アブねえー!?』『ギヤダーお家帰るー!?』『誰か、誰か助け、てえー!?』『頼む頼む機首上がって揚がって上がれあがれ揚がれー!』

第二次世界大戦型航空機の中でも最大級の革新的な新技術挑戦機イロモノ筆頭格である、かのルフトバツフェが誇る名機であるFw190未来兵器を開発したフォッケウルフ社が産み落とした黒歴史

である「トリープフリーユール」が多数空を舞っていた。……舞うと言う高尚な表現に見合う光景なのかは甚だ疑問であるが。

「ああ、待っていましたよ『桜風』さん！」

「ごめんね、怪我の治療中だって言うのに」

「あ、いえ……」

「私らも居るんだけどね」

「あらあら、人気者ですね、『桜風』さん」

深山提督に背負われて医務室に再搬入されて改めて青葉医務室脱冊の懲罰による取材報道を終えた後、最終的に誰かに付き添われての車椅子移動のみ認められた『桜風』は、明石と夕張の要望により工廠の装備開発室へ訪れていた。今日の付き添いは皆大好きお嬢 JK艦娘鳳翔と鈴谷である。

「それで、今日はどうしたんですか？また開発ですか？」

「あー、うん。開発もそうんだけどね」

「ちよつと確認したい事が有るんです」

「またこの無垢なる少女に変な事する気ー？」

「……鈴谷さん、そう言う言葉はもう少し穏やかに言う物ですよ」

何気に鈴谷の言葉を肯定している様な鳳翔の物言いに明石と夕張工廠の主コンビは軽く落ち込みつつ、取り敢えず話題を進めだす。

「……別に何もしませんよ。今回は『桜風』さんの船体……もつと正確に言えば、改造に  
関する事です」

「『桜風』、改造つて言つても私らもしている事だからね？その点安心するように」

「あ、はあ……はい、鈴谷さん」

「鈴谷さん、変な事言わないで下さい！大体、どうしてそこまで言われなないといけないんですか！」

「夕張さん。『桜風』さんこの娘は、お二人が熱心に『桜風』さんの船体を見ていた光景を、ここに来た当日に見ているんですよ？以前から何度も提督より注意されていた筈ですが」

「あ……その……あはは……」

鳳翔の言葉に怪しく目が泳ぐ軽巡洋艦娘の夕張。他鎮守府の大多数の夕張と同じく、



機械系が好きなメカニック系艦娘な深山提督配下のこの少女<sup>張</sup>。彼女に取って見れば、前触れもなく現れた未知の機械と技術満載な駆逐艦『桜風』は正しく垂涎の代物だろう。ただこういう好き者の御多分に漏れず、彼女自身はそうする気は無くとも『桜風』にとつては、自身を見る夕張の眼は何時も怖<sup>獲物を見つけた豹か虎の如く</sup>いくらいに輝いていた。

「話を進めますね。えっと、『桜風』さん。早速ですけど、船体に何か違和感見たいな物は有りませんか？」

「……違和感？」

「そう。私の計算によると、『桜風』ちゃんの累計戦闘回数と戦果からして、もうそろそろ改の段階に入ってもおかしくないから」

現在確認されている艦娘の能力の一つとして、一定度の戦闘経験を持った艦娘はある程度の資源の消費と引き換えに性能向上を図れる事が確認されている。また、その性能向上時は基本的に例外無く船体の延長化や装甲の増圧等の基礎性能が上昇し、更には新兵器を装備していたり、中には扶桑型航空戦艦の様に本来の歴史では存在しなかった様に艦艇<sup>が</sup>が変わる艦娘もチラホラいる。

そして艦娘が一定以上の戦闘経験を積み、改造が施せる時となった場合は、改造可能

となった艦娘自身に何かしらの予兆と言うか、自身が変わると感じさせる何かがあると  
言う。人類から見ると艦娘には欠片も変化が見受けられない為全く分からない次元の  
話ではあるが。

「違和感……違和感……うーん……？言われてみると……」

「何かありましたか?!」

「あ、明石さん近つ、近いです!」

「あ、すみません」

ある程度人付き合いに慣れたとは言え、それでも行き成り両肩を捕まれ、目を爛々と  
輝かせるメカニック女子<sup>明石</sup>相手にはたじたじになるしかない『桜風』であった。

「……えっと、何というか……光っている?」

「それです!間違いません!夕張さん、これは本決まりですね!」

「そうだね明石さん!よっし、早速提督に許可取って来なきや!!」

そう言うが早いか、『桜風』が呆然と見送るしかない一瞬の加速と速さと勢いで消え

去った夕張。もし道中で島風と出会ったら駆けっこ勝負を挑まれる事請け合いな速度であつた。

「……えつと……?」

「明石さーん……鈴谷たち、完全に置いてけぼりなんだけどー……」

「ああ、ごめんなさい。もう大丈夫です。それではこれからまた、開発をお願いします」  
「アツハイ」

結局周囲の勢いに流され続けて言われるがままに行動する『桜風』。相も変らぬ、陸地での自主性、主体性の無さは健在だった。

「……ごめん『桜風』。何コレ?」

「ロケット……でしょうか?ですが、操縦席と思しき場所が有りますし……」

「何で?!なんでよりによってコレ!?!もつとこう、別の良い物がたくさんあるのに!なんでもりによってコレ!?!」

そうやって出来たのが、名状し難き空飛ぶタコ擬き トリープフリーユージェルであつた。尚、乱数や運の引きによる

物か、それとも何か原因があつたのか、この深山艦隊……否、艦娘にとつて初のVTOL垂直離着陸機はこうやってこの世界に爆誕した。……10回の兵装開発で、内5回がこの名状し難き空飛ぶイカ擬きトリープフリーユージェルと言う凄まじい偏りによつて。

そうして場面は、トリープフリーユージェルに搭乗した勇敢なる妖精さんが蒼天を駆け回るあの光景へと戻りゆく。尚、鈴谷や鳳翔も、瑞鶴や加賀等と共に試験運用の為に艦艇を召喚して海へと出ている。

「やっぱり駄目そうですね」

「そもそも搭載可能な艦艇艦娘が限られてるしな。そして発着艦可能な妖精飛行兵さんともなれば、最早誰も飛ばせられないだろう」

「……発艦後に、陸地へ着陸させる方式なら……?それなら、駆逐艦とか軽巡洋艦にも有効な運用が出来る可能性が……」

「無意味よ、『桜風』。私達の戦場は外洋よ?陸地が有つても、大概は深海棲艦が制圧している敵地。大体、搭載する代わりに兵装の大部分を取り外してようやく数機が搭載出来る程度よ?無意味以外の何物でも無いわ」

「それに加えて、大和たちでは発艦出来ても着陸は出来ませんから……。姿勢を垂直に保ったまま降下など、如何すれば良いのか……」

「うぐう……」

そして目の前で繰り広げられる試艦娘・妖精体実験験の結果、このトリップフリーユージェルの価値は限りなく低い事がはつきりした。まず、駆逐艦への搭載はほぼ不可能。陽炎型、秋月型な

ら一機搭載出来なくもないが、代償に火砲や魚雷発射管の殆どを撤廃せざる負えず、しかもそうやって搭載しても発艦しか出来ず、そもそも発艦させた後の操縦が絶望的に不得手と言う大問題が有った。第一駆逐艦に突然航空機を操作しろ、と言うのが無謀なのだが。

「いくらなんでも此奴は無理なのじゃー!!筑摩ー!!筑摩ー!!」

「もう筑摩にそんな余裕無いよ利根……僕だって、そうだけどさ。全部落ちちゃったし」「あははー……流石の鈴谷さんも、コレはちよつと無理かな……」

次に巡洋艦だが、これは軽巡より大淀型、重巡から利根型共に航空巡洋艦型最上型で有れば、何とか搭載が可能である事は判明した。ただ水上機とは遥かに性能も勝手も違い過ぎる為、一隻たりとも発艦は出来ても着艦もマトモな空戦機動も出来なかった。利根による筑摩

への全力の悲鳴に対して、筑摩がマトモに答えられなかった事から、事態の深刻さは大  
体理解で来ると思う。

「久し振りの出番がコレデスカー?! テートクー!!」

「お姉さまー! 比叡には、比叡には制御出来ませーん! あ、落ち、落ち、落ち、ひえー!!」

「うむ、分かっていた。やはり私には瑞雲しかないのだな」

「諦めないでよ日向あ……」

因みに、戦艦と航空戦艦についてもほぼ同様だった。

「うん、これは無理だね、加賀さん」

「そうね、これは無理ね、瑞鶴」

「二人で納得せんといてな……確かに、うちらも出来んのやけどさ」

最後に、本命の空母勢だが……こちらも同じく、大苦戦の末総員全面降伏への道を通っていた。そもそも通常のレシプロ機では無い大馬力ラムジェットエンジン搭載かつ垂直離着陸機と言う通常のレシプロエンジン型固定翼機とはかけ離れた未知の機体

が相手では、今まで積み重ねて来た経験は全く通用する事は無かった。発艦出来ても、普通に飛ばす事すら困難だと言うのに、空戦機動手綱無し悍馬の操縦 制御された垂直墜落や着艦など、出来る筈が無かった。

「うう……こんな事になるなんて……」

「瑞鳳……いくら新型機だからと言って、こんなになるまではしやがなくても……」

尚、この時速800 km、航続距離270 km、夜間戦闘可能な57 m m航空機関砲、30 m mバルカン砲装備の新型機にハッスルした99艦爆の足が可愛く思うとある航空母艦娘は、誰よりも先に真っ先にトリップフリーユゲルを発艦させようとしてラムジェットエンジンの火が甲板に引火して大炎上させてしまい、自らの姉に介抱されていた。お陰で後発の艦娘は養生用の鉄板を敷く等の対処法が取れたのだから、必要な犠牲では有ったのだろう。多分。

因みに消火作業には深山艦隊の艦娘のみならず、深山少将が念の為に依頼した海保の消防艇も参加していた為、後に瑞鳳は消火活動に参加した海保の関係者全員に玉子焼きを多数お礼回りと共に献上し、代償に腱鞘炎を発症させかけたのだが、それはまた後日の話である。

「ア名状し難き空飛ぶ海月レですら駄目なら、『AV-8B』ハリアーII』は完全に『桜風』の専用装備になるわね」

「戦闘機型の『シーハリヤー F.A. 2』の方が良かったんですけどね……」

「……『桜風』。少なくとも、目の前で落ちたアレよりは遥かに高性能だろう」

「ないものねだりは諦めましょう、『桜風』。ある物だけで、何とかしないと」

海上に浮かぶトリップフリーゲルの残骸を眺めながら、現実逃避するかの如く話し合う少女たち。彼女たちの会話中も、次々とトリップフリーゲルが燃料切れや失速、制御不能に陥って海面に突っ込んで新たな波紋を刻んでいつている。本日は晴天、時々トリップフリーゲル鋼鉄の雨が降り注ぐでしょう、とでも表現出来るか。

「もっとマトモに、皆が使える機装と航空機が欲しい……」

駆逐艦被『桜風』の心の底からの眩きは、試験中止命令が出ても今なお空を飛び続けるしかないトリップフリーゲルのラムジェットエンジンの轟音でかき消されていった。



## 第四四話 汝はパンドラの箱なるか、それともノアの箱舟となるや

「仲本提督。ご指示の通り処置の準備を行いました。こちらが報告書になります」

「分かったわ。やって」

「了解しました。では失礼します」

まるで機械の様に無表情かつ必要最低限の言葉だけを交わして退室する重巡洋艦娘の古鷹。それに対して欠片も注意を払う事のない元帥階級の提督。この通常の艦隊では先ずあり得ない関係性と光景が日常のトラック泊地仲本穂乃果元帥旗下の艦隊では今日、常日頃の通常業務とは違う作業が混ざり込んでいた。

「……全く。此方の眼晦ましになるから構わないと割り切っていたけど、こんな連中ばかりじゃ私も巻き込まれかねないわ」

仲本提督が執務室に据え付けられた軍用パソコンには、上層部より下った特定海域侵

攻禁止命令を無視して超兵器ドレッドノートに殴り掛かり、見事に配下の艦娘諸共海の藻屑に成り果てた特<sup>タウイタウイ泊地所属提督二人</sup>大級の愚物の調査報告書が映し出されていた。

「既にある程度超兵器の異次元性は、関係者で有れば調べれば分かる程度には情報公開されている。しかも態々日本国から命令も下されている。その状況下でドレッドノートに挑みかかったのだから何か策があるのかと買い被れば、蓋を開ければただの玉砕特攻」

赤の他人の所業とは言え、余りにも無意味に戦力を蒸発させた提督二人組の愚か過ぎる行為にため息が出てしまう仲本提督。しかも命令違反で出撃した動機は、自衛軍所属の警務官による内務調査が進んでいる事を恐れ、功績を立てて自身の犯していた汚職やら配下艦娘に対する不適切行為を有耶無耶にする為であった。あらゆる意味で擁護も処置も出来ようがない。

「まあ、少なくとも感謝するべきかしらね。貴方達の死によって得られたデータと空いたポストは、私がキッチリ有効活用させて貰うわ」

内心は欠片もその様な愁傷な感情など無いが、言葉上は感謝している仲本提督。配下の艦娘を道連れにした戦死によりタウイタウイ泊地には二名提督の空きが出来たが、そこには本土にて自身が実家の財閥と自分個人のコネを使い自身のシンパを送り込む事が出来た。表向きは当然の事、少し捜査した程度では辿り着けない位には表向き関係性が薄いので、本土の公安等防諜、国家機関に悟られる危険性は先ず持つて低い。それ以前に一提督に避ける程の人員は無い。

「艦艇魚雷化艦娘と神風隊混合編成の初期案では、良くて打撃を与える事が出来れば御の字ね。仕方ない、第二案に移行するとしましょう」

そう言った直後、トラック泊地鎮守府施設内に少女の悲鳴と哀願、助けを求めらるしき声が響き渡る。鎮守府内が静かなだけに、余計に聞こえやすくなっているようだ。

「五月蠅いわね……。貴女の大好きな提督の元へ送り届けただけなのに」

ドレッドノートが撃沈されて僅か3時間後、何かしらの超兵器関係の物資等の調査任務を与えられていた仲本提督配下の臨時遠征部隊が偶然沈没寸前の損害を受けて漂流していた駆逐艦娘を発見。回収保護して治療中に聞き取り調査を行い、『桜風』がドレッド

回収

即時拘束後

手段を問わぬ情報収集

ノートと交戦する前に暴発した提督達の顛末を把握した。

その後、既に亡き提督に堅く口止めを命令されていた自身の提督に深い忠誠を誓っていた。その駆逐艦娘は、

情報を吐かせる為、拷問で瀕死となり自己と自身の提督が行った所業を深く恥じて、

すべての情報を吐かせ終わつた仲本提督は、

周囲の艦娘や仲本提督が止めても聞かずに結果微弱な抵抗を排して、強制解体が執り行われた解体を許可した。

仲本提督は本艦の意志を尊重し、強制的に解体が行われた解体を許可した。本土への報告書はそうなる予定である。

隠蔽の為に解体を命令提督の後を追つての殉死を懇願。

「さて……駆逐艦『桜風』の改造日は今日だったわね。いったい、何処まで強くなるのかしらね、貴女は」

——必ず、駆逐艦『桜風』を私の旗下へ編入しないと。貴女が輝ける戦場は、私の下にしかありえないわ

既に一定の提督が『桜風』の引き抜きに掛かっている事は掴んでいたが、仲本提督は一切気にしていなかった。引き抜きに掛かった提督共は例外無く、『桜風』を引き抜ける程の何かを持っていない有象無象程度の輩だった。『桜風』を旗下へ置けるに相応しいのは自身しかありえない。仲本穂乃果は、心の底よりそう確信していた。

トリープフリーユールが日本の空を舞ってから数日後。今回はその特殊性もあり、前例が無かったが海軍庁長官に対しても許可を取った上で、駆逐艦『桜風』の改造第一段階目が執り行われる事となった。本日は晴天の吉日、絶好の改造日和。

「頼む『桜風』！東南アジアにはアンタの力が必要なんだ!!この通りだ！」

「……深山提督に話を通してからが筋じや無いですか」

「何度も依頼したさ！だがあの人は全然話を聞かない！だからこうして直接頼みに来たんじゃないか!!」

本来であればそんな晴れやかな日の朝に居る筈の無い、服装は兎も角雰囲気明らかに不良である青年に近い少年っぽい男提督が、唐突に深山艦隊隷下の工廠内にて『桜風』の引き抜き交渉へ打って出てきていた。尚、当然ながら『桜風』に他鎮守府に移籍する意志など無いし、この行為は何をどう言い繕うとも完全なる横紙破りなのは言うまでも無い。

「……またですか。 終ひらき准じゆんパラオ泊地中将」

「ああ、何度でも来るさ。アンタが東南アジア諸国へあの駆逐艦娘を増援として送るまではない」

如何にも『面倒な奴が来た』と言う表情と雰囲気丸出しの深山提督に対し、懽然とした表情で率直に返す、前政権下での促成栽培された第八期生の提督の一人であるこの男。促成栽培型の提督の中では割合優秀な戦果と損害比率を持ち、トラック泊地に次ぐ東南アジア諸国の壁であるパラオ泊地所属提督ではそこそこの上位戦果を誇っている。

「そもそもこの行為は横紙破りであり、全うに「桜風」あの娘を求めらるなら上層部に依頼して下さい。そして上層部がその事について許可を出した時点で検討しますと、私は何回もお答えした筈ですが」

「そんな暇は無い！今『桜風』が東南アジアの防備に回らなければ、もし超兵器が来た場合の被害は計り知れない！それに超兵器だけじゃない、深海棲艦の猛威も未だにヤバイんだ！」

通り一遍の返答を返す深山提督に対し、机に手を叩き付けて簡単に激昂する終中将。

この男の最大の欠点がコレである。促成栽培教育の為軍人としての自覚が極度に薄く、不良漫画主人公の様な経歴と性格が殆ど修正無しでそのままの状態で提督として着任していた為、日本国家への奉仕を志向する深山提督とは相性が悪かった。相手が完全なる善性の人間である事もあり、余計に。

「確かに今でこそ如何にか防衛は賄えているが、これに超兵器まで増えちまうと俺の艦娘や現地住民が死んじまうんだ! どうしてこつちに向かわせてくれないんだ!? 日本にはもうすでに十分戦力が有るんだろ!」

「現状、戦況は不確定要素が多すぎます。貴方の言う超兵器も、いったいどこに出現するのか明確ではない状況下で、本国の守りを疎かにするわけにはいきません。何せ、超兵器相手に抗戦可能なのは『桜風』しかいませんから」

「……あの娘を全部日本が独占しようってのか」

「戦争には、優先順位を付けなければなりません。守るべき物は守り、切り捨てられる所は切り捨てる。今現在、東南アジア諸国に戦力を回して日本国が壊滅すれば、連鎖して東アジア全土、ひいては人類社会が崩壊しますから」

「切り捨てられる側の事はどうだって良いってのか?! 何十万もの人間が居住している事くらいは分かっているだろう!」

「既に東南アジア諸国との外交的交渉は締結済みです。……そもそも、提督には自身以外の他提督配下艦娘に対する指揮権も要求する権利も存在しない事くらい、知っているのでは」

「……クツソ……もう良い！アンタには失望した!!」

無駄に熱い説得も、湯飲みのお茶を軽く飲みながら軽く返し続ける深山提督に対し、とうとう怒って出て行った柊中将。

「……提督」

「大淀……どうしたの?」

「良いんですか?」

絶対面倒事起こしますよ、と目と表情がありありと語っている秘書艦大淀の言葉に、深山提督は苦笑いで返していた。尚、柊中将が『桜風』の元に説得に向かったと知ったのはもう少ししてから話である。



「……ねえ、大丈夫なの？ 『桜風』」

「藪から棒にどうしたの、陽炎？ それに不知火も」

「終中将の引き抜き要請の事です」

「ああ、それ……。実際問題、どうしようもないでしょ？ 確かに東南アジア諸国の防備が未だ不十分な事は知ってるけど、だからと言ってそつちに戦力を回した結果日本艦娘の本拠である日本列島が陥落したら全てが終わるんだし」

結局終中将の懇親の説得も『桜風』の心を動かす事は無く、御付きの秘書艦と共に丁重な言葉と共に帰されてより30分後。余計な闖入者こそ有りはしたものの駆逐艦『桜風』の改造は予定通りに執り行われる事となった。ただ真摯な訴えをかなり無碍にした事を陽炎たちは気にしていたが、当の本人は殆ど気にもしていなかった。

「理論的にはそうですけど……向こうはそれで納得出来たとは、青葉には到底思えませぬね」

「勿論、実際の脅威に直面している彼等にとって見れば、こつちの理屈は頭に來るものではないから、そこはこつちから戦果と実績を更に積んでいくしかありません。誠意とは

言葉では無く流血で持つて示す事ですから」

「……うん、やつぱり『桜風』は戦争関係になると相当ドライだね」

「普通の思考だと思っただけですけど、瑞鶴さん。それに東南アジアを喪失したとしても、資源に関しては周辺海域からの採集が有りますし、最悪は日本海經由での大陸方面も有ります。勿論数十万人単位の市場喪失による経済的損害に国際的地位や評価の点では拙い事には違いありませんが、それでも完全を目指して破滅する訳には行きませんし」

言外に必要時は東南アジア諸国を見捨てる旨の発言を躊躇無く行う『桜風』。尚、艦娘は基本的に深海棲艦からの人類守護を本能的行動としてゐる為、口先だけで有ろうとも人間を見捨てるという言葉や行動は嫌っている。提督個人の思考や教育等の外的要因によつて変わったたりする事もあるが、根幹から変わる事は普通あり得ない。

「……この娘の将来が未恐ろしいと思うのは、私の気のせいでしょうか、長門」

「いや……同感だ、加賀」

だからこそ……『桜風』の今の言葉は極めて異端だった。深山艦隊では人類を見捨てよ、等と言う教育や思考誘導は当然ながら一切されていない為、これは『桜風』自身の

素としか考えられなかった。一応こういつた思考が出来るか出来ないかで言えば勿論出来た方が良いが、仮にこの言葉や考え方が外に漏れた場合相当な失言にしかならない。

「……ああ、勿論今見たいな事は外では絶対言いませんから。流星にその位の常識は有ります」

「しかし、『桜風』の場合ふとした拍子にぼろっとこぼしそうです」

「……ねえ、不知火。そんなに私の事が信用ならない？」

「はい」

『桜風』が投げたボールを不知火に華麗にピッチャー返しされて一撃撃沈判定を喰らい、しょ気返る『桜風』。実際、真面目で善性の性格なのは良いのだが陸地だと何処か浮ついていたり隙も多く自身の事に極度に無頓着な『桜風』は、他者から見ると極めて危なっかしい存在でしかない。極めて高い戦闘力を誇っていても、行動や思考原理がある意味猫よりも読めないのだから当たり前だが。

「どうどう来ちゃったのねえ、『桜風』さん。いったいどんな身体艦艇になるんだろうねえ、睦

月ちゃん、皐月ちゃん」

「きつともつとたくさん大砲を積むと睦月は思うぞよ！」

「うーん、僕は機銃を減らして魚雷を載せてくると思うなー」

因みに深山艦隊では、誰か艦娘が改造する際は手隙の者や交友関係、姉妹艦である艦娘は大体が工廠が集まって、ドック内に設置された監視所や艦艇停泊所からやや離れた場所から見守る事が多い。

「ヒヤッハー！目出度いねえ飛鷹！こりや飲むつきやないねえ！」

「隼鷹……こぞとばかりに、一升瓶持ち込んで……」

「今日はもう諦めた方がええで飛鷹。司令官も目出度い日やつちゅーて、苦笑いして許可しおったしな」

……まあ、ただ単に酒やら何やらを飲み食いする口実に利用しているだけの輩も居るが、大体の艦娘は好奇心や興味と共に、純粋に新しく生まれ変わった仲間を歓迎する為である。特に今回は、未改造の段階で凄まじい戦闘力を誇る『桜風』である。どのような進化するのかに、興味が湧かない筈もない。

「…………ふう」

『かんちよー?』『やっぱ緊張しますよねー』『まあ艦艇からだが変わるって言うんだからなー』  
 『ところで俺たちはどうなの?リストラ?』『今まで確認された事はないから大丈夫  
 ……な、はず』『はず…………に、御座るか…………』『何故に侍口調だ。…………まあ、艦長の同位  
 体は存在していないしなあ』『まー何とかなるつしよ』

「君たちは何時も相変わらずだね。心強いよ、本当に」

『皮肉っぽく言っても艦長の容姿や性格だと普通に褒めているようにしか聞こえませ  
 ね』

「…………副長、それは酷いと思うんだけど」

そしてそんな改造式典の主役である『桜風』だが、特に緊張した様子も無く自身の妖  
 精さんたちや対超兵器部隊所属艦娘と適当に話をして時間を潰していた。見学人の入  
 りが多すぎた為、深山提督や艦隊霧島の大人勢赤城が誘導を終えるまで暫く待機している事  
 なったのだ。

「…………それで改造って、本当に艦艇内で念じるだけで大丈夫なんですか?こんなに人が  
 集まって改造出来ませんでした、と言う事態になったら笑い事じゃないんですが」

「それならそれで構わないと、不知火は思います。一番は『桜風』の身の安全です」

「そうね。……艦艇収納機能や艀装召喚能力が未だに無い『桜風』の事だから、余計にね」  
「不安にさせる様な事を言わないで焼き鳥五航戦」

「う、うう煩い冷血一航戦！そういう加賀さんだつて着物の付け方が逆になる位心配してるじゃない！そつちの方が余計に不安になるじゃない!!」

「頭に来ました。……着替えて来ます」

「なにをー!!……うん、私もちよつと頭と心冷やしてくる」

そして当の本人よりも保護者の方が緊張したりするのは人類でも艦娘でも大差は無い。静と動の正反対な性質である加賀と瑞鶴も、やつてる事は殆ど同じである。他鎮守府は兎も角、深山艦隊の瑞鶴と加賀は相当似た者同士と言うか実は魂の姉妹なのではないかと言う疑惑が浮かばざる負えない。

「……はい、お待たせしました『桜風』さん！準備が出来ましたので、早速お願いします  
！」

「すまない明石。準備とは何のことだ？」

「長門さん？いえ、単に提督がこちらに来られたのと、観測用の機械設置が終わっただけ

の事で……あの、長門さん？何故徹甲弾を取り出しているんですか？」

「いや、なに……何でもない。今すぐ使用可能か再確認してただけだ」

「あの、観測機械に関しては別に私の趣味とかだけじゃ無いですよ?!これは提督から指示が有って、『桜風』さんを守るために……」

「じゃあ行つてくるよ。陽炎、不知火」

「気をつけてください。何かあつたら即座に中止を」

「私達が居るからね。怪我しないでよ！」

艦隊の保護者が明石に対して言外に脅迫している光景を他所に、準備が出来たと知つた『桜風』は二隻を放置して自身の艦艇へと、自分の妖精さん達と乗り込んでいく。相変わらずの能天気な駆逐艦『桜風』の妖精さんと共にタラップを歩く少女の姿は、一切の気負いも不安感も見えない程に穏やかであった。

「……では、行きましょうか。陽炎姉さん」

「……そうね、不知火。ここに居ても、邪魔になるだけだしね」

黒潮に『ホンマ過保護なお姉ちゃんしとるな陽炎はー』と言われる程には世話を焼い

ている陽炎。本当は傍に居てやりたいのだが、そうすると改造に悪影響が及ぶ可能性もある為に、今回は遠くより見守る事になっている。振り返った直後に『目出度い席で喧嘩するなこの馬鹿者共』の大和型戦艦二番艦の一声と打撃音が二つ響く音を背に受けながら、二隻の少女は黒潮が確保していた一等級見物席へと向かっていくのであった。

『取り敢えず妖精さんは総員何時もの配置に着きましたが、実際の改造手段って何ですか?』

「うん。……それで、改造する方法なんだけど」

『どうするんですか?』

「……やっぱり、念じるだけ?らしい?そうしたら、気付くと既に改造が終わってるんだってさ」

『何ですかその具体性皆無のふわふわ説明』

「実際そう言われたから仕方が無いじゃない……」



艦外では迫りくる改造実行時間に騒めく中、駆逐艦『桜風』の艦橋内部では何時も通りの『桜風』と妖精さん達。実際問題、如何やって改造するのか聞いたら『念じれば出来るよ』と異口同音に答えられた彼女達には、何とすれば良いのか分かっていない為に何時も通りで居るしかない。具体性の欠片も無い念じろと言う精神論など、『桜風』に取っては久し振りであった。

「……そろそろ時間だね」

『そうですね。では自分たちは持ち場で待機しています。何が有っても大丈夫なように』

「ん、ありがとう。……何でバケツ持つてる妖精さんが居るのかは聞かないでいた方が良いのかな」

『そりゃ決まってますがな。仮に艦長が錯乱した時にぶっ掛けて正気に戻す為の水ですかゴボガア?!』

『はい、馬鹿言ってる妖精さんはバケツごとしまっっちゃおうねー』

『ゴブゴツ!?ゴボボボボ!!』

改造予定時刻となり、それぞれ心と持ち場での準備を始める『桜風』と妖精さん達。

『桜風』は何時もの艦長席に、その他妖精さんは戦闘時の自分の職場に、アホな事やってた航海妖精は自身の持つて来た水入りバケツに顔面を突っ込まされて何処かへとしまわれていった。そしてこの事に一切『桜風』が突っ込まなかつた事を見るに、完全に感覚が麻痺してしまったのだろうか、自身の妖精さんの圧倒的フリーダムっぷりに。

……………念じる……………念じる、かあ……………どうやれば良いんだろう……………？

単にそこまで気を回す余裕が無かつただけなのかも知れないが。

……………うーん……………目を閉じて……………念じる……………念じる……………改造、改造……………今の自分ではない自分へ……………

何の気も無しに目を閉じて、思い付いた言葉を思う『桜風』。

……………あ……………何だろう……………意識、が……………

その直後に、今までクリアだった意識が突如沼地へ放り込まれたかの如く重くなり、『桜風』がそれ以上言葉も思考も回す事も出来ずに……意識を失った。

……あれ、此処は……右舷側の最上甲板通路？

『桜風』<sup>少女</sup>が目を覚ました場所は、先ほどまで居た筈の艦橋から離れた、甲板通路。自身  
が此処まで歩いて来た記憶は無いし、それにいつも艦内では自身の傍に居る妖精さんの  
姿も見当たらない。

……ん、洋上……？何で？今日は出航する予定は無かったはず……

そうして外を見ると、最近は見慣れた日本国側西太平洋上の海と空があった。そして、それとは別に一つ、違和感が有った。

……私、艦艇を動かしていないのに……妖精さんも居ないのに、どうして艦艇が動いているの？

夢か現か幻か、ハッキリとしない現状。何処か懐かしい、自身少女の意志に関係なく駆逐艦『桜風』が動く感覚に感慨に耽っていると、遠くより話し声が聞こえ始めた。

……違う、話し声と言えるような穏やかな声色じゃない……これは、怒号？それも、駆逐艦『桜風』のクルーの？!

聞きなれた妖精さんや艦娘とはかけ離れた……数か月前、今の世界に来る前に散々聞き飽きた男達のような怒号。喧嘩などではない。戦闘時に必然的に発生し、繰り返されて来た怒鳴り声だ。

……砲撃音、それに被弾……どうして……この海域で、海戦は一度も無かつたはず……!?

一時茫然とする『桜風』を他所に、駆逐艦『桜風』は激しい軌道と砲雷撃による衝撃を

艦内と海にばらまき続け、小柄な『桜風』をまるでメトロノームの如く弄んでいた。  
……くう……か……艦長……シユルツ艦長のところに行かないと……！

『桜風』は健気であった。もう既に縁の切れた世界での知らない戦場。自身の立ち位置も殆ど分かかっていない状況下で、過去の乗員の為に戦おうとしていたのだから。

……いったん最上甲板から出て、艦内通路から艦橋に向かわないと……！

きつとこの世界の戦神は、この健気な少女の姿を見ていたのだろう。そして、この少女はその戦神に気に入られてしまったのだろう。

……うわっ……被弾!?……一瞬だったけど、アレは多分レーザータイプ……

視界の端に入った一瞬の映像とすらいえない程度の視覚情報で、現在交戦中の敵艦の兵装を予測していた少女の下に届けられた、戦神からの贈り物。

……え？

何かしらの重い中身の入った、水袋の様な物が叩き付けられた音。

……ブラ……ウン……博士……？

白衣と眼鏡を身に着けた、金髪の女性。傑出した情報分析能力により、校風少女がシユルツ艦長と共に超兵器との戦闘を勝ち抜くことが出来た少女。その彼女が、校風少女の眼前に落下して来たのだった。……両目を見開き、胴より下を失い、臓腑が飛び散り、自身に何が起こったのか理解出来ない表情で。

「……あ……(´・ω・´)……」

『桜風』!?大丈夫!?私に分かる!」

「……陽炎」

「……っ……!良かった……本当に良かった……!」

『桜風』が意識を取り戻した時、まず目の前に有つたのは外見年齢相応に泣きじゃくる陽炎の姿が有つた。ゆっくりと顔を動かすと、深山艦隊の艦娘が『桜風』を心配そうに覗き込んでいるのが認識出来た。

「……冷たい」

「当たり前よ……『桜風』、貴女いきなり艦艇仕舞い込んで海に落ちたのよ。それも気絶した状態で」

「……深山、提督」

何故かずぶ濡れになった状態で横になっている『桜風』に届いた声の主は、同じくずぶ濡れの自身をタオルで拭っている深山提督。聞けば、一切の前触れも無く駆逐艦『桜

『風』が消失し、『桜風』自身も浮きドック内の海水に水没して同じく一切の反応を見せず、突然の事態に着いて行けず騒然としかけた艦娘を他所に深山提督が真っ先に『桜風』の下へダイブ。引き上げたとの事だった。

「……私の、艦艇<sup>ふね</sup>」

「『桜風』さん、その事はまた今度にしましょう？今は身体を休めないと……」

事情を聴いた『桜風』であつたが、何時もとほまるで違つた簡素な言葉と、緩慢な動作。気絶していた為に海水を飲み込んだ量は最低限だと思われたのは事実だが、だからと言って安心出来る要素でもない。陽炎と共に見守る鳳翔も、心配して『桜風』へ優しく声をかけていた。

「……私の……別の、私の……艦艇<sup>からだ</sup>」

「『桜風』、また後で調べよう？今は休まないと……」

「はあ……！はあ……！皆、担架持つて来たクマー……！」

「運ぶのは任せといて！長良の足なら直ぐ着けるから！」



だが周囲の動揺や心配を他所に、生気の無い瞳と顔を、つい先ほどまで停泊していた浮きドックに向けて右手を伸ばす『桜風』。明らかな異変に、とうとう陽炎は球磨と長良が大慌てで疾走して医務室より運んできた担架へ鳳翔と共に載せようとするのだが……

「……陽炎」

「え、何!? 身体に何……か……」

「……出来たよ。……艦艇召喚」

そう言つて陽炎の片手を自身の左手で握り、右手は地面と平行に伸ばして握り拳を作つて静かに笑みを浮かべた『桜風』が見ていた場所には、ようやく見慣れた駆逐艦『桜風』の今までの艦装とは違った、別種の駆逐艦『桜風』がそこに存在した。浮きドック内に深山提督が飛び込めた事から先程までは確実に存在していなかったのだが、今現在総員の眼前には「ロケットが入っている四角い箱」や「白く細長い棒が着いた小さいガトリング砲」「中口径のガトリング砲」「61cm酸素魚雷発射管よりも大きい口径の7連装魚雷発射管6基」と言う、以前とは違う艦装を纏つた駆逐艦『桜風』が確かに存在した。

「……ごめん、陽炎」

「……な、なに……？」

「……疲れたから、ちよつと、寝さ……せ……」

そして初めての艤装召喚をやらかした『桜風』は、周囲の心配や雰囲気などお構いなしに、力尽きたように眠りについた。

「……現在『桜風』さんは、医務室にて熟睡されています。体温や血圧等、バイタル的には特に異常はみられていません。恐らく、溜まっていた疲労が原因と思います」

「……有難う、明石。見守り人員は必ず交代させるようにして」

「はい、分かっています……」

「……気になる？」

「……本音を言えば」

『桜風』艦艇召喚騒動より数時間後。既に夜となったこの鎮守府では、この艦隊の後方を取り纏める大淀、明石、深山提督三人衆の内二人が執務室に居た。大淀は『桜風』の見守り人員への差し入れと入れ替え任務に当たっている。因みに事務方三人衆の内明石が一番発言力が低い。

「……改造第一段階の『桜風』が装備していた艦装。装甲ボックスランチャー型の【対潜ミサイル発射機ⅠⅠⅠ】【対艦ミサイル発射機ⅠⅠⅠ】。それに【68cm7連装酸素魚雷】【20mmCIWS】【57mmバルカン砲】が新規搭載」

「代わりに、【40mm4連装機銃】と【5連装新型対潜誘導魚雷】は取り外されていた上に、機関が通常のボイラーからガスタービンに代わっていました。そして、『桜風』さんが今まで搭載していたそのボイラー機関は何処にも見当たりません」

「機関丸ごと変更は前例が無いわね。それとさつき『桜風』の妖精さんから聞き出したけど、【対艦ミサイル発射機ⅠⅠⅠ】の威力は大よそ61cm45口径砲の二倍に相当するだろう。二基しかないから弾数がたった24発しかないとも嘆いていたけど」

「……必中の24発がその威力つて、普通に考えると相当脅威だと思うのですが……」

「あの子たちが見ているのは、徹頭徹尾超兵器とその技術で生み出された眷属だけだか

らね。深海棲艦の事は事実上眼中に無いわ」

上層部へ軍用パソコンを使用して送信する、現段階で分かっているだけの駆逐艦『桜風』の改造データを眺める二人。技術的な事には十分に精通している明石には政治的なあれコレは良く分からないが、その明石ですら今回の『桜風』の改造結果は各所を震撼させる物である事は想像がついた。何せ、初期段階の『桜風』の艦装ですら表に漏れ伝う程の騒動が起こったそうなのだから。

「取り敢えず、報告書と一緒に休暇申請もする事にするわ」

「『桜風』さんも連れてですか？」

「ええ。少し戦場から離して心身共にリフレッシュさせた方が良いわ。丁度私の故郷って穏やかな……まあ、何もない田舎だしね」

公私混同と言われそうだが、実際の所鎮守府に『桜風』を置いて行くよりかは安心感が違った。『桜風』を単体で置いておくと、自己判断で出撃をしかねないと危惧されていた。本当は『桜風』は自己判断で出撃する可能性は、鎮守府が襲撃でもされない限りは命令無しで行う事は無いのだが、これまでの実績が実績であった。

「何人連れて行く予定ですか？」

「まあ、許可が下りてから選抜するわ。可能な限り、目立ちにくい艦娘<sup>子</sup>を中心にね」

「……そうとう揉めそうですね」

「例外無く容姿が美麗極まりない上に、大半の瞳や髪の色が日本人離れしているしね」

オレンジや桃色、金髪等カラフルな目立つ色彩の艦娘は多いが、それとは別に黒髪又は茶髪系統の艦娘は余り多くない。深山提督の故郷はお世辞にも都会とは言えない田圃や山地が多くみられる地方である為、余計な騒動は可能な限り避けたかった。

「まあ、まずは『桜風』の回復を待つてからの話だけだね」

「そうですね……」

—— 【駆逐艦『桜風』改】艦装データ報告書より抜粋

現在確認されている駆逐艦『桜風』改に搭載されている艦装並びに簡易的性能表

【艦艇基本性能】

『速力53kt』

『ガスタービンε9基』

『完全防衛式対25cm装甲』

【主兵装一覽】

『68cm酸素魚雷 6基』

『対潜ミサイル発射機Ⅲ 1基』

『対艦ミサイル発射機Ⅲ 2基』

『57mmバルカン砲 4基』

『75口径15.5cm4連装砲 4基』

『20mmCIWS 19基』

『RAM 11基』

【各種補助兵装一覽】

『音波探信儀Ⅵ』『電波探信儀Ⅵ』『自動装填装置Ⅵ』『電波照準儀Ⅵ』『自動迎撃システム

Ⅲ』『防衛重力波Ⅴ』『電磁防壁Ⅴ』『サーマルビジョン』『発砲遅延装置Ⅴ』『イージスシ

ステムⅠ』

## 第四五話 帰郷

「平和とはどんな光景か？」……この質問には、きつと多くの答えが返ってくるだろう。

ある人は、親子供が一つの部屋で団欒する光景だと言う。ある人は、子供たちが元気に外で遊ぶ光景だと言う。ある人は、警察官や軍隊が暇をしている光景だと言う。ある人は、軍隊が世界から廃絶された光景だと言う。

「うわあ……凄いい勢いで流れていく……しんかんせん、つて凄いい……！うわあ……うわあ……」

「あはは、『桜風』はんすんごい目え輝かせとるなあ。ホンマ微笑ましいわ」

「そうですね。……提督？どうしてカメラを構えているんですか？」

「青葉に撮影して来てつて頼まれたからね」

白のワンピース姿でリニア新幹線の車窓に嘯り付き、外を見てはしゃぐ少女と、それを優しく見守る三人の少女と女性たち。この光景は、間違い無く平和そのものと言える

だろう。この光景を演出している少女たちは皆平和とは正反対の戦争を生業として  
いるが。

「でもなあ、司令はん。本当にうちらで良かったん？ 陽炎姉とかハンカチ噛んで見送っ  
とったけど」

「サラツと嘘を言わないの黒潮。……実際、鎮守府 残り艦隊向こうに残す戦力を除いて私の実家に来て  
も問題なさそうなのが少ないから、ね。実家もそこまで大きくないし」

「提督が出した条件が、特徴的な口癖が無く、身長も有る程度有り、目立たない為に黒髪  
黒目。でしたね」

「おもしろい口調や色とりどりの髪や目えしたのが多いもんなあ、艦娘つちゆうのは。し  
かしやっぱ見とるんやなあ提督はん。まあ、陽炎姉がまるで修学旅行に行く子供の親見  
たいにハンカチやーティッシュやー生水飲むなやーとか、あれやこれやとやってたのは  
事実やけどな」

日本内地の風景を見て『桜風』が本気で感動しているのはさておき、保護者役の三者  
はそれぞれ雑談を交わす。一人旅なら兎も角、仲の良い複数人で行く旅の華はこういう



気楽なお喋り大会である。

「凄い整って機械化された田圃と建物群……馬や牛が居ないし……それもそうか、21世紀だし。あ、あれって、えっと、なんだろう……？」

「……この娘全部本気で言つとるんやろなあ」

「見る物聞く物全てが物珍しい物ばかりでしょうからね」

「こんな言葉を聞きたびに、『桜風』の居た世界は本当に歪んだ成長を遂げたって思い知らされるわね……」

そして雑談のもつぱらの種は、リニア新幹線に乗って出発してから飽きる事無く外を眺め続けている『桜風』であった。いや、新幹線に乗るまでも東京のビル群や雑踏を間近に見てお上りさんオーラ全開で通り掛かった通行人に温かい目で見られたりしても居たのだが。なお以前鈴谷たちと買い物に行つた時は、殆ど訳も分からず連れ去られた形なので、周囲を眺める余裕など無かった。

「……ところで『桜風』はん。ホンマに身体の方は、大丈夫なん？」

「……え？ いや、本当にもう大丈夫だってば。何度も同じ事聞かれても、私も困るよ、黒

「潮」

「でも昨日の今日の話やしなあ。ちゆうか、『桜風』はんいつつも無茶ばつかしいよるか  
ら説得力無いねん」

「むー……深山提督、何か言ってくれませんか？」

「何か違和感があったら直ぐに言いなさい。良いわね？」

「アツハイ」

先日日の艦艇召喚の際、気絶して海没し深山提督に引き上げられた『桜風』であつたが、結局その後一日熟睡した翌日には至つて健康その物な状態へと戻つていた。その為今回の深山提督の帰郷に着いて行く事に不安の声が有りはしたのだが、深山提督のいない横須賀鎮守府に残っている方がよっぽど暴走すると言う懸念の方が大きかった為、『桜風』本人の意思は全く聞かれる事無く同行する事になつていた。海没した僅か二日後に自らの艤装の性能を確かめに海に出ようとする様な輩に、発言権が与えられる訳も無いだろうが。

「……提督」

「鳳翔。何？」

「……先ほどから、誰かが私達を付けてきている様な……」

「え、ホンマ？」

そんな中、少し様子の変わった鳳翔が、他者には聞こえない小声で深山提督に対して不安げに誰かに付けられている居るのでは無いかと言い出す。黒潮には分からなかったようだが。

「ああ、それなら……」

「心配しなくても大丈夫だと思いますよ、鳳翔さん」

『桜風』はん？」

そんな鳳翔の心配を打ち消したのは、深山提督の言葉を遮った『桜風』。なお、視点は完全に外にしか向いていないが。

「鎮守府を出て暫くしてから車でずっと一定距離で着いて来っていますが、自然と背景に紛れ込む動きからみて多分護衛として派遣された人達だと思います。駅で新しく来た人たちはベテランさんですかね？」

「そっから着いて来てたん?! てか、何人着いて来てるん!？」

「声大きいよ黒潮。数は多分一応7，8人くらいかな。流石に拳銃は携帯していないよ  
うですけど、やっぱり大事にされているんですね深山提督って」

「……取り敢えず、『桜風』さん」

「何ですか？」

「人と話す時は、面と向き合って話しましょうか」

「ふあい!? あ、あがりあひた……」

取り敢えず人に背を向けて話していた『桜風』が鳳翔の手によって膝の上引き倒されてほっぺおニム仕ニム置ニムきされるのを他所に、座席から顔を覗かせてあちこちを見回す黒潮であつたが、黒潮の眼には別に怪しい人間は見受けられなかった。

「……分からへんわ。ホンマに居るん?」

「そう簡単にバレたら隠密護衛の意味無いでしょ、黒潮」

「あ、深山提督が依頼したんですか」

「ええ。一応VIP扱いだからね、私と『桜風』貴女は」

黒潮の疑問を他所に、アツサリとネタ晴らしする深山提督。贅沢を言えば陸戦のスペシャリストである陸上自衛軍所属特殊作戦群辺りが来てくれれば最高だったのだが、流石に彼等程の戦力を実弾装填済みの銃と共に派遣出来る程日本国内の治安は悪化しては居ないし、それに彼女達も襲撃されても撃退乃至逃走する位は比較的容易だ。後一応非戦闘地域である日本国内で戦闘可能な自衛軍兵士を動かす為の法整備が遅れていたりする裏事情も有る。

「てことは、もしかしてその護衛の人たちもずっと着いてくるん？」

「今回はね。でも福井に着いたら向こうの警察に引き継ぎするとも言ってたわね」

「土地勘のある地元警察の方が良い、と言う事ですか」

「後は、基本的に福井には変なのはほとんどいないし、それに実家に親戚一同が集まる事に配慮してくれた様ね。有り難い事だわ」

因みに、深山満理奈少将の実家は福井県である。そして今回の帰郷では深山提督の帰郷に合わせて滋賀や山梨、神奈川の各地に居る親戚が集まるのだ。丁度8月のお盆の時期でもあるので、墓参りも行われる予定である。

「深山提督、そう言えば提督の故郷の福井って、どんなところなんですか？」

「……そう、ね。私の故郷の福井、と言うより私が住んでいた所は……」

そう呟いて口を噤んだ深山提督の二の句は。

「……田圃と自然と小さい市街地主体の田舎。遊ぶところなんか本当に少ないから、現  
代っ子の鈴谷や熊野は連れて来れないわね」

どこか遠くを見つめて、乾いた笑みの元で紡がれた。

ね……  
——……いくら艦娘の中でも特例の『桜風』と言つても、あっさり悟られるとは

「……司令はん？どうしたん？」

「……ん？いえ、何でもないわ」

——……もう一度、根本から鍛え直しかな。動きが鈍っている私含めて。……特  
に私は、過ちが許される立場ではない……

どんな景色何だろうかとやいのやいのと『桜風』と鳳翔が会話を交わし、黒潮が深山提督に対する僅かな違和感を感じる中、深山提督は自身の心底に吹き出しかけた激情を慈母の微笑みで覆い隠した。

日本国北陸地方福井県。深山満理奈少将の生まれ故郷かつ提督適正が発覚するまで過ごしていたこの地域では、深海棲艦と人類による全面戦争が勃発する中、戦前と余り大きな変化も無い日常を過ごしていた。勿論戦争勃発直後は資源輸入が絶たれた事から自動車保有率が高いこの県は混乱し掛けたのだが、ほぼ同時期に日本各地にて油田が発見されており、若狭湾にも油田が発見されてすぐさま採掘されたが為に海上通商路が復活するまでの期間事なきを得ていた。因みに新規発見された油田の質は例外無く相良油田並であり、唐突な超高質油田の出現に地質学者が悉く頭を抱えている。

そして戦火に晒される可能性もある太平洋側と比べて、佐世保や舞鶴鎮守府の存在によつて安全が確保されている日本海側の各県はそれぞれ企業や住民移住の誘致を行ったのだが、自衛軍と雪達磨式増強された艦娘の奮戦で安全が確保された事も有つてか福井への誘致は余り上手くいかず、その結果戦前とそこまで変わらない状態だった。まあ

その為なのかそれとも別の要因からか、主催者発表は兎も角実数では少人数とは言え各地で行われている反軍、反政府系のデモ活動とはほぼ無縁ではあるが。

「んー……着いたなあ、『桜風』はん」

「そうだね黒潮……！深山提督のご家族って、どんな人たちなんだろう……！」

「えっと、普通の一般家庭だから、そんなに眼を輝かせるほどじゃ無いよ『桜風』？」

「ふふつ……そうそうくるくる回る物では有りませんよ」

そしてそんな平穏な地に降り立った深山満理奈達一行は、到着直後よりまるで独楽の様に回りながら周囲を見渡す『桜風』の奇行で少々悪目立ちしていた。元々艦娘は例外無く美麗だと言うのに、『桜風』は純白のワンピースに麦わら帽子と遠目でも目立ち易い恰好で陽気にはしゃいでいた。幸いなのが、比較的帰省客が少なかったため駅にはそれほど人が居なかつた事だろう。

「『桜風』はん、独楽見たいに回るのはええけど、そろそろ……」

「おー、居た居た。満理奈、満理奈ー」

「あ、婆ちゃん！」



そうこうしている間に、黒潮の声を遮る女性の声。深山提督の祖母が迎えに来たのだ。

「久しぶりだねえ満理奈、御帰り。……あら、後ろの別嬪さんは？」

「えっと、向こうでの私の部下。電話入れていたよね？」

「おやまあ、こんな綺麗さんが部下だなんて。何時も孫がお世話になっています」

「いえ、此方こそ提督に何時も助けられておりますので……」

深山提督の祖母の言葉とお辞儀に対して丁寧それぞれを代表して鳳翔が答える。何処か垢抜けた深山満理奈の面影は薄い、艦娘相手でも分けて隔てない優しい雰囲気に関しては、『桜風』達に対して成る程この二人は家族だと思わせるに十分であった。

「取り敢えず家に行こう、婆ちゃん。親戚の叔父さん達ももう来ているんですよ？」

「おお、そやったそやった。立ち話もアレだからねえ、それじゃあ行こうかね」

「はい！よろしくお願ひします！」

「あの、『桜風』はん？人居るから、なるたけ静かにな？な？な？」

文字通り目に星を浮かばせるくらいに輝かせた『桜風』の姿と元気のいい言葉に、姉から引き継いだ血なのか『桜風』の世話に入る黒潮。鳳翔は目を細めて「あらあら」と言うばかりであり、深山満理奈とその祖母は『桜風』の姿を、まるで元気な親戚の子供を見る様な目で見て特に静止もしない。深山艦隊の苦労人の一角として頭角を現しつつある黒潮の明日は何処だ。

「ここが深山提督の実家ですか……」

「地方の旧家屋。広さはまあそれなりに有りはするけれど、何処にでもある家よ」

「自然が有つてとてもいいところだと思います！横須賀の空気とは比べ物にならない位静かで良い雰囲気です!!」

「ありがとねえ、『桜風』ちゃん」

「サラツと横須賀デイスつてるな、『桜風』はん……。あんま合わんのか、都会の空気」

「あ、ごめん。そう言うつもりじゃ……」

そんなこんなで深山提督の祖母が運転する軽自動車によって深山提督の実家に到着した艦娘三人衆と人間お二人編成の御一行。到着して直ぐに車から出た『桜風』の眼に入ったのは、武家屋敷……とは到底言える規模では無いが、こじんまりとしつつも蔵と納屋が一つずつ有る都会では相当な額を積み上げなければ購入出来なさそうな平屋二階建ての旧家屋であつた。

「既に幾つか車も着いてますね……近江、横須賀、長野？」

「親戚の車よ、気にしないで大丈夫よ『桜風』。……で、何そんなところで突つ立ってるのよ、才牙」

「うごえ?!ま、ままま満理奈姉!？」

「人の顔をみて開口一番【うごえ】とは何事よ全く」

「痛い、いで、いでででで!やめ、やめて満理奈姉!あた、頭割れ、割れるつて?!アゴゴゴゴゴゴ……」

「……えつと、深山提督の弟さんですか？」

「違よ『桜風』ちゃん。あの子は親戚の風間さんの息子さんやつて」

両手拳で高校生程度の少年の米神を、中指の第二関節で挟り込ませる様にグリグリこねくり回す深山満理奈を他所に、彼女の祖母は何事も無い様に初対面である『桜風』達に風馬才牙を紹介する。とてもシニールである。

「それよりも……爺さん！爺さん！満理奈が帰って来たよ！」

「ん？おう、満理奈か。お帰り、仕事は大丈夫か？」

「爺ちゃん。うん、向こうでの仕事は特に何も無かったよ」

「おおそうか。それで、良い加減才牙の坊を離してやりなさい」

そう言われて素直に風馬才牙を開放する満理奈であったが、風馬才牙の被害者は頭を抱えて小さいうめき声と共に蹲っている。傍目にはじゃれ合っているようにしか見えないが、意図的かつ的確にツボを押した場合は洒落にならない痛みが発生するのだ。尚普通の人がかめかみを軽く押しして痛みを感じた場合、眼精疲労の蓄積等の可能性がある為、注意が必要である。

「……お、おおお……あ……頭が……割れる……ガチで……」

「精進が足りん、出直してきなさい」

「それで、その三人が満理奈の所のか？」

「……あつはい！『桜風』と言います！」

「鳳翔と申します」

「ウチは黒潮と言います。宜しく願います」

「おうおう、元気が良いのう。孫が何時も世話になつとりますが、これからも宜しく頼みます」

そう優しい氣に声をかける深山満理奈の祖父は、農作業で程よく日焼けした顔に皺を湛えながら笑みを浮かべていた。『桜風』達の眼からでは、昼日向に地方の農道を歩けば麦わら帽子を被つて畑仕事をして居そうな、立派な田舎の好々爺だった。

「……二人とも良い娘だったでは無いか、満理ちゃん。鎮守府でもあんな娘たちが居るのか？」

「現段階では艦娘に限定しても総数百名弱が所属。工廠や各艦艇に属している妖精を含めれば千名を優に超えております。虎一様」

「……満理ちゃん。確かに我等一族が揃った場所とは言え、そこまで畏まる必要は無いぞっ。」

「何分性分ですので、お許し下さい」

「……昔からこうなの？」

「そうなんだよ彩夏……まるで時代劇の役者見たいになるんだよ……」

親戚一同に会し、恒例である庭先での焼肉パーティーにて大人用に持ち込まれた焼酎を飲んだ『桜風』が大変面白い事になる等のハプニングが有りはしたものの、長旅で疲れた艦娘三人衆は既に床に就き、彼女達に続いて多くが眠りについていた。深山満理奈や風馬親子ら少数を除いて、だが。

「さてと。先ずは才牙の坊に、婚約相手が出来たそうだな。おめでとう」

「……え、いやいやいやいや!?!どうしてそこまで話が勝手に進んでいるんですか!?!」

「……才牙は、私じゃ嫌？」

「いやそうじゃ無く、そうじゃ無くてね……」

そうして始まった怪しげな密談の口火を切ったのは、まさかの風馬才牙と山梨県に住

む遠縁の親戚である望月彩夏との婚約話で有った。まあ二人とも歴とした正真正銘の現役高校生である為、世間体で有ったり色々な障害があるのだが、親戚や二人の両親、そして望月彩夏自身が乗り気である為、風馬才牙が人生の墓場送りになるのは時間の問題だろう。二十歳すら迎えずにこうなるのはある意味哀れかも知れないが。

「さて、じゃあ場も温まったところで本題に入ろうかね……満理ちゃん」

「はっ……何でしょうか、虎一様」

「……満理ちゃん。本当の事を言ってくれ」

そうして深山満理奈の祖父母が同席し、将来夫婦となるであろう若者二人、更に複数いる親戚一同を代表して、風馬家当主風馬虎一が渦中の深山満理奈に問い質す本題は。

「一体、これまでに幾つ取ったのだ？掃除をしていた才牙や我等にも与り知らぬ塵や鼠が頻回横須賀にみられていたが」

「向こうでは、ハルザキヤマガラシの株を12個、蛆の入った国産栗を27個。ドブネズミは18匹、ヒロヘリアオイラガは10匹処分しております。以前より除草剤を撒く等手入れをしてはおりますが、何分礼儀を知らぬ輩が頻繁に投げ込んできております故

……」

一見すると大仰では有るが単なる掃除に関する世間話。だが当然ながら態々皆が眠っている夜に集まって掃除談義をする様な面白可笑しい感性は誰一人として持つては居ない。

「……なあ満理姉。割と昔から思ってたんだけどさ、満理姉の処分方法が流石に過激過ぎると思うんだけど」

「仕方が無いでしょう、才牙。文も言葉も通じぬ、欲に塗れた獣には焼いた炎で追い払う以外有効な手は無い」

「……そう言う話じゃ無いだろうに」

「そもそもだ、才牙。以前シナハマグリを掃除した際、処分を怠り他所の者に迷惑をかけていたお前が、何か言える立場だと言うのか？」

「……満理姉がサブローに持つて帰らせた評価点見て、絞られたからその事は掘り返さないで下さい……」

古来より長き伝統を持つ集団にはその集団にしか通用しない言葉……：隠語と言う物



がある。現代でも軍隊や警察にそう言った物が存在する様に、戦国時代に各地で勃興した忍者にも同じく隠語が存在していた。勿論バレては何の意味も無いどころか害悪でしかない為に情報封鎖は徹底しており、現代にまで忍者が実際に使用していた隠語が伝わっている物は極めて少ない。

そして、そう言った隠語の法則としてオーソドックスとも言えるのが、過去伊賀や甲賀の忍者は、仲間に自身が同国出身で有る事を伝える為に伊賀からの連想で出身地を栗と表現したり、甲賀出身者は郷家ごうけと表現した様に、「対象を別の物に言い換える」事である。

「満理奈。今はそれで大丈夫だろうが、これからも掃除するだろう。風馬の所や望月家からも増援が有るにはあるが……」

「心配不要です御爺様……」

昼に『桜風』や黒潮達に見せた姿とは打って変わった、厳冬の滝の様な厳しい雰囲気と威圧感を放つ満理奈の祖父に対して、彼女はそれに一切臆する事も動揺する事も無く。

「……前提として、私たちはお天道様に対して顔向け出来ないような事はしておりませんから」

穏やかな微笑みと、清水の如く澄み切った両の眼で言い切った。……昔から一つ屋根の下で暮らし、尚且つ身体の動かし方や物事の視点の向け方等、様々な物を教え込んだ側である祖父母が、ほんの一瞬と言えども思わず後ろに下がりかけた程に、得体の知れない、底の見えない何かを、彼女は覗かせていた。

「さあ……夜は始まったばかりです。我らがご先祖が守り抜いて来た御国を、常世に生きる我等も守り抜くためにも……皆で、力を尽くしましょう」

「……本日は、御招き頂き有難う御座います。首相閣下」

「いや、此処に呼び出したのはこちらの方だ。そう畏まらないでくれ」

「はっ……では、何時もの通りで」

「ああ……そうしてくれ」

東京は赤坂の某料亭の一室。歴代の首相を筆頭とした数多くの政界の重鎮達が、機密の混じる会話を行う時に使われるこの場所では、過去幾多の歴史に残る事の無い密談が行われていた。そして今夜も、歴史に残る事の無い密談が行われようとしていた。

「……彼女たちは、もう眠っている頃か」

「警護の警察官二人からは、特に『桜風』は極めて楽しそうにはしゃいでいたとの事ですので、恐らくは」

「そうか……なら、安心だな」

仲居が運んできた食事を軽く摘みながら問いかけた首相の疑問に、最近自分の省の地位と権威が戦前とは比べ物にならない程上昇している事に本気で困惑する長老格の背広組や制服組の愚痴を時々聞くようになった防衛大臣が答える。

「……お疲れ、ですね」

「……まあ、な」

溜息を吐きながらそう答え、日本酒を飲む浅野首相。彼の顔には、最早化粧でもしない限り誤魔化せそうも無いほどに濃い疲労の色が浮かびきっていた。

「首相。やはり少しでも休養を取った方がよろしいのでは？戦時中の首相と言う激務に加えて、国内の政争も処理し続けるのは……流石に、無茶です」

「分かっている。そんな事は分かっているが……」

山本長官の言葉に渋い表情で返す浅野首相。本来戦争と言う非常事態に有っては、国家や政府は挙国一致政権を樹立するか、そうで無くとも最低限であっても各勢力は協力体制を施行するのが普通である。現在日本と同じく深海棲艦相手に戦争をしているアメリカ合衆国やフランス共和国、イギリス王国やドイツ連邦共和国等の主要各国は、形式はどうあれ統一された政権体制を整えている。

「……挙国一致政策が潰されたのは、やはり痛かったですな」

「仕方が無かっただろう。そうしなければ予算を早急に通す事は出来なかった。ただで

さえ憲法改正するだけでも相当無理を押し通したと言うのに……」

だが一方、多数の艦娘と防衛地域を抱え込んでいる日本国の政治体制は、戦前と実質的な変化は皆無であった。精々が現在の政権与党が歴史に残る圧倒的勝利で多数の議席を抱え込んでいる程度の変化しか無く、政界に置いては挙国一致とは全く持つて程遠い状態である。

保守政権の政権奪還後、深海棲艦との戦争を優位に進める為に行おうとした憲法改正や各種法案改正に対して、野党に転落した旧政権与党やその旧政権与党に賛同した議員は太平洋戦争時代の頃と混同させ、挙国一致政策を「独裁国家にする為」「与党の許されない暴走」と称してあらゆる議場での牛歩戦術や無関係な質問攻勢、プラカードを持ち込んだでの妨害等によって国会運営もままならず、早急に緊急予算案と憲法改正だけでも通したかった浅野首相は、挙国一致政策を取り下げざる事と妥協したのだ。

そして浅野首相の譲歩に対して、反与党で呉越同舟的に連合した野党やそれに類する団体は大々的に「日本の独裁化を阻止」「この勢いで政権交代」「日本は過去を忘れるべきでは無い」と現在も「自らの功績」として讃えて宣伝や報道しているが、結局は現在の政権与党に対する負担を無意味に激増させただけの「功績」でしか無かった。最近首相や大臣の体調管理問題で与党を叩き出しているのも、初めから考えてこの事を狙って

いたのならある意味大した物である。

「それにだ。現状、超兵器等と言う敵も出て来ているのだ。現在までの被害状況と『桜風』からの情報から推測から見て、次は欧州と予想はされているが、日本や東南アジアに唐突に出現する可能性も否定出来ない」

「……陛下からの、あの真実のお言葉を頂いた以上は、今更挙国一致政策等と言う些事で時間を潰す訳には行かないと」

「……全く信じられない話だが、陛下が嘘を仰せられるとは到底思えない。彼女の持つ力に対して、あの連中が排除や利用しようと圧力だの何だのを掛ける可能性は十分に有る。」

そう言いながら、手酌でそれなりに上質な日本酒を乱暴に呷る日本国首相。そこには、何時も戦時中の首相足らんと周囲に見せつけている余裕など何処にも見受けられずにいた。かなり珍しい浅野首相の姿に、この部屋にいる多くが小さく騒めいているのを見ながらも。

「……おおきみ大王と言われていた時代より天皇家の影として付き従い続け、戦国時代に各地の

忍び集団を吸収して強大化しても尚天皇家の影となり続けた一族が今なお現代に……  
それも、あの『桜風』の提督として存在している等、何時まで経っても信じきれそうも  
無いがな」

深海棲艦、艦娘、異世界出身艦、そして超兵器……。それらに匹敵する、若しかすればそれ以上にオカルト染みた日本の歴史に埋められていた事実に対して、浅野首相はそう零すしか無かった。

## 第四六話 命の洗濯

「……今頃、『桜風』は何やってるのかなあ」

「陽炎さん……今日はそればかりですね」

「青葉さん……。仕方が無いでしょ、この惨状を見てみると、現実逃避もしたくなるわよ」

深山提督とその一党がりニア新幹線にて横須賀の地を離れてより丸一日。本人の意図とは大半は関係無しに何かしらの騒動だかイベントだかが高確率で発生していた。此処横須賀鎮守府深山艦隊の港湾では、騒動発生源が居ない為に一昔前の様にそれなりに騒がしくも特筆する様な事も無い、平和な日常が見られていた。

「……目……目が……頭が痛い……」

「うう……未だ、視界が緑色に……」

「駄目……駄目、那珂ちゃん、ファイト。アイドルは吐いたり、なんかしな、い……うっ?!」



極めて珍しい事に、川内型軽巡洋艦娘が埠頭から海に向かって揃って顔を覗かせているが、とある駆逐艦娘の所業や負傷経歴から見れば平和の範疇である。他所の鎮守府ともなれば驚天動地で大混乱が巻き起こりかねない異常事態かも知れないが。

「……やつぱり早急過ぎたな、三人とも」

「長門さん……ですが……」

「お水です。……確かに、このナイトビジョンを使いこなせれば夜戦も有利になる事に興奮するのも理解出来ますが、慣らしの時間も無しにいきなりするのは無謀です」

「加賀さん……。うう……。何も言い返せない……。正直舐めてた……。おえっぷ」

加賀から渡された水で口を漱ぐ川内。妹の二隻も同じく長門から渡された500m<sup>1</sup>ペットボトルのミネラルウォーターでうがいをしていた。三隻とも可愛らしかったり美しい顔立ちであると言うのに、それが完全に台無しな酷い顔である。

「……そんなに酷かったでちか？」

「……どーして……。ハチとイクが駄目で……。ゴーヤとイムヤは平気なの……。？」

「そう言われてもね……私に聞かれても分からないわよ」

そしてその日本美人三人娘が倒れ伏している反対側では、提督指定と言う事実無根なのか有根なのか良く分かっていない装甲水中服スクール水着を来た金髪と水色髪の少女二人が、同じように埠頭から頭を海に向かって覗かせていた。

『桜風』が毎日開発している解析班が大体頭を抱えて対超兵器部隊が人身御供となつて体当たりで使用法を修練する様な代物だらけの各種兵装だが、改になつてからも開発で出て来る装備は相変わらず船体強度と艦娘の限界に挑戦する様なオーバースペックが多いが、その内には『桜風』曰く「補助兵装」と呼ぶ物がそれなりに多くなつて来ていた。その為、少しずつ通常の対深海棲艦との戦闘に回っている艦娘にも一部装備の委譲を行つてみたのだ。通常の装備より幅を持つ事の優位性は論ずるまでも無い。

「……気持ち悪いっばい……」

「……うん……睦月、相性が悪い見たい……」

「だ、大丈夫、二人とも……？」

ただ、ある程度予想されていた通りに、搭載して運用した艦娘の大半は使用後暫くで嘔吐や吐き気、中低度の頭痛に苛まれる事象が確認された。現在埠頭で我慢出来ずに倒れた川内型三姉妹に夕立夜戦の女神トリオ、立ソッモンの狂犬、睦護衛船乗員のマスケット月だけでなく、それ以外にも帰投後即座に工廠内のベッドやトイレに駆け込んだ艦娘も複数居た。「ナイトビジョン」を除けば全部『桜風』曰く「Ⅰ型」か「Ⅱ型」相当の補助兵装では有ったのだが。

「……………因みに、吹雪はどうでちか？」

「……………正直に言えば……………なんだか、むかむかします。イムヤさんたちは？」

「イムヤも、何だか身体が浮つく感じね……………何と言うか、風邪を引いた時の様な」

「ゴーヤもそうでち……………吐き気とかは無いでちが、ちよつと熱っぽい感じがするでち」

一応深山艦隊所属艦娘は数が多い為に、総当たり形式で試験を行っていった結果、極少数ではあるが『桜風』開発の兵装を運用してもそこまで苦痛症状を発する事が無い艦娘もいる事にはいた。重症でないだけでそれぞれ何かしらの症状が出ている為、到底戦線投入出来得る状況では無かったが。常時風邪に似た症状のまままで思考力、判断力が低下しているのでは、『桜風』製の兵装であつても使いこなせる訳が無かった。大体『桜風』の兵装は例外無く通常の兵装とは性能以前に目指している場所も土台すらも違う異質

極まらない物なのだから、活かすには柔軟な思考は必須である。

「……これでは、どうしようもないですね」

「そうですね、大和さん。何度も言われていた通り、やはり時期尚早だったと思います。青葉たちの様に、時間をかけてゆっくり慣れていくより他無いと思います」

「そうだね……陸地でも、あんな感じだしね」

そう言いながら、深山艦隊が駐留する鎮守府近くの放棄され、国に買い取られた田圃に建設した軍用滑走路から飛び立つ単発航空機を眺める青葉、陽炎以下深山艦隊対超兵器部隊所属艦娘四名。

「……大丈夫なのでしょうか」

「思考、感性が柔軟な瑞鶴であれば、先が思いやられます」

「事故とか起きてないと良いんだけど……」

「大丈夫ですよ陽炎さん。事前に消防車や放水車が待機していますから」

「事故を起こす前提か……確かに、起こった時を考えれば、早く対処できる方が望ましいが」

彼女達の視線の先には、西側諸国にてその高性能から多数採用されたベストセラー機ではあるも、現在では改修を施されてはいるも完全に旧式化している事は否定し様も無い第三世代型ジェット戦闘機である『F-4J Phantom The Second』が、まるで生まれただばかりの雛鳥の様にヨタヨタとふらつきながら飛行していた。自衛隊時代から続く世界有数の錬度を誇る航空自衛軍では、まずあり得ない光景である。

「……………瑞鶴。具合はどうですか？」

「……………全然……………駄目……………舵が……………重いし……………思う、様に……………」

「……………瑞鶴さん。赤城さんや飛龍さんたちも一応参加していたと思うのですが、皆さんは何処に？」

「……………他、の……………皆は……………出力、上げられなくて、オーバーランで……………事故は、起きてないけど……………」

「……………飛ぶ事すら出来なかったか」

「事故が起きる程度の速度すら出なかったんですね……………」

艦娘の持つ召喚型の船体兵装とは別に、身体にランドセルや矢筒等の形状で装備され

ている艤装を通じて行われた加賀と青葉の問いかけに、瑞鶴は途切れ途切れに答える。歯を食い縛り、紅潮させながら『F-4EJ Phantom・The・Second』に搭乗している自身の妖精さんを通じて懸命に操縦している姿が、声だけでありありと脳裏に浮かび上がらせるだけの緊迫した声色であった。

「基地航空隊の要領で、陸地に艦娘と召喚艤装を配置する案はそれなりに面白いとは思いましたが」

「零戦や流星、41cm連装砲の様な通常装備は陸地に態々配置する必要性は低い。私達が海に出て運用する方が有効的だからな」

「本命は『桜風』の開発した兵装ですからね……。陽炎さん。『桜風』さんが言っていたあの機体の性能はどのような物でしたか？」

「えつと……時速850km、航続距離2850km、夜間、悪天候可能でも戦闘は可能。正し装備は5000lb爆弾のみで機銃や対空ミサイルは搭載無し。搭載爆弾が『彗星五型』の1500lb爆弾より小さいとは言え、速度と耐久力は『F-4EJ Phantom・The・Second』の方が上だから、将来の装備艤装としてはこっちの方が望ましい……だって」

この性能表を見た時、深山提督を含めた艦娘だけでなく、素材解析から始めている日本技術者、研究者一同は例外無くくはぐな印象を受けた。確かに爆撃機の仕事はその名の通り目標に対する爆撃である。だが、だからと言って護衛の為の機銃もミサイルも搭載しないのは些か妙であった。最高速度もマツハ0.7弱程度と自衛空軍が自衛隊時代に使用していたF-4EJより遅く、又搭載量も少なかった。

自衛軍が知っているF-4EJとは違い、着艦用の装備やかなり高度な操縦時の補助装備が充実しており、10cm45口径砲弾が10発直撃しないと撃墜されない異常な耐久力、そしてその気になれば完全自動操縦による作戦行動が可能になる人工知能が搭載されている等、機体材質等の使用されている機体技術の高度さに比べて、肝心な基礎戦闘能力が低いように思えたのだ。

本格的に『桜風』から、『桜風』が居た世界の詳細な聞き取り調査を依頼するべきか悩み始めた技術者たちを他所に、そんな裏での苦労など関係の無い試験官として瑞鶴が志願し、それに引きずられる形で赤城と飛龍、蒼龍が『F-4EJ Phantom II』の搭乗試験を、自衛空軍や技術者との合同で決行した結果が、瑞鶴のみ飛行に成功するもレシプロ機にも落とされそうなるふらつきと低速具合が精一杯なこの始末である。一応自衛空軍パイロットも試験するも予想通りに始動すら行えなかった事を考えれば、最早ヤケ酒に走るしかない。

「……まるでエクスカリバーね」

「石に突き刺さった剣を抜けた者のみが、神に認められし本当の王となる。……確かに、近いかも知れませんが」

「……大丈夫だ、陽炎。確かに私達の歩みは遅いのかも知れないが、それでもしつかりと一步一步進めている。あの暴走娘の隣に立てる日も、必ず来る」

「……ありがとうございます。長門さん」

焦る必要はないと諭す長門に、様々な感情が緋い交ぜになった表情で言葉を返す陽炎。『桜風』の開発した高レベル兵装を使う事は出来る、だから使いこなす事は二カ月を超えた今でも到底目途すら立つ心配がない。硫黄島沖大演習の時の様な、膨大過ぎる情報量処理出来ずに発生した頭が引き裂かれる様な激痛や、設計限界を遥かに超える船体が引き裂かれんばかりの主砲射撃の衝撃による損傷は、現在の所高レベル兵装を使用せず、低レベル兵装でも細心の注意を払う事で抑えられている。

とは言え当然の事ながら、改になつても相変わらずな二ト口つ娘の気性を知る対超兵器部隊の面々がこの程度で満足している訳では無い。明確に先の見えない、目隠しされたまま綱渡りをさせられている様な現状の打開策を手探りで探している事の必要性は



皆理解している。納得出来ているのは余りいないが。

「……本当、『桜風』は今頃何をやってるんだろう」

「うんうん、良い娘だからそんな顔しないで良いよ。皆気にして無いからね」

「さくらおねーちゃん、まちがえて、おさけのんだら、だめだよー」

「でもあんな風に甘えてくれる姿は可愛らしかったな美咲、つって痛い痛い痛い!?! 抓るな抓るな本当に痛いから!」

「あんたねえ……いい歳した大人が馬鹿言ってるじゃ無いよ、全く」

「母さん、父さんは今運転しているんだから降りてからやってよ。事故ったらどうするのヤ」

「おい治樹なあ、お前父親を……」

——何で間違えてお酒飲んじやったの昨日の私……うう、穴が有つたら布団に丸まつて籠りたい……

その頃、当の『桜風』は望月家の車に相乗りして顔を真つ赤にしながらプルプル震えていた。ネット界によく入り浸っている漣や望月、秋雲ならきつとこう言うだろう。『船堀パロ乙』、と。

「んー……やっぱあつちとは海の色とか違うなあ」

「あー、言われてみれば確かに。匂いとかもちよつと違う」

「うみのいろ？ちがうの？」

「そうやでー。太平洋の海と日本海の間、似てるようで色々違うんや」

「そーなんだー」

深山家の山梨に住む親戚である望月家の次女、つまり望月彩夏さいかの妹である彩夢あやめの言葉にニツコリ笑顔で返す黒潮。因みに余談だが、望月家の家族構成は山梨で林業を営む家長の誠、妻の美咲、自衛軍に志願し後方勤務に回されている長男の治樹20歳、長女彩

夏は高校二年生の16歳、次女彩夢は幼稚園児である。

「……人が少ない……と言うよりは、時期を考えると殆ど居ませんね……」

「舞鶴や佐世保鎮守府、後つい最近新設された大湊警備府が蓋をしていて安全だと言つても、深海棲艦の影響による風評被害は避けられないからね。気にする事は無いよ、鳳翔」

「提督……はい」

彼女達一行が居るのは、夏真っ盛りで海水浴シーズンで有りながら海水浴客がかなり少なくなるでリゾート地の様に広々としている海水浴場である。端的に言えば、彼女たちは帰省したついでに安全な日本海で思いつき泳ぐために来たのだ。因みに墓参りは早朝6時過ぎに鳳翔や『桜風』達が寝ている間にそれぞれ終わらせている。

「……それで、何で大石君がここにいるの」

「えーつとですね、自分達も休暇の為ここに泳ぎに来たら偶々出くわしたただけとしか……」

「貴方舞鶴鎮守府でしょ。海水浴場ならそっちにも有るでしょ？」

「すみません、深山提督。向こうの海水浴場は、すぐそばに鎮守府があるせいで、人が沢山集まっています……」

「……そう。羽黒がそう言うのなら」

「あの……その、すみません、深山提督。どうしても自分の言葉よりも羽黒の言葉を信じられるのでしょうか？」

「胸に手を当てて貴方のその本能染みた口説き癖の事を思い出しなさい。話はそれからよ」

「もうナンパはやつてませんって！そんな事したら叢雲だけでなく皆で錨に縛られて海に沈められちまいます！」

そうした海の家にとっては商売があつたり状態な海水浴場には、深山提督の家族と親戚、そして『桜風』達に加えて、何故か舞鶴鎮守府第7海上部隊所属である大石翔大將とその配下の艦娘がワツサリと来ていた。現在大石提督の傍に居る妙高型重巡洋艦の羽黒以外はわざわざ持ち込んだビーチパラソルやポールをキャイキャイ騒ぎながら設置している。

「あの……深山提督」

「『桜風』？どうしたの？」

「いえ、その……は、恥ずかしい……です……」

深山提督が駐車場から続く海水浴場の砂浜に降りる階段下で大石提督を聴取する中、遠慮がちに声をかけて来たのはタオルケツトを身に纏った『桜風』。俯き加減にタオルケツトで肩から下全てを隠しているその姿は、何だか巣穴か布団の中から頭だけ出して不安げに人を見上げる兎か犬を思わせた。

「皆水着着てるのよ？『桜風』だけじゃないから、恥ずかしくないわよ」

「いえ……でもっ……コレは、あんまりじゃ……」

「……男の俺が口挟めることじゃ無いだろうが、余程変なのじゃない限り何でも似合うと思うよ？『桜風』ちゃん」

「でっ……ですけど……こっこの……恰好は……」

大石提督による真面目なフォローを受けても、タオルケツトを外そうとする気配の無い『桜風』。開発装備がぶっ飛んでいる為に忘れられがちだが、『桜風』の中身は戦前、それも戦時中でもある1939年頃で有る為、一応レジャーとしての海水浴の事は知って

いるが、『桜風』の視点では女性が着用する水着は上半身から太腿までを覆うランニングシャツと短パンを組み合わせたような、21世紀現代から見ると相当古臭い水着であるのが普通であつた。

「……や、やつぱり、私車に戻つて……」

「さーくらちゃん!」

「さーくらはん!」

結局羞恥心に耐え切れず着替え直そうと回れ右した直後、『桜風』の進路を塞ぐ様に狙いすまして現れた黒潮と望月彩夏。出会つて一日程度しか経過していない筈のこの一人と一隻だったが、共に年頃の少女の為か早期に意気投合し仲良しになつていた。安直では有るが相互に『くーちゃん』『あやはん』と渾名で呼び合う程度には。

「ふえ?!」

「大丈夫、一時間位遊べば慣れるつて!」

「ちゅー訳で、いざ御開帳!海に行くでー『桜風』はーん!」

「わあああー!?返して、お願い後生だから返してー!!」

彩夏と黒潮の息の合った連携プレイで成す術も無くタオルケツトを奪い取られた『桜風』。泡を吹きながら必死に二人に追いつがっているが、タオルケツトの奪還に気が回り過ぎてゐる為か二人が『桜風』を砂浜に誘導している事には全く気が付いていない様子。

「……って、何時の間に砂浜に?!」

「ふっふっふっ……じゃあ泳ぐで『桜風』はん!」

「それじゃ行こう! さくらちゃん!」

「や、う、腕掴まないで、って、ぴや、ひいやああー……!」

明石工廠特製の特濃肌色クリームを全身に塗りたくった事により、見た目ただの少女には余りにも不釣り合い……否、異常かつ不自然極まりない傷痕は影も形も見えなくなっている『桜風』。深山艦隊屈指のファッションセンスを誇る鈴谷と熊野プロデュースによる、シンプルな青と白を基調とした空模様のバンドウ・ビキニとボーイレッグの水着が、純朴な雰囲気を漂わせる『桜風』に対して愛らしさと少しばかりの色気らしき何かを感じさせる。

「くすつ……可愛らしいですね」

「そうだなあ……何か和むな」

「ふふつ……」

最終的には黒潮と彩夏に両腕を抱えられて引き摺られ、砂地に『桜風』の両足によって轍が描かれていったのを見送った深山提督達保護者勢。硫黄島沖大演習にて自分達を氷の様な冷静さで一方的に蹂躪した『桜風』が、陸地では真逆の隙で全身をコーディネートされた天然気質な言動である事を目前で確認した大石提督配下の艦娘達が、姉心を發揮して全力で遊び<sup>弄</sup>倒す事を心に決めたのは言うまでもない。概念的にはギャップ萌え辺りが近いだろうか。

「……それで、本当の所はどうなの？」

「休暇申請出したら山本長官からのビデオ通信で先輩の護衛に行くように言われました」



「素直で宜しい」

「……では、自分を解放して頂けないでしょうか？」

「却下」

「じゃあ満理姉。俺の方を……」

「却下」

「そんなあ……」

「……うう、許してくれよ彩夏……」

そして時は流れて一時間後。結局完全に吹っ切れて羞恥心が麻痺し切った『桜風』がビーチバレーや海水浴で黒潮や望月彩夏達と全力で遊ぶ中、深山提督と大石提督、加えて風馬才牙はビーチパラソルの元その様子を見守っていた。……男コンビの方は一目の前の桃源郷に現を抜かしてしまった《雄としての本能満載の眼で嘗め回す様に監視していた》が為に、それぞれのパートナー叢雲と望月彩夏の手により報復として頭以外の全身を砂で覆い固められていたが。

「提督さん提督さん。夕立、ジュース持って来たっばい！」

「ああ、ありがとな夕立。出来ればこの砂を除けてくれると助かるんだが……」

「……叢雲に怒られるから、流石に出来ないっぽい」

「おうふ……」

ただまあ、熱中症にならない様に陽射しを遮るビーチパラソルを設置したり、時折飲み物を持って来たりしてくれている為、何だかんだ言いつつも慕われている大石提督の人徳は中々な物である。因みに秘書官の尻に敷かれている提督と言う軍隊に有るまじきヒエラルキー逆転現象は稀に良く有る。

「……しかしまあ、凄い勢いで打ち解けたな」

『桜風』ちゃんの事っぽい？」

「ああ」

「だってあの娘、弄るととっても面白いっぽい！それに初めてレジャーを楽しんでる『桜風』ちゃん可愛いっぽい！」

「……先輩？」

「……仕方が無いでしょ。まさか東京湾に遊びに行く訳にも行かないし、それに私は仕事に忙しかつたし、あの娘もそう言った事をやろうとしなかったから」

そう言い訳しながら地に埋もれた大石提督から眼を逸らす深山提督。因みに今現在彼女は黒色の三角ビキニにラツシユガードを着込んでいる状態である。高雄だの伊19だのと言った突き抜けた艦娘の中でも特に突き抜けた存在の為に余り目立たないが、極めて健康的に鍛えられた肉体美は平時であればナンパを賭けて玉砕する男共が列を成しそうな程に整えられていた。

「深山提督ー！一緒にビーチバレーしませんかー!!」

「……呼ばれているから行くわね。夕立ちちゃん、大石君の事よろしくね」

「了解っばい！……それで提督さん。夕立は何すれば良いっばい？」

「逃げちまった……ん、そうだな……じゃあ夕立、記念撮影の為にちよつと俺の鞆からビデオカ……叢雲、落ち着いてくれ。俺は決して不埒な事は一切考えていないと言うかむしろ思い出の記念の撮影と言うのは旅行に行く場合には普遍的に当たり前の事で有って……ちよ、や、やめ……あつあつあつ……」

ラツシユガードを脱ぎ置いて、後方で大石提督の懇願とくぐもつた悲鳴を背にしながら、何年振りかの海辺での遊びに参加する深山満理奈。久し振りの大所帯、しかもその殆どが多種多様な美女と美少女だらけだった為、今まで閑古鳥が鳴いていたも同然だつ

た海の家の従業員や偶然居合わせた少数の一般客が色々な意味で大歓喜状態だったり大混乱状態だったりしているのを尻目に、うら若き女性らしく『桜風』達と共に遊ぶ深山満理奈の姿は、鎮守府では余り見せる事の無い、心底楽しんでる姿であった。

「……それで、反省した？」

「正直悪かったとは思う。だけどこれは男として正常な生理的現象である部分も有るか  
ら……」

「よし分かった。砂に加えて海水も追加よこの馬鹿」

「ちよ、や、止め……お、重い……！マジで重い……！」

因みに大石艦隊の艦娘や深山艦隊の黒潮、鳳翔、『桜風』達に雄としての感情が籠った視線を向けてしまった片割れの風馬才牙だが、結局大石提督が叢雲によつて制裁されている脇で、望月彩夏の乙女心を完全に地雷を踏み抜く言い訳でぶつ壊してしまい、能面の様になった彩夏の手により砂追加の刑に処せられていた。周囲から見れば恋人同士がじゃれ合っている様な物であり、一部に至つてはこの甘い光景に対して砂糖を吐いていた。尚、風馬才牙は少量とは言え口内に飛んできた砂を吐いていた。

「……久し振りに、柔らかい表情だったな。楽しめたのか？」

「恐縮です、誠様。……はい、向こうでは余り、此処まで気を抜く機会は有りませんでした」

「……えつと、満理奈さん？」

「……何か？」

「いえ、何でも無いです……」

ビーチバレーで最終的に深山満理奈と掘り出されて解放された大石翔の提督連合対『桜風』と黒潮の駆逐艦娘コンビによる白熱した試合を最後に解散となった海水浴。大石艦隊の優しいお姉さん方と遊んだ望月彩夢と肩を寄せて穏やかに後部座席で『桜風』が寝息を立てる中、大人勢は少しばかり立ち話をしていた。尚黒潮と鳳翔は大石艦隊の

艦娘と共に後片付け中である。

「……向横須賀こうだと、いつつも肩肘張って生活してるの？」

「常時、と言う訳では有りませんが、外部に漏れ伝わった情報を元に取材等を名目にした無作法な者共が間を置かずに押し寄せる時が有りました」

「えっと、警察とか、自衛軍の人たちが警護してるんじゃないの……無いんですか、満理奈さん」

「敬語は不要です、彩夏。……確かに、提督や艦娘に気付かれない様に、若しくは不審に思われぬ様、鎮守府所轄地域の警察署並びに自衛軍や公安等は警護部隊の巡回経路を設定しています。ですが、元々防諜戦には法制度による制約や長年のブランクがある日本組織では限界も有ります」

語弊があるかも知れないが、前代は兎も角現在の政権は防諜には相当力を入れてはいる。入れてはいるのだが、元々第二次世界大戦の敗戦後、旧日本軍が解体された際に諜報関係のノウハウや技術、人員が多数散逸した上に数十年に渡る長期の軍事的抑圧や制約の為諜報力は先進国内でも相当な低レベルだったと言うのに、それに加えて前政権によって行われた、軍や警察予算等公務員人員も含めての大きな削減と入国、移民規制緩

和政策により余計に諜報、防諜関係は打撃を受けていた。

現場の警察官による地域密着の奮闘のお陰も有り何とか日本各地の治安は維持されている状況では有るが、規制緩和中に大量に流入した他国人が原因か遠因となる治安悪化は避けようにも限界があり、それを隠れ蓑に策動する国家に所属した本物の諜報員の行動的な諜報活動を全て防ぎきるのは無理難題でしかない。それに機密保持や諜報員捕縛関係の法整備に関しても『自由や人権に対する迫害行為、そして一般市民にも被害がある』等と難癖つけて長期間妨害されても居た。機密情報を知ろうとする一般市民等普通は居ないと言う指摘等は当然彼等に取つて馬耳東風どころか揚げ足取りが出来る為笑顔で批判出来る代物である。

「加えて、中には週刊誌記者等の事実無根の飛ばし記事も平然と書き叩く者共もあり、いかにも面倒極まりない状況になる事も有ります。この事に関しましては、先日申し上げた通りに」

「……ああ。分かつてる。だけど虎一さんや才牙君たちは兎も角、君が無茶をするようにだと本末転倒だからな」

「委細承知しておりますが、我が身等よりも御国と我が友の安全が最優先です故、その点だけは御承知頂きたい」

諜報員、工作人員もそうだが、ある意味それ以上に頭が痛いのは「報道の自由」を掲げて相手の事も考えずに電話取材攻勢であつたり鎮守府周囲で張り込みや遠距離からの無断撮影を仕掛けたり、果てには不正確な情報やいい加減な憶測を元に事実無根の報道を繰り返して行つていたマスコミだった。一応、突如今までの報道方針を一変して現政権寄りな報道に180度転換したマスコミも居はしたが、そんな突然変異的な例外は極一部だ。

幾度と無く警告を受けようとも、深海棲艦との戦争が始まる前の感覚のまま自由気ままな政府批判報道をしていた彼等に取つて、人類とは全く違う能力を持った見た目麗しい艦娘は恰好の報道対象だった。深山艦隊にこそ余り実害は無かったが、それでも風評被害を受けた他鎮守府もそれなりに存在した。そんな春を謳歌していた彼等マスコミも、この日より一週間後に「国家機密漏洩未遂罪」並びに「侮辱罪」容疑により、警視庁と公安警察合同で強制捜査を受けて一気に冬に突入するのだが、それは彼女達には関係の無い話である。

「てーとくはーん！片付け終わったでー!!」



「提督、御片付けは終わりました。大石艦隊の皆さんももう帰られるとの事です」

「あ、くーちゃんに鳳翔さん」

「ん、分かったわ。……では、帰りましょうか」

「……ああ。うん、そうだな」

兎にも角にも、眠り姫（黒）や大海原（黒）の令嬢達（黒）を含めて今回の里帰りに余り関係の無い話は早々に切り上げた深山満理奈は、後ろからの不安げな視線を尻目に自らの仲間を迎えに歩き出す。休暇はまだ始まったばかりなのだ。

「んー、んううー……何か、こうして海で遊ぶのは初めてやったなあ」

「え、くーちゃんやった事無かったの？」

「せやなあ。深海棲艦がぎよーさんおるで、太平洋側の海で無防備に泳ぐ訳にもいけんし。後うち等艦娘は何処にでも引つ張りだこやで。はあー、人気者はホンマ辛いでーあやはん」

「……そうだね。何時も皆を守る為に戦ってくれてありがとね」

「……ちよつとその反応は予想外やであやはん。そんな辛気臭い顔せんと、ほれ、笑顔や笑顔！」

「ひよ、ひよつと、ほほひつはるなくーひゃん……」

海水浴の帰り道。席替えて『桜風』と入れ替わった黒潮と望月彩夏は、先ほどまで遊び倒していたのにその疲労を感じさせずに楽しくしゃれ合っていた。因みに風馬才牙は助手席にて静かに一言も発する事無く外を眺めている。居場所が無いのだ。

「……全く。才牙も男ならあの中に入り込まんか。枯れている訳でもあるまいに」

「いや平成の時代から考えるとあの中に介入する出来る様な奴は相当少ないんだけど……」

呆れ顔で息子を横目に言う風馬虎一に対して、どこか遠くを焦点が定まってい無目で見ながら答える風馬才牙。悟り系でも絶食系でも無いが、どちらかと言えば草食系よりの才牙にとっては、後ろの二人の仲に介入するだけの根性や勇気は無かった。つい先ほどまで砂浜に首以外埋葬されていた事が関係しているかは不明である。

「……あ、電話?……司令はんから?なんやろか……」

そうした可愛らしい少女同士の触れ合いを断ち切る携帯の呼び出し音。何と無く聞こえて来た後ろからの声からは、何やら逼迫した様な黒潮の応対が聞こえて来た。

「……あの、すみません。ちょっとカーナビでテレビつけて貰ってもええですか?」

「構わないぞ。才牙」

「へーい」

運転中である虎一が答え、才牙がもそもそ動きながらカーナビを操作してテレビ放送を受信する。

「……何だこれ、映画か？」

「ちやうで。……本物や。本物の映像やって」

そうしてカーナビの画面に映し出されたのは、荒い画像ながらも分かる、ロンドンと  
思わしき都市と異常な声色でまくし立てるレポーター、空を飛び回る多数のヘリコプ  
ターと戦闘機、そして……

「……ごめんな、クーちゃん。うちの休暇、これで仕舞いになりそうや」

何処かのビルの上と思しき場所から映し出された、余りにも巨大過ぎる強襲揚陸艦  
の映像であった。

## 第四七話 双牙が生み出し業火の火口

21世紀のグレートブリテン及び北部アイルランド連合王国、略称イギリス連合王国が領土であるスコットランド。北部にロイヤルネイビーの重要拠点であるスカパフローが存在し、また現在深海棲艦の侵入が殆ど確認されていない北海に面したこの地域は、深海棲艦との戦争勃発前とそれほど変わらない日常が送られていた。

勿論、戦前と比べれば物資の輸入が少々滞る場合も有る為に全く変化が無い訳では無い。大西洋航路が深海棲艦の群れによって寸断され、両アメリカ大陸からの海上船舶による輸出入が、経済効率の悪い護衛船団以外では殆ど不可能になった事の打撃は大きかった。不幸中の幸いなのが、地中海方面は伊仏英三か国艦隊によって比較的安全に制御されている為に中東からの石油輸入は何とか欧州軍の自力だけでも可能な程度に滞り無く行われているのと、日本の奮戦でインド洋の深海棲艦が有る程度抑え込まれている事、北極圏空路を使用すれば空輸は可能だった事であった。

平時より不自由を強いられる戦時中であるとは言え、もはや極僅かの老人方を除け

ば、歴史上の出来事となりつつある第二次世界大戦中の窮乏とは比べ物にならない程度には各種物資や民需品が供給されていた。イギリス海軍に所属する艦娘も続々と増強され続け、駆逐艦の多くが対艦火力の低い小型、護衛型の駆逐艦であったり、一線級部隊以外の艦娘の持つ艦載機の大半が日本ではコモンクラス判定で有る「フルマー」や「ソードフィッシュ」程度の物であったりと問題は多々あるが、その状況下でも奮闘するイギリス艦娘のお陰で、北海は時々逸れたと思しき深海棲艦が出る以外は何もない世界だった。

「アーネスト！ 避難誘導はどうなっている!?」

「パニックは起きていません！ 現在順調に進行中です」

「！」

「分かった、避難誘導が終わり次第こつちに戻れ！」

「サー！ イエス、サー！」

その平和だったスコットランド……否、イギリス本土であるブリテン島に今、深海棲艦ではない、そして当然ながら人類勢力でもない、未知の武装敵性勢力……超巨大双胴強襲揚陸艦「ユアルクレイカ」異世界から訪れた異形の怪物が襲い掛かって来ている。

「……現在の状況は？」  
The present status

「……絶望的です、将軍」  
Hopeless, General

「国王陛下は？」  
Majesty, King

「既に避難されております」  
It has been already evacuated

ロンドンのウエストミンスター地区ホワイトホール……日本で言う霞ヶ浦に類似するこの場所に鎮座するイギリス国防省。その地下では、現在スイス連邦の都市ベルンにて欧州首脳陣総出の防衛対策の為の国際会議に出席しているイギリス連邦首相に代わって最前線での指揮を執っている大将が、悪夢の様な現実と無理矢理向き合わされていた。

「スカパフローに駐屯していた部隊は壊滅」  
The military unit stationed in Skapflow is destroyed.  
Most of facilities collapsed by bombardment from a warship and bombing, too.  
施設の数が多い艦娘の多くも戦死しました」  
Without only war vessel most of the friend girls were killed in action, too.  
艦艇だけで無く、艦娘の多くも戦死しました」  
The Scottish situation that it was gone ashore.  
「……上陸されたスコットランドの状況は？」

「艦砲射撃と航空攻撃により

大打撃を受けています。

相手の戦車の火力が異常です」

「報告では、敵は第二次世界大戦期の戦車だと聞いているが……」  
 「見た目だけは仰せの通りです」

「反撃も行いました、

そう言つて要員がコンソールを操作し、画面に映し出されたのは何処かの街路に設置されたと思わしき監視カメラの映像であつた。映像に映し出された時間はイギリスの現地時間で午前6時。日本では大石提督と風馬才牙が砂浜に埋められた時間である。

「……冗談としか思えな  
 い光景だ」  
 「残念ながら、現実であります」

市街地の街路に鎮座していたのは、イギリス陸軍の主力戦車であるチャレンジャーII。いわゆる昼飯の角度と呼ばれる、道路に対して斜めの位置にて見た目の装甲を割り増しているこの戦車の後方では、現在急ピッチで進む民間人の脱出を成功させる時間稼ぎの任務を与えられたイギリス陸軍兵士がそれぞれの得物を手に身を隠していた。



そしてその両者の眼前に展開されつつあるのは、現代では既に博物館にしか存在していない筈であった骨董品物の古今東西の戦車……旧日本陸軍戦車〔三式中戦車 チヌ〕  
 〔二式砲戦車 ホイ〕イギリス陸軍戦車〔クロムウエル巡航戦車〕〔シャーマン  
 ファイアフライ〕ナチスドイツ陸軍戦車〔パンター〕〔ティーガーII〕アメリカ陸軍戦車  
 〔M4A2 シャーマンIII〕〔M26 パーシング〕……。第二次世界大戦期に存在した  
 過去の亡霊たちが、現実に蘇って来ていたのだ。

歩兵部隊の指揮官と思しき兵士の合図により、チャレンジャーIIの55口径120mm  
 ライフル砲と歩兵部隊の対戦車兵器カールグスタフ、TOW、ミランが一斉に砲火を放ち、敵の旧式戦車群を次々と  
 気持ち良い位に爆散させていく。70年を超える時代と技術の格差は絶対的であり、こ  
 の一方的な戦果は極々当たり前であった。味方車両の残骸を掻き分けた〔クロムウエル  
 巡航戦車〕〔ティーガーII〕がチャレンジャーIIへ砲撃しても、一切の有効打を与えられ  
 ず、反撃での発砲で数両ごと串刺しに貫通し過去の亡霊戦車が爆散する様は、よくでき  
 た映画の様であった。

「……………これが、そうか」

「Yes, sir. . . . By this attack, the local defense corps was destroyed」

そして、その一方的な戦闘にて優勢を保っているイギリス陸軍に対して監視カメラが映し出した映像は、カメラの視覚外から一瞬で飛来した何かが、防衛に当たっていたチャレンジャーIIに直撃し、文字通り弾け飛んだ光景であった。

「. . . Is there not a mistake in radio gun? When think from a picture and a report probably」

「映像と報告から考えると、恐らく」

一瞬の不可視の矢により防衛戦の要であるチャレンジャーIIが爆散した事に合わせ、後方から飛来したイギリス陸軍航空隊所属の攻撃ヘリ部隊の援護の元、民間人の脱出に成功したイギリス陸軍防衛部隊はそれぞれ生き残っていた大多数のイヴェコ。Iveco. Light Multirrole Vehicle. Piraanha. L M V と先年導入が始まったばかりの新鋭戦闘車両であるピラーニャVに搭乗し、過去の死神からの命がけの逃走を開始した直後、画面を埋め尽くす無数の砲弾が飛来する場面を最後に、監視カメラの映像は流れ弾でも命中したのか唐突に砂嵐を映し出したのを最後に、沈黙した。

所属不明の超大型強襲揚陸艦……正式名称：ウイルキア帝国軍第一特別強襲艦隊旗艦  
【超巨大双胴強襲揚陸艦 デュアルクレイター】。欧州連合軍、もつと言えばイギリス軍  
がその怪物を認識したのは、イギリス現地時間での早朝5時頃。大量の艦載艇を解き放  
ち、火炮を蓄えた白銀の飛び魚の群れがスカパフローを目標して突撃しているデュアル  
クレイターを艦娘とイギリス空軍の偵察機とレーダーで確認するが早いか、イギリス軍  
は一切の躊躇なく全力での迎撃を開始し、イギリス政府も大陸側の同盟国に応援を要  
請。先人達の積み重ねた歴史と栄誉を穢す事無き、御手本の様な即応体制であった。

だが、今回ばかりは相手が悪すぎた。イギリス海軍の艦娘は、スカパフローより出撃  
出来た艦娘や通常艦艇は艦載艇の雷撃により艦体の大部分を穴だらけにされて大半が  
爆沈、一部は回避運動と被雷でのた打ち回りつつも雷撃の網を抜け出した直後に突入を  
仕掛けたデュアルクレイターと接触。圧倒的な速度と質量差により衝突した物体は、駆  
逐艦は元より、戦艦や正規空母であつても例外無く海の藻屑と消えた。引き裂かれた一  
部の残骸が未だに波間に浮かんでいるが、デュアルクレイターにとっては身に纏わりつ  
く海藻や木屑程度の物だった。

【実質戦闘時間30分弱で  
僅か一時間と経たずにスカパフローに駐屯していた部隊は、侵入してきた艦載艇と

デュアルクレイターの砲撃で無差別かつ平等に鉄屑にされた。イギリス海軍の通常艦艇と艦娘が次々爆沈する中偶然オークニー諸島とスコットランド本島間を航行していたフェリー数隻も巻き添えを喰らい、多数の民間人ごと爆沈している。入念に撃ち込まれた40・6cm砲や艦載艇の集中雷撃を受けて生存可能な艦艇は通常存在せず、生存者も奇跡的な例外として十数名生存していた物以外は確認されなかった。

「友軍の状況は？」

「…… The French military made a definite promise of the dispatch of an aviation corps and the battleship corps. 航空部隊並びに戦艦部隊の派遣を確約しました。ドイツ軍は、航空部隊のみです」

「……クラウツ共は一体何を考えている？」

「It will be still the feeling of other people's affairs. 今なお他人事の気分なのでしよう。」

「I merely want to no longer reduce one's poor marine force. 単に自分の乏しい海上戦力をこれ以上削りたくないだけかと」

「…… 全く、ジャガイモ野郎共は、

「I think this as soon as an unexpected situation happens. 想定外の事態が起きるとすぐコレだ」

スカパフローに加えてスコットランドも深海棲艦とは質も量も違う兵器によつて破壊され続ける中、イギリス軍の救援要請に対して元々神出鬼没な深海棲艦相手の戦闘で唐突な出撃に手慣れていたフランス軍が即応し、艦娘はリシユリユー級戦艦、重巡洋艦、また亡命ドイツ艦娘のグラーフ・ツエツペリンやプリンツ・オイゲン、通常部隊ではラファールやミラーージュと言つたフランス製マルチロール機をブリテン島に派遣した。戦争慣れのフランク騎士の末裔として恥じない面目躍如の動きであつた。

その一方で欧州強国の一角であるドイツ連邦共和国は、比較的動員が早い航空部隊は兎も角、水上艦艇に関してはキールから出撃する事は無かつた。ドイツ軍部と政府首脳陣の反目の結果とも言われているが、単に自身の艦艇喪失を恐れただけでは無いかと、関係国からは確信染みた邪推をされている。ドイツ艦娘を迫害したが為に現在ドイツ国内には艦娘は一隻たりとも存在せず、通常艦艇の建造も順調では有るが時間がどうしてもかかる為数量的には現状50隻にも満たないので、仮にドイツ海軍艦艇が来られても邪魔にしかならなかつたと言う説も有るが。

「Communication that I transferred the authority in our military from a general  
 a French military became available  
 一将軍、フランス軍より指揮権をわが軍に  
 委譲するとの通信が入りました」  
 Thank you. Then, to them  
 「有り難い……。では、彼らには……」

自軍の戦力動員状況とを鑑みて、フランス軍、ドイツ軍の援軍を何処に配置するのか、少々投入場所を脳内で検討した将軍から紡がれる筈であった次なる言葉は、唐突に視界がブラックアウトした事によりかき消された。

「……?!<sup>What</sup>なんだ、何が起<sup>What</sup>こつた!?!」

「システムダウン……<sup>System down</sup>現在<sup>I am</sup>復旧<sup>restoring</sup>中……<sup>now</sup>一不味いです、全システムがハッキングさ

れています<sup>Then</sup>《All bad systems are hacked》!!」

「なら、今<sup>Now</sup>すぐ統制<sup>regain control</sup>を取り戻せ!」

「……駄目<sup>No use</sup>です! 完全<sup>I was</sup>に奪<sup>completely</sup>われ<sup>robbed</sup>ました!!」

照明が前触れも無く消え、室内のPC全てが一瞬でブルースクリーン化からの存在しない言語のアルファベットが流れ出して一切の操作を受け付けなくなり、空調すらも停止した地下の騒めきは、時が経つにつれて静かになっていった。少しずつ、少しずつ……。

「……ふん。何とも脆弱なセキュリティ対策だ。加えて、陸上兵器に関しても質は甘く見積もつて漸う及第点としても数が極度に少ない。この世界の欧州軍は戦争を知らない情弱揃いか」

そう嘯く、白銀のシヨートヘアと白色の釣り目が特徴的な長身美女。水で作られた彫像が動き出したと言つても違和感が無い色白さで冷厳な雰囲気を漂わせる彼女の名は『超巨大双胴強襲揚陸艦 デュアルクレイター』。自身の想定されていた建造目的である『単独強襲による敵重要拠点の破壊と占領』に違ふ事無くスカパフローとスコットランドの軍基地を完全に破壊し、一時占拠後各種情報を略奪した彼女は、一度陸上戦力を含めて海上に引き上げていた末に、今度はブリテン島南部への攻略に移行していた。

「……羽虫が。落ちたいのならば勝手に海に突つ込め」

彼女が座るC I C 艦長席のモニターに映つたイギリス艦娘の艦載機部隊を一目でその嘲笑し、自身の双手に収まるタブレットに視界を向ける。速力も遅く、機動性も低いレシプロ機如きに、注意を向ける価値は存在するはずも無かった。火力に関しても、2

0 mmですらない7・7 mm機銃のシャワー等、小雨よりも脅威ではない。

「……航空部隊の損害は中々、と。だが許容範囲では有る以上、問題は無い」

そんな些事よりもデュアルクレイターが着目していたのは、ブリテン島と対岸のフランス本土から飛来したイギリス王立空軍とフランス空軍が放った。<sup>Torنادو</sup>「トーネードGR4」<sup>Lightning II</sup>「F-35B」<sup>Royal Air Force</sup>「RAFアール」<sup>Mirage</sup>「ミラーージュ2000」の性能であった。因みに「F-35B」はイギリス王立空軍がアメリカから戦時プラス同盟国価格と  
言う事で割引された機体が供与、レンドリースされている。そうしないと価格高騰の為にイギリス単独では部隊配備が何時まで経っても追いつかないのだ。

「直接の空戦では、機動力と耐久力も含めて「シーハリヤー FA-2」が敵機より優位。その他爆装VTOLや攻撃ヘリでは損害過多。此処まではある程度予想がついていたが、まさかあんな物があれ程の働きをこなすとは想定外。これは大きな収穫である」

唐突な急襲により欧州軍重要拠点であるスカパフローのみならず、ブリテン島の市街地や民間人にも砲爆撃により被害が出ている事に怒り心頭な英仏空軍部隊で有ったが、



彼等の怒りの鉄槌が叩き付けられるハズだった正体不明の強襲揚陸艦が吐き出す車両と航空機は、この世界の常識を遥かに逸脱し切った代物揃いであった。

「……丁度良い。奴らでもう一度性能評価試験を行うか」

「司令部、司令部。此方ウィングス1。」

「応答せよ。」

「司令部、司令部、応答せよ。」

……

「クソっ、やられたか……!」

「隊長……!」

「……ウィングス2から4。機体の状況は?」

「ウィングス2。The situation of the body. ミサイルの至近弾が一発ですが、

but the battle continuation is possible 戦闘続行は可能です」

「ウィングス3。Some tail assemblies vanished by accident but are alright 機関砲によって尾翼が少し吹き飛びましたが、まだまだ大丈夫です」

「ウィングス4。The near hit of the anti-aircraft gun grazed it 対空砲の至近弾が掠りました、が、

but does not have any problem 問題ありません」

在英米空軍駐留レイクンヒース空軍基地第48<sup>th</sup> Fighter Wing 戦闘航空団所属のF-15C戦闘飛行隊。スカパフローとスコットランドに巨大艦が襲撃したとの一報を受けて、英仏空軍と共に出撃したイーグルドライバーの彼らは、外見上は共に戦闘行動をとった事のある、若しくは知識の中に存在する兵器と遭遇し交戦。乱戦の未散り散りになっていた。

『Captain, one guy anything else anything.』  
 『隊長、一体奴らは何物何でしょうか?』

「……俺の方が聞きたいわ」

敵部隊の構成は、様々な意味で狂っていた。対空車両には〔試製対空戦車 ソキ車〕  
 『オストヴェイント』〔M19対空自走砲〕と言った第二次世界大戦頃の物が存在している  
 かと思えば〔87式自走高射機関砲〕〔LFK NG〕〔NASAMS〕〔MIM-104  
 ペトリオット〕と言う21世紀現代の兵器が平然と並走、鎮座している。戦車に関し  
 ても、〔M4A2 シャーマンⅢ〕〔ティガーⅡ〕の後方や隣接して〔M1A2  
 エイブラムス〕〔90式戦車〕〔チーフテン〕が多数存在していた。

上空から見たその異様な光景に暫し茫然とした臨時編隊を構成する英米仏航空隊  
 だったが、その彼らに襲撃を仕掛けた航空機はある種地上車両よりは未だ統一感が有つ

た。と言つてもV T O L系統機とヘリコプターと言うだけで有つて、各種ハリヤーと共に「Y a k - 3 8 M フォージャー」も多数空を舞つていゝと言ふ意味の分からなさだつたが。

「例え相手が変わり誰で有つたとしても、  
There is not the change for our duty even if there was a partner in anyone.

俺達の任務に変わりはない。行くぞ！」  
Here we go.

『ウイングス2、了解』  
Wings 2, Roger.

『ウイングス3、了解。それじゃ、キルマークを獲得しに行きますか！』  
Wings 3, Roger. That's it, do you go to get a kill mark?

『ウイングス4、了解。それとウイングス3、言つておくがそれで  
Wings 4, Roger. It means wings 3, but thinks that a familiar shop

馴染みの店が割引してはくれんと思ふぞ』  
does not give it in it at a discount

地上部隊からの支援は、潰しても潰しても湧く大量の敵装甲車両の攻撃によつて行える状況に無く寧ろ悲鳴の様な支援要請が飛び交う状態であり、近隣のレーダー施設等の軍事施設も、敵装甲車と航空機による強襲、そして事実上想定されていなかった戦艦砲クラスの大口徑艦砲射撃によつて灰燼に帰しており、現代の防空戦では通常あり得ない電子戦機や基地からの支援の無い戦闘機隊単独での戦闘を強いられた彼等だつたが、士気は極めて高かつた。

『……タリホー！敵機確認！』  
 「敵機は、日本国籍表示のハリアーか  
 ……レーダーロック。  
 Fox Two! Fox Two!」

再度戦闘空域に突入直後に眼前に捉えた敵機に対し、躊躇なく自機の持つAIM-9 サイドワインダーをどてつばら目掛けて二発叩き込むウィングス隊の隊長機。標的となった「AV-8B」ハリアーは狙われたと悟るや否や持ち前の機動性を活かして反転降下、回避運動に持ち込むとするが……

「馬鹿が。次に飛ぶ時はもう少し周囲を見渡すんだな」

回避運動の為に降下したビル群一棟の屋上には工事の為か組まれた足場が有り、このままでは頭から足場に突っ込む事になる為に急速に速度を落として強引な機動で再度転回しようとした「AV-8B」ハリアーの脳天にEagleの爪が直撃し炸裂。操縦席が完膚なきまで破壊された日の丸ハリアーは、力尽きたかのように機位を立て直す事も無く足場を突き破り、様々な鉄骨等と共に墜落していった。

『Nice kill! Captain!』  
 『ナイススキルです、隊長！』

「俺を見ている暇があるなら敵機を落せ！」  
 It is shot down if care less  
 油断していたら撃墜されるぞ!!」

基本的に双発制空戦闘機としては、冷戦が産み落とした怪物たるF-22を除けばトップクラスであるF-15Cであれば、機動性は兎も角設計の限界から積載量や加速力で劣位を強いられるハズであるVTOL機。本来この二機種が激突した場合F-15Cの圧勝なのだが、そうはならなかった。

まず、敵機のVTOL機は異常に堅固だった。AIM-9 Sidewinder や AIM-120 Advanced Medium Range Air-to-Air Missile A R A A M 一発では直撃しても撃墜出来ず、M61A1 20mm バルカン砲での攻撃も航空機のウィークポイントである筈の主翼や発動機に命中しても平然と飛行していた。一方の英仏米空軍機は一撃被弾すれば、余程運が良く無ければ翼か発動機、操縦席を砕かれた。

そして、地上では幹線道路を埋め尽くす勢いで雪崩れ込む敵戦車によって緊急展開した英国陸軍部隊が次々と通信不能へと陥り続ける様に、空でも先述した異常に硬い航空機が雲霞の如く飛び交い続けていた。その数は増える事は合っても減少する気配すら見えず、次々と弾薬切れになった末に撃墜される味方機が続発していた。ウィングス隊

が何とか今まで生存していたのは、ハッキリ言つて運が良かった部分が大きかった。

「Goddamn It is over come if the same Does the relief have not yet come  
クソ！このままで押し切られる！ 救 援 は 未 だ か ！？」

「…… 聞こえるか、」

「前方のイーグル部隊！」

「It is the 71st battle air wing of this one Luftwaffe I came for relief  
此方ドイツ空軍の第71戦闘航空団だ！ 救援に来た！」

ウイングス隊長の嘆きに呼応したかのように、その混沌としたブリテン島に乱入して来たのは、ドイツ連邦共和国空軍ヴィットムントハーフェン航空基地所属のユーロファイター タイフーン戦闘機隊。性能や価格面で色々言われる事の多いこの機体だが、それでもこの状況では心強い援軍には違いなかった。

「It is consider able tardy but thanks for relief The present status  
相 当 な 遅 刻 だ が 救 援 感 謝 ！ 現 在 の 状 況 は ……」

「Captain Enemy aircraft dominate  
隊 長 ！ 敵 機 正 面 ！！」

「?!」

部下からの警告とほぼ同時。ウイングス隊長機の機載レーダーAN/APG-82(V)1に突如複数の光点  
が瞬き、ほぼ同時にコックピット内部の機器がミサイルロック時に発する警報音をがな  
り立てる。

「Wingss、脱出する!!」

ビル群の影に隠れる様にして、視界の端にミサイルの噴煙らしきものが見えたウイン  
グス。飛行経歴としては十分ベテランの域に入る本能にまで染み込んだ訓練が彼に  
起こさせた行動は、一切の躊躇無く乗機の緊急脱出装置を作動させる事であった。

「……畜生、対空ヘリコプターなんか想定している訳が無いだろうが……」

正常に作動した脱出装置により風防が吹き飛ぶと同時に射出された直後、ウイングス  
1の乗機に対してミサイルが命中し、爆散。機首、右翼側エンジンに命中していた事か  
ら、仮に一瞬でも脱出を躊躇し、遅れていれば、彼は肉片すら残す事無く爆散し確実に  
天に召されていただろう。

「……おほ、  
my God  
神よ」

……とは言え、それが彼にとつては最善の行動であつたとしても、現在阿鼻叫喚の通信が飛び交うこの戦場に置いては、たった一機のイーグルがどうなるうとも、戦況に對しては大きく影響を与える事は無かつた。

「Londonが……戦友が……ああ、止める、もう止めてくれ……!!」

21世紀の現代。総力戦と言葉が歴史上の物と成り果て、深海棲艦が現れても費用対効果として極めて低コストに運用可能な艦娘の存在により、通常兵器部隊は先進国軍隊旧来の運用で用いられている以上、仮に分類するとすれば物量飽和ドクトリンとも言ふべきなのか、一定の戦闘力を持つ大量の陸海空兵力を悠々と放ち続ける異形の怪物に打ち勝つのは、絶望的であつた。



「……以上が、現時点にて判明しているイギリス本土の状況となります」

「……私は軍事にはそこまで知ってはいませんが、これはつまり、イギリスは事実上本土を喪失したも同然な状況ですね？」

「現在イギリス本土を侵略している敵戦力には戦車や自走砲、航空機部隊のみで歩兵部隊が存在していませんので、多数のイギリス軍兵士が各所に潜伏していると思われるので、陥落はしておりません。制圧はされていませんが」

「欧州では比較的安全圏であった筈のブリテン島東側沿岸部からドーバー海峡方面にかけて前触れもない戦災の竜巻が荒れ狂いつつも、欧州軍側戦力の損耗により小康状態へとなっている最中、地球の裏側の島国国家では、各国務大臣や自衛軍将官らが緊急招集された上での緊急会議が行われていた。」

「これらは、やはり超兵器か」

「はい、総理。駆逐艦娘『桜風』より提供されたデータによれば、敵の正体は「超巨大双

胴強襲揚陸艦「デュアルクレイター」。我々人類が使用するミサイル系統の兵装は搭載しておりませんが、根本的な基礎性能が段違い過ぎる為に、仮に欧州に存在する全戦力が叩き付けられたとしても、撃沈する事は不可能と推測されます」

確認する様に問いかけた浅野幸喜首相の言葉に、感情が籠っていない平坦な声で返す山本蒼一海軍庁長官。想定外では無かった。既に二隻の超兵器が出現していたのだから、三隻目が出て来るだろうと言う事位は。だが……予想外だった。先手を取られたとは言えそれでも多数の戦力を叩き付けた筈の英仏軍と在英米軍、ドイツ国防空軍を主体とした欧州軍の攻撃を何の苦も無く弾き返した上に反撃で大打撃を与え、今もお煙も吹かずに悠々とドーバー海峡周辺を比較的低速で遊弋されるなどは。

この事は別に彼らが超兵器の存在を軽視していた訳では無い。世間一般には情報封鎖の為知られてはいないが、国家首脳陣クラスの関係各国の重鎮たちの多くは、以前のドレッドノート姿を衛星から覗き見ており、連動して極秘裏に渡された『桜風』から提出された多くの超兵器のデータや外観図を見て、それらの並外れた性能を知っている事は紛れもない事実だ。……だからと言って、超兵器の姿や脅威を知っているとしても、完全に理解している訳でも、適切な戦力を配置する余裕と猶予が無かったのも事実だ。

「……いずれにせよ、今回の事件が我が国に与える影響は計り知れないな」

「現地大使館では邦人の保護と共に安全地帯への脱出を継続中との報告が入りましたが、行方不明者も存在するようです。ただ単に情報が錯綜しているだけで現地軍に保護されている可能性も有りますが、恐らくは……」

「いずれにせよ、日本からでは欧州諸国は遠すぎる。邦人、並びに現地民間人の被害が抑えられる事を祈るばかりだ」

深海棲艦によつて太平洋<sup>世</sup>・大西洋<sup>三</sup>・インド洋<sup>海</sup>の主要海路が潰されているとは言え、陸路と空路、そして沿岸航路に関しては話は別である。経済的には不健全極まりないが、陸路はロシアのシベリア鉄道が活発に常時ヨーロッパと極東を行き来し、空路も安全圏であるユーラシア大陸上は当然ながら、半分孤立したも同然なアメリカ合衆国に対しては北極圏航路を用いての航路は生きていた。沿岸部を護衛付きで有れば船舶での移動も一応可能だ。平時とは比べ物にならない程危険かつ激減したとはいえ、輸出入等で民間人が各国を移動出来る程度は可能だった。巻き込まれた邦人は、今回ばかりは不運だったとしか言いようがない。

「……問題は、この強襲揚陸艦が、一体いつまで欧州で暴れ回るのか、そして移動するとすれば、一体何処なのか、という事ですな」

「防衛省と海軍庁では、このデュアルクレイター強襲揚陸艦は今暫く欧州に屯するのではないかと予測しております。現在、超兵器に関する唯一の専門家であるあの少女との間にテレビ通信を構築していますので、後に直接聞き取りする予定となっております」

何にしても、日本から見れば欧州は遠い彼方であり、直接的な影響は余り無い。一昔前ならばグローバル化により緊密に繋がっている世界経済に大打撃確実だったのだが、幸か不幸か深海棲艦との戦争で海路が絶たれた事が影響し、世界的平和を大前提としたグローバルゼーションは一部破断していた為、イギリス本土が惨禍にのたうち回る中、日本は半ば外野視点で欧州を眺める形となり、それなりに精神的な余裕が得られていた。

「総理、今回の件について野党が詳細に説明を要求しておりますが……」

「対策会議中だと通達していただろう、無視だ。……それで、今はその娘は、何処にいるのだ？」

「福井県の鯖江駐屯地です」

「……うん、着いた。有難うね、爺ちゃん、婆ちゃん」

「おう、気をつけてな」

「また来なさいな」

「はい、有難う御座いました」

「ほなな、あやはん」

「またね、くーちゃん」

里帰り兼『桜風』の休養の為最低一週間は福井に滞在する予定だったのを、移動日含めて僅か三日程度で切り上げざる負えなくなった深山満理奈と配下の可愛い艦娘御一行。海水浴からの帰宅途上でイギリス本土が超兵器の襲撃により被害が多数出てしまっているのを見てしまった以上、呑気に休養している事は許されないのが軍人の悲し

いお役目である。戦時に有給休暇など認められるはずも無い。

「……所で深山提督」

「何、『桜風』？」

「どうして鯖江の方に？ 確か石川県には航空自衛軍の小松基地が有るので、其の方が良いと思うのですが」

「まあ、鯖江の駐屯地は施設中隊が中核の後方基地だからね。でもここが一番自衛軍施設に近かったし、それに福井空港に自衛軍の輸送ヘリ、小松基地には既に輸送機の派遣が決定しているから、乗り継いで行つた方が早く東京に戻るの」

送つて貰つた深山提督の家族を見送つた後、現地鯖江駐屯地の自衛軍人の案内を受けながら、雑談を交わす。余談だが、過去に一度民間の定期便の無い福井空港を自衛軍が活用する案が一瞬浮上したのだが、滑走路が僅か1,200メートルしか無い為にジェット機の離発着は不可能な上に、延長しようにも現地住民との交渉や補償条件が纏まらず、結局現状維持のままとなっている。

「……なあ、『桜風』はん」

「何、黒潮？」

「……あー……まー、なんちゆうか、『桜風』はん……。さつきから全然緊張してへんよ  
うにしか見えへんのやけど」

通信機材の設置と調整に未だ多少の時間がかかる為に、ロビーの待合室で並んで待つ『桜風』達一行。その間に日本国の政軍官の首脳陣とテレビ通信を行う事を通達されたのだが、主に報告する『桜風』はなんの気負った様子も無く何時も通りの姿だった。殆ど外野で有る筈の黒潮の方が緊張して居る位だ。因みに鳳翔と深山提督は今現在厨房を借りて深山提督達の弁当に加えて謝礼として鯖江駐屯地勤務の自衛軍人向けの軽食を製作中だったりする。思わぬ臨時報酬に女っ気が無い男共が大フィーバーした事は想像に難くない。

「別に緊張する様な要素は無いと思うけど。以前出した報告書の内容をもう一度自分の口から言うだけだしね」

「いやいや……総理だけや無いで、大臣とか自衛軍や海軍庁のお偉方も皆みんな出て来るんやで？」

「敵艦との砲撃戦の方がよっほど緊張すると思うんだけど」

「まあ、そらそうかも知れへんけど……」

正論の様に見えてその実マトモな回答を返していない『桜風』。超兵器ヴィルベル  
ヴィント戦後の対策会議の場で、小刻みに震えていたりマイクを取り落としていたりし  
ていたあの時からかけ離れた言葉である。一体いつの間にこうなったのやら。

「……まあ、『桜風』はんが問題ないんならええわ。気張りや」

「ん……ありがと」

「……まだ時間あるなあ。せや、『桜風』はん。『桜風』はんはあの超兵器が齎した被害と  
か、どう思ってるん？」

「どうって……うーん……」

まあ黒潮が何のかんの言っても、直接応対するのは『桜風』である。軽い激励の言葉  
を掛けた後、黒潮は現在日本各地で話題沸騰たるイギリスについてへと話題転換をす  
る。戦時中モードになっている今の『桜風』にはファッションやらの浮ついた話題は通  
用しない。日常モードでも通用するかと言えば極めて怪しい事この上ないが。



「……今の所報道やネット情報で分かっている限りだと、中北部や西部に本土政府やイギリス王家、それに脱出出来た民間人の多くが逃れてはいるのは分かっている。……でも、ブリテン島は事実上陥落したも同然だろうね。首都のロンドンやスカパフローが敵戦車や水雷艇の群れに占領され、応戦したイギリス軍も悉く大敗しているだろうから」「えっと、もう既に向こうの欧州軍が頑張つて追い返しているっちゅう可能性は？」

「それは無いよ、絶対に。根本的に質も物量も火力も足りない。詳細な情報が入ってくるまでは何とも言えないけど、核兵器をいでもしない限りは『デュアルクレイター』相手にミツシヨンキルを強いる事も出来ないから。根本的に想定していないのだから、仕方が無いのだけだ」

「……なら、もし核兵器を使つたとしたら？」

「取り敢えず一度はイギリス近海から撤退を強要する事は出来るかも知れない。向こうの政治家が欧州のど真ん中に、第二次世界大戦後初めて核兵器を実戦投入すると言う決断が出来ればの話だけだ」

つまりは『デュアルクレイター』の欧州軍単独での撃退は不可能と言う事である。通常兵器では超巨大双胴強襲揚陸艦こんな相手を全く想定していないのだから質量共に絶望的に不足しており、

核兵器使用に關しても欧州各国の調整や説得以前に自国民の眼前に叩き込む事を決断出来る様な豪胆……と言うより、暴拳を許容出来る様な政治家は居なかつた。二次被害所か一次被害が直撃しかねない場所に『デュアルクレイター』が居る以上、核兵器使用は夢想でしかない。

「まあ、心配しなくても『デュアルクレイター』は暫くすればドーバー海峡からアメリカに向けて移動するから大丈夫だよ。その移動している間に欧州各国は軍や都市の再建、私たちは色々な根回しや準備をしないと行けないけどね」

「……………え？な、何で、わざわざアメリカに行くん？ちゅうか、『桜風』はん何でそんな確信めいた言い方出来るん？」

サラツと予言めいた事を言い出す『桜風』に、一瞬理解が追いつかず固まった黒潮。横から覗き込んだ『桜風』の表情は、まるで今日の夕食のメニューを言う程度の軽い口調の物であつた。因みに今日の朝飯はコンビニで買った焼き鮭具入りおにぎりとアメリカンドッグだったりする。

「んー…………超兵器の運用コンセプトを考えると、って言うのが答えの一つなんだけど」

「……なんやけど？」

少々困った顔つきで答える『桜風』が、小首をかしげて更に聞き出す黒潮に対して答えた一言。

「……一番は、私が『デュアルクリエイター』なら確実にそうするから……何だけどね」

「……『桜風』はん」

「何、黒潮？」

「怖いわ」

「なんでやねん」

黒潮の言葉を冗談と受け取ったのか、軽い口調と苦笑いでテレビで見た昔ながらの関西系漫才師見たたく手の甲で突っ込む『桜風』。黒潮も軽く笑いながら『桜風』とじゃれ合

う。関西系艦娘の代表格である黒潮に取って、こういう事はお茶の子さいさいだ。

—— さつきの『桜風』はんの眼、薄っすらと恐ろしい物が混じってた気がするんやけどなあ

そして、それなりに経験を積んだとはいえ対人経験はまだまだ少なめの『桜風』には、黒潮が考えている事の一端も読み取れるはずも無かった。

## 第四八話 暗闘

「……ジョージ。報告を」  
 「Understand President」  
 「了解です、大統領領」

アメリカ合衆国ワシントンD. C. ペンシルベニア通り1600番地。世界一有名なこの白い公宅では、深海棲艦と言う現代科学では到底解明出来様の無いオカルト極まる存在が現れようとも今なお存在感を世界に示し続けている超大国を導く男達が複数集まっていた。彼等の表情は、押し並べて一様に暗い。

「…… According to the report from NASA as for the link with the satellite of our country which stopped a function. 先日機能を停止した我が国の人工衛星とのリンクは」  
 「The aim to restore is not yet insight the other day. 未だに復旧する用途は立っておりません。」  
 「A weapon system of the whole army. 三軍の兵器システムこそ」  
 「The eyes from the space are not reliable. 宇宙からの眼は宛にはなりません」  
 「In the report from the United States European Command, 欧州軍からの報告では、

did not have the damage, 被害は有りませんでした、

現在敵超兵器『デュアルクレイター』は  
 a breakthrough now in Strait of Dover  
 行方を晦ませています。  
 plane end in failure  
 全て失敗に終わっています」

潜水艦、

敵機はドーバー海峡を突破後、  
 all the pursuit with the  
 航空機による追尾は

「……その通りで有りませす、大統領」

「……その通りで有りませす、大統領」

「……その通りで有りませす、大統領」

「……その通りで有りませす、大統領」

「……その通りで有りませす、大統領」

「……その通りで有りませす、大統領」

机に両肘を付け、口元で両手を合わせながら報告を聞く大統領。海軍に所属し、その後故郷にて州議員を大過無く勤め上げた末に大統領選挙に出馬、当選すると言う歴代でも似た様な経歴の大統領が多い過去を持つ彼は、現在重大な決断を強いられようとしていた。

「現在までに確認された欧州諸国の被害状況は？」

「……」

「……」

「……」

「……」

〔Britain Island and the damage of the coast of Strait of Dover are serious, to the harbor facilities of the coastal place are completely destroyed by bombardment and are the situation that repair work is obstructed at. The wreckage of the repair work is sinking warship debris and the sinking warship. 復旧作業が阻害されている状況です。また民間施設にも流れ弾のみならず、明らかに意図的に攻撃を行ったと思われる痕跡が……〕  
 The situation of the damage area, 被害地域の状況は、  
 by The activity of the local military and police, 既に落ち着いていきます。  
 that you calmed it exactly, 正確には落ち着かせた、  
 と言うべきでしょうが……〕

入ってくる報告全てが聞く端から耳を塞ぎたくなる物ばかりである。これら全ての事例が、一つ事を間違えれば我が愛する祖国にて巻き起こる可能性が極めて高いのである。だから、ある意味では当然である。映画等で良く描写される超大国故の楽観は、既に消え失せていた。

In addition, it is the worst report from American National Oceanic  
 「加えて、アメリカ海軍大気庁から

and Atmospheric Administration  
最悪の報告です。

……

is moving towards East Coast offing  
東海岸沖合に向かって移動中です。

"Alexia seems to take the course deviating from the East Coast mainly and  
「アレクシア」は東海岸本土から外れる進路を取るようですが、

「海が荒れる事は先ず間違いない。」  
At first it is certain that the sea is stormy.

where there cannot be the person who seems to miss at least good opportunity  
少なくともその好機を逃す様な者はいる筈が無い、か」  
And

「……Yes, sir」

泣きつ面に蜂、When it rains, it poursである。8月も終  
わりの日頃である為に、カリブ海にて発生するハリケーンがアメリカに突っ込んでくる  
のはある種の風物詩の様な物であるのは何時もの事である。そしてハリケーンによつ  
て西大西洋が荒れ狂っていると言う事は、その間に『デュアルクレイター』が進撃して  
くる可能性が極めて高い事を容易に予想させた。

数的主力であるアメリカ海軍所属の艦娘は、艦娘化した事によつて本来の姿よりも相  
当改善されては居た物の、荒天は余り得意とはしていない。台風に突入しようが平然と  
作戦行動を取ろうとする帝国海軍の方が明らかにぶつ飛んでいるだけだがその点はお  
いて置く。その様な些事等より遙かに喫緊の問題は、この荒天を好機として攻撃を仕掛  
けて来るであろう『デュアルクレイター』に対する反撃戦力の不足である。



「The present status」

「現在の状況は？」

The friend girls is full deployment finished

approximately 5,000 ships

艦娘は実戦配備済みが約五千隻

その内対超兵器戦に回せるのは30隻前後です

加えて、ノーフォーク海軍基地に空母を含め

新造艦であるジエラルド・R・フォード級空母を

6個空母打撃群が待機しています」

「……この戦力で、勝てるかと断言出来るかね？」

「それは……」

『We can do it』と、断言出来なかった。人類勢力相手であれば、それこそ暴風雨の前に

立つ障子紙の如く一瞬で敵戦力の全てを、敵の国家と歴史諸共消滅させられるだろう。

通常兵器が異様に効き難い深海棲艦相手だったとしても、少なくとも撤退戦で有れば戦

略的勝利をつかみ取れるだろう。

「……無理も無い。わが国は、否この世界に存在する全ての国家が、

cannot make effective measures except just

戦艦砲撃を装備した、

one country including Catamaran Assault ship、  
 最大速度60ノットの双胴強襲揚陸艦など、  
 of maximum speed 60 knots equipped with battle ship gun  
 ただ一国を除いて効果的な対策を立てようがない」  
 「……申し訳ありません、大統領」

人類の業が生み出した最大の切り札である核兵器と言う、この状況下で無ければまず浮かぶ事すらない選択肢も、戦場が荒天であれば話は別である。基本的に爆風や衝撃波、そして圧倒的高熱が核兵器の主な直接的ダメージソースであるのだが、強力な雨が常時吹きすさぶ状況では、その威力も容易く激減する。それにそもその前提条件として、鋼鉄の塊である巨大な軍艦に対して核兵器は相性が悪い。極論、船体深部まで破壊されなければ如何とでもなる重装甲の軍艦相手では、核兵器は表面上を消し飛ばすのがやつとなのだ。

「……となれば、我が国が取るべき選択肢は一つだ」  
 「大統領」

超大国の面子や体面等気にしては居られない。出来た汚名は雪げば良いが、破壊され、失われたステイツの街並みと多数の死者は、二度と元の形に戻る事は無いのだから。

「Tie a hot line with Japan.  
日本とのホットラインを繋げ。」

「I take what kind of concessions and calls  
どんな譲歩や手段を取つても、  
I get to my state.  
我がステイツへと呼び寄せるのだ」

「that "daughter"」  
あの『娘』を  
……

「……彼ら、今では親民党でしたか。あの者達の回復力には目を見開くものがありましたな」

「笑いごとでは無いがな。……流石に、今日は疲れた」

所変わつて極東島国日本国首都。今までもそれなりに使われていたが、ここ最近使っていない日の方が数える程度な状態の首相官邸の一室。そして集まつたのは首相の信頼が厚い何時ものメンバーであつたが、その彼等全員が言い様の無い徒労感を滲ませていた。

「忖度、だったか。私はそんな事に気を回すだけの余裕など全くないのだがな」

「民生……親民党や政社党は、この事が解決されるまで審議拒否や不信任決議案提出も辞さないと氣勢を上げています」

「何をもつて解決したと見なすのでしょうかねえ。既にあの出所が怪しい書類や証言は、調査して無かったと公表しているんですけどねえ」

事の発端は、前回の総選挙で殆どの議員が落選して解党寸前まで追い詰められるも、他泡沫政党議員や前政権与党の民生党所属だったのを、選挙前に離党しての無所属ロンドンダリングで如何にか当選した議員を多数引き抜き、掻き集めて改めて再結党した野党筆頭と自認している親民党が、先日臨時国会が始まった直後に『首相の意向により不正に自衛軍が用地を取得した』と唐突にぶち上げた事件であった。

現在の政権与党である保守自由党にとっては完全に寝耳に水で虚を突かれた中、高らかに証拠として首相官邸と関係省庁からのメール資料を公表し、民生党が徹底追及を宣言した事によって国会は見事に大紛糾し、政府首脳陣が此処に集まったと言う訳である。因みに元官僚出身の議員と引つ立てた現役官僚曰く、民生党が公表した証拠は書類様式や文言の組み合わせがおかしいとの事である。そもそもこの検案が通過したのは前政権与党の民生党時代だった上に怪文書の出処を一切明らかにしていないのだが、そ

の様な事は完全に無視している。

「それだけ自衛軍の予算増加や自衛軍の海外派遣を嫌ったのだろうか？最近は少なくなっていたとは言え、彼らは常々自衛軍向けの防衛費を削減して社会保障費を増額しろ、東南アジア諸国に駐留する自衛軍を随時艦娘のみ残し縮小撤退させろと要求していた」

「首相、今は戦時中ですよ？幾ら何でもそのような馬鹿げた考えを本当に通したがつてるとは思えません。一隻だけ例外は存在しますが、基本的に第二次世界大戦期の装備しか無い艦娘だけでは、深海棲艦以外の国防などには役には立ちませんし、そもそも今東南アジアから自衛軍が撤退したら、誰が彼等艦娘と提督を守るのですか？」

「……いやあ、案外彼等は単純に、政府をバツシングできる様な物が有ったからバツシングしているだけじゃ無いでしょうかねえ？もしかしたらでつち上げたのかも知れませんがね」

「……あんな程度の低い証拠が使えると、本気で思ってるんでしょうか？」

「彼らが何を考えている等はこの際どうでも良い。今の問題は、アメリカからの援軍要請だ」

首相の鶴の一声で、一瞬で部屋全ての空気が引き締まる。そう、今はある種の甘えで深海棲艦保との戦争前自から相変バツわらずの行動シしか目が無いリベラルを自認する一部野党の事よりも、今現在でも日米安保条約を継続している親愛なる同盟国への対応が先なのだ。決して時系列的におかしい事や後の影響を全く考えてもいなさそうな事で政権追及してくる自国議員の質の低さに現実逃避したいわけでは断じて無い。断じてない。

「山本長官。彼女からは、何か？」

「深山提督を通じてですが、本人は命令さえあれば往くとの事です。それと可能なら一つ要望があるとも」

「要望？」

「やはり、対超兵器部隊の面々を全員連れて行きたい、と。どう都合よくシミュレーションしても、単艦では確実に手が回らなくなる為……と」

首相からの問いにそう答えた山本長官の言葉を聞き、押し黙る面々。極めて真つ当な要請である。この集まりが行われる二週間前に執り行われた、駆逐艦娘『桜風』による超兵器『デュアルクレイター』に関する通信講習にて教えられた情報によれば、敵艦は砲身内径だけでなく長門級戦艦に匹敵、砲身口径だと完全にかき離れている戦艦砲や多数

の噴進砲、多種多様なヘリコプターと垂直離着陸機（ロケット、V.T.O.L.機）に加えて、多数の艦載艇を装備している事を再認識していた。

駆逐艦と言う存在で有りながら、その気になれば砲撃戦だけで戦艦を殴り殺せる桁外れの戦闘力を誇る『桜風』と言っても、流石に単独では手数が足りなさすぎる。アメリカ本国艦隊の助力が有ったとしても、余り当てには出来ない。同盟国と言えども基本的に指揮系統が違う軍隊同士な上、今もなお他艦との共同作戦が夢物語状態な『桜風』が、一度も共同訓練を行ってなど居ない艦隊との共同戦闘を行えるはずも無いのだから。

「正当な要望だな。全く持って、否定する要素など無い」

「そうですね。……政治的な問題以外では、ですが」

そして、軍事的正当な要求は内政的事情によって大概潰されるか歪められるか実行するにしても無駄に時間がかけられるのがこの島国の恒例行事の様な物である。今回も、その例から漏れる事は無かった。

「臨時予算案が通過しない事には、自衛軍の艦隊や人員の増員は望むべくも無い。『桜風』（彼女）から得られた技術情報の解析にも更に予算と人員が必要だ。そして新たに海外

派遣するには国会審議を通過させなければならぬが、今の様子では何時になるか……何処かが動いたかも知れん」

「それに付きましてですが、外務省からの情報です。今までも外交官等を通じて我が国に様々な接触や交渉が密かに行われていましたが、最近はその更に顕著となつていきます。それこそ、怪しまれる事も恐れずに」

「火元はそこか？」

「いえ、寧ろ鎮火に躍起になつて居る様子です。向こうさんとしては、現状では国内統制が出来ればそれで一先ず収まる気はある素振りを見せています。無論、我が国がどうしようもない程に大きな隙を見せれば、遠慮なく動く可能性も有りますが」

「少なくとも我が国に深海棲艦が上陸でもしない限りは、向こうが動く事は無いだろう。あの国は本来巨大すぎる国土を統治する為に内向的だ。それに燻る火種も外からですら少なからず見受けられる。今は国内に注力したいだろう、かの国も」

「では、間接的同盟国殿の可能性が？」

「それも無いだろう。そもそもそれだけの影響力も金も既に尽きている。今更何某の行為が出来るとは思えん」

通常、民族存亡の危機を賭けた戦争の最中に反戦等を唱えて妨害をする様な者は大概



他国と誼を通じているか決して曲げられない信念の持ち主であるかのどちらかで有るのだが、調査と考察の結果前者の可能性はかなり少ないと判断された。ある意味当然である。装備が第二次世界大戦期限定とはいえ数百隻もの軍艦を保持し、東南アジア諸国と友好関係を保ちつつ軍隊を進駐させて市場とシーレーンの多くを防衛し、尚且つ通常軍備でも防衛戦限定だが侮れないだけの物を持つ日本に喧嘩を売る位なら、籠が緩みだした広大な国内の統制をする方が優先事項である。

感情的問題で日本と半分袂を別つた結果、効率的輸出入が出来ず大して時間もかからず経済も政治も何もかも勝手に崩れ去った隣国も居るが、その様な国家が強固な軍事力と経済力を未だに保有している日本相手では完全に分が悪い所の話では無かった。崩壊されては困る為に行われている日本からの財政、物資支援に対して『もつと寄越せ』と抜かす厚顔無恥さだけは相変わらずだが、事実上それだけに終わっていた。国内の政争で忙しいらしい。

「……となれば、今回は純粹な、我が国の野党議員による行動と判断するしかありませんな、総理」

「だろうな。……一応聞くが、理を論じて彼らが心変わりをする可能性は有るか？」

「総理……そんな殊勝な心掛けが彼らにあったら、私たちはこんな苦勞はしていないで

しように」

若手から拔擢された閣僚一人から飛び出た遠慮無用の一言に苦笑いを浮かべる面々。こういう若さを持った人間が居る事は大事である。主に淀んだ場の空気をかき混ぜ、時には発破する存在として。

「既に親民党は不信任決議案並びに防衛大臣に対する問責決議案の提出を宣言しています。どう足掻いても親民党やそれに類する党の議員数では騒ぐ以上の事は出来ない事は分かり切っていますので、確実に廃案狙いの時間稼ぎでしょう」

「同盟国のアメリカがどうなっても良いと言っている様な行動なのだがな」

「……前回の選挙で多数の議員が落選した影響で、現在の親民党の議員は、えー……日本軍は日本列島から出てはならないし強大になる事は絶対許されないと云う強固な信条を金科玉条としている者が多い様子です。耳障りの良くて大きな声の持ち主は兎に角目立つと言うのは世の真理ですね」

「その声で良し悪しは別として何かしらの代案を出してくれるのなら多少は我慢出来るのですけどね」

「……ふむ、溜まっているのか？若人」

「……はい、正直に言えば。現状野党側で真面目な論争を行つてくれる貴重な存在である改進黨の質問時間を無視して騒がれた時は、怒鳴り付けられる物ならば怒鳴り付けたかったです」

「えー、そろそろ愚痴の応酬になりつつありますし、本題に戻りましょうか」

総理との会話に水を差す財務大臣の一声でハツとなつた若手閣僚は、場の皆に陳謝しつつ面持ちを本来の物へと立て直す。総理や保守自由党の重鎮に取り分け目を掛けられ、年功序列を多少無視して閣僚の座に就いただけあつてエリート官僚が犇めく省内を良く統率しているのだが、時間を必要とする場数と経験不足だけは流石に如何ともし難かつた。表では付け込まれる様な隙を見せて居ない点は立派であるが。

「この際臨時予算案は後回しにしましょう。最優先で行うべきは深山艦隊のアメリカへの派遣です」

「ですが、正攻法では法案通過が何時になるかは全く分かつた物では有りませんが……。敵艦がアメリカ本土に來襲するのは時間の問題です、こうなつたら観戦武官か人事交流等の名目で派遣すると言うのは……」

「それはそれで不味いのではないか？ そう言つた裏口的手法は、一度前例を作つてしま

えば確実に悪用しようとする目論む輩が出て来るだろう」

「加えて法的な問題もあります。正當な手番を踏まずに行われた戦闘行為が国内に知られてしまうと、政権への打撃は計り知れない物が有ります」

「ならば王道で行くより他無い。可能な限り短期間で押し通す」

「……それしか有りませんね」

疲れ切った表情の浅野首相の眩きに、物憂げな表情で財務大臣が応える。王道に勝る詭道無し。現在の保守自由党が衆議院、参議院共に議員数が過半数を占め、尚且つ保自党に協力的で有りながらも政策論争を真面目に行う新興政党である改進黨等の現状を認識している少数野党の賛成票も見込める。

「各党に協力を要請する。現在機密指定されている超兵器関連の情報もある程度なら流して構わん。どうせ何時かは公表する情報だ」

「了解しました。親民党や親民党に類する党へはどうしましょうか?」

「一応話だけは通して置こう。機密情報は不要だ、体面だけは整えておけばそれでいい。協力するのならばそれでよし、そうでなければ放っておく」

深海棲艦との戦争でプライドや自負等の様々な物を容赦無く叩き砕かれ、国民からの支持も選挙で多数議員が落選すると言う形で突き付けられた過酷な現実と言う辛酸を舐めた結果、実行力は別として兎に角妥協を一切知らない突き抜けたイデオロギーを纏った親民党やその思想的同類がそう易々と保自党との妥協、協力体制を構築出来るとは、この場にいる誰一人として考えていなかった。今までがそうだったのだから。

とは言え、如何に面倒極まりない主義を掲げた者達で有っても、彼らは正当な手続きを経て国民から選ばれた議員である。例え現実在即していない主張を繰り返していたとしても、その主張を支持している国民が居るからこそ選挙で当選している。戦争中である民主主義国家の政権としては、少なくとも筋だけは通す積もりだった。

「……あの、総理……今入った情報によりますと、親民党議員が反浅野政権デモに参加しているとの報告が……。先程の国会審議中にも複数が国会外で憲法九条復活デモも行っていた様子です」

「……どう思う」

「駄目でしょうな」

尚、相手がその筋や政治的メッセージを理解したり受け取るとは限らない。

草木も眠る丑三つ時。昼間の喧騒も掻き消えた港灣施設に掛かる闇の帳を駆ける迷彩柄。時代劇の様な古臭さは無い、現代的に理に適った暗視迷彩を着込んで監視カメラが投げかける眼の隙間を掻い潜り、一息で壁を駆け上がり物陰に隠れ潜むその姿は、明らかに不審者だった。

「……………つ」

「うー……………うーちゃん眠いぴよん……………」

「……………眠くても、がんばろ……………仕事だから……………」

「……………ふっ……………ん、うっ……………！」

「ぴょーん……」

迷彩柄が音も無く地に伏せた数瞬後に、懐中電灯を持った二人の少女がすぐ脇の道を通る。此処深山艦隊のみならず、艦娘が多数所属する鎮守府では基本的に人間では無く艦娘が妖精さんによる警備が成されている。これは人件費削減の為では無く、艦娘と妖精さんと言う極めて特殊な存在が多数籠る鎮守府内に提督以外の人間を混ぜ込んだ場合の化学反応を恐れた民政党時代の前政権の命令が、何となくそのまま続いている為であった。

人件費削減云々は兎も角として、この艦娘や妖精さんによる鎮守府警備は、案外現場の者達には不評では無かった。元々殆どの鎮守府には多数の艦娘が所属しているのので、深海棲艦との戦闘による損傷等を考慮した上でローテーション制を取る事によつて、艦娘に無理のない警邏が行えていたのだ。鎮守府によつては提督以外の人間異物を侵入させたがらない為、と言う噂も有るが、あくまで噂で有り、公式にはそういう事例は確認されていない。

「……マルフタヒトゴ。異常無し」

「弥生いー……何か、寒、寒いぴよ……ふあ、ふあ……」

「…………くしゃみ、止まった？」

「…………止まったぴよん。…………弥生、早く行こう？」

「…………うん。…………そうしよう」

曇り空で月明りも皆無な夜道を照らすのは、僅か二本の光の帯と所々に設置された街灯のみ。日も高い日中ならば容易く見つけられる違和感も、夜中かつ不確かな照明、そしてどうせ大丈夫と言うルーチンワークによつて熟成された馴れの前では、音も無く叢に潜む迷彩柄の不審者を発見するのは至難の業であつた。加えて、この睦月型駆逐艦娘は陸戦関係の訓練など一切受けて等居ないのだから、闇夜に潜む侵入者を発見するのが土台からして無理な話であるのだが。

—— 1…………2…………3!!

桃色と銀髪の子供達が立ち去つた瞬間を狙い、工廠に向かつて疾走する迷彩柄の侵入者。その動きに迷いは無く、一直線に出撃ドックへと突き進んでいった。



——— 良し、此処まで来れば……！

暗がりの物陰から周囲を見渡し、見張りが居ない事を確信した侵入者。工廠にも監視カメラが設置されているが、これ等は盗難防止が主目的である為に指向方向が若干ドック方面から離れている。それに侵入者の目的上、此処まで来れば監視カメラに映ろうとも問題なかった。警報を聞きつけた警備の者が殺到する前にやるべき事をやるだけなのだから。

「H e y、そこまでデース!!!」

「?!」

快活な似非日本語と共に、前触れなく工廠の出撃ドックに灯りが煌々と光り輝き、尚且つ何処から引つ張り出して来たのか探照灯すらも複数用いられて、侵入者を照らし出していた。突然の出来事に、侵入者も一瞬だけ硬直するもすぐさま冷静に周囲を見渡している。

「全く……アンタねえ」

そして、周囲を取り囲む群衆の中から割って出て来たオレンジ髪の少女。その姿を見た途端、侵入者はそれまでとは打って変わって動揺し、目に見えて忙しく全方位を見遣り続けていた。身体の動きとしては、パントマイムと阿波踊りに右足を軸にしたコンパス回転が合体した様な滑稽かつ風変わりな姿である。

「ねえ」

「はいいー!?!」

少女の一言に、文字通り直立不動となる侵入者。余りの変わりように、包囲している妖精さん達や艦娘が苦笑していた。一部はツボにはまったのかお腹を抱えて大爆笑している。

「勝手に出撃とかしない様にとって……お姉ちゃん、言わなかった？」

「いや、えっと……その、はい、あの、その………言っていました。ごめんなさい」

腰に両手を当て、幼児に言い聞かせる様に前屈みになって侵入者……  
川内式特定条件激型暴走艦  
 駆逐艦娘『桜風』を圧迫し、軽く首を傾げ目を細不めた冷たい目線火と呆れ顔で問いかける  
 オレンジ髪……陽炎型駆逐艦の長女たる陽炎の言葉を前には、如何な『桜風』と超下級ロケット艦言  
 えども、身を縮こまらせて眼を逸らす以外の行動は、取りようがなかった。

「やっちやいましたねー」

「そうデスネー」

保護者陽炎によって大人しく引つ立てられていった侵入者桜風を見送りながら、そう呟く二隻  
 の艦娘。一隻は深山艦隊唯一にして最強のウーマンスマメディア、重巡洋艦娘の青葉。  
 似非日本語で答えたもう一隻は、日本艦娘では貴重な高速戦艦の一角である金剛。今回  
 の騒動に置いて、金剛は偶然警邏任務に就いていた為に工廠での指揮を執り、青葉は『桜  
 風』がコッソリ駆逐艦『桜風』の艦内から夜間迷彩柄の衣服を持ち出したのを発見して、  
 今回の騒動の台本を書き上げた実質的黒幕である。勿論深山艦隊で発行する週刊青葉  
 新聞に今回の事は包み隠さずに流す予定だ。

「……Bad、『桜風』のfeelingも、分からないでも無いネー」  
 「……そうですね」

工廠の屋上から見える、連行中でも陽炎に加えて不知火や黒潮に囲まれてしよぼくれている『桜風』の姿に、二人の眼には呆れが混じりながらも、隠しような無い同情の思いが垣間見えていた。『桜風』がこんな強行突破を仕掛けたのも、横須賀に福井から帰投して今の今まで一度も出撃出来ていなかったせいなのだから。

「提督は、何か言っていましたカー？」

「海上保安庁などの関係省庁には既に一報を入れているから、もう暫く待つて欲しい……ですね」

「ソレThree days agoにも言つてたネー」

「対応が難しいんでしょうから、仕方が無いと思えます。砲雷撃すれば良い相手でも無いですから」

「Hey、青葉ー。あんまりそう言う事はYou must not sayダヨー」

自衛軍のヘリコプターと輸送機で北陸から横須賀へととんぼ返りした『桜風』と深山

提督たちは、帰投して即時『<sup>深</sup>デューアル<sup>海</sup>クレイター<sup>艦</sup>』<sup>沈黙させて</sup>戦<sup>R</sup>に向けての演習<sup>u</sup>をやるうとした『桜風』を引き摺って強制的に休<sup>沈黙させて</sup>ませてから、不在時の艦隊の状況把握や書類整理、そして予測される対米派遣に備えた関係各所との打ち合わせ等を行う予定であった。

そしてその予定は、帰投してより即座に破綻した。国会での親民党等のリベラル野党のやらかしと連動したのか、反軍、反政府運動を謳う市民団体の活動が活発化して深山艦隊の所屬地にもかなりの数のデモ隊が多数流入していたのだ。と言うより数的には殆ど狙い撃ちであった。現在緊急配備された地<sup>元</sup>警察や他県からの応援に加えて水上警察や一部では海保すらも出動している。安全が確保されている海域だからと言って、手漕ぎボートや小型船舶を持ち出して抗議活動されたら排除するしかない。

「Bad、People<sup>町</sup> of the<sup>た</sup> town<sup>ち</sup>は私達を<sup>Support</sup>応援してくれているネー」  
 「本当に、嬉しいですね。昨日も、漁協の人たちがお魚を納入してくれた時に応援してくれましたし、市長さんや市議会の議員さん達も、可能な限り色々と手を回してくれるぞうです」

「A<sup>情</sup> kindness<sup>け</sup> is<sup>は</sup> never<sup>人</sup> lost<sup>の</sup> デース！」

勿論深山艦隊の周囲全てが敵になった訳ではない。と言うよりも基本的に味方だからである。横須賀鎮守府第3海上部隊『深山艦隊』が開設されてから、深山満理奈は周辺との関係構築に心を砕いて来た。そして戦力が増強されても尚継続し、或いは強化し続けていた結果、近隣地域との関係性は文字通り切っても切れない間柄にまで昇華されていた。

漁協組合からの護衛要請に一も二も無く答え続け、又組合へ鎮守府への魚介類納入を依頼した事によって漁協組合と漁師は確定収入と安全な漁業領域を確保し、近隣の市街地には非番の艦娘が遊びに行き、眉目秀麗な少女たちが活発な消費活動が行われる事で良性の経済効果が多数発生した。勿論利益だけの関係性では無く、交流が深くなるに連れて深山艦隊の艦娘はまるで地域全体の娘や妹、又は姉やアイドルの様な存在になっていった。昔風に言えば『オラが街の艦娘さん』である。

「でも『桜風』さんでは有りませんが、一体何時になったら出撃許可が下りるんですし、うね？早く新兵器の練度を上げたくて仕方が無いんです」

「……青葉、本当は一番Excelsive angleデース？」

と言つても、現在抗議活動に参加している連中の車両は悉く県外ナンバーである。市

議会が持つ権限では対処が難しいし、今回の騒動を主導した団体に抗議文と公開質問状を送付したら怒濤の勢いで市の公式サイトや受付が長時間潰れる程の猛抗議の嵐が飛んできた位である。安全確保は出来ない為の措置として、艦娘が外出出来ない為の眼に見えた消費活動の停滞やかなりの人気を誇る艦娘の那珂達によるコンサートの無期限中止にネットや関係各所で激怒の暴風が吹き荒れているが、そんな物は彼等には関係の無い話である。

「青葉、早く出撃したいなー。出撃して、深海棲艦を粉微塵にしたいです」

「Hey青葉、さつきからSuper Character Breakデース?! 何時ものEasygoing青葉はWhere did you go too!?!」

似非英語の元気娘と取材大好きマスメディア系女子の掛け合いも、何時もより静かになった鎮守府の闇夜に消えていく。まるで、艦娘皆が感じている言い様の無い憤りと未来への不安を表すかのように。

「どう思う?」

「誘導された末の暴走かと。軍や政府の動き、人気を心底嫌う者共に金と火種を送り付けられ、後は野火の如く勝手に燃え散ります。傀儡師の糸も焼く野火の様でしたが」

「ふむ、そうなるか」

「……で、どうするのさ。全部ばら撒く?」

「泳がせるのが最善、最良でなくとも現実的。望み薄なるは重々承知なれど、この理性無き愚者共に関わる時は不毛と信ず」

「まー確かに。面倒くさいからなあ、此奴ら」

東京某所のとある地下駐車場。車も疎らなこの場所に、一人の壮年、一人の女性、一人の青年が居た。帽子や眼鏡等で外見を変えていた傍らには、近年深海棲艦との戦争によって自然発生した自主的儉約によって製造が減少の一途を辿りつつあるとニュースで流されている高級セダンが有った。運転席には口をガムテープで塞がれ、両手を縛られた男が居るが。



「ならば解放か」

「はい。最早この男に価値は有りません」

「……だつてさ。良かったなオッサン」

そう言いつつ、青年が運転席に縛り付けられた男を開放する。口のガムテープを剥がすのがやけにぞんざいなのは気のせいでは無いだろう。

「うぐつ……お前ら、こんな事をしてタダで……」

「黙れ」

男の抗議を遮る女性の声。反応する余地すら与えられず、逆手で何の拵えも無い短刀を喉元に突き付けられれば、どんなお喋り小僧でも黙らざる負えないだろう。

「もう貴様は不要だ。何処へでも去れ」

「……っ、絶対後悔させてやるからな!!!」

お約束ともいえる三流三下悪役のセリフを吐いて、セダンを急加速させて地下駐車場

から逃げ出す男。三人は見送るだけで、追いかけてようとする気配は微塵も見られない。

「では、帰りましょう」

「そうだな……」

「……なあ、聞いて良いか？」

それぞれが別方向に歩き出す中、青年が女性の背中に言葉を投げかける。

「……後悔とか、していないの？」

「質問の意図が分からない。御国、そして我が友を守る為の行動に、後悔等が入る余地があるの？」

「……『日ノ本に危機が迫りし時、我は必ずや常世に舞い戻り、その危機を打ち払わん』、  
か。案外、満理姉は本当にご先祖様の転生体なのかも」

深山艦隊の籠る横須賀鎮守府にデモ隊が押し寄せた二日後。そのデモを主導した団体の幹部が真夜中、それも東京のど真ん中の公道で乗っていたセダンの整備不良による爆発事故で死亡したニュースが新聞やテレビニュースに流れる中、深山満理奈の親戚である風馬才牙は、先祖代々伝わる言葉を思い出しながら、自宅でそんな事を呟いていた。

## 第四九話 極東の小龍、羽ばたく時

深海棲艦と言う未知かつ人類史上初の同族以外での戦争相手が現れて以降、全世界の大洋は人類が忘れかけていた存在である多数の前時代の装備を持った艦艇が支配していた。現在も原因不明だが、人類が今まで育て上げた各種ミサイルや魚雷、速射砲等の攻撃は深海棲艦には有効打足りえず、深海棲艦に対する有効打と成り得る存在である艦娘が現れるまでに、大洋の大部分並びに洋上の諸島や小国は深海棲艦の群れに飲み込まれた。その為に世界の大洋、特に太平洋方面は数も質も脅威的であり、トラック諸島が奪還され、今もなお維持出来ているのは軍事学上の奇跡であると、欧州方面の関係者は言う。

世はすべて事も無し。日本本土にて米国からの救援要請に対して即時受諾を行う為に特別法案を緊急で通そうとする保守自由党に対して、改進黨を最大とする良識的少数野党が「今回の派遣を切欠に戦力を延々と引き抜かれないのか」と言う政策議論を展開しようとして、議員数だけは野党最大級の親民党が感情論や何処からか穿り出したスキャンダルで叫び続け、傍目から見ればちゃんとした政策議論を妨害して居る様にしか

見えない国会審議が行われているが、南洋の最前線たるトラック諸島はとても静かな物であつた。気味が悪い位には。

「……まあ、こんな物よね。どうせ死ぬならもつと情報を残してから死ぬべきだけど」

その幽霊鎮守府の統領たる歴戦の才女、仲本穂乃果。何時も通りに執務室に座る彼女は、日本本土から送られて来た報告書を読み切つた後、そう嘯っていた。報告書の送り主は *Phoenix Security Corporation*。仲本提督の実家が経営する天鳳グループの傘下に入り資本注入を受けた事によつて、近年業績を急拡大させ同業者の少なくない数を廃業に追いやる急成長を遂げた警備、探偵業を主業務とする大企業である。

天鳳グループは、元々は総合的に見ても中堅から多少落ちる程度の規模の企業連合体であつた。歴史も平成の時代からとかなり浅く、当然ながら四菱やSanyの様な日本を代表する超巨大企業とは比べ物にならない企業体であつた。それが今では、知名度こそ業績と規模拡大が急すぎて今一つ追い付いていないが、現在では日ノ本の古豪企業を上回る規模の体力や影響力を得るまでに巨大化していた。若干15歳過ぎ頃から何か

しらの形で経営に関与し、誘導し続けていた仲本穂乃果にとっては単なる自尊心を満足させようとしただけ程度の認識だが、その結果が世界トップクラスの規模へと拡大した天鳳グループの存在なのだから、世界と神様は本当に不公平である。

「地下駐車場の監視カメラの映像は一部すり替えられている様子は見られるも、明確な確証は無し。尚且つ爆発車両は損傷が大きすぎて大した証拠は無い。そして、深山満理奈とその一族には爆発時、明確に別所に存在していた事が立証済み。……そうそう隙は見せないのは予測出来てはいたけど、やっぱりイラつくわね」

状況証拠は全て、幾多のルートを利用して札束<sup>端</sup>一袋<sup>金</sup>と紙面上に並べ立てた美辞麗句の紙数枚で容易く思い通りに暴走した市民団体幹部の所有車の整備不良が原因だと明示している。だが仲本提督は、今回の事件の下手人は間違いなく深山満理奈とその一党であると確信していた。勿論証拠は無く、理由も仲本提督自身の勘が全てである。ただ、仲本提督の確信した勘は今の今まで一度たりとも外れた事は無かった。

「……しかも、深山一族の調査は、以前の報告から一切合切進んでいない。人員資金面では問題無いと言うのに」

仲本提督をイラつかせる原因はもう一つある。以前より調査を始めて以降得られた【深山一族の起源が甲賀流、風魔一党、三つ者の忍び達であり、過去畏きところへと仕えていたらしい】と言う情報以外、全くと言う程情報が出て来ないのだ。要らん事を仕出かす事と視聴者購読者が減少し続ける事に定評のあるマスメディアには超大型スポンサー契約を叩き付けて黙らせ、資金と人海戦術にモノを言わせて目ぼしい箇所の資料を探したのだが、成果は全然であった。

最終的には公的機関のみならず古家の適当に管理された古文書も、それなりの資金を投じて各所から買い取りをしていた為に、修復と解読に時間がかかるのは当然だが、そんな事は仲本提督の機嫌を良くするには至らなかつた。因みに不要になつた古文書は殆ど流れ作業で博物館や記念館に寄贈した為、世間からは資料保護の観点から上々の評判を得てそれなりに自尊心を満足させていたが、それとこれとは別腹である。

「……まあ良いわ。まだまだ時間は有る。それに此方の手を汚さずにあの痴人共を消してくれるのだから、精々利用させて貰わないと、向こう側に失礼ね」

手段と目的を完全に取り違えている団体の激発を誘発させた仲本提督だったが、この団体をずっと野放図にさせる気は毛頭無かつた。既に複数の関係者からの買収や内偵

により様々な黒いブツを確保しており、仮に政府や深山一族が動かなければその一部を投入し、自らが英雄となりつつ完膚なきまでに叩き潰す予定だった。結果的にはその複数あるJokerの一つ

切り札を切る必要もなくなったわけだが。

仲本提督にとって、今回焚き付けた団体は早期に排除するべき存在だと既に認識していた。規模はそこそこ大きいと言うのに理性で無く感情論に終始し、政府や自衛軍の邪魔をしても何の反省も無いのでは、説得するより消した方が後々自身仲本勉乃果が権力を獲る時に面倒が起きないのは明白だった。現在幹部の爆死から始まった警察の捜査により発覚し、公表され続ける内部での失態や汚濁によつて音を立てて団体は崩壊し続けているが、同時期に仲本提督の指示の元、他同類の著名人や団体の不祥事や汚職等も警察と世間に大公開した為に、日本が戦時を生き抜くのに邪魔な民間団体の多くは、今では立ち枯れ始めていた。

「問題は国会議員ね……。上手く誘導しないと、確実に洗いざらいある事無い事吐き捨てた上で此方を逆恨みして道連れにしようとする物ね。ふふつ、全然予測が付かないわね」



思案に暮れながらも、新しい玩具を手に入れた子供の様な笑顔で呶く仲本提督。国会議員が相手では、早々短絡的な手段を取る訳には行かない。特に確かな常識と能力があるが故に行動が予測や誘導をし易い保守自由党は兎も角、まるで活動家の様な言説と行動をそのまま国会の場に持ち込んでいる親民党らの場合、政策論争以前にイデオロギー闘争や批判の為の批判をしたいばかりに国会運営や審議会での暗黙の了解や不文律を完全に無視して動く為、次の行動が予測し辛かった。近似例を挙げるとすれば、ナチスドイツ政権下における外務大臣のリッペンドロップ外交だろうか。

「……面白いわ。ええ、本当に面白くなってきたわ」

仲本穂乃果は、面白がっていた。自身の動かした多数の手でも取り落とした、未知なる存在に対して。仲本提督は、楽しんでいた。自身の成し得た策が、一手間違えれば全てを焼き落とす業火であった危険性に。仲本元帥は、この上なく歓喜していた。自身の持つあらゆる才覚と手段を用いて落とすに足る難敵が現れた事に。当然ながら、国会議員や官僚等は全く持つて眼中に無い。

「さあ、これからどう動こうかしら？まず間違ひなく深山と『桜風』はアメリカに行く。その為の障害は一緒に潰した物ね。彼女たちが居ない間にどんな手を打っておこうかしら？ああでも、もつと調査を継続しないとね。正確な情報が無いと何も出来ない物。本社への指示は、それと深海棲艦の処理の状況は……」

今までの他者に向けていた極めて自然な仮面を張り付けた笑顔や配下の艦娘への無関心な表情や声色からは想像もつかない程に打って変わって、常人の提督が半日以上かけて処理する書類を片手間に済ましながら、仲本穂乃果は最上の微笑みを浮かべながら未来への一手を模索する。狂人の戯言と嘲る事無かれ、倫理観無きサイコパスと罵る事無かれ。彼女の行動原理は「他者から褒め称えられる事」と「自身が楽しくなる事」、そして根本に「自分が持て余す全てを余す事無く叩き付けたい」の、一般人にも存在する三点だけなのだから。ただ、それらが極端に過大なだけなのだ。

因みにこの後、トラック諸島に戦艦レ級、空母棲姫、戦艦棲鬼をそれぞれ旗艦とした三部隊の深海棲艦の大部隊が襲撃しに来たのだが、久方ぶりの楽しい時間を邪魔されて不機嫌になった仲本元帥の指揮によって、会敵より二日と経たずに一艦残らず撃滅され

ている。建造直後の睦月型駆逐艦二隻と天龍型軽巡洋艦を一隻喪失した代償に、だが。

「……それで、鈴谷」

「うん」

「覚悟、出来たの？」

「……うん。罵られるかも知れないし、嫌われるかも知れない。でも、このまま何も言わないでいるのは、流石に無しだからね」

「本当はもっと早くに告白するべきだけどね」

「それは言わない約束じゃん……」

本土から遙か南の島にて、深山艦隊であつても本腰を入れる必要がある程度には強大な深海棲艦が、数隻の軽快艦艇と引き換えに屠殺されている頃。日本国首都近郊の横須

賀鎮守府では、JK艦娘としてオタク系提督につとに有名な鈴谷が、深山提督と共に歩いていて。傍目から見れば仲の良い新人教師と女子高生の様である。

日本丸の行く末を司るスーツを着込んだ船頭たちは、相も変わらず口先以外で舵取りを取ろうともせず、文句と批判ばかり言い募り、時には転覆させんばかりに日本丸を揺らす確かな評価者様共に悩まされつつ必死に対米派遣法案成立と言う船着き場へと全力で航行しているが、現状の彼女達には余り関係が無いので詳細は割愛する。

「しかし、意外ね」

「……何が？」

「鈴谷の性格としては、こうウダウダ悩む暇が有ったらさっさと突撃している方が自然でしょう？」

「あー、確かに鈴谷としてはそうしようとは思ってただけど……」

「言い出す機会が掴めずに、そのままズルズル時が流れてしまったと。『桜風』、ちよつと気にしてたよ？自分、鈴谷さんに何か悪い事しちゃったんじゃないか、って」

「……反省してまーす。って言うか、『桜風』にバレてたの？鈴谷、ちゃんと隠してたは

ずなんだけど」

「あの娘、普段はかなりボケボケな性質だけど、ふとした瞬間に鋭くなるタイプだからね」

——後、人付き合いに何処か恐れを抱いている節が有るから、無意識に観察しているのよね、『桜風』

風来坊の如く突然参入し、相対する深海棲艦を歯牙にもかけずに殲滅し、超兵器と言う異世界の産物を二度単艦決戦で鎮めてのけた『桜風』真面目系暴走娘に対して、そう評価する深山提督。少なくとも参入初期は別として現在の『桜風』は問題無く他者と付き合えているのだが、深層心理上では『桜風』は他者との関わりを恐れていると、深山提督は判断していた。根拠は大体勘であるが。

「まあ、取り敢えずは『桜風』を連れ出してからの話ね」

「今は弓道場で精神鍛錬してるんだっけ。……また何か仕出かしてないと良いけど」

「流石に問題を起こす事は無いでしょう。加賀や瑞鶴達が居るんだから」

「それもそだね」

「…………ふっ！」

「…………体幹は問題無いわ。でも矢を放つ時に少し弓を動かす癖があるわね。それと引き絞つてから放つまでの間が短すぎるわ」

「ねえ加賀ー。流石にそこまで指摘する事は無いんじゃない？今日の『桜風』は体験しているだけなんだしさ」

「ずいずい知ってるよ、加賀さん本当は『桜風』への指導が楽しくてたまないんだって  
っつ」

「……………」

「無言で矢を番えないの、加賀」

「邪魔しないで下さい、飛龍」

一方深山提督達が向かっている弓道場では、明石が何処からか調達して来た弓道着を着込んだ『桜風』が、加賀の指導の元瑞鶴や暇を持て余していた二航戦コンビに見守ら

れつつ弓道を学んでいた。初めてである為弓道の作法に則った動きを知らなかったのは兎も角として、矢を番えてから僅か数秒程度で躊躇いなく撃ち放ち、的の中心を連続して射抜き続ける独特の射撃スタイルが教練前から既に構築されていたのは驚きであつたが。

「でも、何だか珍しいよね。赤城と翔鶴だけじゃない正規空母の集まりつて」

「そうですね……翔鶴姉、大丈夫だと良いけど」

「姉を信頼していないのですか、瑞鶴」

「いや、その、加賀さん、そう言う事じゃ無くて……翔鶴姉、以前出撃中に甲板で艦載機の発艦状態を見ていたら、波に煽られたのか分からないけど、飛び魚が翔鶴姉だけに直撃した事が有つて……」

「……そう。……今度、間宮に連れて行ってあげようかしら」

この場に居ない赤城と翔鶴の行方。彼女たちは先日まで近海や鎮守府近くで屯つていた反軍系抗議集団が海上保安庁や警察によって排除され、そして幹部の事故死と強制捜査により関係組織に大打撃が与えられた為によくやく出漁に出れた漁船団の護衛に出ていた。護衛任務と言いつつ妖精さんが多数の釣り竿を持ち込んでいる事を見るに、

今日の晩御飯と明日の朝御飯は魚料理であろう。

「……『桜風』。初めて弓矢を握りながらも的的中させ続けたのは見事ですが……やり方が違います」

「ですけど、こうしないと速射出来ませんが……。加賀さんや瑞鶴さんたちって、実戦だとこんな感じで連射してるんですよ？」

そんな事を話す年長者勢を他所に、20本近い矢を放ち終えた『桜風』が先輩方の所へと歩み寄っていく。見れば、放たれた矢は一、二本中心よりやや外れているのを除けば、その殆どが的の中心周辺を射抜いていた。

「出来ない事は無いけど、艦載機を発艦させるリズムとペース配分を考えないといけないからね。妖精さん達の疲労や交代要員の配置とかも考えないと行けないんだから」

「そう言う貴女の着任当初は、それはもう酷い物でしたが。……今ではまあ、それなりに見れた物になってますが、努力は怠らず、しかし無意味な鍛錬は避けなさい。瑞鶴」

「先輩面してそういう加賀だつて、着任当初は一航戦のプレッシャー勝手に感じて抱え込んで、バカみたいなオーバーワークやって提督に説教されてたよねー。赤城に今言っ



たような事言われても全然止めようとしなくて。懐かしいなあ」

「飛龍さん！その話詳しくお願ひします!!」

「ひつ飛龍、その話はもう終わった話です!!」

寝耳に水の話に瑞鶴が瞬時に飛びつき、何時も冷静沈着である加賀には物珍しい事に声を一部震わせ、言われた飛龍は「えー、別に良いじゃない。減るモノでもないし」とケラケラ朗らかに笑って切り返す。深山艦隊に置いて、正規空母の着任順は飛龍・蒼龍一航戦、赤城・加賀五航戦翔鶴・瑞鶴と言Dragon·sistersう流れである為に、先任である飛龍と蒼龍の方が実は赤城達より立場は上で有る。飛龍と蒼龍の二隻とも優しい性格で有るので、旧軍の悪癖である新人、後輩いびり等はやった事等無いが、弄る位はする。

「えっと、『桜風』ちゃん。今『桜風』ちゃんがやってるのは弓術だから、私達が言ってるのは弓道だから、もうちよつと型通りの動きをしないと駄目だよ?」

「実戦的では無いですけど……」

「弓道は精神鍛錬だから。ね?」

背後では飛龍に瑞鶴、そして加賀による愉快的な鬼ごっこが発生しているのを尻目に、

蒼龍と『桜風』は事前の計画通りに弓道の練習を行つていく。因みに『桜風』は自身の身の丈に合った弓道着を着てこの場に臨んでゐる為、中学生程度の身長に揺れ動く一結びの黒髪が白い弓道着と良い対比になっており、同じく弓道着を着て二つ束ねた青髪を揺らしながら少々困つた笑みを浮かべてゐる蒼龍とは、双方の身長差も相まつて新人部員を入部してから始めて指導する先輩部員の様な、青春の風を靡かせていた。

「……分かりました。じゃあ、教えられた通りに。型通りに引き絞つて……」

「うんうん、やれば出来るじゃない『桜風』ちゃん！」

元々弓矢発着艦艇装を操る事等まず無い駆逐艦娘でありながら、理由は良く分からないが自己流の弓術では空恐ろしいまでの命中精度を叩き出した『桜風』。因みに巻き藁等での練習をすつ飛ばしての的当てで、である。

「……撃、つてあ……」

そして自己流の弓術では無く、教えられた通りの弓道を行おうとした『桜風』は……見事に風と的を射抜く事無く、それどころか弦より放たれた矢は先ほどのカワセミの如

き鋭さの欠片も無い、弱弱しく一瞬浮かんだ末に『桜風』の眼前で力尽きた。距離にして3メートルあれば良い方だろうか。

「ふふつ、焦り過ぎだよ？即断即決は『桜風』ちゃんの長所だと思っけど、こういう時はゆっくり焦らずに、ね？」

「は、はい……」

後方では加賀が自身の過去の暴露を止めようとして飛龍と瑞鶴に矢を射掛けて大変な事になってる中、『桜風』と蒼龍は後ろの騒ぎを意に介さず弓道の鍛錬を継続する。極論命中率と速射力が高ければそれでいい弓術とは違い、所作の美しさ等も重視される弓道に関しては、さしもの『桜風』も一からの練習からになった。

「……っ！……ふっ！……さつきは、出来たのに……撃つ……的に、届かない」

「うーん、やっぱり気が逸りすぎてるね。……『桜風』ちゃん。的に当てようとして無意味に力が入り過ぎてるよ。教えられた通りの所作、思い出してね？」

「ですけど……」

「弓道は的に当てる事よりも、所作の正しさとかの方が大事な。それに失敗しても、誰

も怒ったりしないからね。はい、返事は？」

「は、はいー！」

「よろしい。ふふっ」

戦闘を重視した弓術であれば何とでもなる『桜風』だが、精神鍛錬を重視した弓道となると途端に放つ矢が悉く的確では無く地面に突き刺さるか変に逸れるかそもそも全く飛びもしないかの初心者らしい失敗を繰り返してしまふ。後背では加賀本米の瑞鶴教導役と飛龍がアメリカ出身の世界的知名度を持つ猫と鼠コンビの如く遊んでいるのを他所に、素直駆逐艦で真面目逐艦、そして要所要所艦娘のネジ提督を飛ばしたポンコツ娘提督への指導を朗らかに楽しむ蒼龍だった。

「チーッス！鈴谷入りっわっひゃあ?！」

「あ……」

「い!？」

「……す、鈴谷……さん?」

音を立てて開かれる弓道場の引き戸と共に飛んできた快活な奇声。振り返った蒼龍

と『桜風』の眼に映り込んだのは、スケート場でも無いのに玄関前でイナバウアーをやっているブレザー制服の少女と、扉の外から一本の矢を握っている白い細腕、そして矢を放った直後と思しき体勢で硬直している加賀の後ろ姿に慌てふためき出す瑞鶴と飛龍の姿が有った。

「大丈夫、鈴谷？」

「う、うん……鈴谷は、大丈夫だよ。提督」

「あ、提督……」

生体CPU思考が処理落ちしている『桜風』を他所に、鈴谷に続いて視界に入ってきたのは我らが艦隊の指揮官である深山提督。その右手には矢が握られていた為、鈴谷に飛来したのを止めたのは誰であったのかは明白であった。

「ねえ、『桜風』ちゃん」

「何ですか、蒼龍さん」

「アレって……多分、そう言う事だよね」

「そう言う事って……どういうことですか？」

「あ、うん。分かったよ『桜風』、ありがとう。あっち向いておこうね」  
「……………えつと?」

弓を置き、誰に言われずとも玄関に向かつて正座して首を垂れる加賀の後ろ姿と、青を通り越して白い顔で頭を抱えて蹲つて震えている龍と鶴。この状況を見てもいまいち蒼龍の言いたい事が良く分かっていない『桜風』は、ある意味一番平和であった。『桜風』の他人の機微を読み取る力は未だに低い。『桜風』を玄関に対して背を向けさせつつ、蒼龍は心のノートにそう書き込むのだった。

「加賀」

「……………はい」

「後で執務室に来るように。瑞鶴と飛龍も」

「……………はい」

正座している正規空母娘の加賀。頭上より掛けられた深山提督の言葉に一も二も無く承諾の返答を返す。心なしか、声色が変調していたように思えたのは、『桜風』と蒼龍の気のせいだろうか。

「わ、分かりました……多聞丸、私、若しかしたら多聞丸に会えるかもね……」

中型の正規空母娘たる飛龍。提督の言葉に抵抗の余地なく瞬時に陥落。目が何処か天界に飛んでいるように見えたのは、きつとただのの見間違いだろう。そう思わずにはいられない蒼龍であつた。

「て……提督さん！瑞鶴、矢を射掛けられた被害者……」

果敢にも深山提督の言葉に反論を仕掛けた勇者無謀 自殺突撃 瑞鶴Mariana・Turkey。瑞鶴主観では完全なる被害者であるのだから、流石に一言物申さずには……

「瑞鶴」

「ひゃい?!」

「……執務室に来なさい。良いわね？」

「わ、わわあわ、わわわかかか……分かり、ました……!」

「よろしい」

……一言物申さずにはいられなかつたのだろうが、深山提督の一睨みで一撃轟沈に終わる。何とも中途半端で情けない七面鳥である。その身の幸運と帝国海軍史上最大級の歴戦の記憶は一体何だと言うのだ、飾りなのか。心の底で何気に瑞鶴の運や武勲、戦歴に対して少しばかり羨望の念と罪悪感を抱く蒼龍は、後ろ目に直立不動の彫刻となつた瑞鶴を見つつ、そんな益も無い事を考えていた。

「……あの、一体何がどうなつて……?」

「『桜風』ちゃんには関係の無い事だから気にしなくても良いよ」

「は……はあ……?」

尚この間、背中に軽く抱き着いて玄関からの場へと『桜風』の視界を変更させた蒼龍の迅速なる活躍により、『桜風』がこの空母三艦娘の醜態を見る事は無かつた。『桜風』より精神的に年上としての威厳がジェンガの如く大崩壊する光景を蒼龍が見せなかつたのは、自業自得とは言え流石に三隻が哀れにでも思えたのだろうか。当の疑問符を浮かべ続けている『桜風』は、そう言つた事は余り考えないだろうか。

「つと、こんな事してる場合じゃ無いわね。『桜風』」



「あ、はい。深山提督、どうしましたか？」

蒼龍から解放された『桜風』が回れ右して深山提督の姿を見ると、そこには加賀を中心に平謝りする空母三艦娘と困った表情で頬を掻く鈴谷の姿が背景として見られていたが、肝心な『桜風』の視点は深山提督しか捉えてなかったので誰かさんにとっては幸いなことに、背景の様子を精密に『桜風』が認識する事は無かった。

「つい先ほど連絡が入ったわ。【対米派遣法案の締結と即日施行が完了、貴艦隊は派遣人員の調整と準備を行われたし】」

「……………つまり」

「ええ。……………行くわよ、アメリカ東海岸に」

「そつ……………そう、ですか。通りましたか、じゃあ準備を早く終わらせないとですわね」

「……………ええ、そうね」

深山提督の渡米宣言に、一瞬だけ喜悦の表情を浮かべた『桜風』。すぐ傍に居た蒼龍は特に違和感も感じる事は無かったが、ほんの僅かに顔を顰めた深山提督の内心は一体如何ばかりか計り知れない。

「後それと、鈴谷から話が有るわ」

「え、鈴谷さんから？」

分かりやすい疑問の声を上げる『桜風』に対し、罰の悪そうな顔で深山提督の背中から顔を覗かせる鈴谷。

「えつと……御免、『桜風』」

「え……いきなりどうしたんですか？」

「ちよつと……『桜風』の艦長室に、一緒に来て貰っていい？」

「は……はい？」

「な……なんで……？確かに、4冊並んでたのに……？それに、勲章とか新聞の揭示も

……」

「……鈴谷さん」

「あ……そ、その……『桜風』……」

「いや、別に無断で艦長室入った事に関しては何とも思つてませんよ。入るなとか、一言も言つて無かつたですし」

時刻はヒト<sup>一</sup>ロク<sup>六</sup>マル<sup>〇</sup>マル<sup>時</sup>。漁船団護衛から帰投し、大量の副<sup>魚介類</sup>戦果を工廠内の一時冷凍保管所に収めて執務室に報告に向かつた赤城と翔鶴の二隻が、扉を開けた直後に真っ白い顔をして口から魂を吐き出した加賀と瑞鶴、飛龍の三隻を直視していた頃、鈴谷と『桜風』は係留中の駆逐艦『桜風』内部の艦長室に居た。

「ほ、ホントに有つたんだつて！壁一面を覆い尽す勲章とか、新聞紙とか、机の上に4冊あつた航海日誌とか！」

必死の形相で訴える鈴谷を他所に、『桜風』は艦長室に設置された机に歩み寄る。

——記載されている内容に相違無し。一冊目の筑波大尉が副官だった時、そして二冊目のブラウン大尉が副官だった時。うん……問題無いね

「……やつぱり、ただの見間違いか勘違いだったと思いますよ?」

「鈴谷ホントに見たんだって!それに、こんな齒抜けの勲章や掲示とか無かったし!」  
「そんなこと言われても……」

力説している鈴谷に対して心底困った表情を向ける『桜風』。鈴谷に何を如何言われたとしても、存在していない物に対して有ると言われた所で、どう反応して良い物かサツパリ分らない『桜風』であつた。

「そんな事より鈴谷さん。今日は早めにお風呂の順番が回ってますから早く行きましようよ」

「えつ、いやでも……」

「ほらほら、これ以上此処に居ても何も有りませんから」

未だ心残りの有る鈴谷の背を両手で押しながら艦長室から外へと向かう『桜風』。外から見れば仲の良い姉妹そのものである。

「鈴谷、『桜風』。もう終わりましたの?」

「く、熊野……いや、鈴谷さんはもうちよつと……」

「はい、もう終わりましたよ熊野さん」

「あら、そうです。なら、早く戻りましょう」

「いや、ちよつと待つて……」

『桜風』によつて押し出された後、艦長室近くで態々待つていた姉妹艦かつ親友でもあ  
る熊野に艦娘宿舎へ連れていかれる鈴谷。もう直ぐ入浴時間でも有る為、美容に気を遣  
う熊野には早く戻りたいというのが正直な心境でも有つたのだ。

「……鈴谷さんも一体何を見たのやら」

——……私僕は間違いなく僕なのに

『桜風』？早く行きますわよ？」

「あ、はい。今行きまーす」

誰も居ない暗闇の艦長室。その中に存在する4冊の航海日誌。誰一人として詠むものが居ないというのに何故か広げられていた一冊の航海日誌。

その一冊には、大戦終結となった最後の超兵器戦闘の記録……『超巨大航空戦艦ヴァイアサン』との戦闘の記録が、血染めにて穢されながらも、記載されていた。

第五十話 舞台の幕は開かれた (The start  
of the dramatic stage)

北アメリカ大陸西太平洋。半世紀以上の昔、この海にはドイツ海軍が放つ無数のU  
—ボートによる鯨食通商破壊いに対する、イギリス王立海軍とアメリカ海軍との激闘が繰  
り広げられ、大小様々な物語が生まれては消えていった。

「……来ないな、いな、迎撃」  
The interception that does not come

「来ない方が良いだろ」  
You should not come

「そりやそうだが…」  
It is so

そしてその幾多のドラマに加えて多数の物資や人間を飲み込んだ21世紀初頭の大  
西洋上空を、全身を黒く塗装され、極めて特徴的な人類最高の戦略偵察機である  
Blackbird SR-71が、同じく黒塗りステルス塗装が施されたF-22を御供として飛行してい  
た。

「上層部からいきなり命令が来た時は、

一体何の冗談だと思つたが……」

「ウチの企業や整備兵、

本当に良い仕事してくれるな。少し前まで保管状態だつたとは

思えない動きの良さだ。

「The apparatus is updated by the latest thing  
機器も最新の物に更新されているし」

SR—71に搭乗するアメリカ空軍の操縦士が呟いた様に、本来このSR

—71はその特殊性ゆえの運用コストの高さと偵察衛星の発達により退役、モスボール  
処置で保管されていた物をアメリカ航空企業を総動員しての徹底改造によつて、原型機  
より遙かに性能向上した上で再就役した代物である。

「Modernization repair finishes not only  
「コレだけけでなく、  
護衛のF—22も

近代化改修されてるんだつたけな……」

「ああ。……知ってるか？ この改修をした航空企業、

先手を争つて  
自社の秘匿技術どころか

資金すらも持ち出しているそうぞせ」



「They who would do such a thing that was why  
どうしてそんな事したんだろうな、彼らは……」

「Was even a carrot hidden  
人参でもぶら下げられたんじゃねーの？」

「It is hung what kind of bait  
どんな餌ぶら下げられたら、

「Jet ailerons King  
ジェットカーすら曝け出すんだよ」

「I reveal even a joker  
自分のキングどころか

本来何の調整も無く投げつけられた仕事と言うのは嫌われる物である。特に現在は海上交通網が壊滅している為に、各種航空機の需要が極めて大きいのだから猶更である。だが唐突に下された命令に一切反発するどころか先を争って自社の全技術を投入する自国企業の姿に、整備兵曰く空恐ろしい物を感じざる負えなかつたという。本土攻撃の可能性を知らされたとは言え、それに対する義務心等とはまた違った、どこか飢えた狼の様な姿勢であつたような。

「Oh as for such a thing we return to work  
まあそんな事はどうでも良い、仕事だ仕事……。と思つたら、早速だ」

「I can't believe it. Can this really float in the sea  
……信じられねえ……こんなのが、本当に海に浮かんでいられるのか……」

「？」

「Unfortunately it is obvious reality  
残念ながら、紛れもない現実だ。

「I lick the interceptor with the cruise  
迎撃機も飛ばさずに

「in a grand manner without spurt  
悠然と遊弋とは……」

舐め腐りやがって……!」

SR-71の搭載した索敵装置が、通常想定されているよりも遙かに過大な反応を、そして映像からも既存の人類文明では先ず持つて建造、保有する事は有り得ない、超巨大双胴強襲揚陸艦の存在を明確に突き付けていた。

「……物足りないな」

物鬱げな表情と声色で呟く、白銀の長身美女。SR-71が上空を飛行している事等全く気にせず、自身が今の今まで沈めて来た多数の艦艇画像を繰り返し眺めていた。

「Royal Navyは全く持つて期待外れ、深海棲艦と言う連中も名前負けする弱小艦ばかり。……物足りん。全く持つて、ありとあらゆる物全てが全く足りん」

深い溜息を吐く、超巨大双胴強襲揚陸艦の主たる長身美女……デュアルクレイター。

現在ある程度勢力を衰えさせたとは言え、それでもそれなりの勢力を保っている大型ハリケーン『アレクシア』がアメリカ東海岸海域に存在している為にそれなりに波は荒れているのだが、大和型戦艦よりも遥かに大きい船体であるデュアルクレイターが揺れる事は無い。

「米軍の戦力集結を待つ間、基礎性能はそこそこある奴らであれば、ある程度は楽しめると思ったのだが」

そう言いながら、目の前のスクリーンを操作し、映像を呼び出すデュアルクレイター。

「……ただただ突撃する他脳の無い、武装だけ詭えた獣程度の連中だったとはな」

映し出された映像は、海中。機雷堰などで強固に防護された諸島攻略も運用目標とされていた関係上、デュアルクレイターに搭載されていた海中偵察カメラを用いて確認された映像には、無数の軍艦の様な物の存在が確認されていた。

ブリテン島とフランス本土の海軍戦力並びに港湾施設、そして序の市街地攻撃にて英仏に対して軍民間問わずに甚大な被害を与えた後に悠々と大西洋へと離脱したデュアルクレイターは、ハリケーン『アレクシア』が米国本土東海岸近辺を北上している間、大西洋に蔓延る深海棲艦の群れを蹂躪していた。

当然、人類に対する贖罪の為の攻撃だとか、そう言った心理は欠片も無い。目的は、深海棲艦と呼称される各艦艇の性能チェックであり、自身の持つ全ての武装の能力の再確認。それだけであつた。

「だが……しかし……ククツ」

……それだけのハズだった。

「ハハツ……。想像もしたことが無かつたな。生まれて初めての体験だ。神がこの世に

居るのならば、私は幾らでも祈つて感謝でもしてやろう。望むのならば股でも何でも開いてやる」

欧州軍に対する一方的な奇襲攻撃と民間施設を含む無差別攻撃、そして大西洋上で無数の深海棲艦を、自身の持つあらゆる武装で完膚なきまでに蹂躪し続けた事により生まれた感情。

「……楽しいーハハツ、こんなに一方的に叩き潰す事が楽しいなんてー最高だ、こんな、こんな楽しい事がこの世にあるなんて!!」

無機質な戦闘指揮所にて一人、心底楽しそうに呵々大笑する白銀の美女。本来は軍人らしい超然たる性格であつた筈なのだが、この世界に現れ、様々な形で情報収集を続けた結果、異常なまでの変貌を遂げていた。

「ハハツ、ハハツ……全く。私は不要な事を考え過ぎていたな。この世界にデュアルク・レイターの属すべき国家は存在しないのだから、私の思うが儘に生きれば良いのだ。そうだそれで良いのだ!」

血を吐くような絶叫と共に、壊れた様な大きな笑い声をCICに響かせるデュアルクレイター。事はある種単純であった。司令官が座乗する巡洋戦艦基幹の艦隊を蹂躪した直後に、最弱で有る筈の駆逐艦によつて叩き沈められた直後に、原因不明ながらに完全なる無傷の状態で海上に遊弋しており、しかもこれまた全くの原因不明で自身も人としての肉体を、艦を指揮する能力と共に保持しており、最後に傍受した情報だけでは信じられずにイギリスを強襲してまで得た情報全ては、自身の故郷がこの世界に存在しない事を明示していた。

「ウィルキア帝国が、ウィルキア解放軍が存在しない?!それがどうした、それがどうした!?!そんな、そんな事が……超兵器『デュアルクレイター』に関係など無い!」

軍人らしい超然たる性格という事は、デュアルクレイターこの女性の場合は即ち自身の寄つて立つ柱が祖国以外には存在しない事の裏返しでもある。そして精神的強さと自身の持つ武力が比例する事は先ず有り得ない。特に、一度足りとて精神鍛錬などした事のない者ならば、猶更である。

「次は……そうか、最早私に命令を下す母国はもう居ないのだ。通信で指示を仰いだところ、何の意味も無い。何をやっているんだ、ハハハ……！」

事実誤認から誤つて無関係の米海軍に攻撃を仕掛けたドレッドノートは、現実への理解が追いつかないままに、一縷の望みに賭けてこの世界に存在しないウィルキアを探して南太平洋まで流れた。アメリカ本土西海岸へ艦砲射撃を仕掛けたヴィルベルヴィントは、何処か曖昧な精神状態のまま行動していた。『桜風』はそもそも襖を済ませていた。肉体を持った自己の存在と母国の消失上にそんなどき事なは深刻に考える事等も無く簡単に受け入れていた。

「……さて、どうすれば良いのだか……。こういう場合の対処は、インプットなどされていらないから、私が判断するしか無いのだが……。どうすれば……。どうすれば、良いのだか……。？」

三者三様。特に超特級の例外事項「駆逐艦『桜風』とは違って目の前の現実を受け入れる事も受け流す事も出来ずに寄つて立つ柱が存在しない事実

に打ちのめされた彼女の、外見年齢や口調からは程遠い程度に幼く、脆い心が砕け散るには、十分過ぎた。

「……そうだな……この世界でも、アメリカは有数の艦隊戦力を保有している様だな。ならば、やる事は決まった」

脳内にて決めた言葉を紡いだ直後より、超巨大強襲揚陸艦『デュアルクレイター』はその巨体を揺らめかし、大海原を歩み出す。

「さて……世界帝国の守り人たる合衆国海軍は、一体どれだけ足掻いてくれるのだろうか。楽しみだ」

針路、アメリカ合衆国本土東海岸。薄ら笑いを浮かべる『デュアルクレイター』が内心一体何を思っているのか……それを、推し量る事は出来ない。当の本人も、分かっているのかも分からないだろうから。



「……想像以上の好待遇ね」

「同感です、提督。恐らく配備されたばかりの新型輸送機を、わざわざ大和たちの為に寄越すとは……」

「見た感じだと超音速型じゃ無いんですね、この輸送機。もつと性能向上出来る筈なのに何でなのかな」

「音速による衝撃波とか色々有ったのよ、『桜風』……向こうも困ってるから、余りそう言う事言わないの」

「あつはい。陽炎がそう言うなら」

日本国東京都。深海棲艦の出現後も自衛隊時代から大して変わらずに存在している、航空自衛軍と在日アメリカ空軍の共用基地たる横田飛行場。本来如何に深海棲艦に對する唯一の友好的存在である提督と艦娘であろうともそう易々と侵入する事は不可能である筈のこの場所には、一人の提督とその護衛の駆逐艦娘と高速戦艦娘に對超兵器部

深山満理奈

不知火

金剛

「桜風」大和・長門

加賀・瑞鶴・青葉・陽炎  
隊の七隻、それと多数の米軍人が居た。

「因みに『桜風』の世界には、こういう輸送機はどんな風に関係されたの？」

「えつと、少なくとも落とされぬ様に頑丈にするのが前提条件だったね。具体的には対空ミサイル五、六発や10cm砲10発程度じゃ平然と飛べる位。で、それから…」

「……うむ、『桜風』。そう言った話は機内に入ってからにするか」

「そうですねー。ただでさえ技術者さんが目の色変えてますから、絡まれない間に早く行った方が良さそうです」

「あつはい。すみません、長門さん。青葉さん」

彼女達の前に存在する双発大型輸送機・KC-46。深海棲艦の出現や激戦の末のハワイ諸島陥落、そして海上通商路の寸断常態化等の様々な混乱によって各種新型機の開発と輸送機の配備は急激に低速化していたが、その中でも大陸間無着陸飛行可能な大型輸送機の開発だけは精力的に進められていた。無数の水上艦や潜水艦が跋扈する海上を低速の輸送艦を多数引き連れて突破するよりも、高速輸送機の方が比較的安全なのは自明の理である。コストが酷い事になるが。

そんな風に色々と四苦八苦している最中に突如出現したのは、異世界のテクノロジー

を保有する、人類に対して極めて強力的かつ従順な一隻の駆逐艦娘『桜風』。今回アメリカ本土防衛戦に参入するに及び、『桜風』の希望を通ず交換条件として日米政府で極秘に行われた交渉と対話の結果、『桜風』達が乗り込むC-46にはアメリカから多数の学者や技師が来日していた。

「でもまさか此方の指示について配慮してくれるって明言と確約してくれるとは思いませんでしたね。言うだけ言ってみる物です」

「それ遠回しに本土防衛する米軍の一部指揮権を寄越せって言ってる様な物でしょ……聞いた時は頭抱えたわよ、全く」

「そこまで深刻に考える必要もないでしょ、陽炎。此方は要望を日本政府を通じて言っただけ。交渉して責任持つのは上の方だから、『桜風』達には何も無いわよ。多分ね」

「提督は豪胆過ぎるぞ、幾ら何でも……」

『桜風』の要望は言葉の綾を取つ払えば事実上の米國本土防衛戦限定の一部指揮権の譲渡。その交換条件は『桜風』の開発した異世界兵器の日本との共同解析許可と米國での現物供与。その為に『桜風』の戦闘映像を見て血相を変えて来日し、少しでも異世界の話を目の前に居る『桜風』から話を聞こうと目の色を変えて押し寄せる技術者や科学

者を必死に抑制する在日米軍人の後ろ姿は、無駄〔桜〕にのほほんとしている当事者〔風〕と殆ど深山山満満理理奈奈提提督督にしても居ない淑女督除きとても頼もしく思える姿であった。

「……あ、そうだ。コレ配っておきますね」

「……すまない、このインカムは一体……?」

そうした最中、思い出したように皆にワイヤレスのインカムを配り出す『桜風』。片耳に掛けるタイプのインカムであり、しかもとても軽くて耳に掛けても殆ど違和感を感じさせない良質な設計の代物であった。素材に関しては少し触った程度では良く分からない物だったが。

「自動翻訳機です。普通に日本語喋るだけで英語に翻訳されますし、相手側の英語も日本語に聞こえる様になってます。こうした方が戦闘中でも言語の戸惑いとか無くなりますよね? 翻訳のデータリソースは私のCPU使ってますんで負荷とかは気にしなくて大丈夫です」

事も無げにサラッとそんな事を言い残し、配り終えたら苦笑いする深山提督とため息

を吐く陽炎と不知火の姉妹艦コンビ、インカムを持って固まる深山艦隊対超兵器部隊の面々を残してKC-46のタラップを駆け上がる『桜風』。相変わらず紺色のジーンズと灰色のスウェットと言う色気の欠片も無い地味な単色衣装を纏ったその後ろ姿は、完全に海外旅行を楽しみにしていた少女の雰囲気がありありと滲み出ていた。

「本当、あの娘と居ると平穏や退屈と言う概念とは無縁ね」

「その分、私達の胃などにダメージが飛び込んでくるんですけどね……」

「大丈夫です。その内きつと慣れます、陽炎姉さん」

そんな感想を残しつつ『桜風』に続いてKC-46に乗り込む深山提督と陽炎、不知火の後ろを慌ててついて行く深山艦隊の艦娘達。漏れ聞こえた自動翻訳機の言葉を目敏く聞き取った科学者が先よりも増して屈強な米兵を薙ぎ倒す勢いで攻め寄せようとするのを死ぬ気で押しとどめる米兵との無意味に巧妙かつ熱い激闘が繰り広げられているのを尻目に、米国の命運を握る女性指揮官と軍艦多種多様な少女と女性を載せたKC-46は動き出す。

「予定では……ニューヨークに到着するのは、現地時間だと昼過ぎよね？」

「そうなりますね、大和さん。……先行して送った指示に、従ってくれてると良いんですけど」

「そう言えば、二式大艇をアンカレッジ経由でアメリカ東海岸に送ってたね。……また無茶な事しようつてつもりじゃ……」

「陽炎、陽炎。お願いだからその握り拳収めて。『桜風』またタンコブの団子山作りたくないから」

「待ちなさいそんな事私は一度もしてないわよ?!」

機外では嘆きの声無き叫びを上げ続ける母国の一部科学者や技術者を呆れと鬱陶しさとその他諸々の感情満載の表情をした米兵と御同輩が横田飛行場の外へと引き摺り出しているのを他所に、KC-46に乗り込んだ乙女たちはやいのやいのと騒ぎ立てる。

「Hu……本当に、Native級のEnglishとして聞こえるぜ」

「全く、コイツはAmazingだぜ。なあ一個くれないか?」

「えーっと、青葉に言われましても。それに、コレって『桜風』さんの傍に居ないと効力ないそうですよ……」

「Oh, My God……それでは、ロシアの少女を口説けに行けないな、H A H A H A  
!」

「MP、Coming now! 変態が此処にいるぞ!」

「Hey, Stop Stop Stop! Joke! It's American Joke!」

「……『桜風』。一体幾つ、こういう革命的な爆弾を溜め込んでいるんだ」

「長門さん。『桜風』さんの存在全てが革命的爆弾ですから、心配はもう手遅れです」

面子云々以前に当然の義務と言う事で護衛として同乗していたアメリカ兵の英語が全く違和感なく聴こえ、自分たちの言葉も何のずれも無く通じている事に、相手の気持ちとノリの良いアメリカンとの会話を楽しみつつも、最早何回目か分からない溜息と遠い目をする艦娘でも大人勢の二隻。因みに中途半端に英語になっているのは相手が何の言語を話しているのか分かる為、だと言う。

「私の……私のEnglishの存在意義ガ……テートクー……」

「はいはい。良い娘だから泣かないの」

「司令官。暫くの間『桜風』にかかりきりでしたから、移動中は金剛さんの充電器になつて下さる」

「もしかして不知火、あんまり他の娘と最近関わって無かった事。怒ってる?」

「……不知火に落ち度でも?」

「テートクー……コッチ向いてクダサーイ……」

「はいはい。よしよし、頼りにしてるから」

母国の同盟国とは言え、他国へと突入するのに何の気負った様子も無く……と言うより、それどころでなくおいおい泣く栗毛電探風力チューシャの女の子を慰める大和撫子をジト目で眺める桃髪少女がやいのやいの騒ぐ、これから戦場に飛び込む緊張感も何もない気の抜けた光景。原因は艦娘の中でも提督大好き勢筆頭の金剛を相当な期間を放置していた深山提督に責任があるのだが。

「そろそろね、瑞鶴」

「うん、そうだけど……加賀さん」

「……何?」

「手を、強く握り過ぎててちよつと痛いです……」

「……御免なさい。暫くだけ……」

「まあ、私は大丈夫ですけど……」



「……ありがとう」

一方では、両眼を閉じて表情こそ平靜なポニーテール美女が、隣に座っているツインテール美女の左手を握り締め、よくよく注視すればほんの僅かな微細振動が見えている。要は他者の操る航空機に乗る事に大きな不安を抱いているから行う自衛行動なのだ、ツインテール美女は予想外の先輩の行動と感謝の言葉に手で覆ったうえで茹蛸の様な顔を背けている。つまりは普段では決して見る事の出来ない先輩の姿に悶えていた。着陸後はきつと記憶消去の為に云万馬力の全力で絞め落されるだろうが。

「……大丈夫か、本当に……」

「I didn't know that. 俺らはorderに従うだけだ」

「だがな、彼女達にStatesを託すんだぞ……」

「信じるしかないだろう。Battlefieldに行けばきつと変わるさ……: May be so」

そんな賑やかな機体の中には日本の艦娘と盛り上がりつつあるお調子者兵士とは別に、多

種多様な女子特有の自由な会話の中に飛び込めずにいた真面目属性の護衛兵士が、小聲でこれからの先行きへの不安を口に合っていた。超兵器とか言う化物相手に正面から戦える艦娘と事前に聞いていて、歴戦の戦士と言う姿を予想して居たら現れたのは、全員優し気だったり穏やかだったり泣いていたりと、自分達の勝手な予想とはかけ離れた女の子だらけだったのだから。

「……信用出来ないな。あんなkidsは」

「Do not say. 俺達は仕事をするだけだ」

しかも、超兵器に対する最重要護衛目標と聞いた娘は、目を輝かせて物珍し気にC-46を見続け、御同輩と楽しそうに話している飾り気無しなJunior high schoolにでも通っていきそうな娘と言う、歴戦の戦士の雰囲気とはかけ離れた少女だった。一言言いたくなるのは仕方が無いだろう。

「あ、すみません。ちよつと良いですか?」

「What!?!」

「Oh……OK、What happened?」

そうして好き勝手に私語を交わす男二人にいきなり声をかけたのは、二人が交わす話題の渦中にあつた当人の『桜風』。噂話をしていたらその本人が前触れなく現れれば誰でも驚くのは当然だろう。この二人も御多分に漏れずに驚いていた為に、声を掛けられるまで気付かせる隙も無く歩み寄つていた事実には気付く事は出来なかつた。

「えっと……私自身に対する悪評と言うか、そう言うのは甘んじて受け入れますけど……」

「……Oh?」

「What's wrong……?」

軽く小首を傾げ、頬を指で軽く搔きながら言いよどむ『桜風』。一体何が有つたのかと、先程の不信感を毛ほど感じさせない態度で応対する護衛のアメリカ人兵士。大人らしい行動である。

「……もしもの話ですが。……もし、私の友達の悪口を言いよう物ならば」

……そう言った直後、目の前の少女より龍が生み出された。

「……What……?!」

「……A……a……y、you……?!」

龍など存在しない。そんな常識程度、頭では理解していた。理解していたが……目の前には、視界に存在しない筈の龍を現出させている少女が居た。先程の色のある苦笑とは打って変わって、無表情に佇んでいるだけの筈の少女。その少女を守る様に、東洋型の龍が冷たい相貌をガタイの良きアメリカ軍人へと向けていた。

「……私は」

「何やってるのよこのお馬鹿ー!?!」  
 「うごっぴゃあ?!」

その異常な空間が、オレンジ髪の少女が不可視の龍を蹴り飛ばす事で掻き消えた。同時に、一生に一度有るか無いかの少女の奇妙過ぎる声と共に『桜風』も吹き飛んでいったが。

「きゆう……」

「すみませんすみませんウチの馬鹿娘が本当にすみません!」

「O……Oh、Yes?」

「N……No problem。OK」

突風のように現れて水のみ鳥の如く頭を下げたと思ったら、目と頭の上のお星さまをグルグル回して伸びている『桜風』を小脇に抱えて来た時と同じく突風のように去っていった護衛対象の少女。正しく怒涛の如き流れに、アメリカ人兵士達はただただ目を白黒させるしか無かった。同程度の体格の少女を小脇に片手で抱えて何の苦もなく歩いて行った少女のある意味とんでもない後ろ姿にツツコミを入れる暇も無かった。

「……取り敢えず、これ以上何か言うのはやめるか」

「……そうだな。……と言うか、あの娘は10メートル以上先から座席に遮られていた俺達の小声を聞き取ってたのか……？」

「それを言い出すなら、俺達の目の前に来る時に一切こつちに気付かせなかつた事とか……」

そこまで言った二人は、顔を向け合い一秒だけアイコンタクトを交わし、それ以後自分たちの任務を遂行する事に集中する事にした。この世界には理解出来ない事が山ほどある。その事を本当の意味で理解した以上、理解出来ない事は敬して遠ざけるのが基本なのだから。

「……すまない、流星に会話中不意に挟まれる英語は、違和感が強いのだが。変えられないのか？」

「説明書を見ると、設定で変えられる見たいですね……あ、出来ました」

「ふむ……おお、すっかりと変わったな。ありがとう青葉。私は、こう言う物は苦手だな……」

「機能を沢山付け過ぎてているせいで説明書も事細かい説明がびっちりですしね。コレ一つで英語やフランス語、ドイツ語スペイン語ロシア語と欧州の主要言語だけでなく、アラビア語や中国語にも対応可能と言う詰め込み具合ですし」

「……無理していいいだろうな、『桜風』」

「その時は青葉と陽炎さんで制裁してでも止めますから安心してください」

因みに『桜風』が良かれと思つて初期設定としていた<sup>通称</sup>会話中英語<sup>○</sup>挟み込み<sup>仕</sup>機能は、余りにも会話中の違和感が強い為に通常の高速翻訳モードへと例外無く変更され、復活してその事を知った『桜風』は飛行機の隅っこで三角座りして落ち込んだりしたのだが、慰め終わるのに暫くの時間を必要としたのは言うまでもない。

## 第五一話 伝説、今再び (Legend, the second coming)

深海棲艦が出現してからのアメリカ合衆国は、一言で言つて散々だった。映画の様な存在である深海棲艦と言うファンタジックな化物に、世界最強最大のアメリカ海軍ですら御多分に漏れず他に他国海軍と同じく戦う度に手酷い打撃を受け続け、拳句の果てには太平洋最大の拠点であるハワイ諸島全てを放棄せざる負えないまでに追い詰められた。合衆国始まつて以来前代未聞の惨事である。

だが、それでもアメリカは未だ最低限のツキにだけは見放されてはいなかった。衰えつつあると言われていた合衆国の国力と軍事力は、深海棲艦との戦争と言う劇薬によって全盛期の反則染みた膨大過ぎる姿へと舞い戻りつつあった。加えて日本に『始まりの艦娘』が現れた日からやや遅れて、同じくアメリカにも第二次世界大戦中に活躍した合衆国海軍艦艇であつた艦娘達が多数現れ、防戦一方だつた深海棲艦との戦争にも如何にか一息つく事が出来た。

「その矢先にコレだよ……今世紀のステイツ、アンラッキーなものにも程があるだろ」



「五月蠅いレスター。今更分かり切った事言うんじゃねえ」  
「ヘーイ」

無論一息吐いた所で、状況が改善した訳では無い。太平洋側は本土防衛以外はほぼ同盟国の日本に事実上丸投げとなった上で、米国防務省が頭を掻き巻る程度に多大な出費と労力をかけて欧州諸国への援助と支援を行っていた最中、何の前触れも無く未知の巨大高速艦に西海岸を艦砲射撃され、情報収集の最中日本の奇妙な動きを悟って南太平洋に視線を向けたら意味不明な激闘を目撃し、挙句の果てには英仏に大打撃を与えた巨大強襲揚陸艦がアメリカの心臓部兼脳髓部へと迫っている。

ホワイトハウス、並びにペンタゴンの主達は、わざわざ二式大艇によってアンカレッジ經由で運んできた極東『桜風』製超兵器兼戦術レポートの友人からのプレゼントを見るまでは、最終手段としての核兵器の集中飽和攻撃すらも検討していた程であった。……仮に核攻撃を行った場合、その後深海棲艦が強大化する可能性が高い事を考慮した上で、だが。

「因みに、日本以外から応援が来る予定って有るか、アンデー？」

「ねえな」

「……一言で切って捨てるなよ」

「仕方が無いだろ。イギリスとフランスはあのバケモノのせいで大被害、ロシアは沿岸防衛以外の戦力は無い、ドイツは政治的事情で艦娘系の戦力を持つとうとしない、日本は広大過ぎる担当領域で処理能力が飽和寸前。7隻派遣してくれてだけ感謝するよりない」

そう言つて、自販機で買ったばかりの缶コーヒーを飲む米国防省職員と、渋い顔で同じく缶コーヒーをチビチビ飲む同僚の男。ただでさえ戦時中で忙しいと言ふのに、この所過労死が頭を過り掛ける程働き詰めの中の久し振りの休憩時間が訪れた為に、偶然居合わせた同僚と屋上へ風に当たりながらの休憩へと繰り出していた。もう何週間職場に泊まり込みなのか、思い出すのも億劫だった。

「戦前に太平洋を分割するとか言つてたトコの海軍は？」

「核攻撃による自業自得の大敗が響いて未だに再建途上で政府宣伝は勇ましいが、現実的な再構築の目途は一切立っていない。この事はレスターも知ってるだろうに」

「会話するネタが思い付かねーんだよ……テレビや私的にインターネット見ようにも、やってもやっても仕事、全然減らねーから時間取れないし」

柵に寄りかかって愚痴る青年に対して、何も言わずに缶コーヒを啣る同輩。イギリ  
スとフランスに惨劇を刻み込んだモンスターが出現してから東海岸側への大規模な戦  
力移動によって加速度的に増した仕事量の為に精神が摩耗している二人に取って見れ  
ば、世界の眼を気にする事も無く唐突に深海棲艦へ核攻撃を実行し、東シナ海航路を地  
獄へと変貌させた大馬鹿野郎自称共産国家の価値など、今飲み干したばかりの缶コーヒ程の価値も  
無かった。

「ふうー……そろそろ、戻るか」

「だな。あーあ、早く家帰って寝たいぜ……」

しばしの休憩を終えた両名。これからも民間との折衝や軍との調整作業が目白押し  
である為に、仕事は先ず減る事は無い事と、家に帰る日が何時になるかは全く分からな  
い事は確定していた。仕方が無いと納得しているとは言え、理性と感情は別物である。

「……おい、二人此処に居たのか!？」

「んあ?」

「どうした、そんなに慌てて」

「そうして二人が踵を返した矢先、屋上に繋がる扉を体当たりする勢いで開放した、二人の同僚が出て来た。荒い息を吐き続ける彼の姿に、また追加の捻じ込まれた仕事か何かと二人が思ってしまったのは、まあ仕方が無いかも知れないが……。」

「緊急連絡だ……。奴が、来る！」

その一言を聞いた途端、一瞬だけ目を合わせたかと思えば、弾かれたかの如く走り出し、屋上からの階段を滑り落ちるかのように駆け降りる若者二人と、その後ろを慌てて追いかけるもう一人の若者。疾走する二人の若者からは先程までのだらけ、愚痴を言い合っていた雰囲気など完全に消え失せていた。

「少なくとも歓迎委員会からはGOサインが辛うじて出せる程度に準備は出来てるとは思うが……！」

「S・Wレポーターから得た情報が正しければ、後半から息切れし始めかねない！それだけは何としても抑えなければならぬ！」

「言われなくとも分かっているさ！」

彼等に銃を扱う事は出来ない。戦車や航空機だって勿論触った事も無い。運動能力も極々普通の一般人と大差ない。……だが、書類とメール、文章・音声データが無数に乱舞する後方の戦場にて、ペンとキーボード、そして自分の手足と頭脳を用いて決死の戦いを挑む、気高い騎士たちが、確かに其処には存在した。

「他国の反応はどうだ？」

「相も変わらず、大筋では以前と同じです。アメリカからは広報官がリップサービスにしては過剰なまでの発言が連発していたり、イギリスやフランスは敵討ちを期待する声明が出され、戦略的重要パートナーは我が国の侵略性がとうとう現れたとかで大騒ぎしていたりと、細かい違いは有りますが」

「……大陸は」

「表も裏も沈黙しています。ネット検閲も強化して共産党批判に加えて過激な言論も封

殺にかかっています」

「……少なくとも、此方に対して何かしらを仕掛けてくる可能性はほぼ無い。そう言う事だな」

「東シナ海の通商護衛作戦を完全に放棄でもしない限りは」

「処変わつては日本国首都東京の国会議事堂。日本国政府首脳陣 議事堂内某会議室何時もの方々と何時もの部屋で行われる今回の議題は、戦後史上初の戦闘部隊の戦場派遣に対する国内外の反応対策であった。ただ、諸外国に関しては相変わらず一国だけ除いて、概ね想像通りの反応であったが。

「あちらさんも、少しは思う所が有るんでしよつかねえ？」

「そうであつて欲しい物だが……現在の深海棲艦の状況は？」

「沖ノ鳥島を拠点にしていると思わしき深海棲艦の大軍は、継続されている間引きを経ても今なお健在です。あのフィリピン海での核兵器使用以降、質の強大化こそ止まりましたが、数は一向に減る気配は見られません」

「……少なくとも、あの国の核攻撃で増大した深海棲艦のが陥落させたのは、我が国が領土でも最南端で孤立した無人の小島だったのは、不幸中の幸いか」

深海棲艦の全世界同時多発的出現と交戦した各国海軍の大打撃、そして第二次世界大戦の艦艇の名を名乗る少女達の出現によってタダでさえ醜態続きだったのが更に何を如何やっても誤魔化せない程に無策で右往左往すら出来ない無惨さを満天下に曝け出していた日本国の前政権時代。田代生、現親民党全世界の政治・経済・軍事全てが控えめに言つて大混乱状態の中、海上交通網が破断する事は即ち自国の破滅に直結する中国は、南シナ海に自国海軍を出撃させた。

勿論当時命令を受けた当の中国海軍は、今以上に生態が不明な深海棲艦との戦闘には大反対だったが、威光を知らしめて東南アジア諸国に対する存在感と影響力を更に強める好機だとか言う戦前からの御題目を唱える以前に、海上交通網が途絶したら自国内の膨大な人民を食べさせる事が出来ず、極めて短期間に暴動からの全土での武力蜂起と叛乱が勃発すると言う確信染みた予想に怯えた共産党政府の強い意向の前には、選択の余地は無かった。

「東シナ海での一件から三年が過ぎたが、中国海軍の再建はどうなっている？」

「公表されている情報並びに株価からの推測ですが、やはり全く進んでいない様です。特に、本来は練習空母になる予定だった寧稟が爆沈した事と、多数の兵員が戦死した事

は致命的だったようで」

「艦以上に、人を育てるのは一朝一夕で出来る物では有りませんからね、本当に……」

三年以上経過してかなりのデータは揃ってはいる物の、相変わらず法則性が全く分からない提督になれる素養持ちの人材のバラつき具合の育成に四苦八苦している山本蒼一海軍庁長官が、複雑な感慨を込めてそう答え、それに対して順調とは言えそれでも前政権旧民生・現親民党の行き当たりばったり朝三暮四の無茶苦茶な命令が原因となり、そして現場と官僚の死に物狂いの努力と奇跡的幸運の積み重ねで最終的損害が如何にか半壊程度で済んだ自衛艦隊再建で頭が痛い防衛省大臣が無言で首肯する。

三年前、港では人民達の壮大な見送りを受けながらも当事者の大半は渋々と言った面持ちで出撃したと伝え聞く中国海軍だが、衛星や電波傍受等からの情報によれば出撃して早々に深海棲艦の襲撃を複数回受け、ただでさえ数が少ない駆逐艦が損傷や沈没で消えて行き、拳句の果てには後に夕級と識別される戦艦主軸の打撃艦隊に襲撃されたのが確認された。

現代艦は装甲が薄い為に戦艦の主砲弾は貫通して被害は抑えられると言う説がある



が、それはあくまですぐさまダメージコントロール対応可能な熟練兵が多く搭乗している事が前提であり、それ以前に複数もの16inch砲弾が命中すれば損害対応も何も有った物では無い。そして最後に、中国海軍は建軍から小規模な海戦は数回経験しているが、太平洋戦争での血で血を洗う日米海軍が積み重ねた戦訓は習得出来る程では無かった。有体に言えば、大規模艦隊決戦の知識と経験は教科書上の物でしか無かった。

旧民生・現親民党

前政権の無定見な予算削減の煽りでガタが来ていた衛星と受信装置が故障した影響で詳細は不明だが、それでも当時の自衛隊は中国軍が洋上で核兵器を使用した痕跡を確認し、追加で生存艦は最終的に沈没寸前の駆逐艦二隻のみと、母港に帰還した元艦隊の姿から容易に断定出来た。中国自慢の正規空母の姿は、影も形も無かった。

「それで、情報流出元は分かったのか？」

「公安の総力を挙げた捜査にて現親民党の党本部であると推定し捜査も行いましたが、既に多数の資料等が廃棄されていた事も有って、確定には至って居りません」

「それについてですが、総理。先方が『これは国策捜査である』と抗議をして来まして、これを国会追及の議題にするつもりの様ですが」

「……放って置け、財務大臣。初めから難癖付ける事しか考えていない輩に付ける薬は

無い」

余談ではあるが、当時の政府与党はこの事を始め無視しようとして出来ないと分かったら『配慮』と称して握り潰そうとした挙句に、中国軍の核兵器使用後より激増した深海棲艦の存在を海上自衛隊並びに増強段階に有った艦娘の努力不足と責任転嫁し叱責した事がマスコミ並びにインターネット上に会議録や音声ごと多量流出し、これが前政権の解散総選挙と歴史的大敗北へと繋がっている。窃盗並びに流出犯は外部の人間による犯行とだけは分かっているが、それ以上は分かっていない。

「そんな事よりも、今は米国のの方が重大事項だ。東海岸が破壊されたら世界が終わってしまうぞ」

「はっ。スケジュール上では、現在米国本土東海岸上空へと差し掛かる状況です。今のところ、件の超兵器も動きを見せておりませんので……」

防衛省大臣が語り出した直後、扉を叩き破らんとばかりに繰り返される激しいノックが言葉を遮る。

「入ってくれ」

そう言う総理の言葉と共に、極めて荒い息をしながら入るスーツ姿の若い男。彼から伝えられた言葉は、この会議室に居る政府要人が半分は予想し、半分は予想外にも程がある奇天烈な事実だった。

「……………あ……………アメリカからの、連絡です……………。超兵器『デュアルクレイター』が侵攻を開始し、米軍と交戦。深山提督率いる米国派遣艦隊は……………」

——この人達、こんな顔もするんだな……………出来る物なら撮影したかった

後に、連絡役として全力疾走させられたこの男性が証言するには、この一報を聞いた面々は悉く伝言を直ぐには噛み砕けずに、口を開けて異口同音に単音だけの疑問の声を上げるだけだったと言う。

「……輸送機より空挺降下を敢行し、米軍との共同戦線を展開中との、事です……！」

……日本国政府首脳陣に想定外にも程がある、奇天烈極まりない一報が飛び込んだあの時より少々時は遡る。

「……ハックシユン！」

「……Hey、テートクー。出発前にちゃんと休んでましたカー？」

「……ちゃんと休んでいたわよ。私も何時も仕事ばかりしてる訳じゃ無いわよ？」

「そう言つてSleep Timeを毎日3、4 Hour Underに止めていたのは何処のテートクですかー？」

「……『桜風』はぐっすり寝てるわね。金剛、静かにお願い」

「露骨に目と話を逸らさないで下サーイ」

東京が横田基地発ニューヨーク行きのみ軍輸送機・KC-46内部。通常の旅客機であれば地球を半周する移動距離と時差の関係上、人よりも丈夫である事に定評のある艦

娘と言えども体内時計や身体の状態に少々支障が出るのだが、流石は米国肝いりで派遣してきた新型輸送機である。機内設備には身体を横にして休められる寝台等の整えられた白物揃いであった。それだけ、増援到着を待ちわびられている気を遣われているとも言えるのだが。

「すー……すー……」

「……相変わらず、肝が据わっているのか、それとも凶太いだけか……」

「平和な寝顔ですね。……『桜風』ちゃん、きつと初めての飛行機で興奮して神経が疲れちゃったんじゃないですか？ 離陸してから空を、じつと窓にくっついて見ていましたから」

「……そう言う物なのだろうか？」

「きつと、そう言う物です」

そしてその特設寝台にて可愛らしい寝息を立てて休んでいるのは、超兵器『デュアルクレイター』戦における最大最強かつ全ての要である駆逐艦娘の『桜風』。そしてその姿を見守るは戦前日本の誇りと謳われたビッグセブンの一角、戦艦長門。そして世界最大のかつ僅か二隻の46cm砲搭載戦艦として生まれ落ちた、戦艦大和。

寝台のへりに腰掛けた大和撫子が、微笑みながら穏やかに寝入る少女の頭を撫で、

少々呆れた表情で片手を頭に当てながらも、何処かしら優し気な雰囲気と共に見守っている。この光景を絵画にして飾れば、入館者数の減少に喘ぐ美術館の財政再建に一役買えるであろう。元来の目的とは明後日の方向へとズレてしまうだろうが。

「……で、青葉さん」

「どうしましたか、陽炎さん」

「……わざわざ機内にまでカメラ持って来てたんですか」

「戦闘時以外でカメラを持たない青葉は青葉じゃありませんから」

「へいミズ<sup>M.S.</sup>。出来れば俺にもそのネガを譲ってくれないか？」

「ふふっ……お断りします」

「オウ、シット！ 然らば代わりにミズ<sup>M.S.</sup>の笑顔を脳内フォトピクチャーに保存して置かないとなー」

「好い加減にしろこの馬鹿、彼女達の好意に甘え過ぎだ」

「お気になさらず。私達はそう言った事にまで目くじらは立てませんから」

そして宗教家にも見せたら何かケミストリー起こしそうな『桜風』達の神々しい光景を何時もの記者根性でフィルムに収めるマスメディアクルーザーこと重巡洋艦娘の

青葉と、『桜風』の直近保護者役に何時の間にか収まっていた陽炎型駆逐艦の長女と次女、陽炎と不知火姉妹。おまけでラテン系の血を沸き立たせて全力ナンパをやらかすアメリカ人護衛兵その一とそのラテン系の相方の行動で頭痛が止まらないゲルマン系アメリカ人護衛兵その二。外交問題等はこの際考えない事にしても、冗談を言い合える程度に仲が良いのは良い事である。

「……瑞鶴。この状況ではこう動かすのが適切ですが、あえてこういう選択も有ります」  
「うん……確かに、あえて敵手に一手譲ると言う考えもあるか……私、どうしても前のめりになるなあ……」

「悪い事では有りません。寧ろ、主導権を握り続けて敵に行動の自由を与えない事は戦術の王道です。ですが、こう言った戦い方がある事も頭の片隅に置いて置くのも、損では無いでしょう」

離陸して安定した飛行状態になってようやく正気に戻った、二代目一航戦の一角である加賀。そしてそんな先輩を優しく見守って居たり居なかつたりした、真珠湾からレイテまで生き抜いた歴戦艦の瑞鶴。そんな見た目高校生から大学生の少女たちは離陸時と変わらず隣同士の席で、『桜風』から貰ったタブレット端末を使って戦術教習を行って

いた。因みに教材ソフトは暇していた『桜風』の副長妖精さん制作の、実写の様に精密なCGと地形や艦艇、武装その他諸々の各種データを盛り込まれた一品である。

「でも、こんな凄いのを気軽にポンと渡すって、しかも台数は乗員分くらいは有るってどういう事何だろうね…。『桜風』の居た時代は、1930年代って聞いているのに」

「彼女の副長が言うには、コレも必要に駆られての事だそうです」

「……勉強の為？」

「ええ。こうやって遊興感覚で新しい技術や知識を獲得させないと色々追いつかない、と」

「……たった一年だもんね、あのミサイルやジェット機だけでなく、防衛重力場とかが投入されたのって」

因みに彼女達が使用しているタブレット端末だが、日本にサンプルとして残してあった一つを解析しようとした米国出身の電子端末関係の権威が半分狂い掛けて物理鎮圧される程度には、現代技術では解析不能な域の高精度素材や部品が山盛りであり、そして瑞鶴と加賀がゲーム感覚で弄繰り回している教材ソフト一つとっても常識的なタブレット端末程度に収まるデータ容量では無い。先進国の据え置き式大型軍用PCより



も容量、精度、ついでに操作性や解像度等が桁違いに上であると言う時点で、何をかいわんや、である。

既に米国人技術者や科学者が来日する以前より『桜風』の開発した兵装等の研究と解析を始めていた日本人チームも、日本企業の最高の工作機械のみならず様々な種類の熟練職人も招聘して部品の複製や解析等に挑んだりしているが、成果は全く芳しくない。今では拳句の果てに何をトチ狂ったか、素材解析の為に刀鍛冶や機織り職人すらも無差別に呼んでいる事を見ると、此方も中々に理性のネジが吹き飛びかけている様だが。

「……………こうしてみると、一体どうやってこれらを量産していたのが気になります」

「詳細な数字までは聞いていないけど……………ウラジオストック……………向『桜風』の世界こうだと、シエルド

ハーフェンがウイルキア王国の首都で」

「沿海地方からカムチャツカ半島に至るまでの海岸線近くが領土です。そしてクーデターから大して間を置かずに同盟国の日本にクーデターを引き起こさせて傘下に置き、日本の生産力を取り込んだ」

「でも、超兵器により技術開発の加速が有ったとしても、あれだけの未来技術を詰め込んだ大艦隊や航空戦力を一年未満……………実戦投入の時間も考えると、それこそ数か月以下で改造、建造、製造し、最前線に配備したって言うのは……………」

「一般常識に照らし合わせて考えると、通常有り得ません……ですが、その有り得ない事は、あの娘『桜風』の世界では実現しました」

「……考えてみると、不自然と言うか何と言うか……超兵器って、そんなに万能な物なのかな……？」

尚、『桜風』に駄目元でこれ等の機械製品の製造法等を聞き取り調査は行いはしたが、所詮『桜風』は元軍艦で、『桜風』の妖精さんもあくまで乗員の経験や記憶を持っているだけ。つまりは、両者とも唯のユーザー兵士でしかないのです、製造方法等答えられる筈がなかった。どれだけ重度実戦経験豊富な歴戦の猛者のヘビーゲーム兵でも、ゲーム機やPC兵器の構造や組み立て方を知っていたとしても、そのゲーム機やPCを製造する工場の製造ラインに使われる機械や部品一つ一つの素材・構造・製造方法を知る訳が無いのと同じである。

「……今まで一度も踏み込んだことのない海で戦うと言うのに、皆リラックスしてるわね」

「テートクがいるからデース」

「……私が？」

「……何デスカー、そのquestion Faceハ？」

色々とフリーダムに過ごす自身の艦娘達の様子をこっそり覗きながら零した言葉に耳ざとく反応した金剛の言葉に、それこそまるで意味が分からないと言う声色と表情を見せた深山提督に対して、オレンジジュースをストローで飲みながら心底呆れた感情を見せる金剛。本当はブランデー入り紅茶を飲みたかったらしいが、戦場に行くため流石に自重したらしい。

「私達艦娘にとって、一番の不安材料はテートクデース。Bad、一番の安心材料もテートクデース」

「……まあ、艦娘と提督は近ければ近い程力を発揮できるって統計学的には……」

「そうじゃないデース。真面目にボケるのはお腹一杯デース」

自身の黒髪を弄りながら微妙にズレた事を言い出す深山提督に対して、呆れた軽いため息一つと共ににじり寄る高速戦艦娘の金剛。深山提督が男性であったならば昨今の恋愛小説や漫画等の様に何かが起きる間合いでは有るが、残念ながら深山満理奈は女性である。そして同性愛者でも無い。つまりはそういう事が起きる確率は相当低かった

りする。他所の艦隊ではそう言う事が常態化していると言う風の噂が無い様で有る。うだが彼女達には関係無い。

「テートクが居てくれるから安心するのは本当デース。……But、深山満理奈が指揮した戦場では、今まで一隻も轟沈していません」

「それは皆が奮戦してくれたからで、私は特に大したことはして無いわよ。それこそ事前に資材集めたりくらいしかしてないしね」

「アイアンボトムサウンドでの陣頭指揮で何回も敵襲を察知してズタボロになるまで海棲艦を蹂躪しておいて何言ってるんデースカー?」

「そんなのはただの偶然よ、偶然。皆の奮闘が、戦争の女神に気に入られたのよ」

——このテートクが何時も自己へは妙に低評価は一体なんでデースカー?!

どう見ても心底そう言っているとしたか思えない表情で言い出す自身の提督に、目頭を押さえて蹲ざる負えない金剛。確かに三年前のアイアンボトムサウンド戦では、金剛自身も含めて奮戦した事は間違いでは無い。だが、周囲の艦娘が戦訓不足により提督ごと

轟沈していくのが珍しくない戦況の中、僅か半年未満の速成教育上がりの高卒女子未成年者が、明確な指揮で戦没者無しかつ戦略目標である南方棲鬼の撃沈に成功すると言うのは、明らかに異常でしか無かった。

当時海上自衛官がそのまま提督へとスライドした艦隊も居たが、半年以下で実戦投入させられた提督連押し付けられた多数のお荷物を抱えた上に無謀な政治的欲求に抗えずに戦闘継続した結果、多数が海に散った。『自分と仲間の力で世界を救う』等と無意味かつ根拠も無しに意気軒昂だった生きの良い提督率いる艦隊も居たが、戦場で無数に飛び交う幾多の砲爆撃や悲鳴と断末魔の濁流に飲み込まれ、大半がPTSDを発症して海から消えた。

「……他所のMilitaryからも、色々賞賛されてますガ」

「過大評価も良い所よね。それにあの評価は一部貶してる部分もある。言われても当然と言えば当然なのが少し悲しい所だけど」

「違う、ソツチじゃないデース……」

戦場新にて何とか正気を保ち続けた者達の多くは戦力不足等を表向き米の理由として途中から消極的に動き続け始めた中一部の例外のみが交戦を継続し、そして最仲本穂乃果と深山満理奈と言う二名のみが終始最前線に踊り込み、前者は多数の轟沈艦

を出しながら、後者は一隻たりとも喪失する事無くアイアンボトムサウンドの主である南方棲姫を撃沈した。尚、この両者とも正規軍人でも何でも無い半年以下の超短期教育を受けただけの一般出身である。

後に、このアイアンボトムサウンド戦での戦果に見合うとは思えない犠牲者の多さの前に余計に海自・提督達専門家の悲鳴と忠言の嵐を完全無視して前政権は旧民生・親親民党提督の半強制的採用徴用と更なる教育期間短縮を推し進めるのだが、外野の他国軍人たちは素人よりマシ程度の教育だけで大した教育を受ける事も無く放り込まれた過酷な戦場戦地を生き抜き、あまつさえ敵主力を叩き潰した彼女達を『SAMURAI Navy』と讃えている。  
正規教育を受けずに戦地に出征させられた事若干の皮肉と大いなる憐憫、そして手放し事実上の賞賛と本心からの絶句成功の二つを込めて。

「それよりも金剛。そろそろじゃ無い？」  
 「それよりもって……」

相変わらず自身の事には無頓着な深山提督の言葉にモノ申したくなる金剛であったが、残念な事に時間切れであった。

「ん……………」

「あ、お早う御座います、『桜風』。よく眠れましたか？」

「……………大和さん、長門さん」

「……………どうした？」

時を同じくして、今まで眠りこけていた『桜風』が、まるで冬眠明けの熊の様にむつくりと身を起こす。そしてゆっくりと身体を動かし、視野に二隻を収めながら一言。  
大和と長門

「……………パラシュートを準備しましょう。飛び降ります」

「……………え？」

後に『Naval Battle of New York 沖決戦』と呼称され戦史に記録される、ユトランド沖、マ

リアナ、レイテと言う過去の歴史を塗り替える大海戦が勃発する戦域に突入する、僅か十五分前の話であつた。



## 第五二話　ニューヨーク沖海戦（Naval Battle of New York）

ハリケーン『アレクシア』がその勢力を衰えさせつつも未だに大西洋西部に居座る中、大統領命令によって連邦軍並びに州軍の誘導の元民間人が完全に避難し、時折軍用車両が行き交うだけでこれまでの喧騒がまるで夢幻かと思う程に一時静かになった米国東海岸。

「……『Sky Train』、『Sky Train』。こちら空中警戒管制機『Star eye』応答せよ」

「（こちら『Sky Train』。『Star eye』、どうした？」

「【現在、当空域は戦闘状態である。今、護衛戦闘機を回した。彼等の誘導に従い、針路を変更されたし】

その一時の静けさが文字通りに消え失せ、無数の排気音や発射炎、爆炎が蒼海のキャンパスを彩りつつあったその領域に、極東の同盟国よりとある積み荷を載せた輸送機が

一機、最大速度で突撃しつつあった。輸送機なので、当然ながら防御手段等無い。

「……あー、すまない。それは無理だ」

「……何を言っている？ 貴機には傷付けてはならない積み荷が有る事は、此方でも把握……」

「その積み荷さんの要望なんだ。……護衛機には無理をさせてしまいが、海まで飛ばさせてくれ」

「……『Sky Train』。まさかとは思うが……本気なのか？」

「本気も本気だ、あの積み荷さんたちは。……此方としては、彼女達の想いに答えたい。危険だが、最悪は機体を放棄してでも脱出するさ」

「………了解した。護衛機を増やす。……絶対に落とされるんじゃ無いぞ」

「………言われなくても、分かってるさ」

10秒近い沈黙の末に、苦虫を噛み潰し、苦悩の果てに絞り出したと丸分かりな苦々しい声での空中警戒管制機搭乗の管制官より出た指示に、内心の言葉は発する事無く了解の意を返す。

「……機長。顔、凄い歪んでますよ」

「う……………」

「……まあ、思う事がない訳じゃ無いですよ。自分も輸送機で空戦空域に突っ込めだなんて、幾ら護衛機が付くとしても祖国の危機以外では御免被りたいです」

正面を見据えながらそう言う副操縦士。実際問題、鈍重かつ自己防衛の武装が一切皆無の輸送機で戦闘空域に突っ込めと言うのは、ハッキリ言って狂人の沙汰以外の何物でもない。KC-46が如何に合衆国が誇る新型輸送機と言っても、戦闘機を振り切れたりミサイルを回避出来る様な速力も機動力も無い。加えて護衛機が付くと言っても、それで絶対に撃墜されないと言う保証は絶無なのは、過去の無数の戦歴が証明している。

「……だが、この方法が一番速く、現在苦戦を強いられている戦友たちの元に送り届けられるんだ」

「それはそうですけど……………」

「『桜風』、止めましょう。危険です」

「ですけど、この方が手っ取り早く海に飛び込めますし」

「ですが私達に落下傘降下技能は有りません。飛び降りても敵戦闘機の攻撃を受ける可能性は極めて高く、加えて風に流される可能性も……」

「敵戦闘機に関しては、アメリカ空軍とアメリカ海軍、それに海兵隊の戦闘機部隊が排除してくれます。降下と言ってもパラシュート背負って飛び降りたら紐を引けばいいだけですし、問題無いですよ」

「……確かに、加賀さんの言っている事は最もだけど、でも一度空港に着陸してから再度ヘリコプターか何かで移動するのは二度手間なのは事実だよね……時間が無いのも事実だから、私は『桜風』の意見に同意します」

「陽炎姉さん、本当に『桜風』に染まりましたね」

「……そう?」

「……本当に大丈夫ですかね?」

「言うな……きつと大丈夫だ……多分」

……幾ら祖国の危機と言えども、前述した無茶な進入に加えて当の本人たちの内某一部が慎重論怖を唱気えているのを見れば、不安にならざる負えないのは仕方が無いのかも知れないが、彼らの思惑とは別に『Sk y T r a i n』は燃費無視の最大速度で突き進んでいく。

「……自分、この任務が終わったら絶対休暇取って家族と団欒の時を過ごします」

「そうか……俺は、馴染みのバーにでも行って、キープしてた酒でも飲むとするか。それくらいしても文句は言われんだろう」

二人が交わした愚痴。それを合図にしたかの様に、機体のレーダーや機器は無数の反応と警告を音と画像で奏で出す。

「……戦闘空域は目前だ。絶対に切り抜けるぞ」

「了解。……絶対に落ちてやる訳には行きません。来月、友人の結婚式に出なきやいけないですし」

「そうか。なら、余計に落とされる訳には行かないな!!」

その音、そして信頼し合うコンビが交わした軽口は、自衛する武器も無き者達が見せる、敗北を許されない決死の戦いが開幕を告げる音色で有った。

「輸送機が丸裸で此処に突撃してくるだつて!? アンドルーズ空軍基地に行くんじや無かったのか!? しかも空戦している最中の空挺降下!? 馬鹿じや無いのか、死にたいのか?!」

「そんな事は分かっている! だから貴隊に護衛を頼むのだ! 今はもう時間が無いのだ!!」

「……ああ、クソ! 分かったよ、やってやるよ。……ウイングス隊、聞こえていたな?」

『アイ、サー』

『お返し出来ると思つてたんですけどねえ……』

『ウイングス3、あの輸送機に乗せている積み荷はあのバケモノ対策のスペシャリスト

だそうだ。護衛を完遂すれば、あのクソツタレに対するこれ以上ない報復になるだろうさ』

米軍の国籍マークが記されたF-22・F-15・F-16・F-35・  
 Super Hornet F/A-18と、IFFも国籍表記も雑多の極みである垂直離着陸機並びにヘリコプターによる混成部隊が無数に織り成す轟音と爆音の中、その混沌の空へと向かつていた4機のF-22が翼を翻し、トライアングル編成を全く崩さない妙技を誰かに見せるでも無く遂行しながら、音速以下で無謀にも突貫してくる宅配便のお手伝いに向かうのだった。

「……州軍か」

『総力戦ですからねえ。西海岸防衛のための兵力以外、それこそ中部以東の全航空兵力がこの東海岸近辺キャパシティギリギリまで集められてるそうですし』

『一部の部隊はカナダの基地も借り受けているらしいッスね……って、アレって……』  
 「……CF-18。おいおい、まさか政府、カナダ空軍まで動かしたのか？」

『でしょうね……カナダにとつても、すぐ目の前の脅威に対して何もしい訳には行かないと言う事情も有るんでしょうけど』

州軍のFighting Falcon  
F-16と、F/A-18がカナダ用に改修された機体であるCF-18を横目に見送るこの4機。彼等は暫く前、在英米空軍駐留レイクンヒース空軍基地第48<sup>th</sup> Fighter Wingイター』の艦載機部隊と遭遇、交戦し、そして生還した数少ないパイロットであった。隊長機が撃墜された後も交戦を継続したウィングス隊の各員も、指揮権を継承した二番機の指揮の元交戦を継続するも、三機とも悉く弾薬欠乏の末に敵機に集られた末に撃墜されたが、ベイルアウト・胴体着陸・着水と方法は全て別であったものの如何にか彼らも脱出に成功した。その後は全員五体満足だった事も有り報告の為に本国に引つ張られた末に、アメリカ空軍が誇る近代化改修済みのF-22<sup>Raptor</sup>を受領。そして現在に至る。要約すればアメリカ軍人で唯一超兵器と交戦して被撃墜されても本国へ無傷生還した戦闘機隊である。

「レーダーに探知……アイツか。戦闘空域で空挺降下やろうっていう大馬鹿は」

『最大速度で飛ばしてますね。まあ、流石に輸送機何で遅いですけど』

『度胸有りますねえ……』

『これから敵中突破を援護させられるこちらとしては、もっと増援を切実に寄越して欲



しいですが』

そうこうする間に、ウイングス隊は件の輸送機をレーダー、そして視界にて捉える。何度見ても一軍事学的常識に真つ向から喧嘩を売り付ける《戦闘空域に向けて丸裸の輸送機一機が飛行する》非常識な光景に呆れた物言いが出てしまう面々であったが、その身一つで艦艇を呼び出せると言う特異性を持つ艦娘の事を考えればこの無謀な行動にも一定の理が有るので、それ以上言う事は無い。

「……あー、此方『Sky Train』。前方の友軍機、あんたたちの愚痴此方にも丸分かりだったが」

『やっべ……』

「こちらウイングス隊。これより貴機の護衛に付く。それと、俺達の独り言は聞き流してくれ。大体事実だろ？」

「一切否定できないのが悲しい話だ、全く……」

——彼も苦勞しているな

一端後方に飛び去ってから改めて旋回し護衛に付きながら、この無茶無理無謀な三無し突撃行を輸送機のパイロット自身は望んでやっている事では無いと分かり内心同情するウイングス隊隊長<sup>1</sup>。その場に居ない人間であれば『祖国の危機に何を軟弱な事』だの何だのと好き勝手に彼らの弱音を責め立てるだろうが、一瞬の動きが生死を分ける命を賭けた戦場を駆け抜ける者達に取って見ればそんな世迷い事など聞く気は無い。

「……ウイングス1より『Star eye』。戦闘空域の戦況を教えてくれ」

「……『Star eye』よりウイングス1。現状は此方側優位。逐次投入してくる敵機を、各部隊で交代しつつ処理し続けている。ただ、弾薬の消耗が激しくてミサイルのみならず機関砲弾すら枯渇した部隊も居る」

『ミサイル戦全盛期たる21世紀にもなつてドッグファイトとはねえ。……幸いなのが、相手の動きが力押し以外の何物でもない点だけか』

『私語は慎め、ウイングス3。その力押しが厄介過ぎて各部隊への指示に四苦八苦している私<sup>早期警戒管制機隊</sup>達への当てつけのつもりかな?』

『……ウイングス3より『Star eye』。すみませんでした』

【よろしい】

そう遠くはないとは言え、戦闘空域からは多少外れている事も有つてか軽口を交わすウイングス3とE-3『Star eye』の管制官。不真面目に見えるかも知れないが、この様な気の抜けた会話によつて精神的無用な緊張感を解し、余計な緊張をしない様に努める事も重要である。

「……そして、続報だ。戦闘空域をすり抜けた8機が其方に向かっている。機種はそれぞれYak-38Mが2機、AV-8Bが2機、ハリアー GR-1が4機だ」  
 「積み荷へ攻撃するつもりか。各機、AIM-120 AMRAAMスタンバイ。『Star eye』、誘導を頼む」

「分かった。発射タイミングは此方から出す」

『了解、ボス。しかしこの編成としては、後方基地へ爆撃も有り得そうですね。だがYak-38M<sup>フォー</sup>って、本当は博物館にしかない様なレア機体なんだが』

『しかも国籍表示が何故かアメリカだからな。アレ本来はソ連製の機体だし』

『ウイングス2より3・4へ。好い加減に真面目にならないとまた滑走路を往復100周させられますよ』

「心配するな、ウイングス2。今日の働き如何で既に100周走らせるかどうか考え中

だ」

その隊長の一言に震え声で意見<sup>懇</sup>を<sup>懇</sup>求<sup>め</sup>る。ソールを操作しF-22の牙の一つである中距離空対空ミサイルの発射準備を手早く完了させる。二番機のウイングス2も同様に準備完了させ、色々言っているウイングス3と4も同じく準備を完了させる。彼らはエースだ、間違いなく。

「……three……two……one……Now……今！」

「了解！ウイングス1、Fox3！」

『ウイングス2、Fox3！』

『ウイングス3、Fox3！Fox3！』

『ウイングス4、Fox3！』

『Stareye』のコールと共に、間髪入れずにアクティブレーダー誘導ミサイル発射の符丁をコールするウイングス隊。その直後、F-22胴体の爆弾槽が解放され、各機に搭載されていた中距離空対空ミサイルが機外へ放出、そして自身の存在意義を果

たすべく白煙を引きながら一瞬で彼方へと飛び去って行く。

【誘導開始……敵機、ミサイル発射。電子妨害開始】

「回避は？」

【問題無い……妨害に成功。ミサイル、全弾命中確認！】

そう『Star eye』が宣言した直後、レーダー上に表示された敵機が纏めて消失したのをウイングスーは確認した。双方がヘッドオンのまま、特に相手側が高速で接近していた為にミサイル発射から余計に時間がかかる事無く撃墜出来たのだ。マッハ4で飛翔するAIM-120 AMRAAMの性能とE-3『Star eye』の支援が優れていたのも大きな要因だろうか。

「……やはり、奇襲さえされなければ此方が有利か」

『寧ろ電子戦機の支援も無しに単独で飛行するV/STOL機の編隊相手に、AWACSの支援付きのF-22が撃ち落とされたとあっては、私達の存在意義がないですしね』

イギリスでもそうであった。まるで湧いて出たと思えない状況からのスタート

で有ったが為に数的不利に加えて至近距離での乱戦に巻き込まれて結果敗退はしたものの、単純なキルレート自体は機体性能が優れていた人類側空軍の方が優位であった。

「……イギリスとフランスの借り、この場で返して貰うぞ。この Mutant Ship……!」

イギリスでそれなりに親しかったイギリス空軍の友人、又顔を見た事は無くとも共に戦い、異国の空に散ったフランス空軍の戦友を多く失っていたウィングスーの奥底から煮え滾った決意の宣言と、E-3『Star eye』からの「敵機増援多数!」のコールが無線上に響き渡ったのは、殆ど同時であった。

「……一体、どういう事だ? 何故、遅々として進まない?」

やや暗い照明に包まれたCICにて呟く、一人の白銀の女性。少々渋い表情と疑問満

載の一言は、思念操作にて動かし、映し出したスクリーンの戦況状況に向けて放たれていた。

「米軍の長距離対空ミサイル攻撃である程度削れる事は見越していた……だからこそ対応能力を遥かに超える機数を叩き付けた……だが、未だに東海岸の内陸に雪崩れ込めない……？」

自身の予想を超える戦況に、動揺とまでは行かないまでも考えが追い付かない『デュアルクレイター』。目算では既に乱戦に持ち込んだ米軍航空部隊と地对空ミサイルの防衛網を突き破り、各地の軍事基地に加えて弾薬が余れば適当に自由の女神等のアメリカを象徴する建造物でも破壊する予定だった。後者は挑発の為だけである。

「……ならば、仕方が無い。少し早いが艦載艇を出そう。まさか、操縦者が機械で無く人間であると言うだけで此処まで差が付くとは、な」

だが現実には、三度目の超巨大強襲揚陸艦『デュアルクレイター』艦載機隊の強襲にも、米軍は耐えた。『デュアルクレイター』なりに、分進合撃や一塊となつての突撃と工夫も

していたが、米軍は適切に必要な箇所に戦力を集中し、尚且つローテーションを構築し決して防衛網の網に穴を開ける事は無かった。一定数が強引に抜け出たとしても、大して間を置かずに撃墜され続けている。

「仕方が無い、少し早いが出るか……。しかし……。分からんな、アメリカ人の考えは。戦場に輸送機を、それもあのような高空に飛ばして何をしている？」

そう呟き思念操作にて艦載艇を出撃し、自身も突撃体制へと移行する姿を、高度二万メートル近い高空を飛行するE-3<sup>Sentry</sup>が、あらゆる機材で持つて捕捉し、睨みつけていた。『デュアルクレイター』の思考と知識には、空中警戒管制機と言う物の存在は無かった。

「……『桜風』」

「好く」



「……不知火が言う事では無いかも知れませんが」

「はっ」

「……もう少し説明があつても良かったのでは？」

「……御免なさい」

戦闘空域内へ突入して暫く経つ『Sky Train』内部。その中では『桜風』が座席の上で正座して不知火に小言を言われていた。これで『桜風』がこの世界に来てから一体何度目の御小言になるのだろうか。

「あれ程の兵器や技術を持つているのが敵なので、まさか空中管制の概念が存在しないと言う事を予測しろ、と言うのは難しいです」

「はっ……」

しよぼくれる『桜風』の姿を見て、何とも言えない気持ちになるしかない不知火。余りにも無謀極まりない輸送機の突撃を安全だから問題ないと主張し続ける事に、仲間への攻撃を極度に嫌う『桜風』の性質とは些かズレがあると疑問を抱いた不知火の疑問に對して。

「だって、私達の世界は大艦巨砲主義のまま進化したせいで空中戦の概念が1930年代後半からあんまり進化していないから、この世界の米軍だったら問題無く防いでくれるよ」

「概念が進化していない……?」

「うん。砲撃戦や魚雷戦は此方の十八番だけど、代わりに航空戦関係だと数纏めてぶつける程度で空中管制機による三次元指揮とか、想像もされた事無かったから。結構早くに航空機は完全無人化されて比較的簡単な機動が主体だったり、脆弱なハードの航空機じゃ何したって直ぐに落とされるって現実も有るけど」

「こんな言葉を返されれば、何かしら言いたくもなるだろう。因みに米国には事前に二式大艇を使用してその旨は伝えられていた為、この場に居る面々が知らなかったのは完全に言葉が足りなかった『桜風』の失策である。猛省しなければならぬ。」

「……流石に、今までの情報だけでその事を予測するのは無理だよ、『桜風』」

「うぐっ」

瑞鶴の率直な感想の一撃により、中破し首を垂れる『桜風』。

「確かにな……あの映像で分かる事は多種多様な兵器と軍艦が乱舞していると言う事だけで、戦術関係の事まで想像するのは困難だ」

「ぐう……」

続けた長門の一言が、更に『桜風』へ大破を齎し、更に深く首を垂れる。

「……それ以前の話として、米軍の事を信用するのは兎も角としても、ミサイルが飛び交う戦闘空域に突入して飛び降りろと言うのは、危険以外の何物でも有りません」

「……かはっ」

漸く観念した加賀の冷たい一言が、『桜風』の脆弱な精神バイタルバートを貫き、サンドイツの如く、または土下座するかのように深々と頭を垂らす。『桜風』、加賀の口撃により撃沈確実である。

「……どういふ事何だ？」

「単純な勘違いによる伝達ミスです。あの娘、日常会話はそれなりに出来て来ているけど、過去の経験からこういつた伝達とかは自分の中で止めて他人に伝えるのを高確率で頭から抜け落としている事が多々あるので」

「あ、えつと……説明、感謝します」

「結局お前も話しかけてるじゃねえか。ズルいぞ」

「……いや、俺はお前と違ってそう言うつもりは無かつたんだよ」

そんな状況に着いて行けないゲルマン系護衛兵の疑問の声に、深山満理奈が律儀に解説する。戦場以外では基本的に『桜何処にでも良そうな純朴少女風』が真面目系天然娘な事を知る由も無い部外者が見れば、遠くから見た今回の姿は何某の西歐人視点東洋の神秘的なあれヘンテコな儀式に見えなくも無い。多分。

「……それで、ミズ<sup>M</sup>」

「何かしら」

「本当に、飛び降りるつもりかな？」

「当然」

さも当然と言い放つ深山満理奈大和撫子に対して、軽くため息を吐きつつ肩をすくめたラテン系護衛兵。一見ラテン系らしいお調子者な雰囲気満載の彼だが、実態としては空挺技能を身に着け、原隊でも相当信頼されている程度には技量の高いベテラン兵士である。そんな彼からして見れば、空挺降下所かパラシュート降下をした事も無いはずのド素人の自殺紛いに危険かつ無謀な行動には好い加減看過出来る訳が無かった。

「……正直言つて、現役兵である俺から言わせて貰えば、あんたらの行動は余りにも危険すぎる」

「おこ……」

「悪い、責任は俺自身が取るから黙つてくれ……。確かに、あんた空挺らの選択降下が一番手っ取り早いのは事実だが、今までパラシュート降下もやった事のない素人がするのは流石に経験者として止めざる負えない。アメリカ人として極めて有難いのは山々だが、今からでも……」

「……………」

そう言つて翻意を促すラテン系兵士であつたが、当の深山提督はラテン系兵士の説得は何処吹く風、無言で窓の外を眺めていた。同輩の行動に頭を抱えたゲルマン系兵士が視線を移せば、つい先ほど生贄見たいな様相だつた純朴少女（坂風）が同じように窓の方を見ていた。周囲の少女たちは何事か話し合っているが。

「……なあ、確かに不快になる気持ちになるが……」

決意を翻させようとする言葉に不機嫌になつたと思つたラテン系兵士が、更なる言葉を紡ぐべく口を開き……

「……全員、何かに捕まって!!」

「皆伏せて! ミサイルが来る!!」

深山提督、そして『桜風』の突然の絶叫、そして同時にラテン系兵士はゲルマン系兵士と共に行き成り座席に引きずり込まれたとほぼ同時に、鼓膜に直接叩き付けられるような爆裂音と金属が引き裂ける轟音、そして機外へと猛烈に引きずり出される暴風が機内へと襲い掛かった。

「……機外に放り出された人は居ません！」

「轟音が……戦闘機……」

「……パラシュートを……飛ばないと、そろそろ限界……」

「…………立ちなさい…………蹲つても…………」

「加賀さん…………冷静過ぎ…………」

轟々と風切り音が吹きすさぶ中、場違いに冷静な声と共に、焦っている事が分かる調子外れな大声が風音にかき消されつつも機内に響く。

「…………な…………なに…………が……………………？」

突風が吹き荒れる機内にて、ラテン系兵士は顔面と片腕と右足を強打して悶絶する同輩に対して、そう言うのが精一杯であった。

「クソ、状況は?!」

「機体後方にミサイル着弾!機体に大穴が開いています!機内気圧低下、右尾翼脱落!上部尾翼破損確認!」



「良く飛んでいられるな！流石我が合衆国の最新輸送機だ!!」

「やけくそ丸分かりですよ機長！」

「言われなくても分かっている!!」

今までの警告より遥かに危機を煽る音色と点滅レットアラートが操縦席全域を覆い尽す中、操縦士二人はコックピットが映し出す自機の被害状況を総濼いに確認しながらも、安定的な飛行を行える様に必死に任務を遂行していた。無理に飛ばせば、機体尾部が耐え切れずに引き千切れて操縦が更に困難になり、だが緩め過ぎた飛び方をすれば、敵機に集れて一巻の終わりだ。

「ウイングス隊! 『Star eye』! 此方 『Sky Train』、被弾して損傷は軽くは無いが未だ飛べそうだ!」

【此方 『Star eye』。 『Sky Train』了解。後少しだから頑張ってくれ! ウイングス隊、行けるな?】

『問題無い、未だ行ける。行けない奴は俺が先んじて落とすからな』

『隊長それ流石に冗談ツスよね?!』

『ウイングス3、隊長は貴方が敵機を撃ち洩らした事により出た被害に対してお怒りの

様子だよ』

『ヘッドオンからの一航過で三機撃墜ワントライ・トリプルキルで不十分だと申すのかウイングス2?!後サラツと嘘言うな、アレ多分流れ弾だろ!』

『護衛がもう少し居れば防げたかも知れませんが……数が多すぎて、手が足りなさすぎる』

宝玉や黄金より遥かに貴重な積み荷に被弾を許してしまったウイングス隊だったが、『デュアルクレイター』搭載の艦載機隊からの攻撃はE-3『Star eye』の指揮の元奮戦し、撃退し続けていた。AIM1200 AIM9X サイドワインダー2000 M61A2中距離空対空ミサイルは既に欠乏した為に短距離空対空ミサイルとバルカン砲で戦闘継続していたが、針路上とは別方向の戦闘空域より突発的に飛来したミサイルが偶然直撃したのだ。確率論的に絶対有り得ない訳では無いが、不運以外の何物でもない。

「……機長!アレ!」

「……冗談見たいな光景だな。流星にデカいにも程が有るぞ、俺達SF映画か何かの登場人物になったのか?」

「それだと、自分ら積み荷送り届けた途端に撃ち落される役ですよね」  
「……そうなるな」

そんな会話を交わして、視界に入った異様に巨大かつ異質な形状の軍艦らしい物の事を軽く評する操縦士二人。厳密に言えば単純なる現実逃避だが。

「悪い、邪魔するぜ！」

「ちよつと、操縦席には入らないで……って、あんた確か護衛兵だな!」

「時間が無いから要点だけ伝える!後5分だけこのまま直進してくれ!積み荷さんらの頼みだ!」

「五分、五分だな!?良いだろう、絶対飛ばし切つてやる!」

「それともう一つ……『無茶に付き合わせてしまい、ごめんなさい。お詫びに勝利をプレゼントいたします』、だ!!」

—— 粹な事言ってくれるねえ、あの嬢ちゃん達

進入したラテン系兵士の伝言に対して現在笑える位に危機的状況でありながらも場

違いにそう思った機長は、無言のままのサムズアップを答えとした。降下地点まで、あ  
と少し……

## 第五三話

## 悪夢、再び(Nightmares again)

in)

「……もうそろそろです！皆さん、事前の作戦通りをお願いします！」

「一番苦労するのは相変わらず『桜風』だけだね！無茶して怪我しないでよね！」

「頑張るけど多分無理！」

「やりなさい！私怒るわよ！」

「いやでも今から戦場に出るのに流石にそれは理不尽だよ陽炎?!」

——仲が良いのは素晴らしい事では有るんですが……

「……青葉、顔に出てるよ」

「司令官」

「気にしなくても大丈夫。これからもどうにかなるから」

オレンジ髪の少女と黒髪一束結びの少女が暴風に負けない様に大声を出しあう中、何

時の間にか制御役ポジションに収まりそうな気がしてならない青葉は、相変わらずに相変わらずな二人を見て何とも言えない思いになるのだった。尚、この場では金剛と不知火は現在パラシュート降下のやり方の最終確認を、加賀と瑞鶴は艀装を呼び出して艦載機の微調整をしていた。

戦況は刻一刻と……主に、米軍にとって悪い方向へと変化しつつあった。ファースト・ラウンドの航空戦では世界最強と自他共に確信する米軍の戦闘機部隊によりやや優勢のまま推移しつつあったが、『デュアルクレイター』がその外見的最大の特徴である双胴式の船体に収められた二つのウエルドックデツキ状のドック式格納庫より無数の艦載艇を発艦させ始めると事態は変化した。

『桜風』の居た世界……もつと言えば、ウイルクア帝国が源流の超兵器技術を用いられた艦艇は、船体の基礎構造が異様に強化されているのが通常であり、この法則は『デュアルクレイター』が放つ小さな艦載艇でも例外では無かった。

「Shitt……至近弾で転覆も誘爆もしないのはおかしいネー！」

「雷爆撃を直撃させない限り、あの艦載艇を撃沈は出来ない……厄介な話です」  
「気持ち悪い位に居る……まるで、海が意思を持つてうねり出している見たい」

彼女達帝国海軍見張り員仕込みの、初期型電探より視える艦娘の視界の中には、アイオワ級戦艦の砲撃が至近距離に着弾しても平然と水柱を突き抜けてひた走る小型艦載艇の姿が有った。視界の端では、最新鋭の新型空母、ジェネラル・R・フォード級航空母艦に搭載されたMk. 15 20mm CIWSで蜂の巣にされた筈が、何事も無かったかのように突貫し雷撃を敢行、狙われた米軍空母を庇うべく緊急増速したボルチモア級重巡洋艦の横つ腹に大きな水柱が生まれていた。

「……『桜風』。あの艦載艇の名前は？」

「小型艇I型。艦級とか名前とかは特に無い奴だけど、行き成りどうしたの不知火？」

「そうですね……いえ、特に理由は無いです」

「不知火さん。多分『あんなとんでもない艦ならばどんな名前なんだろうか』と思ったんですよね？」

「……はい」

「青葉さんに内心見抜かれて顔を染めた不知火可愛いー！流石私の妹！」

「……陽炎姉さん、一体何を言ってるんですか。不知火に落ち度でも？」

海を覆う艦載艇ヒラニアと、一向に減少する気配を見せない敵垂直離着陸機ホー、ヘリコプターの群れを追い払うのに難渋する米軍艦艇カワボイと全艦種揃い踏み揃の米艦娘を横目に見ながら、相変わらずやいのやいの騒ぐ駆逐艦勢小動物達とそれを微笑ましく見守る長門達大型艦娘勢薩。『桜風』に関しては、雰囲気こそ柔らかくも抜き身の妖刀の如き威圧を秘めていたが。

「……時間です。皆さん、幸運をー」

そう言うなり、一番に『デュアルクレイター』が懐に飛び込む為に扉の目の前に居た『桜風』は一息に飛び降りようと……

「……何やってるの、『桜風』？」



……する筈が、車のサイドブレーキを行き成り全開にしたかのように突然、扉の淵をつかんだまま急停止した。身体は外に向けたままなので、『桜風』の表情を見る事は出来ない。

「……………陽炎」

「どうしたの？」

「……………怖い」

ポツリと言われた『桜風』の言葉に、全員が一瞬意味が分からず唾然とした。が、考えてみれば当然である。海上であれば鬼神の如き戦いと、死狂いと思われても仕方が無い行動ばかりしてのけるが、それ以外では一部ズレてるだけの少女である。初めての空中ダイビングに恐ろしさを感じても仕方が無いと言えば仕方が無い。

「はあ…………『桜風』」

「深山提督、ちよつと、ちよつとだけ待って下さい。今心の…………」

呆れた溜息を吐く深山提督が、順番待ちしていた艦娘の脇を通り『桜風』の背後に立

つ。その事を感じ取り、声を聞き取った『桜風』は何事か言い出すが……。

「えっ？」

背中に背負ったパラシュート越しに伝わる衝撃と、地に足が着かない未知の浮遊感。

「はい、行ってらっしゃい」

「……び、びゅあああああ……」

時間が押している事も有ってかそんな事泣き言は一切聞かずに、深山提督は容赦なく『桜風』の背中を押した。……押した、と言うよりは突き落とした、と言うべきかも知れないが。

「……綺麗な顔して、容赦無いなあの人……おい、大丈夫か」

「ああ……まだ痛むが、骨までイカれてる訳じゃ無さそうだ」

嘩然とする面々を他所に「先に往くわよ」との一言と共に深山提督が飛び出したのに触発された艦娘達が慌てて全員飛び降りた後の空っぽの機内にて、アメリカ人護衛兵二人は、そんな感想を交わしていた。既に荷物を届け終えた『Sky Train』は、旋回して戦闘空域より離脱を始めている。

「……勝つてくれよ」

「心配するな、彼女達は絶対勝つき」

「……その無駄に自信満々な根拠の理由は？」

「知れた事！日本人は、『出来る』と言った事は絶対やっつてのけるって話だからな！」

「……それ、本当に宛になるのか？」

「……そう言う事か。そう言う事か！ああ何と言う事だ、こんな世界に来てもお前と会いまみえるとは！」

雪の様に白い髪色と瞳が特徴的な氷の美女の言葉が木霊するCIC。双胴と船体そ

れぞれにそそり立つ艦橋が外見上一番主張している、超巨大双胴強襲揚陸艦『デュアルクレイター』。それを操る彼女は、先程までのある種の虚無感等掻き消えたかのように、様々な感情を爆発させていた。

「私をつ、超兵器をつ、『デュアルクレイター』を沈めた駆逐艦が、まさか共に、この世界に転移して来ていたとは！ああ、神よ。私は今こそ貴方に感謝しよう！こんな、こんな場所です、まさか、あの駆逐艦と戦えるなんて!!」

所々詰まりながらも、そして目尻に涙を浮かべながらも、雪の様に白い顔を紅潮させる『デュアルクレイター』。先程までの退廃的な雰囲気など消え失せたその姿は、軍人然とした風貌とは似つかわしくない程に……まるで、数時間迷子になり、漸く両親を見つけた幼児の様であった。

「艦載機隊、艦載艇部隊！出し惜しみ無しだ、全て出す！邪魔物は全てこの海から叩き出せ！あいつは、あの駆逐艦は、私の！私だけの得物だ!!」

戦闘空域に突貫して来た輸送機が誰かを降下させたかと思えば、それが軍艦に変化

……しかも、最弱である筈の駆逐艦でありながら自身をブリテン島沖の海底へ叩き沈めた駆逐艦『桜風』であった事は、超兵器としての立場と矜持を粉微塵に打ち砕かれた汚名を雪ぐ為に神が作り出した絶好機に他ならなかった。少なくとも彼女は、そうとしか思えなかった。

「沈めて見せる！絶対に、我がウィルキア帝国に齒向かったあの駆逐艦は、この『デュアルクレイター』が沈めて見せる！それが、それこそが！私の使命だ！」

……彼女の思考は、既に『桜風』をどうやって撃沈するかの一歩に全てを注ぎ込んでいた。先程まで襲っていた米海軍の事や、レーダーと艦載機で確認して居た筈の別の降下した艦艇群の事は、完全に忘却の彼方であった。

『……生きてますかー艦長ー?』

「……死ぬかと思つた」

『OK、大丈夫ですね。じゃあ行きましようか』

「……心配の言葉一つくらい掛けてくれても良いんじゃないかな、副長」

『撃沈されない限り死にはしないでしょ、艦長』

艦艇前部第三砲塔の最上部で腹這いになり、海水で全身びしょ濡れのまま降下中叫び過ぎて荒い呼吸をしていた自らの艦長に対して完全なる塩対応で答える駆逐艦『桜風』の副長。周囲の妖精さんもパラシュート降下で減速していたとは言え、想定外の着水を強いられた艦の状態チェックに余念が無く、自らの艦長の事は殆ど放置状態である。

「……提督や青葉さん、陽炎たちは?」

『向こうは向こうで無事着水したようです。ただ風で少し流されたらしく、艦艇のチェックと合わせて少し集合まで時間かかる見たいですが』

「……なら、良かった」

顔こそ下に向けたままで表情は見えないのだが、声色は安堵し切った様子で副長に答

える『桜風』。少しとは言え動かずにいた為、荒かった吐息も段々と落ち着きを取り戻しつつある事を内心安心しながらも、副長は次の言葉を紡ぐ。

『それで艦長』

「何……？」

『どの程度奴さんの事見てるんですか？』

「……何時から気付いてたの？」

『初めから、ですかね？』

黒髪より海水を滴らせながら面を上げた『桜風』に対して、仁王立ちして事も無げに返す副長。この世界に転移してからずっとの付き合いである。『桜風』<sup>艦長</sup>が本当は何を考えているのか、何となく見当が付いていた。

「……まあ、『デュアルクレイター』の事は置いて置くとして。此処まで詭えた様な絶好機を逃したら後が怖いからね」

『真意知ったらまた陽炎さん達怒りますよ？』

「後回しにしたら余計に苦勞するから……それに、言わなければ、大丈夫だから……多分」

『まあ正直に言つて、深山提督筆頭に言わずとも艦長が何か企んでる事自体はバレてると思いますけどねえ。艦長分かり易すぎますし』

「……………イヤ、キット大丈夫ダカラ、ウン」

顔面真つ青にしながらも自分に言い聞かせる様に呟く『桜風』に、此奴もうダメだと勝手にご冥福を祈り出す副長妖精。挑戦した回数はないとは言え、この世界に来てからこの様な裏のある考えが思惑通りに行つた事は一度も無い。

「……………ふう。……………落ち着いた」

『じゃあ早く艦長席に来て下さい。もうそろそろ艦全体の確認が終わる頃ですし』

「分かつてるって……………さて、と」

何やら呪文の様に小声で「大丈夫、大丈夫、キット分かつテクレル」と暫く呟き続けて落ち着いたのか、『桜風』は副長妖精を肩に乗せて第三砲塔より甲板に飛び降り、何事



も無かったかのように自身の居るべき場所へと歩み出す。

「……後部主砲」

『撃ち一方、始め!!』

唐突に歩みを止めて下された号令に、間髪入れずに反応する副長と瞬時に稼働し、咆哮する二基の『15. 5cm75口径4連装砲』。直後、何かが爆散する轟音が辺りに響き渡る。

「……英国空軍の国籍マークが記された、複座型可変翼機。間違いない、『トーンード

GR. 4』

『向こうさんもようやく本気出したって事ですなぁ』

15. 5cm75口径砲弾複数の直撃と至近弾の爆圧を受けて炎上し、艦上部を飛び越えて海面に突っ込んだ敵機の一瞬の姿を見届け、そう判断しながら艦橋直通昇降機エレベーターへと入っていく『桜風』と副長。対艦兵装は無誘導の1000lb爆弾だけの為に直線軌道を取らざる負え無いとは言え超音速機を手動砲撃で撃墜する事は本来相当至難の業

なのだが、そんな事位は駆逐艦『桜風』では極々当たり前の日常である。

「……何だか凄い事になってるね、無線」

『まあ、今までヘリコプターとV／STOL機しか出してませんでしたし、通常の固定翼機が出て来る事は想定外だったんでしようけどねえ』

「二応こうなる可能性とかは伝えはしてたけど、やっぱり直接見るまでは信じられない、か。まあそれはある意味軍隊組織的には極めて真つ当かつ正常である証拠でもある訳だけど」

傍受した無電から、垂直離着陸機だけでなく通常の固定翼機……それも、完全なる陸上機が『デュアルクレイター』の短い飛行甲板より多数飛び立った事に様々な動揺と驚愕、そして逆に奮い立つ音声が流れる中、何処か他人事の様には話す二名。とは言え、『桜風』に取っては此処までは想定通りなのだ。

『それよりも艦長。早く何時もの服装に着替えられたらどうですか？エレベーターが水塗れになりますし』

「あ、ごめん。えっと……」

艦橋へ向かう昇降機の前で副長に指摘された『桜風』。そして『桜風』は、両手と海水に濡れ切った衣類を眺めて……

『……どういいう理屈でそうなるんですか』

「……さあ？」

その場で軽く一回転した途端に、『桜風』の身体の線が浮かび上がる程度に海水に浸かっていた上下共に飾り気皆無のシンプルな普段着から、『桜風』の艤装でも有るウイルクア解放軍女性士官用の軍服へと一瞬で着替えられていた。何時でも艤装に着替えられる事何故そんな事が出来るのか等の理由は全く分かっていない。艦娘共通の七不思議の一つである。

「まあ、今更の話だしね」

『まあ、確かに今更の話ですね』

昇降機エレベーターから降りて艦橋の戦闘指揮所へ入る扉前にて、軽く言葉を交わし終えた『桜風』が自動開閉扉横のセンサーに右手を当て、空気が抜けた様な軽い音と共に開け放たれる

見慣れた風景に、何時もの場所で何時もの様に仕事をこなしながら挨拶する艦橋に詰めている妖精さん達。何故か、自然と安心してしまうこの状況。

「じゃ、本題に行こうか」

『そうですね……では』

『What's the order Captain』

「ご命令を、艦長」

「The enemy's sinking that's all」

「敵の撃沈、それも全てを」

「Roger that Captain』

艦橋に詰めている妖精さん達に見せた、穏やかな微笑みを湛えているその二対の眼の光は、先程までの柔らかさが一切掻き消えた、触れる物全てを切り捨てる刃の如き鋭さを秘めていた。

「各員、状況を」

ウイルクア解放軍女性士官用の軍服艦長  
 何時もの服装と何時もの場所にて下される、何時もの声色風の声。その声に応えて  
 機器を操り艦橋全面ディスプレイに映像を出す妖精さん達も、手慣れた物だ。

『電測員です。敵小型艇と航空機、今なお増大傾向。正し、米軍艦艇並びに分艦隊深山対超兵器艦隊へと新規に向かう戦力は激減。平たく言えば、敵全戦力の最低七、八割が此方に殺到中です』  
 『加えて、当の超巨大双胴強襲揚陸艦『デュアルクレイター』も獲物を見つけた狂犬の様  
 に此方に向かって来ていますよ。艦長、ペットにでもどうです？』

「うーん。じゃ、餌には水雷妖精を食べさせれば良いかな？」  
 『それだけはお許してください『桜風』様！』

「なら真面目にやってね、もう」と少々困った表情で軽くため息を吐きながら言う『桜風』の言葉に、内心（やっぱり砂糖より甘いよなあ艦長）と当の本人除く艦橋要員全て

が思いながらも、物理的に五体投地な水雷妖精以外の面々は自分の仕事をこなしている。

『威力偵察に出撃したスカーフフェイス隊、並びに米軍空中管制機からの情報集約が完了。今、海図をモニターに……』

「もう出したよ。……よし、取り敢えずはこのルートで」

『アツハイ……つて、コレ……敵さんのど真ん中を強行突破するルートなのですが』

「うん。まあ、一々回り込む時間的余裕も無いしね。向こうがこつちに向かって来るお陰で相対的距離はそこまで長くは成らないと言うのも有るから、被弾も最低限に抑えられるよ」

『……ウチ等は名高き鬼島津の末裔か何かですか？ 関ヶ原の退き口級の敵中突破具合なんですか』

「ボヤいてる暇があったら総員第一種戦闘配置。後少して敵小型艇群と会敵するよ」

行き成りの『桜風』から下された命令に対し、口々に悲鳴を上げながら砲術班等の戦闘要員が艦艇各所を全力疾走する妖精さん達。饅頭顔の二等身が多数動き回る様は傍から見ればコミカルだが、当の妖精さんらは至極本気で真面目である。

『敵小型艇接近！総数不明!!』

「海を埋め立てる勢いだねー。レーダーでの光点で分かっていたけど、実際に見ると壮観だよ」

『何呑気な事言ってるんですか艦長!』

「はいはい。まずは面舵30度、全速前進。小物に関わってる暇も無いから、砲雷撃は最低限で行くよ」

『因みに針路上を塞ぐ敵小型艇は!?!』

「轢き潰して」

『何となく予想着いてましたよ了解しましたコンチクショー!』

真顔で事も無げに言われた馬鹿げた命令を、諦観満載の絶叫で返す主計課妖精。周囲の爆笑に包まれながら漫画やアニメ的表現ならば確実に双眸より涙のラインを浮かべながら放った彼の言葉は、修理や補給の度に工廠の面々から呆れと引き攣った表情を常々見せられる気苦労が多量に織り交ざっていた。実際の所、主計課妖精が処理する修理費用や補給申請の報告書は『桜風』所属の妖精さんのみならず、深山艦隊所属全艦娘の中でも頭二つ分抜きんでているのだから仕方が無い。

「……取り舵15度、前進強速。主砲、撃ち一方、始め」  
『取り舵15度、前進強速！撃ち一方、始め！』

笑い声が響く艦橋の雰囲気が、『桜風』の号令一下にて一瞬で塗り替わる。幾多の各種機械音と『桜風』の号令、妖精さん達の応答と報告の声。そして遠雷と轟雷が折り重なる様にして艦内にまで響き渡る、砲雷撃と防御重力場の被弾による反射が生み出す無数の轟音。駆逐艦『桜風』では日常の、何時異常なもの光景。

「さて……やりますか」

『不知火さんの真似ですか、艦長？まあ常々ナイフ見たいな眼光している不知火さんと比べると、何だか可愛らしいモンですが』

「……水雷長。やつぱり終わったら釣りする為の餌ね。頑張つてサメをひっ捕らえるまで何度も投げ込むよ」

『止めて下さい多分死んでしまいます!!』

「いやそこは断言しなさいよ」



「……此処までは、予定通り。と言う訳ですか」

「……取り敢えずは、そうなりますね。艦長」

米海軍第四任務部隊旗艦、タイコンデロガ級ミサイル巡洋艦アンツイオ<sup>A n z i o</sup>。深海棲艦との戦闘で多数傷付き、漁礁へと化した全世界の現代艦の中でも極僅かの、開戦前からの生存艦の中で常に最前線で踏ん張って居ながら今まで一度足りとも被弾していない、現代の幸運艦である。

「しかし、壮観ですなあ、司令官<sup>U n y i e l d i n g G e t t y s b u r g</sup>。不屈のゲティスバーグ<sup>G e t t y s b u r g</sup>に、  
 狂犬のオスカー・オースチン<sup>M a d d o g o f O s c a r A u s t i n</sup>。血塗れのフォレスト・シヤーマン<sup>B l o o d y F o r r e s t S h e r m a n</sup>。そしてこの、  
 祝福のアンツイオ……21世紀も始まって久しいと言うのに、まさかこんな武勲艦が  
 勢揃いするとは夢にも思っていませんでしたよ」

「……そうですね。それも、彼女達は情報が集まっていない中での圧倒的不利な戦況で  
 生き残り、戦果を上げ続けた、本物の武人達です」

「艦娘の娘達も、時々遊びに行っているそうですから、あの時の英雄達の御眼鏡に叶うだけの事は有りますなあ」

現代の海戦では通常有り得ないが、第二次世界大戦頃の常識では広すぎる程度の距離で大西洋を航行するミサイル駆逐艦、ミサイル巡洋艦主体で構成された米海軍第三任務部隊。最近海に出るには欠かせない艦娘は艦隊に居る物の数は少なく、輪形陣のやや外側にまるでミサイル駆逐艦やミサイル巡洋艦の盾になるかの様に配置された少数のアイオワ級戦艦やレキシントン級航空母艦の存在を省いたら、現代の正規空母が不在なのを除いてまるでこれから観艦式通に参加常でもする得ような艦艇構成なだった。

「司令官殿は、不満かね?」

「茶化さないで下さい、艦長。それに、我が母国の防衛を、他国に頼らざる負えない事に対して、拘泥たる思いを抱かない軍人は居ないと思います。……あの要請書を見るまでは、ですが」

「君らしい答えだが、全く持って同感だ。同盟国とは言え、やはり出来る限り自分の事は

自分で終わらせたい。面子もあるが……」

「……軍人としての意地、ですね」

「……そうですね」

米海軍原子力空母と艦娘による合同部隊。そして遠路遙々極東から空中ダイブしてまで戦闘に参加している同盟国の友人達が母国の至近で激戦を繰り広げている最中、米本国東海岸近辺の艦隊から掻き集めた全てのミサイル駆逐艦、ミサイル巡洋艦で構成されたこの艦隊は今現在、戦闘海域から西側に離れた、台風が残した残滓である荒れた海を航行している。

軍人で有りながら本土防衛に参加出来ないと言う、ある種の絶望感。戦友達が命懸けで戦う中その時が来るまで待つしか出来ないと言う、軍人として真つ当な焦燥感。そして、形式上要請と言う事には成っているが実際には完全なる命令と同義である、別世界から来たと言う少女の言葉に従わされると言う、特大の屈辱感。正直な所、軍命が下つているとは言えこれほどの役満が揃えば、普通は士気低下は免れない。特に最後の要請と言う名の命令に関しては、無礼にも程が有る。

「……彼女は異世界出身だと言う。つまり縁も所縁もない我が国を守る為に太平洋を遙々超えて来たばかりか、自身の命すらもテールブルにベットした。危険を顧みずに血流してくれている戦友に対して、みっともない戦は出来ない」

……だが、彼らに士気低下しているという様子は見られていない。第四任務部隊の司令官の言葉に対しても、C I C 要員のみならずそばにいる艦長も、異論を挟む様子も見られていない。第四任務部隊所属のミサイル駆逐艦、ミサイル巡洋艦の陣形も荒波等存在しないかのように乱れる様子も無く、何処か覇気をも感じさせる様な趣であった。

「……しかも、初対面で有る筈の我が軍に対して、自身の心臓すらも預けて、ですからな。……絶対に、失敗は許されない」

「我が栄光あるアメリカ海軍の歴史に、戦友を敵諸共撃ち殺して敵艦を沈めましたと言おう、恥以外の何物でも無い戦歴を刻ませるわけには……行きませんな」

司令官の言葉に、何処かボヤク様な口調で返した艦長は、作戦開始直前、第四任務部隊所属の高級将校に配布され、出撃後に見る様に厳命されていた妙に高性能な軍用デバ

イスを使用し、とあるファイルを開く。

「……艦長。また、見ているんですか？」

「……ええ。司令官殿も知っておられる様に、私には孫娘が居るのですよ。風の噂では、件の少女と私の孫娘は大体似た様な年齢だそうで」

「私はまだ独り身ですから、余り多くは言えませんが……」

「お気持ちだけで十分です。ですが……私も、子を、そして孫を持つ親であり、祖父として……」

そこまで言うと言葉を詰まらせ、軽く俯く艦長。両目を閉じ、小さな溜息を吐きながら繋げた言葉。

「……こんな若い子供に、本来我々がやるべき全ての負担を押し付けた拳句に、血を流させるのをただ黙って待つしか無いのは、我慢ならんです。ですが、軍人として、我慢するしか無いのです」

再び目を見開いた艦長の視線の先には、妙に高性能な軍用デバイス……『桜風』が二

式大艇にて要請書と共に送り付けた異世界産通信機器のタッチパネルディスプレイには、とあるコードが入力されているファイルと、そのファイルの題名に書かれた短文が映し出されていた。

『作戦失敗時、駆逐艦『桜風』のIFFコードを標的とし、戦術、戦略核兵器による全面飽和攻撃を実行されたし』

敵味方識別装置

「出撃前に小耳に挟んだのですが……政府は内陸部に、一定数の部隊を展開しているらしいです。妙に嚴重に存在を隠蔽されているらしく、それ以上は分かりませんが」

「……つまりは、保険ですかね」

「状況証拠としては、そうでしょうね」

世界覇権国たるアメリカ合衆国は言うに及ばず、武力や権力の保持者を大きく動かすには、それ相応の何かしらの対価が必要である。完全なる義憤や慈善だけで国家権力の重い腰を上げさせる様な御伽噺は、それこそ無数の幸運や強力な指導者、社会のうねりの様な歴史の変革を齎せる何かが無い限りは絶対には有り得ない。『桜風』が対価の一つとした異世界技術情報だけでは、合衆国海軍への実質的指揮権の供与は、本当の所は不

可能だった。対価の重みが軽かったのだ。

「皆、同じ気持ちですよ。此処まで身を捨てた作戦を実行してくれているんです。しっかりとやり通さなければ、男が廃るって物ですよ」

「……そうですね、落第寸前筆頭候補生。全く……学校に居た時とは、見違えるほどに成長されましたな」

「……その茶化すところは相変わらずですね、教官殿」

『桜風』が突き付けた、米海軍を『桜風』の思惑通りに動かさせた一枚の切り札。それは、如何なる手段を取ろうとも、必ず合衆国へ勝利を齎すと言う狂った決意が滲み出た、超兵器『デュアルクレイター』との道連れをも考慮に入れられた作戦案であった。

## 第五四話 初陣 (Open War)

『……Holy shit』

日本艦娘の艦内とはまた違ったレイアウトと設備の艦橋にて、金髪碧眼の二等身鰻頭……アメリカ艦娘の妖精さんが、第二次世界大戦型としては優秀な部類に入る自艦のリーダーが伝える過酷な戦況を前に、そう思わず呟いていた。

『此方後部見張り員！ 駆逐艦マドックスと軽巡洋艦アトランタに複数被雷確認！！大傾斜確認！！』

『戦艦ワシントンに爆撃と魚雷が複数直撃！！ワレ、戦闘不能。戦線離脱』との連絡！！』

『被雷した重巡洋艦ボストンが落伍！艦隊への復帰は絶望的との通信です！！』

『空母オリスカニー、空母レイテに直撃弾！！格納庫内誘爆、艦載機発艦不能！加えて残存空母部隊からも艦載機隊壊滅の報告が上がって来ています！！』

艦橋に響く、敵艦載艇への砲撃による強烈な爆音に負けない様にするための怒鳴り合



う様な大声での報告の殆どは、現在このアメリカ本土防衛の為に掻き集められた大艦隊が加速度的に損耗を強いられている事が否が応でも理解させられる物しか無かった。

「Hey, Little Friend!」

『……艦長……?』

「暗い顔していたら不幸が寄ってくるよ!でも大丈夫、今日は私のLuck

Day!だから勝てるわ!」

『艦長……ありがとうございます』

—— 本当は、私も完全に圧倒されている始末だけど……ね

何時もと変わらない笑顔と澆澆な声で周囲のどんよとした雰囲気何とか打ち消そうとする、この戦艦の主たるアイオワ。彼女もまた、艦長としての責任感が如何にか押し止めて居るだけで、内心は今回の未知の世界に恐怖していた。なまじ、ある程度熟練と言われるだけの戦闘経験を積んでいただけに。

『主砲、発射準備完了!!』

「OK! Fire!」

十何度目かの、アイオワから下される砲撃命令に、大気に轟く轟音と共に撃ち出される12の砲弾。それらは全て、海上を疾走する敵小型艇の群れへと飛び込み、水柱を高々と作り出し……

『……戦果、確認出来ず!』

「Hitするまで撃つのよ!……Fire!!」

『……敵小型艇、三隻命中!しかし敵小型艇、更に増大しています!!』

「問題無いわ! <sup>No problem</sup> Me達のやる事に、変わりはないわ!!」

そして、苦労には全く見合わない戦果しか得られなかった。元々アイオワ級戦艦はパナマ運河を通過する為に船体が細く、主砲の衝撃を吸収仕切れないが為に踏ん張り切れず命中率が低いと言う話はあるが、今回はその程度の話ではない。余りにも、理不尽で相性が悪すぎるのだ。

アイオワに搭載された機関砲<sup>20mm、40mm</sup>程度では敵小型艇の撃沈は不可能であり、しかも何処<sup>敵</sup>その自称駆逐艦<sup>艦</sup>とは違って雷撃の処理や妨害も困難。副砲として搭載されている Mk. 12 5インチ連装砲<sup>口径、兩用連装砲</sup>は火力こそ小型艇を撃沈出来る程度は流石に有るが、数の暴力に押されて僚艦への援護は厳しい状態。戦艦が戦艦たる所以である主砲は、装填速度が遅い上にそもそも相手が小さすぎて殆ど木偶の坊状態に零落れていた。何せ、直撃しないと意味が無い上に敵の数が多すぎるのだから。

……駄目<sup>No.</sup>……このままでは……

目の前で幾度も繰り返される不毛極まりない戦鬪を長時間見せ続けられていれば、どれだけ強固な精神を持ち気丈に振る舞おうとも、人の身と心を持った艦娘にも少なからず心の隙が生まれる生物である。

『戦艦インディアナに急降下爆撃!! 第二砲塔誘爆、艦首断裂確認! 轟沈は時間の問題です!!』

『戦艦ミズーリ、ウイスコンシンに魚雷複数被雷!! ……て、転覆! 両艦共に転覆して

「います!!」  
What happened  
 「何ですつて!?!」

『戦友に加え姉妹艦二隻の戦没』と言う凶報を受けた直後、雷に打たれたかの様に飛び出したアイオワ。ガラスを突き破る勢いで確認した彼女の瞳には、報告に合った通りに姉妹艦が船腹を天に晒している姿と、船体が真つ二つにされた戦友の上空を憎たらしく勝ち誇った様に旋回する『A-6B イントルダー』、『A-3 スカイウォーリア』が映っていた。米軍爆撃機が米海軍戦艦を物理的に撃沈するとは、色々と反応に困る話である。

『か、艦長……』  
Captain  
Don't worry  
 「……心配、しないで」

動揺を隠せない自身の妖精さん達に対して、一瞬言葉に詰まりながらも普段通りの声色で、安心させようと言葉を発するアイオワ。

「今回、皆には応急修理要員が居るのヨ?だから……心配、要らないわ」  
Damage controller team  
Don't worry

『……………艦長』  
Captain

……とは言え、その言葉も怒りと恐怖と悲しみに満ち満ちた無理矢理の笑顔の元で発せられていれば、何もかも逆効果でしか無いのだが。

『……………通信、入りました！極東の友人達が、これより戦線に参加します!!』

そして……………その暗い雰囲気の中、二つの報告が入る。一つは、脳裏から忘れ去られかけていた援軍到来の一報。

『敵機確認！右舷側を水面飛行中、投弾体勢!!』

「直ちに迎撃と回避運動！急いで!!」<sup>N。w</sup>

『無理です！間に合いません!!』

もう一つは、性能で負けているなら弾数以上の数で押し潰せと言わんばかりの物量攻勢で必死に奮戦するアメリカ空軍の網を、高度数メートルと言う超低空飛行で強行突破

した敵戦闘ヘリ〔K4150 ホーカム〕による襲撃報告であつた。

「……Jesus Christ」

主砲、副砲は敵水雷艇砲撃の為に明後日の方向に向き、機関砲は妖精さんによる操作で照準が追いつかない。しかも敵戦闘ヘリ〔K4150 ホーカム〕はレシプロ機には不可能な並行・垂直移動を駆使し、歯を食い縛つて機関砲からの照準を定めようとする妖精さん達を嘲笑うかのように回避運動を繰り返している。ただ何も知らない彼らにとつて不幸な事に、40mm 機銃程度では相当量叩き込まない限り異世界の航空機は撃墜不能なのだ。

——此処まで、ね。Sorry, my sisters……

目の前に脅威が迫っている事も有つて周囲が気が触れたかのように叫び続ける中、ただIowaのみは静かに達観していた。戦友や姉妹艦が撃沈されている以上、自身の順番が来ただけなのだ。自身にも応急修理要員が搭載されている以上、完全に沈み切る事は無い。考えるのも恐ろしい沈没と言う死を体験して戻ってくるだけの話なのだ。

「……後は頼んだわよ、My 戦 Friend、my 家 sister……And、  
親愛なる同盟国海軍  
 Imperial Navy」

だが、達観はしても生きている限り、戦える限り最後の最後まで絶対に諦めないのが  
 アメリカンスピリット。撃ち勝つのが無理だとしても、せめて一矢報い相手に吠え面  
 も掻かせてやると意気込み、最期の檄を飛ばそうとしたIowaは……

「…What、What’s wrong?」

投弾の為か一瞬だけホバリングした敵戦闘<sup>『Kai-50 ホーカム』</sup>ヘリを一撃で叩き落した、翼に日の丸が  
 描かれた奇妙な……そう、現代的なシャープさとは程遠い、とても古臭い形状のジェツ  
 ト戦闘機。見張り員から興奮の余り上擦っていた声で叫ばれた『日本艦隊の援軍』の言  
 葉を聞きながら、Iowaは自身の覚悟を一瞬で持つてかれた事に呆気に取られてい  
 た。

「……全艦、無事に着水成功を確認しました、司令官！」

「了解。全艦、『桜風』の立てた作戦案……と言う程の物でもない突撃案だけど、それに従つて。一応細かい場所は私が随時指示、通信して修正するわ。青葉、海戦と同時並行になるけど宜しくね」

「了解しました！」

時は少し遡り、駆逐艦『桜風』が着水に成功するも、肝心な当人が一時的に疲弊して、ずぶ濡れなまま砲塔の上でへばつていた頃。降下に成功した深山艦隊対超兵器部隊の面々もそれぞれ戦闘準備を短時間で完了させていた。この事からも、この艦隊の錬度の高さが伺える。空中ダイブしても平然とし続けて指示を出す深山提督に引き摺られた結果でも有るが。

「……ところで、テートク？」

「不知火たちは、一体何をすれば良いのでしょうか？」



そんな中、護衛役として深山提督と共に居る不知火と金剛は、青葉の艦橋で居心地悪そうに手持ち無沙汰であった。周囲では忙しそうに既存の見慣れた装備と共に、妙に垢抜けて新品特有の輝きを見せる機器を妖精さんの群れが整備や調整に勤しんでいる中、何もする事が無いと言うのは真面目な二隻にとつて中々に精神的な苦痛がある。

「ちよつと手伝つて貰うわ。これから東海岸全域に侵攻を仕掛けている敵艦載艇の完全排除と、苦戦している米海軍への救援をしなければならぬのだから」

「了解デース」

「了解しました」

青葉が自身の妖精さん達へ元氣よく指示を出す中、艦橋内の海図台を取つ払つて設置したタッチパネル式汎用台が動き出し、重巡青葉に据え付けられた『桜風』が開発した複数の補助装置をベースに、自ら明石や夕張に工廠志願した恐れ知らずのマッド共の熱き血潮と滝の汗に涙の大海原の結晶たる試製S・I型電波探知装置電波探信儀が得た情報を映し出す。まあ新規開発と言つても、やった事は『桜風』世界の補助兵装の解析並びにデッドコピー失敗からの艦娘への装備捻じ込み設計構築だけだ。

因みにこの試製S・1型電波探知装置の開発には無数のドラマと死屍累々の屍が生まれたのだが、その点は本筋とは無関係なので全て割愛となる。精々、開発途中の貫徹10日目に栄養ドリンク山脈の中に埋もれた元美少女二人が緊急発掘されたり、頬がこけて目の隈が絵の具を塗ったかのように真っ黒ながら眼球だけ光り輝かせた開発メンバ―が積み上げた愛の結晶に目覚ましのコーヒ―を持って来た五月雨がスツ転んでコーヒ―をピンポイントにぶちまけ、小部屋一つ吹き飛ぶ程度の爆発を引き起こしたりとか、まあその程度である。

「……やっぱり、未だ慣れ切っては居ませんね」

「無理はしないでね、青葉。不味くなったら絞め落してでも止めるから早めに言つて。余りやりたくないから」

「し、絞め……あ、あはは……分かりました」

ただ、配慮しているとは言え船体のベースが第二次世界大戦型の日本艦艇で有る以上演算能力はどうしても制限がかかり、最初に高精度の『桜風』謹製補助兵装搭載した時より遙かにマシでは有る物の、情報を受け取る当人達の脳内を走る違和感はどうしても

拭えなかった。とは言え、『桜風』の証言上では、最新の物では思念操作、中期頃でも空中投射映像からの直接操作が可能なのだから、そんな物を一般的な第二次大戦型艦娘に乗つけたら開始数秒で情報の洪水に飲み込まれて気絶するのがオチだが。

余談だが、その世界唯一の出身艦は『音波探信儀VI』『電波探信儀VI』『防御重力波V』『電磁防壁V』等の搭載している補助兵装が必要とする容量より、船体本体の演算能力の方が圧倒的に上回って居たりしている。仮に例えて言うならば、一般家庭用パーソナルコンピューターのOSを最新鋭スーパーコンピューターの群れが動かしている状態に近い、らしい。

「……長い間見ていると、目が痛くなる光景デース」

「目が疲れるのは諦めてね、金剛」

「テートク！私そんな年寄<sup>Old Woman</sup>りじゃないネー!!」

「……誰もそんな事言ってますん」

両手を振り上げて大袈裟な怒りの表現と共にある意味恒例なネタを言う金剛と何時もの鉄板面で小さくツツコミを入れた不知火を他所に、深山提督は青葉と共にタッチパネル式汎用台を操作し、この場に居る各艦から送られてくる情報呼び出すと、殆ど読

み込みに時間をかける事無く東海岸海域に存在する敵味方全ての艦艇、航空機の居場所……それらをリアルタイムで映し出していた。仮にこのタッチパネル式汎用台自体に後付け式の補助演算装置と発電装置が付いていなければ、青葉達は今頃情報処理が追い付かずに眩暈か何かを起こし、ついでに電力不足で動かす事も出来なくなっていただろう。

「……それで、そう動きますか、司令官」

「うん……最優先事項は、米艦艇を拘束している艦艇の排除。続けて、ヘリコプターを主軸に敵艦載機の排除と妨害が第二目標。全艦、特に加賀と瑞鶴の二人はアメリカ艦隊の拘束を打ち砕く為に死ぬ気で動いて貰うよ」

「了解」

「分かったわ、提督さん」

「……行き成りPop Upされると、流石にHeartにDirect Attack  
kデース」

深山提督の指示に対して、前兆も無しに汎用台に小さめに映し出された加賀と瑞鶴の顔写真に対し、小さく呟く金剛。ゲーム化する戦争という言葉が有るが、今日の前で起

こっているのは一昔前の近未来SFアニメの世界だった。帝国海軍の見慣れた伝声管や測距機器等の中にこんな垢抜けた物が堂々と鎮座しているのは余りにも違和感を感じさせて成らないが。

「……よし、送信完了」

「碁盤目……成る程、領域区分ですか」

「 $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ に数字を入れて、視覚的に分かり易くする……此処は私達の知らない海だから、有難いネー」

金剛が言う様に、元来日本は本土近海、もつと言えば西太平洋海域は兎も角それ以上の対外軍事行動は殆ど考慮しておらず、特に大西洋に関しては海上自衛隊の練習艦が訪問する事は合っても艦隊規模が訪れた事は無い。特に艦娘に至っては、文字通り一隻足りとして太平洋とインド洋以外の海を知らなかった。一異世界とは言え大西洋での戦闘経験のある例外《駆逐艦娘『桜風』》は兎も角としても、大西洋の海をマトモに知らない経験不足を少しでも補う為の措置であった。

「そうね……さて」

基本機能を使用して区分けをした深山提督は、まじまじと線引きされた海域を映す汎用台を見遣る我が最愛の戦友達に軽く言葉を返しながら、一度だけ両目を閉じ、軽く深呼吸を行い、時間にして僅か数秒のみ軽く俯く。

「……始めるよ」

周囲では様々な喧騒で包まれている中、何故かその声だけが重巡青葉の艦橋内で妙に響き渡った。

「瑞鶴、加賀の両航空隊の内戦闘機隊はポイントθ5付近を進攻中の敵戦闘ヘリに対し攻撃、爆撃隊はポイントZ9、μ10、β近辺の敵艦載艇を攻撃せよ」

「り……了解、しました」

「わっ、分かった！」

アイアンボトムサウンド戦以後は戦力が整って来ていた事も有り部下である筈の艦娘達によって殆ど強制的に鎮守府業務に押し込められていた上、その戦闘での主役は主に戦艦や駆逐艦であったが為に人伝えでしか、戦場に置ける深山提督の言葉を知らなかった新旧一航戦コンビ。雰囲気の変化に驚愕しつつも、即座に指示された通りに反応。

「大和、長門は直ちに<sup>アルファ</sup> $\alpha$  3、<sup>オメガ</sup> $\Omega$  5のラインを突破した敵艦載艇を攻撃し、米艦隊を救援。敵艦載艇の魚雷は空気魚雷だが大口徑、油断せずに二隻が搭載している特殊機銃と小型砲で殲滅せよ」

「はいっ！」

「了解した！」

深山満理奈が再び面を上げ、双眸を見開いた時には、横須賀鎮守府第3海上部隊所属『深山艦隊』が創設されて半年も経たぬ内に勃発し、多数の艦娘と提督が飲み込まれたアイアンボトムサウンドにて敢えて陣頭指揮を執り、鍊度未了の艦娘すらも一隻足りとも喪失しなかった……あの時の姿に、なっていた。

常世に蘇った武神

「陽炎、並びに青葉両艦は速度を活かし遊撃する。敵艦載艇と艦載機の群れにこの経路で突入、敵陣を徹底的にかき乱し時間を稼ぐ」

「……冗談<sup>Joke</sup>、デスカー？」

「金剛さん。司令がこの場で冗談を言う人だと思いませんか」

「全く思わないデース……」

事もなげに真顔で通達され、言葉と共に描かれる突入ルートを見て、金剛は天を見上げて声無き悲鳴を上げた。乱暴に纏めれば、『デュアルクレイター』が放つ敵艦載機と艦載艇の大群に対して横殴りに乱入し、鯨が川を遡上するかのよう<sup>1</sup>に敵中突破。しかも突貫するのは機動力は兎も角耐久、防御力、ついでに火力すらも低い駆逐艦と旧式小型の重巡洋艦。有り体に言つて、狂人の戯言である。

「敵水雷艇群の中を中央突破ですか。前代未聞ですわね」

「初めての体験だけど、良い経験になりそうね」

当の突入を命じられた両艦は割と平然としているように見えている。……言葉端と



腕組みした手が僅かに震えている事を除けば、だが。一応意志無き艦艇時代、ソロモン海等の海戦を戦った過去の有る両艦だが、流石にこんな無茶苦茶な戦闘は経験していない。寧ろこの様な海戦を経験した軍艦が存在するのならお目にかかりたいものである。丁度一隻居はするが別世界出身なのでノーカウントだ。

「敵中に突っ込む以上必然的に一手のミスが即轟沈に直結する。……青葉、陽炎。沈みたくなかつたら指示を聞き漏らさないで」

そしてそんな心境の艦娘達の事を知ってか知らずか極めて平静に言葉を発し続けた深山提督は、ここまで語ると敢えて一拍子置き……

「征くよ」

戦闘開始を、宣言した。

「……すっかり忘れてたけど、テートクってこんな人だったデース」

「私も半ば抜け落ちていました。……ですが、やはり司令官は頼もしいですね」

「Hey、不知火。ソレ感覚おかしくないデスカー?」

「……そうでしょうか? 不知火はおかしくないと思いますが」

「……若しかしなくても、Common sense<sup>常識</sup> Woman<sup>人</sup>は私だけですカー?」

言葉遣いこそ変わっているがそれ以外は大体常識人な深山艦隊の金剛が呟く、不知火以外には届く事も無い悲鳴満載な泣き言など知った事では無いと言わんばかりに、彼女達が乗り込んでいる重巡青葉は深山提督が指示した通りに転舵を開始する。尚、重巡青葉の妖精さん達は深山提督の言葉に当てられでもしたのか何故か妙に士気軒昂である。ただ単に無茶苦茶言われて開き直っただけかも知れないが。

「ところで司令官。一つ宜しいでしょうか」

「手短にね、不知火」

「日本でのブリーフィングでは、私達は基本的に全艦一塊と成って行動し、分散行動は成るべく行わないと『桜風』に伝えていたと思うのですが」

「大前提として深山艦隊全艦の役割は固であつて主攻はアメリカ海軍だからある程度フリーハンドで動くべきだし、それに輸送機内部と空挺降下時は一塊だった上戦場では高

度な柔軟性を維持し臨機応変に対応する物だから一切問題無いわ」  
「ソレ隠す気N o t h i n gの完全な確信犯デース?!」

「……加賀さん。そっちはどう?」

「想定通りに多数の負傷者と応急修理用の鉄材消費。それ以外には特に」

そして、時間軸はアイオワに対する航空攻撃が紙一重で阻止された時まで巻き戻る。

「そう……こつちも同じく。皆、良くやってくれているわ」

「先程、先遣戦闘機隊が米海軍の戦艦娘を救出したと通信が入っています。想定通り、被害は相当なようですが」

「再建に最低でも年単位の歳月を必須とする通常艦隊を守る為の楯となる役割を果たしている事の裏返し、とも言えますけどね」

「……そうね。貴女の言う通りよ」

陸では何時も優し気な雰囲気や表情が殆どな深山提督とは打って変わって本能的に背筋へ電撃を走らせた命令一下艦加賀と瑞鶴を走らせた両艦は、この時の為に日本から持ち込んだ新型艦載機『桜風』装備を出撃させていた。彼女達から放たれた新型艦載機は思った以上に良く躍動し、敵戦闘ヘリを見事撃墜せしめたのは前述の通りである。

「……このやり口があの子に知られたら、どんな風になるのかしらね」

「『多分泣きながら繰り返し御免なさいって言ってくると思います。責任感強すぎて何でも背負い込み過ぎますから』」

「簡単に想像出来るわね。此方が勝手にやっている事だと言うのに」

そう雑談を交わす両者の双眸には、木製甲板上にやや斜めを向けて妖精さん達が支えているジエツト超簡易即席ジエツト・プラスチックデフレクターの鉄板と甲板引火防止のために敷き詰められた鉄板、そしてこの強引なやり口により引火・誘爆のリスクを常時抱え込む代償に無理矢理運用を可能にした噴進機……震電改の姿が存在した。

「……初めてこのアイディアを聞いた時は、貴女を休ませるか悩んだわよ。瑞鶴」

「あ、アハハハ……。本当は装甲空母化出来るのが一番ですけど、現状そう言った能力や改造方法は発現して無いので、木製甲板に引火しない様に運用するにはこれしか無いかかと、アメリカさんの原子力空母を見ていて……」

「二度そのまま発艦させようと実験した瑞鳳が火達磨になった事を考えると、あの娘も少し自重して貰いたいのだけど」

「……多分無理だと思う。あれだけ未知の艦載機相手に目を輝かせていたのを見ると」

「……でしようね」

内心瑞鶴の諦観した返答に同意しながら、震電改のジェット噴進の炎を鉄板の隙間から直撃して火達磨になった妖精さんが消火剤で泡だらけになる姿を艦橋より見下ろす加賀。技術的な理屈は加賀や瑞鶴達には全く分からないが、『桜風』が開発で生み出した艦載機は例外無く一定の飛行甲板が有ればどんな機体でも完全武装状態での発着艦が可能だった。それこそ、空母としては極めて小型な鳳翔や通常は水上機だけ運用する伊勢型航空戦艦でも。

正し、可能だからと言って実用性が有るかと言えれば否でも有る。日向が多数のヘリコ

プターを海没させる羽目に合ったり、震電改の運用の為に鉄板と妖精さんを大量動員する事態になったりしたように、根本的基礎が第二次世界大戦型である艦娘には木製甲板空母でもF-22やSu-37Jをカタパルト無しで飛ばせる『桜風』世界の様な芸当は不可能である。

『桜風』の生み出した艤装や船体を日本本土で研究者や工廠の妖精さん達が素材解析等に勤しんでいるが全く進捗していない現状、技術者でも何でもなし深山艦隊現場職の面々は所謂現場の努力で実戦運用するより他無く、その為には試行錯誤して運用方法を開拓するより他無いのである程度の無茶は必要でもある。まあお陰で、最近の関東沖合では良く燃えたり爆発する軽空母と半ばルーチンワーク状態で消火活動に当たる海上保安庁の消防艇の姿が見られるのだが。

「所で加賀さん。これで私達の超兵器に対する宣戦布告を成し遂げた訳だけど、アメリカさんには何て言う予定？」

「……私が言うのですか」

「いやだって……加賀さんがこの分遣艦隊加賀・瑞鶴の長でしょ」

「瑞鶴の方が愛嬌が有るでしょう」

「厚木に向かう直前に、赤城さんからコミュニケーションに関しては加賀さんに全てお

任せする様に言われてるから……それに、提督さんも笑ってそうする様になって」  
「何……ですって……？」

思わぬ相方からの裏切りに、普段鉄の様に硬い表情が俄かに崩れかける加賀。瑞鶴曰く、加賀が何時も鉄仮面だったり他者に口調が冷たく感じさせる事を気にしている為、荒療治としてアメリカでは積極的に喋らせるように赤城が提督達へ依頼したのだと言う。加賀に取ってはミッドウエイの敵機直上並みに寝耳に水である。

「……分かりました。どうかして誤魔化します」

「「えっと、赤城さんからは『難しく考えないで笑う事を意識する様に』とのアドバイスが……」」

「簡単に言ってくれます……」

親友からの無茶ぶりに困り果てた先輩の姿にあはは、と小さく苦笑いするしかない瑞鶴に恨めしい視線を一瞬向けた加賀だったが、自艦の通信妖精さんから新型通信機を渡されると仕方が無しに諦めて向き合う。なお、この通信機も『桜風』製の補助兵装の備品としてくつついて来ていたモノである。従来之物より遥かにクリアな音声と通信強

度を持つ上機器の使用面積も削減されている為将来的には艦娘全艦に搭載したいと願望全開な要望が出されている。

「……発：日本海軍遣米艦隊所属空母加賀。宛：米海軍本土防衛艦隊全艦艇」

尚、澁々発信する加賀は知らない。

『Gladiator Ring神狼の首飾り』作戦、発動。これより、対超兵器戦闘参加せり」

政治的、軍事的にもそうだが、そもそもアメリカ合衆国史上初の東海岸の眼前での海上防衛戦と言う精神的に極めて追い詰められた状況下に置いて、この様なお誂え向きな東洋美女による味方全部隊への反撃宣言と言うまるで映画か何かの様なシチュエーションをアメリカ人が容易く見逃すはずが無かったと知るのは、戦後に戦意高揚映画と言う名目でハリウッド映画化された時であった。そして、加賀はその知らせを受けて暫く部屋に籠ったそうなの。